

カナダ・イヌイトの食物分配に関する文化人類学的研究  
—先住民社会の変容と再生産—

岸上伸啓

博士（文学）

総合研究大学院大学

文化科学研究科

地域文化学専攻

平成 17 年度

（2005）

カナダ・イヌイト社会における食物分配に関する文化人類学的研究—先住民社会の変容と再生産—

目次

|                                        |    |
|----------------------------------------|----|
| 第1章 序論                                 | 7  |
| 第1節 本論文の目的                             | 7  |
| 第2節 論文の概要                              | 10 |
| 第3節 イヌイト語（イヌクティトゥット）の地名や集団名称の日本語表記について | 11 |
| 第2章 食物分配と社会変化                          | 13 |
| 第1節 食物分配の定義と形態                         | 13 |
| 第1項 食物分配とは何か                           | 13 |
| 第2項 狩猟採集民の食物分配の形態                      | 13 |
| 第3項 狩猟採集民の食物分配と「交換」・「互酬性」概念            | 14 |
| 第4項 「交換」・「互酬性」概念と問題点                   | 16 |
| 第5項 食物分配の形態に関する新類型                     | 18 |
| 第2節 食物分配に関する人類学的研究                     | 20 |
| 第1項 生態学的アプローチ                          | 21 |
| 第2項 社会・文化人類学的アプローチ                     | 22 |
| 第3項 食物分配の変化に関する研究                      | 26 |
| 第4項 要約                                 | 26 |
| 第3節 イヌイトの食物分配に関する研究                    | 26 |
| 第1項 アラスカにおける食物分配                       | 27 |
| 第2項 カナダ極北地域における食物分配                    | 28 |
| 第3項 グリーンランドにおける食物分配                    | 32 |
| 第4項 極北地域における食物分配の共通性と差異                | 35 |
| 第4節 食物分配と社会変化に関する理論的考察                 | 35 |
| 第1項 小規模社会の変化と持続に関する理論                  | 35 |
| 第2項 第4世界の先住民社会の再生産                     | 38 |
| 第3項 食物分配の実践と社会関係の再生産                   | 40 |
| 第5節 研究の視点と意義                           | 40 |
| 第1項 実践と社会の再生産                          | 40 |
| 第2項 本研究の意義                             | 42 |
| 第6節 調査地と調査方法について                       | 43 |

|                                                          |    |
|----------------------------------------------------------|----|
| 第1項 調査地と調査について                                           | 43 |
| 第2項 調査者としての立場と問題点                                        | 45 |
| 第3章 カナダ・ヌナヴィク地域ケープ・スミス島周辺の自然環境と歴史                        | 47 |
| 第1節 自然環境                                                 | 48 |
| 第1項 ケープ・スミス島地域の自然環境                                      | 48 |
| 第2項 ケープ・スミス島地域の動植物相                                      | 51 |
| (1)陸獣                                                    | 51 |
| (2)海獣                                                    | 51 |
| (3)鳥類と卵                                                  | 52 |
| (4)魚類・海藻類                                                | 52 |
| (5)植物                                                    | 53 |
| 第3項 自然環境の変化(1920年代から2000年)                               | 53 |
| 第2節 ケープ・スミス島地域の歴史：毛皮交易期とそれ以前                             | 54 |
| 第1項 1922年以前のケープ・スミス島地域の歴史                                | 54 |
| 第2項 毛皮交易の開始以降                                            | 56 |
| (1)1920年代から1950年代にかけての毛皮交易                               | 58 |
| (2)1920年代から1950年代にかけてのカナダ連邦政府の活動                         | 61 |
| (3)1920年代から1950年代にかけてのキリスト教                              | 62 |
| 第3節 定住化と新村形成：プヴィルニツク村在住時代(1950年代～1970年代)                 | 63 |
| 第1項 プヴィルニツクへの移住                                          | 63 |
| 第2項 プヴィルニツク村の形成                                          | 64 |
| 第3項 プヴィルニツク村における宣教師、ハドソン湾会社、生協運動(1950年代-1975年)           | 67 |
| 第4項 プヴィルニツク村におけるカナダ連邦政府とケベック政府(1960年代-1975年)             | 69 |
| 第5項 プヴィルニツク村における定住化と人口集中(1950年代-1975年)                   | 70 |
| 第6項 プヴィルニツク村における初等教育の開始(1950年代-1975年)                    | 71 |
| 第7項 プヴィルニツク村における新しい技術の採用(1950年代-1975年)                   | 73 |
| 第8項 プヴィルニツク村における生活補助や医療活動の開始(1950年代-1975年)               | 73 |
| 第4節 ランド・クレーム期：「ジェームズ湾および北ケベック協定」の締結(1975)と<br>アクリヴィク村の形成 | 74 |
| 第1項 「ジェームズ湾および北ケベック協定」の締結とその諸影響                          | 74 |
| 第2項 アクリヴィク村の形成と展開                                        | 76 |

|                                   |     |
|-----------------------------------|-----|
| 第3項 アクリヴィク村の構造とその展開               | 78  |
| (1)アクリヴィク村の人口                     | 78  |
| (2)住宅の状況                          | 79  |
| 第4項 諸制度体                          | 80  |
| (1)村議会                            | 80  |
| (2)土地所有法人                         | 81  |
| (3)生協                             | 81  |
| (4)学校                             | 82  |
| (5)看護所                            | 85  |
| (6)FM ラジオ放送とテレビ放送、電話              | 86  |
| (7)警察と消防隊                         | 87  |
| 第5節 アクリヴィク村の現状：世界システム・国家の中のイヌイト   | 87  |
| 第4章 アクリヴィク村の経済と社会                 | 90  |
| 第1節 アクリヴィク村の経済                    | 90  |
| 第1項 経済構造の全体像                      | 90  |
| 第2項 アクリヴィク村の貨幣経済                  | 91  |
| (1)1980年代前半のアクリヴィク村の貨幣経済          | 91  |
| (2)1986年以降のアクリヴィク村の貨幣経済の傾向        | 93  |
| (3)1986年以降のアクリヴィク村の仕事と収入の内容とその変化  | 96  |
| 第3項 アクリヴィク村の生業経済                  | 97  |
| (1)魚類の捕獲                          | 98  |
| (2)海獣の捕獲                          | 99  |
| (3)陸獣類                            | 102 |
| (4)鳥類とその卵                         | 104 |
| (5)その他の獲物・採集物                     | 104 |
| 第4項 1986年の経済活動とキャンプ               | 104 |
| 第5項 1986年以降の生業活動とキャンプ             | 106 |
| 第6項 アクリヴィク村におけるハンター・サポート・プログラムの利用 | 107 |
| (1)ハンター・サポート・プログラムとは何か。           | 107 |
| (2)アクリヴィク村におけるハンター・サポート・プログラムの運用  | 108 |
| (3)1984年におけるハンター・サポート・プログラムの実施例   | 109 |
| (4)1999年におけるハンター・サポート・プログラムの実施例   | 110 |
| 第2節 アクリヴィク村の社会                    | 114 |
| 第1項 社会集団                          | 114 |
| (1)世帯、家族、親族                       | 114 |



|                                           |     |
|-------------------------------------------|-----|
| (2) キャンプ集団                                | 122 |
| (3) コミュニティー                               | 124 |
| 第2項 社会制度                                  | 129 |
| (1) 婚姻制度                                  | 129 |
| (2) 養子縁組制度                                | 130 |
| (3) 同名者関係                                 | 131 |
| (4) 助産人関係                                 | 134 |
| (5) 友人関係と隣人関係                             | 135 |
| 第3節 アクリヴィク村の政治と宗教                         | 136 |
| 第1項 村内の政治                                 | 136 |
| (1) 村議会と村長                                | 136 |
| (2) 村会議員と村長の選出                            | 136 |
| (3) インフォーマルな権力                            | 137 |
| (4) 村の政治権力と経済権力との関係                       | 138 |
| 第2項 村内の宗教                                 | 138 |
| (1) キリスト教信仰と教会                            | 138 |
| (2) 教会運営委員会                               | 139 |
| (3) 教会と政治                                 | 139 |
| 第3項 村内における政治、経済、宗教の関係                     | 139 |
| 第5章 現代のアクリヴィク村における食物分配とハンター・サポート・プログラムの効果 | 141 |
| 第1節 現代のアクリヴィク村における食物分配の全体像                | 141 |
| 第2節 ハンター間の獲物の分配                           | 142 |
| 第3節 ハンターから村人への食物分配                        | 145 |
| 第4節 村人間での食物分配                             | 150 |
| 第5節 食事を通しての食物分配                           | 153 |
| 第1項 1998年1月14日から2月3日までの食事の事例              | 153 |
| 第2項 1998年7月4日から7月28日にかけての食事               | 157 |
| 第3項 1998年11月24日から11月27日までの食事              | 160 |
| 第4項 1999年10月11日から11月7日までの食事               | 163 |
| 第5項 2000年9月8日から2000年10月3日にかけての食事          | 166 |
| 第6項 2003年9月19日から10月5日までの食事                | 169 |
| 第7項 2004年2月10日から2月16日にかけての食事              | 171 |
| 第8項 キャンプ地や狩猟中における食事を通しての食物分配              | 172 |
| 第9項 村全体での共食会                              | 173 |

|                                       |     |
|---------------------------------------|-----|
| 第6節 村外との食物分配                          | 173 |
| 第7節 特定の二者間での食物分配                      | 175 |
| 第8節 アクリヴィク村におけるハンター・サポート・プログラムによる食物分配 | 176 |
| 第1項 シロイルカ猟の場合                         | 176 |
| 第2項 セイウチ猟の場合                          | 178 |
| 第3項 ホッキョクイワナとカリブーの肉の分配                | 179 |
| (1) ホッキョクイワナとカリブーの分配                  | 179 |
| (2) 1998年2月－4月の場合                     | 180 |
| (3) 1998年8月－12月の場合                    | 184 |
| (4) 1999年1月－12月の場合                    | 187 |
| 第4項 ハンター・サポート・プログラムの諸効果と問題点           | 191 |
| 第9節 食物分配の特徴と歴史的な変化について                | 192 |
| 第6章 検討と結論                             | 196 |
| 第1節 カナダ・イヌイト社会の変化と現状                  | 196 |
| 第2節 食物分配の形態とその変化                      | 197 |
| 第1項 ハンター間の食物分配                        | 197 |
| 第2項 ハンターから村人への食物分配                    | 198 |
| 第3項 村人間の食物分配                          | 198 |
| 第4項 食事を通しての食物分配                       | 199 |
| (1) 家庭での食事を通しての食物分配                   | 199 |
| (2) キャンプ地や狩猟中の食事を通じた分配                | 199 |
| (3) 村全体での共食                           | 199 |
| 第5項 村外との食物分配                          | 200 |
| 第6項 特定の二者間での食物分配                      | 200 |
| 第7項 ハンター・サポート・プログラムを利用した食物分配          | 200 |
| 第8項 類型からみた特徴                          | 201 |
| 第3節 食物分配の機能および世界観や社会的距離との関係           | 203 |
| 第1項 食物分配の諸機能                          | 204 |
| (1) 経済的な保険機能                          | 204 |
| (2) 物質的な平準化機能                         | 204 |
| (3) 社会関係の創出・維持・連帯機能                   | 205 |
| (4) 与える側の名声を生み出す機能                    | 206 |
| 第2項 世界観との対応                           | 207 |
| 第3項 社会的な距離との関係とサーリンズ・モデルの問題点          | 208 |

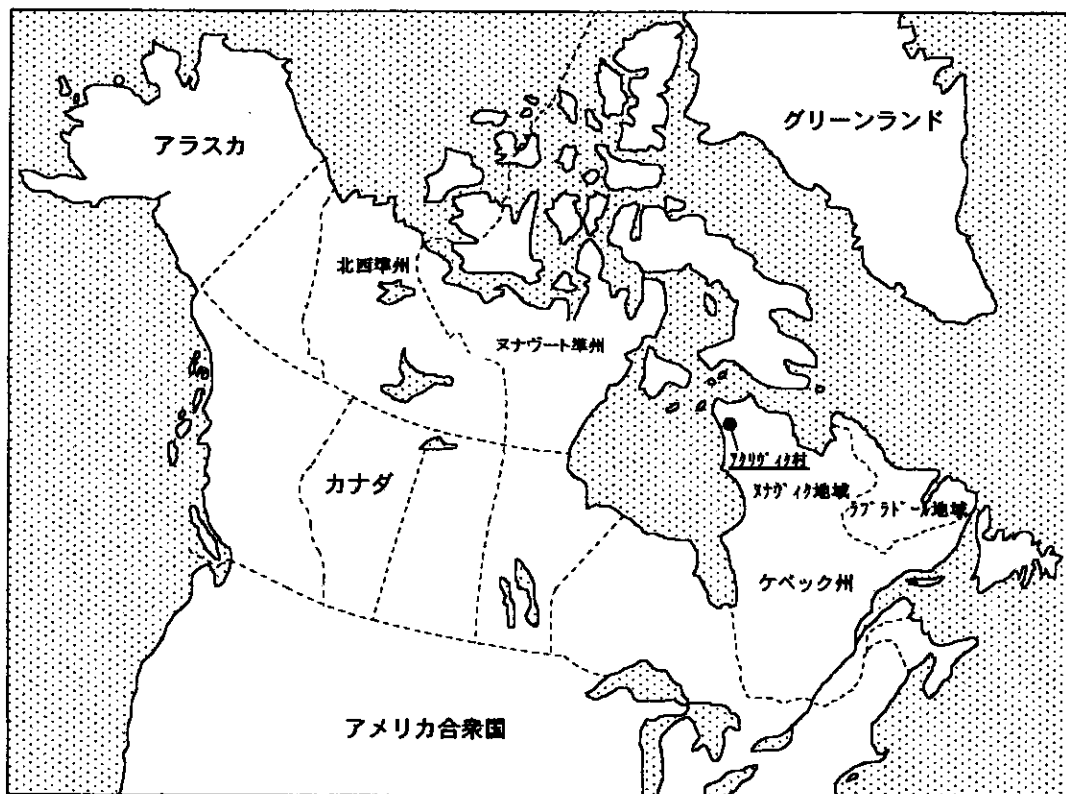
|                                           |     |
|-------------------------------------------|-----|
| 第4項 要約                                    | 210 |
| 第4節 食物分配の実践と社会の再生産                        | 210 |
| 第1項 貨幣経済と食物分配                             | 210 |
| (1) 貨幣経済と生業活動                             | 210 |
| (2) 1983年以降の現金収入と狩猟・漁労活動                  | 211 |
| (3) 分配するための肉と魚                            | 212 |
| (4) 貨幣経済と生業活動                             | 213 |
| 第2項 食物分配の実践と社会関係                          | 215 |
| (1) 食物分配と特定の社会関係                          | 215 |
| (2) 食物分配と非親族関係                            | 216 |
| 第3項 極北地域における食物分配の地域差と共通性                  | 217 |
| 第4項 食物分配の変化と世代差                           | 219 |
| 第5項 国家と先住民社会                              | 220 |
| 第5節 結論                                    | 221 |
| 謝辞                                        | 225 |
| 注                                         | 226 |
| 参照・引用文献                                   | 239 |
| 付録1 グラフ                                   | 277 |
| 付録2 ハンター・サポート・プログラム関連の法律と<br>2001年次報告書の抜粋 | 285 |

## 第1章 序論

### 第1節 本論文の目的

ロシアのチュコト半島東端の沿岸部からアラスカ、カナダの北部を経てグリーンランドへと至る極北地域の沿岸部にはユピート(Yupit)、イヌピアート(Inupiat)、イヌヴィアルイット(Inuvialuit)、イヌイット(Inuit)らが居住している。彼らは「エスキモー」(Eskimo)という総称で呼ばれてきた人々であり、この200年の間に欧米人によって植民地化され、ロシア(旧ソ連)、アメリカ合衆国、カナダ、デンマークという4つの国家の中に取り込まれてきた。そして彼らはそれぞれの国家による先住民政策の実施のもとで、国ごとに異なる歴史を歩んできたことが知られている(Hughes 1965)。

現在のユピートら極北民の人口分布は、国別に見ると次の通りである。ロシアのチュコト半島東部から南部にかけての沿岸地域と近隣の島々には約2,000人のユピートが住んでいる。アラスカの北西地域には約14,000人のイヌピアートが住み、アラスカの南西地域には約30,000人のユピートが住んでいる。カナダの極北地域には、イヌヴィアルイットを含め約45,000人のイヌイットが住んでいる。そしてグリーンランドには約47,000人のイヌイットらが住んでいる。なお、グリーンランドでは、近年、グリーンランド人を意味するカラールット(Kalaallit)という呼称が使用されるようになった。



地図1. 1 カナダの極北地域

2001年のカナダの国勢調査によると、カナダにおけるイヌイット(イヌヴィアルイットを含む)の分布は、ヌナヴート(Nunavut)準州に約 22,500 人、ケベック州北部ヌナヴィク(Nunavik)に約 9,500 人、ラブラドルに約 4,500 人、北西準州に約 3,900 人そしてオタワやモントリオールなどカナダの南部地域に約 8,000 人である(地図 1.1)。

私がこれまでおもな調査地としてきたのは、ケベック州極北部のヌナヴィク地域のアクリヴィク(Akulivik)村とケベック州のモントリオール(Montreal)である。この地域のイヌイットは行政的にはヌナヴート準州ではなく、ケベック州に属している。ケベック州では、フランス系カナダ人(ケベコワ)が政治・経済上、主流社会を形成しているので、カナダでも特異な地域である(注 1)。フランス系カナダ人はカナダにおける少数派であるため、ケベック州のイヌイットは少数派社会の中の少数派ということになる。

私は 1984 年の夏にイヌイットの村を初めて訪れたが、調査地のイヌイットは、ジーンズをはき、プレハブ住宅に住み、スノーモービルや船外機付きのカヌーを巧みに操作していた。私の目に映った彼らの姿は、ラスムッセンの民族誌(Rasmussen 1929, 1931)や本多勝一の『カナダ・エスキモー』(1971)に出てくるイヌイット像とはかけ離れた、われわれとほとんど変わらない「現代人」であったことに、ショックを受けたことを覚えている。しかし、また、彼らと食事や狩猟活動など生活を共にしているうちに、彼らが私たちと同時代人であるとともに、独特な考え方や慣習を持っていることがわかってきた。

現地調査を進めていく中で、私の目をひいたのは、機械化された狩猟・漁撈活動、親族関係、名前や命名に関する考え方や慣行、儀礼的な助産人と新生児との関係、食物分配の慣習であった。これらの諸制度や実践を記録していくうちに、目に見える急激な経済変化にもかかわらず、いくつかの社会制度や実践に関しては、再生産的な連続性が見られることが判明した。これらのことについては既に別稿において発表した(例えば、岸上 1996a, 1996 b ;1998)、イヌイット社会において変化と再生産が同時進行している様子をいかに記述し、分析するかが私の大きな課題のひとつとして残った。

急激な変化を遂げつつあるカナダ・イヌイット社会の中で、私の眼をひときわ引いたのが食物の分配や食事の慣習的な実践であった。ハンターが苦労して捕獲したアザラシの肉やホッキョクイワナをあたりまえのように惜しげもなく他の人にあげることは、そのような慣習を持たない日本人の私には驚きを禁じえない出来事であった。また、昼食や夕食には世帯を共にしている人のほかに、別の世帯を構えた家族や親族さらには友人がやってきてはその世帯にある食料を残らず食べていく姿を見た時にも驚いた。これはモノや食料の私有を強調し、かつ世帯が食事の単位となる現代の日本からやってきた私には、特に奇異に思えた。ところが調査を進めていくにしたがい、多くのイヌイットが食物分配を彼らが生きていく上でなくてはならない実践であると考えていることを知った。さらに彼らの実践が当事者の間で社会関係の確認や維持、再生産と深くかかわっていることもわかってきた。すなわち食物分配は、イヌイット社会の変化や再生産を知る上で重要な実践であることが判明した。このような理由から私はイヌイットの食物分配を研究テーマとして選んだ

のである。

本研究は、カナダ・イヌイットの食物分配に関する文化人類学的な研究である。すなわち、本研究の目的は、1980年代から2004年頃までを対象としてケベック州極北部にあるアクリヴィク村においてイヌイットがいかなる理由で、どのように食物を分配し、それがどのような社会的な効果や機能を生み出しているかに関して記述し、分析することである。その上で、変化しつつあるイヌイット社会において食物分配の実践が果たしてきた役割について考察する。

考察にあたり、ふまえておかなければならないのは、文化人類学研究の動向である。1980年代から文化人類学の流れは大きく変わってきた。サイードの「オリエンタリズム」論などに代表されるポスト・コロニアル批判(Said 1978)やホブズボウムらに代表される文化の本質主義批判(Hobsbawm and Ranger 1983)、それらと関連してクリフォードやマーカスらによる文化の表象批判(Clifford and Marcus 1986)が噴出し、従来の文化人類学的な営為とその所産である民族誌の問題点があらわになった。すなわち、権力を持つ者が他者の文化を一方向的に表象してきたという問題、人類学者が個々の人間集団を独自の存在として成り立たせている本質としての文化を追求し、記述してきたという問題、他者表象は客観的な記述ではありえないという問題が文化人類学界に突き付けられた。1990年代以降の文化人類学界の流れのひとつは、これらの批判にいかに応え、人類学のあり方を再構築することであったといえよう(例えば、杉島 2001)。一方で、人類学的な営為やその成果は開発問題や先住民問題の解決など現代社会の要請に応えるべきだ、という意見も出てきた(例えば、Bodley 2001)。現代の人類学は、新たな表象方法を模索することや問題解決型の研究を実施することによって、これらの批判や要請に応える形で展開されているといってもよいだろう(例えば、秋道・岸上 2002; 池谷 2003; 岸上 2003; Kishigami and Savelle 2005; 栗本 2001; 太田 2001; 杉島 2001; 吉田 1999)。

さらにイヌイットやサンなどのいわゆる「狩猟採集民」に関する研究分野においても、これまでの生態人類学的な研究や社会人類学的研究に対し、狩猟採集民とその近隣の農耕民や交易者との間に形成された相互依存関係を重視すべきだという修正主義者による批判が行われた(Peterson 1978; Schrire 1980, 1984; Stiles 1981, 1992; Wilmsen 1983, 1988, 1989; Headland 1999)。ヴィルムセンら修正主義者の一部は、いくつかの狩猟採集民グループが数世紀にわたって強力な外部者によって支配されてきた事実から、現存する狩猟採集民の単純な技術、移動生活、食物分配などの生活様式は、生態環境への適応の結果というよりも、彼らを包摂するポリティカル・エコノミーが作り出した貧困の文化であると主張した。この主張をめぐって、リーら生態人類学者と修正主義者との間に論争が展開された(Wilmsen 1989; Headland and Reid 1989; Solway and Lee 1990; Wilmsen and Denbow 1990; Lee 1992; Kent 1996; Headland 1999 ほか)(注 2)。修正主義者の指摘がすべての狩猟採集民社会に該当するとは考えられないが、狩猟採集民社会を外部的社会とは隔離された独立した社会と見るべきではないという見解は正当な主張である。この論争は、調

査対象となる社会を歴史的に、かつ広域の政治経済システムの中に位置付けることが必要であることを再確認させたといつてよいだろう(注 3)。

文化人類学者は、1980 年代以降顕在化してきた文化人類学が直面する多くの問題点を抱えながら、現地調査を実施し、その成果を民族誌や論文の形で世に問うているのである。このような流れの中で、私は、変化しつつあるイヌイット社会の中で実践されている食物分配を経験の次元から記述し、分析するために「実践」や「再生産」という実践論(theory of practice)の概念を用いることが妥当ではないかと考えるようになった(Bourdieu 1972; Ortner 1984)。本論文は、実践論の視点からイヌイットの食物分配と社会変化を記述・分析したモノグラフである。

イヌイットの食物分配に関する論文はいくつか出版されているが(Damas 1972a; Nuttall 1991; Wenzel 1995; Wenzel, Hovelsrud-Broda and Kishigami (ed.) 2000 など)、ひとつの村を対象とし、かつ 20 年近い時間軸に沿って展開された研究は皆無に近い。このことは狩猟採集民社会における食物分配の研究全般にあてはまるものである(岸上 2003a, 2003b)。そうした意味で、本研究は、イヌイット研究のみならず狩猟採集民研究の食物分配やその変化に関する研究に寄与すると考える(注 4)。なお、本研究の意義については、第 2 章の後半において詳述する。

## 第 2 節 論文の概要

本論文は、本章を含めて 6 章からなる。ここでは、論文の概要を要約しておきたい。

第 1 章では、本論文の目的と概要を述べる。また、本論文におけるイヌイット語の日本語表記について説明する。

第 2 章では、食物分配とは何かを定義した後、イヌイットをはじめとする狩猟採集民社会における食物分配に関する研究を、社会・文化人類学的研究と生態学的研究に大別して整理する。そしてこれまでの食物分配に関する研究は、中心的な機能をひとつに絞って確定しようとしてきたのみならず、食物分配の変化や、社会的再生産と食物分配との関係を取り扱った研究がほとんどないことを指摘する。それにたいし、食物分配は生態学的な適応という第一義的な機能を認めた上で、複数の機能を併せ持つ実践であることを強調する。しかも実践の機能は地域や時代によって差異が見られる。この状況の中で、1910 年代以降毛皮交易を通して世界システムに接合され、1960 年代に定住生活を始め、国家に統合されたイヌイット社会における食物分配の変化に関する研究は、イヌイット研究のみならず、狩猟採集民研究に対して重要な貢献をする可能性があることを指摘する。

第 2 章の後半では、前半の議論を踏まえた上で、問題を設定し、その学術的な意義について述べる。そして食物分配研究を行う上で拠って立つ社会的生業システム(social subsistence system)という概念を整理、検討する。さらに、そのシステムの変化に関係する既存の仮説を検討した上で、カナダ・イヌイットが置かれた歴史的な脈絡の中での変化について検証可能な仮説を提起する。それはイヌイット社会の経済的变化が急激に進む中

で、食物分配の実践を通して、イヌイットの社会関係が再生産されてきたというものである。最後に、現地調査について概略する。

第3章は、本論文の調査対象地であるカナダ・ヌナヴィク地域ケープ・スミス島(Cape Smith Island)周辺の自然環境と歴史について記述する。ここでは、調査地の自然環境の特徴、ホッキョクギツネの毛皮交易の展開、定住化と新たなコミュニティの形成、先住民諸権益請求問題処理の結果としての「ジェームズ湾および北ケベック協定」(James Bay and Northern Quebec Agreement)の諸影響について述べた後、現在のイヌイット社会が世界システムや国家の中に包摂され、その一部として存在していることを強調する。

第4章では、1980年代から2000年代初頭にかけての本研究の社会・経済的な脈絡とその変化を記述する。調査地であるアクリヴィク村の経済構造を貨幣経済と生業経済の面から紹介した後に、アクリヴィク村の家族・親族、世帯、キャンプ集団、村落構造、婚姻制度、養子縁組制度、同名者関係、助産人関係、友人関係について記述する。ここでは、現代のイヌイットの社会関係とはどのようなものであるかが詳述される。

第5章では、アクリヴィク村において観察された食物分配の全体像を提示した後、ハンター間の獲物の分配、ハンターから村人への獲物や食物の分配、村人間での食物分配、村における食事を通しての食物分配、キャンプ地における食事の分配、村全体での共食会、村外との食物分配、そのほかの食物分配や交換、そしてケベック州ヌナヴィク地域で1980年代に制度化されたハンター・サポート・プログラム(Hunter Support Program)とそれを利用した村全体での食物分配の諸事例を紹介する。その上で、これらの食物分配の特徴、その時間的な変化と連続性について述べる。

第6章では、現在のイヌイット社会の食物分配の特徴や内容を、新たな食物分配類型に基づきながら検討する。また、イヌイットの事例を用いて、これまでの狩猟採集民社会の食物分配の研究から引き出されてきたいくつかの仮説を検証することにより、現代のイヌイットの食物分配の特徴を抽出する。さらに、食物分配の実践と社会関係の再生産について、イヌイットは意図的に、あるいは無意識のうちに食物分配の実践を通して彼ら独自の社会関係を再生産してきたことを検討する。その上で、本研究から引き出された結論を要約する。

### 第3節 イヌイット語(イヌクティトゥット)の地名や集団名称の日本語表記について

イヌイット語(イヌクティトゥット)の集団名称や地名の日本語表記について述べておきたい。近年、スチュアート(1998a)や大村(1998)は、Inuitを「イヌイト」、Inuvialuitを「イヌビアルイト」と表記している。このような表記をする理由として、イヌイット語に促音が少ないことや複数形と単数形の表記を区別するためであることをあげている。これをひとつの表記法であると認めた上で、本論文では若干異なる表記方法を用いる。

具体的には、子音で終わる日本語以外の単語を日本語で表記する場合は、促音の「ッ」で表記するという従来の方法を採用する。そしてtの前に長母音がくる場合には、「ート」



と表現する。その上で、例外として単語が子音の k 音で終わった場合には、イヌイト語の強い k 音(通常 q と表記)と弱い k 音(通常 k と表記)を区別するために、前者を「ック」と表記し、後者を「ク」と表記することにしたい。したがって、Inuit はイヌイト、Avataq はアヴァタック、Nunavik はヌナヴィクと表記されることになる。なお、この原則にしたがうと、Nunavut は「ヌナヴット」と表記されるべきだが、現地のイヌイトの多くの人が vut を長母音で発音しているので「ヌナヴート」と表記することにしたい。

アラスカ極北地域の先住民族名は Inupiaq (イヌピアック) と Yu'pik (ユッピク) と単数形で表記されることが多いが、イヌイトやイヌヴィアルイトは複数形の表記であるため、本論文ではそれぞれの民族名称を Inuipiat (イヌピアート) と Yupiit (ユピート) という複数形の表記で統一する。

## 第2章 食物分配と社会変化

本章では、本研究の対象である食物分配とは何かを定義した後に、食物分配に関する人類学的な研究、イヌイット社会における食物分配、社会変化に関する理論、本研究の意義、調査地と調査方法について記述する。

### 第1節 食物分配の定義と形態

#### 第1項 食物分配とは何か

狩猟採集民社会では、ハンターがほかのハンターと獲物を分け合ったり、獲物をほかの人に一方的に与えたり、相手に要求されて与えたりすることなどが頻繁に観察されている。このような行動は食料資源の共用とともに、食物分配(food sharing)という概念のもとに一括されてきた。そしてこのような食物分配は、小規模農耕社会や牧畜民社会でも報告されているし(Sahlins 1965:187-225)、ボノボやチンパンジーなどの霊長類の間でも観察されている(Silk 1987; Bercovitch 1988; de Waal 1989; 西田 1992; 五百部 1996; 室山 1999; 西田・保坂 2001 など)。

動物界の食物分配という行動は、所有者に分配の意図があることを意味しているので、「食物の移動」(transfer)と記述されることが多い。そして食物の移動には、強奪(theft)、許された盗み(tolerated theft)、贈与(donation)の3つのパターンがあるという。霊長類学者の西田と保坂は、第2と第3の食物の移動を食物分配と呼び、「力づくではなく個体から個体へ食物が移動すること」と定義している(西田・保坂 2001: 263-264)。霊長類の食物分配と現生人類の食物分配との間には、生活のシェアリング、経験の共有、優れた記憶力など共通の要因が見られる一方で、ボノボやチンパンジーの場合にはモノとモノとを交換しないなど現生人類の食物分配行動には差異も存在するが(小馬 2000: 12)、本論文では現象を識別するための出発点として汎用性の高い西田・保坂の食物分配の定義を採用したい。そのうえで、狩猟採集民の食物分配のみに限定して、記述と分析を進める。

#### 第2項 狩猟採集民の食物分配の形態

では、これまで食物分配と呼ばれてきた狩猟採集民の実践は、どのような形態をとり、どのように類型化することができるのであろうか。

食物分配の類型に関しては、大型動物と小型動物の分配を区別するべきであるという見解(Graburn 1969; Altman and Peterson 1988)や生産関係に基づく食物分配とそうでないものとを区別すべきであるという見解(Dahl 2000 など)が存在する。

オーストラリア北部のアーネームランドにあるアウトステーションに住む西部グンウィング(Gunwingu)のグループを調査したアルトマンらは、オーストラリア先住民の間には分配に関するルールが存在すること、さらに大型動物と小型動物との区別を行うことの重要性を説いた(Altman and Peterson 1988: 76)。オーストラリア先住民社会では、カンガル

一、ワニ、エミューのような大型動物に対するハンターの権利はいろいろな方面からのコントロールによって弱められるが、魚やトカゲ、鳥などの小型動物の場合にはハンターが自らの意思で処分できる。したがって、前者の場合にはルールで定まった分配が、後者の場合にはハンターの裁量による分配が存在していることになる(Altman and Peterson 1988: 92)。大型動物や数の多い食べ物は広く分配されるが、小型動物や少量の獲物は分配されないことがイヌイト社会でも知られている(Graburn 1969: 66-67)。一方、グリーンランドのイヌイトの食物分配を研究したデールは、規則に基づく肉の分配と自主的な肉の贈与とを区別すべきだと主張している。デールによると前者は生産関係に基づく、後者は社会関係に基づく肉の分配であると説明している(Dahl 2000: 175-177)。また、京都大学のアフリカ研究グループのように、分配を時系列的に把握し、1次分配、2次分配、3次分配とする場合もある(例えば、市川 1991; 丹野 1991; 今村 1993, 1996; 北西 1997, 2002; Kitanishi 1996, 1998, 2000)。

ここで概略したように食物分配を分類する方法は複数存在しているが、これまで狩猟採集民社会の文化人類学的研究では食物分配を「互酬性」概念に基づく交換の一形態と見なすことが主流であった。文化人類学者が、狩猟採集民の食物分配を「交換」や「互酬性」の視点から研究するようになったのは、マリノウスキーのクラ研究(Malinowski 1922; マリノウスキー 1964)、モースの贈与論(Mauss 1923/24; モース 1973)、レヴィ=ストロースの交換論(Lévi-Strauss 1949; レヴィ=ストロース 1977)、そしてそれらの流れをくむサーリンズの交換論(Sahlins 1965; サーリンズ 1984)の影響であった。次に、食物分配と「交換」・「互酬性」概念との関係について検討したい。

### 第3項 狩猟採集民の食物分配と「交換」・「互酬性」概念

マリノウスキーは、トロブリアンダ諸島における貝製の腕輪と首飾りの交換であるクラとともに、ウリグブ、サガリ、ワシ、ギムワリなど7つの贈与システムを記述、分析した(マリノウスキー 1967: 211-213)。マリノウスキーは、クラ交換は、経済的な制度であるとともに、社会・儀礼的な制度であり、「互酬性」を交換の背後にあるものと考えた。そしてこの交換システムは、儀礼品の交換を通して地理的に隔たっている社会間に連帯性を生み出すと主張した。

モース(1973)は、北アメリカ北西海岸のポトラッチ儀礼(贈答競争儀礼)やトロブリアンダ諸島におけるクラ・リングなどを事例として贈与に関して考察を加えた。贈与は外見上、任意的で自発的な行為のように見える。しかしモースによると、贈与には「与える義務」、「受け取る義務」、「返礼する義務」が内在し、送り手と受け手の間に互酬的な財の移動を結果するという。そしてモースは、人間による物財の贈与は社会構成の基本原則であると考えた。モースが贈与に関して発した根源的な疑問は次のようなものであった。

「未開あるいはアルカイックな社会類型において贈り物を受けた場合に  
その返礼を義務づける法的・経済的規則はなにか? 贈られた物には、

いかなる力があって受贈者にその返礼を果たさせるのか」(モース 1973: 224)。

この問いへの回答のひとつが、ニュージーランドのマオリ社会におけるモノのやりとりを媒介するハウ(霊的力)の往復運動である。すなわち、与えられたモノは、最初にそれを所有し、かつ与えた人へと戻りたがるハウを持っているという先住民の見解であった。

レヴィ＝ストロースは、モースが贈与や結果としての交換(互酬性)に着目したことに対して、最大の敬意を払うものの、モノに内在するとされる霊的な力という先住民の主観性に基づく説明には異議を唱える(ゴドリエ 2000: 25のレヴィ＝ストロースの引用部分)。レヴィ＝ストロースにとっては交換こそが社会の根源であり、社会生活とは女性、財、言葉という3つの次元における交換そのものであると表明する(レヴィ＝ストロース 1977: 145)。彼は、『親族の基本構造』において婚姻を女性の交換であるとみなし、「限定交換」と「一般交換」という概念を提起した。限定交換は平行イトコ婚のように2つの集団間で、女性が相互に交換される場合であり、一般交換は、交差イトコ婚のように3集団以上の間で、女性が一方的に流れ、与え手は、与えた集団以外の集団から女性をもらうことになる。一般交換の方が、限定的交換よりも社会をより広範に統合することができる。レヴィ＝ストロースは、社会現象を交換として把握することを研究の出発点としている。したがって、彼にとって贈与は交換の一形態である(レヴィ＝ストロース 1977: 145)。レヴィ＝ストロースはさまざまな文化人類学者や社会学者に影響を与え、一時期、交換に関する研究が多数行われた(注1)。

レヴィ＝ストロース(1977)の影響を受けて、独自の交換論を展開したのは、イギリスのE.リーチ(Leach)とアメリカのM.サーリンズ(Sahlins)であった。

あらゆる交換形式は同じものをやりとりするか、異なるものをやりとりするかのいずれかであると考えたリーチは、対称的交換と非対称的交換という2つのモデルを考え出した(リーチ 1985: 194-201)。彼の非対称的交換概念は、食物の返礼として財物や感謝、サービスが送られる場合のように、異なるモノやサービスが交換される場合を指している。リーチはそのような社会では、諸個人間の物財やサービスの流れが長期的にはほぼ同等になるが、等価となる要素には目に見えない地位や威信などが含まれていると指摘した(リーチ 1974)。

サーリンズは国家を持っていない無文字社会では、「互酬性」は交換の全種類を含む交換形態の連続体であり、物財の流れと社会関係は相互に関連していると主張した(Sahlins 1965; サーリンズ 1984: 224-229)。サーリンズは、「互酬性」を2人の当事者間の可逆的な運動と定義している(サーリンズ 1984: 225)。そして交換形態の両極に「一般化された互酬性」(generalized reciprocity)と「否定的互酬性」(negative reciprocity)があり、その中間に「均衡のとれた互酬性」(balanced reciprocity)があるという。「一般化された互酬性」とは、利他的なやり取り、すなわち返礼を期待することなく惜しみなく与えるやり取りである(サーリンズ 1984: 233)。これは双方向というよりも一方通行的な物財の流れの形をとること

が多い(サーリンズ 1984: 234)。「均衡のとれた互酬性」とは、直接的かつ明白な交換である。典型的な例は、受け取ったものの等価物が遅滞なく返礼される場合である(サーリンズ 1984: 234)。一方、「一般化された互酬性」の対極にある「否定的互酬性」とは、損失なしで、相手から何かを得ようとする試みや、やり取りのことである(サーリンズ 1984: 235)。

サーリンズは、近親族間では「一般化された互酬性」に、敵対関係にある人々との間では「否定的な互酬性」に、近親族と敵との中間に位置する人々の間では「均衡のとれた互酬性」に基づいたやり取りが行われる傾向があると主張した(サーリンズ 1984: 234)。すなわち互酬性のタイプと社会的距離が対応していることを指摘したのである。

このサーリンズのモデルは欧米において広く受け入れられたために、狩猟採集民社会の食物分配は、与え手が自主的に開始する互酬性に基づく交換として認識される傾向が顕在化した(Service 1966)。

#### 第4項 「交換」・「互酬性」概念と問題点

交換と互酬性を同じものと見なす立場と、別個のものであると見なす立場がある。また、互酬性の概念の意味や用法について研究者によって違いがみられる。

レヴィ＝ストロース(1977)やサーリンズ(1984)は、互酬性と交換を同義で使用している。彼らにとって、互酬性も交換も物財などの双方向の流れを意味している。また、進化生態学者は「互酬性」の概念を、一部の経済人類学者と同じく、字義通り双方向の流れとなる「交換」の意味で使用している(Hawkes 1992: 270-271)。一方、互酬性と交換を峻別している研究者もいる。

伊藤は、「互酬性は、一方では交換という行動を包み込みながら、他方では、交換そのもののあり方を総体として制御する関係概念ということになろう」、すなわち「互酬性は交換の基礎概念であって、その逆ではない」(伊藤 1995: 38)と述べている。

プライスは、互酬性という概念には、同等の返礼という期待が含意されているので、分配(sharing)と互酬性を異なる意味で用いている。彼は、分配においては物財の流れは非対称的で、直接的であり、互酬性是对称的で、直接的であると指摘している。さらに互酬性は複数の側(sides)を巻き込むのに対し、分配は集団内関係(a “within” relationship)であるという(Price 1975: 7)。

互酬性や交換の視点から経済活動を研究した K.ポランニー(Polanyi 1957, 1977; ポランニー 1975)は、経済的過程は社会的に制度化されていなければならないという立場をとり、その制度化の原理として「互酬性」(reciprocity)、「再分配」(redistribution)、「交換」(exchange)の概念を提起した。互酬性とは、対称的な配置にある点の間で財やサービスが移動することをさし、再分配とは、財や物資がひとつのセンターへと移動し、そこからまた出る移動を意味している(Polanyi 1977: 36)。交換は、システムの中の2点もしくはランダムな点の間での財やサービスの移動である(Polanyi 1977: 36)。ポランニーの交換は、市場システムの存在に依存しているため、市場交換とみることができる(Polanyi 1977: 37)。そ

の場合、交換は、たとえば二人の間での財の双方向への移動であるが、それぞれが利益をあげようとしている点が特徴である(Polanyi 1977: 42)。ポランニーの互酬性はレヴィ＝ストロース(1977)の互酬性・交換にほぼ同義であるが、ポランニーは互酬性と交換という概念を峻別し、異なる意味を付与しているのである。

以上から「交換」や「互酬性」の概念には、研究者によって定義が異なっていることが分かる。次に、現在の交換理論の中心的な位置を占めるレヴィ＝ストロース(1977)とサーリンズ(1984)の互酬性概念の問題点を指摘しておきたい。

レヴィ＝ストロースの「一般交換」もサーリンズの「一般化された互酬性」も、理念的な概念であり、かつ両者とも、女性や食物の一方向的な流れをさす概念である。言い換えれば、それらの概念は、2者間での女性や物財の双方向的な流れを前提としていない。前者は「循環」であり、後者は「一方から他方に与えること」である。「交換」は、時差を認めたとしても2者間での女性や財物の双方向的な流れをさす概念である。したがって、私自身は、「循環的なモノの流れ」や「一方向的なモノの流れ」を記述する場合には、交換や互酬性という概念で呼ぶべきではないと考える。

イトコ婚の構造分析や日本における贈答の研究においては、互酬性概念や交換概念に基づく分析が有効であった(レヴィ＝ストロース 1977, 1978; 伊藤・栗田 1984)。これらの研究分野においては、女性が交換される特定の集団や贈答がやり取りされる特定の集団(および個人)が存在し、かつ交換ややり取りに関してルールが存在している。これに対して、狩猟採集民社会における食物や獲物のやり取りは、ルールで決まった特定のパートナー間で行われる場合を除けば、相互行為を行う集団や個人が二者関係として明確に特定されていない。このような場合には、互酬性概念による分析には限界があると考えられる。

「互酬性」概念は、現象を研究者が理解するうえで強力な道具となる一方、現象の正しい理解を阻害する場合もある。小馬は、「全体的交換の環は、一つの場面だけを切り取ってみれば、常に一方的な贈り物として現れるからです。お返しまでにかかる時間が長ければ、この魔法はそれだけ強力になります」と述べている(小馬 2000: 44)。レヴィ＝ストロース互酬性概念に精通した研究者の多くは、小馬の見解に同意するだろう。しかしあえて言うならば、だれも上記の「遅延的な互酬性」に関する命題を実証的なデータを用いて証明した研究者はいないという事実を指摘しておきたい。

時間差を考えると、食物分配の場合には特定の間で同量ではないにしても食料が行ったり、きたりする交換が成立しているように見える。このような状況を「遅延的な互酬性」の原理が働いているシステムと理解するべきか、それとも「与える」という実践が慣習的に行われ、その結果が「遅延的な互酬性」モデルと合致するように見えると考えた方がよいのであろうか。私は、食物分配を交換や互酬性として理解をすることを出発点とするのではなく、「与える」や「もらう」という実践の研究から出発する必要があると考えている(田辺 2003: 8-22)。

#### 第5項 食物分配の形態に関する新類型

1990年代に入ると、「要求による分配(demand sharing)」の普遍性を提起した研究(Peterson 1993)や、狩猟採集民社会の分配は交換ではなく、「再分配(redistribution)」(Woodburn 1998)や「移譲(transfer)」(Hunt 2000)であると主張する研究が出版された。これらの研究は、食物分配を「互酬性」や「交換」であるとは限らないという主張を含んでいる。

私は、ピーターソン(Peterson 1993)やウッドバーン(Woodburn 1989)、ハント(Hunt 2000)の研究を検討、整理し、これまで食物分配として一括されてきたカテゴリーは、分与(与えることもしくは移譲)、交換、再・分配(再分配を含む)の3形態に大別され、さらに分配が規則に基づくかどうか、自主的かどうか、要求によるものかどうかという条件を考慮すれば、9つのタイプ(類型)に分類できることを示した(岸上 2003c; Kishigami 2004a)。

人間の行為はほかの人間との相互行為を基調としているため、行為は二者間の社会的な交換と見なすことができる。社会学では行為の社会的交換理論(Homans 1958; エケ 1980)が、文化・社会人類学ではトランスアクションリズム理論(Barth 1966)が存在している。分配行為には与える側ともらう側が存在するため、相互のやり取りは交換や「互酬性」と見なされ、理解されることが多かった。しかしながら後で詳述するように、私は食物分配を「交換」と見なすことから出発すると正しく理解できないのではないかと考えている。

私は食物分配をまず第三者として外から見て識別できる実践として把握することから出発する。そのための基準として3つの類型である「分与」、「交換」、「再・分配」に分けることを提案した(岸上 2003c; Kishigami 2004a)。

分与(giving)とは、ある人(もしくは集団)から別の人(もしくは集団)へのモノの一方向への移動のことである。このような移動は、「贈与」という用語で表現される傾向があるが、日本語の「贈与」には、特別なプレゼントや財産を贈るというニュアンスが強いため、本論文では「分与」という用語を使用する。分与は一方が他方に一方的に食物やモノを移動させることであり、基本的には1回ごとに完結する行為である。しかしここで注意しなければならないのは、それが時間を通して累積されると二者間で食物が双方向に移動しているといえる場合がある。しかしこれは分与が実践された結果であり、交換と見なすべきではないと考えるのが私の立場である。

交換(exchange)とは、ある人(もしくは集団)と別の人(もしくは集団)との間でモノが双方向的に移動することである。交換には即時的でない遅延的な交換や異なるモノやサービス、感謝が交換される非対称的交換(リーチ 1985: 194-201)も存在している。何年も観察を必要とする遅延的な交換については1年以内の調査では十分なデータを集めることができないし、非対称的交換の場合には感謝や名声の返礼については確実な証拠を集めることが困難である。したがって私は、食物を与えた人に、与えられた人から食物やモノ、ほかの認識可能なサービスや感謝が明確に返礼される場合にのみ交換という類型を使用する。

「再・分配」(re-distribution)とは、ハンターがとった獲物を、ハンター以外の人が接收

し、他の人々に分与することである。ポランニー(K. Polanyi)による「再分配」(redistribution)という確立された人類学的な概念がすでに存在しているため(Polanyi 1957, 1977)、私はそれと区別するために「再・分配」という概念を本稿において使用する。すなわち、ポランニーは、モノや食べ物がセンターに一度、集められた後に、それらがセンターから分配される流れを総称として再分配(redistribution)と呼んでいる(Polanyi 1957; 1977)が、本論文で使用する再・分配(re-distribution)とは、あるハンターが捕獲した獲物が、そのハンター以外の人物によって所有され、他の人々に分配されることを指す(岸上 2004c: 150)。

「分与」、「交換」、「再・分配」という類型をさらに下位分類するための「ルールによる」、「自主的な」、「要求による」という3つの基準は、理念型である。例えば、規則による分与と、厳格な規則はないが社会的なプレッシャーが伴う自主的な分与とを区別することが困難な場合がある。このような理由で、ここでは社会的に共有された明確な規範が存在する場合には「ルールによる分与」とする。そしてもらう側のイニシアチブと要求によって分与が開始される場合を「要求による分与」とし、あげる側の意思が尊重される場合を「自主的な分与」と定義しておく。また、北アメリカ北西海岸のポトラッチ儀礼における食物やプレゼントの提供(贈与)のように、与える側が相手に押しつけるような分与がみられたが、このような分与は「自主的な分与」に分類されうる。

ここで使用する「分与」や「交換」、「再・分配」は、食物やモノの物理的な流れを把握するための概念であることを強調しておく。したがってこの概念には、その実践への社会的なプレッシャーや実践する者によって認識されていない返礼といった不可視の要素は含まれていない。その上で、特定の二者間での遅延的な交換、非対称的な交換、分与の累積的な結果としての双方向の移動を「互酬性」という概念で捉えることも可能である点を指摘しておきたい。互酬性とは、モノなどの交換自体ではなく、その背後にある規則や結果としてのパターンを指す概念である。このように考えると、分与が結果として互酬性を形成する場合もあることを強調しておく。したがって、「互酬性」を分析概念として使用することはできるが、「分与」や「交換」のようにモノやサービス、感謝の移動を示す記述概念とは区別しておく。

分配が行なわれる理由と食物の流れを軸として食物分配を分類すると、9つの形態(表2.1)が存在しうることになる。これまで、特に英語圏の文化人類学者はこれらの区別をせず、一括して食物分配と呼び、記述し、分析してきたといえる。

タイプ(1)「ルールによる分与」は、食物が厳格なルールにしたがってハンターからほかの人に一方方向に移動される場合である。タイプ(2)「自主的な分与」は、ハンターが食物を自主的にほかの人に一方方向に移動する場合。タイプ(3)「要求による分与」は、ほかの人からの要求に応じたハンターによる食物の一方方向への移動である。タイプ(4)「ルールによる交換」は、厳格なルールにしたがった食物の交換。タイプ(5)「自主的な交換」は、自主的な食物の交換。タイプ(6)「要求による交換」はもらう側からの要求による食物の交換。タ



タイプ(7)「ルールによる再・分配」は、獲物の捕獲者以外の人や代表者が獲物をほかの人々に厳格なルールに則って分配するもの。タイプ(8)「自主的な再・分配」は、獲物の捕獲者以外の人や代表者が獲物をほかの人々に自主的に分配するもの。タイプ(9)「要求による再・分配」は、獲物の捕獲者以外の人や代表者が獲物をほかの人々の要求によって分配するものである。

|                                                              | ルールによる | 自主的な   | 要求による  |
|--------------------------------------------------------------|--------|--------|--------|
| 与えること(giving)<br>A -----> B                                  | タイプ(1) | タイプ(2) | タイプ(3) |
| 交換(exchange)<br>-----><br>A                      B<br><----- | タイプ(4) | タイプ(5) | タイプ(6) |
| 再      ・      分      配<br>(re-distribution)<br>A C -----> B  | タイプ(7) | タイプ(8) | タイプ(9) |

表 2.1 食物分配形態の諸類型

(A:ハンターもしくは肉の所有者 B:もらい手 C:ハンター以外の分配者、矢印は食物が流れる方向を示す)

ここで提起した諸類型は、人々の実践の形態に着目したものであるが、特定の狩猟採集民社会における食物分配の多様性や時間的な変化を記述する際や、異なる狩猟採集民社会との間で比較する際に有効な手段になると私は考える。

本論文では、表 2.1 で提示したような形態をとる個人間や集団間、個人と集団との間での食物の移動を改めて「食物分配」と定義し、従来のひと括りにした定義とは区別しておきたい。

## 第 2 節 食物分配に関する人類学的研究

食物分配は、狩猟採集民社会や小規模社会の社会的な特徴のひとつであると見なされ(例えば、Service 1966:14-21; Leacock and Lee 1982: 8; Woodburn 1982; Ingold 1988: 281-282; Lee 1999: 826; Barnard 2002: 6-8)、その起源や機能・効果に関して多数の研究がなされてきた。食物分配に関するレビューとしては、プライス(Price 1975)やケリー(Kelly 1995)、岸上(2003b)の研究がある。ここでは、既存の研究を生態学的なアプローチと社会・文化人類学的なアプローチに大別し、その成果と問題点を整理してみたい。なお、生態学

的なアプローチとは、生態人類学的アプローチおよび進化生態学的アプローチのことを指す。

#### 第1項 生態学的アプローチ

生態学的適応仮説は、狩猟採集活動に起因する食料獲得の不安定性を解消する手段として食物分配に着目するものである。この仮説では、食物分配を個人のレベルでの狩猟の失敗の危険性や狩猟能力、獲物の量における偏差を減少させる一種の保険のようなものとして捉えている(Gould 1982; Wiessner 1982; Cashdan 1985; Winterhalder 1986a,b; Smith 1988; 渡辺 1990; Kitanishi 1996 など)。例えば、ウイスナーは、サン(クン・グループ)社会では多数の個人や家族の間で食物分配をすることによって、集団内での食物不足のリスクを分散していると主張している(Wiessner 1982)。また、ハロ(*hxaro*)と呼ばれる資源交換パートナーの制度があり、パートナー間で食料が相互に交換されるほかに、パートナーが住んでいる地域の動物や水、燃料などの資源の利用が相互に可能となる(Wiessner 1982: 67-68; Barnard 2002: 8)。サン(クン・グループ)社会では食物分配はハロの制度とともに、食物供給の不安定性を解消するための社会制度であるとされている。この見解は多くの研究者から支持されてきた仮説である(Kelly 1995)。

これ以外に人口規模や、同じキャンプ地に住むことなどによる場の共有、空間的な近接性が食物分配の重要な要因となるという見解が存在している。生活全体を共有するような人口規模の小さな集団と、それらが複数集合した人口規模の大きな集団では、食物分配の範囲や頻度、特徴に違いが見られるという。ウインターハルダーは7、8人のハンターからなる小規模な狩猟集団において食物分配の効果は最大になると指摘し(Winterhalder 1986a, b)、スミスは集団規模が大きくなり、人間関係が対面的でなくなると人々は貯蔵を始めるため、食物分配は有効に機能しなくなると指摘している(Smith 1988)。さらにスミスは、進化生態学的な視点から見ると真に利他的ないし無差別的な分配は不安定であり、実行されるためには監視が必要であると指摘する。したがって、対面的な小集団では分配が遵守されやすいが、集団規模が大きくなるとそれが困難になるという(Smith 1988)。

メイヤーズはオーストラリア先住民ピンツピ(Pintupi)の定住村における人口が増大した時に、分配のネットワークが機能しなくなった事例を報告している。この事例について、あまりにも多くの人が分配を要求し、かつ互酬することへのプレッシャーが欠如してしまったために、住民の間で食物がほとんど分配されなくなったとメイヤーズは説明している(Myers 1988: 58-59)。

今村(1993)や北西(1997: 19, 22)の研究は、対面的な関係に基づく交渉による食物分配を取り上げ、キャンプの人口規模が異なれば、食物分配行動に違いが認められることを報告している。アフリカのアカ・ピグミーの場合には、ほかの集団から物理的に孤立し、限られた少人数の人と常に顔を突き合わせて付き合う森のキャンプ地においては親族関係や近接性による場の共有が、また多くの人が集まるより開かれた村においては親族関係が重要

な要因となることを指摘している(北西 1997: 22)。同様な差異は、パラグアイのアチェ社会(Gurven n.d.: 22)でも観察される。ガルヴェンは、森と定住地とにおいて見られる食物分配の差異について、両者の間では生産システムに違いがあるからだという仮説を提起している(Gurven n.d.: 22)(注2)。

また、インゴールドは「緊密な社会集団において直接顔を突き合わせている者同士の関係」に基づいて分配が行われると指摘している(Ingold 1988: 283)。これは丹野(1991)や今村(1993, 1996)、北西(1997)らが指摘しているように、対面的な関係から形成されている小規模キャンプにおいては生活を全面的に共有することが、全員を巻き込む頻繁な食物分配を生み出すものになるといえるだろう。

1980年代に入るとアメリカにおいて、生態人類学的な研究に加え、より生物学的な視点に立つ進化生態学的な研究が急増した。進化生態学では、食物分配を個人の利他行動として捉え、それを説明する複数の仮説が存在している(Kaplan and Hill 1985a: 224-227; 1985b; Hawkes 1992: 274-276; 室山 1999: 141-146)。その主要な仮説は、偏差減少仮説(例えば Winterhalder 1986a,b; Smith 1988; Smith and Boyd 1990)、血縁淘汰仮説(例えば Hamilton 1964)、互惠的利他主義仮説(例えば Trivers 1971)、容認される盗み仮説(Blurton Jones 1987)(注3)、共同による獲得仮説(Kaplan and Hill 1985a, b)、適応度ベネフィット仮説(Hill and Kaplan 1988a,b; Hill and Hurtado 1996)、社会的なシグナル仮説(Gurven, Allen-Arave, Hill and Hurtado 1996; Zahavi and Zahavi 1997; Bliege Bird 1999; Smith and Bliege Bird 2000; Bliege Bird, Smith and Bird 2001; Bliege Bird and Smith 2005; Gurven n.d.)である。進化生態学的なアプローチは、仮説を提示し、フィールド調査で収集したデータによってそれを検証していくという実証的な方法である。ガルヴェンは、このアプローチについて、分配という行為を、長期的な保険機能、名声への投資、自分の子孫の数を増加させることと関連させることによって多大な研究成果を上げてきたと評価しているが(Gurven n.d.: 27)、これらの7つのうちのどの仮説を取り上げても、多様な食物分配の事例を十分に説明しているとはいえない。食物分配は人類進化の途上で生み出され、変化を遂げてきた地域的かつ時代的な多様性を持つ社会制度であり、社会・経済的に異なる複数の機能を併せ持つ存在であるために、ひとつの要因だけで多様な食物分配を説明し尽くすことは難しいのではないだろうか(Kelley 1995; Fortier 2000: 138; Kishigami 2004c)。にもかかわらず、これまでの研究は多様な食物分配を十把一からげとして取り扱っている点に問題がある。さらに、進化生態学的研究の問題点は、人間行動における文化・社会的要因をほとんど無視しているところにある(Kelley 1995; 口蔵 2000)。私はここで、食物分配を類型化する重要性を再度、強調しておきたい。

## 第2項 社会・文化人類学的アプローチ

社会・経済的な機能仮説は、食物分配が持つ社会・経済的な機能や効果を強調する。多くの狩猟採集民社会、特に即時的収穫システム型社会においては、食物分配には物質的か

つ政治的な平準化機能や社会関係の創出・維持・連帯機能があると指摘されている(例えば Dowling 1968; Damas 1972a: 236; Langdon and Worl 1981: 36, 39; Woodburn 1982; Bahuchet 1990; 市川 1991: 28; Kent 1993; 北西 2002, 2004 など)。

また、食物の分配は、腕のよいハンターに威信や名声を付与する象徴的な行為であるため、ハンターは獲物の一部もしくはすべてを惜しげもなく、ほかの人と分かち合うのだという主張が存在している(例えば Altman and Peterson 1988: 80)。同様に何人かの研究者は、食物分配は一時的ではあっても負い目感情や優劣を伴う不均衡な社会関係を作り出すという効果を指摘している(モース 1973; 市川 1991; 小田 1994; ゴドリエ 2000: 17; 今村 2000)。

狩猟採集民が食物分配を行う理由を、環境と人間との関係を象徴する世界観や寛容さという倫理観に求める研究も存在している。この研究傾向は、特に極北地域の研究に顕著に認められる。アラスカ、ネルソン島のユピット社会を調査したフィエナップ＝リオードンは、動物から人へ、人から動物へといった象徴的なサイクリングや交換のイデオロギーが生業活動、親族関係、婚姻、獲物をとる側ととられる側との関係、儀礼、アザラシ肉の分配、男女間の性的分業など日常生活のあらゆる領域の基盤となっていることを指摘した(Fienup-Riordan 1983)。フィエナップ＝リオードンをはじめとする多くの極北人類学者は、ほかの人々と食物を分配することは動物と人間との互恵的な関係を維持するためには必須であるとの世界観の存在を指摘している(Scott 1983; Fienup-Riordan 1983: 345-346; Saladin d'Anglure 1984a: 496; Freeman 1989: 11, 2005: 67-68; Nuttall 1991: 219; スチュアート 1991: 121-122; Stairs and Wenzel 1992: 5; Bodenhorn 2000: 44-47; Ziker 2002: 48 など)。多くの極北地域の狩猟採集社会では、動物はハンターに捕られるためにハンターの近くに出現すると考えられている。ハンターはその動物に敬意を払い、捕獲したら、適切な儀礼的な処置を施し、その靈魂を動物の主がいる世界に送り返さねばならないと考えられている。そうすることによって獲物となった動物は、再生することができ、再び、そのハンターの前に出現するという。この世界観の中では、獲物となる動物とそれをとる人間との間には、相互依存的な関係が存在している。この世界観は、ハンターの狩猟や分配行為に強い影響力を持っている。例えば、イヌイットの狩猟において決定的に重要な要素は、動物に対するハンターの適切な態度と意図である。意図にはふたつの側面がある。第一にハンターは食料として動物を利用するという意図を持たなくてはならない。第二に捕獲した動物から得た食料は、そのハンターがひとり占めすべきではない(Stairs and Wenzel 1992: 5)。

この理由は、動物は人間に食べられるために自らを差し出すのであるから、それを受け取ったハンターがほかの人々にその一部を与えるのは義務であると考えられているためである(Fienup-Riordan 1983: 346; Nuttall 1991: 219; Bodenhorn 2000: 44-47)。そしてとった動物をひとり占めするようなハンターには動物が近づかなくなり、不猟に陥ると信じられている。このため、獲物を捕獲したハンターは、ほかの人に獲物やその一部を分与する

のである。したがって、アザラシ肉の分配の方法や肉の流れは、その背後にあるこうした世界観を具現化したものと考えられるのである。ロシアの西シベリアに住むドルガンとヌガナサンを調査したジッカーも同じような事例を紹介している(Ziker 2002: 48)。

バード＝デイヴィッドは、インドのナヤカを事例として取り上げ、彼らは環境とは親のように与えてくれる(giving)存在であるという見解を有していることを指摘している。さらに彼らの経済は「与えること」の上に成り立っており、分配の強力な倫理を持つと同時に、要求による分配を実践している(Bird-David 1990)。この「与える環境」(giving environment)という考え方は狩猟採集民が共有している特徴であり、狩猟採集民の経済は「与えること」という考え方から構築される経済システムを共有していると主張している(Bird-David 1990: 194)。

これらの見解では狩猟採集民が持つ環境観もしくは世界観の故に、分配という倫理や実践が成立していると主張している。しかし、世界観や倫理観は特定の行動を社会的に容認し、奨励するイデオロギーとしては機能するが、それらが社会システムと深く関わる食物分配のような行動をとらせる直接的な原因と考えてよいかどうか私は疑問に思う。また、世界観や倫理にのみ着目すると、人々の行動の変異や変化を説明できない場合がある。すなわち世界観や倫理観の存在を提示するだけでは、なぜ人々がさまざまな方法で食物を分配するのか、またそれがなぜ変化してきたのかを十分には説明できない。

次に社会(関係)システムと食物分配との関係に関する社会・人類学的研究を紹介する。テストールは狩猟採集民社会において観察される獲物の分配は、非オーストラリア狩猟採集民型とオーストラリア狩猟採集民型というふたつのタイプに分けることができ、両者の相違は親族体系のタイプが異なっていることに由来すると主張している。非オーストラリア狩猟採集民型の食物分配は、イヌイトやサン、アカ・ピグミーなどの狩猟採集民社会において行われている分配であり、獲物をとったハンター自身が分配を開始し、他者に分配する(Testart 1987: 292)。イヌイトやサンの分配には相違点が認められるものの、エゴを中心として同心円状に広がっていく親族関係の近さや物理的な距離の近さと、分配の頻度の間には相関関係が見られる(Testart 1987: 295)。このタイプの分配では、親族関係はハンターが獲物をいかに所有・利用するかについて決定付けることはない。テストールはこのタイプをオーストラリア狩猟採集民型とは区別し、非オーストラリア狩猟採集民型の分配と呼んでいる。一方、オーストラリアの狩猟採集民に認められるタイプでは、分配が獲物をとったハンター以外の人によって開始されるという。ハンターは獲物をとった後、それを自らの所有物とすることは許されず、別の人がそれを接收し、分配を行う(注4)。ハンターは自らが仕留めた獲物の最悪の部位しか入手することができない上に、それ以外の部位の分配を行うことも許されていない。実際に獲物の分配を行い、最良の部分を受け取るのは、ハンターの姻族、特に彼の義理の父や彼の義理の兄弟であり、その次がハンター自身の兄弟である。獲物を射とめたハンターは、最後に残り物を得るにすぎないのである(Testart 1987: 292)。

テストールは非オーストラリア狩猟採集民型とオーストラリア狩猟採集民型との違いをマルクス主義的な視点から説明しようとする。テストールは生産関係を「生産者と非生産者を結び付ける関係であり、かつ生産物が両者の間で分割される方法を規定する」(Testart 1987: 300)と定義している。非オーストラリア狩猟採集民型の分配では、獲物の一部が最終的にハンターに戻ってくるようになっている。一方、オーストラリア狩猟採集民型の分配では、生産者からほかの人々のために生産物が完全に奪い取られるような方法で分配されている。生産者は直接、生産物を所有・利用できないが、コミュニティ全体による社会的生産の集合的な所有・利用が行われている。したがって、オーストラリアの狩猟採集民とそれ以外の狩猟採集民との間では、異なる生産関係が存在し、異なる生産様式が作動しているとテストールは主張している。

テストールの研究以外にも、食物分配と社会関係に着目した研究は存在する。例えば、サンの間では肉は狩猟での役割や親族関係に応じて義務的に分配されると報告されている(Marshall 1961, 1976: 297-298; Tanaka 1980: 95-96)。サン(クン・グループやグイ・グループ、ガナ・グループなど)の間では、肉の第二次分配は近親者に優先的に分配されている(Marshall 1976: 297-298; 今村 1993: 20)。また、中央アフリカのロバイ地方に住むアカ・ピグミー社会においては肉の第二次分配が親族関係に基づいて行われている(Bahuchet 1985: 371, 1990: 33)。アカ・ピグミーの複数のグループを調査した丹野は、アカ・ピグミー社会は決してばらばらな個人の集合ではなく、親族関係が彼らの分配行動を規定し、生活そのものが「シェアリング」であると主張している(丹野 1991)。しかしコンゴ共和国リクアラ州ドンゲー地区リンガンガマカオ村周辺に住むアカ・ピグミーのグループを調査した北西は、第二次分配は親族関係に基づくとは限らないと報告している(北西 1997: 21)。

カナダ・イヌイットの事例では食物分配は必ずしも親族間で行われるものではないが(Damas 1972a)、アラスカのユピートとイヌピアートやカナダのイヌイットのそれはおもに親族関係によって組織される生業システムの一部として作動しているため、両者には強い相関関係があることが指摘されている(例えば、Ellanna and Sherrod 1984; Burch 1988; Wenzel 1991, 1995, 2000; Kishigami 1995, 2000; 岸上 1998)。ロシアの西シベリアに住むヌグナサンやドルガンの現代の食物分配の研究でも同様の指摘がなされている(Ziker 2003; Ziker and Schnegg 2005)(注5)。また、オーストラリア先住民社会では、人々は「要求による分配」を通して既存の社会関係や共有されたアイデンティティー(shared identity)を確認したり、維持させたりしていると報告されている(Myers 1988; Peterson 1993; Macdonald 2000)。社会関係に着目する研究は、どのように食物分配が行われているかを理解する上では役に立つが、親族関係など特定の関係を指摘するだけでは、なぜ人々が非親族とも食物分配を行うのかを十分に説明できない。しかしながら、私自身は食物分配が1人の分配者と1人ないしは複数の受取り手からなるなら、それらの間の社会関係は重要な要因であり、解明すべきテーマであると考えている。

### 第3項 食物分配の変化に関する研究

経済のグローバル化の中で貨幣経済が世界の周辺地域の狩猟採集民社会に浸透し、より大きな変化を生み出してきたというようなポリティカル・エコノミーや世界システム論的な研究が存在する一方で(例えば、Murphy and Steward 1956)、世界の周辺地域の狩猟採集民社会の貨幣経済への対応は、予想していたよりはるかに多様であったことが判明してきた(Peterson and Matsuyama 1991)。しかしながら貨幣経済が食物分配にどのような影響を与え、変化をもたらしてきたかに関する通時的な研究はきわめて少ない。さらに、大半の研究が普遍的な機能を追及することや調査点での食物分配の共時的な研究に終始してきたといえる(岸上 2003b)。

そうした中で、定住化や貨幣経済の浸透が進む1980年代から1990年代にかけてのイヌイット社会やサン社会、アカ・ピグミー社会の研究においては、食物分配が重要な社会・経済的実践として行われていることが指摘されてきた(例えば、Ikeya 1993, 1996a, b; 池谷 1996; 2002: 130, 138-140, 150; Kishigami 1995, 2000; 岸上 1996a, b, 1998; Wenzel 1995, 2000; Bodenhorn 2000; Kitanishi 2000 ほか)。また、パラグアイのアチェの定住村落における分配の研究(Gurven, M., K. Hill and H. Kaplan 2002)も出始めている。ウェンゼルはEC(ヨーロッパ共同体、現在のEU)によるアザラシの毛皮の輸入禁止が、イヌイットの間に「要求による分配」を出現させたことを紹介している(Wenzel 1995, 2000)。ピーターソンはオーストラリア先住民社会において「要求による分配」によって社会秩序が再生産されてきた過程の中で、国家の財政支援が果たした役割の重要性を指摘している(Peterson 1999)。こうした、少数の例外を除けば、食物分配の形態や機能の通時的な変化や、貨幣経済の浸透や新技術の導入が食物分配へ及ぼす諸影響についての研究は行われていない(注6)。

### 第4項 要約

食物分配に関する人類学的研究の大半は狩猟採集民がなぜ食物分配を行うかについて解明しようとするものであった。そしてそれらの研究の多くは、生態学的に適応しているとする説明と社会・経済的な機能・効果によるとする説明に大別することができる。また、食物分配と、世界観や社会組織、生活活動全体との間に認められる対応関係に注目する文化的説明が存在する(岸上 2003b)。食物分配には適応という機能があるという共通認識があるものの、その形態や機能には民族や地域によってかなりの多様性が認められるので、その起源や存在理由をひとつの機能や要因だけでは十分に説明することができない。とはいっても、本節で確認しておきたいことのひとつは、食物分配の実践と社会関係との間に密接な関係がある点である。さらに食物分配の変化や、それとより包括的な社会変化との関係を記述・分析しようとした実証的な研究はきわめて少ない点である。

### 第3節 イヌイットの食物分配に関する研究

1998 年の第 8 回国際狩猟採集社会研究大会(The 8<sup>th</sup> International Conference on Hunting and Gathering Societies)において食物分配に関するセッションが開催されるまで、イヌイットの食物分配が正面から取り上げられ、かつ比較されることはなかった(Wenzel, Hovelsrud-Broda, and Kishigami 2000)。このセッションの成果を利用すれば、アラスカからグリーンランドに至るまでのイヌイット社会における現代の食物分配を比較することが可能となった。ここでは、イヌイット社会における食物分配のおもな研究とその成果を、アラスカ、カナダ、グリーンランドの 3 つの地域に分けて比較してみたい。

#### 第 1 項 アラスカにおける食物分配

アラスカのイヌピアートやユピートの食物分配や交換については、バーチ(Burch 1970, 1988)やスペンサー(Spencer 1959: 167ff.)、ボーデンホーン(Bordenhorn 2000)、フィエナップ=リオードン(Fienup-Riordan 1983)による研究などがある。また、アラスカ地域における食物分配や交換をまとめた研究がある(Langdon and Worl 1981)。

バーチは 19 世紀初頭のアラスカ北西地域のイヌピアート社会の歴史的な再構成を試みってきた(Burch 1980; 1998)。彼は、同地域のイヌピアートの人々の間には食物や物資の分与(*aviktuuzaaq* や *nigiq*, *pikszak*, *pigziaq* など)、直接的な交換(*simmiq*)、パートナー間での交易(*niuvig*)、窃盗(*tiglik*)などさまざまな形態のやり取りが存在していることを指摘した(Burch 1988)。彼の研究において特徴的な点は、一般化された互酬性すなわち見返りを期待しない分与は、(ひとつの拡大家族が移動集団を形成している)地縁家族(注 7)の中でのみ実践されている可能性を指摘したことである(Burch 1988: 109-109)。

アラスカのバーローにある現代のイヌピアート社会では、道具、知識、子供の世話、時間、空間、現金などさまざまなものが分配されており、食物はそのひとつである。ボーデンホーンは、食物分配は食物がある人から別の人へと恒常的に流れていく、社会関係に基づく実践のプロセスであることを強調する(Bordenhorn 2000: 44)。イヌピアートの食物分配の大半は、親族間の互酬性に基づくやり取りであるが、戻すことが期待されていない一方的な分与(*giving*)も存在しているという。すなわち、アザラシやカリブーは狩猟集団内や親族内のみで分配される傾向がある。その一方で、大型動物であるシロイルカ、ホッキョクグマ、ホッキョククジラはすべての村人に分配される(Bordenhorn 1990: 61)。また、食事への招待や、老人や単身者、孤児、寡婦、食べ物を必要としている人々に対しても、親族関係がなくても見返りを期待しない分与が実践されている(Bordenhorn 2000: 43-44)。そしてこのような見返りを期待しない一方的な分与は、特定の親族関係がなくても実施されているため、社会的な要因以外の要因で説明する必要があると彼女は考える。イヌピアートの人々は「動物は、正しい心を持ち、とった獲物をひとり占めすることなく分配するハンターにとられるためにやってくる」や「ハンターが獲物を分配すればするほど、より多くの動物がそのハンターにとられるためにやってくる」といった世界観を持っているという(Bordenhorn 2000: 44, 47)。ボーデンホーンは、このような世界観に基づいてイヌピアー



トの人々が食物分配を実践しているため、分配は彼らにとって社会生活に重要な実践であり続けていると指摘している(Bordenhorn 2000)。さらに現代の社会・経済的な脈絡においては、現金で購入できないカントリー・フード（例えば、ホッキョククジラの肉）を持っていない人がそれらを手に入れることができるため、現代社会への適応方法のひとつであると彼女は主張している(Bordenhorn 2000)。このようにボーデンホーンは、親族間の食物分配は社会関係という社会的な要因によって、非親族間の食物分配は世界観といった文化的な価値観によって説明しようとしている。

アラスカ南西部のネルソン島に住むユピートを研究したフィエナップ＝リオードン(Fienup-Riordan 1983)は、彼らの生業活動や生業のイデオロギーは、急激な社会変化にもかかわらず、現在においてもその活力を失っていないことを強調している。彼女は、ユピートの人々は狩猟によって得た食物を儀礼時における特別な贈り物や日常の食物分配を通して、家族間で分配や再分配し、相互に依存し合いながら生きていくと指摘している。ユピートの人々はこの分配を狩猟や漁撈で獲物をとることによってのみ続けることができ、さらにこの獲物の捕獲活動とその分配を通してのみ、家族間の社会関係を再生産することができるのであると報告している。そしてユピートは獲物を分配によってもらうことができるが、彼らにとって重要なことは、食物を親族やコミュニティーへ与え、義務を果たすことであるという(Fienup-Riordan 1983: 357)。

## 第2項 カナダ極北地域における食物分配

カナダ・イヌイットの食物分配に関する研究は、ヴァン・デ・ヴェルデらによるネツリク・イヌイットの狩猟パートナー間でのアザラシ肉の分配に関する研究(Van de Velde 1956; Balikci 1970)、中部極北地域におけるイヌイットの3グループの食物分配を比較したダマスの研究(Damas 1972a)、中部および東部極北地域における食物分配の研究(Kishigami 1995; 2000; 2004a)、ウェンゼルによる東部極北地域における食物分配の研究(Wenzel 1995; 2000)、西部極北地域における食物分配の研究(Condon, Collings and Wenzel 1995)などが存在する。また、イヌイットの食物分配に関する極北人類学者の見解を整理した研究(Lévesque, de Juriew, Lussier and Trudeau 2000)や食物分配についてイヌイットの言説を採録した研究が存在している(Bennett and Rowley 2004: 86-94)。

カナダの中部極北地域ペリー・ベイ周辺(現在のクガールク村周辺)に住むネツリク・イヌイットの間で宣教活動に従事したヴァン・デ・ヴェルデ神父は、冬季のアザラシ狩猟パートナー間でのアザラシ肉の分配について報告している(Van de Velde 1956)。ネツリク・イヌイットの間では、ハンターは、肩(*aksatkolik*)や首(*kinguserk*)などアザラシの部位の名称で呼ばれるパートナーを持っていた。ひとりのハンターは最大で14人ないし15人のパートナーを持つことができた。ハンターがアザラシを捕獲し、イグルー(雪の家)へ持ち帰ると、その妻か母親が解体し、アザラシの各部位をハンターのパートナー(の妻)に分配した。逆に、そのハンターは、彼のパートナーがとったアザラシの部位をもらうことができ

た。このアザラシ肉の分配は、特定の 2 人のハンター間で特定の部位が交換されるという形態をとり、遠縁の者や非親族者がパートナーに選ばれた。おもに非親族者が多数、集合する冬季には、海氷上でアザラシの呼吸穴猟がおもな生業活動であった。親族関係がないパートナー間でのアザラシの部位の交換は、異なる拡大家族集団の間に社会的な紐帯を生み出し、冬キャンプ全体に食料をいきわたらせる機能があった(Balikci 1970: 135-138)。ただし、この制度は、ライフルの導入によるアザラシ猟の少人数化や冷凍機の使用が原因となって消滅したといわれている (Buijs 1993)。1990 年代のペリー・ベイでは、特定のパートナー間でのアザラシ肉分配の制度は観察できなかった。同村では、拡大家族内での親族間の食物の分配がもっとも頻繁に行われていた(Kishigami 1995)。

ダマス(Damas 1972a)は、カナダの中部極北地域に住むコパー・イヌイト、ネツリク・イヌイト、イグルーリク・イヌイトという 3 つのグループの食物分配を比較した。コパー・イヌイトでは、アザラシ肉の分配をめぐる、交換パートナー間での分配ピカッティギート(*piqatigiit*)、自主的な分配パユクツク(*payuktuq*)、そして共食による分配という 3 つの方法が存在することを指摘している。同様に、ネツリク・イヌイトでは交換パートナー間での分配ニッカイツルヴィギート(*niqaiturvigii*)、肉をほかのテントや住居に配るパユクツク(*payuktuq*)、訪問者に肉を与えるミナク(*minnak*)、特定の人を招待するアクパーックタウユク(*akpaaqtauyuk*)、ハンターによる肉の分配ニンギク(*ningiq*)の 5 種が存在していたことを報告し、イグルーリク・イヌイトの間にも大型動物の分配ニンギク(*ningiq*)、肉をほかのテントや住居に配るパユクタリク(*payuktalik*)、大型ボートのクルーの間での分配ウミアッカッティギート(*umiaqqatigiit*)、村全体での共食ニリヤクツクツク(*nirriyaktuqtuq*)、特定の人を食事に招待するアカパールギト(*akpaallugii*)の 5 種の分配が存在していたと指摘する。これらから 3 つのグループ間では、アザラシ肉の分配パートナー制度や大型ボートの乗組員間での分配の有無など、差異もしくは地域差が存在していることが明確になった(Damas 1972a)。

さらに、ダマス(Damas 1972a)は、上記の 3 グループに共通して見られた、アザラシ分配パートナー間での分配、自発的な食物分配、コミュニティ全体での共食を比較検討した。その結果、いくつかの興味深い事実が判明した。第 1 に、親族関係と食物分配が重なる場合もあれば、そうでない場合もあるので、親族関係とともに場(locality)という要因が食物分配において重要である(Damas 1972: 222, 235)。第 2 に、これら 3 つのイヌイト社会においては、一般化された互酬性、均衡の取れた互酬性、否定的な互酬性が存在している(Damas 1972: 237)。そしてサーリンズの指摘している社会的(親族)距離とこれらの互酬性との間に見られる相関性は正しいであろう(Damas 1972: 238)。さらにイグルーリク・イヌイトの間には、狩猟キャンプ集団の長であるイスマタック(*issumataq*)による再分配が存在している(Damas 1972: 237)。第 3 に、イヌイトの食物分配は、食料が欠乏している時には生存を確実にするような保険のような機能があり、豊富にある時には食物の所有量を平準化する機能がある(Damas 1972: 236)。

カナダのバフィン島東北部にあるクライド・リバーで30年余り調査を実施してきたウェンゼルは、同地域食物分配とその変化について報告している(Wenzel 1991, 1995, 2000)。ウェンゼルは、その村には6つのタイプの食物分配が存在していることを指摘している。その6つのタイプとは、(1)狩猟・漁撈活動と一緒に従事した、親族関係がないハンターの間での分配、(2)ハンターとそのハンターが属している拡大家族のリーダーとの間での分配、(3)拡大家族のリーダーとその拡大家族に属する者との間での分配、(4)拡大家族のリーダーとコミュニティ全体との間での分配、(5)ハンターとその親族関係にない狩猟集団のリーダーとの間での分配、(6)村の教会や生協のリーダーとコミュニティ全体との間での分配である。ウェンゼルは(2)と(3)、(4)、(5)のタイプは「伝統的な」ものであり、(1)と(6)のタイプは、定住生活が始まった1950年代以降に出現したものであると指摘している(Wenzel 1995)。彼はまた、ニンギックツック(*ningiqtuq*)と呼ばれる定住化以前に拡大家族の成員間で行われていた食物分配は、個人や世帯に資源のアクセスを最大限にするための手段であり、拡大家族内で系譜的に上位に位置していることや年齢の上下に基づく尊敬・従順関係に沿って実施されていることを指摘した(Wenzel 2000: 63)。

さらにウェンゼルは、このニンギックツックが、拡大家族の範囲を超えてクライド・リバー村に住む540人のイヌイト全員に拡大適用されるようになったことを報告している。しかし食物分配システムの持続と変化に関して見ると、イスマタックと呼ばれる拡大家族の長によって監督される家族内での食物分配は現在でも実践されているのに対し、ニンギックツックのシステムのいくつかの局面は崩壊しつつあると指摘している(Wenzel 1991: 132)。この変化の原因は、1983年にヨーロッパ経済共同体が新たに捕獲されたアザラシの毛皮の輸入を全面的に禁止したことにある。この毛皮市場の崩壊により、イヌイトはアザラシの毛皮の販路を絶たれ、現金収入源をひとつ失った(Wenzel 1991, 1996, 1995)。それにより狩猟用のガソリンなどを十分に購入できなくなり、従前のような狩猟・漁撈活動ができなくなってしまった。この結果、イヌイトのハンターはほかの人たちに分配するための余分の肉を村に持ち帰ることができなくなったという(Wenzel 1991: 132)。このために、村における食物分配の規模が縮小し、その頻度が減った。一方、教会が主催する村全体での共食、クリスマスや誕生日におけるプレゼントの交換などが、あらたに行われるようになったという(Wenzel 1991: 132)。

さらに1983年のECによる毛皮輸入の禁止は、クライド・リバー村にあらたな分配システムを生み出した。現金収入のある者とそうでない者との間に格差が生まれ、収入のない者が収入のある者に分配するようにプレッシャーをかける「要求による分配」(*demand sharing*)が頻繁に行われるようになった(Wenzel 1995, 2000)。

カナダ西部極北地域のホルマン(Holman)に住むコパー・イヌイトを調査したコンドン(R. Condon)は、イヌイトの協力や分配パターンの変化について、経済的な安定性が増したために賃金労働や生業活動における個人化が進み、世帯間の協力や分配の量が減少していることを指摘している(Condon 1991: 273)。しかしながらホルマン村では減少したとはい

え、世帯間の食物分配は行われており、社会・経済統合において食物分配はなおも重要な機能を果たしている。周辺の老人世帯や寡婦世帯は食物分配を通して肉や魚を得ているからだ。コンドンらによると、ホルマンではサーリンズのいう「一般化された互酬性」に基づく食物分配と「均衡のとれた互酬性」に基づく食物分配が見られるという。狩猟・漁撈活動に活発に従事している世帯間での食物分配は「均衡のとれた互酬性」であり、活発に従事している世帯とそうでない世帯との間での食物分配は「一般化された互酬性」である。また、親族や友人との間での食物分配の大半は前者の「一般化された互酬性」の形態をとるが、社会的な距離のある人との間では後者の「均衡のとれた互酬性」の形態をとることが多いという。これらの2種類の食物分配はコミュニティの統合に貢献している(Condon, Collings and Wenzel 1995: 41-43)。そして、食物分配は、(1)コミュニティの中で捕獲され、分配された肉や魚の量、(2)与える側の人間がほかの世帯からもらった肉や魚の量、(3)与える側の人間が持っている親族の数、(4)与える側の人間が将来獲物を捕獲する可能性、(5)ハンターの寛容さの程度などの諸要因によって規定されるという(Condon, Collings and Wenzel 1995: 41)。

バフィン島のイカルイト(Iqaluit)で調査を実施したシーلز(Searles)は、共有の食料や物資の提供に定期的に貢献しているイヌイトは、より大きな権力や権威を獲得していることを指摘している(Searles 2002: 61-62)。そしてイヌイトにとって食物分配は尊敬や名声を得る手段であるとともに、それを行わない場合には悪評や悪口の対象となることが報告されている(Searles 2002: 62-63)。

1950年代末にハドソン海峡に面するサルイト(Salluit)で調査を実施したグレバーン(Graburn)は、獲物の分配のルールは、獲物の大きさや分量によって変化することを指摘した(Graburn 1969: 66-67)。そのルールとは次のようなものである。①シロイルカ、セイウチ、アゴヒゲアザラシ、タテゴトアザラシのような重量が250ポンド(約115キログラム)をこえる大型動物は、何らかの方法でキャンプにいるすべての人もしくは親族に分配される。②重量が50ポンド(約23キログラム)から250ポンド(約115キログラム)の間のカリブー、ワモンアザラシ、若いアゴヒゲアザラシや若いタテゴトアザラシは、通常、拡大家族よりも親密な親族の間で分配される。③鳥、ウサギのような小動物や卵は、ハンターもしくは採集者の世帯で保持される。④しかし小動物や卵が①や②と同じほど大量にとれた場合には、①や②と同じように分配される。また、グレバーンは、食べ物のやり取りは、親族関係や友人関係を保持する機能もあり、分配の必要がないときでも行なわれていたと指摘している(Graburn 1971: 108)。そして分配と訪問は、異なる家族集団間の協力関係や近隣の集団での同盟関係を維持する上で必須であったと指摘している(Graburn 1971: 110)。

リッチズ(Riches)は、ケベック州とラブラドルとの境界の北端に位置するポート・バーウェル(Port Burwell)において1960年代から1970年代に現地調査を実施した。ポート・バーウェルでは、親族の者と親族ではないが近隣に住む者の両方に「与える義務」が認められるが、親族、近隣者の順番で食物分配が行われ、食料が極端に少なくなったときには、

親密な親族以外とは食物分配が行われなかったという(Riches 1981:220, 222, 224)。リッチズは、イヌイットがなぜほかのイヌイットに与える(分配する)ことを義務と考えているのかを解明しようと試みた。彼は、義務の再生産を説明するためにグラックマンの「複合的な関係性」(multiplex relationship)の概念(Gluckman 1955)を適用した。イヌイット社会のような小規模社会では、少数の人間がキャンプ集団を形成し、親族者や近くに住む者同士が密な相互作用を持ち、複数の利害を共有しながら生活を営んでいる。その中で形成されている社会関係は複数の重要な利害とかかわっており、その成員が社会関係を維持することは生存にとって必要なことである。長期的な観点に立つと個人にとって食物を与えずにこの社会関係を壊すよりは、食物を与えて関係を維持する方がより適応的であるといえる。このような理由から、リッチズは食物を「与える義務」の考え方が再生産されているのだと主張している(Riches 1981)。

ウンガヴァ湾のクアックタック(Quaqtaq)において現地調査を実施したドレ(Dorais)は、分配(*ningirsiniq*)と相互扶助(*ikajuutiniq*)はイヌイットの文化とアイデンティティーの基本的な特徴であると指摘している(Dorais 1997: 56)。そして彼はイヌイットの食物分配についての言説と現実と間にはギャップがあることを指摘した。すなわち、イヌイットはすべての人に対して助けたり、分配したりするというが、現実には家族や特定の親族集団(キンドレッド)の中でのみ相互扶助が行われている(Dorais 1997: 68)。

カナダのケベック州極北部のヌナヴィク地域では、大半の食物分配は拡大親族関係に基づく一方向的な分与であることや、「ジェームズ湾および北ケベック協定」(1975)のもとでハンター・サポート・プログラムが創出された結果、新たな食物分配が実践され始めていることが指摘された(岸上 1998; Kishiagmi 2000, 2004a)。これらに関しては本論文の第5章において詳述する。現代のヌナヴィク・イヌイットに関しては、1990年代から2000年代初めにかけて、ヌナヴィク地域のプヴィルニツク村でカントリー・フードの商品化の諸影響を調査したゴンベイ(Gombay 2004, 2005)やヌナヴィク地域の3村における世帯経済の比較調査を実施したシャボー(Chabot 2001, 2003)が、食物分配が頻繁に行われていることを報告している。

### 第3項 グリーンランドにおける食物分配

グリーンランドのイヌイット社会に関していえば、アンマサリク(Ammassalik)のイヌイット社会の食物分配(Robbe 1994: 334-359; Hovelsrud-Broda 2000)やグリーンランド西北部のイヌイット社会の食物分配(Nuttall 1991; Dahl 2000: 175-185)、グリーンランドにおける流通・分配システムの変化(Petersen 1989; Marquardt and Caulfield 1996)などの研究がある。

ホヴェルスラド=ブローダ(Hovelsrud-Broda)は、グリーンランド東南部にあるイセトック(Isertoq)で現地調査を実施した。イセトックのイヌイット社会においては、世帯が社会単位として機能しており、食物分配には世帯内の分配と世帯間のふたつが見られる。そして

世帯間の分配には5つのタイプが見られる。第1のタイプは、ある世帯から別の世帯への食物（カントリー・フード）の分配である。第2のタイプは、子供の誕生会や初猟を祝う際に開催される祝宴である。第3のタイプは、特定の世帯間での食物の定期的な双方向的な交換である。第4のタイプは、狩猟パートナー間でのホッキョクグマの肉の交換である。そして第5のタイプは、ミンククジラの村全体での分配である(Hovelsrud-Broda 2000: 204-206)。第1と第3のタイプの分配は日常頻繁に行われているが、おもに血縁、婚姻、擬似親族など親密な関係にある人々のネットワークに沿って行われている(Hovelsrud-Broda 2000: 199)。ホヴェルスラド=ブローダによると、アザラシの肉などカントリー・フードの移譲(transfer)によってイヌイットの親族関係が維持され、強化されていると指摘している。さらにイセトックにおいてはカントリー・フード（特にアザラシの肉）が食料資源として文化的に高い価値が置かれ、それを食べることはイセトックの住人の証であるという(Hovelsrud-Broda 2000: 211)。そしてカントリー・フードのみが世帯を超えて分配されるが、分配は食料資源を村全体へいきわたらせる機能がある(Hovelsrud-Broda 1999: 47)。

グリーンランドの北西部のカングルスアチアック(Kangersuatsiaq)で現地調査を行ったナタル(Nuttall)も、食物分配に関して報告している(Nuttall 1991, 1992: 136-154)。カングルスアチアックでは、肉（とくにアザラシの肉）をほかの人に与える義務が存在しており、肉が欲しいというハンターへの申し出は拒否されることはないという(Nuttall 1991: 219)。ナタルは、食物分配を、世界観と社会関係、コミュニティとの関係から記述、分析している。アザラシやシロイルカなどの動物は自らの生命をハンターに差し出すので、それを捕獲したハンターはそれをひとり占めするのではなく、ほかの人々に肉を与えるのは義務である。さらにコミュニティはその成員が捕獲した動物に対して最終的な権利を持っているという。したがってハンターがとった獲物を与える義務は、コミュニティに対する義務でもある。多くの場合、ハンターは獲物をほかの人々に見返りを期待することなく与える。それに対して、ハンターには威信や「偉大なハンター」という評判が与えられる(Nuttall 1991: 219-220)。そして肉を分配することは既存の、あるいはこれから作り出される社会関係を肯定し、強化し、表明することであるとともに、世界観(価値観)やコミュニティを肯定し、再生産することを意味しているのである(Nuttall 1991: 221)。ナタルは、カングルスアチアックでの事例に基づいて、肉の分配を異なる親族集団間の関係を維持させる同盟仮説(Damas 1972b)を批判する一方、シロイルカなどとは異なりアザラシの肉が金銭で売り買いされないことに関連付けて、アザラシ肉の分配や流通はコミュニティ全体を維持することに貢献するが、売買は売り手と買い手とを益するにすぎないと指摘している(Nuttall 1991: 220)。

グリーンランド北西部のサッカック(Saqqaq)村で調査を実施したデール(Dahl)は、肉の贈り物(the giving of meat gift)と分配(sharing)とを区別するべきであると主張している(Dahl 2000)。サッカック村には、伝統的な獲物の分配であるニンゲルポック(ningerpoq)、

近年制度化されたシロイルカを船員が分配を行なうアグアルポック(*agguarpoq*)、肉の贈り物であるパユポック(*pajuppoq*)の3種類の分配が存在しているが、前二者は生産関係の一部であるのに対し、後者は社会関係ないしは社会的な交換システムに属しているという。例えば、前二者は狩猟活動に参加したハンターらがシロイルカの特定の部位、特定の量の肉、マッタック(脂肪の付いた皮部)に対して持つ権利に由来するルールに基づいた分配であるのに対し、後者は社会道徳に基づく返礼を要求しない自主的な分配である。つまり、大別すると生産関係に基づくルールで定まった分配と、義務ではない自主的な分配の2種類が存在している(Dahl 2000: 175-178)。さらに、先にあげたアグアルポックという船員によるシロイルカの分配を詳しく見ると、サッカック村でのシロイルカ猟は村全体がかかわる狩猟である。そしてこの狩猟に参加したボートはその大きさにかかわらず、等しく分け前を受け取るが、近隣のイルリサト(Illulissat)の町では、分け前はボートの大きさで決まるといふ(Dahl 1989: 33)。すなわち、近年制度化されたアグアルポックには地域差が出てきていることがわかる。

また、グリーンランドにおいてはシロイルカのマッタックの現金による売買が実施されており、分配や流通のシステムに変化が起きているという。かつてのグリーンランドのイヌイット社会では、世帯が社会・経済的な単位であった。世帯内に食物がない場合には、コミュニティ内のほかの世帯から食物をもらうことができた。しかしほかの世帯から食物以外のモノをもらった場合には、別のものかサービスを返礼として返す必要があった。一方、異なるコミュニティに属する人々の間では、物々交換が行なわれていた(Petersen 1989: 81)。コミュニティ内での食物分配は、コミュニティ内に連帯感や友好関係を生み出すのみならず、社会福祉システムとして機能していた(Petersen 1989: 83)。しかしながらハンターの世帯から形成される「伝統的な」グリーンランド・イヌイット社会は、同質なコミュニティから異質なコミュニティへと変化してきた。すなわち、多くのコミュニティは4分の3が賃金労働者で4分の1が狩猟・漁撈者というふたつの異質なグループに分かれるようになった。かつてのコミュニティ内での食物分配は同質な人々との間の「一般化された互酬性」に基づくものが主流であったが、現在のような異質化が進行中のコミュニティでは、分配のチャンネルに現金を導入することが必要であるという。ピーターセンは、賃金労働者は狩猟・漁撈者からカントリー・フード(地元産の海獣や陸獣の肉)を購入することにより、異質な両者は共生できると主張している(Petersen 1989: 87)。

グリーンランドでは、1721年のデンマーク人の入植以来、カントリー・フードを入植者に対して販売してきたため、カントリー・フードの販売に関しては長い歴史があるが、イヌイットの間でのカントリー・フードの売買はほとんど見られなかった。ところが、グリーンランドの自治政府は、1988年よりカントリー・フードを販売することによって、国外からの輸入食料への依存を低下させるために、ほぼすべての肉の交換・販売を促進させてきた。各コミュニティにおいては、カントリー・フードは、(1)ほかの世帯に個人的に売ること、(2)学校、病院、老人ホームなど制度体に個人的に売ること、(3)小規模商店や公設市場で売る

こと、(4)政府の加工工場に売ることが行われている。マークアルトラによると、グリーンランドにおいてはハンターがカントリー・フードを販売するのは現金をもうけるためではなく、生活様式を維持させるためであり、生業活動を続けるために利用されているという(Marquardt and Caulfield 1996)。

#### 第4項 極北地域における食物分配の共通性と差異

アラスカからカナダ、グリーンランドにかけての極北地域に住むユピート、イヌピアート、イヌイットの食物分配に関する諸研究を紹介した。ここで紹介した成果は、調査者によって視点や記述の方法が異なっていることが判明したが、あえて比較してみると、異なる地域やグループにおいて共通性と差異が認められる。

共通点としては、イヌイットの食物分配は、世界観や社会関係と深くかかわっている実践であり、貨幣経済が浸透した現代の極北地域においても日常的に行なわれている点がある。また、その形態にも、分与や交換、再・分配などさまざまな形態が見られることも判明した。地域的な差異としては、グリーンランドのようにカントリー・フードの現金による売買が盛んな地域と、アラスカやカナダの北極地域のようにカントリー・フードをほとんど現金で売買しない地域が存在している点が指摘できる。さらに、カナダやグリーンランドでは国家の政策や先住民協定の締結によって新たな形式の食物の分配や交換が生み出されている。

第3節の研究レビューによって、特定のコミュニティもしくは親族集団に着目した食物分配の変化に関する体系的な研究がほとんど存在していないことも判明した。さらに、極北地域には食物分配に関して共通性が認められるものの、顕著な差異も存在している。このことは、本研究が扱うヌナヴィク・イヌイットの食物分配の事例をもって、極北地域の全体を代表することはできないことを意味している。

#### 第4節 食物分配と社会変化に関する理論的考察

##### 第1項 小規模社会の変化と持続に関する理論

マーフィー(Murphy)とスチュワード(Steward)は、社会・経済的に成層化が進んでいない小規模な社会が交易を通して貨幣経済に巻き込まれると大きな文化変容を起し、最終的には民族文化とそれを担う社会は崩壊し、大きな国家システムの中に取り込まれてしまうと予測した(Murphy and Steward 1956: 350, 353)。経済人類学者のダルトン(G. Dalton)は、貨幣経済の影響として、世界各地で分配するという義務の範囲を狭めてきた点を指摘している(Dalton 1969: 77-78)。また、リーコック(Leacock)とリー(Lee)は、狩猟採集民社会における交易の拡大や貨幣経済の導入は、必然的に親族関係に基づいた社会における社会関係の崩壊を意味すると考えていた(Leacock and Lee 1982)。これらの見解を例証する事例として、ニカラグアのみスキート・インディアンの社会変化があげられる(Nietschmann 1973)。ここではこの立場を社会の変容仮説と呼んでおこう。



ピーターソンと松山は、1988 年 11 月に国立民族学博物館において狩猟採集民社会への貨幣や商品化のインパクトに関する国際シンポジウムを開催した。このシンポジウムの成果論文集に収められている諸研究は、狩猟採集民社会は貨幣経済の浸透に対して、マーフィーとスチュアードが予測したよりはるかに複雑で多様な反応をしていることを例証していた(Peterson and Matsuyama (eds.) 1991)。同論文集の中で、ピーターソンは社会変化が起こっているという事実を認めた上で、社会の再生産仮説を提示した。社会の再生産仮説は、これまで小規模な先住民社会の社会や文化は、欧米の諸社会との接触や交易によって大きな影響を受けてきたが、それらの社会における変化は当該社会の外からの諸要因によって一方的に引き起こされてきた変化ではなく、先住民をめぐる条件さえ整えば、先住民の主体的・能動的な対応によってある程度制御でき、彼らの社会や文化は基本的に再生産することができる、というものである(Peterson 1991: 2)。なお、再生産仮説は社会が変化しないというのではなく、変化をしつつも社会は再生産されている点を強調している。そしてアラスカのユピートの事例(Langdon 1991)やカナダ・ケベック州のクリーの事例(Feit 1991)らは、社会の変容仮説よりも、社会の再生産仮説を支持している。ラングドン<sup>8</sup>は8つの条件(注8)が満たされれば、貨幣経済と生業活動はお互いに補いあうように共存しえると指摘している(Langdon 1991)。フェイトは、クリーはカナダ政府と先住民権の政治協定を取り結ぶことによって政治・経済的な自律性を保持することができ、社会を再生産させてきたとして、社会変化における国家などの政治的要因の重要性を指摘している(Feit 1982, 1991)。

カナダ・イヌイットをはじめとする北米の北方先住民の社会変化については、1960年代から1970年代にかけての研究では文化変容仮説が支持されていたが、1980年代以降の研究は社会の再生産仮説を支持することが多くなってきた。

1970年代までの極北人類学では、毛皮交易にイヌイットがかかわったことによりイヌイットの社会や文化は根本的な変容を被ったと見る立場が主流であった。多くの極北地域の研究に携わる文化人類学者は、商品経済システムに接合された先住民社会は、既存の社会システムを崩壊的に変化させることを余儀なくされると予測していた。

ウィルモットは、カナダのケベック州の極北部にあるイヌクジュアク村において、1960年頃に生業と貨幣のふたつの経済領域が共存していたことを指摘している(Wilmott 1961: 25)。ケベック州極北部のサルイット村で調査を行ったグレバーンは、貨幣経済の浸透は必然的に先住民の分配システムの消滅や劇的な変化をもたらすと予測した(Graburn 1969, 1971)。また、1950年代の後半にペリー・ベイ村やブヴィルニツック村で調査を実施したバリクシは、交易を通して入ってきたライフル銃の恒常的な利用が、イヌイットの狩猟活動における個人化を促進する原因となり、核家族や個人が社会・経済的な基礎単位になるであろうと予想していた(Balikci 1960, 1964)。同様に、ブロディ(Brody 1975)やアッシュ(Asch 1977)、バージャー(Berger 1977)も、北米先住民が賃金労働に参加することは、彼らの生業活動を衰退させると考えていた。

しかし、実証的なエスノヒストリーや文化人類学的な研究の成果が蓄積されるにつれて、生活や生業活動を維持するために毛皮交易が利用されてきたと見る見解も出てきた。そして1970年代後半から1980年代にかけてのイヌイトやユピートの生業に関する多数の研究によって、彼らの貨幣経済への接合や包含が進展してきたにもかかわらず、生業経済の活力は失われていないことが判明してきた(例えば、Usher 1976; Lonner 1980; Fienup-Riordan 1983; Kleinfeld, Kruse and Travis 1983; Ellanna and Sherrod 1984; Wolfe and Walker 1987; Smith and Wright 1989; Smith 1991; Wenzel 1991; Nuttall 1992; 岸上 1996a, 1996b)。これらの研究は、イヌイトやユピートが、毛皮を売ることや賃金労働に従事することによって得た現金で、食料やその他の生活必需品を購入し生活を営んできたのでもなければ、生業活動を放棄してきたものでもないことを示している。さらに彼らがそうした現金収入を利用して狩猟道具、ガソリン、銃弾などを購入することによって生業活動を維持してきたことを例証しているのである。

その一方で、比較的同質で、経済的に明確な階層化があまり認められなかったイヌイト社会に政治家や生協を運営する経済的なエリートが出現し、階層化が進みつつあることが指摘されている(Duffy 1988; Mithcell 1996)。また、青少年の自殺(および未遂)の頻発、家庭内暴力や性的暴力の多発といった社会変化の負の側面も存在している(Stern and Stevenson 2006)。

バフィン島のクライド・リバー村のイヌイトを30年以上にわたって研究してきたウェンゼルの、アザラシの毛皮などの交易は、1980年代半ばまでは生業活動や社会関係を維持させる上で貢献をしてきたと主張している(Wenzel 1991)。彼は、社会関係の再生産のメカニズムを次のように説明している。親族関係をもとに組織された狩猟集団によって獲物が捕獲された後、その肉はいくつかの決まった方法に則って、拡大家族内や拡大家族間で分配され、消費される。これらの分配の実践を通して、自らの手によらずとも必要な獲物を入手できるとともに、食物やサービスの互酬的な交換や循環を通して社会関係が維持されるのである。一方、狩猟活動を通して獲得したアザラシの毛皮はハドソン湾会社や生活協同組合(以下、生協と略称)などの毛皮業者に売ることができ、現金収入を得ることができる。この現金を利用して、彼らは生業活動を続けるために必要なガソリン、銃弾などを購入する。このように現代の社会的脈絡において、現金の利用と生業活動、社会関係との間に相互依存関係が作られ、イヌイトが社会関係を再生産させることを可能にしたのであった。

ところが1983年にヨーロッパ共同体(EC)が、動物愛護運動の影響を受けてアザラシなどの毛皮の輸出入を一切禁じたことが契機となり、ホッキョクギツネやアザラシなどの毛皮の需要が激減し、イヌイトは毛皮を売って現金収入を得ることができなくなってしまった。このため、以前のように多くのハンターが活発に生業活動に従事することができなくなってしまったのである。ウェンゼルの、夏の狩猟キャンプ集団の構成が親族関係ではなく、ガソリンなど狩猟活動を行う上で必要な物的資源を持っている人を中心とした、他人

を含むキャンプ集団へと変化していることを報告している(Wenzel 1995)。

ところで、毛皮交易（ないしは現金収入）と生業モデルの関係が正しいとすれば、毛皮交易の実質的な終焉は、現金収入の激減を意味し、ひいてはそれに依存する狩猟・漁撈活動の衰退は、社会関係の変化を引き起こすことを予想させる。以上から次のような仮説を立てることができる。

その仮説とは、「毛皮交易の不振による現金収入の減少によって、ガソリンや銃弾を十分に入手することができなくなったため、従前通りの狩猟・漁撈活動をイヌイットは行うことができなくなった。このため食物分配にも変化が見られ、イヌイットの社会関係も大きく変化した」である。

これまでの研究は、社会の変容仮説と再生産仮説のいずれが正しいかを事例で決定したり、争点とすることに終始してきたが、いかなる条件下で小規模社会は急激な社会の変容や再生産を遂げるのかを事例によって吟味していくことが重要であろう。1983 年から 20 年がたった現在、この仮説を検討することはイヌイット社会の変化を考える上で、重要な試みであるといえるだろう。

## 第 2 項 第 4 世界の先住民社会の再生産

1998 年の第 8 回国際狩猟採集社会研究大会の基調講演者としてニコラス・ピーターソンは、第 4 世界に属する先住民としての狩猟採集民の社会や文化の再生産の問題を取り上げた(Peterson 1999)。なお、第 4 世界とは、国内的に植民地化されている少数民族の総称である(Graburn 1981)。彼の主張を要約してみよう。

オーストラリアのアボリジナルやカナダのイヌイットは、1960 年代後半から国家に対し、平等な権利を要求することから、先住民としての独自の地位の認知を要求することへと運動方針を転換した。そして 1970 年代に入ると狩猟採集民の背景を持つ諸集団は、「先住民民族」へと変貌を遂げ、先住民の地球規模のネットワークが出現するとともに、彼らの政治運動が盛んになった。そしてカナダ、オーストラリアにおいていくつかの先住民諸権益請求問題が決着を見せ始めた。

1940 年代後半以降、カナダ政府はイヌイットに福祉金を提供したが、この制度はイヌイットの生活に役立った一方で、彼らの国家への社会・政治的な依存を生み出した。このため、ペイン(R. Paine)は、カナダにおけるイヌイット政策を「福祉植民地主義」(Welfare Colonialism)という概念で特徴付けた(Paine 1977)。一方、ピーターソンは、オーストラリアの僻地に住む先住民に市民としてオーストラリア政府が福祉金を提供した結果は、福祉への依存ではなく、「福祉による自律」(welfare autonomy)であると指摘した(Peterson 1999: 852)。ピーターソンによると、アボリジナルはオーストラリア政府から福祉金を受けることによって、オーストラリアの市場経済の中で物質生産に従事することや労働力を売ることをしないですんだ。そして彼らは福祉制度から得た現金を元に社会的かつ経済的な資本を作り出し、自らが望むことを追求したために、彼らは社会や文化の多くの側面を再

生産し続けることができた。すなわち、ピーターソンは、オーストラリアの先住民社会では、「要求による分配」(Peterson 1993)の実践を通して、経済的な不平等が抑えられ、平等主義的な社会秩序が再生産されてきたと主張する(Peterson 1999: 853)。

ピーターソンは、先住民の隔離政策、その後の同化政策、福祉政策などの国家の政策が予期せぬ結果として先住民の社会秩序を再生産させてきたし、先住民と国家との政治交渉の結果、先住民の諸権利の承認と法的な制度化が進められた 1970 年代以降は、国家と先住民によって意図的に社会秩序が再生産されてきたことを指摘した(Peterson 1999: 851-854)。その上でピーターソンは、第 4 世界の先住民の現状について次のように指摘している。彼らは第 1 世界の国家の中に取り込まれている。彼らは、第 1 世界の官僚制によって管理され、第 1 世界の法制度の制約を受け、第 1 世界の資本主義経済によっておもに支えられている。そのような現実のもとにありながら、物質的な現実と社会秩序との間には、明確に分離した関係が存在している(Peterson 1999: 859)。彼のこの指摘は、下部構造(物質的・経済的な現実)と上部構造(社会秩序やイデオロギー)との間に弁証法的な関係が成り立つとするマルクス主義的な社会論(マルクス 1953: 15-16)の根本に疑問を投げかける(注 9)。その上で、第 4 世界に住む先住民の社会秩序が物質的生産に実質的にかかわることなく、国家との複雑な対話を通して再生産し続けることができるかどうか、という疑問を呈している(Peterson 1999: 857)。この問題を、「第 1 世界の中に取り込まれている第 4 世界の文化の問題」と呼んでおこう。

オーストラリアやカナダの先住民社会は、社会・文化的な多様化が進んでおり(注 10)、ピーターソンの仮説がどの程度まで一般化できるかという問題は残るものの、きわめて興味深い問題提起を行っているといえよう。オーストラリアのニュー・サウス・ウェールズ州のウイラジュリ(Wiradjuri)の食物分配を研究してきたマクドナルドは、社会変化は経済システムのすべての部分に同程度の影響を及ぼすのではなく、生産様式は重大な変化をしてきたが、食物分配などの流通様式はつい最近まで再生産されてきたことを指摘した。この分配が特定の社会関係に沿って実践されることによって、それらの関係が再生産されてきたことを指摘している(Macdonald 2000: 91-93)。ピンツピグループを研究したメヤーズは、食物やモノの分配(交換)を通して、彼らの社会関係や共有されたアイデンティティーの関係性が客体化され、確認されることを指摘している(Myers 1988: 55, 60)。これらの研究は、生業活動が従前のように実践されていなくても、特定の社会関係に沿って食物やモノが分配されたり、交換されたりすることによって、社会関係が再生産されることを示唆している。

オーストラリアの場合と同じようにカナダにおいても類似した先住民政策が実施され、国家と先住民の諸グループとの間に諸権益に関して政治協定が締結されてきた。カナダ・イヌイットの場合には、福祉金やそれ以外の政府からの補助金を狩猟・漁撈活動に投入してきた。また、後で詳述するようにヌナヴィク地域のイヌイットは協定を利用して、狩猟・漁撈活動や食物分配の活性化を試みてきた。イヌイット社会においても食物分配は頻繁に行

われており、この実践こそが社会関係の再生産を可能にさせている可能性が高いと私は考える。言い換えれば、ピーターソンが指摘したオーストラリアの事例は、ある程度、カナダ・イヌイットの社会の変化や再生産も該当するのではないかと考えるのである。この見解は、先に私が提起した仮説を否定する可能性がある。本論文においてイヌイットの食物の分配に焦点を合わせて社会の変化と再生産を考えてみる理由がここにある。

### 第3項 食物分配の実践と社会関係の再生産

ここでは、イヌイットの食物分配と社会関係の再生産に関して、既存の見解を整理してみる。極北地域の先住民の社会や文化を研究対象とする極北人類学者は、イヌイットやユピートの生業とは、おもに親族関係によって組織される、狩猟・漁撈活動、分配活動、消費活動からなる社会経済システムであると認識してきた(Heinrich 1963a: 68; Fienup-Riordan 1983: 347; Ellanna and Sherrod 1984; Wenzel 1991)。このシステム・モデルによれば、イヌイットやユピートの生業活動は親族関係に基づいて組織され、活動によってその関係が維持されるという相互関係にあるため、一方の変化は他方の変化を生み出すことになる。食料獲得活動は、特定の社会関係によって組織され、協力して実行される。そしてその成果として得られた獲物は、特定の社会関係に沿って分配され、消費される。すなわち、食料獲得活動は社会関係によって条件付けられる一方で、獲物は特定の社会関係を通して分配、消費され、それによって社会集団の存続が可能となる。社会関係と、食料獲得活動と分配・消費活動は相互規定の関係にある。すなわち後二者が再生産されている間は、それにかかわる社会関係も再生産されるのである(注11)。

この社会生業システムは毛皮交易期にあたる1910年代以降にも機能していたが、ウェンゼルによるとそれは1983年のアザラシ毛皮の市場崩壊によって大きな変化にさらされ始めたという(Wenzel 1991)。したがって、この社会生業システムの変化はイヌイット社会全体の変化の指標となると考える。本論文では、社会生業システムの下位システムを構成する食物分配に焦点を合わせ、その変化と連続性を社会関係と関連させつつ検討してみる。

## 第5節 研究の視点と意義

### 第1項 実践と社会の再生産

本研究では、食物分配は特定の社会関係に沿って実践されるが、この実践によってその社会関係は客体化され、再生産されるという仮説に基づいて記述と分析を進める。すなわち実践に着目し、そこから出発し、それにかかわる社会関係や世界観を調査するという立場をとる。

実践(プラクティス)とそれを生み出すハビトゥスの概念を検討し、社会・人文諸科学の分析概念として提案したのはブルデューである(P. Bourdieu 1977)(注12)。その後、その考え方に基づいて、慣習的な行動と意図的な行動を合わせて実践と見なすアメリカ流のプラクティス論なども出てきた(Ortner 1984)。日本では、社会学者の宮島喬や社会人類学者

の田辺繁治らが、ブルデュー流の実践理論を援用して分析を行ってきた(宮島 1995; 田辺 1989, 2002a, 2002b, 2003)。

実践(プラクティス)とは、日常的なすべての場面で見られるルーティーン化された慣習的行為であり(田辺 2002a: 3)、それほど意識的ではない、反復的な性格を持つ(宮島 1995: 7)。このような実践は、自由な行為や意図的な行為であるプラクシスからは区別される。実践理論では、実践はハビトゥス(habitus)によって生み出されると考えられている。ハビトゥスとは、所与の社会文化環境の中で人々が習得する、無意識的もしくは半意識的に機能する身体化された見方、感じ方、振る舞い方の一定の性向のシステムである(宮島 1995:13; 田辺 2003:19)。このハビトゥスは特定の社会集団や階級に属する人々の身体に刻み込まれた一定の傾向性であり、実践は、規範やルール、信仰ではなく、このハビトゥスから生み出される。

その一方で、ブルデューの考え方に則れば、実践のパターンやその背後にある広義の規範やハビトゥスは、実践を通して再生産されることになる。人間は、状況を絶えず解釈しながら、自らの行為を吟味して組み立て直すという自省性を持っている。それ故、ある文化や社会が維持、再生産されている場合でも、行為者の機械的な反復行動の結果としてだけではなく、解釈、選択、モニタリングなどの過程を伴う実践の結果と見るべきである(宮島 1995:13)。言い換えれば、実践の再生産には、変更や選択といった要素が含まれているといえよう。すなわち、慣習的な行為(実践)によって社会は生産され、再生産されるとする再生産論は、再帰性や反復性が社会生活の根本的な特徴であるという前提に立ちつつも、変化を含意した理論でもある(田辺 1995:16)。すなわち、再生産とは、「同じものの生産の繰り返しなどではなく、再帰的な生産、生み出されたものからのさらなる生産」(ルーマン 1993: 77)を意味している。

実践論は行為者の経験の次元に着目するミクロな視点からの研究であるため、日々の実践が社会システム全体やその変化とどのように関係しているかを十分に把握できない場合がある。さらにハビトゥスという概念自体も把握し、記述することが難しい。しかしこの実践論の視点に立てば、食物を分配するという実践がどのような社会関係や世界観、規範をもとに組織され、実施されているのか、さらにその実践が社会関係などの再生産や変化にどのような影響を及ぼしているかについて把握することができる。例えば、この視点に立つと、もし食物分配が特定の社会関係に沿って実践されると、その実践を通してその社会関係が再生産されるし、食物分配の頻度や方法に変化が起こると、社会関係にも変化が起こることが予想できる。私は、この実践論は経験的な次元での社会変化や再生産を分析する有力な方法であると考えている。これが本稿において実践論を採用する第一の理由である。

また、私が「実践」に着目したのは、すでに指摘したように食物分配を理解しようとするとき、サービス(Service 1966)をはじめとする多くの人類学者が「交換」や「互酬性」の概念を利用して食物分配を分析してきた研究に疑問を抱いたからである。かつてのネツリ

ク・イヌイト社会におけるアザラシ肉分配パートナーシップのように特定の二者の間で特定の部位の交換（分配）がなされているような事例では、互酬性が明確に認められる。一方、それ以外の食物や獲物の分配の大半は、特定の親族関係など社会関係に基づいて行われる、返礼を期待しない一方から他方への「与える」という行為である。イヌイトは特定の人物に食料を与える場合、その相手から返礼が来ることを必ずしも期待していない。困った場合には、親族の誰かからもらうことができると考えているが、その人物は自分が常に食物を分配している特定の人物だけであるとは考えていない。少なくとも特定の親族間で「与えるから、そのお返しをもらえるのだ」とは考えていない。彼らは、親族関係のような特別な関係にあるから相手に与えるのである。また、その関係が存在する故に困ったときには、くれるように頼むことができると考えているのである。このような条件下では、時間差を考えると特定の人間間で同量ではないにしても食料が往き来する交換が成立しているように見える。このような状況を「遅延的な互酬性」の原理が働いているシステムと理解するべきか、それとも「与える」という実践が慣習的に行われ、その結果が「遅延的な互酬性」モデルと合致するように見えると考えた方がよいのであろうか。私は、エゴの親族の誰かに食料を与え、誰かからもらっているイヌイトの場合には、「与える」や「もらう」という実践の研究から出発する必要があると考えている。したがって、分配を交換としてみることから出発する従来の立場をとらないことを強調しておきたい。

本論文では、実践理論の立場に立ち、現代のイヌイトがどのような食物分配を実践し、それが社会関係や文化の再生産とどのような関係にあるかを検討してみる。さらに食物分配という実践を分析の中心にすえるが、その際、食物分配が行われるコミュニティーを開かれたシステムとして捉え、それを取り巻き、かつ背景となる環境、歴史、政治経済システム、国家といった諸条件の中に関連付け、位置付けながら、記述と分析を進めたい。

## 第2項 本研究の意義

本研究は、1980年代半ばから2000年代初めにかけてのイヌイトの村における食物分配に関する参与観察に基づく研究である。その目的は、イヌイトの食物分配の形態、機能、変化の記述と分析である。

本論文の第1の意義は、イヌイト研究への貢献である。本章で論じたように、イヌイトの食物分配に焦点を合わせつつ社会変化を扱った研究は皆無に等しい。本研究は、カナダのヌナヴィク地域のアクリヴィク村という1村における調査の民族誌的な成果であり、地域差がみられるイヌイト社会全体へと普遍化することはできないが、新たな事例を提出し、吟味することにより、現代のイヌイトの食物分配のみならず、社会変化に関する理解を深める上で重要な貢献をすることができる。さらに本研究では、アクリヴィク村の事例に基づいてイヌイトの食物分配の大半は「互酬性」に基づく交換ではなく、「分与」やポランニーの「再分配」として理解すべきだという主張を展開する。これはイヌイトを含む狩猟採集民の食物分配研究における研究の視点の転換を提案するものである。この

点は、本研究の理論的な貢献であると考え。以下の第2および第3の意義は、第1の意義からの派生である。

本論文の第2の意義は、狩猟採集民研究への貢献である。本章において、狩猟採集民の食物分配の機能や効果に関して複数の仮説があることを紹介した。本研究では、その中のいくつかの仮説をイヌイットの調査事例によって比較検討することができる。その過程で、ほかの狩猟採集民の食物分配にも共通する側面やイヌイットの食物分配の特殊性を把握することができる。

本論文の第3の意義は、国家の中に先住民として取り込まれた狩猟採集民社会の変容と再生産に関する文化人類学的な研究への貢献である。先住民には狩猟採集民のみならず、農耕民や牧畜民など異なる生業形態や社会構造をもつ人々がいるが、本研究は国家の中に先住民として取り込まれた狩猟採集民の社会変化に関する研究であるという一側面をもち、その変化の過程に関する理解を深化させる。既存の研究の整理を通して、たとえばピーターソン(Peterson 1983, 1999)の研究のように、国家の中に取り込まれた狩猟採集民であるアボリジナルが、変化しつつある社会・経済環境の中で食物分配を続けており、結果として社会の再生産を生み出してきたことを示唆する研究が存在していた。本研究はカナダ国家の中に政治経済的に取り込まれても先住民としての諸権利に関する政治協定をもとに狩猟・漁撈活動や分配の実践を通して独自の社会(関係)を再生産させてきたイヌイットの事例であり、ピーターソンが提起した「第1世界の中に取り込まれている第4世界の文化の問題」にひとつの回答を提供することができる。

## 第6節 調査地と調査方法について

### 第1項 調査地と調査について

私は1984年8月より、カナダ・ケベック州の極北地域にあるアクリヴィク(Akulivik)村で人類学的な調査を開始した。アクリヴィク村は、北緯60度48分、西経78度08分に位置し、ハドソン湾東岸にあるイヌイットの集落である。近隣にある村は、約170キロメートル北方にあるイヴイヴィク(Ivujivik)村と約97キロメートル南方にあるプヴィルニツク(Puvirunituk)村である。アクリヴィク村とほかの村との間には道路や鉄道は存在せず、交通手段は航空定期便と冬のスノーモービル、夏の船外機付きカヌーや動力ボートである。

現地調査を始めるにあたって、ヌナヴィク・イヌイットの文化団体であるアヴァタック文化研究所(Avataq Cultural Institute)とアクリヴィク村の村議会に調査申請を行い、許可を得た。同研究所と村役場から調査を行う上での便宜を図ってもらう一方、調査を実施する上で倫理的なルールを守ることや調査成果は英文報告書として調査終了後に両者に提出することという条件を付けられた。

私は当初、イヌイットの家族や親族など社会構造を研究するために調査を開始したが、その関心は名前や同名者関係、助産人関係、ハンター・サポート・プログラムの利用とその諸影響、海洋資源の利用と管理、食物分配へと広がっていった。2度の予備調査の後で実施



されたアクリヴィク村での本調査は1986年6月26日から10月30日までの約4ヶ月間であり、それ以降は計約12ヶ月の継続的な追跡調査や比較のための現地調査である。調査の方法は、村のイヌイット世帯に同居させてもらい、その世帯主夫妻を中心に世帯員の日常の活動や社会関係を参与観察した。1990年からは滞在先世帯の食事の内容と参加者の関係についての調査を行うとともに、狩猟・漁撈での獲物の分配、村の中での食物分配に関して参与観察を行った。また、ハンター・サポート・プログラムの運用についても1984年より参与観察するとともに、聞き取り調査を実施してきた。さらに、村の歴史や家系図に関しては、村の古老や世帯主に聞き取り調査を実施した。聞き取り調査は、英語によるもしくは英語とイヌイット語を話すことができる通訳を介して実施した(注13)。また、同村に住むイヌイットの歴史については、ハドソン湾会社の交易所日誌やカナダ政府の公文書を調査した。

本論文ではその中から経済活動と社会関係を記述しつつ、食物分配の変化と現状を描き出すが、ここで使用するデータは、下記の調査によって収集したことを明示しておきたい。

#### ヌナヴィク地域での現地調査

- (1) カナダ国 ケベック州アクリヴィク(Akulivik)村にて予備調査 (1984.8.3~8.24)
- (2) カナダ国 アクリヴィク村にて予備調査 (1985.6.27~7.30)
- (3) カナダ国 ケベック州クージュアック (Kuujuaq) 村にて調査 (1985.9.12~10.9)
- (4) カナダ国 アクリヴィク村にて調査 (1986.6.26~10.31)
- (5) カナダ国 アクリヴィク村にて調査 (1987.4.15~5.8)
- (6) カナダ国 ケベック州ジョージ・リバー (George River) 村にて調査 (1988.8.29~9.30)
- (7) カナダ国 アクリヴィク村にて調査 (1990.12.10~1991.1.11)
- (8) カナダ国 ケベック州イヌクジュアク (Inukjuak) 村にて調査 (1996.1.15~2.21)
- (9) カナダ国 アクリヴィク村にて調査 (1998.1.8~2.7)
- (10) カナダ国 アクリヴィク村にて調査 (1998.6.22~8.2)
- (11) カナダ国 イヌクジュアク村、プヴィルニツック村、アクリヴィク村、モントリオールにてイヌイットの滑石彫刻などを資料収集調査 (1998.11.15~12.6)
- (12) カナダ国 クージュアック村とアクリヴィク村にて調査 (1999.9.19~11.12)
- (13) カナダ国 アクリヴィク村にて調査(2000.8.22~10.8)
- (14) カナダ国 モントリオールおよびクージュアックにおいて調査 (2002.9.17~10.19)
- (15) カナダ国 モントリオールおよびアクリヴィクにおいて調査 (2003.9.10~10.9)
- (16) カナダ国 モントリオールおよびクージュアックにて調査 (2003.11.24~12.09)
- (17) カナダ国 モントリオールとアクリヴィク村にて調査 (2004.1.20~2.20)

#### ヌナヴィク・イヌイットに関する古文書・公文書調査

- (1) カナダ国 オンタリオ州の国会資料館にて政府文書の調査(1986.4.9～4.15)
- (2) マニトバ州ウイニペグのハドソン湾会社の資料館にて毛皮交易人の日誌その他の文書の調査 (1986.4.21～4.28)
- (3) カナダ国 マニトバ州ウイニペグのハドソン湾会社の資料館にて毛皮交易人の日誌その他の文書の調査 (1987.7.1～7.31)
- (4) カナダ国 マニトバ州ウイニペグのハドソン湾会社の資料館にて毛皮交易人の日誌その他の文書の調査 (1988.11.27～12.2)

調査地であるアクリヴィク村のカナダ・イヌイット社会全体における位置づけについて述べておきたい。カナダの極北地域には、ヌナヴート準州のイカルイットのようにイヌイットの人口が 4,000 人を超えるような村から人口が 300 人に満たないヌナヴィクのアウパルク(Aupaluk)村まで人口規模の異なるイヌイットの村が約 50 存在している。また、人口の 1 割以上がモントリオール、オタワ、エドモントンなどの都市で生活をしている。近年、カナダのイヌイット社会には生活スタイルや経済的な志向に関して多様化が進展している。アクリヴィク村は、比較的小規模で、賃金労働の職が少なく狩猟・漁撈活動に重きをおくハンターが多い村である。カナダのイヌイット社会全体を代表させうる村ではないが、少なくともヌナヴィク地域のイヌイット社会の典型的な事例のひとつとみなすことができる。しかしこのことは、本事例をカナダ・イヌイット社会全体へと一般化する場合には限界があることを意味している。

## 第2項 調査者としての立場と問題点

本研究は、私自身による現地での参与観察やインタビューによる成果であるが、調査者としての立場を明示しておきたい。私は日本で日本語を母語として生まれ育ち、日本の大学・大学院および留学生としてカナダの大学院で人類学を学んだ経験を持っている。現地での調査を始めたのは 26 歳の時で、現在も継続中である。これらは私の調査者としての「体外個性」と「体内個性」であろう(松園 2002: 1)。これらの諸要因は、私の調査に大きな影響やバイアスを与えているはずである。残念ながら私は、松園がいう「内省の人類学」(松園 2002)を実行できている自信がないが(注 14)、自分自身の体験を通して自分なりに調査を進めてきた。

文化人類学的な調査の基本は、相手の視点から相手の行動や言説、その背景にある社会関係や世界観を調べることである。煎本は、この観察を「内的な観察」と呼び、「観察者と対象者が個別のものであったところから始まり、観察者が対象者に接近し、観察者と対象者が同一化する」ことであると述べている(煎本 1996: 17)。そして次には、観察者は対象者から離れ、超越した観察者になる。煎本はこのことを「外的な観察」と呼んでいる(煎本 1996: 16-17)。参与観察とは、対象者である他者の活動に参加しながら、外的な観察と内的な観察を行い、その往復を通して他者や他者の文化を理解することである。私自身は、こ

の往復運動を試みながらも、完全に他者と同一化する「内的観察」に成功したとは思っていない。むしろ、調査者としての私は、結果としてきわめて外的な観察者であったことを認めなくてはならない。この意味で、私は外部者の立場に重点をおく参与観察とインタビューの実践者であるといえる。

調査者としての私と調査対象としてのイヌイトとの関係にも触れておく必要がある。日本人調査者である私は、調査対象者であるイヌイトとは政治・経済的な利害を共有していないし、支配・被支配の関係にもなかった。むしろ食住に関してイヌイトに全面的に依存しなければならないという関係にあった。私の経済力を別にすれば、村においてもらい、調査をさせてもらっているという弱い立場にあった。さらにイヌイトの生活の場に学習に出かけた弟子のようなものであった。こうした私とアクリヴィク村の人々との関係は私自身が齢を重ねてきたために、若者から中高年に分類される人間に対する取り扱いへと変化はしてきたが、基本的に20年が過ぎた現在でも大きな変化なく続いている。さらに男性の調査者であるため、女性の活動、特に女性の分配に関しては、参与観察やデータの収集が十分でないことを認めざるをえない。さらに、調査者である私の存在や滞在先への謝金が、滞在先世帯の狩猟・漁撈活動や食物分配に及ぼすと考えられる影響に関しては、十分に自省し、把握しながら調査を進めたとはいいがたいことを認めざるをえない。このような私の個人的な条件が、調査や執筆（表象化）にどのような影響を及ぼしているかは私自身には判断できないが、第三者がこの論文を読む場合や相対化する場合には参考になろう。

### 第3章 カナダ・ヌナヴィク地域ケープ・スミス島周辺の自然環境と歴史

本章では、カナダ・ヌナヴィク地域ケープ・スミス島周辺の自然環境と歴史に関して記述する。特にケープ・スミス島周辺のイヌイットが、20世紀に入り、いかに世界システムや国家の中に急激に取り込まれていったかを記述する。本章は、本研究の背景をなす。

20世紀のカナダ・イヌイットの歴史を特徴付けるとすれば、毛皮交易への参加、定住生活の開始、ランド・クレームの締結などの諸事件とその諸影響であろう。20世紀以降の歴史を記述するための枠組みにはいくつかの選択肢があるが(注1)、本論文では、B.コリニョン(Collignon)が提起したイヌイットの土地利用パターンの歴史の変遷をたどる枠組みを採用する(Collignon 1993)。その理由は、毛皮交易にかかわり始める直前のイヌイットは、大地や海氷上で狩猟や漁撈をおもな生業として季節的な移動生活を営んできたため、土地利用パターンとの関係を見ることによって、イヌイット社会の歴史的变化をより適切に理解できると考えられるからである。

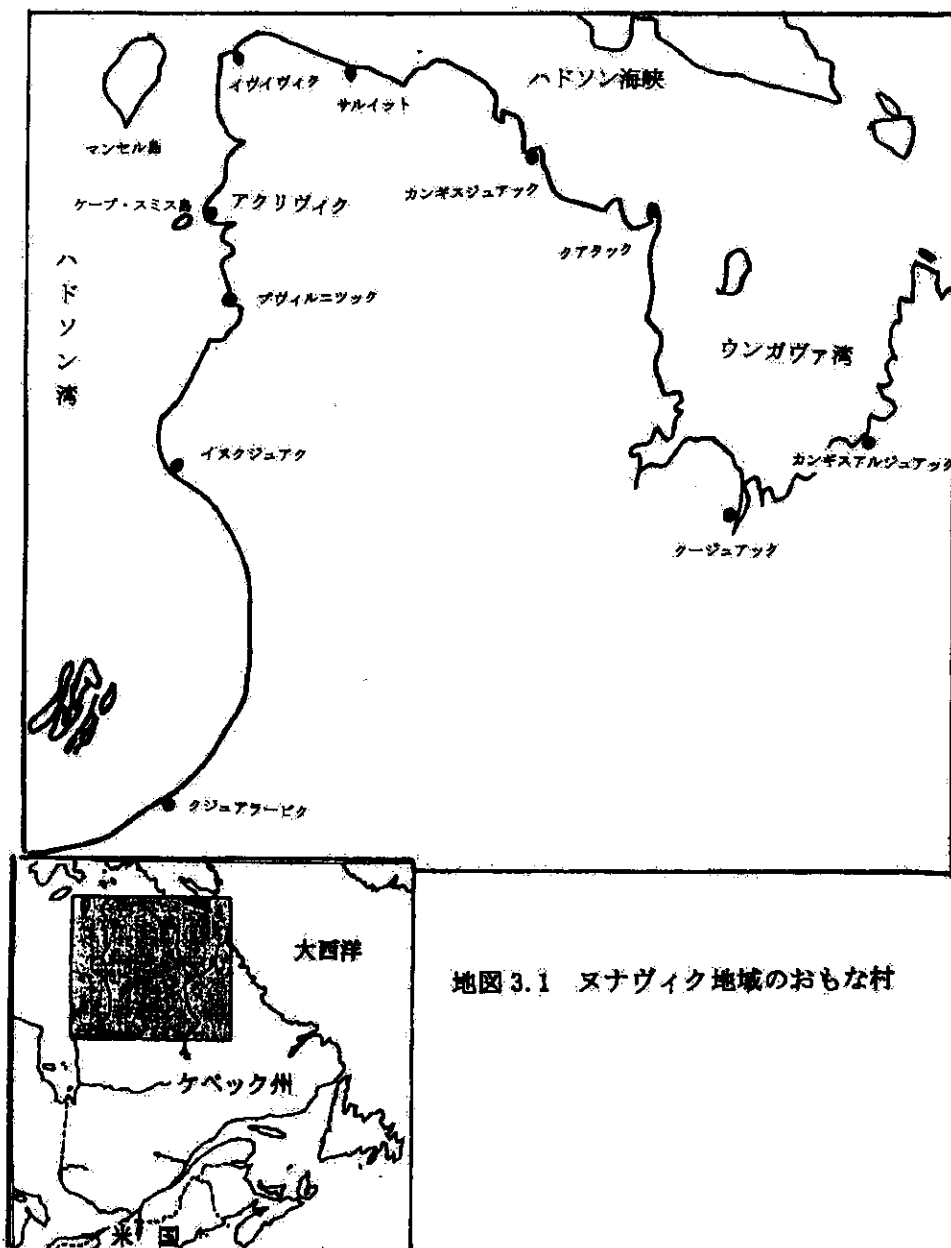
コリニョンは、ホルマン地域のコパー・イヌイットの土地利用パターンの変化を(1)狩猟期(～1920年代ないしは1930年代まで)、(2)ワナ猟期I(1920,30年代から1950,60年代まで)、(3)ワナ猟期II・定住村落期I(1950,60年代から1970年代後半まで)、(4)現代期・定住村落期II(1970年代後半以降)という4時期区分を提案している。狩猟期は、冬季には海氷上で、夏季は沿岸・内陸でというように季節的な移動を行っていた時期であったが、ワナ猟期Iになると、より良好なワナ猟場を求めて移動を行った時期であった。1950年代頃からイヌイットは定住村落に生活の拠点を移し、そこから狩猟やキャンプに行き、またそこに戻るといったパターンを始めた。これがワナ猟期II・定住村落期Iの開始である。この時期は1970年代後半まで続き、1970年代後半以降は現代期・定住村落期IIに移行する(Collignon 1993)。コリニョンによると、イヌイットによる土地の利用パターンは20世紀の間に4度変化してきたが、土地利用の原理は1970年代後半まで基本的に同じであったという。ところが1970年代後半にはスノーモービルが普及し、また雇用機会が村内で増加したために、若者がツンドラの大地や海氷上で生活することが少なくなり、土地との関係の中からアイデンティティーが構築されることがなくなってきたという(Collignon 1993: 71, 84)(注2)。この枠組みは、本論文が取り扱うケベック州ヌナヴィク地域のアクリヴィク村のイヌイットにも該当すると考える。

現在のアクリヴィク村のイヌイットの祖先が毛皮交易に本格的にかかわり始めたのは1920年前後である。この前後が、(1)狩猟期(～1920年代ないしは1930年代まで)と(2)ワナ猟期Iへの移行期に相当する。そして彼らがプヴィルニツク地域へと移動し、定住化した時から現在のアクリヴィク村をつくり出すまでの時期が、ワナ猟期II・定住村落期I(1950,60年代から1970年代後半まで)に相当し、1975年のランド・クレームの政治協定の締結後にアクリヴィク村で生活を始めて以降が現代期・定住村落期IIに相当する。

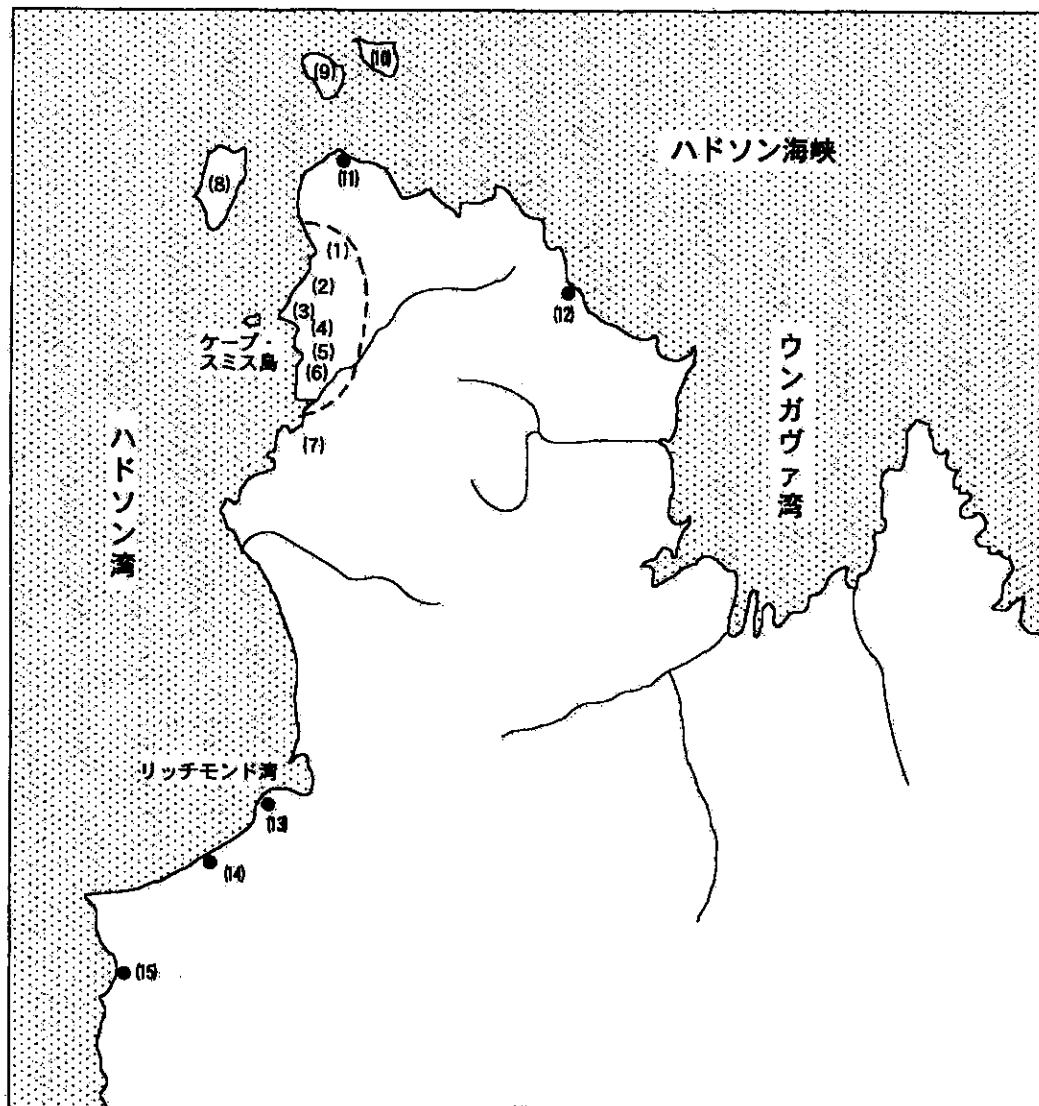
## 第1節 自然環境

### 第1項 ケープ・スミス島地域の自然環境

現在のアクリヴィク村は、ケベック州北西部のハドソン湾に面した所に位置している。その位置は北緯 60 度 48 分、西経 78 度 8 分であり、ハドソン湾上に浮かぶケープ・スミス島から約 3.2 キロメートル離れた所にある（地図 3.1）。現在のアクリヴィク村の古老やその祖先は、1922 年頃から 1955 年頃にかけて北はクーヴィク (Kuuvik 35F-12 013) から南はマニーツイット (Maniittuit 35C-05 007) までの地域をおもな生活領域としてきた。本論文では、この領域をケープ・スミス島地域と呼ぶことにしたい(地図 3.2)。



地図 3.1 ヌナヴィク地域のおもな村



地図 3. 2 ケープ・スミス島地域

(ケープ・スミス島地域とは、地図 3.2 上に点線で囲んだ陸地の地域をさす。)

- |                                   |                                         |
|-----------------------------------|-----------------------------------------|
| (1)クーヴィック地域 Kuuvik                | (9)ノッティンガム島 Nottingham Island (Tutjaat) |
| (2)イヤイツイット(イヤイツク)地域 Ijaittuit     | (10)サルズベリー島 Salisbury Island (Akulliq)  |
| (3)ウーガルシウヴィク地域 Ugarsiuvik         | (11)ケープ・ホルステンホルム Cape Wolstenholme      |
| (4)クーガック=ヒングアック地域 Kuuraq=Qinguaq  | (12)カンギスジュアック Kangisujuaq               |
| (5)ニアフングーク地域 Neaunnguuk           | (13)リトル・ホエール・リバー Little Whale River     |
| (6)マニーツイット地域 Maniittuit           | (14)グレート・ホエール・リバー Great Whale River     |
| (7)クーガールク地域 Kuugaaluk             | (15)フォート・ジョージ Fort George               |
| (8)マンセル島 Mansel Island (Pujjunaq) |                                         |

## (1) 陸棲哺乳動物

| 和名       | イヌイット名      | 学術名                             |
|----------|-------------|---------------------------------|
| カリブー     | tuttuq      | <i>Rangifer arcticus caboti</i> |
| ホッキョクキツネ | tiriganniaq | <i>Alopex lagopus</i>           |
| アカキツネ    | triganniaq  | <i>Vulpes fulva</i>             |
| ホッキョクウサギ | ukaliq      | <i>Lepus arcticus</i>           |
| ホッキョククマ  | nanuq       | <i>Thalactos maririmus</i>      |

## (2) 海棲哺乳動物

| 和名       | イヌイット名    | 学術名                          |
|----------|-----------|------------------------------|
| ワモンアザラシ  | natsiq    | <i>Phoca hispida</i>         |
| アゴヒゲアザラシ | ujjuq     | <i>Erignathus barbatus</i>   |
| タテゴトアザラシ | qairulik  | <i>Phoca groenlandica</i>    |
| ハンモンアザラシ | qasigiaq  | <i>Phoca vitulina</i>        |
| セイウチ     | aiviq     | <i>Odobenus rosmarus</i>     |
| シロイルカ    | qilalugaq | <i>Delphinapterus leucas</i> |

## (3) 鳥類

| 和名     | イヌイット名                     | 学術名                                     |
|--------|----------------------------|-----------------------------------------|
| ライチョウ  | aiggiq                     | <i>Lagopus lagopus</i>                  |
| ハクガン   | kanguq                     | <i>Chen hyperborea</i>                  |
| カナダガン  | nirliq                     | <i>Branta canadensis</i>                |
| クロガン   | nirlinaq                   | <i>Branta bernicla</i>                  |
| ウミバト   | pitsiulaaq                 | <i>Cephus grylle</i>                    |
| ケワダガモ  | mitiq                      | <i>Somateria mollissima</i>             |
| カモメ    | naujaq                     | <i>Larus argentatus and hyperboreus</i> |
| ウミガラス  | appaq                      | <i>Uria lomvia</i>                      |
| ユキホオジロ | qupanuaq                   | <i>Plectrophenax nivalis</i>            |
| ワタリガラス | tulugaq                    | <i>Corvus corax</i>                     |
| シロフクロウ | *uppiialuk                 | <i>Nyctea nyctea</i>                    |
| アビ     | tuulliq, kalluliq, qaqsuaq | <i>Gavia</i>                            |

## (4) 魚貝類

| 和名                              | イヌイット名                  | 学術名                               |
|---------------------------------|-------------------------|-----------------------------------|
| コクチマス                           | kavisilik               | <i>Coregonus clupeiformis</i>     |
| 赤色のマス                           | ivitaaruq               | <i>Cristivomer and Salvelinus</i> |
| 斑点のあるマス                         | nutilliq                | <i>Cristivomer and Salvelinus</i> |
| 灰色のマス                           | isiuralittaaq           | <i>Cristivomer and Salvelinus</i> |
| ホッキョクイワナ                        | iqaluk                  | <i>Salvelinus alpinus</i>         |
| タラ                              | uugaq                   | <i>Boreogades saida</i>           |
| カジカ                             | kanajuaq                | <i>Oncocottus hexacornis</i>      |
| ムール貝(二枚貝)                       | uviluq                  |                                   |
| ハマグリ                            | ammuumajuq              |                                   |
| 陣笠貝                             | kauttungajaq            |                                   |
| イワナ(lake trout or salmon trout) | isuuraq                 | <i>Salvelinus namaycush</i>       |
| 陸封性ホッキョクイワナ                     | nutiliarjuk/tisujuittuq | <i>Salvelinus alpinus</i>         |

表 3.1 アクリヴィク村周辺の動物とその名称

ケープ・スミス島地域は、高木が一切生育しない寒冷ツンドラ地帯である。ただし、同地域はアークティック・サークルよりも南に位置するので、真冬であっても太陽が昇らない日や真夏であっても太陽が沈まない日は存在しない。

この地域の年間平均気温は、零下 7.5 度である。ケープ・スミス島地域にある湖や河川は 10 月頃から、そして沿岸海域は 11 月中旬頃から凍結を始める。しかしながら、ケープ・スミス島近くの海流は流れが速いために、真冬であっても結氷しない海域（ポリニア）が現在のアクリヴィク村から 3、4 キロメートル離れた所に存在し、冬でもアザラシが回遊している。ケープ・スミス島地域の雪は、9 月頃から降り始め、積もった氷雪は 4 月末から 5 月にかけて急速に解け始める。

通常、11 月頃から翌年の 5、6 月頃まで海氷や陸上に氷雪があるため、犬ゾリやスノーモービルを利用することができる。一方、6 月から 11 月頃まではカヤック (*qajaq*: 木枠とアザラシ皮を利用した小型のボート) やキャンバス製カヌーを水上交通手段として利用できる。

## 第 2 項 ケープ・スミス島地域の動植物相

ここでは、ケープ・スミス島地域の動植物相について概略する(表 3.1 参照)。この地域の動植物の数種は、イヌイットの食料や、道具や衣類の材料として利用された。

### (1) 陸獣

ケープ・スミス島地域の陸上部には、ホッキョクギツネ(*tiriganniaq*)、カリブー(*tuttuq*)、ホッキョクウサギ(*ukaliq*)、ホッキョクグマ(*nanuq*)などが生息している。

1920 年代にはケープ・スミス島地域の東西に延びるケープ・スミス山脈の南北の斜面、そしてクーヴィクからマニーツイットにかけての沿岸地域においてホッキョクギツネが 1920 年代には多数生息していた。

クーヴィク地域はリーフ・リバー群(Leaf River Herd)のカリブーの出産場所として知られている。そして 1920 年代には、クーヴィク地域とニアフングーク地域(Niaqunnguuk, 35C-12 016)が、カリブーのよい狩猟場であった(Low 1902: 71)。イヌイットは夏から秋にかけてこれらの地域でカリブーを狩猟したという。

ホッキョクウサギは、ウーガルシウヴィック地域(Ugarsiuvik, 35D-16 013)に多数生息し、秋と冬に狩猟された。また、かつてケープ・スミス島やオタワ島(Arviliit)には、多数のホッキョクグマが生息していた。

### (2) 海獣

ケープ・スミス島地域の周辺海域には、ワモンアザラシ(*natsiq*)、アゴヒゲアザラシ(*ujjuq*)、タテゴトアザラシ(*qairulik*)、シロイルカ(*qilalugaq*)、セイウチ(*aiviq*)などの海棲哺乳類が生息している。

ワモンアザラシは、冬には海氷上に多数の呼吸穴を形成し、海氷下や凍結しない海水域に生息している。春になると海氷縁部の氷上で日光浴をする。夏には、沿岸部を回遊して



いる。アゴヒゲアザラシはワモンアザラシよりも大型であるが、その習性は互いに似通っている(Nelson 1969: 229)。これら2種のアザラシはケープ・スミス島地域には一年中、豊富に生息しているが、イヌイトによると海流が早い所に、より多数生息しているという。

タテゴトアザラシはきわめて臆病な性格のために、沿岸部から離れた海域を回遊しており、捕獲するのが難しい。さらにタテゴトアザラシは、ワモンアザラシやアゴヒゲアザラシと比べるとはるかに重量があり、かつ泳ぐのが速い。

シロイルカは群れをなし、季節的に長距離を移動、回遊する小型鯨類である。毎年、6月から9月下旬にかけて多数の群れがケープ・スミス島地域の沿岸を通過していく。シロイルカは、かつて同地域にある河川の河口や浅瀬で捕獲されることが多かった。特に、1930年代にはクーガック地域(Kuuraq)を流れるクーガック川の河口付近、ニアフングーク湾のソーヘッド川(Sorehead River)の河口、ケープ・スミス島のベーズ湾(Babs Bay)の一部、現在のアクリヴィク村とケープ・スミス島間の海域がおもな狩猟場であった。

セイウチは大型の海獣である。成獣オスの平均体重は約815キログラム、成獣メスのそれは約550キログラムである(Mansfield 1968: 385)。そして夏になると、諸島部や沿岸部に集まり、群れを形成する習性を持つ(Mansfield 1968: 385)。セイウチは、ハドソン海峡にあるノッティンガム島(Tutjaat)、イヴィヴィク村の北方海上にあるサルスベリー島(Akulliq)、イヴィヴィク村の西方海上にあるマンセル島(Pujjunaq)、プヴィルニツク村の西方海上にあるオタワ島(Arvillit)、イヌクジュアク村の南西海上にあるスリーパー島(Qumiutait)などに集まる。

### (3)鳥類と卵

ケープ・スミス島地域には、イヌイトの食料や、道具や衣類を作るための素材となる鳥類や卵が存在している。おもな鳥は、ハクガン(*qanuq*)、カナダガン(*nirliivk*)、ケワダガモ(*mittik*)、ウミバト(*pitsiaulak*)、アビ(*qaqsauq*)、ライチョウ(*aqiggiq*)、ワタリガラス(*tulugaq*)、シロフクロウ(*uppiq/ukpik*)などである。

ハクガンとカナダガンは、渡り鳥である。毎年、5月頃から10月頃にかけてケープ・スミス島地域に飛来し、滞在する。通常、カナダガンはハクガンより一足早く飛来し始める。そのほかの鳥は一年を通して、ケープ・スミス島地域に生息している。そして6月の終わりから7月上旬にかけて、沿岸やその近くの小さな諸島でケワダガモ、ウミバト、アビは産卵する。

### (4)魚類・海藻類

ケープ・スミス島地域の沿岸海域や河川、湖には、多種類の魚類が生息している。おもな魚類は、ホッキョクイワナ(*iqaluk*)、レーク・トラウト(*isiuralitaak*)、タラ(*uugaq*)、ホワイト・フィッシュ(*kavisilik*)、オオカミウオ(*kanajuq*)、陸封性ホッキョクイワナ(*nutalik*)などである。ケープ・スミス島地域の特徴のひとつは、1年を通してこれらの魚類が豊富

に生息していることである。

ホッキョクイワナは、毎年6月頃になると内陸部の湖から川を下り、海に出る。6月頃から9月頃まで沿岸海域にとどまり、9月頃から河川を遡上し、翌年の6月頃まで内陸部の湖で過ごす。ホッキョクイワナは、特にアクリヴィク、クーヴィク、イヤイツイト・カンギルスンガット(Ijaittuit Kangirsungat, 35F-04 019)、クーガック(Kuuraq 35C-12 011)、ニアフングーク(Neaqunnguuk 35C-12 016)に豊富に生息している。

ケープ・スミス島地域の沿岸部、特にケープ・スミス島周辺の沿岸にはタラとオオカミウオが多数、生息している。レーク・トラウト、ホワイト・フィッシュ、陸封性ホッキョクイワナは、アクリヴィク、クーヴィク、イヤイツイト・カンギルスンガット、クーガック、ニアフングークの周辺の内陸部のほぼすべての湖に生息している。

また、アクリヴィク周辺の沿岸には、二枚貝、昆布、ウニ、ヒトデが生息しており、イヌイットの食料となっている。

#### (5)植物

ケープ・スミス島地域は、ほかの極北地域と同様に植生が非常に乏しい。地衣類、サニオニア・ウンシナータのようなコケ類、ホッキョクヤナギ、スゲ、クローベリーやブルーベリーなど数種類のベリー類、ホッキョクユキノシタのような顕花植物が存在するのみである(注3)。コケ類は燃料に、シダ類はベッドの下敷きに、ベリー類は食料として利用されてきた。

#### 第3項 自然環境の変化(1920年代から2000年)

1920年代から2000年頃にかけての間にケープ・スミス島地域の自然環境が変化したという明確な証拠は存在していないが、現在のアクリヴィク村の古老たちや既存の資料を総合すると次のような変化が認められる。

第1の変化は、カリブーの総数である。20世紀初頭には、ケープ・スミス島地域には多数のカリブーが生息していたことが記録されている(Low 1902: 71)。原因は不明であるが、カリブーは1920年代にこの地域から姿を消し始め、1930年代の半ばにはほとんどいなくなった(HBC Record, Cape Smith B398/a/8 1934/1935; B398/a/10 1938/1939など)。しかし1970年代の半ばに再び同地域に戻ってきたことが知られている。

第2の変化は、ワモンアザラシとアゴヒゲアザラシの総数に関するものである。1920年代から1930年代にケープ・スミス島地域で子供時代を過ごした古老(1986年当時存命)によると、当時同地域には一年中、多数のアザラシが見られたという。しかし、その数は1955年頃までに減少したという。1922年から1955年頃にかけて、同地域で生活を営んでいたイヌイットが何度か飢餓に見まわれた(例えば、1932年から1933年にかけての冬、HBC Record, Cape Smith B398/a/6 1932/1933)ところを見ると、この地域のアザラシの数にかなりの変動があったことが認められる。それが、同地域のイヌイットがブヴィルニツックに

移住していた1955年から1975年までの期間にその数は再度、増加したという。そして1980年代以降は年々その数が減り、アクリヴィク村のイヌイトたちの狩猟場も次第に村から遠のいているという。

第3の変化は、シロイルカの総数の変化である。ケープ・スミス島地域には1940年代末までは、相対的に多数のシロイルカが回遊していたが、それ以降は年々、数が減少してきたという。

第4の変化は、1990年代から顕著に認められるようになった気候の温暖化および異常気象の頻発である。年によって差はあるが、夏が早く来て、冬が遅く来るという傾向が見られる。また、一方で非常に寒い夏や極端に寒い冬、暖かい冬などが観察されている。

## 第2節 ケープ・スミス島地域の歴史：毛皮交易期とそれ以前

### 第1項 1922年以前のケープ・スミス島地域の歴史

紀元10世紀以前からケープ・スミス島地域を含むケベック州の極北地域には、ドーセット文化(Dorset Culture)やプレ・ドーセット文化(Pre-Dorset Culture、紀元前1700~800年)の担い手が住んでいたことが知られている(Badgley 1981)。ドーセット文化の担い手は、1000年頃までに現在のイヌイト文化の直接の祖先であるチューレ文化(Thule Culture)の担い手に取って代わられた(Badgley 1981)。

ケープ・スミス島やその周辺の沿岸部にはそうした文化の盛衰を物語るいくつかの遺跡が残っている。しかしながら考古学的な調査がこの地域ではほとんど実施されておらず、遺跡の人口や島の利用や占有の状況に関してもほとんど解明されていない。ケープ・スミス島には、ドーセット文化とチューレ文化が混ざり合った遺跡が存在し、その遺跡からは複数の銚頭(チューレ・タイプとドーセット・タイプ)やアイス・ピック(チューレ・タイプ)、石刃(ドーセット・タイプ)、ナイフの柄、木製の栓、装飾品など多数の遺物が出土している(Manning 1951)。ケープ・スミス島にあるいくつかのチューレ文化の遺跡は西暦1500年頃には使用されていたことが判明しているが、どの時期から利用されてきたかについては明確にはなっていない。

歴史的には、探検家H.ハドソン(Hudson)が1610年頃に、そして探検家J.フォックス(Foxe)が1931年にケープ・スミス島の近くを通過したことが知られている。ケープ・スミス島は、ヨーロッパ人には「サー・トーマス・スミス・フォーランド」("Sir Thomas Smith Forland")や「C・スミス」("C. Smith")、「キャップ・スミス」("Cap Smith")、「キャップ・ドゥ・フォゲロン」("Cap du Forgeron")という名称で知られていた(Fraser 1968: 257)。それは、商人でありかつ北西航路を発見するための探検家からなる組織の総帥でもあったトーマス・スミス卿にちなんだもので、1750年にはすでに「ケープ・スミス」("Cape Smith")と呼ばれるようになっていた(Fraser 1968: 257)。

ハドソン湾会社(Hudson's Bay Company、略称はHBC)の記録を見ると、18世紀後半以前には、ケープ・スミス島のイヌイトについての記述はほとんど出てこない。しかしな

がら、1786年にケープ・スミス島の南部においてイヌイットの集団と探検家の集団の間で交易が行われたことが記録に残っている(Morantz 1982: 7)。

1840年3月には、ケープ・スミス島周辺には25から30余りのイヌイットの家族がいたこと、そしてその夏にはその地域の何人かのイヌイットがホエール・リバー(Whale River)やフォート・ジョージ(Fort George)を訪れたことなどが記録に残っている(Morantz 1982: 10-11)。この記録からわかることは、ケープ・スミス島地域のイヌイットは1840年頃にはすでにハドソン湾会社との毛皮交易にかかわっていたという事実である。ちなみにフォート・ジョージには1837年に(Frances and Morantz 1983: 122)、リトル・ホエール・リバー(Little Whale River)には1851年に、グレート・ホエール・リバー(Great Whale River)には1856年に、交易所が開設された。

ケベック州極北地域のイヌイットは、毛皮交易にかかわり始めた前後の時期には、キタミュート(Qikirtamiut)、イティヴィミュート(Itivimiut)、タカミュート(Taqamiut)、ウンガヴァミュート(Ungavamiut)、シルキツニミュート(Sirqinirmiut)、ウクツミュート(Uqumiut)の6つのグループに大別することができた(Graburn 1969: 34)。その中でケープ・スミス島周辺のイヌイットは、イティヴィミュートに属する。

バリクシの調査によれば、イティヴィミュートの一年は次のようなものであった(Balikci 1964: 88)。イティヴィミュートのキャンプ地はクーヴィク湾、ケープ・スミス島、プヴィルニツク湾、クーガールク川の入り江であった。冬は海氷上に雪の家を作り住居とし、呼吸穴に呼吸にくるアザラシを銚で捕獲した。冬のおもな食料はアザラシの肉と、秋に捕獲し保存しておいたカリブーの肉であった。春になるとキャンプを沿岸に移した。そこでは雪の家に代わり、アザラシ皮製のテントを住居とした。ケープ・スミス島地域、ケープ・アンダーソン地域、リーフ湾沿岸が春のキャンプ地であった。この時期には、氷上で日光浴をしているアザラシが捕獲された。また、弓矢を利用したカリブー猟も沿岸の近くで行われた。そして海から氷塊がなくなると、カヤックを使った沿岸海域でのアザラシ猟やシロイルカ猟が実施された。また、初夏には鳥が大量に捕獲された。晩夏には、カリブー猟が行われた。初秋になると、川に石を積み上げて作った築を利用してホッキョクイワナを捕獲したり、レーク・トラウトを釣ったりした。海が凍り、確固とした海氷が形成されると、海氷上へと移動した。

ところが19世紀半ばにハドソン湾南東部のグレート・ホエール・リバー(クジュアラピク)とウンガヴァ湾南部のフォート・チャイモ(クージュアック)に交易所が開設されたことによって、冬になるとこれらのふたつの交易所をヌナヴィク地域のイヌイットが犬ゾリで訪れるようになった。そのために、ヌナヴィクのイヌイットの一年の生活パターンに変化が見られるようになった。イティヴィミュートも例外ではなかった。イヌイットはホッキョクギツネやカリブーの毛皮を交易者に渡し、その見返りとしてタバコ、糖蜜、紅茶、ビスケット、金物類、鉄製ワナ具、先込め銃などを入手した(Balikci 1964: 89)。ヌナヴィク地域のイヌイットの多くは、1月頃になると家族全員で交易所を訪れ、6月に狩猟地

に帰るようになった(Low 1902: 19-20)。また、交易所が開設されると、キリスト教の宣教師たちが布教のために入ってきた。1852年にはフォート・ジョージに、1859年(もしくは1882年)にはリトル・ホエール・リバーに、1882年にはグレート・ホエール・リバーに、1899年にはフォート・チャイモにイギリス国教会派の宣教師が入り、つぎつぎと伝道所が設立された(Marsh 1964) (表 3.2)。

| 地名            | HBC 交易所の開設年 | 伝道所の開設年           |
|---------------|-------------|-------------------|
| フォート・ジョージ     | 1837 年      | 1852 年            |
| リトル・ホエール・リバー  | 1851 年      | 1859 年もしくは 1882 年 |
| グレート・ホエール・リバー | 1856 年      | 1882 年            |
| フォート・チャイモ     | 1867 年      | 1899 年            |

表 3.2 ヌナヴィク地域における HBC 交易所とイギリス国教会派伝道所の設立地と設立年  
出典: Morantz (n.d.), Frances and Morantz (1983: 122), Marsh (1964)をもとに作成

当初、宣教師は交易所を訪れてきたイヌイットのみを改宗させようと試みたが、1880 年頃からはキャンプ地にイヌイットを訪ねるようになった(Marsh 1964: 492)。1880 年代の末頃からは、イヌイットのキャンプ・リーダーやウミアック(大型の毛皮製舟)の所有者が問答教授者(catechists)の役割を果たすようになり、イヌイットの間にキリスト教が浸透していった。これらの問答教授者は、彼らと同じキャンプの住人にミサと説教を実施した。さらに、1880 年代の後半には訓練を受けたイヌイットの問答教授者が、イヌイット語に翻訳され、シラビックス(音節文字)で表記された新約聖書を携えてヌナヴィク地域各地に派遣された(Balikei 1964: 100; Saladin d'Anglure 1984a: 503)。そしてイヌイット語の新約聖書が、通常、宣教師が接触できないイヌイットの多くに配布された(Marsh 1964: 428)。このような過程を経て、ヌナヴィク地域のほぼすべてのイヌイットはイギリス国教会派の信者となったのである(注 4)。

## 第 2 項 毛皮交易の開始以降

ヌナヴィク地域においてホッキョクギツネの毛皮を対象とした交易が本格化したのは、現在のイヴィヴィク村の近くケープ・ウォルステンホルム(Cape Wolstenholme)にハドソン湾会社の交易所が開設された 1909 年以降のことである。また、フランス系の毛皮交易社であるレヴィヨン・フレール(Révilion Frères)がウンガヴァ湾に交易所を設立した。この結果、ヌナヴィク地域のイヌイットは、狩猟地の近くで毛皮の交易を行うことができるようになり、毛皮交易はイヌイットが市場経済と密接に接合される契機となった。

すでに指摘したが、20 世紀初頭以前からイヌイットがケープ・スミス島地域を利用していたことが知られている(HBC Record Wolstenholme Post B368/a/3; Manning 1951;

Morantz 1982)。しかしながら 1984 年から 1986 年にかけて調査したアクリヴィク村のイヌイットの家系によれば、20 世紀初頭以前に同地域で活動をしていたイヌイットは、1920 年代から狩猟・漁撈やワナ猟をしながらケープ・スミス島のハドソン湾会社交易所で毛皮交易に従事してきた現在のイヌイットの直接的な祖先ではない。現在のアクリヴィク村のイヌイットの祖先は、毛皮交易のためにヌナヴィク地域のほかの場所からケース・スミス島地域に移住してきたのであった。

20 世紀にケープ・スミス島地域に移住してきたイヌイットは、北方から来たグループと南方から来たグループのふたつであった。北方から来たグループ(以下、北方グループと呼ぶ)は、もともとはウンガヴァ湾のカングックスジュアック(Kangiqusujuaq、英名 Wakeham Bay)地域で生活をしていた人々であった。北方グループは、サルイット、ウォルステンホルム、マンセル島、クーヴィクの各地域を経由した後に、ケープ・スミス島の北東方向に位置するイヤイツイット(Ijaittuit)を彼らの生活領域とするようになった。南から来たグループ(以下、南方グループと呼ぶ)は、もともとはプヴィルニツク(Puvirnituk)からイヌクジュアック(Inukjuak)にかけての地域で生活していた人々であった。南方グループは、ケープ・スミス島とその南東方向に位置するマニーツイット(Maniittuit)との間を生活領域とするようになった。これらのグループがケープ・スミス島地域にやってきた理由は、冬季のアザラシ猟に適した狩猟場とホッキョクギツネのよいワナ猟場を探し求めた結果であった。このふたつのグループは 1910 年代からケープ・スミス島の近くにハドソン湾会社の出張交易所が開設される 1922 年まで、ウォルステンホルムとグレート・ホエール・リバーのふたつの交易所で毛皮の取引を行っていた。

1922 年にケープ・スミス島の近く現在のアクリヴィク村付近に、ハドソン湾会社ウォルステンホルム交易所の出張所が開設された。この出張所はホッキョクギツネのワナ猟が行われている期間にのみ開設される一時的な交易所であったが、1926 年に船による搬出の利便性を理由にケープ・スミス島に移転され、さらにそれは正規のケープ・スミス交易所として開設された。そして 1951 年に閉鎖されるまで十分に機能したのである。この地域に移住してきたイヌイットはケープ・スミス交易所に個人の取引口座を持ち、ホッキョクギツネやワモンアザラシの毛皮をさかんに交易した。彼らは、ケープ・スミス島地域をおもな生活領域とし、この交易所との交易活動に従事したことによって、自ら「ケープ・スミス・イヌイット」("Cape Smith Inuit", イヌイット名「キツキルタユアミュート」"Qikirtajuarmiut")と名乗り、ほかからもそのように呼ばれるようになった。

このケープ・スミス・イヌイットの人口は、カナダ古文書館に所蔵されているカナダ連邦政府の記録によると、1927 年頃には約 60 人であったが、1948 年頃には 130 人から 140 人くらいに増加している。人口の変化は、次の表 3.3 にまとめた通りである。

| 年号              | 人口                 | 政府文書の出典                                              |
|-----------------|--------------------|------------------------------------------------------|
| 1927 年          | イヌイット 60 人         | RG85, Vol.64, File164-1, Pt.1.<br>1915-1941 (Census) |
| 1932 年 8 月 1 日  | イヌイット 72 人、白人 2 人  | RG85, Vol.835, File7415                              |
| 1934 年 7 月 30 日 | イヌイット 94 人         | RG85, Acc84-85/554 Box2.                             |
| 1940 年          | イヌイット 121 人、白人 3 人 | RG85, Vol.75, File201-1[16]                          |
| 1942 年          | イヌイット 110 人、25 家族  | RG85, Vol.98, File252-1-2,<br>Pt.1. 1943-47.         |
| 1943 年          | イヌイット 110 人、25 家族  | RG85, Vol.98, File252-1-2,<br>Pt.1. 1943-47.         |
| 1944 年          | イヌイット 123 人、25 家族  | RG85, Vol.98, File252-1-2,<br>Pt.1. 1943-47.         |
| 1945 年          | イヌイット 122 人、24 家族  | RG85, Vol.98, File252-1-2,<br>Pt.1. 1943-47.         |
| (参考)1945 年      | イヌイット 126 人、白人 2 人 | RG85, Vol.1002, File 16480.                          |
| 1946 年          | イヌイット 111 人、21 家族  | RG85, Vol.98, File252-1-2,<br>Pt.1. 1943-47.         |
| 1947 年          | イヌイット 126 人、白人 2 人 | RG85, Vol.1002, File16480.                           |
| 1948 年          | イヌイット 143 人        | RG85, Vol.1130, File253-1,<br>Vol.2 File7644.        |
| (参考)1948 年      | イヌイット 125 人余り      | RG85, Vol.1130, File254-1,<br>Vol.1-A 1947-50.       |
| 1951 年 6 月 30 日 | イヌイット 128 人、24 家族  | RG85, Vol.1127, File201-1-8,<br>Vol.2-1              |

表 3.3 1922 年から 1951 年にかけてのケーブ・スミス・イヌイットの人口の変化

#### (1)1920 年代から 1950 年代にかけての毛皮交易

カナダの極北地域においてハドソン湾会社は、イヌイットからおもにホッキョクギツネの毛皮を獲得しようと試みた。このイヌイットとの交易のために、ハドソン湾会社は特別な交易の制度を作り上げた。イヌイットはひとりひとりワナ猟師として各交易所に登録され、各個人の口座が開設された。交易所の支配人は、各ワナ猟師の前年の実績を吟味し、その査定に基づいて、ワナ猟期が始まる前に必要な鉄製ワナ具や食料やその他の物資を

イヌイットが購入できるように信用貸しを行った。イヌイットはワナ猟に必要な物資をそろえると、11月頃から翌年4月頃まで各自の狩猟・ワナ猟地に出かける。イヌイットは海氷上に冬キャンプを形成し、アザラシの呼吸穴猟によって食料を入手しながら、冬キャンプから内陸地域までホッキョクギツネのワナ猟に犬ゾリで何度か行っていた。この期間に、イヌイットは何度か交易所に捕獲したホッキョクギツネやワモンアザラシの毛皮を持ち込み、借金を返済するとともに必要な物資を追加購入する。このようにしてワナ猟が終わる頃にはイヌイットはすべての借金を返済することが期待されていた。

各交易所は、ハドソン湾会社本社から派遣された支配人の差配のもと、独立して経営されていた。交易所の支配人は、2,3人のイギリス人・英系カナダ人とイヌイットの助手とともに一年中、交易所に滞在し、イヌイットを相手に毛皮の取引を行った。東部極北地域の交易所には、ハドソン湾会社が所有する貨物船「ナスコピ号」(“S.S. Nascopie”)によって一年に1度、夏か初秋に必要な物資が運ばれてきた。そのときに、イヌイットから購入した毛皮が本社へと持ち帰られた。

20世紀の前半には、多くのヨーロッパの国々がこぞってホッキョクギツネの毛皮を欲しがったために需要が高かった。このため1910年代から1920年代にかけてハドソン湾会社とレヴィヨン・フレール社は競って、イヌイットから少しでも多くの毛皮を入手しようと、交易に有利と思われる場所に交易所を多数開設した(表3.4)。

| 地名            | レヴィヨン・フレール社の交易所の設置年 | ハドソン湾会社の交易所の設置年 |
|---------------|---------------------|-----------------|
| フォート・ジョージ     | 1903年               | 1937年           |
| イヌクジュアク       | 1909年               | 1920年           |
| ウエイカム・ベイ      | 1910年               | 1921年           |
| ブヴィルニツック      | 1921年               | 1921年(出張所)      |
| グレート・ホエール・リバー | 1921年               | 1856年           |
| リチモンド・ガルフ     | 1922年               | 1921年           |
| ケープ・ウォルステンホルム | .....               | 1909年           |
| デセプション・ベイ     | .....               | 1925年           |
| サルイット         | .....               | 1929年           |
| ケープ・スミス       | .....               | 1922年(出張所)      |

表3.4 レヴィヨン・フレール社とハドソン湾会社の交易所の場所と設立年

出典：(Saladin d'Anglure 1984a: 501-502)、(Frances and Morantz 1983: 122, 126)より作成

レヴィヨン・フレール社とハドソン湾会社は、イヌイットからホッキョクギツネの毛皮を



1 枚でも多く入手しようと熾烈な競争を繰り返した。この競合は、1926 年に両者の間で交易に関する協定が取り結ばれた結果、収束した(Morantz n.d.: 122)。さらにハドソン湾会社は 1936 年までにレヴィヨン・フレール社を吸収合併してしまった。

ヌナヴィク地域のイヌイットの生活にこの毛皮交易は大きな影響を及ぼした。ケープ・スミス島地域のイヌイットは、1922 年から 1951 年までホッキョクギツネの毛皮をもっぱらケープ・スミス交易所で取引した。そこでは 1920 年代にはホッキョクギツネの毛皮 1 枚の価格は 39 カナダ・ドルであり、イヌイットにとってホッキョクギツネのワナ猟がもっとも重要な経済活動になった。しかしながら 1929 年 10 月に始まったアメリカの大恐慌のあおりを受けて、1930 年代にはホッキョクギツネとワモンアザラシの毛皮の価格は、それぞれ 1 枚当たり 12 カナダ・ドルと 2 カナダ・ドルへと暴落した(Saladin d'Anglure 1984a: 502)。この変化は、生活に必要な物資の購入を毛皮交易に依存していたイヌイットに経済問題を引き起こした。なお、1938 年から 1947 年までのホッキョクギツネの毛皮 1 枚の価格（イヌイットからの購入価格）は表 3.5 に示す通りである。

| 年         | ホッキョクギツネの毛皮 1 枚の平均価格 |
|-----------|----------------------|
| 1938 - 39 | CA\$ 11.12           |
| 1939 - 40 | CA\$ 13.50           |
| 1940 - 41 | CA\$ 17.50           |
| 1941 - 42 | CA\$ 18.27           |
| 1942 - 43 | CA\$ 30.00           |
| 1943 - 44 | CA\$ 43.20           |
| 1944 - 45 | CA\$ 35.53           |
| 1945 - 46 | CA\$ 27.50           |
| 1946 - 47 | CA\$ 13.28           |

表 3.5 1938 年から 1947 年にかけてのホッキョクギツネの毛皮 1 枚の平均価格

出典：(Public Archives Canada, RG85 Vol.1130 File 253-1, vol.2, Bureau of Northwest Territories and Yukon Affairs 1948)より作成

1951 年のカナダ連邦政府による統計資料（表 3.6）によると、「ケープ・スミス・イヌイット」(24 家族)の現金収入の 29 パーセントは毛皮交易によるものである一方、55 パーセント以上はカナダ連邦政府が支給する各種の生活補助金であることがわかる。カナダ連邦政府の補助金がイヌイットに支給され始めたのは 1940 年代の後半であるから、毛皮交易が振るわなかった 1930 年代から 1940 年代にかけて、ケープ・スミス・イヌイットは生活に必要な物資の入手に苦勞していたことがうかがえる。

| 収入の種類        | 金額                 |
|--------------|--------------------|
| 家族補助金        | CA\$ 5,035 (35.1%) |
| カナダ連邦政府の救済援助 | CA\$ 2,931 (20.3%) |
| 老齢年金         | CA\$ 96 (0.67%)    |
| 毛皮など         | CA\$ 4,202 (29.0%) |
| 賃金労働         | CA\$ 450 (5.1%)    |
| 交易者          | CA\$ 1,458 (10.2%) |
| 支払われなかった負債   | CA\$ 111 (0.7%)    |
| 合計金額         | CA\$14,265 (100%)  |

表 3.6 1951 年におけるケープ・スミス・イヌイットの収入内訳

出典：(Public Archives Canada, RG85, Vol. 1127, File 201-1-8, Vol.2-1 Report on Eastern Arctic Patrol (1951). Sources of Eskimo Income for year ended June 30, 1951, Cape Smith)

## (2)1920 年代から 1950 年代にかけてのカナダ連邦政府の活動

現在のヌナヴィク地域にあたるケベック州極北地域は本来、カナダ連邦政府の管轄下であり、「ウンガヴァ区域」(the Ungava District)と呼ばれていた。1912 年からその管轄はカナダ連邦政府からケベック州政府へと委譲された。しかしながらケベック州政府は、イヌイットに対し法的かつ社会的な責務を果たすことはしなかった。1939 年にはカナダの最高裁判所の判決により、イヌイットは法律上インディアンとみなされるようになり、カナダ連邦政府の管轄下におかれることになった。このためケベック州政府は、同州極北地域に住むイヌイットの問題を 1960 年代までカナダ連邦政府に任せたままであった(Hamelin 1979: 165)。

1960 年代までのカナダ連邦政府のケベック州極北地域での活動は、(1)軍事的活動(クジューアラービクにレーダー基地の設置)、(2)イヌイットが飢餓状態に陥った場合の食料などの救援活動、(3)年 1 度の医療検診およびパトロールの巡回活動であった。カナダ連邦政府の先住民に対する方針は、カナダ化(カナダ主流社会への同化)であった(Hamelin 1979: 174)。

1920 年代に入ると、カナダ連邦政府はケベック州極北地域に年に 1 度、パトロール船を派遣するようになった(Mackinnon 1991)(注 5)。このパトロール船は、ケベック州北部を含む東部極北地域のイヌイットに警察、社会福祉、保健のサービスを提供することを目的としていた。

すでに述べたが、1930 年代までにケープ・スミス島地域を含むケベック州の極北地域からカリブーが姿を消していた。カリブー皮は冬用の衣類に不可欠の素材であり、カリブーの肉はイヌイットの重要な食料のひとつであった。当時、ケープ・スミス島地域のイヌイットは、ハドソン湾会社の交易所で、西部極北地域から輸送されてきたカリブー皮を購入

していた。この状況を察知したカナダ連邦政府は、バッフアローの生皮と肉をアルバータ州のウエインライト公園のバッフアロー・リザーヴからチャーチルを経由して、パトロール船でケベック州極北地域へ配布することを計画し、実行に移した(Public Archives Canada, RG85, Vol.849, File 7819 Daily Report of the Eastern Arctic Patrol, 1933, by A. P. Norton)。カナダ連邦政府の資料によると、バッフアローの生皮と肉は、ケープ・スミス島地域のイヌイットに1933年、1934年、1935年、1936年および1944年に配布された記録が残っている。また、イヌイットの家族が困窮状態にあることが判明すると、カナダ連邦政府による救援のための小切手がハドソン湾会社交易所の支配人を通して、その家族に配達された(例えば、Public Archives Canada, RG86, 907, File 10561(1939))。

1945年に第2次世界大戦が終結し、かつ老齢年金がイヌイットに支給されるようになると、イヌイット家族の現金収入が増加した(Jenness 1964)。1951年の時点で、カナダ連邦政府が支給する各種の生活補助金や福祉金がケープ・スミス島地域のイヌイットの現金収入の約55パーセントにも達していることがわかっている(表3.6)。

1920年代から1950年頃まで一年に1度、パトロール船に同乗した医者が、ハドソン湾会社のすべての交易所を訪れ、イヌイットを検診するようになった。医者の報告書によれば、1930年代のケープ・スミス島地域のイヌイットの健康状態はきわめて良好であったという(Public Archives Canada, vol.849, File 7819. Minutes of a meeting of the Canadian government party on board the R.M.S. Nascopie, 31, July 1934 --- F. Gilbert)。ところが、ケベック州極北地域では1940年代に突如、結核が蔓延し、1940年代の後半になるとカナダ連邦政府は重症の結核患者をカナダ南部の病院に搬送し、収容し始めた。

1955年の夏には、ハドソン湾東岸の各地でエックス線検査がカナダ連邦政府の医療団によって実施された。この結果、ケープ・スミス島地域においてもイヌイット130人のうち50人がカナダ連邦政府の手によってカナダ南部の病院へと送られた。

また、カナダ連邦政府の出先機関として、2人のヨーロッパ系カナダ人の警察官がイヌクジュアクに常駐し、毎年、冬になると犬ゾリを利用してハドソン湾東岸沿いにあるイヌイットのキャンプを訪ねて回った。彼らは治安を守るとともに、カナダの法律を執行させる役目を担っていた。

カリブーがいなくなったこと、時折発生した飢餓、結核の蔓延などのために、ケベック州極北地域のイヌイットは経済や医療の面において徐々にカナダ連邦政府に依存するようになっていった。

### (3)1920年代から1950年代にかけてのキリスト教

ケベック州極北地域においては毛皮取引に携わり始めてから、1950年頃までにほぼすべてのイヌイットがキリスト教へと改宗した。特に1930年代には、シャーマニズムからキリスト教への改宗が見られた(Vallee 1967: 6; Saladin d'Anglure 1984a: 503)。イギリス国教会派のハーバート師(Rev. Herbert)は、1927年にイヌクジュアクに伝道所を開設し、1930

年代には毎年冬になるとサルイットまで伝道の旅をし、途中にあるキャンプを訪ねて回った。ケープ・スミス島地域のイヌイットの冬キャンプを訪れ、洗礼を施した(HBC record, Cape Smith Post B398/a/, 1931/1932)。

ケープ・スミス島地域のイヌイットの中でもマーク・クマク(Mark Qumak)やサイモン・カウナルク(Qaunnauluk)は、1920年代以前に交易に訪れたグレート・ホエール・リバーでいち早く洗礼を受けた。そのほかの多くのイヌイットは、宣教師が1930年代に毎年冬にキャンプを訪れた時に洗礼を受けたという。ある古老は、キャンプでの宗教的な活動について次のように述べている。

「私たちがケープ・スミス島にいた時に、老人も含めて多くの人が洗礼を受けた。クジュアラープクに行くこともできない人たちも同様に洗礼を受けた。」(Qaqutuk 1985 Avataq Interview)

「秋の間でさえ、祈祷やミサが每晚、ひとつのテントで執り行われた。キャンプの全員がそれらに参加した。マーク・クマクやカウナルクがまだ生きていた頃は、彼らが説教をした。」(Qaqutuk 1985 Avataq Interview)

ここに出てくるマーク・クマクやカウナルクは、ケープ・スミス島地域の北方グループのリーダーであった。キャンプ集団では、政治・経済的な権力と宗教的な権力が合体していた。

### 第3節 定住化と新村形成：プヴィルニツク村在住時代(1950年代～1970年代)

ケープ・スミス島地域のイヌイットは、1950年代半ばに約97キロメートル南にあるプヴィルニツクへ移住し、そこに1970年代半ばまでとどまり、その後、ケープ・スミス島地域に再帰し、現在のアクリヴィク村を形成した歴史を有する。ここでは、彼らのプヴィルニツクへの移住とそこでの定住生活や社会変化について概略する。

#### 第1項 プヴィルニツクへの移住

ケープ・スミス島にあったハドソン湾会社の交易所は1951年に閉鎖され、翌年、現在のプヴィルニツク村から南に約32キロメートル離れた所にあるプヴィルニツク川の河口に移転された(Anonymous 1952: 12)。そしてそれは、1921年からプヴィルニツクにあった交易出張所と合併し、正規の交易所となった。ケープ・スミス島地域のイヌイットは、1952年から1955年頃まで同地域にとどまり、生活に必要な物資や食料を購入したい時にのみプヴィルニツク交易所を訪れていた。

すでに述べたが、1955年の夏に実施されたX線検査の結果、ケープ・スミス島地域のイヌイット130人のうち約50人が結核治療のために、カナダ連邦政府によってカナダ南部の病院へと連れて行かれた。残ったイヌイットは、それらの人々の帰りを待つために、プヴィルニツク周辺にとどまることにした。また、1955年には、食料不足で多数の犬が餓死

したために、犬ゾリチームを編成することができず、冬になってもホッキョクギツネのワナ猟に行くことができなかった(Balikci 1958 fieldnotes; Public Archives Canada RG85, Vol. 1269, File 1000/304 vol.3 Royal Canadian Mounted Police Conditions Amongst Eskimos Generally E9 District, Port Harrison, P.Q. June 11<sup>th</sup>, 1958)。

1956年には、異なる地域からやってきた7ないし8つのキャンプ集団が、プヴィルニツク川の河口あたりに住み始めた。ケープ・スミス島地域から来たイヌイットの人たちは、最初はパシウルヴィク(Passiurvik 34N-12 042)、その後にニアリタリク(Nialittalik 35C-03-014)をキャンプ地とした。クーガールク(Kuugaaluk)地域からきたイヌイットは、プヴィルニツク湾の対岸にキャンプを形成した。それ以外の2, 3のキャンプ集団は現在のプヴィルニツク村のあたりにキャンプ地を定めた。その後、これらのキャンプ集団は、徐々にプヴィルニツク交易所の周りに集まり、ひとつの集落を形成し始めた。この集落形成は、カナダ連邦政府が計画したものではなく、イヌイットが自発的に形成したのであった。当時、この地域を担当している警官(RCMP)は、理由なくプヴィルニツクの人口が増加している現象に危惧を表明している(Public Archives Canada RG85, Vol. 1269, File 1000/304 vol.3 Royal Canadian Mounted Police Conditions Amongst Eskimos Generally E9 District, Port Harrison, P.Q. June 11<sup>th</sup>, 1956)。

プヴィルニツクはイヌイットの集落として成長を遂げていく。その人口は、1931年に150人、1941年には181人、そして1951年に171人であったものが、1961年には429人、1969年には586人、1974年には775人へと増加した(Saladin d'Angulure 1984a: 506; Larochelet et al. 1975: 45)。

ケープ・スミス島地域のイヌイットは、結核治療のために南に連れて行かれた家族を待たため、そして新しいハドソン湾会社の交易所と取引をするためというふたつの理由で、プヴィルニツクにとどまっていたのであり、いずれはケープ・スミス島地域に帰る予定でいた。しかし、後に述べるように、彼らは1955年頃から20年近くも、プヴィルニツクに住むことになる。

## 第2項 プヴィルニツク村の形成

1950年代の半ばからハドソン湾会社プヴィルニツク交易所の交易人は、イヌイットに滑石彫刻品の制作を奨励し始めた(注6)。この結果、滑石彫刻品の制作は、ホッキョクギツネのワナ猟よりもイヌイットにとって現金収入源となる重要な経済活動となった。プヴィルニツクでの滑石彫刻品の総販売額は、1952-53年には740カナダ・ドルであったものが、1955-56年には38,000カナダ・ドルへと急激に増加した(Balikci 1968: 167)。そしてプヴィルニツクは滑石彫刻の村として有名になった。

当時、7ないし8のキャンプ集団がプヴィルニツク交易所の周辺に住み始めていたが、ハドソン湾会社の交易人は交易所にキャンプ集団ごとの口座を作らせた。キャンプ集団のメンバーが稼いだ金の一部は、それぞれのキャンプ集団の口座に貯金された。そしてこの

ように貯蓄された現金で、各キャンプ集団は共用のボートやエンジンを購入することができた(Balikci 1968: 168)。1958年頃からイヌイットは船外機付きカヌーを購入し、カヤックを使用しなくなった。

一方、1956年には、フランス人のカトリック派の神父ステインマン師がプヴィルニツクに伝道所を開設し、布教活動を開始した。1958年にはこのステインマン神父のアドバイスと補助のもと、プヴィルニツクのイヌイットはプヴィルニツク彫刻家協会(Povungnituk Sculptors' Association)を結成した。

1960年にケベック州では自由党(Liberal Party)が政権に就いたが、自由党政権はケベック州北方地域における天然資源の開発と主権の確立に強い関心を示した。同年、カナダ連邦政府の指導によりプヴィルニツクに村議会が設立されたが、イヌイットはその機能を十分に理解できなかった。特にケープ・スミス島地域から移住してきたイヌイットは、プヴィルニツクの村議会にまったく関心を示さず、代表を送り込まなかった。1960年には、プヴィルニツク彫刻家協会が生活協同組合(以下、生協と略称)になった。

1962年の夏には、イギリスからイギリス国教会派の宣教師がプヴィルニツクに来て、布教活動を開始した(Vallee 1967)。1962年頃からイヌイットはマッチ箱型の家屋をカナダ連邦政府から購入したり、自らの手で建て始めた。この頃から彼らはより定住的な生活を開始したといってもよい。

1963年には、ケベック州政府天然資源省の中に北方省(Direction Generale du Nouveau Québec, D.G.N.Q. 以下、ケベック州北方省と呼ぶ)が創設され、ケベック州の影響力が増大し始めた。ケベック州極北地域においては1960年代を通して、カナダ連邦政府とケベック州による行政はしばしば競合した(Hamelin 1979: Chapter 6)。

1960年代半ばになると、イヌイットはスノーモービル(Ski-Doosと呼ばれている)を購入し始め、次第に犬ゾリを利用しなくなった。1964年の末にはケープ・スミス島地域のイヌイットは集落の中にある家屋で生活をしていていたが、8家族だけは村から約1.6キロメートル離れたネリタリク(Nellitalik)という所に、冬は雪の家、夏はテントを立てて生活していた。この8家族は生協や信用組合の活動に対し、頑強に反対の態度をとり続けていた(Public Archives Canada RG85, Vol.1934, File a-251-7, Pt.2.1963-1964 Extract from Povungnituk Report for July to September 1965 File A-205-4/305)。

1966年までにプヴィルニツクには、村議会、イギリス国教会の教区委員会、イギリス国教会婦人会、生協組織、信用組合(the Caisse Populaireの支店)が存在し、村としての体裁を整えるようになった。異なるキャンプ集団の間に見られた境界も徐々に解消し、キャンプ集団のメンバーが集住区を形成するのではない、新しい居住パターンが出現した(Vallee 1967: 5)。ケベック州政府は生協を利用してこの村を、イヌイットのモデル村にしようと考えた(Vallee 1967: 11)。

プヴィルニツクでは村レベルでの新しい政治・社会的な統合が見られ始めたが、そこに住むケープ・スミス島地域出身のイヌイットたちはそれまでの彼ら自身の社会的な連帯性

を維持し、村にとけ込もうとは意図的にしなかった。彼らは生協の活動や村議会の活動に積極的に参加することではなく、同村に住むほかのイヌイトとの政治・社会的な距離を保ち続けていた (Vallee 1967: 35)。

1966年にはケープ・スミス島地域から来たイヌイトの再移住計画がプヴィルニツク村のイヌイトの間で検討されたが、この再移住計画は実施されなかった。これはカナダ連邦政府が資金的に生活を保障しない限り、ケープ・スミス島地域から来たイヌイトはケープ・スミス地域に帰ることを望まなかったからであった (Public Archives Canada RG85, Vol. 1962, File A-1006-8, Pt.1. 1964-1966 Quebec Province, Memo for the Regional Administrator re' Report on Povungnituk: July-September 1966 from J.D. Furneaux d.12 October 1966)。

1967年にプヴィルニツク生協は、ほかの4つの生協とともに極北ケベック生協連合 (la Fédération des Coopératives du Nouveau-Québec, FCNQ) を結成した。1971年の春にケベック州首相ブラッサ (Bourassa) が、ジェームズ湾地域における巨大な水力発電開発プロジェクトを発表し、着工した。当初、ケベック州のクリーやイヌイトはこの計画に反対し、工事を中止するようにケベック州を相手に訴訟を起こした。先住民側は勝訴したものの、すでに進行中の工事を中止に追い込むことはできなかった。ケベック州政府は、この事件を契機としてクリーとイヌイトと、先住民諸権益請求問題について話し合うことになった。イヌイトは北ケベック・イヌイト協会 (Northern Quebec Inuit Association) を組織し、クリーの代表とともに、ケベック州政府とカナダ連邦政府と政治的な話し合いを始めた。この一連の事件は、プヴィルニツク村の中で、そしてケベック州極北地域の村々の間で、その賛否をめぐって政治的な争いを引き起こした。

プヴィルニツク村では、先住権に関する協定の締結に賛成のケープ・スミス島地域出身のイヌイトとその協定の締結に反対するそれ以外のイヌイトの間の政治的な争いが表面化した。後者は、サルイット村 (の約半数) とイヴィヴィク村のイヌイトと政治団体イヌイト・ツングヴィンガット・ヌナミニ (Inuit Tungavingat Nunamini, ITN) を結成した。こうした流れの中で、ケープ・スミス島地域出身のイヌイトたちはついに、ケープ・スミス島地域に再移住することを決めた。1973年には、サイモン・アリホ (Simon Aliqu) の家族がケープ・スミス島地域に再移住し、現在のアクリヴィク村の近くに家屋を建築した。1974年には4家族が再移住し、家屋を建てた。ただし当時、ケープ・スミス島地域出身のイヌイトの大半は、治療中や建てるべき家屋の資材がないなどの理由から、なおもプヴィルニツク村で生活を営んでいた。

プヴィルニツク村のケープ・スミス島地域出身のイヌイトたちは、プヴィルニツクの村議会や生協に満足せず、彼ら自身の村議会と生協をプヴィルニツク村において設立することを決めた。そして1975年1月に村議会が結成された (Larochelle et al 1975: 27)。また、彼らは極北ケベック生協連合の助けを借りて、プヴィルニツク村の中に彼ら自身の生協を設立した。

こうして、ケープ・スミス島地域に再移住して新しい村を築く土台を作った後、彼らは1975年11月11日に「ジェームズ湾および北ケベック協定」に調印した。そして1976年によくアクリヴィク村を正式に創出したのだった。

### 第3項 プヴィルニツク村における宣教師、ハドソン湾会社、生協運動(1950年代-1975年)

ここでは1950年代から1970年代半ばにかけてのプヴィルニツク村における宣教師、ハドソン湾会社、生協の諸活動について記述する。

すでに述べたが、ハドソン湾会社プヴィルニツク交易所の支配人は、取引相手のイヌイットにキャンプ集団ごとの口座を開設することを提言した。この提言にしたがって、各キャンプ集団は口座を開設し、キャンプ集団ごとに選ばれたリーダーが口座の貯蓄金に責任を持つことになった。1958年7月30日現在、9つのキャンプ集団口座が存在した(Balikci 1958 fieldnotes)。各キャンプ集団のメンバーは、収入の一部を集団口座に入れる。集団のリーダーは、その口座を利用して、共用のガソリン、銃弾、ワナ猟に携帯する食料、船外機、ボートなどを購入した。例えば、あるリーダーは1956年にこの集団口座を利用して、彼の所有するピーター・ヘッド・ボートのエンジンを購入した(Balikci 1958 fieldnotes)。

1950年代初めにはハドソン湾会社交易所の支配人やカナダ連邦政府の役人はイヌイットに滑石彫刻品の制作と、その作品をハドソン湾会社やカナダ連邦政府北方省を通して販売することを奨励した。1940年代以降、特に第2次世界大戦の影響でホッキョクギツネの毛皮の価格が暴落したことに加え、1960年代から交易品となったアザラシの毛皮の価格が不安定であったために、プヴィルニツク村において滑石彫刻の制作・販売はイヌイットの重要な現金収入源となった(Balikci 1968: 167; Vallee 1967; Hughes 1965: 20)。この経済活動によって、個人の経済的自立および若者と老人の経済的な自立が促進された(Vallee 1967: 51)。こうしてイヌイットはかつての生活領域で集約的なワナ猟を行う必要がなくなり、長期間、交易所の周りにとどまることができるようになった(Balikci 1968: 167)。そしてイヌイットは以前にもまして、より大きな国民経済に巻き込まれ、依存するようになった。しかし彼らは狩猟・漁撈・ワナ猟生活を放棄したわけではなかった。滑石彫刻品の制作・販売によって得た現金収入でスノーモービル、船外機付きカヌーなどの狩猟装備を購入し、プヴィルニツク村から遠く離れた以前からの地域で狩猟・漁撈・ワナ猟を続けた。

こうした生活様式を生み出した滑石彫刻品の制作・販売という新たな経済活動を支えたのは生協という存在であった。1950年代の終わりにカトリック派の神父ステインマン師の助言に従い、イヌイットは彫刻家協会を設立させ、制作した滑石彫刻品を、カトリック派伝道団を通してカナダ南部で売った(Balikci 1968: 169)。この協会は1960年にイヌイットの手によって生協となり、5年間のうちにプヴィルニツク村の多機能組織となった。その機能とは、(1)滑石彫刻品を買い取り、市場に出荷すること、(2)毛皮を買い取り、カナダ南部でのオークションへ集荷すること、(3)版画工房の提供、(4)裁縫センターの提供、(5)地元



で消費するために魚や獲物を購入すること、(6)生協の観光プログラムの提供、(7)小売店機能の提供、であった(Vallee 1967: 21)。

このプヴィルニツク生協はケベック州政府、北ケベック生協連合、ケセ・ポプレレ・デジャルダン銀行(the Caisse Populaire Desjardins)からさまざまな支援を受けた。極北ケベック生協連合は、プヴィルニツク村の産物をカナダ南部の市場で出荷・販売することを担当し、ケセ・ポプレレ・デジャルダン銀行は生協の会計処理と信用組合の設立・運営を助けた。ケベック州政府は、生協の総合小売店化を支持し、その存続を保証した(Vallee 1967: 26)。ケベック州政府がプヴィルニツク生協を強力に支援した背景には、政治的な理由があった。ケベック・ナショナリズムの高揚とともに、ケベック州政府は、英系カナダの極北における経済的なシンボルであるハドソン湾会社の役割を最小化させようと試みたのであった(Dorais 1979: 73)。1964年頃には、プヴィルニツク村の生協とハドソン湾会社交易所は、食料品や雑貨日用品の販売、そして滑石彫刻と毛皮の購入の分野において競合するほどまでになった。

生協はかつてのキャンプ集団を横切る組織であったために、プヴィルニツク村におけるもっとも重要な経済・政治的な組織となったが、1960年代を通して村のすべてのイヌイトから支持されたわけではなかった。プヴィルニツク村に住むケーブ・スミス島地域出身のイヌイトは、生協活動に積極的に参加することも、支援することもなかった。ケーブ・スミス島地域出身のイヌイトが生協活動に参加しなかった理由は、宗教的なものであった。先述のステインマン神父はカトリック派と生協との関係を否定したが、彼は生協や信用組合の活動のあらゆる局面において重要な役割を果たしていた。ケーブ・スミス島地域出身のイヌイトはイギリス国教会派に属し、ほかの地域出身のイヌイトに比べ、カトリック派に強く反発していた(Vallee 1967: 36)。そしてイギリス国教会派の牧師やケーブ・スミス島地域出身のイヌイトは、生協組織はイギリス国教会派のイヌイトをカトリック派へ転向させる手段であると強く信じ込んでいた(Public Archives Canada RG85, Vol. 1934, File A-251-7, Pt.2 1963-1964 Extract from Povungnituk Report for July to September 1963. File A-205-4/305)。ケーブ・スミス島地域出身のイヌイトは、生協活動を支持すると子供たちがカトリック派になるのではないかと心配していた(Vallee 1967: 37)。しかもケーブ・スミス島地域出身のイヌイトは、1922年から1950年代にかけてもっぱらハドソン湾会社だけを相手に毛皮の取引を行ってきた人々である。プヴィルニツク村では生協はハドソン湾会社の競合相手であったため、彼らの古老やリーダーたちは仲間に生協や信用組合を支持するべきではないと忠告を繰り返していたという。この結果、ケーブ・スミス島地域出身のイヌイトは、制作した滑石彫刻品を生協に売ることにはあまりなかった(Vallee 1967: 33)。年を経るごとに、ケーブ・スミス島地域出身のイヌイトの生協に対する誤解は徐々に解消されていったが、彼らの生協や村議会への自発的な参加にはつながらなかった。生協活動をめぐるケーブ・スミス島地域出身のイヌイトの態度と行動は、プヴィルニツク村の中での彼らとそれ以外のイヌイトとの恒常的な争いの原

因となり、かつ彼らの間の集団的な対立を 1970 年代に至るまで維持させるという結果を生み出した。

ブヴィルニツク村の生協の発展は、同村の経済発展に重要な役割を果たした一方で、その活動の展開は、ふたつの相反する社会政治的なプロセスを生み出したといえる。第 1 のプロセスは、かつてのキャンプ集団の境界が消え、ひとつのコミュニティーへと再統合されてきたことである。第 2 のプロセスは、そうした再統合にもかかわらず同村に住むケープ・スミス島地域出身のイヌイトとそれ以外のイヌイトとの間の境界を顕在化させたことであつた。

#### 第 4 項 ブヴィルニツク村におけるカナダ連邦政府とケベック政府(1960 年代-1975 年)

ブヴィルニツク村におけるイヌイト間の対立には、前項で見た彼らをめぐる宗教・経済活動のみならず、国家的な政治の動きが大きな影を落としていた。1960 年に自由党がケベック州の政権をとると、「我が家の主」(“Mastres chez nous”)をスローガンにし、ケベック州極北地域にも関心を示し、1962 年にはカナダ連邦政府から同地域の政治的責任を引き継ぐことを決定した(Vallee 1967: 8)。1963 年にケベック州北方省が設立されると、まずカンギックスジュアク村、ブヴィルニツク村、イヌクジュアク村へ役人を派遣し、その後すべてのイヌイトの村に役人を派遣し、出先機関を設置した。このため、カナダ連邦政府がケベック州極北地域の行政から手を引く 1970 年まで、同地域にはカナダ連邦政府とケベック州政府の役人が常駐し、政治的な覇権や住民をめぐって競合関係にあった(Saladin d'Anglure 1984b: 685)。

ブヴィルニツク村では同様な行政サービスがふたつの政府によって提供されたために、ふたつの政府の役人間に緊張関係や反感が見られた(Vallee 1967: 9-10)。この行政の対立的な分割は、1960 年代中、ブヴィルニツク村におけるイヌイトの対立に影響を及ぼした。同村の 3 分の 2 のイヌイトは、ケベック州政府が強力に支援する生協のメンバーであつた。一方、3 分の 1 の村民、すなわちケープ・スミス島地域出身のイヌイトは、イギリス国教会派との関係やハドソン湾会社との毛皮の取引を最重要視していた。彼らは、政治・経済的な力や宗教的な力は、カナダ連邦政府、ハドソン湾会社、イギリス国教会派にあるものと信じていた(Vallee 1967: 36; Dorais 1979: 74)。さらに彼らは、ブヴィルニツク生協はカトリック派やケベック州政府と仲間であると信じていた(Vallee 1967: 37)。生協運動の展開のみならず、カナダ連邦政府とケベック州政府との政治的な対立関係が、ブヴィルニツク村におけるイヌイトの関係、すなわちケープ・スミス島地域出身のイヌイトとそれ以外のイヌイトとの間の社会・政治的な対立関係や境界を維持、持続させる大きな要因となつたのである。

1970 年にカナダ連邦政府が行政責任をケベック州政府に委譲すると、ふたつの政府間の対立は解消した。ところが 1971 年春に、ケベック州首相のロベール・ブラッサ(Robert

Bourassa)がケベック州北部のジェームズ湾地域に水力発電開発のために巨大なダム網を建設すると発表した。この事件は、ケベック州極北地域の政治的な状況を大きく変化させた。つまりダム建設をめぐり、先住民対ケベック州政府・カナダ連邦政府というこれまでとは違った構図の政治紛争が発生したのである。さらに、このダム建設計画とそれに伴う先住民諸権益請求問題(land claims)は、ケベック州極北地域のイヌイットを政治的に分割させることとなった。プヴィルニツク村では、先住民諸権益請求問題の処理を支持するケープ・スミス島地域出身のイヌイットとそれに反対するそれ以外のイヌイットとの間で政治的な対立があらためて顕在化したのである。

#### 第5項 プヴィルニツク村における定住化と人口集中(1950年代-1975年)

1950年代半ばまでケベック州極北地域に住むイヌイットは定住することではなく、季節的な移動生活を送っていた。しかしながら1950年代後半になると、交易所の周りに集住し始めた。この背景には、イヌイットをそこに引き付けるいわゆるプル要因とプッシュ要因が存在した。プル要因とは、よりよい住宅条件および、医療や教会、交易、福祉サービスへのアクセスが容易であることである。一方、プッシュ要因とは生活領域における病気や飢餓の発生など不安定要素であった(Paine 1977: 13; Hughes 1965: 15)。また、カナダ連邦政府も行政および社会サービスの効率を上げるために、イヌイットが定住生活を送ることをよいことであると考え、計画するようになった。

1960年代半ばまでには、クーヴィクからクーガールクまでの地域で生活を営んでいたイヌイットの大半が、プヴィルニツクの交易所の近くに木製の家屋を建造して定住し、遠方にあるかつての生活領域で過ごすことは一年に数度しかなくなった。この定住村への人口の集中は、大地の利用パターン、居住パターン、社会関係などイヌイットの間にいくつかの変化を生み出した。

第1に、プヴィルニツクへ人口が集中した結果、プヴィルニツク近辺の動植物資源だけでは総人口の適切な食料供給をまかなえなくなった(Larochelle et al. 1975: 45)。特にプヴィルニツク周辺には良好な冬場のアザラシ猟場が存在していなかったため、イヌイットは食料獲得のためにかつての生活領域まで狩猟や漁撈に出かけなければならなかった。そしてプヴィルニツクから同心円を描くように近くから動植物資源は減少していった。この結果、1960年代にはカナダ南部から搬入されてきた食料品に依存するようになった。特にケープ・スミス島地域出身のイヌイットは十分な食料を獲得できず、いつも空腹であったという。そのためプヴィルニツク村に住んでいた期間、彼らは食料を獲得するために、クーヴィクからマニトウイットに至るかつての狩猟・漁撈場に行き、利用し続けた。これらの遠隔地での狩猟や漁撈に従事するためには、スノーモービルや船外機付きカヌーなどのよりよい交通手段や資材、食料品を必要とした。

第2に、イヌイットがプヴィルニツクにおいて定住したことによって、居住パターンに変化が見られた。移動生活を送っていた時代には、キャンプ集団構成を規定する要因は、

狩猟・漁撈活動に共に従事することや親族関係であった。すなわち、狩猟・漁撈を共に行う人々が、親族関係を中心に集まり、キャンプ集団を形成していた(岸上 1990)。しかし、プヴィルニツクには、複数のかつてのキャンプ集団が共住するようになった。村の中に家屋を新たに配分する場合には、プヴィルニツク村議会の責任のもと、プヴィルニツク住宅委員会が人々の需要と新しい家屋の建築状況に基づいて住宅を住民に割り当て始めた。この結果、村の中で親族同士や狩猟・漁撈仲間が隣同士に住むとは限らなくなった。言い換えれば、村の中ではかつてのキャンプ集団は居住の単位としては存在しなくなった(Larochelle et al. 1975: 9-10)。ケーブ・スミス島地域出身のイヌイットも、プヴィルニツク村の中で新しい住宅に入居できる時には場所を選ばずに入居していった。この結果、1970年までに彼らはほかのイヌイットの人たちの間に分散して住居を構えることになり、もはや村の中に彼らの集住区は形成されなくなった。

第3に、1950年代後半以降、集住によって、プヴィルニツク村には、親族関係のいかんを問わず、多数のイヌイットが住み始めた。このため、社会関係はより複雑で重層的になった。つまり、それまで親族関係が基盤であった社会に、友人関係や隣人関係といった新たな社会関係が加わることになった。1960年代末から1970年代の初めには、友人同士が狩猟集団を形成するなど、狩猟集団は親族関係からのみで組織されとは限らなくなった。また、異なる地域で生活を営んでいたキャンプ集団が集住するようになったために、異なる方言や文化的な慣習が共存するようになった。

#### 第6項 プヴィルニツク村における初等教育の開始(1950年代-1975年)

1940年代末までケベック州極北地域には教会が運営する寄宿舎学校しか存在していなかった。フォート・ジョージには、イギリス国教会派とカトリック派のそれぞれが運営する寄宿舎学校が、オンタリオ州のムース・ファクトリー(Moose Factory)にはイギリス国教会が運営する寄宿舎学校があった(Clemens 1984: 58)。

1940年代の末になると、カナダ連邦政府はケベック州極北地域のすべての村にカナダ連邦政府の学校を開校し始めた。1949年に開校したクージュアックを皮切りに、イヌクジュアックには1950年に、クジュアラープクには1956年に、サルイットには1957年に、プヴィルニツクには1958年に、そしてイヴィヴィク、カンギックスジュアック、クアタック、カンギルスクには1960年に、カンギクスアルジュアックには1962年に、キリニックには1964年にカナダ連邦政府が運営する小学校が開校された。中学校に関しては、1972年までクジュアラープクを例外としてまったく開校されていなかったため、中学校に進学する子供たちはマニトバ州のチャーチルか、オンタリオ州のオタワか、ケベック州極北地域のクジュアラープクかのいずれかに行かなければならなかった。そこで1972年まで極北地域の子供の多くは、チャーチルの中学校に進学していた。

カナダ連邦政府の北方省教育部(the Education Division of the Department of Indian Affairs and Northern Development)は、1950年代から1970年代の初頭にかけてケベック

州極北地域における教育の責任を担っていた。その目的は、(1)幼稚園、小学校、中学校のすべての児童に教育プログラムと施設を提供すること、(2)関心のある者すべてに職業訓練を提供すること、(3)成人教育を実施すること、(4)高校以上に進学する学生に経済的な援助を行うことであった(Canada, Dept. of Indian Affairs and Northern Development 1965-66: 6)。

実際、極北地域における小学校でのカリキュラムはカナダ南部の小学校のものと同じであり、算数、作文、読書、歴史、地理、美術、音楽などからなっていた。教育システムの中でもっとも重要なことは、英語を教えることであった(Clemens 1984: 84)。カナダ連邦政府が運営する学校教育の特徴は、すべての科目を英語で教えることと、教材が極北地域のイヌイットの生活と関係していないことであった。そのためイヌイットの子供が大半の科目にほとんど関心を持つことができなかったり、生活に即してほとんど理解できない内容であった(Iglauer 1979: 201)。教育はオタワにいる行政官によってコントロールされ、正規の学校教育を通してイヌイットを欧米系のカナダ人に同化させるために英語と欧米的な価値観が教えられた。また、学期中は、たとえ狩猟・漁撈キャンプの季節であっても学童は村にとどまらなければならなかった。

ところが、第4項で述べたように1960年代初頭にケベック・ナショナリズムが高揚したことが、ケベック州極北地域の学校教育にも影響を及ぼした。ケベック州政府は、ケベック州極北地域における政治のみならず、文化的な支配権をも獲得しようと企てた。そしてケベック州政府は1964年に独自の教育制度を作り、ケベック州北方省の管轄のもとで各村に州立の学校を開校した。そして1970年からは北ケベック教育委員会へと管轄が委譲された。

ケベック州政府は、イヌイットの教育において言語と教員の2点に関してカナダ連邦政府とは異なる方法を採用した(Dorais 1979: 73; Clement 1984: 61)。第1に、幼稚園1年と小学校の1・2年の計3年間については通訳の助けを借りてイヌイット語で授業を行うことを提案した。そして小学校3年生になるとフランス語を教えるべきであると提案した。第2に、イヌイットの教育にはイヌイット自身が教えることが望ましいと考え、イヌイットの教員を養成するための教育プログラムを提供した。

つまり、1960年代の半ばから1970年代の半ばにかけて、ケベック州極北地域の村には国立の学校と州立の学校が共に存在していたことになる。州政府と連邦政府との政治的な闘争が教育面にも反映していたのである。文化の継承や保全という点からすれば、州の教育制度が国のそれよりも優れていたが、在籍学生数では州立学校の方が国立学校よりも少なかった。1971-1972年のブヴィルニツック村の場合、国立の小学校には143人(73パーセント)が、州立の小学校には53人(27パーセント)が在籍していた(Craig 1973: 231-232)。この背景には、いくつかの理由があった。ケベック州のイヌイットの大半が、政治・経済力はイギリス系の人々が握っていると考えていたこと、フランス語を話す政府が極北地域に突然出現したことにイヌイットが用心したこと、英語で教育を受けているほかの地域の

イヌイトとの関係が切れることを恐れたことなどが指摘できる。

#### 第7項 プヴィルニツク村における新しい技術の採用(1950年代-1975年)

1950年代の終わりにプヴィルニツク村のイヌイトは船外機付きのカヌーを、1960年代の半ばにはスノーモービルを手に入れ、利用し始めた。その背景には滑石彫刻品の制作・販売によってイヌイトの人々の現金収入が増大したことがあるが、これらの新技術の導入は、伝統的な社会関係や狩猟・漁撈・ワナ猟活動に影響を及ぼした。

第1に、新技術の利用によって、狩猟活動がより個人的な活動となった。その結果、世帯を構成する核家族が生産と消費の単位として自立性を増してきた(Hughes 1965: 24)。第2に、新技術を利用することによって、狩猟やワナ猟の生産効率が増大した。プヴィルニツク村から狩猟やワナ猟の場所が遠く離れていても、犬ゾリやカヤックに比べれば、スノーモービルや船外機付きカヌーははるかに早く、はるかに容易に目的地に達することができた。また、さらに遠い狩猟場であっても移動が可能になった。つまり日帰りできる狩猟範囲が広がったのである。こうして、新技術の導入は、かなりの程度食料資源の獲得に貢献した。第3に、新技術の導入によって、狩猟・漁撈・ワナ猟活動は現金なくしては実施できなくなった。スノーモービルや船外機を動かすためには、ガソリンやオイルを購入しなければならず、現金が生業活動を維持するためには不可欠の要素となった。

#### 第8項 プヴィルニツク村における生活補助や医療活動の開始(1950年代-1975年)

1940年代末から、カナダ連邦政府が支給する生活補助金や救援金はイヌイトにとって重要な現金収入源となった。これらの支給金のうちおもなものは、家族手当(family allowances)と救援金(relief)であった。救援金は、寡婦や健常でない人、老人への補助金、や病院治療を受けるための補助金であった。1952年から1958年までのプヴィルニツク村全体での支給金の総額は、表3.7に提示する通りである。これらの支給金は、女性と老人の経済的な自立性を向上させた。

|           | 家族手当     | 救援金     |
|-----------|----------|---------|
| 1952 - 53 | \$8,631  | \$9,211 |
| 1953 - 54 | \$9,879  | \$7,791 |
| 1954 - 55 | \$10,075 | \$7,556 |
| 1955 - 56 | \$7,545  | \$7,340 |
| 1956 - 57 | \$9,953  | \$8,926 |
| 1957 - 58 | \$13,758 | \$5,958 |

表3.7 1952年から1958年までのプヴィルニツク村におけるカナダ連邦政府支給の生活補助金 (出典: Balikci 1958 fieldnotes)

救援金が 1956-57 年から 1957-58 年にかけてかなり減額しているのは、病院へ収容されるイヌイットの数が増加したからである(Balikci 1958 fieldnotes)。1960 年代には滑石彫刻品の制作・販売からの現金収入が増加したために、イヌイット経済に占めるカナダ連邦政府支給の補助金の重要性は低下した。

1960 年代の初めには、すべての村にカナダ連邦政府によって看護所が建設され、看護師が常駐するようになった。これによってケベック州極北地域のイヌイットは常時医療サービスを受けることができるようになった。この影響として、乳幼児死亡率が激減し、各世帯の子供の数が増加した。また、以前に比べ平均寿命が延びた。

#### 第 4 節 ランド・クレーム期：「ジェームズ湾および北ケベック協定」の締結(1975)とアクリヴィク村の形成

##### 第 1 項 「ジェームズ湾および北ケベック協定」の締結とその諸影響

1971 年に発表されたジェームズ湾における水力発電開発用のダム建設を中止させることが無理であると判明すると、ケベック州北部に住むクリーとイヌイットは、土地に対する先住民権を放棄する代わりに金銭的補償やいくつかの権利の獲得を目指して、ケベック州政府とカナダ連邦政府を相手に政治交渉に入らざるをえなくなった。イヌイットは、政治的交渉の窓口となる北ケベック・イヌイット協会(Northern Quebec Inuit Association)を結成した。ケベック州極北地域に住むイヌイットの 3 分の 2 は、この協会を代表として関係政府と政治交渉を行うことに賛成したが、ケーブ・スミス島地域出身者を除くブヴィルニツック村の住民、イヴィヴィク村の住民、サルイット村の半分の住民は交渉自体に反対した(Saladin d'Anglure 1984b: 686)。そして 2 年以上に及ぶ関係政府との政治交渉の末に、クリーと全体の約 3 分の 2 に相当するイヌイットは 1975 年 11 月 11 日に「ジェームズ湾および北ケベック協定」(James Bay and Northern Quebec Agreement)に調印した。

この協定の締結によって、ケベック州極北地域のイヌイットは土地に対する独占的な所有権を放棄する代わりに、約 9,000 万ドルの補償金と生業権などいくつかの権利を獲得した。一方、「ジェームズ湾および北ケベック協定」に反対する 3 分の 1 のイヌイットは、イヌイット・ツングヴィンガット・ヌナミニ(ITN)を結成し、1981 年にケベック州最高裁判所に協定の無効を訴えた。このように、先住民諸権益請求問題が、ケベック州極北地域のイヌイットを政治的に二分させてしまうこととなった。

こうした諸影響をも含みつつ、締結されたこの協定によって、ケベック州極北地域の土地は 3 つのカテゴリーへと分類された。全体の 1 パーセントにあたる土地はカテゴリー 1 とされ、各村が排他的な所有権を有する土地となった。そこでは住民側からの許可と住民に対する金銭的な補償なくしては地下資源の開発はできない。また、カテゴリー 2 としてイヌイットが狩猟・漁撈・ワナ猟に自由に従事できる土地が設定された。そこでは狩猟・漁撈・ワナ猟の諸権利が地下資源の開発などよりも優先される。さらにカテゴリー 3 として

イヌイットはほかのカナダ国民と同じ権利を有するが、政府関係のプロジェクトを実施できるもっとも広大な土地が設定された(Saladan d'Anglure 1984b: 687)。

さらにこの協定の結果、補償金を管理するとともに、イヌイットの社会・経済発展を促進することを目的としたイヌイットの団体であるマキヴィク(Makivik Corporation)が 1978 年、北ケベック・イヌイット協会にかわり設立された。その目的は次の通りである。

- 1) イヌイットの言語を保全し、イヌイットの尊厳と誇りを促進させる。
- 2) 北ケベックのイヌイットを一致結束させ、全体にかかわる事柄に対処する。
- 3) 北ケベックにおけるイヌイットのハンターやワナ猟師の諸権利を守る。
- 4) 北ケベックのイヌイットの村々にコミュニケーション網を提供する。
- 5) イヌイットの置かれている状況、政府の諸計画、先住民の諸権利、法的なこと、教育の機会などについてイヌイットへ情報を提供する。
- 6) カナダ社会へ参加し、カナダ人としての意識や権利を持つことを助長する。
- 7) イヌイットのために協定の補償金を受け取り、管理し、使用し、かつ投資する。
- 8) 貧困をなくし、福利と教育を促進させる。
- 9) 協定やそのほかの法律で決められた機能を果たす。
- 10) イヌイットの村を開発し、向上させる。そして行動の手段を向上させる。
- 11) イヌイットのビジネスや産業の起業、財政、開発を援助する。

マキヴィクの本部はクージュアックに置かれ、モントリオールには事務所が開設された。そしてマキヴィクは、カナダ連邦政府やケベック州政府との政治交渉の窓口となるとともに、投資活動や子会社の設立・運営など積極的な経済的な活動を行った。1980 年代の子会社には、エアー・イヌイット (Air Inuit Ltd.)、キガク建設 (Kigiak Builders Inc.)、キガク旅行社 (Kigaq Travel Inc.)、イヌイット・リース社 (Inuit Leasing Ltd.)、キャペラル・チャーター社 (Caperal Charters Inc.)、サナク補修社 (Sanak Maintenance Inc.)、イマックピック漁業社 (Imaqpiq Fisheries Inc.)、アヤピヴィク・ホテル・レストラン社 (Ayapiqvik Hotels and Restaurants Ltd.) があった。

「ジェームズ湾および北ケベック協定」によって、1978 年にカティヴィク地方政府 (Kativik Regional Government) が創設された。この地方政府は、先住民でない人々も含めケベック州極北地域のすべての住人に対し社会的かつ政治的な責任を負っている公民政府 (ケベック州のもとにある地方自治体のひとつ) である。そして各種の統計作りからケベック州政府の多様な社会プログラムを管理することまで多岐にわたる仕事を行っている。この地方政府とともに 1978 年には多くの制度体が発足した。それらは、カティヴィク教育委員会 (Kativik School Board)、資格者認定・登録委員会 (Enrolment Commission)、ケベック先住民委員会 (Quebec Native Appeal Board)、環境専門諮問委員会 (Environmental Export Advisory Committee)、カティヴィク環境委員会 (Kativik Environmental Quality Commissions)、狩猟・漁撈・ワナ猟調整委員会 (Hunting, Fishing, and Trapping Coordinating Committee)、カティヴィク地域開発委員会 (Kativik Regional



Development Council)、経済・コミュニティー開発暫定委員会 (Interim Joint Economic and Community Development Committee)、連邦環境・社会的インパクト評価パネル (Federal Environmental and Social Impact Assessment and Review Panel)、地域警察 (Regional Police Force)、カティヴィク健康・社会サービス委員会 (Kativik Health and Social Service Council)、行政村 (Northern Village Corporations)、イヌイト土地所有法人 (Inuit Landholding Corporations) である。これらは、まさに極北地域のイヌイト社会が官僚行政時代に入ったことを象徴的に物語っている。

## 第2項 アクリヴィク村の形成と展開

1920年代から1955年頃までケープ・スミス島地域をおもな生活領域としていたイヌイトは先述した経緯によって20年余りブヴィルニツク村に居住した後に、ケープ・スミス島地域に戻り始めた。彼ら自身は1950年代からケープ・スミス島地域に戻ることを希望していたが、実行できなかったのである。しかしながら1970年代に入ると、具体的に帰住のためのふたつの戦略を考えた。第1の戦略は、詳細な再移住の計画を立て、財政的かつ物質的な援助を得るために計画書をカナダ連邦政府に提出するというものであった。第2の戦略はカナダ連邦政府の力を借りず、自らの手でほかのイヌイトの人々から助けを借りて新たな村を形成するというものであった(Larochelle et al. 1975: 40)。ケープ・スミス島地域出身のイヌイトはブヴィルニツク村において小さな会議を何度も開催し、第2の戦略をとることに決め、新しい村をつくってからカナダ連邦政府から承認を得るという方策をとることになった(Larochelle et al. 1975: 40)。

1973年にサイモン・アラホの家族が先陣をきって現在のアクリヴィク村の西方に小屋を建て、越冬した。1974年には4家族が新たに移住した。1975年になると、さらに別の数家族が夏にはピーター・ヘッド・ボートを利用して、冬にはスノーモービルを利用して建築資材を輸送し、彼らの小屋を建て始めた。1976年の終わりには、人口が100人を超え、新たなアクリヴィク村が形成されたのであった。

ブヴィルニツク村におけるケープ・スミス島地域出身のイヌイトとそれ以外のイヌイトとの間の「ジェームズ湾および北ケベック協定」をめぐる政治的な紛争が、前者の故地への直接的な移住のきっかけとなったが、それ以外にもいくつかの理由が存在した。第1に、ケープ・スミス島地域出身の老人たちが、自分たちが育ち、狩猟をし、その地理や生態を熟知している故地に戻ることを強く希望していた。第2に、ブヴィルニツク村の周辺地域に比べて、ケープ・スミス島地域ははるかによい狩猟・漁撈・ワナ猟場であった。ブヴィルニツク村では常時食料が不足している状況が続いており、ケープ・スミス島地域出身のイヌイトはアザラシなどの動物が多数生息しているケープ・スミス島地域へ帰ることを強く望んだ。第3に、ブヴィルニツク村の人口が増加するにしたがい、飲酒や暴力など社会問題が頻発するようになった。ケープ・スミス島地域出身のイヌイトはこの問題から逃れるために、酒がなく、人口が少ない所への移住を望んだ。このような理由

で、1976年の終わり頃までには、大半のケーブ・スミス島地域出身のイヌイットの家族がそれ以外の数家族も引き連れるかたちでプヴィルニツク村から移住し、現在のアクリヴィク村のもとを築いた。

移住や新しい村の形成にあたっては、住居用の家屋、看護所、石油タンクの有無など物質的な条件が重要であった。数家族は住宅用の家屋を建てることができなかったために移住できなかったし、病人を持つ家族は看護所がない場所には移住できなかった。アクリヴィク村が形成され始めてからの5年間は、イヌイットはホッキョクギツネやアザラシの毛皮、滑石彫刻品を売るためにプヴィルニツク村に行かなければならなかった。さらに彼らは、石油備蓄タンク、発電機、通信手段、生協の店舗、学校を必要としていた(注7)。

1975年にアクリヴィク村に小学校が開校された。当時、カナダやアメリカにおけるアザラシ猟やワナ猟に対する反対運動が盛んになってきたために、アザラシとホッキョクギツネの価格が急落した。このため現金収入が減り、イヌイットの生業活動に大きな影響を及ぼしたが、1975年頃にはカリブーの群れがケーブ・スミス島地域に戻ってきたため、カリブー猟が再開された。

1976年にアクリヴィク村が正式に村として承認された。また、同年、住民に生活必需品のみを販売するアクリヴィク村の生協の店舗が作られた。1978年2月にこのアクリヴィク生協は北ケベック生協連合(FCNQ)の正式なメンバーとなった。また、「ジェームズ湾および北ケベック協定」によって1978年にはアクリヴィク村は自治体(a northern village corporation)となり、土地所有法人(Land Holding Corporation)も設立された。さらに、看護所が開設され、ヨーロッパ系カナダ人の看護師2人とイヌイットの通訳が働き始めた。

1980年には看護所とFM放送局が新築された。また、古老が若い成人を対象に狩猟の方法や場所を教えるコースが学校の成人教育の一部として導入された。1980年頃からオースティン航空(Austin Air、1983年からはイヌイット航空 Air Inuit)の定期便がプヴィルニツク村との間で週2便就航するようになった。これにより定期的な郵便配達が始まり、郵便局も開局された。1980年代の初めにはベル・カナダによる電話のサービスが始まった。1981年7月には、村の総人口が275人に達した。

1982年12月にはケベック州議会において法案83「ハンター・サポート・プログラム法」(“An act respecting the support program for Inuit beneficiaries of the James Bay and Northern Quebec Agreement for their hunting, fishing and trapping activities”)が成立したために、1983年からケベック州極北地域のイヌイットの各村においてハンター・サポート・プログラムが実施され始めた。1984年にアクリヴィク村はハンター・サポート・プログラムを利用してピーター・ヘッド・ボートを購入することに決定した。1984年3月までに、村の総人口は312人に達した。

すでに指摘したように1983年にEC(ヨーロッパ共同体、現在のEU)がアザラシの毛皮の輸入禁止を実施したために、ヨーロッパ市場でのアザラシの毛皮の需要が激減し、カナダ極北地域でのアザラシの毛皮の価格が1枚あたり約5ドルになった(ホッキョクギツネの

毛皮の価格は1枚13ドルから27ドルの間を推移)。このためにアクリヴィク村のイヌイットは1985年には生協にアザラシやホッキョクギツネの毛皮を売ることをやめた。この毛皮取引の中止は、カナダの極北地域全域の経済に悪影響を及ぼした(Wenzel 1991)。例えば、当時の北西準州にあった20のイヌイットの村のうち18村では、60パーセント以上の年収を失った(Hovelsrud-Broda 1997)。そして1990年代の初めには15パーセントから20パーセントのハンターが資金難に陥り、狩猟・漁撈活動を行う上で支障をきたしていた(Wenzel 2000: 73)。ヌナヴィク地域のイヌイット全体で1978年には毛皮交易から約32万ドルを稼いでいたが、1991年には4万7千ドルしか稼げなくなってしまった(Chabot 2001)。

1986年にはアクリヴィク村から南へ約97キロメートルに位置するブヴィルニツック村にハドソン湾病院センターが新築された。このためアクリヴィク村を含むハドソン湾沿いの村に住むイヌイットの女性は、出産のためにオンタリオ州ムース・ファクトリー(Moose Factory)まで行く必要がなくなった。1986年には村のある3兄弟が協力して私有のピーター・ヘッド・ボートを購入した。

### 第3項 アクリヴィク村の構造とその展開

ここでは、アクリヴィク村の人口の変化および住宅状況、村の中に新たに出現した制度体について紹介する。

#### (1)アクリヴィク村の人口

アクリヴィク村の人口は、1973年の9人から1984年の12月には317人へと増加した(Pelletier 1985)。1984年12月時点において村の人口は男性151人、女性166人であった。年齢で見ると人口の71.9パーセントは30歳未満であり、その大半がブヴィルニツック村とアクリヴィク村で生まれている。彼らの人口の急増にはさまざまな要因が作用しているが、おもに人口の転入と高い出生率、乳幼児の死亡率の低下による。後者の2要因は、定住後の医療環境と住環境の向上や社会福祉制度の導入と密接に関連している。

1986年のアクリヴィク村の総人口は335人であった(Statistics Canada 1986 Census pp.1352)。世帯数は55世帯であった。1986年のアクリヴィク村にはイヌイット以外に2人の看護師、7人の教員、そしてイヌイットの女性と結婚した1人のフランス系カナダ人男性が住んでいた。さらに、夏季には、数人の建築作業員、ケベック州政府の役人、ケベック極北生協連合の職員、ケベック水力電力会社の作業員らが1週間から2、3ヶ月の期間、滞在することがあった。

1991年以降の国勢調査によると、アクリヴィク村の人口は、1991年には375人(うちイヌイットが365人)で(Statistics Canada 1991 Census, pp.1420)、1996年には411人(うちイヌイットが395人)で(Statistics Canada 1996 Census, pp.2177, pp.2179)、2001年には472人(うちイヌイットが450人)であった(Statistics Canada 2001 Census, pp.2264)。このようにアクリヴィク村の人口は、1991年から1996年の間に9.6パーセン

ト増加し、1996年から2001年の間に14.8パーセント増加している。村に住むイヌイト以外の数も増加しているが、村の人口増加のおもな原因は、出産による自然増加である。アクリヴィク村の人口は依然として増加の傾向にある。同国勢調査によると、1996年にはアクリヴィク村の人口の41.5パーセントが14歳以下、55歳以上が4.9パーセントであった。2001年のアクリヴィク村の人口の42.6パーセントが14歳以下で、55歳以上が4.3パーセントであった。このようにアクリヴィク村の人口は男女比がほぼ同じであるため、典型的なピラミッド型の人口構成を示している。

1991年、1996年、2001年の世帯数と家族数は、それぞれ70世帯・75家族、90世帯・80家族、90世帯・105家族であった。同村の世帯数と家族数も概して増加の傾向にあるといえよう。

## (2)住宅の状況

1986年9月の時点でアクリヴィク村には、貯水槽が付いたデュプレックス型(4ベッドルーム)家屋が22世帯、貯水槽が付いた3ベッドルーム型家屋が13世帯、貯水槽が付いていないマッチ箱型家屋が12世帯あった。村がこれらの家屋を管理し、村人は住宅公社から賃借していた。1ヶ月の家賃は、デュプレックス型で350カナダ・ドル、3ベッドルーム型で250カナダ・ドル、マッチ箱型で100カナダ・ドル未満であった。村は、飲料水の配給、ごみや汚水の収集、家屋の修理などを行う義務があった。

若い夫婦は、デュプレックス型家屋か3ベッドルーム型家屋に入居が可能になるまで、貯水槽が付いていないマッチ箱型家屋に住む傾向があった。

1980年代後半以降、古い家屋が改修されるとともに、毎年数戸ずつデュプレックス型家屋や3ベッドルーム型家屋、1人用アパート家屋が建造されていき、マッチ箱型家屋はなくなった。

1986年から2001年までに実施された国勢調査に基づくアクリヴィク村における住宅数、平均家賃などを整理したのが、次の表3.8である。

|              | 1986年   | 1991年   | 1996年   | 2001年   |
|--------------|---------|---------|---------|---------|
| 総戸数(世帯数)     | 55      | 70      | 90      | 90      |
| 1住宅あたりの平均部屋数 | 4.5     | 4.7     | 4.8     | 5.1     |
| 1部屋あたりの平均員数  | 1.4人    | 1.2人    | 0.9人    | 1.0人    |
| 1家族からなる世帯    | 35      | 40      | 70      | 55      |
| 平均家賃         | CA\$122 | CA\$184 | CA\$240 | CA\$252 |
| 平均世帯員数       | 6.1人    | 5.4人    | 4.4人    | 5.3人    |

表 3.8 アクリヴィク村の総世帯数、部屋数、平均家賃、世帯員数などの変化(1986-2001年)

この表 3.8 を見てわかる通り、住宅数、1 住宅あたりの部屋数、平均家賃は増加の傾向にある。平均世帯員数は、1986 年から 1996 年まで減少傾向にあったが、1996 年と 2001 年の平均世帯員数とを比較すると 4.4 人から 5.3 人へと増加している。

2004 年現在、アクリヴィク村には 4 部屋を有するデュプレックス型住宅が 16 世帯、3 ベッドルーム型住宅が 30 世帯、1 ベッドルームのアパート型住宅が 6 世帯、2 ベッドルームのアパート型住宅が 4 世帯、これ以外にカティヴィク教育委員会の教員用宿舍と看護師用の宿舍が数件ある。家賃は次の表 3.9 の通りである。この家賃には電気代、水代、ごみ尿尿収集代、冬期の暖房費が含まれている。

| 住宅のタイプ        | 有職者の家賃(1 ヶ月) | 福祉依存者の家賃 (1 ヶ月) |
|---------------|--------------|-----------------|
| デュプレックス型住宅    | 348 カナダ・ドル   | 214 カナダ・ドル      |
| 3 ベッドルーム型住宅   | 252 カナダ・ドル   | 208 カナダ・ドル      |
| 1 ベッドルームのアパート | 158 カナダ・ドル   | 120 カナダ・ドル      |
| 2 ベッドルームのアパート | 227 カナダ・ドル   | 207 カナダ・ドル      |

表 3.9 1 ヶ月の家賃(2004 年 9 月現在)

ヌナヴート準州のイカルイトやヌナヴィク地域のクージュアックと異なり、アクリヴィク村では住宅を個人所有している人はいない。すべてケベック州の住宅公社が提供する住宅を賃借りしている。1 ヶ月あたりの家賃は、就労者世帯と非就労者世帯では、非就労者世帯の負担を緩和させるために差が付けられている。

#### 第 4 項 諸制度体

イヌイトが定住生活を開始してから、多くの新しい制度体が村の中に出現し、整備されていった。さらに 1975 年に「ジェームズ湾および北ケベック協定」が締結された後は、その協定に基づいて新たな制度体が創出された。ここではアクリヴィク村のおもな制度体を紹介する。なお、教会については第 4 章で記述するので、ここでは言及していないこととお断りしておく。

##### (1)村議会

アクリヴィク村は 1978 年にケベック州によって自治体として認定され、新しく村議会も作られた。この村は行政村であり、ケベック州のカティヴィク地域政府の下位単位となった。村役場と議会の構成は、村長 (1 人)、議員(6 人)、書記・収入役 (1 人)、助役(general manager 1 人)、住宅係長(1 人)、秘書(1 人)、そのほかの村職員であった。このうち村長と議員は 2 年ごとに 18 歳以上の住人による投票で選ばれる。この自治体のおもな機能は、年

間の予算作り、住宅管理、飲料水の配給、ごみや汚水の収集、道路の管理・整備などであった。

村長や村会議員は政府関係の複雑な事案を処理しなくてはならない。このため村長は英語かフランス語が堪能である 30 歳代から 50 歳代半ばまでの学校教育を受けた人が選ばれる傾向にある。村長は、かつてのキャンプ集団のリーダーを指すのに使用されたアンガユガック(*angajurqaq*)という名称で呼ばれている。6 人の村会議員は、住民の選挙によって選ばれる。

村長と村会議員はフォーマルな政治的権力者である。彼らは毎週 1 度、会議を持ち村全体にかかわる政治的・行政的な懸案を審議し、決定していく。しかしながらアルコールの問題など社会的に重要な議題については、村の体育館に成人が集まり、会合が持たれる。そのような全体集会は、緊急議題がない限り年 2 度ほど開催され検討される。

## (2)土地所有法人

土地所有法人は、「ジェームズ湾および北ケベック協定」に基づいて 1978 年にケベック州極北地域の各村に創設された。この法人のおもな目的は、第 3 章第 4 節第 1 項で述べたカテゴリー 1 の土地を管理することであった。多くの村では、この法人はタクシー業、小売店経営、オフィスの賃貸業、ホテル・レストラン経営などさまざまな事業を営んでいる。

アクリヴィク村では、法人がレストラン(Ammayah Inc.)を営んだことがあったが採算がとれないため廃業した。アクリヴィク村の法人は、法人長(1 人)、秘書(1 人)、委員(5 人)から構成されている。秘書以外は、投票によって選出される。

## (3)生協

生協はもっとも重要な経済的な制度体である。アクリヴィク生協は 1978 年以来、ケベック州極北地域生協連合の一員である。1986 年の時点で生協は村の中にある唯一の総合小売店であった。村人が生協を営んでいるが、食料やその他の商品を北ケベック生協連合から仕入れて、販売したり、村人から滑石彫刻品やホッキョクギツネの毛皮を買い取り、同生協連合を通して南の市場に出荷している。生協連合は商品の販売価格を決めるほか、各生協の経営について指導を行っている。

アクリヴィク生協は、1986 年の時点で総支配人(1 人)、副支配人(1 人)、店長(1 人)、購入係長(1 人)、会計係(1 人)、倉庫係(2 人)、そして投票によって選出された 7 人の生協理事から構成されていた。生協のすべての職や役職には地元のイヌイットが就いていた。アクリヴィク村のほぼすべての成人は、生協のメンバーであり、個人の生協口座を持っていた。

アクリヴィク生協は、(1)銀行機能、(2)地元の産物の購入と市場への出荷、(3)村人へのガソリンと灯油の販売、(4)小売店経営など複数のサービスを行っている。

生協の店舗では、生活に必要な基本的な食品や商品が販売されている。それらは毎週 1

回、チャーター便で搬入されてくるほか、年に 1 度家具やカヌーなどの大型の物資が貨物船によって村に運ばれてくる。ガソリンや灯油は、年に 1 度タンカーが寄港し、村の備蓄タンクに 1 年分を給油している。

2004 年 2 月の時点における生協の機能や構造は、1986 年当時とほぼ同じであるが、生協職員の数は 15 へと増加し、村役場や学校に次ぐ、規模の大きな職場であるといえる(注 8)。

#### (4)学校

アクリヴィク村の学校は 1975 年に創立されたが、ケベック州極北地域における教育制度は、「ジェームズ湾および北ケベック協定」に基づいて 1978 年 7 月から変更された。同年、カティヴィク教育委員会が創設され、ケベック州極北地域全体の教育に関する管轄権が委譲された。この教育委員会の中核は、11 の各村から選出された 11 人の学校コミッショナーからなる。そこでは、ケベック州極北地域のカリキュラム、教育内容、教員の採用と研修に関して責任を負うようになるとともに(Vick-Westgate 2002)、イヌイットだけでなく同州の北緯 55 度以北に住む子供たちの高等学校までの教育および成人教育を管轄することになった(Kativik School Board 2004)。

現在、この教育委員会は、イヌイットがカナダ社会で生きていくために必要な国家語や知識、技術を習得することと、イヌイット語やイヌイットの文化伝統を学習することに力点を置いている。

1978 年の新制度が発足して、おもに 3 つの変化が見られた(Cram 1979: 64)。第 1 は、教育委員会が開校日数や行事のカレンダーを決定するようになった。第 2 に、各地域の条件に応じて、教員を採用したり、教員に対し訓練を実施することができるようになった。第 3 に、イヌイット語が幼稚園 1 年と小学校の 2 年生までの計 3 年間は教育言語と使用され、小学校の 3 年生から英語かフランス語が第 2 言語として教えられるようになった。

また発足当初からケベック州極北地域の村ごとに、先述した学校コミッショナー(2 年任期)と教育委員(1 年任期)が住民の投票によって選出されるようになった。アクリヴィク村の場合には、学校組織は学校コミッショナー 1 人、村の教育委員 6 人、センター長 1 人、校長 1 人、10 人以上の教員から構成されていた。

学校コミッショナーは各村の学校を代表し、ケベック州極北地域全体の教育委員会のメンバーとして、年に 4 回、ケベック州極北地域全体の教育を審議する総会に出席する。村の 6 人の教育委員は、新たに教員を採用するときに中心的な役割を果たす。センター長は、教育委員の審議によって選出され、その役割は学校を円滑に運営することや地元の教育委員会の仕事を補佐することである。校長は通常、年長のヨーロッパ系カナダ人の教員である。

1986 年～1987 年のアクリヴィクの学校には 7 人のヨーロッパ系カナダ人の教員と 3 人のイヌイットの教員がいた。ヨーロッパ系カナダ人の教員はまずカティヴィク教育委員会

によって選考された候補者に校長がインタビューした後に、その結果が良好ならば村の教育委員が最終的に採用を決定することになっている。イヌイットの教員はモンリオールにあるマギル大学の教員養成特別プログラムもしくは夏季にケベック州極北地域のいずれかの村で開催される教員養成プログラムで研修をすることになっている。

アクリヴィクの学校では、セカンダリー 3（中学校 3 年生に相当）までの教育を受けることができる。最初の 3 年間、すなわち幼稚園からプライマリー 2（小学校 2 年生に相当）まではイヌイット語が教えられる。また、それ以外の教科もイヌイット語のみで教育が行われる。プライマリー 3（小学校 3 年生）からセカンダリー 3（中学校 3 年生）までは第 1 言語としてイヌイット語、第 2 言語として英語かフランス語が教えられる。また、イヌイット文化はイヌイット語で、算数や理科、社会科は英語かフランス語のいずれかで教えられる。授業があるのは 8 月中旬から翌年の 5 月初めまでである。高校以上に進学する学生は、クジュアラープク、イヌクジュアクなどほかの村に行かなければならない。

1984-1985 年には、アクリヴィク村の学校には 89 人の学生がいた。その内訳は、幼稚園児 6 人、小学生 68 人、中学生 15 人であった(表 3.10 参照)。

ケベック州極北地域では住民の 90 パーセント以上がイヌイットであるため、幼稚園の年長組から小学校 2 年生までは、母語であるイヌイット語のみで教えられている。イヌイットの子供はイヌイット語以外に、英語かフランス語を第二言語として習得することが期待されており、小学校第 3 年生になると第二言語を選択することになる。この選択は子供の両親によってなされることになっている。そして小学校の 3 年生以上になると算数や社会科、理科などもすべて第二言語である英語かフランス語で教えられる。しかし、イヌイット語は高校 3 年生（セカンダリー 5）まで教えられるほか、体育やキリスト教の授業もイヌイット語が用いられる。

|     |                   |    |      |      |
|-----|-------------------|----|------|------|
| 幼稚園 | イヌイット語            | 小計 |      | 6 人  |
| 小学校 |                   | 小計 |      | 68 人 |
|     | イヌイット語(小学 2 年生まで) |    | 19 人 |      |
|     | フランス語             |    | 28 人 |      |
|     | 英語                |    | 21 人 |      |
| 中学校 |                   | 小計 |      | 15 人 |
|     | フランス語             |    | 4 人  |      |
|     | 英語                |    | 11 人 |      |
|     |                   | 合計 |      | 89 人 |

表 3.10 1984-1985 年のアクリヴィク村の学校の学生数 出典: (Pelletier 1985)



2003 年～2004 年のアクリヴィク村の幼稚園・学校の在校生は男子 81 人、女子 66 人で、合計 147 人であった。その内訳は幼稚園児 14 人、小学生 93 人、中学生 40 人であった。(表 3.11 参照)。

|     |                   |    |      |       |
|-----|-------------------|----|------|-------|
| 幼稚園 | イヌイット語            | 小計 |      | 14 人  |
| 小学校 |                   | 小計 |      | 93 人  |
|     | イヌイット語(小学 1・2 年生) |    | 26 人 |       |
|     | フランス語             |    | 40 人 |       |
|     | 英語                |    | 27 人 |       |
| 中学校 |                   | 小計 |      | 40 人  |
|     | フランス語             |    | 27 人 |       |
|     | 英語                |    | 13 人 |       |
|     |                   | 合計 |      | 147 人 |

表 3.11 2003-2004 年のアクリヴィク村の学校の学生数(2003 年 9 月の現地調査による)

表 3.10 と表 3.11 とを比較すると、ふたつの傾向が見られる。第 1 は、幼稚園児・小中学生の生徒数が約 8 年の間に約 1.7 倍に増加している。これはイヌイット社会における人口の急激な増加を反映している。第 2 は、フランス語を選択する学生が増加し、英語を選択する学生を数の上で凌駕している。英語を選択するか、フランス語を選択するかは、村によっても違いが見られるが、州の第一公用語がフランス語であることや誰が学校で教えているかということが大きな決定要因となっている。さらに学生数の増加によって教員の数も 16 人となった。このうち 8 人がイヌイットの教員である。

アクリヴィク村の小学校 3・4・5 年生の合同クラス(英語を選択)の 1 週間の時間割は表 3.12 の通りである。

この事例のように、小学校 3 年生になると英語が教えられ始める。教員は英語をアルファベットから教え始めるとともに、算数や理科、社会科、図工などはすべて英語で授業を行っている。カティヴィク教育委員会は極北の生活の実情を考慮しつつ、フランス語や英語で書かれた算数や理科のワークブックや教科書を開発している。また、英語の物語を聞かせるための CD や英単語を勉強するためのコンピューター・ソフトが教室で活用されている。イヌイット語による授業は、文化、キリスト教、体育、社会科の一部のみとなり、1 週間あたり総計で 2、3 時間へと減少する。

イヌイットの小中学生は 2004 年 9 月現在でも欠席率や遅刻率が高く、正規の年数で高校までの課程を終える者は数少ない。さらに中学校を中途退学する学生が大半である。人口 500 人に満たないアクリヴィク村では高校レベルまで進む学生が少ないために、クラスを編成することができず、結局、学生は高校レベルのクラスが開校されている大きな村の学校に行かざるをえなくなっている。

教育内容は全般に向上してきているが、いくつかの問題を抱えている。第 1 の問題は学

生の出席率が低いことである。平均すれば、学生は開校されている総日数の 4 分の 3 しか出席していない。第 2 は学生が病気にかかることが多いことである。第 3 は遅刻が多いことである。学校のセンター長は学生の両親に相談し、これらの問題を解決しようと試みている。

| 時間          | 月曜日     | 火曜日     | 水曜日     | 木曜日     | 金曜日     |
|-------------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 8:57-9:00   | 入室      | 入室      | 入室      | 入室      | 入室      |
| 9:00-9:45   | 英語 4・5  | 英語 3・4  | 算数      | 英語      | 英語 4・5  |
| 9:45-10:30  | 算数 4・5  | 英語 4・5  | 5 年生用授業 | 算数      | 算数      |
| 10:30-10:45 | 休み時間    | 休み時間    | 休み時間    | 休み時間    | 休み時間    |
| 10:45-11:15 | 英語 4・5  | 算数 4・5  | 英語      | 算数      | 社会科     |
| 11:15-12:00 | 算数 4・5  | 体育      | 文化      | 5 年生用授業 | 文化      |
| 12:00-1:15  | 昼食      | 昼食      | 昼食      | 昼食      | 昼食      |
| 1:15-2:00   | 理科      | 社会科     | 英語 4・5  | 自由      | 5 年生用授業 |
| 2:00-2:45   | 英語 3・4  | 5 年生用授業 | 英語 3・4  | 英語 3・4  | 英語 3・4  |
| 2:45-3:00   | 休み時間    | 休み時間    | 休み時間    | 休み時間    | 休み時間    |
| 3:00-3:45   | 5 年生用授業 | 図工      | 体育      | 図工      | 図工      |

表 3.12 レベル グレード(学年)4-5&3 英語 (2004 年の秋学期の時間割、アクリヴィク村の小学校)

#### (5)看護所

アクリヴィク村には医師はいないが、看護師 2 人が常駐している看護所がある。看護所は 1978 年に設立され、1980 年には新しい建物が建築された。この看護所は月曜日から金曜日までの昼休みを除く午前 9 時から午後 5 時まで開いている。看護師が基本的な治療や手当てを実施するが、病気や怪我の症状が重いものはプヴィルニツク村にあるハドソン湾病院センターか、モントリオール市かケベック市の総合病院や専門病院に行かなければならない。

2 ヶ月ごとに医師が村に 1 週間から 2 週間程度滞在し、治療を行ったり、検診を行ったりしている。また、歯科医や眼科医は年に 2,3 回、1 週間から 2 週間程度村に滞在し、患者の治療にあたっている。これらの医師はプヴィルニツク村のハドソン湾病院センターに属しており、ケベック州のハドソン湾沿いにある村々を定期的に巡回している。

このようにケベック州極北地域における医療事情が改善されてきたため、乳幼児の死亡率が低下し、住民の健康状態も全般的に向上した。1987 年の春からは、ハドソン湾病院センターで、イヌイットの儀礼的な助産人（第 4 章第 2 項（4）で後述）の同伴で出産を行うことができるようになった。しかしながら特別な治療や手術が必要な患者は、2004 年現

在でもモントリオールの総合病院や小児病院へ送られている。アクリヴィク村の看護所には、フランス系カナダ人の看護師 2 人のほか、イヌイットの通訳 1 人が常勤している。

#### (6) FM ラジオ放送とテレビ放送、電話

アクリヴィク村には、村内放送用の FM ラジオ局がある。1980 年代の半ばまでは特定のアナウンサーや DJ はおらず、話をしたい成人は誰でも放送施設を利用することができた。ラジオ局の放送と電話はイヌイットにとってもっとも重要な通信手段である。すべての世帯にラジオがあり、放送があるときはほとんどの村人が聞いていた。FM ラジオ局から、飛行機の発着時間、郵便局の開局時間、村からの重要な知らせなどが放送され、情報が村全体で共有されていた。また、誰かを探しているというような個人的な用件であっても、放送局に電話をかけ、依頼するとメッセージを村内放送してもらうことができた。さらに狩猟に出て迷ったハンターは、FM 放送が流れてくる方向を、音の強弱で判断し、音が強く、明確に聞こえてくる方向を目指して村に帰ってくることもある。

1970 年代にはモントリオールからショートウェーブ放送で 1 日 1 時間のイヌイット語による放送が始まったが、1983 年にカナダ連邦政府によって北方放送政策を採択された後は、北方先住民が母語と文化を維持し、かつ発展させることができるように放送番組を制作し、放送するための資金援助および技術援助がなされてきた (Smith and Brigham 1992: 186)。

1980 年代には各家庭の居間に日本製のカラーテレビが置かれており (注 9)、一日中、スイッチが入れられたままであったが、音声は消されていた。一方、ラジオ番組も一日中放送されていたが、こちらのボリュームは最大にされていた。すなわち、人々はラジオを聴きながら、テレビの画面に映る映像を見ていたのである。テレビ番組は英語の CBC 放送 (カナダ国営放送)、フランス語の CBC 放送、英語の CTV 放送の 3 チャンネルしかなかったが、多くの老人は英語やフランス語を理解することができないため、彼らにとってテレビは映像を見て楽しむ道具であった。一方、村のラジオは、カナダ放送の英語によるニュース以外は、村人がボランティアの DJ として音楽を流したり、地元の情報をイヌイット語で放送したりしていた。村の FM 放送局は、村人が電話をかけると電話を放送に接続してくれ、伝言や意見をほかの村人に伝える情報伝達の手段ともなっていた。

それから 15 年後の 1990 年代の後半には、月額 50 ドルの受信料を支払えば衛星放送を利用したケーブル・テレビ番組を 40 チャンネル近く見ることができるようになっていた。また、2003 年の時点では、月額 100 カナダ・ドルを支払えば、200 チャンネル以上のテレビ番組を視聴することができる。ラジオ放送もイヌイット語による広域番組が増加した (岸上 2004)。この 20 年余りの間に、イヌイットはラジオやテレビを通して多様な情報に接することができるようになった。これらふたつのメディアが彼らの生活に大きな影響を及ぼすようになったのである。

また、1980 年代以降、ほぼすべての世帯に電話が普及し、村内外の家族、親族、友人との交信に利用されている。インターネットは数年前から学校や村役場、看護所で導入され

ているが、2003 年現在、教育や仕事以外にはあまり利用されていないし、一般家庭にまでは普及していない(岸上 2004)。

#### (7)警察と消防隊

カティヴィク地域政府の下位機関として警察の支所と消防署がある。アクリヴィク村には小規模ながらも留置場を持つ警察支所があり、通常 2 人の警察官が駐在している。1980 年代には地元のイヌイトが地元採用の警官として存在したが、親族の者が刑事事件を起こしたときに逮捕できないことが多かったので、結局、1990 年代以降はヨーロッパ系カナダ人もしくは他村出身のイヌイトの警官が常駐している。

また、消防車とそれを収納する倉庫も村内にあり、消火活動にあたることができるようになっている。チーフ 1 人と 5 人の隊員からなる消防隊が存在し、定期的に訓練をしている。彼らはすべてパートタイムの消防隊員である。

これらの組織は、それぞれ村の中で犯罪や火災などの緊急事態が発生したときに対処する役割を担っている。

#### 第 5 節 アクリヴィク村の現状：世界システム・国家の中のイヌイト

本章では、アクリヴィク村周辺地域の自然環境を概略的に紹介した後に、アクリヴィク村の住民や彼らの祖先を事例としてカナダ・イヌイト社会において 20 世紀に起こった急激な変化を見てきた。20 世紀はカナダ・イヌイトにとっては激動の時代であった。彼らは 20 世紀前半には本格的に毛皮交易に参加することにより、世界システムの中に徐々に組み込まれ、1960 年代以降は貨幣経済が彼ら本来の生業経済を維持するための前提となった。生活形態においても、1950 年代にはそれまでの季節的な移動生活から定住生活へと変化が始まり、かつ 1960 年以降にはカナダ連邦政府やケベック州政府の行政介入が多大な影響を及ぼした。このような変化は、イヌイトが政治・経済的にカナダ主流社会という外部社会に依存すること、そしてその枠組みの中で生活を営まざるをえない現在の状況を招来した。

さらに大きな変化は、ランド・クレームの政治交渉とその結果としての政治協定の締結と実施によって引き起こされてきた。特に 1975 年の「ジェームズ湾および北ケベック協定」の締結以降、ヌナヴィク・イヌイトは経済的にはケベック州政府やカナダ連邦政府に依存しながらも、政治的な自立性を高め新たな歴史を歩み始めた。

そして現在のアクリヴィク村が形成され始めてから約 30 年がたった。その間に人口は、ほかの極北地域の村と同様に急激に増加した。1973 年にたった 9 人であった人口は、2001 年には 472 人となったのである。この間に、村の体制もカティヴィク地方政府の下位単位の行政村としてカナダ国ケベック州に組み込まれるとともに、住宅、道路、飛行場、公共施設など下部構造の整備が進み、近代的な村へと変貌していった。村の運営や下部構造の整備は、ケベック州予算と「ジェームズ湾および北ケベック協定」からの資金が使用されている。言い換えれば、これらの村外からの資金がなければ村は物理的に存立しえず、政

治・財政的には、ヌナヴィク地域のイヌイット社会はカナダ連邦政府やケベック州政府に依存せざるをえない状況にある。さらに、イヌイットの個人レベルの収入も、賃金労働に従事しているにせよ(村人の全収入の約 70 パーセント)、福祉金など公的援助に依存しているにせよ(村人の全収入の約 30 パーセント)、そのもとはカナダ連邦政府かケベック州政府であるといえる。1986 年以降を比較してみても、村人の全収入の 30 パーセント余りが、福祉金など政府からの直接的な支出金である(Statistics Canada 1986 Census pp.1352 ; Statistics Canada 1991 Census, pp.1420; Statistics Canada 1996 Census, pp.2177, pp.2179; Statistics Canada 2001 Census, pp.2264)。収入のあるイヌイットは州政府やカナダ連邦政府に対して所得税を支払っているし、生協そのほかでの買物では消費税を支払っている。

ヌナヴィク地域の各世帯の生活に必要な物資のほぼすべて、さらに食料の 50 パーセント以上は、週 1 便の貨物の空輸か年 1 回の輸送船によって村の外から運び込まれている。ヌナヴィク地域の 3 村で世帯経済の調査を実施したシャボーは、1995 年当時、ヌナヴィクの人々が食べている食料の 85 パーセント余りが、村の生協や小売店で購入されたものであり、各世帯は一ヶ月平均で 1000 カナダ・ドルを食品の購買のために使用していると報告している(Chabot 2001)。この指摘は、アクリヴィク村のイヌイットにもあてはまるであろう。また、地元で野生動物を捕獲するためには、船外機付きカヌーやスノーモービル、ライフルと弾丸、漁網、ガソリンなどを現金で購入しなければならない。このように現在のイヌイットの生活にとって現金収入は必要条件のひとつになっている。

外部との交通・通信に関しては、この 20 年間のうちに飛躍的な発展が見られる。ヌナヴィク地域には、村々を結ぶ、さらには同地域とカナダ南部の都市を結ぶ道路網や鉄道網はないため、長距離の交通手段は、おもに飛行機である。1980 年代前半には週 1 便の飛行機で北はサルイット、南はクジュアラープクに行くことができたが、モンリオールに行くためには、クジュアラープクで 1 泊する必要があった。徐々に飛行機の便数が増え、1990 年代の半ば以降は、月曜日から金曜日まで 1 日に 1 ないしは 2 便が周航している。クージュアックや、プヴィルニツク経由でクジュアラープクやモンリオールにまでその日のうちに行くことができる。飛行機以外では、夏場に船外機付きカヌーで、冬場にはスノーモービルで約 95 キロメートル以上離れた隣村を訪れることができる。

通信手段としては、2004 年の時点で電話が一般家庭に普及している一方で、インターネットは役場や病院、学校、生協、一部の個人宅に限定的に使用されているにすぎず、まだ一般家庭には普及していない。一方、テレビは無料放送が 3 チャンネル、衛星放送を利用すれば 20 チャンネル以上にアクセスすることができる。アクリヴィク村ではほぼすべての世帯が、生協を通して月額 50 カナダ・ドル以上を支払って、衛星放送を受信し、視聴している。FM ラジオはおもに村内放送用に利用されているが、イカルイット、クージュアック、サルイットからのイヌイット語による番組やカナダ放送局の北方用放送(CBC North)の番組を聴くことができる。一般家庭における電話、ラジオ、テレビの利用によって、イヌイ

ットは多様な情報に接することができるようになった。

学校教育や病院、保健制度、年金制度は、基本的にケベック州の管轄下であり、州民としての権利と義務を有している。

ここで概略したように、アクリヴィク村は、世界経済システムに組み込まれ、カナダ国家およびケベック州の一部として、外部社会と政治・経済的な関係を持ちつつ存在しているといえよう。カナダ主流社会との政治・経済的な関係がヌナヴィク地域のイヌイット社会の政治・経済や生活を規定するというところまでとはいえないが、条件付けていることは明らかであろう(注 10)。

## 第4章 アクリヴィク村の経済と社会

本章では、調査地であるアクリヴィク村の1980年代以降の経済活動と社会、政治、宗教について記述する。

### 第1節 アクリヴィク村の経済

#### 第1項 経済構造の全体像

現代のイヌイットの経済は、自家消費用の食料を獲得するための狩猟・漁撈活動という生業経済と現金を稼ぐための賃金労働という貨幣経済のふたつのシステムの混交的な共存によって特徴付けられるため、混交経済や二重経済と呼ばれている(Willmott 1961; Wenzel 1991 など)。

第3章で示した通り、ヌナヴィク地域のイヌイットの多くは、1850年代頃から1980年代初頭まで、ホッキョクギツネやワモンアザラシの毛皮をハドソン湾会社(HBC)の交易者に渡し、ボートやライフル、漁網、ナイフ、針、薬缶、布地、紅茶、小麦粉などを入手するという交易に従事していた。この毛皮交易には、少なくともふたつの側面があった。イヌイットはこの交易によって、狩猟・漁撈活動をより円滑に進めるための道具や物資を入手することができ、彼らの生活を維持することができた。しかしまた毛皮交易は、イヌイットを貨幣経済に巻き込む契機となり、彼らは徐々に、毛皮交易を通して手に入れた鉄製品や布製品など外部の物資に依存するようになった。特に1960年代に定住生活を始めて以来、彼らの生活は外部で製造される物資抜きには成り立たなくなってしまったので、現金収入は生活や生業活動を続けていく上で不可欠の要素となった。

1970年代から1980年代にかけて繰り広げられてきた欧米における動物愛護運動の影響によって市場における需要が低下したために、アザラシの毛皮とホッキョクギツネの毛皮の価格が低下した。さらに毛皮に代わってイヌイットの重要な収入源となった滑石彫刻品の価格も低迷した。一方、ケベック州極北地域の生活費はカナダ南部の都市と比べるときわめて高い状態が続いていた。例えば、1985年におけるアザラシの毛皮1枚の平均取引価格は5カナダ・ドルまで低下した。同年、北ケベック生協連合はイヌイットからの滑石彫刻品の買い取り価格の上限を、小型で35カナダ・ドル、中型で75カナダ・ドル、大型で250カナダ・ドルと設定した。一方、ほぼ同じ時期に村の生協の店舗では、カヌー1隻は3,000カナダ・ドルから6,000カナダ・ドル、カヌー用の船外機は2,600から3,500カナダ・ドル、スノーモービル1台は3,250から6,000カナダ・ドルであった。ガソリンは1ガロン(約4.5リットル)6カナダ・ドル、卵は1ダース3カナダ・ドル、バターは1ポンドあたり4.5カナダ・ドルであった。なお、1990年代後半のヌナヴィク地域の物価は、ケベック市の1.5倍以上であったが、物価自体は1980年代半ばと比べるとそれほど上昇していない(Duhaime et. al. 2000)(注1)。

毛皮交易を通して形成されたイヌイットの生業システムは、1983年のヨーロッパ共同体によるアザラシ毛皮の輸入禁止による毛皮市場の崩壊まで機能していたが、毛皮市場が崩

壊した 1984 年以降は多くのハンターが現金不足を理由に、アザラシ猟やその他の狩猟や漁撈を続けることができなくなった。皮肉なことに、賃金労働の定職を持つため、週末や休みにしか狩猟・漁撈に従事することができないイヌイットの方が、安定した現金収入の故に、高性能の狩猟道具やスノーモービル、船外機付きカヌーを持ち、効率よく獲物を捕獲するようになった。

中高年イヌイットの大半はアザラシやカリブーの肉やホッキョクイワナなど地元でとれる食べ物こそが、「真の食べ物」であると考えている(スチュアート 1993b; 岸上 2005a)(注 2)。また、狩猟や漁撈は人々に食料をもたらすのみならず、彼らの領域(ヌナ)での活動こそが彼らの生き方そのものであると考えている(Wenzel 1991)。

季節の推移によって、イヌイットが捕獲できる動物や植物は変化する。現在のアクリヴィク村においては、その周辺地域に生息しているワモンアザラシ、アゴヒゲアザラシ、シロイルカ、セイウチ、カリブー、ホッキョクイワナ、ホワイトフィッシュ、ライチョウ、ハクガン、カナダガン、カモ、野イチゴ類などをおもな食料資源として利用している。地元の生協で購入する食料品が食事の中に占める比重が増大しイヌイットの食生活は急激に変化しつつあるが、それでもなおアザラシやカリブーの肉、ホッキョクイワナなどが彼らにとってもっとも重要な食料であるといえる。このような意味において現金経済に依存している生業経済もまた、現在のイヌイットにとってきわめて重要である。

## 第 2 項 アクリヴィク村の貨幣経済

### (1)1980 年代前半のアクリヴィク村の貨幣経済

1982 年 3 月の時点で、アクリヴィク村では 44 人が賃金労働に就いていた(Beaulieu 1984: 42)。ハンターや彫刻家は 23 人であった。アクリヴィク村のイヌイットの現金収入の大半は賃金労働と、連邦政府やケベック州政府からの各種補助金や福祉金に由来していた。

34 人のイヌイット(50.7 パーセント)は役人や教員、通訳、政府機関の職員であった。その内訳は、連邦政府の職員である郵便局員 1 人と州政府の役人 1 人、カティヴィク地方政府、病院、学校、村役場などで働いている人が 32 人であった(表 4.1)。

|                     |        |      |         |
|---------------------|--------|------|---------|
| 政府                  | 連邦政府   | 1 人  | (1.5%)  |
|                     | 州政府    | 1 人  | (1.5%)  |
| 地域および地方の団体          |        | 32 人 | (47.8%) |
| 事業                  | 先住民経営  | 8 人  | (11.9%) |
|                     | 非先住民経営 | 2 人  | (3.0%)  |
| 彫刻家 (および・もしくは) ハンター |        | 23 人 | (34.3%) |
|                     |        | 67 人 | (100%)  |

表 4.1 1981 年アクリヴィク村における雇用者のタイプ (出典)(Beaulieu 1984: 121-122)



33 人のイヌイット(49.3 パーセント)は、非政府関係の仕事や彫刻、狩猟に従事していた。その内訳は、次の通りである。7 人が村の生協で仕事をしていて、スノーモービル修理店、ハイドロ・ケベック(電力会社)、イヌイット航空では各 1 人が働いていた。23 人は賃金労働の仕事には就かずおもに彫刻や狩猟に従事していた。なお、賃金労働に就いている男性の大半は、週末や休暇中には狩猟活動や彫刻活動を行っていた。

1981 年におけるアクリヴィク村の総収入額は 1,628,800 カナダ・ドルであった(表 4.2)。おもな収入源は、賃金収入と政府支出の各種補助金(家族補助手当、失業手当、福祉金、高齢年金、ハンター・サポート・プログラム)からの収入であった。前者の総額は 1,278,750 カナダ・ドル(78.5 パーセント)で、後者の総額は 350,050 カナダ・ドル(21.5 パーセント)であった。このように収入総額の 8 割近くが賃金収入に由来する。そして賃金収入の大半が連邦政府や州政府、地方政府に直接関係する仕事に由来している。各政府からの補助金を考慮に入れると、アクリヴィク村のイヌイットの総収入の 72.8 パーセントは、連邦政府や州政府、地方政府に由来していた。このことからこの村のイヌイットの現金収入は政府に大きく依存していることがわかる。

|                 |             |        |
|-----------------|-------------|--------|
| 賃金や報酬           |             |        |
| 政府機関            |             |        |
| 連邦および州政府        | \$99,700    | 6.1%   |
| 地方政府および村        | \$736,200   | 45.2%  |
| 事業・企業           |             |        |
| 先住民経営           | \$406,850   | 25.0%  |
| 非先住民経営          | \$ 36,000   | 2.2%   |
| 小計              | \$1,278,750 | 78.5%  |
| 政府支出の補助金        |             |        |
| 家族補助金           | \$ 81,900   | 5.0%   |
| 失業手当            | \$ 33,900   | 2.1%   |
| 福祉手当            | \$106,000   | 6.5%   |
| 養老年金            | \$ 54,000   | 3.3%   |
| ハンター・サポート・プログラム | \$ 74,250   | 4.6%   |
| 小計              | \$350,050   | 21.5%  |
| 総計              | \$1,628,800 | 100.0% |

表 4.2 1981 年のアクリヴィク村のイヌイットの総収入 出典：(Beaulieu 1984:130)

一方、1981年のアクリヴィク村における総支出額は、1,407,075 カナダ・ドルである(表 4.3)。食料品、衣類、テレビ、スノーモービルなどの消費財は、総支出の 88 パーセントに相当する。家賃の支払いは 2 パーセントにすぎず、ガソリン代、電話代、輸送・交通費、レジャー代などのサービスにあたる割合は 9.2 パーセントであった。1981 年には 1 家族あたり年平均で 22,335 カナダ・ドルの支出であった(Beaulieu 1984: 130)。

|                     |              |        |
|---------------------|--------------|--------|
| 消費                  |              |        |
| 地元で購入               | \$ 827,350   | 58.8%  |
| 地元外から購入             | \$ 421,425   | 30.0%  |
| 小計                  | \$ 1,248,775 | 88.8%  |
| 住居                  |              |        |
| 家賃                  | \$ 28,900    | 2.0%   |
| サービス                |              |        |
| ガソリン代、電話代、輸送・交通費、余暇 | \$ 129,400   | 9.2%   |
| 小計                  | \$ 158,300   | 11.2%  |
| 総計                  | \$ 1,407,075 | 100.0% |

表 4.3 1981 年のアクリヴィク村における支出 出典：(Beaulieu 1984: 130)

#### (2)1986 年以降のアクリヴィク村の貨幣経済の傾向

1980 年代前半のアクリヴィク村の貨幣経済は、カナダ政府やケベック州政府の支出金に支えられていたが、この基本的な構造はその後に変化していない。次に 1986 年、1991 年、1996 年、2001 年のカナダ国勢調査のデータをもとに 1980 年代後半以降の動向を見てみよう。

アクリヴィク村におけるフルタイムとパートタイムの職数、平均年収を、男女別に 4 つの年について整理したのが、次の表 4.4 である。

1986 年にはフルタイムの職が 25、パートタイムの職が 55、1991 年にはフルタイムの職が 60、パートタイムの職が 100、1996 年にはフルタイムの職が 50、パートタイムの職が 110、2001 年にはフルタイムの職が 60、パートタイムの職が 75、存在した。フルタイムの職数は一般的に増加の傾向にあり、平均年収も男性で約 34,100 カナダ・ドル、女性で 29,400 カナダ・ドルにまで上昇している。パートタイムの職数や平均収入も 1996 年までは増加の傾向を示している。

|    |        | 1986 年     | 1991 年      | 1996 年      | 2001 年      |
|----|--------|------------|-------------|-------------|-------------|
| 男性 | フルタイム  | 15 人       | 45 人        | 30 人        | 30 人        |
|    | 年収     | CA\$23,787 | CA \$22,271 | CA \$30,321 | CA \$34,119 |
|    | パートタイム | 30 人       | 50 人        | 55 人        | 45 人        |
|    | 年収     | CA \$6,948 | CA \$5,609  | CA\$7,586   | CA \$12,905 |
| 女性 | フルタイム  | 10 人       | 15 人        | 20 人        | 30 人        |
|    | 年収     | CA\$18,830 | CA\$29,899  | CA\$26,969  | CA\$29,467  |
|    | パートタイム | 25 人       | 50 人        | 55 人        | 30 人        |
|    | 年収     | CA\$8,063  | CA\$6,264   | CA\$11,133  | CA\$10,125  |

表 4.4 アクリヴィック村におけるフルタイム・パートタイム男女別年収の変化(15 歳以上の人口) 出典：国勢調査(Statistics Canada, 1986, 1991, 1996, 2001)

また、個人や世帯の平均収入は一様に増加の傾向があり、1986 年に収入のある男性と女性の平均年収がそれぞれ約 11,500 カナダ・ドル、約 10,200 カナダ・ドルであったものが、2001 年には約 19,600 カナダ・ドル、約 17,200 カナダ・ドルへと上昇している。同様に 1 世帯あたりの平均年収も 1986 年には約 27,300 カナダ・ドルであったものが、2001 年には約 45,600 カナダ・ドルへ上昇している(表 4.5 と表 4.6 参照)。

|                 | 1986 年   | 1991 年   | 1996 年   | 2001 年   |
|-----------------|----------|----------|----------|----------|
| 収入のある 15 歳以上の男性 | 75 人     | 95 人     | 110 人    | 110 人    |
| 平均年収            | \$11,460 | \$16,487 | \$17,555 | \$19,644 |
| 中央値             | \$7,249  | \$11,744 | \$13,344 | \$14,816 |
| 収入のある 15 歳以上の女性 | 65 人     | 85 人     | 95 人     | 120 人    |
| 平均年収            | \$10,169 | \$12,640 | \$15,212 | \$17,223 |
| 中央値             | \$7,249  | \$7,728  | \$10,032 | \$14,048 |

表 4.5 アクリヴィック村における男女別個人平均年収 出典：国勢調査(Statistics Canada, 1986, 1991, 1996, 2001)

|      | 1986 年   | 1991 年   | 1996 年   | 2001 年   |
|------|----------|----------|----------|----------|
| 世帯数  | 50       | 70       | 95       | 90       |
| 平均年収 | \$27,310 | \$38,931 | \$36,164 | \$45,644 |
| 中央値  | \$26,249 | \$34,496 | \$29,664 | \$40,764 |

表 4.6 アクリヴィック村における世帯別の平均年収の変化 出典：国勢調査(Statistics Canada, 1986, 1991, 1996, 2001)

このように個人や世帯の年収は増加してきており、統計の上では、村人の経済状況は良くなってきているといえるが、その一方で、1990年代半ばを除けば、15歳以上の男性の失業率は約25パーセントから約30パーセント、15歳以上の女性の失業率は約20パーセントから約30パーセントの間を推移しているので、失業率が低下しているとはいえない(表4.7)。なお、カナダの国勢調査によると、失業とは労働力に参加していないことを指すが、イヌイットの狩猟や漁撈は、労働力への参加とはみなされておらず、それらの従事者は失業者とみなされている点に注意する必要がある。

|             | 1986 年 | 1991 年 | 1996 年 | 2001 年 |
|-------------|--------|--------|--------|--------|
| 男性失業率       | 27.3%  | 25%    | 13.3%  | 29.4%  |
| 女性失業率       | 29.4%  | 20%    | 14.3%  | 26.7%  |
| 15-24 歳の失業率 | 25%    | 60%    | -----  | 28.6%  |
| 25歳以上の失業率   | 16.7%  | 14.3%  | 13.0%  | 26.1%  |
| 全体の失業率      | -----  | 22.2%  | 10.3%  | 25.8%  |

表 4.7 アクリヴィク村における失業率の変化 出典：国勢調査(Statistics Canada, 1986, 1991, 1996, 2001)

アクリヴィク村の賃金労働からの総収入、政府からの直接的な補助金、そのほかの3つのカテゴリーで4つの年での割合の変化を整理したのが次の表4.8である。

|           | 1986 年 | 1991 年 | 1996 年 | 2001 年 |
|-----------|--------|--------|--------|--------|
| 賃金収入      | 67.8%  | 72.2%  | 73.9%  | 68.5%  |
| 政府の支出の補助金 | 31.1%  | 25.9%  | 25.6%  | 30.0%  |
| そのほか      | 1.1%   | 1.9%   | 0.5%   | 1.2%   |

表 4.8 アクリヴィク村における収入源の変化 出典：国勢調査(Statistics Canada, 1986, 1991, 1996, 2001)

この表4.8に基づくと、1996年までは賃金収入の割合が増大し、政府支出の補助金の割合が低下してきたが、2001年にはその逆に1986年の状態に戻っている。賃金労働の職種が基本的に変化していないため、アクリヴィク村の政府への経済依存状態は1980年代前半と同様に継続しているといえよう。1950年代と1980年代、1986年以降を比較すると、政府支出の補助金の割合が増加しており、村レベルで見ると、経済的な自立化は進展しておらず、むしろますます政府への依存度が高まっている傾向にある。

### (3)1986 年以降のアクリヴィク村の仕事と収入の内容とその変化

私が 1980 年代の半ばにアクリヴィク村で調査を開始した時と 2000 年時を比べると、イヌイットの仕事についての考え方は大きく変わってきている。かつては賃金労働を基本とする定職に就こうとするイヌイットの数も、実際に長期間にわたり定職に就いているイヌイットの数も少なかったが、現在では、男女を問わずほぼすべてのイヌイットが村の中で定職に就くことを望んでいる。

1980 年代半ばに、アクリヴィク村の中で 1 年以上にわたって賃金労働の定職に従事していたのは、生協のマネージャーと滑石彫刻購入担当係各 1 人、小中学校の用務員 2 人、小中学校のイヌイット語の教師 1 人、イヌイット航空のエージェント兼郵便局員 1 人、看護所の通訳 1 人、発電所員 1 人、村役場の配水係やし尿処理係ら約 5 人の計 13 人程度であった。生協や村役場には定職や臨時職があるほかに、夏から秋にかけては、家屋建築や道路工事など 3 ヶ月間の季節的な労働雇用があった。当時のイヌイットの成人男性は、週 5 日間毎日 8 時間拘束される職に就くと、好きな時に狩猟や漁撈、キャンプに行くことができないといって、長期間同じ仕事に従事することはなかった。イヌイットは定職に就いて恒常的に現金を獲得することよりも、自由に狩猟・漁撈活動に従事することを好んだのである。彼らは 3 ヶ月間から 6 ヶ月間賃金労働に就いた後にやめ、3 ヶ月間から 6 ヶ月間を失業手当に頼るという就業パターンを繰り返していた。これは失業手当を利用して、狩猟・漁撈活動を行なうというイヌイットによる経済戦略のひとつであった。

アクリヴィク村をはじめとする極北の村には、就労可能な人口に比べて定職の数が絶対的に不足している。したがって、村役場の担当者は村関係の季節労働や臨時の仕事がある場合には、すべての世帯に仕事がいきわたるように配慮しながら、雇用をしていた。定職を好まないとはいえ、村の中での生活や狩猟・漁撈を行うためには、現金が必要である。賃金労働の定職に就かないイヌイットは、高齢年金、家族扶養手当、福祉金、失業手当など政府支出の現金や、滑石彫刻の制作・販売で得た収入を利用し、家賃や電話代を支払ったり、生活用品や狩猟・漁撈に必要な物資を購入していた。1983 年以前は、アザラシやホッキョクギツネの毛皮の販売も重要な収入源であった。

1996 年当時のアクリヴィク村の職業は、ほぼ次のようである。村役場関係の定職は、村長 1 人、秘書 2 人、村の総合マネージャー 1 人、会計係 1 人、住宅係 1 人、福祉係 1 人、配水係 2 人、配油係 2 人、ゴミ収集係 2 人、し尿収集係 2 人、修理係 1 人、レクリエーション係 1 人がいる。村役場関係のパートタイムの仕事としては季節的な土木・建築関係の仕事が複数、村会議員(6 人)の仕事(パートタイム)がある。生協には、総支配人 1 人、購買マネージャー 1 人、会計 2 人、在庫係 2 人、レジ係 2 人、ガソリン販売 1 人など計 9 人がいる。このほかに臨時の生協ホテルや荷役の仕事が複数ある。学校関係には、ヨーロッパ系カナダ人の教師が 6 人、イヌイットの教師が 5 人、秘書が 2 人、教育長 1 人、用務員 1 人がいる。このほか学校における掃除などのパートタイムの仕事が複数ある。発電所には常勤 1 人と非常勤 1 人がいる。郵便局員はパートタイム 1 人、イヌイット航空は常勤 2 人、

空港管理・整備の仕事と気象予報の仕事が3人である。看護所にはヨーロッパ系カナダ人の看護師2人、イヌイットの通訳1人、パートの掃除係1人がいる。これ以外にも、マキヴィクやカティヴィク地方政府関係のパートタイムの仕事が複数ある。また、エコツーリズムや小型商店を経営するイヌイットがいる。アクリヴィク村でイヌイットが就くことができる実際の職の数は、約45余りで、村全体の世帯数約90世帯(うち15は1人世帯)よりはるかに少ない。

フルタイムの職とパートタイムの職を合わせれば130人余りの人が何らかの形で現金収入を得ていた。アクリヴィク村の成人の平均年収は約16,500カナダ・ドル(ケベック州全体は約23,200カナダ・ドル)であった。夫婦合わせての年収の平均は、38,500ドル(ケベック州全体は約53,200カナダ・ドル)であった。極北地域では、物価がカナダ南部と比べ1.5倍ほど高いため、生活は決して楽ではない。イヌイットはそうした厳しい現金収入の一部を狩猟・漁撈活動のために使用している。

1980年代半ばと1996年を比べればわかるように、賃金を得ることができるフルタイムの職やパートタイムの職の数は、増加した。ヌナヴィク地域では雇用の62パーセント以上が村役場や学校などパブリック・セクターであり、カナダ政府やケベック州政府の経済分野での役割が大きいといえる(Duhaime 1999; Chabot 2003)。1990年代以降は、より多くの村人が月曜日から金曜日まで村内で働き、週末か1日の仕事が終わってから狩猟・漁撈に行くようになった。このためウィークデーに狩猟や漁撈に従事するのは老人や無職の者のみとなった。村人の経済戦略もできるだけ現金を稼ぐことができるフルタイムの職に長期間就くことへと変化した。このような傾向は2004年現在でも認められる。

現在のイヌイットは、生活のすべての面において現金が必要であり、重要であることをはっきりと認識している。したがって、子供たちにはしっかりした教育を受けさせ、高収入の定職に就くことができることを親たちは希望している。イヌイットの仕事観も変わりつつあるのである。

### 第3項 アクリヴィク村の生業経済

1980年代以降におけるヌナヴィク・イヌイットの生業活動には、(1)アザラシやホッキョクギツネの毛皮の価格の低迷、(2)定職に就くことによる生業活動の時間的な制限、(3)狩猟・漁撈経費の高騰などの負の要因と、(4)ハンター・サポート・プログラムの導入など正の要因が存在した。現在の生業活動は、現金収入で購入したライフルやガソリン、スノーモービル、船外機付きカヌーを利用して行われるという意味で、貨幣経済の上に成り立っている活動であるといえよう。

生業活動は商業目的ではないので経済収支の点から見ると金銭的な利益を生み出すことはない(注3)。しかし、イヌイットは狩猟や漁撈などの生業活動を行うことによって、好みの食料を入手することができるし、生業活動に従事することやツンドラの大地や海氷上で過ごすことで、文化的かつ精神的な満足を得ることができるのである(注4)。

1970年代半ばから2004年にかけてアクリヴィク村の生業活動の年周期は基本的には大きく変化していない。夏季はホッキョクイワナ漁とアザラシ猟、秋季はセイウチ猟、シロイルカ猟、アザラシ猟、カリブー猟、冬季は湖上での漁撈やカリブー猟、春季から夏季にかけてはアザラシ猟や鳥猟がおもに行われている。村のハンターが利用しているGPS(全地球位置把握システム)によると、もっとも活動的なハンターの行動範囲は最大で村から半径130キロメートル以内である。そして彼らの狩猟・漁撈は、スノーモービルや船外機付きカヌーを利用した村からの日帰りの活動を基本としている。

次に、1999年時点のアクリヴィク村のイヌイットの生業活動について紹介する。それは次の表4.9に示す通りである。

|             | 月(1年) |   |   |   |   |   |   |   |   |    |    |    |
|-------------|-------|---|---|---|---|---|---|---|---|----|----|----|
|             | 1     | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
| 主な捕獲対象物     |       |   |   |   |   |   |   |   |   |    |    |    |
| ホッキョクイワナ    | ○     | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ◎ | ◎ | ○ | ○  | ○  | ○  |
| 陸封性ホッキョクイワナ | ◎     | ◎ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○  | ◎  | ◎  |
| ホワイトフィッシュ   | ◎     | ◎ | ○ | ○ | ○ | ○ |   |   |   | ○  | ◎  | ◎  |
| ワモンアザラシ     | ○     | ○ | ◎ | ◎ | ◎ | ○ | ○ | ○ | ○ | ◎  | ○  | ○  |
| アゴヒゲアザラシ    | ○     | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ◎  | ○  | ○  |
| シロイルカ       |       |   |   |   |   |   |   | ○ | ○ | ○  | ○  | ◎  |
| セイウチ        |       |   |   |   |   |   |   |   |   | ◎  |    |    |
| ホッキョクグマ     | ◎     | ◎ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |   |   |    | ◎  | ◎  |
| カリブー        | ◎     | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ○ | ○ | ○ | ○  | ○  | ○  |
| ハクガン        |       |   |   |   |   | ○ | ○ | ○ | ○ |    |    |    |
| カナダガン       |       |   |   |   | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |    |    |    |
| カモ          |       |   |   | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○  |    |    |
| カモの卵        |       |   |   |   |   | ○ |   |   |   |    |    |    |
| ライチョウ       | ○     | ○ | ○ | ◎ | ◎ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○  | ○  | ○  |
| ベリー類        |       |   |   |   |   |   |   | ○ | ○ |    |    |    |

表 4.9 アクリヴィク村の狩猟・漁撈活動の1年(1999年現在)

(注) 網掛けは中心的な捕獲物(食料)を示す。○は捕獲期、◎は捕獲の最盛期を示す。

#### (1)魚類の捕獲

アクリヴィク村周辺のケーブ・スミス島地域は1年を通して魚類が豊富であり、もっとも重要な食料である。この地域に多い魚種は、ホッキョクイワナ、コクチマス(lake trout)、ホワイトフィッシュ、陸封性ホッキョクイワナ、タラ、カジカなどである。1980年の統計

によると、アクリヴィク村のイヌイットが捕獲した魚類の総重量は、捕獲した獲物の総重量の 50.7 パーセントを占めていた(Beaulieu 1984:129)。

ホッキョクイワナは夏と秋の時期のもっとも重要な食料である。ホッキョクイワナは冬を内陸で過ごし、それ以外の時期を河川や沿岸海域で過ごす回遊性の魚類である。アクリヴィク村のイヌイットはこの魚を 1 年中、捕獲することができるが、釣漁や網漁の最盛期は 7 月から 9 月までである。秋になると河川を遡上するので河川で、冬から翌年の春にかけては内陸の湖でおもに漁網を利用して捕獲する。村人は楽しみとして湖氷上で、疑似餌を利用して釣ることがある。夏の漁場は村から船外機付きカヌーで 30 分くらいの沿岸で、冬から翌年の春にかけての漁場は、スノーモービルを利用すれば 2 時間以内で行くことができる湖である。前者の場合には、イヌイットは 1 日に 1 度か 2 度、漁網をチェックする。後者の場合には、イヌイットは 2、3 日に 1 度くらいの割合で漁網をチェックする。

網漁も釣漁も基本的にはひとりで行うことのできる活動であるが、世帯員 2 人もしくは世帯を異にする 2、3 人の男性が一緒に漁場に行くことが多かった。しかしながら 1983 年にハンター・サポート・プログラムが導入されてから、アクリヴィク村の北方に位置するクーヴィク地域でのホッキョクイワナの網漁が村によって組織され、実施されるようになった。1980 年代から 1990 年代前半にかけては毎年 11 月の第 1 週頃に氷雪の状況がよければ、20 人以上のイヌイットがスノーモービルでクーヴィク地域へ行き、約 1 週間、湖氷上から各自の漁網を仕掛け、ホッキョクイワナを捕獲した。これによって捕獲されたホッキョクイワナはすべてハンター・サポート・プログラムの資金で村によって買い上げられ、村の全世帯に同じ数の魚が分配された。村内の全世帯に分配した後に魚が残った場合には、ほかの村に売ることもあった。やがて 1990 年代後半になると、アクリヴィク村はクーヴィク地域でのホッキョクイワナ漁を組織することを中止し、そこへ漁撈に行ったハンターから漁獲物を買上げ、それを村人へ無償で再分配するようになった。

コクチマスは、アクリヴィク村周辺の内陸部にある湖で漁網を利用して捕獲される。この捕獲の最盛期は 4 月から 5 月にかけてである。陸封性ホッキョクイワナはコクチマスをとるのと同じ湖で 1 年中捕獲することができるが、最盛期は 9 月である。また、アクリヴィク村のイヌイットは、ホワイトフィッシュを 10 月から翌年の 6 月まで捕獲する。ホワイトフィッシュ漁の最盛期は 11 月頃である。タラやカジカはアクリヴィク村周辺の沿岸で一年中容易に釣ることができる。タラやカジカはアクリヴィク村のイヌイットにとっては二次的な食料源で、食料が不足したときにのみ捕獲される。これらの魚類の網漁や釣漁は個人で行うことができるが、漁場には世帯員数人や世帯を異にする 2、3 人で行くことが多い。

## (2)海獣の捕獲

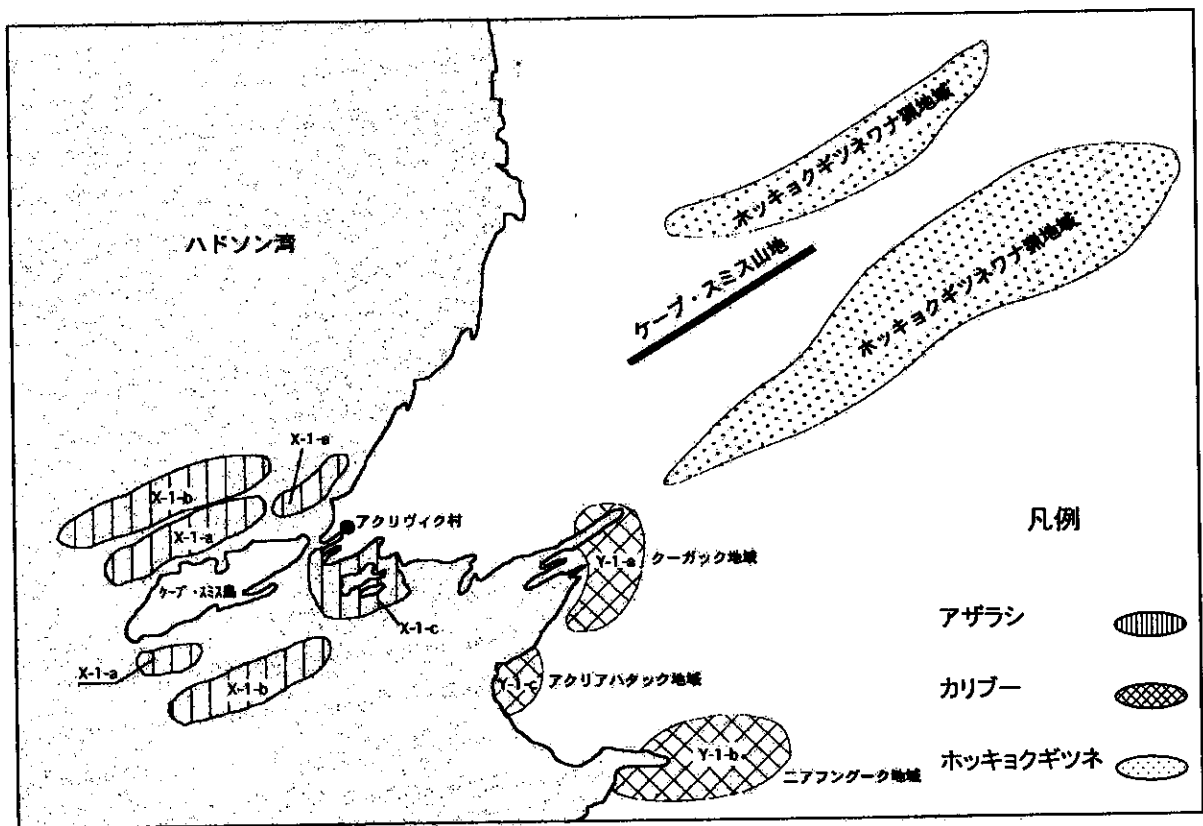
アクリヴィク村のイヌイットは、ワモンアザラシやアゴヒゲアザラシを狩猟する。1980 年の統計によると、アクリヴィク村の獲物の捕獲総量の 32.7 パーセントは、海獣類であっ



た。

また、村有大型狩猟用ボートの利用を開始した 1985 年から、アクリヴィク村のイヌイットはシロイルカやセイウチの捕獲を本格的に再開した。

ケープ・スミス島地域の海域には一年中、多数のワモンアザラシとアゴヒゲアザラシが生息している。アクリヴィク村のイヌイットは、これらのアザラシを 9 月から 10 月頃にはケープ・スミス島周辺、クーガック湾(Kuuraq Bay)、ナイト湾(Knight Harbour)で狩猟する(地図 4.1 の X-1-a)。また、彼らは冬にはケープ・スミス島の南側と北側に形成された海氷の縁部でアザラシを捕獲する(地図 4.1 の X-1-b)。何人かのイヌイットは 12 月中旬から翌年 2 月の終わりまで、海氷上に形成されたアザラシの呼吸穴を利用した狩猟を行っている。5 月や 6 月にはモスキート湾の海氷上(地図 4.1 の X-1-c)で日なたぼっこをしているアザラシを狩猟する。



地図 4. 1 アクリヴィク村周辺のおもな狩猟地・ワナ猟地

1960 年頃から 1983 年頃にかけては、イヌイットはワモンアザラシやアゴヒゲアザラシの肉を食料とし、それらの毛皮を現金獲得のための交易品としていた。しかし、ヨーロッパにおけるアザラシの毛皮の輸入禁止の影響を受けて、アザラシの毛皮の価格(例えば、ワ

モンアザラシの毛皮 1 枚は 5 カナダ・ドルになった)が暴落したため、1985 年の時点では生協にその毛皮を売るイヌイットはいなくなった。それ以降、イヌイットはアザラシをおもに自家消費用に捕獲している。しかし 1990 年代末からマキヴィクは余剰金をヌナヴィク社会に還元する一手段として、年間総額 100 万カナダ・ドルを生業活動の活性化のために使用するようになった。各村役場は配分されたこれらの資金で、アザラシ皮やアザラシ皮の製品を村人から買い取り始めた(第 4 章の表 4.14 を参照)。村人はこれらで得た現金を生活のためや生業活動のために使用することができるようになった。

アクリヴィク村には 5 つのアザラシ狩猟の方法が存在している。第 1 番目の方法は、夏の海上における船外機付きのカヌーを利用したライフル猟である。この狩猟は多くの場合、1 隻の船外機付きカヌーに乗り込む 2 人のハンターで行われる。1 人がカヌーの前部からライフルを撃つ役割を担当し、もう一人は船尾で船外機の舵をとる。呼吸のために海面に頭部を出すアザラシを発見すると、船外機付きカヌーで追跡し、接近する。そして射程距離内の海面に頭部を出していれば、ライフルで射撃する。銃弾が命中すれば、アザラシが海中に沈没する前に接近し、紐に結び付けられた鉈頭が着装された鉈を打ち込む。鉈頭が結びつけられた紐には浮きが付けられており、獲物が沈まないように工夫されている。そしてハンターは紐を引っ張り、アザラシをカヌーの上に引き上げるか、カヌーの側面に結び付け、解体場所まで運搬していく。

第 2 番目の狩猟方法は、冬場の海氷縁部からのライフル猟である。このアザラシ猟には 2、3 人のハンターが必要である。まず、ハンターたちは小型のカヌーを乗せたソリをスノーモービルで引いて、海流が早いために形成されるポリニア(不凍海域)に行く。そして回遊しているアザラシを発見すると、海氷縁部からライフルで仕留める。そして 1 人ないしは 2 人のハンターが小型のカヌーに乗り、櫓を漕いで接近し、紐に結び付けられた鉈頭が着装された鉈を打ち込む。そしてアザラシを海氷上へと運搬する。この猟はきわめて大きな危険を伴うが、生産性の高い狩猟方法である。

第 3 番目の狩猟方法は、春に海氷上で日なたぼっこをしているアザラシを狙ったライフル猟である。春になるとアザラシは海氷上に出て、頻繁に日なたぼっこをする。通常、2 人のハンターが 1 組となり、スノーモービルで狩猟場に行く。アザラシを発見すると、白色の布製盾と帽子を利用して身を隠しながら接近する。射程距離に入ると、ライフルで仕留める。

第 4 番目は巣穴を利用した鉈猟である。春になると、アザラシは海氷内に子供を出産し、育てるための巣穴を形成するが、鉈を利用して巣穴にいる子供のアザラシを捕獲することがある。

第 5 番目は、冬に海氷上に形成される呼吸穴を利用したライフル・鉈猟である。この狩猟方法は、アクリヴィク村のイヌイットがプヴィルニツック村に住んでいた 1960 年代から 1970 年代にかけては、狩猟効率があまりよくないために、ほとんど実施されていなかった(Balikci 1964)。しかし、1970 年代の後半から彼らは、再度、この狩猟方法を復活させた。

この復活の理由は、伝統的な狩猟方法を継承したいということや、この狩猟方法はイヌイットにとって楽しいものであることなど心理的な満足感であった(部分的にはレクリエーション的ある)。アクリヴィク村でこの狩猟方法が実践されるのは、12月半ばから2月末までの、形成された海氷が新しく、薄い状態にある時期だけである。

イヌイットは、この狩猟に参加するハンターの数が多ければ多いほど、より多くのアザラシを捕獲できると考えている。しかし、現在のアクリヴィク村では同時に5人以上のハンターがこの狩猟に協力しながら参加することはまれである。多くの場合、狩猟集団は4人以下で形成される。例えば、4人のハンターが参加した場合には、3人のハンターが各自1個ずつ呼吸穴を見張り、残りの1人のハンターがそれらの呼吸穴以外の離れた所にある穴を歩いて回っては、音を立てて威かくし、ハンターが見張っている呼吸穴に行くように仕向ける(注5)。呼吸穴で待ちかまえるハンターは、音を立てず、風が正面から顔に当たらない方向に立ち、かつ自らの影が呼吸穴の上にかからないように注意しながらライフルか離頭鉈を携えて、アザラシが現れるまでじっと待ち続ける。そしてアザラシが呼吸のために穴に近づいてきた時に、ハンターはアザラシの頭部に離頭鉈を打ち込むか、ライフルを射撃した後で離頭鉈を打ち込む。鉈頭には紐が結び付けられており、イヌイットは呼吸穴をナイフや鉈の本体を利用して広げ、アザラシを引き上げる。ワモンアザラシの場合には1人のハンターでも引き上げることができるが、大型のアゴヒゲアザラシの場合には、複数のハンターが協力して引き上げる。またイヌやスノーモービルを利用して引き上げることがある。この方法はときには何時間待ってもアザラシが呼吸穴に出現しないこともあるため、非常に忍耐を必要とする狩猟方法である。

ここで紹介したように大半のアザラシ猟は、2、3人以下で実施することができる。狩猟集団は通常、父と息子たちもしくはオジとオイ、イトコ同士、兄弟、友人から構成される。

アクリヴィク村のハンターは、ケープ・スミス島周辺でシロイルカやセイウチを発見すると捕獲を試みるが、1年あたりの捕獲数は少ない。1975年頃から(村有の大型狩猟用ボートの使用が始まる)1985年までの時期には、村に大型狩猟用ボートが存在しなかったので集団でマンセル島やサルスベリー島にセイウチ猟に出かけることもなかったし、クーヴィク湾やニアフングーク湾にシロイルカ猟に出かけることもなかった。しかし、1985年から村有の大型狩猟用ボートとハンター・サポート・プログラムを利用して、1年に1度、組織的なセイウチ猟とシロイルカ猟が実施されるようになった。この狩猟については、第5章のハンター・サポート・プログラムに関する箇所で詳述することにしたい。

### (3)陸獣類

アクリヴィク村のイヌイットは、ケープ・スミス島地域でカリブー、ホッキョクギツネ、ホッキョクグマ、ホッキョクウサギなどを捕獲する。1980年の統計資料によると、これらの陸獣類が捕獲総重量に占める割合は、7.9パーセントであった(Beaulieu 1984:129)。

一時は姿を消していたカリブーも1970年代半ば以降、アクリヴィク村周辺に再出現し、

狩猟をすることができるようになった。この地域におけるカリブー猟の時期は 1 月から 9 月にかけてである。夏や秋には、アクリヴィク村のハンターはクーガック(Kuuraq, 35C-12 011)地域かニアフングーク(Niaqunnguuk, 35C-12 016)地域においてカリブーを狩猟する(地図 4.1 の Y-1-a, Y-1-b, Y-1-c を参照)。2、3 人のハンターがチームを組み、1 隻の船外機付きカヌーに同乗して、狩猟地へと行く。アクリヴィク村からクーガック地域までは約 3 時間、ニアフングーク地域まで約 5、6 時間かかる。ハンターはそれぞれクーガック川の河口とニアフングーク川の河口に到着すると、まずテントを立て、キャンプ地を設定する。それから船外機付きカヌーでそれぞれの川を上流へと進み、カリブーの狩猟場へと向かう。カヌーから川沿いにいるカリブー(の群れ)を発見できる場合もあるが、多くの場合は上陸してからカリブーの群れを探す。群れを発見すると、徒歩でツンドラの上を追跡する。射程距離まで近づき、「.222」ライフルで射撃し、獲物はその場で解体する。一部はボートまで肩に担いで運ぶが、残りはコケをはぎツンドラの上に肉を置き、その上をコケで覆い貯蔵する。貯蔵された肉は冬にスノーモービルで取りにくる。狩猟チームは、兄弟もしくはイトコ、父子、友人から構成されることが多い。夏や秋には 2、3 日かけてカリブー猟に出かけることが多い。

冬から春にかけてはスノーモービルを利用してアクリヴィク村の南方にあるアクリアハタック地域(Akuliaqattaq, 35C-12 001)へとカリブー猟に出かける(地図 4.1 の Y-1-c)。冬場のカリブーのライフル猟はスノーモービルを利用できるので、1 人でもでかけることができるが、2、3 人で出かけることが多い。アクリヴィク村のイヌイットは、遠くても村から片道 4、5 時間以内の場所でカリブー猟を行うことが多く、原則は日帰りである。狩猟方法は簡単である。冰雪上にカリブーの足跡を発見すると、スノーモービルで追跡する。そしてカリブーを発見すると、身体を隠しながら徒歩で接近し、射程距離に入るとライフルで仕留める。獲物はその場で解体し、ソリに肉や皮を乗せ、スノーモービルでソリを引いて村に帰る。このきわめて簡単とされる狩猟をあえて複数で行うのはスノーモービルが故障した場合の危険を回避することがおもな理由である。

ホッキョクギツネは 1920 年代から 1975 年頃まではこの地域のイヌイットにとっては、その毛皮が交易品として特に高値で売ることができたので、重要な資源であった。しかしながら 1975 年頃からホッキョクギツネの価格が低下し始め、1985 年頃には 1 枚の値段がかつての 27 カナダ・ドルから 13 カナダ・ドルまで落ちた。さらにホッキョクギツネのワナ猟の経費が高騰したので、アクリヴィク村のイヌイットは交易のためのワナ猟をやめ、毛皮を地元の生協に売ることをやめた。彼らは、パーカーのフードの縁部用の毛皮が必要などきにのみ、ホッキョクギツネを捕獲するようになった。ホッキョクギツネのワナ猟は、10 月中旬から翌年の 4 月にかけて、アクリヴィク村から東方へと内陸に延びる山地の南北両方の緩やかな斜面地域で実施される(地図 4.1 を参照)。

アクリヴィク村のハンターは冬にケーブ・スミス島やその周辺の海氷上でホッキョクグマを発見した場合には、ライフルで捕獲する。ホッキョクグマの毛皮は高値で売ることが

できる上に、その肉は中高年のイヌイットの人々にとって希少な食料として好んで食されている(注 6)。また、11 月から翌年の 4 月にかけてイヌイットはホッキョクウサギを、ライフルを利用して狩猟することがある。このウサギはイヌイットの副次的な食料となる。

#### (4) 鳥類とその卵

アクリヴィク村のイヌイットにとって、鳥類や鳥の卵は重要な食料である。1980 年の統計資料によると、ハクガンやカナダガンなど鳥類とケワダガモの卵などの捕獲重量は、獲物全体の捕獲総重量の 6.9 パーセントであった(Beaulieu 1984:129)。

アクリヴィク村の周辺地域では、ハクガンの狩猟期は 6 月から 9 月にかけて、カナダガンの狩猟期は 5 月から 9 月にかけてとされている。ケーブ・スミス島周辺ではケワダガモの狩猟期は 4 月から 10 月で、この地域の小島では 6 月になるとケワダガモの卵を採集することができる。ウミガラスやアビは 11 月に捕獲され、ライチョウは 1 年中とれるが、特に 4 月に捕獲されることが多い。

イヌイットは鳥類をショットガンかライフルで仕留める。ハンターとその家族や、隣近所の主婦や子供が集まって卵の採集に従事することはあるが、鳥を捕獲するためや、卵を採集するために狩猟集団を特別に編成することはない。これらの狩猟や卵の採集は基本的に個人や家族単位で実施される活動である。

#### (5) そのほかの獲物・採集物

極北地域には植物性の食料資源はきわめて乏しいが、夏になるとケーブ・スミス島やアクリヴィク村近くの沿岸部でベリー類(コケモモ、*paurngaq* 学名 *Empetrum nigrum* やガンコウラン、*arpiq* 学名 *Rubus chamaemorus*)が繁殖するため、女性や子供が中心となって採集する。また、夏にはケーブ・スミス島や村の近くの沿岸でコンブ、ウニ、二枚貝を採集することができる。採集は個人でもできるが、キャンプ中などは 2 家族以上が参加する場合もある。

また、1 月から 2 月には沿岸近くの海氷上に穴を開け、長い棒の先にモップやカゴを付け、それを利用して海底からウニや二枚貝をとっている。この採集は、寒気の中、海氷に穴を開ける作業を必要とするため、おもに男性 2 人以上によって行われる。二枚貝は村人に実費か低価格で売買されることがある。

#### 第 4 項 1986 年の経済活動とキャンプ

すでに述べたように 1986 年の時点で、アクリヴィク村の成人男性の大半は村の中での賃金労働の定職に就くか、現金を稼ぐために滑石彫刻の制作に従事していた。フルタイムの賃金労働に就いている人は 1 年あたり最大で 1 ヶ月未満の休暇しかとることができなかった。すなわち賃金労働に従事すると、休暇時か週末、仕事が終わった後しか狩猟やキャンプに行くことができないことを意味していた。一方、賃金労働に従事していないハンター

や滑石彫刻家の場合には、好きな時に狩猟やキャンプに行くことができたが、配偶者が村の中に定職を持っている場合や逆に十分な現金収入源がない場合には、必要なガソリン、ライフルの銃弾、携帯用の食料品を購入することができないために、狩猟やキャンプに行くことができないことがあった。

1986年時点のアクリヴィク村の生業活動は次のようであった。

日が長くなり、学校が長期の休みに入る5月になると、イヌイットの家族の多くは、2、3週間から2、3ヶ月間の長さでキャンプに出始める。キャンプの長さは、家族の中に賃金労働に就いている人がいるかどうかによって短くなることがある。世帯主夫婦のいずれか、もしくは両方が一定の賃金労働に就いている場合には、キャンプの期間は3週間未満であったり、まったく行かなかったりする。

1986年のおもな春キャンプ地は、

①クーヴィク(Kuuvik, 35F-12 013)、  
②カンギルシルーヤック(Kangirsiluujak, 35F-12 018)、③イヤイツイット(Ijaittuit, 35F-04 021)、  
④ハユルツヴィク(Qajurtuvik, 35F-04 018)、⑤ケープ・スミス島、  
⑥シミウタック(35D-16 016)、⑦サブガーユク(Sapugaajuk 35c-13 001)、  
⑧ヒキルタールク(Qikirtaaluk, 35D-16 002)、⑨シテイタリク(Sititalik, 35C-13 004)、  
⑩クーラック(Kuuraq 35C12 011)、⑪アクリアハタック(35C-12 001)、  
そして⑫ニアフングート(35C-11 014)であった(地図4.2)。これらの春キャンプ地の周辺でイヌイットは(湖で)ホッキョクイワナなど魚や、カナダガン、ハクガン、ライチョウなど鳥を捕獲し、ときには滑石彫刻を制作する。これらのキャンプ地は、現在のアクリヴィク村のイヌイットの祖父母たちがこの季節に生活していた地域である。

6月の終わりまでには、ケープ・スミス島地域の地面を覆っていた冰雪はほぼ姿を消す。何人かのイヌイットは学校の新学期が

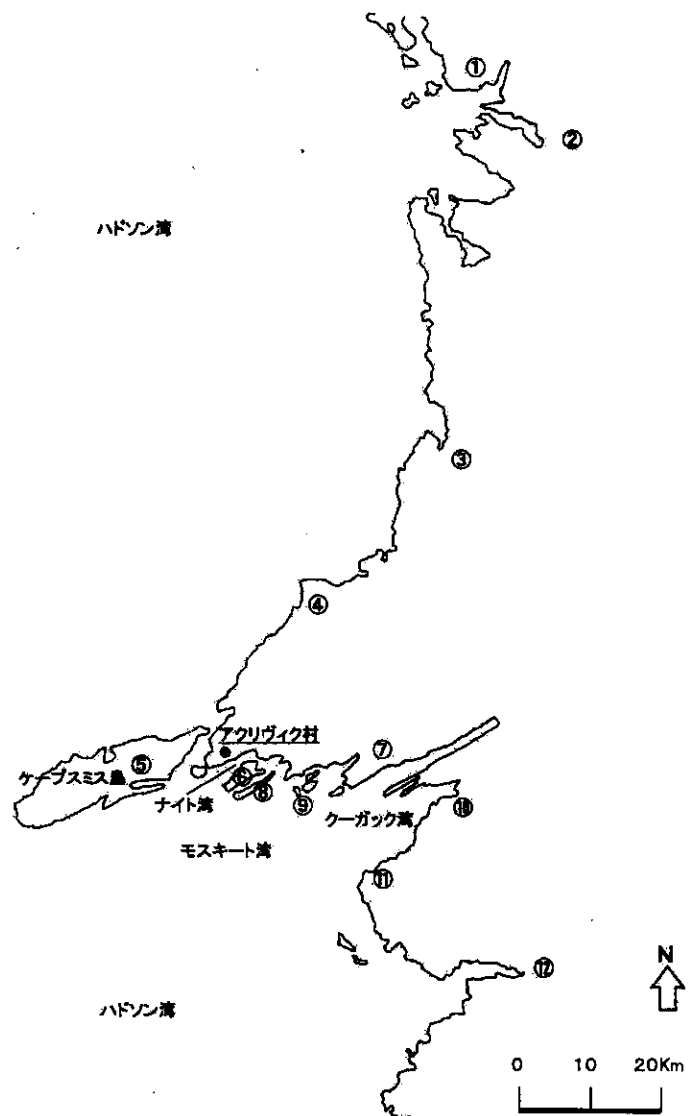


図4.2 アクリヴィク村周辺のキャンプ地

始まる8月中旬までキャンプ地にとどまり続けるが、大半のイヌイットは村に帰る。

7月から8月にかけては、自宅の横やアクリヴィク村の海岸に宿泊用のキャンパス布地製のテントと滑石彫刻を行う作業用テントを立てるイヌイットが多い。彼らは夜には自宅ではなく、テントで眠る。天気の悪い日や狩猟・漁撈に行かない日には、作業テントに数人のイヌイットが集まって世間話をしながら滑石彫刻を制作する。この時期には、そうした活動と平行してアクリヴィク村の周辺の沿岸でホッキョクイワナを漁網で捕獲したり、ケープ・スミス島や村の近くの沿岸でハクガンやカナダガンをライフルで狩猟したり、ケープ・スミス島の周辺やクーガック湾でアザラシ猟に従事したりする。また、ベリー類の採集をすることもある。8月にははるか南方にあるリッチモンド湾へ村有の大型狩猟用ボートを利用してハンターがシロイルカ猟に行った。

9月には、村の周辺の沿岸でホッキョクイワナの網漁を続け、村の周辺の海域でアザラシ猟を続ける。また、村有の大型狩猟用ボートを利用して、マンセル島かサルスベリー島へセイウチ猟に行くとともに、ニアフングークへカリブー猟に行った。10月には、ケープ・スミス島周辺の海域でアザラシ猟を行ったり、アクリヴィク村の近くにある湖でホッキョクイワナの網漁を行ったりする。そして雪が地面を覆う10月中旬頃には、ホッキョクギツネのワナ猟を開始する。11月には、アクリヴィク村の近くやクーヴィク地域、イヤイツイット地域、クーガック地域にある湖でホッキョクイワナの網漁が行われる。

11月頃から翌年の5月頃にかけては、スノーモービルを利用して内陸に行き、カリブー猟を行ったり、海氷上の呼吸穴や海氷縁部においてアザラシ猟を行ったりする。その一方で多くのイヌイットは木造の彫刻小屋で、滑石彫刻制作に従事する。4月になると、ライチョウや海氷上で日なたぼっこをしているアザラシを、ライフルを利用して狩猟する。また、湖でのホッキョクイワナの網漁も行っていた。

#### 第5項 1986年以降の生業活動とキャンプ

アクリヴィク村における生業活動の年周期は、1980年代半ばから2000年頃にかけて大きな変化は見られなかった。一方で、若者の生業離れ、日帰りの狩猟・漁撈が一般化したこと、狩猟範囲が狭くなったこと、狩猟・漁撈活動の個人化の進展、20歳代から30歳代の男性が冬の狩猟・漁撈活動にあまり従事しなくなったことなどの変化が見られた。特に、若者の生業離れは、おもに(1)賃金労働による時間の制約、(2)狩猟・漁撈道具や装備を購入するためには多額の現金が必要であること、(3)学校教育の長期化が要因である(岸上 1999c)。

1998年にアクリヴィク村のイヌイットの10世帯がアマゴシヴィク(Amarusivik)において、3世帯がナヌシヴィク(Nanusivik)において長期的なキャンプを行った。このふたつのキャンプは、村から船外機付きボートで30分以内の所にあった。それは5月末から8月まで約3ヶ月間維持され、イヌイットはその間、アクリヴィク村とキャンプ地との間を行き来していた。このキャンプに参加した世帯主はほとんど全員が50歳以上であった。そのほかのキャンプは、1から3世帯で形成され、キャンプ期間は1週間以内の事例が大多数で

あった。これらの事例から全体的な傾向として、キャンプ期間の短縮化とキャンプ地までの近距離化が進んでいることがわかる。

さらに 1990 年代の中頃から、アクリヴィク村から 30 キロメートル以内の沿岸部や小島にキャンプ小屋を建てる村人が多くなってきた。また、その中には内陸部にも小屋を建てるハンターが出てきた。アクリヴィク村の中高齢者は、狩猟や漁撈のために、また週末を過ごすためにこれらの小屋を利用するようになった。

以上のような変化と現状をふまえた上で、現代のイヌイットの狩猟・漁撈活動について、4 つの点を強調しておきたい。第 1 には、狩猟・漁撈活動を行うためにはガソリンなどを購入する現金が必要であり、かつ獲物を商業的に販売し、現金を稼ぐことが法的に許可されていないために、自立的な経済活動ではない。第 2 に、イヌイットの食料の 60 パーセント以上はカロリー的に見ると南から持ち込まれた食料である。にもかかわらず、地元の食料資源や狩猟・漁撈活動はイヌイットにとって文化的にそして社会的に重要であり続けている。第 3 に、ライフやスノーモービルの利用によって、現在のイヌイットの狩猟・漁撈活動は集団活動というよりも少数の個人を単位とした活動となった。第 4 に、地元で捕獲される獲物はハンター間やほかの村人との間で分配され続けている。

#### 第 6 項 アクリヴィク村におけるハンター・サポート・プログラムの利用

ヌナヴィク地域においてはハンター・サポート・プログラムを利用した村人への食料の供給や分配が 1984 年から開始された。ここではアクリヴィク村においてハンター・サポート・プログラムがどのように利用されてきたかを紹介する。

##### (1)ハンター・サポート・プログラムとは何か。

1970 年代初頭には、ホッキョクギツネやアザラシの毛皮の価格が低迷したために、イヌイットはそれらの毛皮を売って現金を獲得し、その現金を利用して狩猟・漁撈活動を続けていくことが困難になりつつあった。しかし、当時のイヌイットは、狩猟・漁撈活動を、さらにはそれに基づく生活を保持し続けたいと希望していた。このため、1975 年に締結された「ジェームズ湾および北ケベック協定」(Section 29.05 と Section 29.022、付録 2)において生業活動を促進するような経済プログラムの創出が提案された。このハンター・サポート・プログラムの目的(ミッション)は、生活様式として崩壊の危機に瀕したイヌイットの狩猟や漁撈、ワナ猟など生業活動を促進し、永続化させ、かつそのような活動から得ることのできる産物をイヌイットに供給することを保障することであった。

1980 年から 1982 年にかけては暫定的な経済プログラムが実施されたが、1982 年 12 月にはイヌイットの生業活動を促進するためのハンター・サポート・プログラムが「法律 83」としてケベック州議会で可決され立法化された(注 7)。

イヌイット側から強い要望があり、そのプログラムの実際の運用はそれぞれの村に任されることになった。このため、村が希望すれば、村用の大型狩猟ボート(コミュニティー・



ボート)や村人のために食料を冷凍保存するための大型冷凍庫を購入することや隣村から肉や魚を購入し、それらを村人に無料で提供することなどが可能になった。

ハンター・サポート・プログラムの予算は、ケベック州政府からその自治体のひとつであるカティヴィク地方政府に支出される。この予算は、インフレ率やイヌイットの人口増加などの可変要因に基づいて毎年修正や補正が加えられている。こうしてカティヴィク政府の管轄下にあるハンター・サポート・プログラムの全予算の 15 パーセントはカティヴィク政府の管理事務用に使用される。さらに残りの 85 パーセントのうちの 15 パーセントがカティヴィク地方政府によって地方全体のプロジェクトのために使用される。以上の予算を差し引いた残額が原則として各村に人口数に比例して配分される。しかしながら、各村とカティヴィク地方政府は毎年、村の計画や要望を加味しながら予算配分を調整するので、年によっては高額な予算配分を受けることがある。

## (2)アクリヴィク村におけるハンター・サポート・プログラムの運用

ハンター・サポート・プログラムの具体的な実施内容は村ごとに管理され、運用されることになっている。プログラムの会計年は1月1日から同年の12月31日までであるが、このプログラムによるアクリヴィク村の年間支出額は、次の表 4.10 に要約する通りである(付録グラフ 1 参照)。

| 年      | プログラムの支出額        |
|--------|------------------|
| 1983 年 | 約 53,000 カナダ・ドル  |
| 1984 年 | 約 326,000 カナダ・ドル |
| 1985 年 | 約 112,000 カナダ・ドル |
| 1986 年 | 約 90,000 カナダ・ドル  |
| 1987 年 | 約 108,000 カナダ・ドル |
| 1988 年 | 約 185,000 カナダ・ドル |
| 1989 年 | 約 115,000 カナダ・ドル |
| 1990 年 | 約 139,000 カナダ・ドル |
| 1991 年 | 約 142,000 カナダ・ドル |
| 1992 年 | 約 150,000 カナダ・ドル |
| 1993 年 | 約 182,000 カナダ・ドル |
| 1994 年 | 約 135,000 カナダ・ドル |
| 1995 年 | 約 208,000 カナダ・ドル |
| 1996 年 | 約 513,000 カナダ・ドル |
| 1997 年 | 約 185,000 カナダ・ドル |
| 1998 年 | 約 160,000 カナダ・ドル |
| 1999 年 | 約 161,000 カナダ・ドル |
| 2000 年 | 約 200,000 カナダ・ドル |
| 2001 年 | 約 248,000 カナダ・ドル |
| 2002 年 | 約 207,000 カナダ・ドル |

表 4.10 アクリヴィク村のハンター・サポート・プログラムの年間支出(注 8)

(出典：HSP Annual Report 1983-2002)

村議会がこの予算をどのように運用するかを決める。このため村ごとに独自のプログラムを作ることができる。

この表 4.10 によると、年間の最高支出額は 1996 年の 51 万 3 千カナダ・ドルであり、年間の最少支出額は初年度を除けば、1986 年の 9 万カナダ・ドルである。初年度から 2002 年までの年間平均支出額は、約 18 万カナダ・ドルである。1 カナダ・ドルを 85 円と換算すると、アクリヴィク村は年平均 1,530 万円をハンター・サポート・プログラムの資金として使用していることになる。

次にアクリヴィク村ではこのプログラムがどのように運用されてきたかを 1984 年の事例と 1999 年の事例を取り上げて紹介する。

### (3)1984 年におけるハンター・サポート・プログラムの実施例

1984 年はハンター・サポート・プログラムが実施されて 2 年目にあたる。1984 年の年間支出の内訳を表にしたものが、表 4.11 である(付録グラフ 2 参照)。

|              |                |
|--------------|----------------|
| 狩猟・漁撈・ワナ猟活動  | 29,835 カナダ・ドル  |
| 道具や設備        | 293,495 カナダ・ドル |
| 救助・探索活動      | 0 カナダ・ドル       |
| ガソリン代        | 1,207 カナダ・ドル   |
| 狩猟者や漁撈者のサービス | 1,486 カナダ・ドル   |
| 管理費          | 116 カナダ・ドル     |
| 総計           | 326,139 カナダ・ドル |

表 4.11 1984 年のアクリヴィク村のハンター・サポート・プログラムの支出の内訳

(出典：HSP Annual Report 1984)

この表 4.11 が示すように、アクリヴィク村ではハンター・サポート・プログラムの予算が狩猟や漁撈、ワナ猟のために使用されている。

人口が村に集中したために、村付近の動植物資源が枯渇化し、狩猟・漁撈場が年々と遠くなりつつあったので、船外機付きの小型ボートでは十分に狩猟・漁撈活動ができなくなってきた。この問題を少しでも解消するために、村会議員によって村有の大型狩猟用ボートの購入が提案され、村人によって承認された。1984 年にはこのプログラムを利用して、アクリヴィク村は約 14 メートルの金属製のピーターヘッド・ボートを購入した。この大型狩猟用ボートはカルリク号(*Kallulik*)と名付けられた。

第 2 に、いくつかの狩猟や漁撈のための遠征旅行が、このプログラムの予算を利用して組織され、実施された。ハドソン湾のイヌクジュアク村よりさらに南下したリッチモンド湾へのシロイルカ猟のための約 2 週間の遠征、9 月にはマンセル島でのセイウチ猟のための約 1 週間の遠征とニアフングーク地域への約 5 日間のカリブー猟遠征、11 月の初めには、

クーヴィク地域でのホッキョクイワナ漁が実施された。はじめの3つの狩猟遠征は村有の大型狩猟用ボートを使用して実施され、最後のひとつは村人が個人所有している20台余りのスノーモービルを利用して実施された。これらの遠征の時期や期間は、村人によって選出された大型狩猟用ボートの船員(船長、副船長、エンジン係)と村会議員が合議の上で決定した。決定されたことは村のFMラジオ放送やロコミで伝達された。村役場がハンター・サポート・プログラムの予算を利用して大型狩猟用ボート用のガソリンと乗組員のハンターの食料を購入し、提供する。この狩猟遠征によって村に持ち帰られた獲物は、遠征に参加した者の取り分を除いた後、ハンター・サポート・プログラムの予算でハンターから買い上げられ、すべてのイヌイットの世帯へと平等に分配された。村人は一様に肉や魚を得ることができるとともに、狩猟遠征に参加したハンターも現金を入手することができるのである。

第3に、このプログラムを利用して、村人が安価に狩猟・漁撈道具やその補助具を購入できるようにしている。村のハンター・サポート・プログラム委員会は漁網や無線通信機などをこのプログラムの予算で購入し、村人に購入価格の半額で販売している。

第4に、村人がカリブーやアザラシ、ホッキョクイワナを多量に捕獲し、かつ村のハンター・サポート・プログラムの予算に余裕があるときには、獲物の余剰を買い取ってもらえる。村人は現金を得ることができ、一方、獲物は必要な村人に無償で分配される。

第5に、知識の豊かな老人を成人教育講習会の講師として雇い、村の若者にいろいろな狩猟の方法や地理環境に関する知識を伝授するためにこのプログラムが利用されている。例えば、ある若者はこの講習会で呼吸穴を利用したアザラシ猟を習得し、時々、実践している。

以上のように、ハンター・サポート・プログラムは、村人に地元の獲物を供給するのみならず、日々の狩猟・漁撈活動を促進させるために利用されている。

#### (4)1999年におけるハンター・サポート・プログラムの実施例

ハンター・サポート・プログラムの運用は、年を追うごとに新たな試みが追加されるとともに、ほかのプログラムと組み合わせられて運用されるようになった。1999年のアクリヴィク村におけるハンター・サポート・プログラムの支出内訳は、表4.12の通りである(付録グラフ3参照)。ここでは、1999年のプログラムの運用を中心に見てみたい。

第1に、ハンター・サポート・プログラムを利用した狩猟遠征が実施された。しかし1984年と比べると、いくつかの変化が見られる。セイウチ猟とシロイルカ猟は、村有の大型狩猟用ボートを利用して実施されたが、それぞれの狩猟場所に変更が見られた。セイウチの狩猟場は、イヴィヴィク村の西方海上にあるマンセル島から、サルイット村の北方海上にあるサルスベリー島やノッチングム島へと変更された。このため出猟期間が1週間以上になった。シロイルカの狩猟場は、ハドソン湾南東部のリッチモンド湾からイヴィヴィク村以北のハドソン海峡へと変更された。このため出猟期間は2週間から1週間へと短縮され

た。これらの狩猟の獲物は、村人に食料として無償で提供された。一方、例年行なわれていた9月のニアホングーク地域での約5日間のカリブー猟遠征、11月の初めに行われるクーヴィク地域でのホッキョクイワナ漁は実施されなくなった。これらの地域に狩猟や漁撈に行った村人から余剰分をプログラムの資金で買い取り、村の全世帯にホッキョクイワナを平等に無償で提供するようになっていた。

|               |                |
|---------------|----------------|
| 狩猟・漁撈・ワナ猟活動   | 38,941 カナダ・ドル  |
| 道具や設備         | 30,962 カナダ・ドル  |
| 狩猟地への航路や道路の整備 | 8,141 カナダ・ドル   |
| 救助・探索活動       | 12,017 カナダ・ドル  |
| 毛皮買い取り        | 2,240 カナダ・ドル   |
| 野生生物管理        | 10,077 カナダ・ドル  |
| 狩猟者や漁撈者のサービス  | 23,847 カナダ・ドル  |
| 伝統的活動への補助金    | 13,782 カナダ・ドル  |
| 管理費           | 20,617 カナダ・ドル  |
| 総計            | 160,624 カナダ・ドル |

表 4.12 1999 年のアクリヴィク村のハンター・サポート・プログラムの支出の内訳

(出典：HSP Annual Report 1999)

第2に、狩猟・漁撈活動を促進するために狩猟具やその材料、狩猟関連機器をハンター・サポート・プログラムの資金で購入し、安価でハンターに販売するとともに、故障した無線通信機を修理した。1台1,500カナダ・ドルの無線通信機を5台、プログラムの資金で購入し、村のハンターにその70パーセントの価格で販売した。また、村人が所有する故障した無線通信機3台をプログラムの資金で修理した。また、1台4,000カナダ・ドルもする大型狩猟用ボート用のレーダーを購入するための補助金を出した。1999年当時、アクリヴィク村には3隻の大型狩猟用ボートがあった。村用の大型狩猟用ボートには全額を、2隻の私有大型狩猟用ボートにはそれぞれ1,000カナダ・ドルの補助金を出した。これ以外にテント用のキャンバス布地、ソリを製作するための板、ゴム製長靴、漁網、無線機など狩猟・漁撈活動で使用する道具やその材料をプログラムの資金で仕入れ、村人に仕入れ価格の70パーセントの値段で販売した。

第3に、冬から春にかけてハンター・サポート・プログラムの資金で村人からカリブー肉やホッキョクイワナを購入し、食料を必要とする村人に無償で提供した。購入量が多かった場合には、村の全世帯に肉やホッキョクイワナを分配することがあった。また、同資金を利用してサルイット村から帆立貝を1,000カナダ・ドル分購入し、その貝を欲しい村人に無償で提供した。

第4に、ハンター・サポート・プログラムを利用して、船着場へのアクセスを容易にする

ための橋の建設、浅瀬の石を除去し船外機付きカヌーの運行を容易にするための作業、村の近くのイハルアツク湖までブルドーザーを利用して道をつくる作業を実施した。

第5に、狩猟中に遭難した人を捜索し、救助することや村のジュニア・レンジャー隊、若者の夏期狩猟・漁撈訓練キャンプにプログラムから資金を提供した。年によっては村の老人たちのための小規模なピクニックを開催するが、1999年には実施しなかった。また、ハンター・サポート・プログラムではないが、村の健康保健プロジェクトの予算で、春の魚釣り大会の開催や独身女性や寡婦を対象とした野いちご狩りが開催されている。

第6に、狩猟中に事故でスノーモービルをなくしたハンターや船外機を壊したハンターに、新しい道具を購入するための補助金を出している。これは1997年頃から始まった新規事業である。村役場がハンターの申請を承認すれば、道具を購入するために地域全体のハンター・サポート・プログラムから購入価格の3分の1が、村のハンター・サポート・プログラムからも、さらに3分の1が補助されることになっている。1999年には、アクリヴィク村のハンターから小型ボート3隻と船外機1台の購入補助申請があり、補助金が支給された。

第7に、1999年からアクリヴィク村では新たな試みが開始された。ハンター・サポート・プログラムの資金で、スノーモービルとソリを購入し、村の65歳以上の老人(約10人)が狩猟や漁撈のために利用できるようにした。利用したい老人は、村役場に届けて、職員が調整したスケジュールにしたがって、無料で利用することができる。この貸借制度によって、収入が少なく、スノーモービルを所有していない村の老人がより頻繁に狩猟や漁撈に行けるようになった。

第8に、アクリヴィク村では、ハンター・サポート・プログラムやそのほかの資金を利用して、伝統的な技術保存・振興プロジェクトを実施した。まず、カティヴィク地方政府とマキヴィクの経済開発基金を利用して村人から、毛皮を表4.13で示した価格で買い取る。

|                                                                                                                                         |  |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|
| (ホッキョクギツネ) アカギツネ 40-60 カナダ・ドル、シロギツネ 40-60 カナダ・ドル、クロスフォックス 140-200 カナダ・ドル、アオギツネ 140-200 カナダ・ドル、クロギツネ 160-220 カナダ・ドル、ギンギツネ 180-240 カナダ・ドル |  |
| (その他の毛皮獣) オオカミ 200-300 カナダ・ドル、ジャコウネズミ 5-10 カナダ・ドル、ホッキョクウサギ 20-40 カナダ・ドル                                                                 |  |
| (カリブー) 秋の毛皮 30-60 カナダ・ドル、衣類用に加工された毛皮 100-150 カナダ・ドル                                                                                     |  |
| (アザラシ) ワモンアザラシ 30-50 カナダ・ドル、アゴヒゲアザラシ 50-100 カナダ・ドル、タテゴトアザラシ 60-100 カナダ・ドル                                                               |  |

表 4.13 カティヴィク地方政府とマキヴィクの経済開発基金による買い取り価格 (2004年アクリヴィク村)

1980年代半ば以降、毛皮の買い取り価格が低迷していたため、イヌイットはアザラシやホッキョクギツネの毛皮をおもに自家用に利用するのみで、販売することはあまりなかった。このことは、毛皮が現金収入源にならないことを意味し、狩猟・漁撈活動の低迷の原因のひとつであった。この状況を改善させるために、カティヴィク地方政府とマキヴィクはイヌイットから毛皮を買い取り、村人に現金収入を提供するための経済開発基金を1998年頃に創設したのであった。アクリヴィク村での毛皮の価格付けと買い取りは、村役場の職員が担当した。

村役場の担当者によって買い上げられたこれらの毛皮はパーカーやズボン、手袋や冬靴を作りたい村人に半額で販売される。アクリヴィク村では、冬になるとアヴァタック文化研究所の補助金を利用して老人の講師を雇い、若い女性に衣類、手袋、冬靴の作り方を教える講習会を週1回開催している。村の女性たちは、老人の指導を受けながら、自家用もしくはは販売用の衣類などを製作している。

製作されたパーカーやズボン、さらに狩猟道具などは、1998年に開始されたハンター・サポート・プログラムのフリタック・プロジェクト(Qulittaq Project)(注9)が提供する資金(アクリヴィク村の年間予算15,000カナダ・ドルで、通常のハンター・サポート・プログラムの予算とは別)で、村人から買い取られる。買い取り価格は村役場の職員が出来具合をみて決定するが、その際に参考にする価格表は、表4.14に示す通りである。

|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>(衣類) アザラシ皮製手袋 (腕の部分が長い手袋)100-150 カナダ・ドル、(短い手袋)75-150 カナダ・ドル、</p> <p>革製手袋 (腕の部分が長い手袋)75-100 カナダ・ドル、(短い手袋)40-75 カナダ・ドル、</p> <p>毛皮製帽子 50-100 カナダ・ドル、カワウソ皮製ブーツ 50-75 カナダ・ドル、アザラシ皮製冬靴 (大人用)200-450 カナダ・ドル、(子供用)100-300 カナダ・ドル、革製冬靴 (大人用)100-180 カナダ・ドル (子供用)80-100 カナダ・ドル、ダッフル 30-50 カナダ・ドル、</p> <p>布製パーカー (大人用)200-400 カナダ・ドル (子供用)100-300 カナダ・ドル、胸まである風きりズボン (大人用)200-400 カナダ・ドル (子供用)100-300 カナダ・ドル、防水ジャケット 250-500 カナダ・ドル、風きりズボン (大人用)100-200 カナダ・ドル (子供用)50-100 カナダ・ドル、 チョッキ 40-60 カナダ・ドル</p> |
| <p>(道具類)アザラシ皮製袋 75-150 カナダ・ドル、カリブー皮製外套 (大人用)300-500 カナダ・ドル (子供用)200-300 カナダ・ドル、ビーズ飾りの付いた皮製スリッパ 20-40 カナダ・ドル、毛糸製帽子 30-50 カナダ・ドル、テント 400-600 カナダ・ドル、銚頭付く銚とロープ 100-150 カナダ・ドル、銚頭 50-75 カナダ・ドル、ストーブ 100-250 カナダ・ドル、ワナ箱 20-30 カナダ・ドル</p>                                                                                                                                                                                                                                                              |

表 4.14 フリタック・プロジェクトによる製作品の購入参考価格表 (2004年アクリヴィク村)

一度、村役場の職員に買い取られた衣類は、村人にその半額で売られている。売り上げは、さらに毛皮製品を買い取るために使用される。このプロセスが、年間予算が尽きるまで行われる。

1984年と1999年を比較すれば、その内容が多様化してきたことは明らかである。1983年に実施され始めたハンター・サポート・プログラムは、このようにさまざまな制度を組み合わせながら利用を促し、村の狩猟・漁撈活動やそれに関係する技術の利用を振興、促進させているのである。

なお、このハンター・サポート・プログラムの村人やハンターに対する経済効果は、第5章で紹介する。

## 第2節 アクリヴィク村の社会

ここでは1970年代から2004年にかけてのアクリヴィク村の社会とその変化について記述する。まず、社会集団として世帯とキャンプ集団、コミュニティーを取り上げる。それから婚姻制度、養子縁組制度、同名者関係、助産人関係、友人関係、隣人関係など現在のアクリヴィク村で存在し、機能している社会制度を紹介する。

### 第1項 社会集団

アクリヴィク村の中で可視的な社会集団としては、世帯、キャンプ集団、コミュニティーがある。ここではそれらの集団とそれらの内容を構成する社会関係について、1980年代半ばから2000年代初めにかけての変化を考慮しながら記述する。

#### (1) 世帯、家族、親族

イヌイット語のヌナヴィク方言では、世帯員のことをイラピク(*illapik*)やイルミンカティク(*illumingatik*)という。これを字義通り訳せば、「家(雪の家)を共有している人」を意味し、同居人の社会関係の内容を示してはいない。ただし、非親族の同居人はイラッカ(*ilakka*)と呼ばれる。一方、家族や親族の関係を意味するイラギート(*ilagiiit*)という言葉があるが、多義的でもある(Burch 1975: 46)。狭義にはイラギートとは血縁親族を指す(Burch 1975: 46; Damas 1963: 55; Graburn 1969: 64-66; Saladin d'Anglure 1964: 189)が、広義には何らかの関係で相互につながっている人を指すことがあり、血縁関係がない友人や狩猟パートナーもイラギートと呼ばれることがある。すなわちイヌイットの「親族」とは、基本的に血縁や婚姻を通してつながっている人を指すが、血縁関係や姻族関係がない人でも同じ所に住んでいること(co-residence)や同じ生産活動に参加していること(co-production)、同じ名前をもつこと(name-sharing)といった要因によって、親族とみなされ、親族呼称が使用されることが知られてきた(Balakci 1970: 124; Damas 1964: 45; Guemple 1979: 93-94; Kishigami 1997; Trott 2005)。

アクリヴィク村のイヌイットによれば、「真の親族」(真のイラギート)とは理念的には血縁親族のことを指すという。特定の個人(エゴ)から見て血のつながり(もしくは擬制的な血のつながり)があり、日常生活の上で社会的に交渉している人々はイラギマリート(*ilagiimariit*)と呼ばれる。これはバリクシの概念では、限定イラギート(*restricted ilagiit*)に相当する(Balikci 1964)。しかしながら多くの場合、イラギートはエゴを中心に双方向的に拡大する血族と姻族の両方を含む社会的なカテゴリーである。本稿では、このカテゴリーを拡大家族と呼んでおきたい(注 10)。これはバレクシの「拡大イラギート」(*extended ilagiit*)に相当する(Balikci 1964)。そして個人をコミュニティ内で同定するときには、その人物の両親が誰であるかによって認識されることが多い。拡大家族関係にある人々の中では、個人の名前ではなく親族呼称で呼び合う傾向にある(表 4. 15.1~15.4 を参照)。イヌイットの視点に立てば、エゴが親族名称で呼んだり、言及することができる人は、その人の拡大化家族(イラギート)の一員であるといえる。同じ拡大家族内では、年長者の方が年少者よりも社会的な影響力があり、同世代や同年齢ならば男性の方が女性よりも社会的な影響力がある。なお、イラギートでありながらも相手のことをかまわなかったり、訪問し合わなかったり、狩猟と一緒にいかなかったりするような人々は、イラギルアングイット(*ilagiluanguit*)やイラマリリングイット(*ilamaringiitut*)と呼ばれ、親族呼称で呼ばれなくなることがあった。

すでに述べたように、現在のアクリヴィク村は 1973 年頃から形成され始めた。そして 1980 年代の初めまで、同村の住宅は非常に貧弱で、大半がマッチ箱型の家屋に住んでいた。しかしながら 1983 年からケベック州政府は住宅公社を通して 3 ベッドルーム型住宅や 4 ベッドルーム型住宅など新しいタイプの住宅をイヌイットに提供し始めた。

1986 年 10 月末現在のアクリヴィク村のイヌイットの人口は 298 人で、イヌイットの世帯総数は 49 であった。この村にある世帯の規模を見てみると、13 人世帯が 1 (約 2 パーセント)、12 人世帯が 1 (約 2 パーセント)、11 人世帯が 3 (約 6 パーセント)、10 人世帯が 5 (約 10 パーセント)、9 人世帯が 3 (約 6 パーセント)、8 人世帯が 2 (約 4 パーセント)、7 人世帯が 3 (約 6 パーセント)、6 人世帯が 9 (約 18 パーセント)、5 人世帯が 4 (約 8 パーセント)、4 人世帯が 8 (約 16 パーセント)、3 人世帯が 4 (約 8 パーセント)、2 人世帯が 2 (約 4 パーセント)、そして 1 人世帯が 4 (約 8 パーセント)である(付録グラフ 4 参照)。6 人世帯が 9、次いで 4 人世帯が 8 と多く、1 人世帯が 4 つある。アクリヴィク村の世帯規模は平均が 6.1 人であるが、1 世帯から 13 人世帯とかなり幅があり、多様性があることを示している。1 人世帯はすべて 30 歳代の男性であり、調査時点ではその妻子がほかの村に住んでいたり、一時的に滞在したりする。世帯員数が 10 人を超す場合は、世帯主が高齢であり、息子夫婦や娘夫婦、孫らと同居している事例が多い。特に若い娘とその夫(もしくはボーイフレンド)、そのカップルの子供たちが、独立世帯を築くまで一定の期間、その娘の両親と同居する傾向がある。そして世帯員数が 6 人以下と少ない世帯は、若者夫婦を中心とした核家族世帯である。



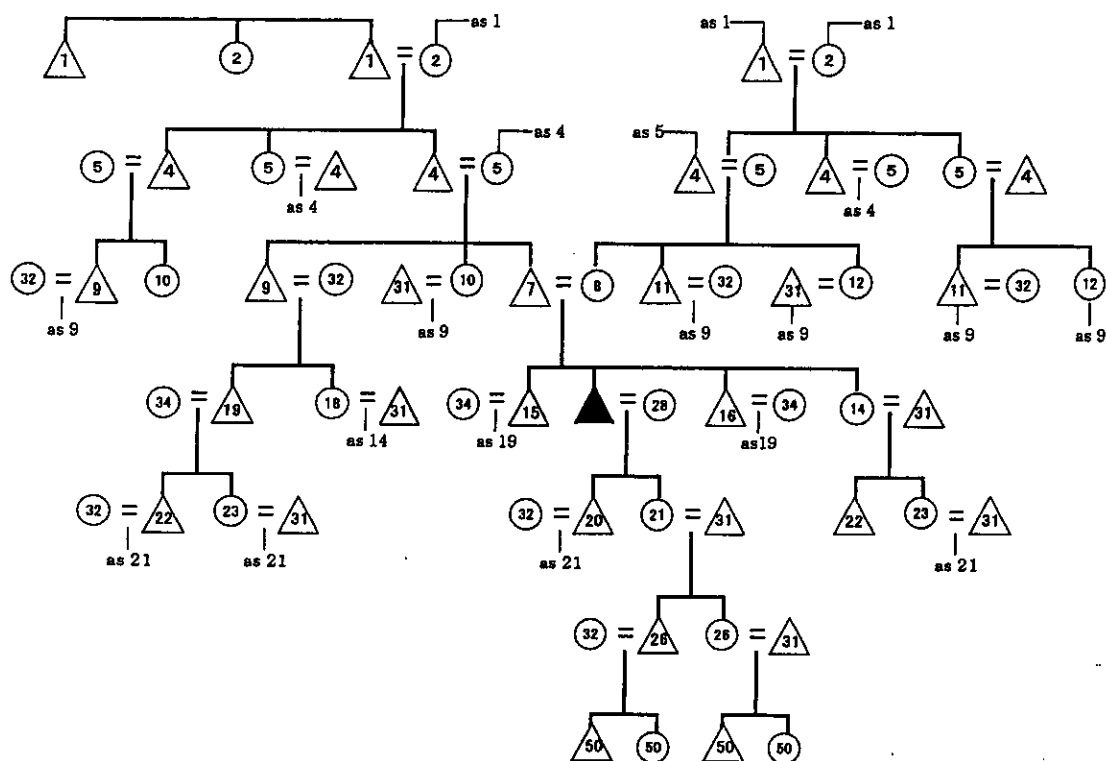


表4. 15. 1 親族名称 (男性エゴ)

|     |                   |                                             |
|-----|-------------------|---------------------------------------------|
| # 1 | ataatsialirqiq    | great-grandfather                           |
| #2  | anaanatsialirqiq  | great-grandmother                           |
| # 4 | ataatsiaqpaternal | or maternal grandfather,                    |
|     |                   | husband of paternal or maternal grandmother |
|     |                   | brother of grandfather or grandmother       |
| # 5 | anaanatsiaq       | paternal or maternal grandmother,           |
|     |                   | wife of paternal or maternal grandfather    |
|     |                   | sister of grandfather or grandmother        |
| # 7 | ataatak           | father                                      |
| # 8 | anaanak           | mother                                      |
| # 9 | akkak             | paternal uncle                              |
| #10 | atsak             | paternal aunt                               |
| #11 | angak             | maternal uncle                              |
| #12 | ajakuluk          | maternal aunt                               |
| #14 | najak             | sister                                      |
| #15 | angaju            | elder brother                               |
| #16 | nukak             | younger brother                             |
| #18 | najassak          | all female cousins                          |
| #19 | qatangutik        | all male cousins                            |
| #20 | irniq             | son                                         |
| #21 | paniq             | daughter                                    |
| #22 | qangiak           | child of ego's brother or male cousin       |
| #23 | ujurak            | child of ego's sister or female cousin      |
| #26 | irqngtaq          | grandchild                                  |
| #28 | aipak             | wife                                        |
| #31 | ninguauk          | husband of sister, husband of female cousin |
| #32 | ukuq              | a wife of paternal or maternal uncle        |
| #34 | aikuluk           | wife of brother, wife of male cousin        |
| #50 | irqngutalirqiq    | great-grandchild                            |

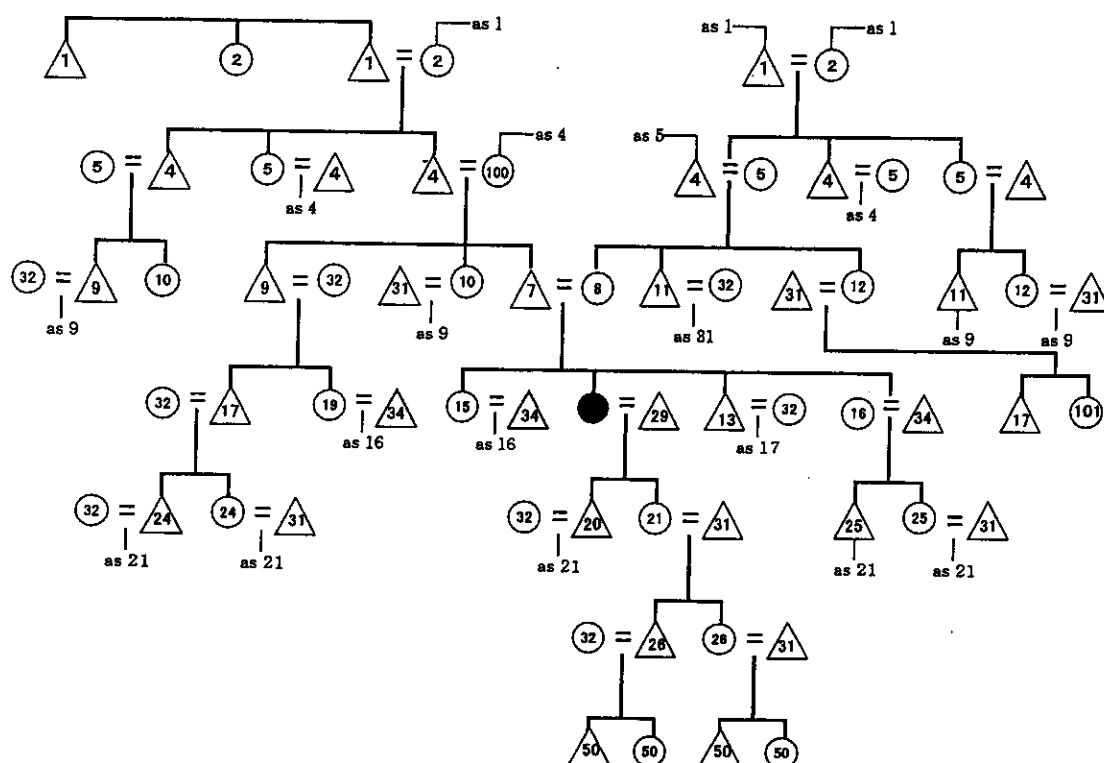


表4. 15. 2 親族名称(女性エゴ)

|      |                  |                                                                          |
|------|------------------|--------------------------------------------------------------------------|
| #1   | ataatsialirriq   | great-grandfather                                                        |
| #2   | anaanatsialirriq | great-grandmother                                                        |
| #4   | ataatsiaq        | grandfather, brother of grandparents husband of anaanatsisq              |
| #5   | anaanatsiaq      | mother's mother, sister of grandparents, wife of ataatsiaq               |
| #7   | ataatak          | father                                                                   |
| #8   | anaanak          | mother                                                                   |
| #9   | akkak            | paternal uncle                                                           |
| #10  | atsak            | paternal aunt                                                            |
| #11  | angak            | maternal uncle                                                           |
| #12  | ajakuluk         | maternal aunt                                                            |
| #13  | anik             | brother                                                                  |
| #15  | angajuk          | elder sister                                                             |
| #16  | nukak            | younger sister                                                           |
| #17  | anissaq          | paternal and maternal male cousin                                        |
| #19  | qatangutik       | paternal female cousin                                                   |
| #20  | irniq            | son                                                                      |
| #21  | paniq            | daughter                                                                 |
| #24  | angak            | child of brother or male cousins                                         |
| #25  | nuakuluk         | child of sister or female cousins                                        |
| #26  | irngutaq         | grandchild                                                               |
| #29  | aipak            | husband                                                                  |
| #31  | ningauk          | a husband of maternal or paternal aunt, son-in-law, grandson-in-law      |
| #32  | ukuaq            | wife of maternal or paternal uncle, brother's wife or male cousin's wife |
| #34  | aikuluk          | sister's husband or female cousin's husband                              |
| #50  | irngutalirriq    | great-grandchild                                                         |
| #100 | aanak            | father's mother                                                          |
| #101 | qatangutiksak    | maternal female cousin                                                   |

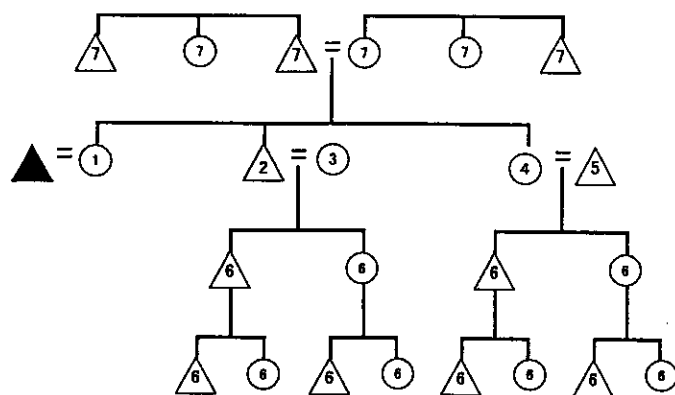


表4. 15. 3 親族(姻族)名称(男性エゴ)

|    |            |                                              |
|----|------------|----------------------------------------------|
| #1 | aipak      | wife                                         |
| #2 | sakiaq     | wife's brother                               |
| #3 | najatsak   | wife's brother's wife                        |
| #4 | aikuluk    | wife's sister                                |
| #5 | qatangutik | wife's sister's husband                      |
| #6 | sakiak     | consanguineal descendents of wife's siblings |
| #7 | sakik      | consanguineal ascendants of wife             |

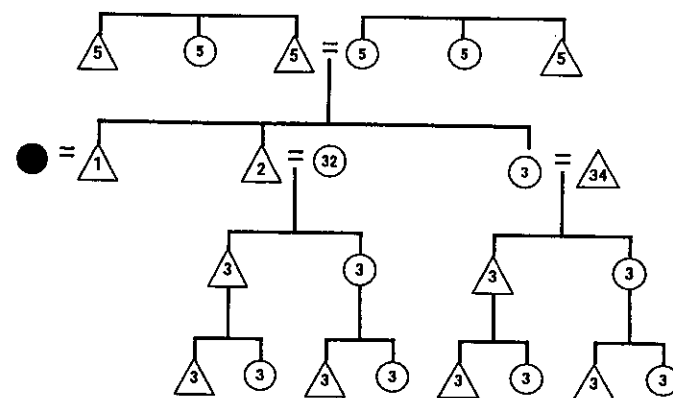


表4. 15. 4 親族(姻族)名称(女性エゴ)

|     |         |                                                                                |
|-----|---------|--------------------------------------------------------------------------------|
| #1  | aipak   | husband                                                                        |
| #3  | sakiak  | husband's sister,<br>all consanguineal descendents of ego's husband's siblings |
| #5  | sakik   | consanguineal ascendants of ego's husband                                      |
| #32 | ukuaq   | brother's wife                                                                 |
| #34 | aikuluk | sister's husband                                                               |

世帯の構成を家族関係の観点から見ると、一人世帯を除くほぼすべての世帯は、血縁ないし姻戚関係にある人々から構成されている(表 4.16 参照)。各々の世帯の構成は表 4.16 に示す通りであるが、世帯が核家族から構成されている事例は 26(53.1 パーセント)、拡大家族から構成されている事例は 19(38.8 パーセント)、1 人家族から構成されている事例は 4(8.1 パーセント)である(付録グラフ 5 参照)。若者世帯は核家族から構成されており、中高年夫婦世帯は拡大家族から構成されていることが多いが、これはイヌイットの家族形態(世帯の形態内容)のライフサイクル(核家族→拡大家族→核家族)の一局相を示しているといえる。

2003 年 9 月現在のアクリヴィク村のイヌイット人口は 462 人で、1986 年と比べると人口が急増していることがわかる。世帯を員数規模で見ると、13 人世帯が 1(1.1 パーセント)、11 人世帯が 3(3.2 パーセント)、10 人世帯が 6(6.4 パーセント)、9 人世帯が 3(3.2 パーセント)、8 人世帯が 4(4.3 パーセント)、7 人世帯が 4(4.3 パーセント)、6 人世帯が 11(11.7 パーセント)、5 人世帯が 17(18.1 パーセント)、4 人世帯が 14(14.9 パーセント)、3 人世帯が 12(12.8 パーセント)、2 人世帯が 7(4.3 パーセント)、1 人世帯が 12(12.8 パーセント)である(付録グラフ 6 参照)。5 人世帯がもっとも多いが、1 世帯あたりの平均員数は 4.9 人である。1986 年 10 月末と比較すると、平均世帯規模は小規模化している。1 人世帯から 13 人世帯と世帯員数に幅がある点は以前と同様であるが、1 人世帯の実数と全体に占める割合が増加している。世帯主が高齢であれば、娘夫婦や孫、未婚の娘とその子供たちと同居している傾向があり、世帯員数が 10 人を超える場合もある。

2003 年 9 月現在のアクリヴィク村の世帯の構成を家族関係の観点から見ると、一人世帯を除くほぼすべての世帯は、血縁ないし姻戚関係にある人々から構成されている(表 4.17 参照)。各々の世帯の構成は表 4.17 に示す通りであるが、世帯が核家族から構成されている事例は 51(54.3 パーセント)、拡大家族から構成されている事例は 28(30 パーセント)、1 人家族から構成されている事例は 12(12.8 パーセント)、そのほかの事例は 3(3.2 パーセント)である。そのほかの 3 事例のうち、イトコ 2 人が同居、オジとオイの 2 人が同居、老婆が直接的な親族関係がない若者家族と同居という内容であった(付録グラフ 7 参照)。1986 年の事例と比較すると拡大家族関係から形成される世帯の割合が低下し、1 人世帯の割合が増加している。

アクリヴィク村においては、世帯は住居や経済活動の基本的単位であるが、食事の単位であるとは限らない。また、複数の世帯が集合して経済単位として機能する場合は、多々観察された。その集合は通常、拡大家族関係によってつながっている世帯の集合である。

現代のイヌイット世帯は、核家族が構成するようになりつつあるが、世帯を横切る拡大家族(関係)はイヌイット社会ではもっとも重要な社会関係である。おもに血縁関係によって相互に関係している複数の核家族世帯や小規模拡大家族世帯から構成される拡大家族集団は、イヌイットが名字を持ち、かつ定住集落に集住するようになってから、より実体的な社会集団となってきた。世帯を横切る拡大家族関係が機能する事例を 3 例あげておく。第 1

| 番号 | 員数  | 世帯構成                                           |
|----|-----|------------------------------------------------|
| 1  | 6人  | A=b-C, D, e, F                                 |
| 2  | 5人  | A=b-C, D, E                                    |
| 3  | 4人  | A=b-C, d                                       |
| 4  | 3人  | A-B, c                                         |
| 5  | 7人  | A=b-(c)/A-d=E-F, G                             |
| 6  | 12人 | A=b-c, d, E, F/A-c-(G), A-d=H-I, J, Kともう一人の息子L |
| 7  | 7人  | (A)=b-C, D, E, f, (g)                          |
| 8  | 2人  | A-b                                            |
| 9  | 7人  | A=b-C, d, E, (F), (G)                          |
| 10 | 9人  | (A)=b-C, D, E, f, g, H, (I)                    |
| 11 | 1人  | A                                              |
| 12 | 4人  | A=b-c, d                                       |
| 13 | 10人 | A=b-c, D, e, f, g, h, (i), (j)                 |
| 14 | 10人 | A=b-c, d, e, (f), g, (h), i/A, J               |
| 15 | 10人 | a-B, C, D/a-B=d-(e), (f)/a-C=g-H, i            |
| 16 | 3人  | A=b-(C)                                        |
| 17 | 5人  | A=b-C, D, E                                    |
| 18 | 1人  | A                                              |
| 19 | 3人  | A=bおよびAとbの息子の息子C                               |
| 20 | 6人  | A=b-C/bと先夫との娘の子供(男女各一名) d, e/bとその先夫との息子の養女(e)  |
| 21 | 9人  | a-B, C, (D), F, g/a-g-h/a, I/aの母j              |
| 22 | 6人  | A=b-(A), (B), c, D                             |
| 23 | 8人  | A=b-c, d, e, F, g, H                           |
| 24 | 11人 | A=b-c, D, e, f, (g)/A-c-H, i, J/Dのガールフレンドk     |
| 25 | 9人  | A=b-c, (d), (e)/A-c=F-g, H, I                  |
| 26 | 1人  | A                                              |
| 27 | 6人  | a-(B), c, d/a, E/aの母f                          |
| 28 | 4人  | A=b-C, D                                       |
| 29 | 4人  | A=b-C, D                                       |
| 30 | 3人  | a-(B), c                                       |
| 31 | 4人  | A-B, C/A, d                                    |
| 32 | 11人 | A=b-(c), d, e, F, G, H/A=b, I, (G)/bの母k        |
| 33 | 8人  | A-B/A-B=c-D, e, f, G, h                        |
| 34 | 10人 | A=b-C, D, E, F, (g), (h), (i), (j)             |
| 35 | 2人  | A=b                                            |
| 36 | 5人  | A=b-c, d, E                                    |
| 37 | 6人  | A=b-C, d, e, f                                 |
| 38 | 5人  | A=b-C, (d), E                                  |
| 39 | 6人  | A=b, c, d, e/A=b-d-f                           |
| 40 | 13人 | A=b-c, D, (E), F, g, h/A=b-c=I-J, k, l, m      |
| 41 | 6人  | A=b-c, D, (E), (f)                             |
| 42 | 1人  | A                                              |
| 43 | 6人  | A=b-C, d, (E), (F)                             |
| 44 | 6人  | A=b-c, (d), (F)/A=b-c-g                        |
| 45 | 4人  | A=b-C, D                                       |
| 46 | 4人  | A-B, c/A-c-d                                   |
| 47 | 11人 | A=B-C, d, e, F, g, h, I, J/A=B-d-k             |
| 48 | 4人  | A=b-C, D                                       |
| 49 | 10人 | A=b-c, d, e, F, G, (H), I/A=b-d=J              |

<記号の説明> = : 婚姻関係、  
 大文字 : 男性  
 小文字 : 女性  
 ( ) : 養子  
 - : 親子関係  
 / : 核家族の区分  
 , : 兄弟姉妹関係

空欄 : 死去ないし離別

表4. 16 アクリヴィク村の世帯構成(1986年10月末日現在)

| 番号 | 員数  | 世帯構成                                                   |
|----|-----|--------------------------------------------------------|
| 1  | 6人  | A=b, c/A-C-(D), E, (f)                                 |
| 2  | 2人  | AとAのオジ関係にある(B)                                         |
| 3  | 8人  | A=b-c, d, e, (F), G/A-c-H                              |
| 4  | 9人  | A=b-c, (d), (E)/A-c-f, g, H, I                         |
| 5  | 2人  | a=b                                                    |
| 6  | 3人  | A=b-(C)                                                |
| 7  | 6人  | A=b-C, (d), (E), (f)                                   |
| 8  | 4人  | A=b-c, D *A=bはCL                                       |
| 9  | 5人  | A=b-C, D, E, F                                         |
| 10 | 6人  | A=b-C, D, E, f *A=bはCL                                 |
| 11 | 5人  | A=b-C, d, (E)                                          |
| 12 | 5人  | a-B, c, D, E *aは69のAとCL                                |
| 13 | 4人  | A=b-C, (D)                                             |
| 14 | 3人  | a-B, (c)                                               |
| 15 | 7人  | A=b-c, D, (e), (f), (G)                                |
| 16 | 1人  | (A)                                                    |
| 17 | 4人  | A=b-C, d                                               |
| 18 | 3人  | A-B, C                                                 |
| 19 | 1人  | A                                                      |
| 20 | 4人  | A-b, C, (d)/A-b-e                                      |
| 21 | 3人  | A-b, c                                                 |
| 22 | 5人  | A=b-c/A-c-D, E                                         |
| 23 | 5人  | a-b, C, D, E                                           |
| 24 | 6人  | A-B, C, D, E, f                                        |
| 25 | 4人  | A=b-(C), D                                             |
| 26 | 5人  | A=b-C, d, (E)                                          |
| 27 | 6人  | A=b-c, (D)/A-c-E, f                                    |
| 28 | 10人 | A=b-c, d, (E), (F)/A-c-G, H/A-d-i, j                   |
| 29 | 3人  | a-b/a-b-C                                              |
| 30 | 2人  | a-b                                                    |
| 31 | 3人  | a-B, (C)                                               |
| 32 | 3人  | a-(B), (c)                                             |
| 33 | 1人  | A                                                      |
| 34 | 11人 | a-b, (C), (d), e/a-b-F, g, h/a-e-I, (j), K             |
| 35 | 3人  | a-B, (C)                                               |
| 36 | 11人 | A=b-c, (d), (e), (f), (G)/A-c=H-i, j, k                |
| 37 | 7人  | A=b-c, d, E, F, g                                      |
| 38 | 7人  | a-b, C, D, e, (F)/a-b-g                                |
| 39 | 9人  | A=b-c, d, (e)/A-C-F, G/A-d-H, I                        |
| 40 | 10人 | A-b-C, D, e, F, G, h/A-e-I, j                          |
| 41 | 10人 | A=b-C, D, E, F, G, H, (i), (j)                         |
| 42 | 5人  | A=b-(c), D/A-D=e-f *D=eはCL                             |
| 43 | 4人  | A=b-(C), d                                             |
| 44 | 10人 | A=b-c, d, e, (F), (g)/H=i-j *bとHはイトコか母子                |
| 45 | 5人  | A=b-(C), d/A-d-e                                       |
| 46 | 4人  | A=b-c/A-b-c-d                                          |
| 47 | 3人  | A=b-c *A=bはCL                                          |
| 48 | 8人  | A=b-C, d, e, f, (G), h                                 |
| 49 | 11人 | A-b-C, D, e, f, (G)/A-e=H-I, j/A-f=K-I<br>*e=H, f=KはCL |
| 50 | 3人  | a-B, c                                                 |
| 51 | 5人  | a-B, c, D, e                                           |
| 52 | 4人  | A=b-C, D *A=bはCL                                       |

|    |     |                                                                   |
|----|-----|-------------------------------------------------------------------|
| 53 | 1人  | A                                                                 |
| 54 | 3人  | @-b, c                                                            |
| 55 | 10人 | A=b-c, d, E/A-c-d/A-d-F, G, H, i                                  |
| 56 | 5人  | A=b-C, d, (e)                                                     |
| 57 | 7人  | A=b-c, d, e, F, G                                                 |
| 58 | 8人  | A=b-C, D, e, F, g, h                                              |
| 59 | 5人  | A-b, c, D, E                                                      |
| 60 | 1人  | a                                                                 |
| 61 | 5人  | A=b-C, d, (E)                                                     |
| 62 | 6人  | A=b-c, (D), (e), (F)                                              |
| 63 | 6人  | a-b, C, (D)/a-b-(E), (F)                                          |
| 64 | 4人  | A=b-C, d                                                          |
| 65 | 4人  | A=b-(C), (D)                                                      |
| 66 | 1人  | A                                                                 |
| 67 | 4人  | a-B, c, D                                                         |
| 68 | 5人  | A=b-c, d, E                                                       |
| 69 | 1人  | A                                                                 |
| 70 | 1人  | A                                                                 |
| 71 | 4人  | A=b-c/d *A=bはCL                                                   |
| 72 | 6人  | a-b, c, D, e/a-c-f                                                |
| 73 | 9人  | A=b-C, D, e, F, (g), (H)/A-e-i                                    |
| 74 | 10人 | A=b-C, D, (e), (f), g/A-g=H-I, j *g=HはCL                          |
| 75 | 5人  | A=b-c, d, e                                                       |
| 76 | 2人  | (A)=b                                                             |
| 77 | 5人  | A=b-C, D, (e)                                                     |
| 78 | 1人  | A                                                                 |
| 79 | 8人  | A=b-C, D, e, F, G, (h)                                            |
| 80 | 5人  | A=b-C, (D), (e)                                                   |
| 81 | 5人  | A=b-c, d, E                                                       |
| 82 | 6人  | A=b-c, (D)/A-c-E, f                                               |
| 83 | 6人  | A=b-c, (d)/A-C-E, f                                               |
| 84 | 6人  | A-b, (c), (d)/A-b-e, F                                            |
| 85 | 3人  | a-(b), (c)                                                        |
| 86 | 1人  | A                                                                 |
| 87 | 1人  | A                                                                 |
| 88 | 2人  | A/B *AとBは遠縁                                                       |
| 89 | 1人  | a                                                                 |
| 90 | 2人  | A, B                                                              |
| 91 | 13人 | a, b/a-b, (C), (D), (e)/b-F, G/Aの兄の子供H, (i)<br>/(i)-J/H=i *H=iはCL |
| 92 | 2人  | a-(b)                                                             |
| 93 | 4人  | A/b-c, D *Aとbは同棲中(?)                                              |
| 94 | 4人  | A=b-c, D                                                          |

<記号の説明> = : 婚姻関係、  
 大文字 : 男性  
 小文字 : 女性  
 ( ) : 養子  
 - : 親子関係  
 / : 核家族の区分  
 . : 兄弟姉妹関係  
 CL : コモンローの夫婦関係

表4. 17 アクリヴィク村の世帯構成(2003年9月)

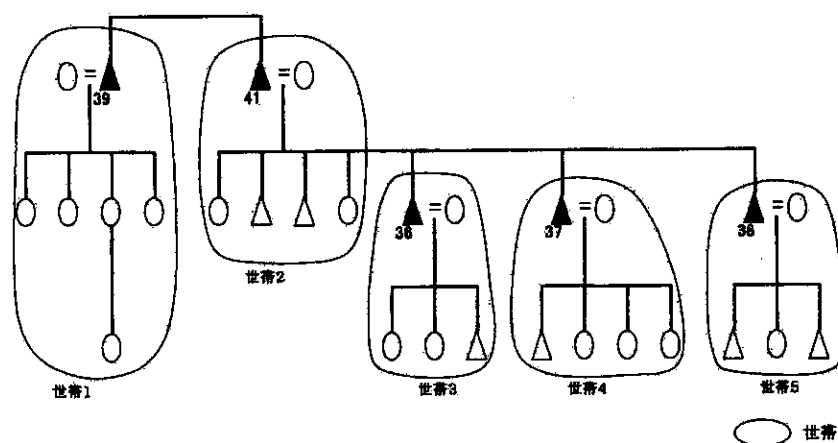
例は、ハンターが狩猟の同行者を求めるとき、友人を選ぶ場合もあるが、多くの場合は父親、兄弟、イトコ、オジ、息子、義理の息子や孫ら拡大家族関係にある者の中から選ぶ。私の下宿先の主人は、船外機付きカヌーを利用してアザラシ猟やスノーモービルでカリブー猟に行くときには、息子か義理の息子(娘の夫)とともに行くことがもっとも多い。第2に、次章で例証するように、食物や獲物の分配がもっとも頻繁に行われるのは、異なる世帯に住む拡大家族関係にある人との間である。第3に、拡大家族関係にある世帯が、経済集団として機能する場合が観察された。1986年に、世帯を別にする3人の兄弟の老人と彼らの4人の独立した息子たちが協力して資金を貯め、ピーター・ヘッド・ボート(大型狩猟用ボート)を購入し、共同で使用し始めた。また、1990年代の半ばには同村の別の3兄弟がピーター・ヘッド・ボートを共同購入し、彼らの家族や親族の者が共同で利用している。

このように世帯は重要な社会・経済的な単位であるが、拡大家族関係にある世帯の集合が世帯を超えた社会・経済的な単位として機能しているといえる。

## (2) キャンプ集団

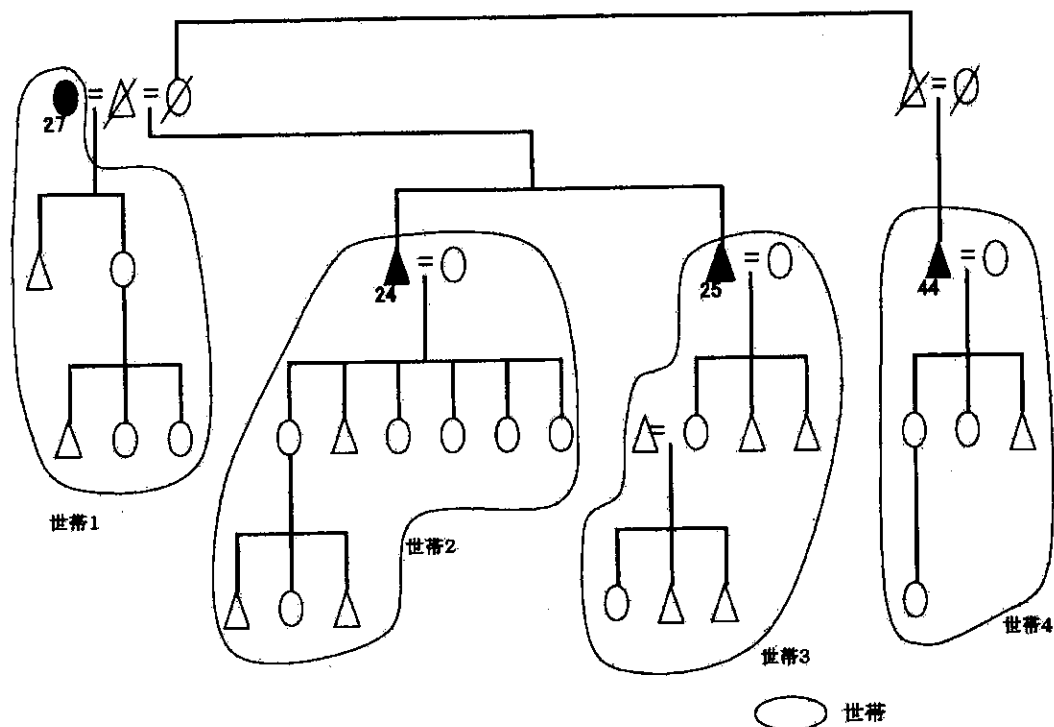
アクリヴィク村では、春季から夏季にかけてキャンプに出かける世帯が多い。各々のキャンプ地は1世帯から9世帯で形成され、その期間も1週間から3ヶ月間と幅がある。各キャンプの構成員は年ごとに多少は変化するものの、拡大家族関係にある人たちが形成する傾向にある。例えば、1986年のシティタリク・キャンプは5世帯から、キキルタールク・キャンプは4世帯から、サボガーユク・キャンプは7世帯から構成されていた。なお、以下で示す世帯番号は、表4.16と図表4.4の世帯番号に対応している。

サボガーユク・キャンプでは参加者のひとりがケガを負う事故が起こったために1週間で終わった。このキャンプは、表4.16の世帯主(#41)、(#37)、(#36)、(#38)、(#39)の5世帯から構成されていた。世帯主(#41)と(#39)は兄弟である。世帯主(#36)、(#37)、(#38)は世帯主(#41)の息子である。キャンプ集団の関係を表にしたものが、図表4.1である。この図表4.1を見ると、このキャンプ集団は兄弟関係と親子関係を核とするひとつの拡大家族(関係)から構成されていることがわかる。



図表4.1 1986年8月のサボガーユク・キャンプ

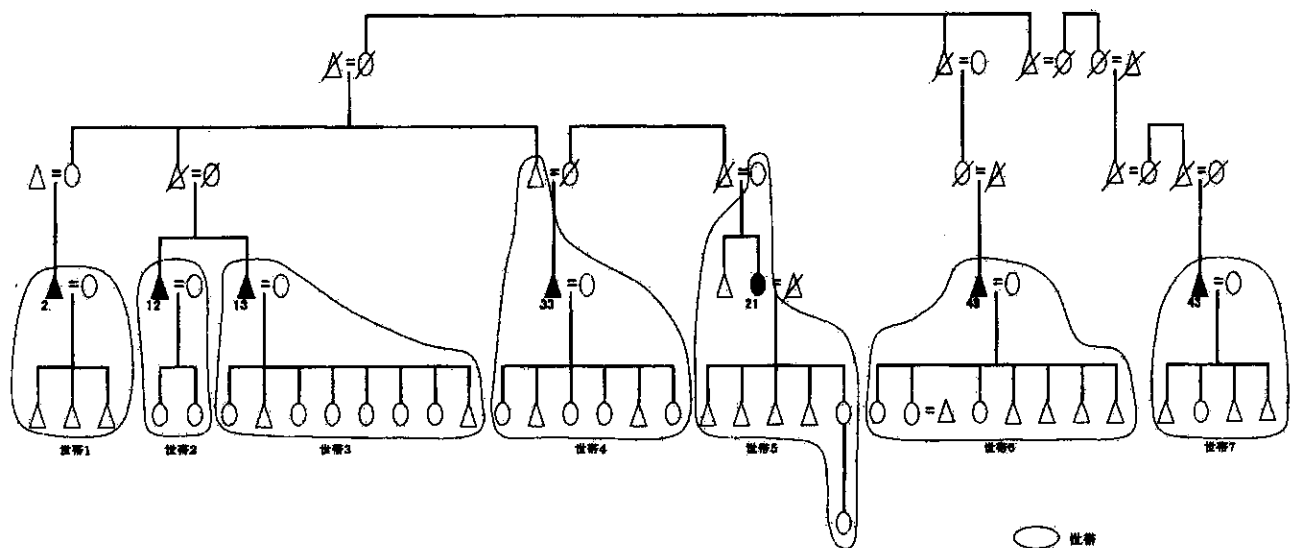
キルタルク・キャンプは、2、3週間以上続いた。このキャンプは、表 4.16 の世帯主(#27)、(#25)、(#24)、(#44)の 4 世帯から構成されていた。世帯主(#27)は、(#25)と(#24)の父の後妻であり、彼らの義理の母にあたる。世帯主(#25)と(#24)の実母は、世帯主(#44)の父の妹であった。すなわち彼らはイトコ同士であった。このキャンプ集団は、母子関係と兄弟関係、イトコ関係を核とする広義の拡大家族(関係)から構成されていた。



図表4. 2 1986年6月キルタルク・キャンプ

シティタリク・キャンプは 7 世帯から構成されていた。この 7 世帯の世帯主は、表 4.16 の世帯主(#2)、(#43)、(#13)、(#12)、(#33)、(#49)、(#21)であった。彼らと彼らの家族は 6 月の 1 ヶ月をキャンプ地で過ごした。世帯主 (#13)、(#12)そして(#2)の妻は兄弟姉妹関係にある。世帯主(#13)と(#11)は、世帯主(#2)とニガウク(義理の兄弟)関係にあたる。世帯主(#33)は、(#13)、(#12)、(#2)の妻にとっては、父方のイトコである。世帯主(#43)は、世帯主(#13)の妻の弟であり、彼らはニガウク関係にあたる。世帯主(#49)はほかの世帯主とは近い親族関係にはないが、世帯(#33)を父方イトコと見なしている。このキャンプ集団は、兄弟姉妹関係、イトコ関係、義理の兄弟関係から、すなわち広義の拡大家族(関係)から構成されている。世帯主やその妻は、ほぼ同年輩であり、お互いに親しい関係にある。





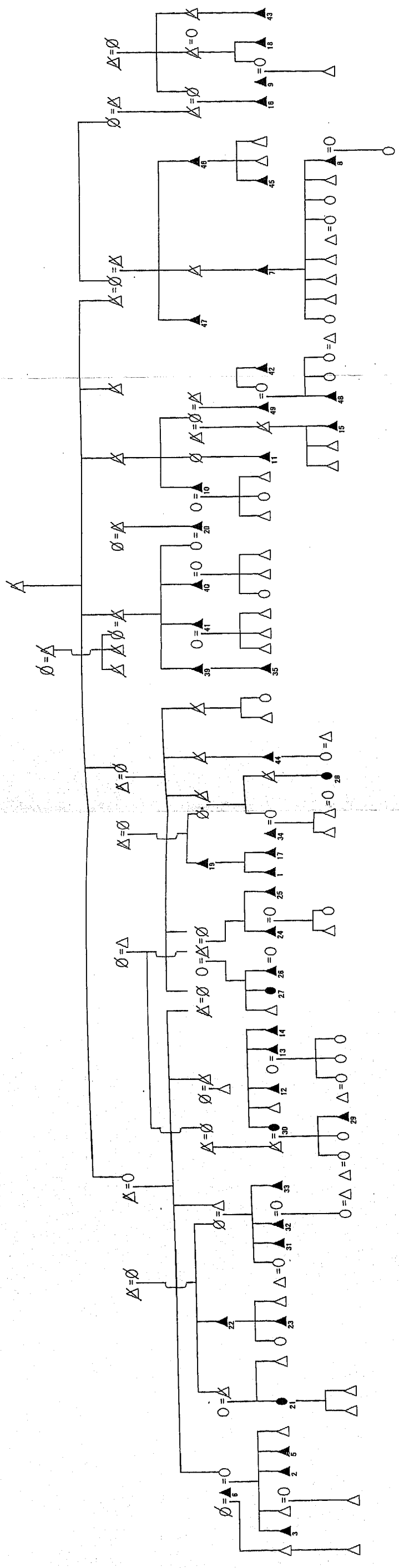
図表 4. 3 1986年6月 シティグリック・キャンプ

このキャンプ集団は、ヌナカティギート (nunaqatigiit、「大地を共有する人々」) やシラハティギート (silaqatigiit、「空を共有する人々」) と呼ばれている。アクリヴィク村のイヌイットは、行きたい人が行きたいキャンプ地に行くのであり、キャンプ集団を構成するための特別な原則やルールはないと表明している。しかしながら春のキャンプ集団は、明らかに血縁関係や姻族関係などいわゆる親族関係をもとに、個人的な親しさなどを要因として形成される傾向が顕著であると考えられる。

1990年代以降、多くの人々が村の中で賃金労働の仕事に従事するようになったために、春や夏のキャンプは期間が短縮化される傾向がある。さらに村から半径30キロメートル以内の沿岸部や諸島部にキャンプ用の小屋を建て、週末や夏期休暇時に狩猟や漁撈のために使用している。2004年9月の時点で私の滞在先の世帯主(#12)の小屋がある場所(クーガック湾の奥)には、彼の兄の世帯主(#13)、妹の夫(#2)、父方イトコの世帯主(#31)がそれぞれのキャンプ小屋を建てている。このキャンプ地は、兄弟姉妹関係とイトコ関係を核として形成されており、拡大家族関係が重要であることがわかる。

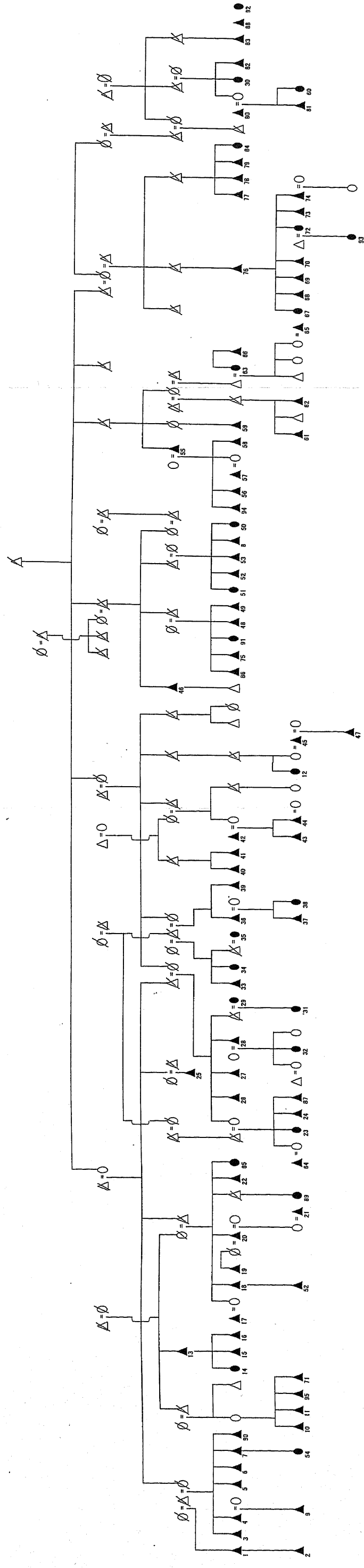
### (3) コミュニティー

1970年代の半ばに形成されたアクリヴィク村の1984年3月における人口は312人であった。そして1986年には村の中にイヌイットの世帯が49あった。図表4.4は、1986年



\* 黒塗りは世帯主を示す

図表4. 4 アクリガイク村における世帯主間の親族関係(1986年10月末)



\* 黒塗りは世帯主を示す

図表4. 5 アクリグイク村における世帯主間の親族関係 (2003年9月現在)

10 月末時点におけるアクリヴィク村の世帯主間の親族関係を示している。この図表を見てわかるように、世帯主もしくはその配偶者は、そのほかの世帯主やその配偶者と血縁もしくは婚姻で関係している。コミュニティー自体が、相互に関係する複数の拡大家族集団から構成されたひとつの親族集団のような形態をなしている。アクリヴィク村の住民は、自らの再移住によって村を形成した歴史的な経緯もあり、かつ親族関係で相互につながっているために「われわれ意識」を強く持ち続けている。

アクリヴィク村がどのような社会関係から形成されているかを見てみたい。図表 4.4 と図表 4.5 を見ると、ほとんどの世帯主は、現在の世帯主から 2 ないし 3 代遡れば、共通の祖先から出自しているということができ、広義の拡大家族関係(イラギートという関係のカテゴリー)にあることがわかる。村の世帯主を親族関係(広義の拡大家族)の観点から分類してみると、次のように 12 のグループに分けることができる。それは、グループ 1(世帯主#9、#16、#18、#43)、グループ 2(世帯主#7、#8、#45、#46、#47)、グループ 3(世帯主#10、#11、#15、#42、#48、#49)、グループ 4(世帯主#35、#36、#37、#38、#39、#40、#41)、グループ 5(世帯主#44)、グループ 6(世帯主#28、#34)、グループ 7(世帯主#1、#17、#19)、グループ 8(世帯主#24、#25、#26、#27)、グループ 9(世帯主#12、#13、#14、#29、#30)、グループ 10(世帯主#31、#32、#33)、グループ 11(世帯主#21、#22、#23)およびグループ 12(世帯主#2、#3、#5、#6)である。これら 12 のグループは、それぞれ拡大家族であるということができる。アクリヴィク村の 49 人の世帯主は、共通の祖先を持っており、かつ婚姻を通して結び付いてきたので、相互に親族関係にあるといえる。

2003 年 9 月におけるアクリヴィク村のコミュニティーは、人口や世帯主数が増加したものの基本的には同じである(図表 4.5)。村の世帯主を親族関係(広義の拡大家族)の観点から分類してみると、次のように 17 余りのグループに分けることができる。1986 年 10 月末までに 12 あった拡大家族は、成員の加齢と増加によって 17 に増加した。グループ 2 は 2 つに、グループ 3 は 3 つに、グループ 9 は 2 つに、グループ 11 は 2 つに分派し、次のようになった。それは、グループ 1(世帯主#30、#60、#80、#81、#82、#83)、グループ 2-1(世帯主#67、#68、#69、#70、#72、#73、#74、#76、#93)、グループ 2-2(世帯主#77、#78、#79、#84)、グループ 3-1(世帯主#55、#56、#57、#58、#59、#94)、グループ 3-2(世帯主#61、#62)、グループ 3-3(世帯主#63、#66、#65)、グループ 4(世帯主#8、#46、#48、#49、#50、#51、#53、#86、#75、#91)、グループ 5(世帯主#12、#45、#47)、グループ 6(世帯主#42、#43、#44)、グループ 7(世帯主#40、#41)、グループ 8(世帯主#33、#34、#35、#36、#37、#38、#39)、グループ 9-1(世帯主#23、#24、#64、#87)、グループ 9-2(世帯主#26、#27、#28、#29、#31、#32)、グループ 10(世帯主#17、#18、#19、#20、#21、#22、#52、#85、#89)、グループ 11-1(世帯主#10、#11、#71、#95)、グループ 11-2(世帯主#13、#14、#15、#16)、グループ 12(世帯主#1、#2、#3、#4、#5、#6、#7、#9、#25、#54、#90)、そのほか(世帯主 88 や 92)に大別できる。なお、この世帯主番号は、表 4.17 と図表 4.5 に対応している。これらの拡

大家族集団グループは、血縁や婚姻によって相互に結び付けられており、村全体がひとつの親族集団を形成しているかのようである。

以上から、コミュニティの人口が増加し、かつ婚姻や仕事、教育などのためによる転入者や転出者の数も増大したが、コミュニティを構成している社会関係の構造は、1934年のケープ・スミス島地域の冬キャンプ(岸上 1990)、1976年のアクリヴィク村形成時のコミュニティ(岸上 1992)、1986年のコミュニティ(図表 4.4)、2003年のコミュニティ(図表 4.5)を比較した場合、基本的には変化していないことがわかる。

アクリヴィク村のコミュニティは、人口の自然増加を続けており、それにほぼ比例して世帯数も増加の一途をたどってきた。一方、世帯の規模は、核家族化と少人数化が進行してきた。コミュニティには、政治・経済的に有力な拡大家族集団が 7 つ存在し、政治・経済的な単位として機能している。それは、グループ 2・1、3・1、4、8、9、10、12 である。グループ 4 は経済力において、ほかのグループは働き盛りの人材の豊富さにおいて突出している。各々の拡大家族関係内で経済的な相互扶助、生業活動、キャンプ形成などが行われる傾向が認められる上に、村内政治の単位となる。村長や村会議員の選挙および選出は、第 3 節 1 項で示すようにおもに 7 つの主要な拡大家族の間のバランスを保つような形で行われている。したがって村会議員は、各拡大家族集団を代表するものであるといえる。そしてアクリヴィク村の場合には、コミュニティ自体が、巨大な拡大家族から形成されているともいえる。そしてアクリヴィク村のイヌイットは個人や個人が属している各拡大家族の福利を追及するとともに、アクリヴィク村の住人全員(コミュニティ)の福利を配慮しながら生活を営んでいる。

ここでコミュニティに関して簡単に説明しておきたい。特に 1930 年代には、先述のグループに該当する単位が春季から秋季にかけてのキャンプ集団であり、冬季にはそれらのキャンプ集団が複数集合して、より大規模な冬キャンプ集団を形成していた(岸上 1990)。春季から秋季にかけてのキャンプ集団はひとつの拡大家族から構成される傾向があり、生活を全面的に共有する集団であった。各々の冬キャンプ集団はそれらの集合であった。前者をここでは第 1 次コミュニティ、後者を第 2 次コミュニティと便宜的に呼んでおく。第 2 次コミュニティは必ずしも親族関係にある人々から構成されるとは限らないが、12 月頃から 4 月頃までは居住地を共有し、ハンターたちは協力してアザラシの呼吸穴猟を行い、獲物を分かちあっていた。この第 2 次コミュニティは、全面的ではないにしても生活や生業活動を共有しており、期間限定の社会・経済的な利害集団であった。

現在の極北地域のイヌイットの村の多くは、複数の第 2 次コミュニティ(複数の第 1 次コミュニティから構成される)が集合して 1960 年代に形成されたものである。それから約 40 年の間に、各村のイヌイットはそれぞれの第 1 次的コミュニティや第 2 次コミュニティへの帰属意識を保ちつつ、同じ村に居住することや共通の経験の記憶の蓄積(歴史)を共有することによって、村単位で「われわれ意識」や村への愛着が形成されてきた(Nuttall 1992: 166-169; Gombay 2005a, 2005b)。さらに第 1 次コミュニティの拡大家族関係に基

づく集団の成員全員の相互扶助による福利の追求という考え方が、時間とともに第 3 次コミュニティにも拡大適用されてきた(Wenzel 1991: 105)。現在のアクリヴィク村では、村を構成する各拡大家族集団全体の福利とともに、コミュニティ全体の福利をある程度追求しているといつてよいだろう。例えば、村の中に社会・経済的に困っている人がいれば、親族でなくても助けてあげ、逆に自分が困っているときには助けてもらうように、村全体がひとつの相互扶助団体のようになっている。これは人口規模が小さい村に該当するが、村全体の人口規模が増大するにつれて、相互扶助は第 1 次コミュニティである各拡大家族集団内や友人関係に限定されていく傾向にある。

## 第 2 項 社会制度

アクリヴィク村で現在でも機能している社会制度や社会関係として婚姻制度、養子縁組制度、同名者関係、助産人関係、友人関係、隣人関係などが存在している。

### (1)婚姻制度

現在でもイヌイットの間では、法的な手続きを経ることなく同居生活を送り、実質的に夫婦関係になるコモンロー夫婦が多数存在している。2003 年 9 月の時点では、アクリヴィク村には 58 組の夫婦が存在していたが、このうちの 12 組(約 21 パーセント)はコモンロー夫婦であった。彼らは、子供をもうけ、10 年以上生活を共にした上で、正式に結婚をすることが多い(注 11)。本論文では、村の中で夫婦として認知されている男女の対は、法的に認められていなくても婚姻関係にあると見なすことにする。

1975 年から 1986 年の約 10 年間にアクリヴィク村では 11 組の婚姻が見られた。このうち 6 組がアクリヴィク村の在住者同士の婚姻であった。ほかの村から婚入してきた者は 5 人いた。そのうち 2 人(18.1 パーセント)はクジュアラールピク村出身、2 人(18.1 パーセント)はイヌクジュアク村出身のイヌイット、残る 1 人(9.1 パーセント)はオタワ出身のヨーロッパ系カナダ人であった。このことから配偶者の半数強が村の中から、それ以外はおもにハドソン湾沿岸のイヌイットの村出身であることがわかる。これらの夫婦のうち 10 組は新たな世帯を形成し、1 組が妻方の両親と同居した。

1980 年代以降のアクリヴィク村では、親が一方的に決めた結婚や幼少期の婚約に基づく結婚の事例は見られなかった。イヌイットの若者は、自ら配偶者を見つけ、同居し、子供をもうけている。その後、彼らの両親に結婚の了承を求めるパターンがもっとも多く見られた。

アクリヴィク村の場合、イトコのカテゴリーに属する者の間での婚姻が見られた。11 組の婚姻のうち、5 組はイトコ婚であった。すなわち、3 組が第 1 ないし第 2 イトコ同士の婚姻であり、2 組が第 3 イトコ同士の婚姻であった。

近年は、交通・通信の便が発達したこともあって、若者の移動が見られる。特に、若い女性が多数、より大きな村やモントリオールなどの都市へ流出する傾向があり、若い男性の

人口に対して若い女性人口は常に少ない。このため 30 歳代から 50 歳代前半にかけて独身男性が複数存在している。

## (2)養子縁組制度

イヌイト社会に特徴的な社会制度のひとつに養子縁組の制度がある(注 12)。1975 年から 1984 年の間に 62 人の子供が生まれている。このうちの半数にあたる 31 人が養子に出されていた。26 人の子供は村の中に養子に出され、5 人の子供は村の外へと養子に出されていた。このように大半は村の中で養子縁組が行われていた。イヌイト社会では養父母は子供が養子であることを隠すことはせずに育てる。養子にとられた子供は、養父母によって実子以上に大切に育てる事例や特に養父母が子供の実の祖父母である場合には子供を甘やかすような事例が多々見られた。

すでに別のところで報告したように養子に出す理由や養子にとる理由はさまざまであるが、養子縁組は既存の親族関係に沿って行われている(岸上 1998:112-116)。表 4.18 に示した 31 事例中、7 人の子供は母方のオバ(母の姉妹)によって養取されている。母方と父方の祖父母(子供の父母のいずれかの両親)ともに 5 人ずつ養取している。2 人の子供が父方オジ(父の兄弟)に、2 人が母方のオオオバ(母のオバ)によって養子にとられている。さらに、子供の父方のオオオジ(父のオジ)、母方のオジ(母の兄弟)、母方のオオオジ・カテゴリー(母のオジ・カテゴリー)の夫婦が 1 人ずつ子供を養子にとっている。このほか親族関係にない夫婦が養子をとった事例が 4、関係が確定できない事例が 2 あった(表 4.18)。

|          |                    | 数  | 割合     |
|----------|--------------------|----|--------|
| 親族関係     | (1)子供之母方オバ         | 7  | 22.6%  |
|          | (2)子供之父方祖父母        | 5  | 16.1%  |
|          | (3)子供之母方祖父母        | 5  | 16.1%  |
|          | (4)子供之父方オジ         | 2  | 6.5%   |
|          | (5)子供之母方オオオバ       | 2  | 6.5%   |
|          | (6)子供之父方オオオジ       | 1  | 3.2%   |
|          | (7)子供之母方オジ         | 1  | 3.2%   |
|          | (8)子供之母方オオオジカのテゴリー | 1  | 3.2%   |
| 小計       |                    | 25 | 80.6%  |
| 非親族関係    | (9)アクリヴィク村内の友人     | 3  | 9.7%   |
|          | (10)イヌクジュアク村の友人    | 1  | 3.2%   |
| 小計       |                    | 4  | 12.9%  |
| 関係を特定できず |                    | 2  | 6.5%   |
| 総計       |                    | 31 | 100.0% |

表 4.18 1975 年から 1986 年の間に養子に出された子供と養父母の関係

出典：(Kishigami Fieldnotes of 1986 より)

現在でも、養子の制度は機能し続けているが、1980年代前半と比較するとイヌイットの女性の在学(教育)期間が延びたことや学校関係者からの指導によって、初産年齢が上昇してきた。このため、ひとりの女性が一生のうちに出産する子供の数が減少する傾向にある。

### (3)同名者関係

イヌイット社会では、本来、家系や出自を特定するような名字は存在せず、ファースト・ネーム(以下では名前と略す)しかなかった。また、その名前のつけ方は性別と結びついたものではなかった。ところが欧米社会との接触により、イヌイット社会に洗礼名や名字が導入された結果、イヌイットの名前や命名体系に変化が起こった(注 13)。アクリヴィク・イヌイットの祖先は、ほかのケベックのイヌイット同様、キリスト教の洗礼を受けた際、英語の洗礼名を持つようになったが、この洗礼名は、聖書に出てくる人物の名前から選ばれた。例えば、アママツアク(Ammamatuak)というハンターは、1920年代に、ハドソン湾会社の交易所と英国聖公会派の教会があったクジュアラーピクでキリスト教の信者となり、アダム(Adam)という洗礼名が付けられた。したがって、彼はアダムという英名とアママツアクというイヌイット名を持つようになったのである。

さらに、1940年代以降、カナダ政府がイヌイット社会に積極的に介入するようになると、行政上の必要から名字制が導入された。そして1960年代末までに、すべてのカナダ・イヌイットは、名字を持つようになった。

名字を持っていないイヌイットには、その人物の父親のイヌイット名が名字として利用されることが多かった。例えば、洗礼名がマーク(Mark)で、イヌイット名がクマク(Qumak)という男性に息子が生まれたときに、モーゼス(Moses)という洗礼名とタリア(Talia)というイヌイット名が付けられたが、この場合、モーゼスの父親のイヌイット名クマクが彼の名字とされた。そしてそれ以降、このクマクという名字は、モーゼスの子孫の名字となった。

さらに洗礼名など英名がイヌイット社会に導入されてからは、性別とイヌイットのファースト・ネーム(英語の洗礼名)が結び付くようになってきた。周知のようにアダムやピーターは男性名であり、マーサやメリーは女性名であるため、最近ではこれらの名前が新生児に付けられるときには、子供の性別が考慮されるようになり、男性の英名は男子に、女性の英名は女子に付けられるようになってきた。しかしながら、現在でも、ミドル・ネームとして付けられているイヌイット名自体は依然として特定の性別と結び付いていないことを指摘しておきたい。

現代のイヌイット社会において、名字や英名のファースト・ネームは、政府の役人や、教師、医師、宣教師、交易人が個々のイヌイットを区別する上では役立ってきたが、イヌイット自身にとって文化・社会的に重要なのは、ミドル・ネームとして新生児に付けられるイヌイット名である。

イヌイットにとっての名前は、個人を区別したり、社会的カテゴリーに分類する手段で



あるのみならず、彼らの世界観と密接な関係にある。彼らはひとつひとつのイヌイト名には、名前の靈魂が宿っていると信じている。その靈魂には、特定の性格や感性、意志、パーソナリティー、狩猟の技量のような人間の属性が内在しており、新生児に名前を付けることによって靈魂とその属性が新生児に乗り移ると考えられてきた。そしてある名前を受け取った人物は、その名前を持っている人物や持っていた人物と同一の人間属性を持っていると見なされる。

ある名前を付けられた新生児は、その名前を持っていた、ないし持っている人物と同じようにふるまうことが期待される上に、社会的にも同一人物と見なされることがある。したがって、イヌイトAの息子の名前が、Aの父親にちなんで付けられていたならば、Aの息子はAの父親でもあるということになる。さらにその息子が、Aのオジの名前をもらっていたならば、その子はAのオジでもあるということが出来る。要約すれば、イヌイトは名前を通して社会的人格(social persona)や社会的アイデンティティーを受け取るのである。

イヌイト社会では、同じ名前を共有することによって新たな社会関係が形成され、経済活動や社会生活を行う上で重要な機能を果たしてきた。

ある人物が、ほかの人物と名前を共有するようになるには、3つの場合がある。第1は、ある人物の名前が、特定の人物にちなんで付けられるために形成される関係である。すなわち一方が他方の名前をもらった場合である。この場合に形成される関係を同名者関係と呼ぶことにしたい。第2は、2人の人物が、同一の第三者から名前をもらった場合である。この2人の関係を「名前の共有者関係」と呼ぶことにしたい。第3は、2人の人物が偶然に同じ名前を持っている場合である。この2人の関係を「偶然による名前の共有者関係」(以下偶然関係と略称)と呼ぶことにしたい。アクリヴィク村のイヌイトの間では、名前に基づく3種類の関係のうち偶然関係を除くふたつの社会関係が、社会構造の重要な要素となっている。同名者間や名前の共有者間では、特殊な呼称で呼び合うことや特定の行動パターンをとることが制度化されている。

同名者間や名前の共有者間では、特別の用語が呼称や言及に使用される。この用語の使用は、親族用語も含めてほかのいかなる呼称・言及用語よりも優先されて使用されている。親子の場合でさえ、もし同名者関係であれば、親や子を表す親族用語よりも、同名者を示す特別な用語の方が、優先的に使用されるのである。

特別な用語とは、同名者間や名前の共有者間では、「サウニック」(*saunig*、「骨」を意味する)という語である。サウニックという語は、お互いを呼ぶときに使用され、第三者に同名者を紹介したり言及したりする場合にも用いられる。同名者同士や名前の共有者は、「サウニカティギート」(*saunigatigiit*)や「サウニカティク」(*saunigatik*、「骨を共有する者」の意)と呼ばれる。名前の共有者の場合、2人の年齢がほぼ同じで、特に仲がよいときには、この2人はお互いにアッパクク(*appakuq*)('ひとつの物の片方'の意)という語が呼称や言及に使用される。

偶然による名前の共有者間では、お互いを呼ぶ場合は、親族関係であれば親族用語が使用され、非親族であれば名前が使用される。しかし、もしこの当事者2人が合意すれば、「サウニク」や「アツパクック」という用語を呼称に使用してもよいとされている。

さらに興味深い点は、これらの名前に基づく特殊な関係は、当事者の親族関係や親族呼称にも影響を与えることである。

ここで一つ例をあげておきたい。ここに2人の世帯主AとBがおり、兄弟と仮定する。AはBの兄であり、CはAの息子、DはBの息子、そしてEはDの息子であると仮定しよう。さらにAとB、C、D、Eの5人はすべて存命で、Eの名前はAにちなんで付けられたとしよう。すなわちEとAは同名者関係にある。

この場合、AとEは、同一の名前を持っているため、この2人は、ほかの家族成員によって同一人物と見なされる。AはCの父親であるから、Cを「息子」と呼ぶが、Aの同名者であるEもCを「息子」と呼んでもよい。さらにCはEを「父親」と、Dを「祖父」と呼んでもよい。また、B(Eの祖父)はEを「兄」と、EはBを「弟」と呼んでも差しつかえない。

このような変則的呼称は、フォーマルな親族関係が、名前の共有の観点から再解釈され、その解釈された関係を指す親族用語が選択され、使用される結果である。この再解釈された親族用語が使用されるときには、特定の親族用語に関連する行動が期待される場合もある。ただし、この再解釈による親族呼称は常に使用されるとは限らず、そのときの状況によって使用されたり、されなかったりする。

同名者関係は、通常、異なる世代間をつらぬく関係であり、名前の共有者関係は同世代間の関係である。同名者関係も、名前の共有者関係も、親密でかつ気のおけない間柄である。同名者間や名前の共有者間で、世代が異なる場合は、年長者の方が年下の者を甘やかしたり、かわいがり、あたかも祖父母と孫との関係のごとくである。年下の者は、年長者の方に、甘えたり、何でもプレゼントをねだることが許されている。

名前の共有者間で、性別と世代が同じで仲がよい場合には、当事者の関係は兄弟愛のような愛情や連帯によって特徴付けられる。また2人は、会えば冗談をあひせ合うような間柄である。

同名者関係や名前の共有者関係には、特定の義務は付随していないが、ある程度の相互扶助を行うことが期待され、実践されることがある。同名者関係の場合、名前の与え手が存命であれば、名前のもらい手に玩具や狩猟道具のようなものをプレゼントすることが期待される。そして名前をもらった子供が成長するにつれて、その子供の母親は折を見て、衣服やブーツのような実用品を作り、子供の同名者(名前の与え手)に贈与するのが一般的である。一方、経済的に困っていれば、同名者やその家族に援助を請うことができる。また一般に、必要に応じて、名前のやり手(成人)は名前のもらい手(子供)を世話したり、助けたりしなければならない。さらに子供が成長し、狩猟や家事を行う年齢に達すると、その子供の同名者は、その子供と一緒に狩猟を行ったり、仕事を行ったりすることも多い。

名前の共有者関係のうちで、同性でかつほぼ同年齢の同名者間の関係は特別のものである。

り、彼らはプレゼントを交換したり、狩猟パートナーとして協力する仲間であることが多い。

#### (4)助産人関係

ケベック州極北地域のイヌイット社会では、新生児と「サナジ」(*sanaji*)と呼ばれる人物との間には一生継続する特別な社会関係が形成される慣習が存在した(注14)。サナジとは、生まれてくる赤ん坊の一種の後見人である。ここでは、サナジを助産人と呼んでおく。

妊婦とその夫は、彼らの子供の助産人を自らの意志で決め、その人物に子供の助産人になってくれるように依頼する場合もあれば、反対に子供の助産人になりたい人物が、妊婦やその夫に、申し出ることもあった。最終的には、子供の両親(多くの場合は母親)が助産人を決定する。助産人は、子供の親族の中から選ばれることよりも、子供の両親の特に親しい友人の中から選ばれる傾向がある。助産人は、子供の性別には関係なく、かつ男性でも女性でもなることができた。助産人は、生まれてきた子供が男性であればその子を「アングシアク」(*angusiak*)と呼び、女性であればその子を「アルナリアク」(*arnaliak*)と呼ぶ。一方、子供たちは助産人を「サナジ」と呼んだ。同一の助産人を共有している子供たちは、お互いを「サナジカティク」(*sanajiqatik*)と呼んでいる。

助産人は出産に立ち会い、生まれてきた子供に、「よいハンターになりますように」や「裁縫上手になるように」など願い事を語りかけながら、最初に産着を着せる。助産人は子供の面倒を見たり、いろいろなことを教え込む役割を果たす。そして子供が成長する過程で子供に衣類や道具をプレゼントする。例えば、女の子ならば初潮を迎えるまで、男子ならばハンターとして狩猟に行くようになるまで、その子供に手袋や衣類、ライフルの銃弾などを時折、プレゼントしたり、お話をしあげたりして喜ばせる。子供にとっては、甘えることができる存在である。一方、子供は生まれて初めて作ったすべての種類の道具や衣類などを、また最初に捕獲したすべての種類の獲物を助産人にプレゼントすることが期待されている。また、成長した後にも、助産人と子供は折々、プレゼントをし合う。両者の間では、遅延的なプレゼント交換が行われることになる。

ところが、1960年代の半ばになると、カナダ政府の指導でケベック州極北地域のハドソン湾側の村に住むイヌイットの妊婦は、オンタリオ州ムース・ファクトリー(Moose Factory)へ行き、そして1970年代にはモントリオールへ行き、病院で出産をするようになった。また、緊急の場合には、村の看護所で出産することもあった。病院や看護所での出産は、医師や看護婦の助けを借りて行われるが、サナジ(*sanaji*)と呼ばれる人物が出産に立ち会うことは許されなくなった。このため、ケベック州のウングアヴァ湾地域のイヌイットの間では、この助産人の慣習は中断されることとなった。一方、ハドソン湾沿岸のイヌイットの間では、新生児が病院から村に連れて帰られた後に、助産人に選ばれた人物が、その子供に希望を語りかけながら、カナダ南部や米国で製造されたオムツを着せるようになった。このようにして慣習はかたちを変えて継続された。

アクリヴィク村においても、助産人の慣習は現在でも実践されている。しかしながら、以前と比べ、多少の変化が認められた。第 1 に、アクリヴィク村のイヌイットはキリスト教徒であるため、ゴッドマザー・ゴッドファーザー(教母・教父)の制度を持っている。後者もイヌイット語ではサナジと呼ばれる。アクリヴィク村のイヌイットの間では、もし生まれてきた子供が女子ならば 2 人のゴッドマザーを、男子ならば 2 人のゴッドファーザーを持つべきであるとされている。ゴッドマザーやゴッドファーザーは子供にキリスト教の教えを諭し、バイブルの読み方を教える役目がある。助産人と教会のサナジは本来別のものであるが、両者が重複するような事例が出現している。すなわち 1 人が子供の助産人かつゴッドマザーないしはゴッドファーザーとして選ばれている。したがって、助産人が新生児の洗礼式に立ち会うような事例が見られる。

第 2 に、1986 年に男性世帯主 30 人以上に質問をした結果、父親は子供の助産人が誰であるのかをあまり記憶していないことが判明した。これはふたつの点を暗示している。第 1 点は、助産人の選定はおもに母親によってなされている可能性が高いことである。第 2 点は、助産人と子供との関係、2 家族間の特別な関係というよりも、あくまで助産人と子供の二者関係として機能していることが多いことを示しているといえよう。

第 3 に、1987 年に隣村のプヴィルニツク村に総合病院が建設されてから、アクリヴィク村の女性はその総合病院で出産をするようになった。この新病院では、イヌイットの助産人が産室に入り、かつてのような役割を果たすことが許されている。このため、かつての助産人の慣習が復興しつつある。しかしながらアクリヴィク村の産婦は、同村から助産人を同行することが難しいため、プヴィルニツク村出身の助産人の数がアクリヴィク村において増加しつつある。

現在でも、アクリヴィク村のイヌイットは、助産人の慣習を実践しているが、助産人の選定には社会的な関係というよりは、むしろ親しみや親密さなどの要因で選んでいる場合がほとんどである。なお、新生児の同名者(サウニク)は、多くの場合、その両親の家族や親族から選ばれるが、助産人は家族や親族以外から選ばれる傾向がある。

#### (5)友人関係と隣人関係

1960 年代以降、イヌイットが定住村に移り住むようになってから、複数の親族集団が同じ村で生活を始めた。その結果、村の中で日々接触する親族の数が増えるとともに、学校や職場などにおいて親族関係にない人々との間で付き合いが増加した。日常生活において、親族ではない友人や隣人がそれ以前よりも社会的に重要になってきたといえる。

特にほぼ同年齢であり、学校で同じ学年やクラスであったイヌイットの間に芽生えた、個人的な親密さに基づく友人関係は、やがて社会関係に大きく影響するようになってきた(Condon 1987:115)。そして、この友人関係はイトコ関係と往々にして重なっていることが多い。彼らは、頻繁に狩猟やキャンプに同行したり、自宅を訪問し合ったり、村の中でともに時間を過ごすようになっている。

アクリヴィク村では新しい住宅への入居や転居は、村人の必要性和世帯人数を考慮して村役場の住宅担当者が案を作成し、その案が村議会によって承認されてはじめて実施される。このため、親兄弟姉妹であるからといって隣近所に住宅が割り当てられるとは限らない。最近では、親族でない隣人との関係も食物分配や道具の貸し借りの上で機能している場合が多々、認められる。

### 第3節 アクリヴィク村の政治と宗教

本節では、アクリヴィク村における村内の政治と宗教活動について記述する。村議会での決定や村の教会の活動は、アクリヴィク村のイヌイットの生活面に多大の影響を与えている。

#### 第1項 村内の政治

アクリヴィク村にはフォーマルな政治権力とインフォーマルな政治権力が存在している。フォーマルな政治権力は公の制度である村議会や村長であり、インフォーマルな政治権力とは、それぞれの拡大家族集団を代表する長老たちである。

##### (1)村議会と村長

村全体に関する重要な事柄は、村長と6人の議員からなる村議会で決定される。村議会は村の最高決定機関である。村長と村役場は、その決定事項を実施する行政的な役割を持っている。毎週火曜日の午後6時過ぎから定例の会議があり、村長が議長となって議事が進行される。村長は専従職であり給料が支払われるが、村議員の待遇はパートタイムであり、別の職業に就いている場合がある。

村長は、村の運営に関してカティヴィク地方政府の会議や各種委員会に出席しなければならないが、1ヶ月のうち1週間以上を村外で過ごさなければならないことがある。そのため、村長の不在時には村会議員の中から互選で決定された副村長が代理となる。

##### (2)村会議員と村長の選出

村会議員、村長ともに2年ごとに改選され、村人の中で18歳以上の人の投票によって決定される。

アクリヴィク村の1986-1987年、1998-1999年、2002-2003年の村長と村会議員の構成を見てみよう。1986-1987年の村長は図表4.4の世帯主(#6)(主流グループ12に所属)、村会議員は世帯主(#2)(主流グループ12に所属)、世帯主(#18)(非主流グループ1に所属)、世帯主(#13)(主流グループ9に所属)、世帯主(#20)(主流グループ4に所属)、世帯主(#10)(非主流グループ3に所属)、世帯主(#37)(主流グループ4に所属)であった。1998-1999年の村長は図表4.4の世帯主(#6)の弟(主流グループ12に所属)、村会議員は世帯主(#14)(主流グループ9に所属)、世帯主(#32)(主流グループ10に所属)、世帯主(#33)の妻(主流グループ

10 に所属)、世帯主(#7)の息子(主流グループ 2 に所属)、世帯主(#44)の娘(非主流グループ 9 に所属)、世帯主(#43)(非主流そのほかに所属)であった。2002-2003 年の村長は、図表 4.4 の世帯主(#18)(非主流グループ 1 に所属)、村会議員は世帯主(#32)(主流グループ 10 に所属)、世帯主(#13)(主流グループ 9 に所属)、世帯主(#33)の妻(主流グループ 10 に所属)、世帯主(#5)(主流グループ 12 に所属)、世帯主(#40)の娘(主流グループ 4 に所属)、世帯主(#22)の兄の息子(非主流グループ 11 に所属)であった。これをグループ別に整理したのが表 4.19 である。

|      | 1986-1987 年                                                       | 1998-1999 年                                                  | 2002-2003 年                                                         |
|------|-------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------|
| 村長   | 主流グループ 12                                                         | 主流グループ 12                                                    | 非主流グループ 1                                                           |
| 村会議員 | 主流グループ 12<br>主流グループ 4 (2 議席)<br>主流グループ 9<br>主流グループ 3<br>非主流グループ 1 | 主流グループ 9 (2 議席)<br>主流グループ 10 (2 議席)<br>主流グループ 2<br>非主流グループ 1 | 主流グループ 10 (2 議席)<br>主流グループ 9<br>主流グループ 12<br>主流グループ 4<br>非主流グループ 11 |

表 4.19 アクリヴィク村の村長・村会議員の出身グループ

アクリヴィク村は、すでに示したように 10 以上の拡大家族によって構成されているが、村会議員はその中の成員数が多い 7 つの主要な拡大家族(グループ 2、3、4、8、9、10、12)の中から選出される傾向がこの 20 年余りの間、続いている。なお、グループ 8 は村会議員を出してはいないが、ヌナヴィク地域のイヌイットの政治・経済的な利害団体であるマキヴィクのアクリヴィク村を代表する理事を 1 人出し続けている。このように村内の政治は、それぞれの拡大家族集団の利害を代表する議員によって行われており、これらの家族集団の均衡の上に成り立っているといえる。村会議員には、50 歳代の男性が多いが、女性や老人が選出されることもある。

村長は、村を代表する人物であるとともに、村の外との交渉能力や行政手腕が必要とされるため、英語が堪能である 40 歳代から 50 歳代前半の男性が選出される傾向がある。また、村長になるためには、複数の拡大家族集団から支持を取り付ける必要がある。さらに敬虔なキリスト教徒であることが望まれている。

### (3) インフォーマルな権力

村役場の人事や新しい住宅への入居者などに関しては、村議会が決定し、それを村役場が実務を担当するというフォーマルな権力構造が存在する一方で、老人たちはインフォーマルな影響力を持っている。老人たちの影響力は、その人が属している拡大家族集団の成員に限定される傾向が認められるが、若い人たちに対して相談役や苦言を呈する役割を担

っている。

村全体で話し合うことが必要な場合には、村議会が召集して体育館で全体集会が開催されることがある。例えば、1986年の秋には青少年のシンナー遊びなどが問題となり、その対策に関する全体集会が行われた。このとき、議長に直面する第1列目には村の老人方が並び、その後ろにほかの村人が着席していた。中年以下の村人が、さまざまな意見を述べていたが、集会が終わりに近くなるとおもむろに老人たちが口を開き始めた。大半の老人は子供を諭すように、シンナー遊びは悪であり、みんなキリスト教の教えにしたがって生きるようにと発言していた。議長は、老人たちの意見を重んじながら結論を出し、散会した。

このような事例を数回体験した中で、アクリヴィク村においては男女にかかわらず老人たちはインフォーマルな影響力を持っていることを確認した。

#### (4)村の政治権力と経済権力との関係

アクリヴィク村の政治には、村長や村会議員のようなフォーマルな権力を持つ人々と、老人たちのようにインフォーマルな影響力を持っている人たちが作用する。

アクリヴィク村には、経済的に突出した拡大家族(グループ11)がひとつ存在し、生協の総支配人、副支配人、購買マネージャーの要職を独占している。そのほか空港の天候観測などの高給の職に就いている成員を擁し、かつ大型狩猟用ボートを共同所有している。この拡大家族は常に村会議員の席をひとつ占めているが、村長になった者はいない。また、生協の総支配人であったある成員が職権を乱用したときには、生協の理事会がその人物を解任したことがあった。

このように、アクリヴィク村では、村の政治権力と経済力との間には明確な関係が見られない。村の政治は、経済力のあるグループによって運営されているというよりも、7つの主要な拡大家族集団の政治的な均衡の上に成り立ってきたといえる。

### 第2項 村内の宗教

アクリヴィク村の人々は、他地域のイヌイットと同様に敬虔なキリスト教徒である。キリスト教の教えは、彼らの中に深く浸透し、生活のあらゆる面に大きな影響を与えている。

#### (1)キリスト教信仰と教会

現在のアクリヴィク村には、イギリス国教会の教会があり、村人のひとりが司祭の役割を果たしているが、専従の牧師はいない。毎週、水曜日の夕方と日曜日の朝と晩に定例のミサが行われ、老人や女性、子供を中心に多数の村人が参加している。

このほか毎週、日曜日の午後には子供を対象とした日曜学校が村の教会で開催され、キリスト教を教えている。また、毎週木曜日の夕方には、熱心な信者が集まり、聖書を読む聖書研究会が開催されている。1年に数回、特別なミサの時には隣村のイヌイットの牧師

がアクリヴィク村を訪れる。この時に結婚式や新生児の洗礼などが執り行われる。

アクリヴィク村では、キリスト教は村を統合する機能を果たすとともに、ある時期には村を分割し、対立させる原因となることがあった。アクリヴィク村のイヌイットは、プヴィルニツク村に移住する以前からイギリス国教会の信徒であった。それは表面的には現在でも同じであるが、1980年代より「生まれ変わること」(new born again)を強調するペンテコスタル派や福音派の教えを実践するイヌイットの人口が急増し、1980年代の半ばにはイギリス国教会派の中高年のイヌイットとペンテコスタル派や福音派の若者のイヌイットとの間に宗教活動をめぐる対立が表面化した。この時には村全体の集会が開催され、中高年の村人が若者を非難する事件が起きたが、それから多数の老人が他界した10年後にはその形勢が逆転した。2001年現在の教会では、イギリス国教会でありながらも、ギターやドラムの伴奏で賛美歌を歌い、公衆の面前で泣き叫んだり、教会活動の補助者に罪を懺悔したりしている。アクリヴィク村では、隣のプヴィルニツク村やクージュアック村のようにふたつ以上の教会が並列するということはなかったが、現在の教会でのミサを、20年前と比べると大きく変わってしまった(注15)。

#### (2)教会運営委員会

アクリヴィク村の教会は村人全員がかかわる重要な制度体のひとつである。定例のミサや祭事を実施するために、教会運営委員会が組織されている。この委員会は、信者が互選で決めることになっているが、この委員に選出されることは村人にとってきわめて名誉なことである。定員は7人であり、任期は1年である。委員は毎週、月曜日の夕方に教会に集まり、教会の運営に関する会合を持っている。通常、敬虔で、常に教会に対して奉仕活動を行っている人物が、選出される傾向にある。村会議員や生協の職員などが、この教会運営委員会に選出されることはきわめて少ない。信心深い村人が選出される傾向があり、各拡大集団から代表が選出されることは少ない。

#### (3)教会と政治

1970年代の半ば以降、アクリヴィク村の教会のパートタイムの牧師として中心的な役割を果たしてきた人物が2人存在している。その2人は、2001年の時点で50歳と77歳の男性であった。後者の男性は1990年代の後半に引退し、2000年の時点では前者の男性が旅行中で不在のときに、ミサを行っているにすぎない。この2人は、イヌイットの生き方を尊び、多くの村人から尊敬を集めているが、一切、村の政治には関与しないという立場を堅持している。

アクリヴィク村においては、村長も村会議員も敬虔なキリスト教徒であることが望まれる一方、村の宗教活動の中心となっている人は村内政治には深くかかわらない傾向にある。

### 第3項 村内における政治、経済、宗教の関係



アクリヴィク村における政治、経済、宗教の 3 分野における中心的なリーダーたちは、同一人物ではない。少なくともアクリヴィク村においては、これらの分野においては少数のリーダーにすべての権力が収斂するのではなく、それぞれの分野に分散する傾向にある。

この点は、すでに第 3 章で紹介したように 1930 年代のキャンプ地のリーダーは政治・経済・宗教的なリーダーであった事実と比較すると、きわめて興味深い相違であるといえよう。

以上、本章では現在のアクリヴィク村の経済、社会、政治、宗教を概略した。ここで確認しておきたい点は、アクリヴィク村の社会・経済・政治において拡大親族関係(イラギート)が重要な社会関係として機能してきたことである。

## 第5章 現代のアクリヴィク村における食物分配とハンター・サポート・プログラムの効果

アクリヴィク村のイヌイットの食料は地元で捕獲される海獣や陸獣、魚介類、鳥類などと村の生協の店舗で販売されているカナダ南部から輸送されてくる加工食料品である。ライチョウやホッキョクイワナが時々生協で売られていること(注1)を例外とすれば、地元の野生動物や魚類は村人間でほとんど売買されることはなく、無償で分配されている。また、現金で購入された食料品もアクリヴィク村では分配されている。食物の分配は、現在のイヌイットの生業システムの核をなす構成要素である。

本章では、アクリヴィク村における現代の食物分配について分配が行われる社会関係に着目しながら記述を行う。現代の食物分配を歴史的に見た場合に、1980年代以前から存在していた慣習的な食物分配と1980年代半ばにハンター・サポート・プログラムを利用して実践されるようになった新しい形態の食物分配とのふたつのカテゴリーに大別できる。ここでは前者を慣習的な実践、後者を新たな実践と便宜的に区別しておく。

### 第1節 現代のアクリヴィク村における食物分配の全体像

アクリヴィク村の食物分配は、狩猟に参加したハンター間での第1次分配、村やキャンプに帰ってきたハンターと村人やキャンプのメンバーとの第2次分配、村にもたらされた肉が食事を通して分配されたり、村人の間で分配されたりする第3次分配からなる。分配の対象となるものは、地元でとれる陸獣や海獣の肉や魚類、現金で購入した食料品などである。ここではアクリヴィク村において実践されている食物分配の全体像を提示しておきたい。

第1次分配は、狩猟に参加したハンターによって行われる。獲物を仕留めたハンターは、獣皮やもっとも多くの量の肉を取ることが許されるが、残りは狩猟に参加したハンターに分配される。獲物の一部や食物をほかの者に与えることは、現地では「ニッキミク アイツイユク」(*niqimik aituijuk* 「肉もしくは食物を与える」)と表現され、獲物や食物を受け取ることは「ニンギクツク」(*ningiktuk* 「獲物の一部を手に入れる」)と表現される。多くの場合、獲物の解体に参加したハンターたちは捕獲量全体を考慮しながら、自分が欲しい分を取ることが多い。かつてはシロイルカやセイウチなどの大型獣を仕留めた場合、捕獲したハンターがどの部分を取るかは決められていたが、現在では、そのような厳格なルールは存在していない(注2)。

第2次分配では、肉をもたらしたハンターが彼の近親族(両親や祖父母、兄弟姉妹、オジ、オバ、子供)に全部もしくは部分を与えることが多い。近親族以外にも、近所の友人、古老、病弱で狩猟に行けない人、同名者(*sauniq*)、儀礼的助産人(*sanaji*)に肉を与えることがある。ある人間が、ほかの人の家やテントに獲物や食物を持って行ってあげる行為は、「パユツク」(*pajutuk* 「同じキャンプや村の中の別の家に住む人にプレゼントを持っていく」)

と表現される。さらに、これらの人々の中で、肉が必要な人は直接、ハンターの家に肉をもらいにいく場合がある。また、親戚や近所のハンターが肉を持っていない場合には、村のFM ラジオ放送局に電話をかけ、肉を無償で提供してくれる人を探すことや、「ハンター・サポート・プログラム」のもとで村の冷凍庫に貯蔵している肉や魚を必要に応じてもらうことがある。肉や魚などに関して、1対1の対面的関係で食物の「貸し借り」を行うことは非常にまれであり、ほとんどが与えるという形をとる。セイウチやシロイルカなど大型獣を仕留めたハンターは、村に帰ると村人全員に肉やマッターク(シロイルカの脂肪付き皮部)を少量ずつ、分配することがある。

別の形態の第2次分配が存在している。村有の大型ボートや個人所有の大型ボートを利用し、捕獲したセイウチの肉やシロイルカのマッタークなどが村人に分配されている。村有ボートを利用した場合には、村に雇われたハンターが村に持ち帰った肉やマッタークを村の役人がそれらを必要とする全世帯に平等に分配する(岸上 2001b: 37-38)。個人所有のボートの場合には、私有大型ボートの船長とそれに同乗したハンターが自分たちの肉やマッタークを取った後、残った肉やマッタークをもらいにきた村人に船長が手渡しをする(岸上 2001: 40-41)。前者も後者も、村人に食料をもたらすという意味で、現地では「パユック」と表現される。

第3次分配としては、第2次分配で手に入れられた肉が食事を通してさらに親族やほかの村人へと分配されることがある。食事に招待することや食事に参加することによって食物が分配される。誰かを食事に招待することは、「カイクイク」(*qaiqujjuk*「誰かを食事にくるようにと招待する」)と表現される。アクリヴィク村のイヌイットは祖父母や父母が存命の場合には、自宅ではなく祖父母や父母の家で昼食や夕食をとることが多い。また、クリスマスやイースターの時には、村が主催する村全体での祝宴が実施され、食事が村人に振る舞われる。このように人々が集まって食事を共にすることは、「ニリマツット」(*nirimatut*「一緒に食べる」)と表現される。

ここでは先に示した全体像に沿って、ハンター間の獲物の分配、ハンターと村人との獲物の分配、村人間での食物分配、食事を通しての食物分配、村外との食物分配について事例を紹介する(注3)。なお、本章において提示される事例に出てくる人物は、図表4.5(表4.16にも対応)の世帯番号を利用して示すことを明記しておきたい。

## 第2節 ハンター間の獲物の分配

1960年代以降カナダの極北地域では運搬手段の機械化が進む。具体的には、イヌイットがスノーモービルや船外機付きのカヌー、モーターボート、地元では「ホンダ」と呼ばれている四輪バギー車などを利用するようになった。これらの運搬手段は、イヌイットの行動範囲を広げるとともに、移動効率を向上させた。さらにこれらの手段を利用して1人か2人でも狩猟や漁撈に行くことができるようになったため、狩猟・漁撈集団が小規模化した。複数のハンターが共同で狩猟や漁撈を行う機会が少なくなると、必然的に狩猟場でのハン

ター間での獲物の分配の頻度や量は減少した。それでも狩猟場や解体場に居合わせたハンター間や移動中に出くわしたハンター間では獲物の分配が行われている。

#### 事例1 カリブー猟とケワダガモ猟

2003年10月1日、私の滞在先の主人(#27)は、同世代のイトコ(#48)と私とともに彼の船外機付きカヌーで日帰りのカリブー猟に行った。狩猟場に行く途中で散弾銃を利用してケワダガモを捕獲した。ケワダガモは捕獲されるとプラスチック製の箱に入れられた。さらに彼らはカリブーを2頭捕獲したが、そのカリブーは狩猟場で解体され、肉と脂身、毛皮に分けてボートに乗せられた。彼らは狩猟中には獲物を分配しなかったが、村の海岸に到着するとカリブーの肉と脂身、毛皮、ケワダガモをほぼ等分に折半した。

#### 事例2 アゴヒゲアザラシ猟

1998年1月にある男性(#42)がアゴヒゲアザラシを1頭仕留めた。その猟場には彼を含め5人のハンターがいたが、この5人は申し合わせて狩猟に行ったのではなく、狩猟場で偶然出会った人たちであった。

そのハンターはアゴヒゲアザラシを捕獲した後、その場で解体し、5人全員で肉と小腸部をほぼ平等に分配した。心臓部は仕留めたハンターが取ったが、毛皮はそれを欲した別のハンターが取った。脂身も分配したが、量が多かったので残余分はその場に残してきた。

#### 事例3 ワモンアザラシ猟

1999年10月14日に2隻の船外機付きカヌーでアザラシ猟に向かった。1隻にはハンター(#5)と私が、もう1隻には、3人のハンター(#73, #66, #11)が乗った。村の南の海岸で合流し、話し合いの上でシロイルカの狩猟場所を決めた。そしてそこに行く途中で、ハンターの1人(#5)がワモンアザラシを発見し、捕獲した。捕獲後、近くの海岸に上陸し、紅茶用のお湯を沸かすとともに、2人のハンター(#5と#73)がワモンアザラシを解体した。解体中に全員で肉の一部を食べた。ハンターの1人(#73)は小腸を海水で洗い、処理をした。

ハンターらは紅茶とパノク(無発酵パン)を楽しんでから、獲物を4人で必要に応じて分配した。彼らはほぼ同量の肉と脂身を取った。アザラシを仕留めたハンターがほかのハンターよりも少し多めに脂身を取り、一人のハンター(#73)が腸を、もう一人のハンター(#66)が皮を取った。

#### 事例4 ケワダガモ猟とワモンアザラシ猟

1999年10月21日に、滞在先の主人(#27)と彼の娘婿(#81)、私の3人は1隻の船外機付きカヌーで、ケワダガモ猟に出た。村の南の方の沿岸近くで12羽のケワダガモを捕獲した。それからアザラシをとりに行く。途中で、1人で狩猟に来ていたハンター(#62)が合流した。2隻の船外機付きカヌーでアザラシ猟に向かった。滞在先の主人がワモンアザラシを1頭

仕留めたので、近くの海岸に上陸し、お茶を沸かす一方、ワモンアザラシを解体しながら少量の肉を食べる。それから獲物の分配がされた。滞在先の主人と合流したハンターは肉、肝臓、脂身を分配したが、等分ではなく合流したハンターの方がやや多く取った。毛皮は滞在先の主人が取った。また、合流したハンターにケワダガモ 2 羽を分け与えた。

アザラシ猟を再開し、滞在先の主人がまたワモンアザラシ 1 頭を仕留めた。近くの海岸に上陸し、それを解体した。今度は彼と合流したハンターは肉、脂身、肝臓をほぼ平等に分配した。余った脂身の一部と毛皮はその場に置いてきた。この時には、滞在先の主人の娘婿は狩猟を手伝ったが、獲物の分配を受けなかった。これは彼の妻子がほとんどの昼食と夕食を父である滞在先の主人の家でとっているからであった。

#### 事例 5 シロイルカ猟

1999 年 10 月の初めにハンター(#46)は彼の拡大家族で共有している大型ボートで約 3 週間かけてシロイルカ猟に出た。彼は船長で、ほかに 4 人のハンター(#59, #89, #13 の兄の息子、プヴィルニツク村から来たハンター)が乗船した。この時の狩猟では 6 頭のシロイルカを捕獲し、狩猟場で解体作業を終えていた。10 月 21 日に大型ボートが村の海岸に到着すると、シロイルカのマツタックや肉が海岸に敷いたビニールシートの上に並べられた。それから船長の指示にしたがって 6 つの大型プラスチック製箱にほぼ等分に肉、マツタック、ヒレ、頭部が入れられていった。船長と 4 人のハンターは、それぞれ 1 箱ずつ取り、残りの 1 箱は大型ボートの所有者の世帯間で分配された。これ以外の残った部分は、村人に分配するために取っておかれた。

この分配で注目されるのは、船長であるかどうかに関係なく乗組員全員の間では等分に獲物が分配されたこと、さらに狩猟に参加していないボートの所有者世帯(#86, #48, #79 の 3 世帯)に乗組員 1 人分の獲物が割り当てられたことである。生産手段を所有している世帯や船長に獲物の多くが分配されることはなかった。また、乗組員がガソリン代を多少なりとも提供している点も考慮に入れておく必要がある。さらに残ったマツタックや肉を、海岸にもらいにやってきた 8 人の村人(#27, #45, #49 の妻, #58 の妻、#9, #5, #40, #13)に手渡した。手渡した量はもらい手の家族の員数を考慮に行われた。これら 8 人は、偶然、海岸でシロイルカを分配していることを知り、もらいにきた人々であった。

#### 事例 6 カリブー猟

2000 年 9 月 13 日に滞在先の主人(#27)と彼の同世代のイトコ(#22)は 2 台の四輪バギー車でカリブー猟に行き、2 人で 2 頭のカリブーを仕留めた。滞在先の主人は家族に必要なだと判断した半頭分の肉と脂身を取り、残りは彼のイトコが取った。

#### 事例 7 二枚貝とウニの採集

2000 年 10 月 1 日に、滞在先の主人(#27)、妻と、別の世帯に住む長女(#81 の妻)、彼の

兄嫁(#28の妻)、私の5人で、彼の船外機付きカヌーを利用してアクリヴィク村の北方の沿岸近くの島に二枚貝とウニを採集に行った。二枚貝は5人で大型バケツに3杯、重量にして約45キログラムを採集することができた。また、ウニを約40個採集することができた。

採集場では二枚貝やウニは分配されなかったが、村に帰り着くと海岸で分配された。滞在先の主人の兄嫁が二枚貝を約15キログラムとウニを10個ぐらい持っていった。残りはすべて滞在先の家に運び込まれた。

#### 事例8 ホッキョクグマの肉の分配

1998年7月18日にケーブ・スミス島で村の若者(#11)が体長180センチメートル程度の小型のホッキョクグマを仕留めた。そして居合わせた村の古老の指示にしたがって解体した。そのハンターが肉の大半をとったが、肉の一部は解体場所に居合わせた約10家族(4隻の船外機付きカヌーに同乗してきた)にほぼ平等に分配された。毛皮と頭部はそのハンターの儀礼的助産人(*sanajik*)に、残りの肉は自分の取り分として村に持ち帰った。さらにハンターはホッキョクグマの肉を、別の世帯に住む自身の母親(現在は#6の妻)や義理の父親(#46)に分与した。

ここではハンター間や採集者間で行われた分配を8事例、紹介した。現在のアクリヴィク村では狩猟や漁撈に参加したハンター間や獲物の解体場に居合わせたハンターの間で獲物の分配が行われている。分配の方法や量に関しては決まった規則は存在せず、人数でほぼ等分にするか、分配することができる総量とそこにいるハンターの数を考慮に入れながら、各ハンターの必要に応じて、分配されることが多い。さらに、ここで強調しておきたい点は、兄弟、父子、イトコ同士ら拡大家族のメンバーが狩猟に行く傾向があるが、狩猟に参加した者や獲物の解体現場に偶然に居合わせた者は、親族関係がなくとも獲物を仕留めたハンターから分け前をもらうことができることである。私のこれまでの体験によれば、ハンター間の分配は、ハンターと村人との分配や村人間の食物の分配、食事を通しての分配と比べるとその頻度や分量、経済的な重要性は低下しつつあると考える。

#### 第3節 ハンターから村人への食物分配

獲物をとったハンターが村やキャンプ地に帰ってくると、親族や友人に獲物の一部を分配することがある。特にハンターの祖父母や父母が存命で別の家に住んでいる場合にはハンターは、獲物のすべてあるいは一部をそこに届けることが多い。また、食料が欲しい村人がハンターの家を訪れて獲物の一部をもらうことがある。ここでは、事例をいくつか紹介する。

#### 事例9 ライチョウ

1998年1月8日に村の空港で働いている中年男性(#4)がライチョウ猟に出かけた。彼は

獲物のすべてを妹夫婦と同居している母の家へ持っていった。

#### 事例 10 ライチョウとホッキョクイワナ

1998 年 1 月 27 日の午後 4 時 30 分過ぎに滞在先の主人(#27)が 20 羽以上のライチョウと何匹かのホッキョクイワナを捕獲して帰宅した。彼とその妻は複数箇所に電話をかけて獲物を取りにくるよう伝えたり、食事に招待したりした(食事の事例 20 を参照)。まず、滞在先の主人は息子に村の古老の女性(#48 の母で、オバにあたる)にライチョウ 3 羽とホッキョクイワナ 1 匹を、古老の男性(#13)にライチョウ 3 羽を届けさせた。少しすると 5 人の使いの子供が獲物をもらいにきた。滞在先の主人はライチョウ 3 羽とホッキョクイワナを彼の兄(#28)の使いに渡した。ライチョウ 1 羽を寡婦(#11 の母)の使いに渡した。ライチョウ 3 羽を病気で寝ているオジ(#63)の使いに渡した。さらにライチョウ数羽を古老(滞在先の主人のオジ、#50 の父)の使いと妹夫婦(#5)にそれぞれ手渡した。

翌朝、滞在先の主人のイトコ(#39)が滞在先を訪問し、ライチョウ 2 羽をもらって帰った。また、滞在先の主人と一緒に滑石彫刻を行っているオジ(#46)がやってきてライチョウを 1 羽もらっていった(注 4)。

ライチョウは村人にとって特別な食べ物であり、特に老人が好んで食べる。滞在先の主人は、村の古老や寡婦、兄やオジ、オバに分配している。

#### 事例 11 ライチョウ

1998 年 2 月 4 日に滞在先の主人(#27)は、村の古老女性(#48 の母で、オバにあたる)にライチョウ 2 羽を持っていった。

#### 事例 12 カリブーの肉

1998 年 1 月 17 日に村のハンターがカリブーを仕留めて村に帰ってきた。彼は肉の一部を隣家に住む老人男性(#13)の所へ持って行ってあげた。

#### 事例 13 カリブーの肉

1998 年 1 月 17 日に滞在先の主人はカリブーを仕留めたが、解体した肉を体が健常でない男性(#74)、村の老人女性(#48 の母で、オバにあたる)、兄(#28)の 3 世帯に配布した。残りを自分の物置小屋と冷凍庫に保存した。翌日、滞在先の主人の妹(#41 の妻)が、カリブーの肉をもらいにきたので、彼は自分の物置小屋から肉を取り出し、渡した。その後の 1 月 23 日に滞在先の主人の長女の義理の父(#80)が肉をもらいにきたので、彼は自分の物置小屋から肉を取り出し、渡した。

#### 事例 14 カリブーの肉

2003 年 9 月 24 日に、村の中年男性(#3)が、妻の弟(#75)とともにアクリヴィク村の南方

約 45 キロメートルのところで 2 頭のカリブーを仕留めた。2 人でほぼ平等に分配した後、残りを海岸のボートのところにもらいにやってきた 5 人の村人(#55、 #61、 #59、 #82、 #49 の妻)に肉塊を切り取って手渡した。まだ、余りがあったので FM ラジオ放送でカリブーの肉が欲しい人は海岸まで取りにくるようにと告げた。すると 5 人の村人(#17、 #42、 #57、 #94、 #72 の妹)がやってきた。肉をもらった人たちはハンターの親族とは限らなかったが、偶然そこを通りかかった人、村で仕事に従事している人、ボートのある海岸の近くに住んでいる人たちであった。

#### 事例 15 魚の分配

1998 年 1 月 23 日に村人の子供(#72 の妹の娘)が、私の滞在先にライチョウとホッキョクイワナをもらいにきた。滞在先の主人は、その子供にライチョウとホッキョクイワナを手渡した。

#### 事例 16 魚の分配

1998 年 1 月 23 日の午後 5 時 45 分頃に私の滞在先の主人(#27)に電話があった。数分後に滞在先の主人の女性イトコ(#17 の妻)がやってきた。主人はイトコにホッキョクイワナ 1 匹を渡した。

#### 事例 17 魚の分配

1998 年 7 月 27 日に滞在先の主人のメイ夫婦(#49)が多数のホッキョクイワナを捕獲して村に帰ってきた。複数の村人がメイ夫婦の家にホッキョクイワナをもらいにいった。滞在先の主人も娘を使いによらせ、2 匹をもらってきた。

#### 事例 18 魚の分配

2003 年 9 月 28 日に私の滞在先の主人(#27)は、ジュニア・レンジャーズの訓練キャンプに同行していたが、自らの漁網を利用してキャンプ地の近くの湖で魚を多数捕獲した。キャンプ地にある 11 のテントすべてにホッキョクイワナを 2 匹ずつ、ホワイトフィッシュを 4 匹ずつ等しく分配した。分配後に余った 3、4 匹は漁網の持ち主であった滞在先の主人が取った。

#### 事例 19 アゴヒゲアザラシの肉

1999 年 10 月 13 日の夕方、滞在先に世帯主の兄(#29 の夫)の息子が、アゴヒゲアザラシの肉をもらいにきた。世帯主は、相手の家族構成を考慮して、冷凍したアゴヒゲアザラシの肉をプラスチックバッグに 1 袋分渡した。

#### 事例 20 シロイルカの分配



1999年10月16日に、ケープ・スミス島に狩猟に行ったアクリヴィク村のハンターが5頭のシロイルカを仕留めた。この5頭は参加したアクリヴィク村のハンター6人(#3、#49、#73、#62、#57、#36)の間で分配された後、村に持ち帰られた。ハンターのリーダー(#3)は、海岸にビニール袋を持ってやってきた村人ひとりひとりに約30センチメートル×約60センチメートル四方のマッタックを分け与えた。滞在先の主婦も1枚もらってきた。

#### 事例 21 シロイルカの分配

1999年10月17日に前日、シロイルカを仕留めたハンター(#3)の自宅を訪ねた。訪問中に、無職の男性(#79の弟でイトコにあたる)がマッタックをもらいにきた。ハンターは、ビニール袋に1枚を入れ、その男性に渡した。

#### 事例 22 シロイルカの分配

1999年10月23日に、2隻の船外機付きボートがシロイルカを4頭、村に持ち帰った。ハンターがライフルを連射しながら入り江に入り、村の海岸に着くと、その音を聞いた村人が三々五々にハンターのボートのところに集まってきた。ハンター(#5)の妻の兄である滞在先の主人(#27)は約30センチメートル×約40センチメートル四方のマッタックを5枚もらってきた。ほかの村人は、1ないし2枚ずつハンターから手渡しでもらっていた。単純に数えると、40人以上すなわち40世帯以上が分け前をもらったことになる。

#### 事例 23 シロイルカの分配

1999年10月16日に、ケープ・スミス島の近くに出猟していたブヴィルニツク村の若者のハンターが1頭のシロイルカを仕留めた。ハンターが生まれて初めてシロイルカを仕留めたため、頭部を彼の儀礼的助産人(*sanajik*)に贈るために取っていった。

#### 事例 24 シロイルカの分配(事例5の後半部分)

1999年10月21日に私有の大型ボートがシロイルカを獲て、アクリヴィク村に帰ってきた。船長や乗組員のハンター間での獲物の分配が終わると、残ったマッタックや肉をもらいに村人約10人がビニール袋を手に三々五々やってきた。船長がそれぞれ村人に手渡しした。それでも残ったシロイルカの頭部や肉にはカモメに食べられないようにビニールカバーがかけられた。村人は残った獲物を自由に家に持ち帰ることができる。この場合、村のすべての世帯に分配されたのではなく、分配場所に近い所にすむイヌイトや偶然そこを通りかかったイヌイトが獲物の分配を受けていた。

#### 事例 25 シロイルカの分配

1999年10月28日に滞在先の主人の所に、イトコ(#77)がハンター・サポート・プログラムの分配からマッタックを受け取っていないと行って、もらいにきた。主人はマッタック

を2枚渡した。

#### 事例 26 魚の分配

1999年10月23日に滞在先の主人(#27)と息子は内陸の湖に仕掛けた漁網から16匹のホッキョクイワナやホワイトフィッシュをとってきた。村に帰ると、息子を使いとして数匹ずつの魚を2人のメイ(#23と#64の妻)の家に届けさせた。また、主人のイトコの娘(メイに相当、#15の妻)が魚をもらいにきたので、主人はホワイトフィッシュを2、3匹与えた。この女性の世帯では夫婦が共稼ぎをしており、時々、カンントリー・フードがなくなることがある。

#### 事例 27 魚の分配

1999年10月30日に滞在先の主人と息子がホワイトフィッシュ5匹と陸封ホッキョクイワナ3匹をとってきた。子供に隣家に住む古老(#13)の所に陸封ホッキョクイワナ1匹の胴体の部分とホワイトフィッシュ1匹を持っていかせた。

#### 事例 28 魚の分配

1999年11月3日に滞在先の主人(#27)は、ホッキョクイワナ4匹とホワイトフィッシュ15匹を捕獲した。主人はホワイトフィッシュ3、4匹を入れた袋をふたつ作り、村の古老2人(同定できず)にプレゼントした。また、主人のイトコ(#22)が来てホッキョクイワナ1匹とホワイトフィッシュ1匹を持って帰った。さらに古老の娘(#50でイトコにあたる)がきたので何匹か与えた。

#### 事例 29 魚の分配

1999年11月6日に滞在先の息子は、獲物の魚を何匹か村の古老(#48の母で、オバにあたる)の所に持っていった。そこを訪問中の女性(#82の妻)がホッキョクイワナ1匹とホワイトフィッシュ1匹をもらっていった。

#### 事例 30 魚の分配

1999年11月7日に滞在先の主人(#27)は、ホワイトフィッシュ、陸封ホッキョクイワナ、ホッキョクイワナを大型のビニール袋ふたつに入れて帰ってきた。主人はホッキョクイワナ2匹を家用に取っておき、息子を使ってそれ以外の魚を2、3匹ずつ村の古老世帯に配布させた。

#### 事例 31 魚の分配

2000年9月27日に、滞在先の主人(#27)のキャンプ地を村のハンター(#36で、イトコにあたる)が船外機付きボートで訪れ、ホッキョクイワナを3匹くれた。キャンプ地にいた滞

在先の主人は、朝、無線でアクリヴィク村にいたハンターと交信し、そのハンターが多数のホッキョクイワナをとったことを知った。さらに、そのハンターが午後にキャンプ地の近くに忘れ物を取りにくるとのことであったために、ホッキョクイワナを持ってくるように頼んだとのことであった。

#### 事例 32 魚の分配

1999 年 10 月 31 日に滞在先の主人(#27)は彼自身の漁網と兄(#28)の漁網をチェックしに行った。主人の網には 3 匹のホッキョクイワナが、兄の網には多数のホワイトフィッシュと陸封ホッキョクイワナがかかっていた。滞在先の主人は獲物を自宅に持ち帰り、半分を自分のものにし、残りの半分を兄の所まで息子に届けさせた。

#### 事例 33 アゴヒゲアザラシの肉

1999 年 10 月 12 日に、アゴヒゲアザラシを仕留めたハンター(#5)の自宅を訪ねた。居間にはアゴヒゲアザラシの肉と脂肪が置かれていた。また、ハンターの妻のメイ(#64 の妻で姉の娘にあたる)、妻の兄(#29 の夫)、友人の女性(妻の広義のオバに相当)(#42 の妻)が訪問中であった。後二者が肉をもらって帰った。

#### 事例 34 ワモンアザラシの分配

1999 年 10 月 16 日、滞在先の主人(#27)は義理の息子(#81)と 2 人でアザラシ猟に行き、1 頭を仕留めた。2 人で分配した後、獲物の一部を自宅に持って帰ってきた。そこへ滞在先の主人のメイ(姉の娘、#64 の妻)と主人夫婦の友人(広義のオバに相当、#42 の妻)、古老の娘(主人の広義のイトコ、#60)が肉をもらいにきた。また、義理の息子の姉が肉と小腸、脂肪をもらにくる。主人はこれらの人々に肉と脂身を与えた。

これらの事例を見てわかることは、以下の点である。私の滞在先の主人(#27)は 2004 年には 50 歳代の半ばであり、祖父母や両親はすでに他界していた。したがって、大半の獲物は自宅に持ち帰る。しかし、兄弟と妹、オジ、オバ、婚出した長女、メイ、オイらが同じ村に住んでいるので、獲物を彼らに分配することがある。大量の獲物を捕獲したときには、近所に住む老人や寡婦にも分配している。

さらに私の滞在先の事例では紹介できなかったが、ハンターの祖父母や親が存命である場合には、ハンターは獲物を祖父母や親の家にもって行くのが一般的である。そして第 5 節で紹介するようにそのハンターやハンターの家族は、祖父母や親の家で昼食や夕食をとる傾向にある。

#### 第 4 節 村人間での食物分配

ハンターが村にもたらした肉や魚は、さらに村人間で分配される。村人間での食物分配

の事例を見てみたい。

#### 事例 35 魚の分配

1998 年 1 月 14 日の午後 7 時前に私の滞在先の主人(#27)に電話が 2 件あった。1 件は彼の兄(#28)から、もう 1 件はイトコ(逝去)の未亡人(#35)からであった。電話の内容は、魚が欲しいというものであった。使いの者が来ると、滞在先の主婦がそれぞれに魚を与えた。

#### 事例 36 魚の分配

2000 年 9 月 22 日の午後 4 時過ぎに滞在先の主人(#27)に電話があった。彼は冷凍ホッキョクイワナを 2、3 匹自宅の冷凍機から出して、人が来るのを待った。老人のいる家の娘(#64 の妻)がやってきてそれをもらっていった。このときお礼にブルーベリーの入ったポリ袋を 1 つおいていった。

#### 事例 37 魚の分配

1999 年 11 月 4 日に寡婦(現在の#6 の妻)が魚をもらいにきたので、滞在先の主人はその日の朝に捕獲したホワイトフィッシュ 2 匹を与えた。

#### 事例 38 ウニとヒトデの分配

2003 年 10 月 2 日に私の滞在先の主婦が FM ラジオでウニとヒトデを多数とり、余剰があることを告げると、主人(#27)の女性のイトコ(#50)と遠い親戚の女性(#67)がもらいにきたので、分与した。

#### 事例 39 セイウチの脂身

滞在先の主人の兄の未亡人(#29)が、彼女の孫に命じてセイウチの脂身をもらいにきた。滞在先の主人は、冷凍機からセイウチの脂身を取り出し、手渡した。

#### 事例 40 料理の分配

2000 年 9 月 15 日にある中年女性(#60)を訪問中に、その女性の友人(学校の同級生で子供の時から幼馴染、#3 の妻)が料理を持ってやってきた。前者の女性は独身でかつ学校の秘書をしているため、カントリー・フードは親族や友人からもらうことが多い。後者の女性は学校の先生であるが、夫がハンターであるため常にカントリー・フードが自宅にある。作った料理や肉、魚を時々、友人の所へ届けている。もらった友人は時々、料理のお返しをしている。

表5. 1 1998年1月14日から2月3日までの食事の事例

| CASE# | 日付        | 昼/夜 | 内容                                                        | 世帯員                       |    |     |     | 世帯外の家族や親族                        |   |    |    | その他                                                                                        | 人数 |
|-------|-----------|-----|-----------------------------------------------------------|---------------------------|----|-----|-----|----------------------------------|---|----|----|--------------------------------------------------------------------------------------------|----|
|       |           |     |                                                           | AH                        | AW | Lin | Isa | B                                | R | Li | La |                                                                                            |    |
| 1     | 1998.1.14 | 夕   | ライチョウの生肉、ライチョウの肉を煮たもの、スパゲティ                               | ○                         | ○  | ○   |     | ○                                | ○ | ○  | ○  | AHのイトコ( #44)                                                                               | 8  |
| 2     | 1998.1.15 | 昼   | ホッキョクグマの肉を煮たものと煮た脂身                                       | ○                         | ○  | ○   | ○   |                                  |   |    |    |                                                                                            | 4  |
| 3     | 1998.1.15 | 夕   | ホッキョクイワナ(冷凍)                                              | ○                         |    |     | ○   |                                  |   |    |    | AHのイトコ( #44)<br>AHのメイ( #49の妻)                                                              | 4  |
| 4     | 1998.1.16 | 昼   | チキンウィング、フィッシュアンドチップス、ホットドッグ                               | ○                         | ○  | ○   | ○   |                                  |   |    |    |                                                                                            | 4  |
| 5     | 1998.1.16 | 夕   | マカロニとライスのスープ、ホッキョクイワナを煮たもの、セイウチの冷凍肉と冷凍脂肪                  | ○                         | ○  | ○   |     | ○                                | ○ | ○  | ○  | AHの女性イトコ、AWの女性イトコ、POVから来たAWの弟<br>夫妻とその3人の子ども                                               | 14 |
| 6     | 1998.1.17 | 昼   | 冷凍のホッキョクイワナとホワイトフィッシュ、マツタック(ヒレ部)、コーンポークを混ぜたマカロニの<br>チーズ煮  |                           | ○  | ○   | ○   | ○                                | ○ | ○  | ○  | AHの妹( #41の妻)、POVから来たAWの弟夫妻とその3人<br>の子ども                                                    | 14 |
| 7     | 1998.1.17 | 夕   | ホッキョクイワナ2匹とライチョウ7羽                                        | ○                         | ○  | ○   | ○   | ○                                | ○ | ○  | ○  | POVから来たAHの女性イトコとAWの女性イトコを電話で招<br>待                                                         | 11 |
| 8     | 1998.1.18 | 昼   | カリブーの生肉と煮た肉、冷凍のホッキョクイワナ                                   | ○                         | ○  | ○   | ○   | ○                                | ○ | ○  | ○  | AHの妹( #41の妻)、POVから来たAWの弟夫妻とその3人<br>の子ども                                                    | 14 |
| 9     | 1998.1.18 | 夕   | ライチョウを煮たもの、冷凍のホッキョクイワナ、<br>マッシュドポテト                       | ○                         | ○  | ○   | ○   |                                  |   |    |    | AHのイトコで友人( #20の妻)、AH<br>の知人(他村の人)                                                          | 6  |
| 10    | 1998.1.19 | 昼   | カリブーの冷凍肉と冷凍心臓、ジャガイモ、ニンジン、<br>ライスを煮たもの                     | ○                         | ○  | ○   | ○   | ○                                | ○ | ○  | ○  | AHの2人の妹( #23および #64の妻)、POVから来たAW<br>の母方オジ                                                  | 8  |
| 11    | 1998.1.20 | 昼   | カリブーの肉とポテトを煮たもの                                           | ○                         | ○  | ○   |     | ○                                | ○ | ○  | ○  | AHのイトコ( #44)とその息子                                                                          | 9  |
| 12    | 1998.1.22 | 夕   | ホッキョクイワナとライチョウの生肉                                         | ○                         | ○  |     |     | ○                                | ○ | ○  | ○  | AHのPOVから来た女性イトコ                                                                            | 7  |
| 13    | 1998.1.22 | 昼   | カリブーの冷凍肉、ホッキョクイワナ、スパゲティ                                   |                           |    | ○   | ○   | ○                                |   | ○  | ○  |                                                                                            | 5  |
| 14    | 1998.1.23 | 夕   | 記録漏れ                                                      | ○                         | ○  | ○   |     |                                  |   |    |    | POVから来たAWの妹とその夫                                                                            | 5  |
| 15    | 1998.1.24 | 昼   | 冷凍のホッキョクイワナ                                               |                           | ○  |     | ○   | ○                                | ○ | ○  |    | POVから来たAWの妹とその夫                                                                            | 7  |
| 16    | 1998.1.25 | 昼   | カリブーの冷凍肉、ホッキョクイワナ、スパゲティ<br>カリブー肉とジャガイモ、タマネギを炒めたもの、ライ<br>ス | ○                         | ○  |     | ○   | ○                                | ○ |    | ○  |                                                                                            | 6  |
| 17    | 1998.1.26 | 昼   | カリブー肉をサイコロ状に切り、マッシュルームと<br>ジャガイモを炒めたもの                    | ○                         | ○  | ○   | ○   | ○                                | ○ |    | ○  |                                                                                            | 6  |
| 18    | 1998.1.26 | 夕   | カリブーの冷凍肉                                                  |                           |    |     |     | ○                                | ○ | ○  | ○  |                                                                                            | 4  |
| 19    | 1998.1.27 | 昼   | ピザ、ホッキョクイワナ、レイトラウト、カリブーの<br>冷凍肉                           |                           | ○  | ○   | ○   | ○                                |   | ○  | ○  | Inukjuakから来たAHの父方イトコ( #25の姉)、AHのイトコ<br>( #25)とその妻、息子                                       | 10 |
| 20    | 1998.1.27 | 夕   | ホッキョクイワナ3匹、ライチョウの生肉、ライチョウ<br>を煮たもの                        | ○                         | ○  | ○   | ○   |                                  |   |    |    | AWのPOVから来た弟、AHの妹( #28の姉)、AHの妹( #<br>49の妻)とその夫、その娘                                          | 9  |
| 21    | 1998.1.28 | 昼   | ライチョウ肉を煮たもの、ピザ                                            | ○                         | ○  | ○   | ○   | ○                                | ○ | ○  | ○  | Bの夫( #60)                                                                                  | 8  |
| 22    | 1998.1.30 | 夕   | セイウチの冷凍肉                                                  | ○                         | ○  |     |     | ○                                | ○ | ○  | ○  |                                                                                            | 6  |
| 23    | 1998.1.31 | 昼   | セイウチの冷凍肉                                                  | AH,AW,Isaハンティングに行き不<br>在  |    |     |     | ○                                | ○ | ○  | ○  | Bの夫( #60)、Inukjuakから来たAHの父方イトコ( #25の<br>姉)                                                 | 5  |
| 24    | 1998.1.31 | 昼   | セイウチの冷凍肉                                                  | 別世帯の事例(父( #76)、<br>母、その娘) |    |     |     | 四女とその三人の子ども(男2、<br>女1)、三女とその夫、次女 |   |    |    |                                                                                            | 10 |
| 25    | 1998.1.31 | 夕   | カリブーの脂身、レイトラウト、ホッキョクイワナ、<br>ライチョウを生で                      | ○                         | ○  | ○   | ○   | ○                                | ○ | ○  | ○  | AWの妻の弟夫妻とその娘(POVから村を訪問中)<br>AHの父方イトコの女性( #25の姉)(Inukjuakから訪問中)                             | 13 |
| 26    | 1998.2.1  | 昼   | レイトラウトの生とレイトラウトの頭部を煮たも<br>の                               | ○                         | ○  | ○   |     | ○                                | ○ | ○  | ○  | Bの夫、AHのイトコの妻とその娘、AHのイトコ夫妻とAHの<br>父方イトコの女性( #25の姉)(Inukjuakから訪問中)( #25<br>の姉)、AWの弟夫妻(POVから) | 15 |
| 27    | 1998.2.1  | 夕   | セイウチの冷凍肉とレイトラウト                                           | ○                         | ○  | ○   | ○   | ○                                | ○ | ○  | ○  |                                                                                            | 8  |
| 28    | 1998.2.2  | 昼   | カリブーの肉をタマネギやジャガイモといっしょに<br>煮たもの                           | ○                         | ○  | ○   | ○   | ○                                |   | ○  | ○  | Bの夫( #60)、AHの妹( #5の妻)、AHの妹( #64の<br>妻)、AHのイトコ( #25の姉)とその娘夫婦( #15夫婦)                        | 15 |
| 29    | 1998.2.3  | 昼   | スノーギースを煮たもの、カリブーの冷凍肉                                      |                           | ○  | ○   | ○   | ○                                | ○ | ○  | ○  | AHの父方イトコ( #25の姉)、その娘( #15の妻)とその娘                                                           | 10 |
| 30    | 1998.2.3  | 夕   | ライチョウの生とホッキョクイワナの生                                        | ○                         | ○  | ○   | ○   | ○                                | ○ | ○  | ○  | AHの父方イトコ、POVから来たAWのオバ                                                                      | 11 |

#### 事例 41 砂糖やインスタント・コーヒーの分配

1999 年 11 月 2 日に友人(#82)の家を訪ねたところ、砂糖やインスタント・コーヒーを切らしていた。私にコーヒーをふるまうために、友人は近所に住む妹(#30)の所からそれらをもらってきた。

以上の事例から村人間での分配はおもに拡大家族の成員の間で行われるが、近所の人や友人に分配されることがある。また、友人間で食べ物や料理を交換しているような事例も見られた。さらに、もらった食べ物に対してお礼の食べ物を渡している事例があった。

#### 第 5 節 食事を通しての食物分配

現在のアクリヴィク村では村人は食事を通して食物分配を行っているが、それは日常的でもっとも頻度が高い分配の方法である。イヌイットの食事のとり方は、空腹のときや獲物を得たときに食べるというのが一般的であったが、1960 年代前後に定住生活を開始するようになると学校や仕事場の時間に合わせて、朝昼晩と食事をするイヌイットの世帯が増加した。現在では、ほぼすべての世帯が朝食を午前 8 時 30 分以前に、正午から午後 1 時の間に昼食を、夕食を午後 5 時 30 分以降にとっている。アクリヴィク村では朝食をとらない子供や若者がいるが、一日三食が一般的になっている(注 5)。

独立した世帯を構えた男女や村内に嫁いだ女性は、彼らの両親や祖父母が健在であれば、自宅ではなく両親や祖父母の所で昼食や夕食をとる傾向がある。おもに拡大家族関係にある者が食事に参加することが多い。どうしても地元でとれた鳥獣や魚を食べたい場合や自宅に食料がない場合には、別世帯に住むそれらを持っている家族や親族、友人の所を訪れ、食事をすることがある。また、多くの獲物をとったハンターは、食事に別世帯に住む家族、親戚、友人らを招待することがある。

#### 第 1 項 1998 年 1 月 14 日から 2 月 3 日までの食事の事例

朝食は世帯員が各自別々に小麦粉とラードで作られるパノク(無発酵パン)もしくは食パン、セリオと紅茶で済ませる傾向がある。また、私の滞在先では、主人(#27)が時々ゆで卵を作ることがあった。一方、昼食や夕食は世帯員やそれ以外の人と一緒に取る傾向がある。

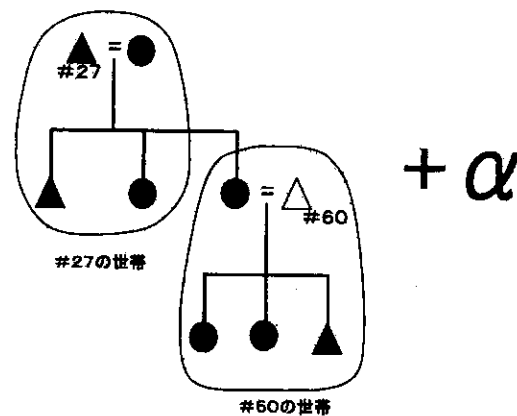
1998 年 1 月 24 日から 2 月 3 日にかけて私が参与観察をした昼食と夕食は 30 事例であった(食事の事例 1 から事例 30 までと表 5.1 を参照されたい)。このうち 29 事例は滞在先の事例であり、もう 1 事例は知人宅(#76)を訪問時に観察した事例である。

この時期の地元でとれる食材は、ライチョウ、ホッキョクグマの肉と脂身、ホッキョクイワナ、ホワイトフィッシュ、レイクトラウト、カリブーの肉、秋から冷凍保存してあったマツタック、秋にとり石製貯蔵穴に保存したセイウチの肉、夏にとり冷凍保存してあったハクガンであった。

一方、カナダの南部から空輸されてきた食材は、スパゲティー、チキンウイング、フィ

ッシュアンドチップス、ホットドッグ、マカロニのチーズ煮、コーンポーク、マッシュポテト、ジャガイモ、ニンジン、タマネギ、ライスなどであった。なお、パノクと紅茶はほぼすべての食事の後に食される。

ここで取り上げた 30 事例に関する限り、世帯員のみでとった昼食と夕食は 4 事例(13.3 パーセント)にすぎなかった。残りの 26 事例は、世帯員および世帯外の家族でとられた事例が 6 事例(20 パーセント)、世帯員および世帯外の家族にそれ以外の親族や知人が加わった昼食と夕食は 20 事例(66.7 パーセント)あった(表 5.2)。



図表 5. 1 #27の世帯で食事を取る人々(1998. 1. 24-2. 3)  
(黒塗りの人々が基本的単位となっている)

| 参加者からみた食事                    | 事例数(割合)       | 参加者の社会的特徴                                                                                                                                              |
|------------------------------|---------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 世帯員のための昼食・夕食                 | 4 事例 (13.3%)  |                                                                                                                                                        |
| 世帯員 + 別の世帯に住む家族のための昼食・夕食     | 6 事例 (20%)    |                                                                                                                                                        |
| 世帯員 + 別の世帯に住む家族 + アルファの昼食・夕食 | 20 事例 (66.7%) | (家族・親族・姻族)<br>イトコが参加 14 事例<br>オイ・メイが参加 7 事例<br>兄弟姉妹が参加 8 事例<br>オジ・オバが参加 2 事例<br>義理の息子が参加 4 事例<br>(非親族)<br>ほかの村から来た知人 2 事例<br>娘のボーイフレンド 2 事例<br>隣人 1 事例 |

表 5.2 1998 年 1 月 14 日から 2 月 3 日までの食事への参加者

表5.3 1998年7月4日から7月28日にかけての食事

| CASE# | 日付        | 昼/夜 | 内容                                        | 世帯員                                     |    |     |     | 世帯外の家族や親族 |   |    |    | その他                                               | 人数                      |    |
|-------|-----------|-----|-------------------------------------------|-----------------------------------------|----|-----|-----|-----------|---|----|----|---------------------------------------------------|-------------------------|----|
|       |           |     |                                           | AH                                      | AW | Lin | Isa | B         | R | Li | La |                                                   |                         |    |
| 31    | 1998.7.4  | 昼   | ホッキョクイワナ2匹                                | ○                                       | ○  |     |     |           |   |    |    | AH(兄の娘)メイとその夫(#49)                                | POVから来た仕事仲間             | 5  |
| 32    | 1998.7.4  | 夕   | シロイルカのマトタックと干し肉                           | ○                                       | ○  | ○   | ○   | ○         | ○ | ○  | ○  |                                                   |                         | 8  |
| 33    | 1998.7.5  | 昼   | ホッキョクイワナ2匹                                | ○                                       | ○  | ○   | ○   | ○         | ○ | ○  | ○  |                                                   |                         | 8  |
| 34    | 1998.7.5  | 夕   | 星の残りのホッキョクイワナとシロイルカの肉                     | ○                                       | ○  | ○   | ○   | ○         | ○ | ○  | ○  |                                                   | POVから来た仕事仲間の娘           | 9  |
| 35    | 1998.7.6  | 昼   | ホッキョクイワナ1匹、野鳥の卵、ピザ                        | ○                                       | ○  | ○   | ○   | ○         | ○ | ○  | ○  |                                                   | POVから来た仕事仲間             | 9  |
| 36    | 1998.7.7  | 昼   | ホッキョクイワナ3匹                                | ○                                       | ○  | ○   |     |           |   |    |    |                                                   | POVから来た仕事仲間とその妻、娘、息子の4人 | 7  |
| 37    | 1998.7.7  | 夕   | ハンバーガー                                    | ○                                       | ○  | ○   | ○   |           |   |    |    |                                                   |                         | 4  |
| 38    | 1998.7.8  | 昼   | ホッキョクイワナ2匹、マトタック、フライドチキン、缶スープ、フライドライス     | ○                                       | ○  | ○   | ○   | ○         | ○ | ○  | ○  | AHのイトコ(#35)                                       | POVから来た仕事仲間             | 10 |
| 39    | 1998.7.8  | 夕   | 仏の世帯でとった                                  |                                         |    |     |     |           |   |    |    |                                                   |                         | 0  |
| 40    | 1998.7.9  | 昼   | ホッキョクイワナ1匹、昨日の残りのホッキョクイワナ、ジャガイモとマカロニを煮たもの | ○                                       | ○  | ○   | ○   | ○         | ○ | ○  | ○  |                                                   | POVから来た仕事仲間とその妻、娘、息子の4人 | 12 |
| 41    | 1998.7.9  | 夕   | インスタントラーメン、ホッキョクイワナ                       | ○                                       | ○  |     | ○   |           |   |    |    |                                                   |                         | 3  |
| 42    | 1998.7.10 | 昼   | ホッキョクイワナ1匹                                | ○                                       | ○  | ○   | ○   | ○         | ○ | ○  | ○  | AHのオイ(姉の息子)(#24)                                  |                         | 9  |
| 43    | 1998.7.11 | 昼   | ホッキョクイワナ                                  | ○                                       | ○  | ○   | ○   | ○         | ○ | ○  | ○  | AHのメイ(#27の姉の娘)<br>AHのメイ(兄の娘)、その夫(#49)、その兄(#48)    |                         | 12 |
| 44    | 1998.7.12 | 昼   | カナダガンを煮たもの、マッシュポテト                        | ○                                       | ○  | ○   | ○   | ○         | ○ | ○  | ○  | Bの夫(#81)                                          |                         | 9  |
| 45    | 1998.7.12 | 夕   | 記録なし、別々にとる                                | ○                                       | ○  |     |     |           |   |    |    |                                                   |                         | 2  |
| 46    | 1998.7.13 | 昼   | チキン・マックナゲット、フレンチフライ、マトタック                 | ○                                       | ○  | 不在  | ○   | ○         | ○ | ○  | ○  | AHのオイ(モントリオール在住の姉の息子)、AHのイトコ(#50)、AHのイトコ(#48)とその妻 |                         | 11 |
| 47    | 1998.7.13 | 夕   | ホッキョクイワナとマトタック                            | ○                                       | ○  | 不在  | ○   |           |   |    |    |                                                   |                         | 3  |
| 48    | 1998.7.14 | 昼   | ホッキョクイワナ2匹                                | #6の母の世帯の昼食(本人+息子+孫に相当(寄宿中)+オイ+メイ、娘とその夫) |    |     |     |           |   |    |    |                                                   | 7                       |    |
| 49    | 1998.7.14 | 夕   | インスタントラーメン                                | ○                                       | ○  | 不在  | ○   |           |   |    |    |                                                   |                         | 3  |
| 50    | 1998.7.15 | 昼   | ホッキョクイワナを煮たもの、マッシュポテト                     | ○                                       | ○  | 不在  | ○   | ○         |   |    |    | AHのオイ(姉の息子)(#24)                                  |                         | 5  |
| 51    | 1998.7.16 | 夜   | ホッキョクイワナ                                  | ○                                       | ○  | 不在  |     |           |   |    |    |                                                   |                         | 2  |
| 52    | 1998.7.16 | 昼   | ホッキョクイワナ、およびチキンと豚肉、ライス、ジャガイモを煮たスープ        | ○                                       | ○  | 不在  | ○   | ○         | ○ | ○  | ○  | Bの夫(#81)、AHのメイ(姉の娘)(#27の姉の娘)                      |                         | 9  |
| 53    | 1998.7.16 | 夜   | 個々が別々に。記録なし                               | ○                                       | ○  | 不在  | ○   |           |   |    |    |                                                   |                         | 3  |
| 54    | 1998.7.17 | 昼   | ホッキョクイワナを煮たもの、スパゲッティ                      | ○                                       | ○  | 不在  | ○   | ○         | ○ | ○  | ○  | AHのイトコ(#6)                                        |                         | 8  |
| 55    | 1998.7.17 | 夕   | 個々が別々に。記録なし                               | ○                                       | 不在 | 不在  | ○   |           |   |    |    |                                                   |                         | 2  |
| 56    | 1998.7.19 | 昼   | カナダガンを煮たもの                                |                                         | 不在 | 不在  | ○   | ○         | ○ | ○  | ○  | AHのオイ(姉の息子)(#24)                                  |                         | 6  |
| 57    | 1998.7.19 | 夜   | 世帯主らは外でとった                                | 外                                       | 不在 | 不在  |     |           |   |    |    |                                                   |                         | 0  |
| 58    | 1998.7.20 | 昼   | ホッキョクイワナ2匹と昨日の残りのカナダガンを煮たもの               | ○                                       | ○  | 不在  | ○   | ○         | ○ | ○  | ○  | AHのオイ(姉の息子)(#24)                                  |                         | 8  |
| 59    | 1998.7.20 | 夕   | サンドイッチとサラダ                                | ○                                       | ○  | 不在  | ○   |           |   |    |    |                                                   |                         | 3  |
| 60    | 1998.7.21 | 昼   | カナダガン一羽を煮たものとマッシュポテト                      | ○                                       | ○  | 不在  | ○   | ○         | ○ | ○  | ○  |                                                   |                         | 7  |
| 61    | 1998.7.21 | 夕   | ホッキョクイワナ                                  | ○                                       | ○  | 不在  | ○   |           |   |    |    | AHのオジ(#46)、AHのイトコの息子                              |                         | 5  |
| 62    | 1998.7.22 | 昼   | カナダガンとライスを煮たもの                            | ○                                       | ○  | 不在  | ○   | ○         | ○ | ○  | ○  | Bの夫(#81)                                          |                         | 8  |



|    |           |   |                        |   |   |    |   |   |   |   |   |                                                               |             |    |
|----|-----------|---|------------------------|---|---|----|---|---|---|---|---|---------------------------------------------------------------|-------------|----|
| 63 | 1998.7.22 | 夕 | ホッキョクイワナ               | ○ | ○ | 不在 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |                                                               |             | 7  |
| 64 | 1998.7.23 | 昼 | マツダックと昨日のホッキョクイワナを煮たもの | ○ | ○ | 不在 | ○ |   |   |   |   |                                                               |             | 3  |
| 65 | 1998.7.23 | 夕 | ホッキョクイワナ2匹             | ○ | ○ | ○  | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |                                                               |             | 8  |
| 66 | 1998.7.24 | 昼 | ホッキョクイワナ               | ○ | ○ | ○  | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | AHのメイ(#23)                                                    | 近所の女性(#12)  | 10 |
| 67 | 1998.7.24 | 夕 | ホッキョクイワナ               | ○ | ○ |    | ○ |   |   |   |   |                                                               |             | 3  |
| 68 | 1998.7.25 | 昼 | ホッキョクイワナ、カナダガン         | ○ | ○ |    | ○ |   |   |   |   | AHのイトコ(#83)の家族(夫婦、息子、娘)、村を訪問中のAHのイトコ(#83)の妻の姉、AHのイトコの妻(#36の妻) |             | 9  |
| 69 | 1998.7.26 | 昼 | カナダガン、アザラシの生肉と脂身       | ○ | ○ |    | ○ |   |   |   |   | AHのイトコ(#39)                                                   | 知人女性(#42の妻) | 5  |
| 70 | 1998.7.27 | 昼 | フライドチキン、ホッキョクイワナ       | ○ | ○ | ○  | ○ | ○ |   | ○ |   | AHのオイ(姉の息子)(#24)                                              | 近所の女性(#12)  | 8  |
| 71 | 1998.7.27 | 夕 | ホッキョクイワナ               | ○ | ○ | ○  | ○ |   |   |   |   | AHの兄嫁(#28の妻)                                                  | 次女の友人(女)    | 6  |
| 72 | 1998.7.28 | 昼 | ホッキョクイワナ1匹、マツダック、スープ   | ○ | ○ | ○  | ○ | ○ |   | ○ | ○ |                                                               |             | 7  |

この時期の滞在先の世帯構成員は、私を除くと滞在先の主人、その妻、次女と長男であった。世帯員はほぼすべての食事に参加していたが、別の世帯に住む長女とその子供たちも世帯員とほぼ同じくらいの頻度(30 事例中 26 事例)で食事に参加していた。この世帯での食事の基本構成員は、世帯員と別の世帯に住む長女とその子供たちからなると考えられる。なお、#27 の長女の夫(#60)は、彼自身の両親(#30)や姉(#60)の家で昼食や夕食をとる傾向にある。長女の夫に直接その理由をたずねたところ、彼の家族のところで食べているのは子供の時からそのようなしてきたからだという回答であった。これを図表にすると、図表 5.1 のようになる。

これらからわかるように、世帯は食事を共にする単位であるとは限らず、世帯を超えた家族が食事を共にする傾向がある。滞在先の場合には、滞在先の主人夫婦、同居している娘と息子、および別の世帯を持つ主人夫婦の長女とその子供たちが基本単位となり、それに長女の夫、滞在先の主人夫婦のイトコ、兄弟姉妹、オイ、メイ、オジ、オバらの親族の者、知人や隣人、娘のボーイフレンドが加わる形になっている。図表 5.1 を見てわかるように、この時期にはプヴィルニツク村やイヌクジュアク村からアクリヴィク村を訪問中の滞在先の夫婦の家族や親族が食事を共にしている。1 事例のみであったが紹介した知人の家では、主人夫婦と同居している子供、世帯を別にする主人夫婦の子供や孫たちが食事の単位を形成しているといえる。

## 第 2 項 1998 年 7 月 4 日から 7 月 28 日にかけての食事

1998 年 7 月 4 日から 28 日かけて私が参与観察をした昼食と夕食は 42 事例であった(食事の事例 31 から事例 72 までと表 5.3 を参照されたい)。このうち 41 事例は私の滞在先(#27)の事例であり、もう 1 事例は知人宅(#6 の母の世帯)を訪問時に観察をした事例である。

この時期に地元でとれる食材は、ホッキョクイワナ、シロイルカのマツタックと肉、野鳥の卵、カナダガン、アザラシの肉と脂身である。特に 6 月末から 8 月初旬にかけては海岸部で大量のホッキョクイワナを捕獲することができる。また、時々ではあるが、偶然見つけたホッキョクグマを捕獲することがある。一方、カナダの南部から空輸されてきた食材の中で滞在先で消費されたものは、ピザ、ハンバーガー、フライドチキン、缶スープ、即席スープ、フライドライス、ジャガイモ、マカロニ、マッシュポテト、チキンナゲット、フレンチフライ、インスタントラーメン、豚肉、鶏肉、スパゲティ、サンドイッチ、サラダ、ライス、セリオ、(自家製の)パノクなどであった。なお、パノク(無発酵パン)と紅茶はほぼすべての食事の後で食される。

前節で紹介したのと同様に、朝食は世帯員が各自別々にパノクもしくは食パン、セリオのひとつと紅茶で済ませる傾向がある。また、私の滞在先では、滞在先の主人が時々ゆで卵を作ることがあった。一方、昼食や夕食は世帯員やそれ以外の人と一緒にとる傾向がある。

この時期の 42 事例に関する限り、世帯員のみでとった昼食と夕食は 10 事例(23.8 パーセ

ント)あった。そして世帯員および世帯外の家族のみで昼食と夕食がとられた事例が 10 事例 (23.8 パーセント)あった。世帯員および世帯外の家族にそれ以外の親族や知人が加わった昼食と夕食は 20 事例(47.6 パーセント)あった。そして世帯外で主人夫婦が食事をとった事例が 2 例あった。さらにプヴィルニツク村から主人の彫刻活動を手伝うために、親族ではない一家がアクリヴィク村に一時的に滞在し、食事を滞在先で一緒にとることがあった。1998 年 2 月の事例と比較すると、たしかに食事の単位は世帯を超えている傾向が認められるが、世帯員のみで食事をする事例と世帯員および世帯外の家族のみで食事をする事例の割合が増加しているといえよう。夏季の場合は、アクリヴィク村周辺において魚類や鳥類を豊富に捕獲できるので、村人が食料不足に陥ることが少なくなる。このため、夏季には冬季に比べ食事を通しての食物分配の範囲が狭まり、頻度が低下する傾向が見られる。

| 参加者からみた食事                     | 事例数(割合)      | 参加者の社会的特徴                                                                                                                                                                                                  |
|-------------------------------|--------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 世帯員のみで昼食と夕食                   | 10 事例(23.8%) |                                                                                                                                                                                                            |
| 世帯員 + 別の世帯に住む家族のみで昼食と夕食       | 10 事例(23.8%) |                                                                                                                                                                                                            |
| 世帯員 + 別の世帯に住む家族 + アルファアの昼食と夕食 | 20 事例(47.6%) | (家族・親族・姻族)<br>オイ・メイが参加 9 事例<br>イトコが参加 5 事例<br>義理の息子が参加 3 事例<br>オジ・オバが参加 1 事例<br>イトコの子供が参加 2 事例<br>兄嫁が参加 1 事例<br>イトコの妻が参加 1 事例<br>イトコの妻の姉が参加 1 事例<br>イトコの息子の嫁 1 事例<br><br>(非親族)<br>隣村の知人 6 事例<br>友人・近所 4 事例 |
| 世帯の以外で食事                      | 2 事例(4.8%)   |                                                                                                                                                                                                            |

表 5.4 1998 年 7 月 4 日から 7 月 28 日にかけての食事への参加者

私の滞在先の場合には、主人夫婦、同居している次女と長男、および別の家に住む夫婦の長女とその子供たちが食事の基本単位となり、それに主人夫婦の、オイやメイ、イトコ、義理の息子、姻族、知人や近所の者が加わる形になっている。この中で主人のオイ(#24)が

表5.5 1998年11月24日から11月27日までの食事

[illegible]

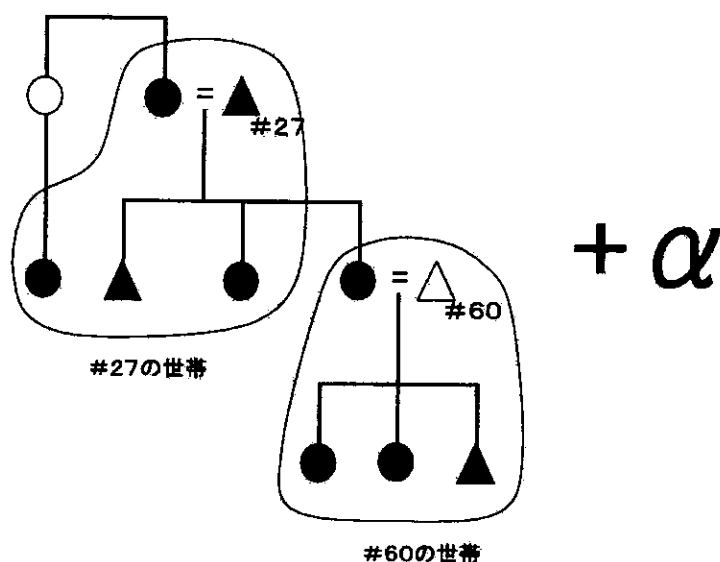
頻繁に食事にきているのは、村の中で仕事をしており、かつ身体的な理由から狩猟や漁撈に従事できないため、自宅にカントリー・フードがないからであった。この期間の私の滞在先の食事の単位の形態は、前項で示した図表 5.1 と同じ形態であった。1 事例のみであったが、知人宅の家(#6 の母の世帯)では、未亡人の老女と同居している子供や親族の者に、世帯を別にする娘夫婦、オイ、オイの子供らが食事に参加している。

### 第3項 1998年11月24日から11月27日までの食事

私は1998年の11月下旬に滑石彫刻などの標本の収集を目的としてヌナヴィク地域の村々を訪問した。その際に、アクリヴィク村にも5日間ほど滞在し、11月24日から27日にかけての滞在先の昼食と夕食5事例を参与観察する機会を得た(食事の事例73から事例77まで、表5.5を参照されたい)。この時の滞在先の世帯は、主人(#27)、その妻、彼らの次女、長男、メイ(妻の妹の長女)の5人から構成されていた。

滞在先の人々が食べた地元の食材は、カリブーの肉、ホッキョクイワナ、マッタックと、カナダの南部から空輸されてきた食材としてはジャガイモ、ライス、豚肉、鶏肉、骨付き鶏肉があった。ホッキョクイワナとマッタックは生のままで食されたが、それ以外は煮て食された。

今回の5事例の食事への参加者は、これまで同様に世帯員と別世帯の長女とその子供たちが食事の単位となっていた。その単位に、世帯主の子供の友人や長女の夫、オイ、娘のボーイフレンドが参加していた(図表5.2)。



図表5.2 #27の世帯で食事を取る人々(1998, 11, 24-11, 27)  
(黒塗りの人々が基本的単位となっている)

表5.6 1999年10月11日から11月7日までの食事

| CASE# | 日付         | 昼/夜 | 内容                                  | 世帯員 |    |     |     |     |    | 世帯外の家族や親族 |   |   |    | その他                 | 人数                                           |              |    |
|-------|------------|-----|-------------------------------------|-----|----|-----|-----|-----|----|-----------|---|---|----|---------------------|----------------------------------------------|--------------|----|
|       |            |     |                                     | AH  | AW | Lin | Isa | Dar | Lu | Am        | B | R | Li |                     |                                              | La           |    |
| 78    | 1999.10.11 | 昼   | アゴヒゲアザラシの冷凍肉                        | 不在  | 不在 | ○   |     | ○   |    |           | ○ |   |    |                     |                                              | 3            |    |
| 79    | 1999.10.11 | 夕   | アゴヒゲアザラシの冷凍肉、カリブーの冷凍肉、チキンヌードルスープ    | ○   | ○  | ○   | ○   | ○   |    |           |   |   |    | AHのメイ(姉の娘)(#27の姉の娘) |                                              | 6            |    |
| 80    | 1999.10.12 | 昼   | 冷凍ホッキョクイワナ、アザラシの冷凍肉、ピザ              | ○   | ○  |     | ○   | ○   |    |           | ○ | ○ |    | ○                   | AHのオイ(姉の息子)(#24)                             | POVから来たAHの友人 | 9  |
| 81    | 1999.10.12 | 夕   | チキンの足部を煮たもの、マッシュポテト                 | ○   | ○  | ○   | ○   | ○   |    |           | ○ |   |    |                     |                                              |              | 6  |
| 82    | 1999.10.13 | 昼   | アゴヒゲアザラシの肉と腸を煮たもの、ブラックベリー           | ○   | ○  | ○   | ○   | ○   |    |           | ○ |   | ○  | ○                   | POVから訪問中のAWのオイ(弟の息子)2人                       |              | 10 |
| 83    | 1999.10.13 | 夕   | フィッシュアンドチップス、ピザ、クランベリー              | ○   | ○  | ○   | ○   | ○   | ○  | ○         |   |   |    |                     |                                              |              | 7  |
| 84    | 1999.10.15 | 夕   | ケワダガモとスパゲッティを煮たもの、アザラシの頭部の肉         | ○   | ○  | ○   | ○   | ○   | ○  | ○         | ○ |   | ○  |                     |                                              |              | 9  |
| 85    | 1999.10.16 | 昼   | ケワダガモとマカロニを煮たもの                     | ○   | ○  | ○   | ○   | ○   | ○  | ○         | ○ | ○ | ○  | ○                   | AWの遠縁                                        |              | 12 |
| 86    | 1999.10.16 | 夕   | アザラシの生肉と買ったマツタック                    | ○   | ○  | ○   |     | ○   | ○  | ○         |   |   |    |                     | AHのメイ(姉の娘)(#84の妻)、AHのイトコ(父方オジの娘、#50)         |              | 8  |
| 87    | 1999.10.17 | 昼   | アゴヒゲアザラシの小腸と肉を煮たもの、昨日の残りのマツタックを煮たもの | ○   | ○  | ○   | ○   | ○   | ○  | ○         | ○ | ○ | ○  | ○                   | AHの姉の子どもたち3人(#24、#84の妻、#23)、AHのイトコ(#40)とその息子 |              | 16 |
| 88    | 1999.10.17 | 夕   | ライス、マカロニ、ブタ肉を煮込んだおかゆと食パン            | ○   | ○  | ○   | ○   | ○   | ○  | ○         | ○ |   | ○  | ○                   |                                              |              | 10 |
| 89    | 1999.10.18 | 昼   | アゴヒゲアザラシの肉、小腸、脂肪を煮たもの、ピザ            | ○   | ○  | ○   | ○   | ○   | ○  | ○         | ○ | ○ |    |                     |                                              |              | 9  |
| 90    | 1999.10.18 | 夕   | マカロニにブタ肉(コンボーク)を混ぜたもの、マツタックを煮たもの    |     | ○  | ○   | ○   | ○   | ○  | ○         | ○ |   | ○  |                     |                                              | 友人の子供        | 9  |
| 91    | 1999.10.20 | 昼   | ワモンアザラシの頭部とヒレ部を煮込んだもの               | ○   | ○  | ○   | ○   | ○   | ○  | ○         | ○ | ○ | ○  |                     | AHのイトコ(#40)                                  |              | 11 |
| 92    | 1999.10.20 | 夕   | マツタックと友人から買ってきたホッキョクイワナ             | ○   | ○  | ○   |     | ○   | ○  | ○         |   | ○ |    |                     |                                              |              | 7  |
| 93    | 1999.10.21 | 昼   | フィッシュアンドチップス、フレンチフライ                | ○   | ○  | ○   | ○   | ○   | ○  | ○         | ○ | ○ |    | ○                   |                                              |              | 10 |
| 94    | 1999.10.21 | 夕   | シロイルカの脳みそとマツタック、マツタックを煮たもの          |     | ○  |     | ○   | ○   |    | ○         | ○ |   |    |                     |                                              |              | 5  |
| 95    | 1999.10.22 | 昼   | レイクトラウト1匹、ホワイトフィッシュ2匹、マツタックとピザ      | ○   | ○  | ○   | ○   | ○   | ○  | ○         | ○ | ○ | ○  | ○                   |                                              |              | 11 |
| 96    | 1999.10.23 | 昼   | レイクトラウトとホワイトフィッシュ、ピザ                | ○   | ○  | ○   | ○   | ○   | ○  | ○         | ○ | ○ | ○  | ○                   |                                              |              | 11 |
| 97    | 1999.10.24 | 夕   | シロイルカの肉とマツタック                       | ○   | カゼ | ○   | ○   | ○   | ○  | ○         | ○ | ○ | ○  |                     |                                              |              | 9  |
| 98    | 1999.10.25 | 昼   | ホットドッグ、ピザ、フィッシュアンドチップス              | 不在  | カゼ | ○   | ○   | ○   | ○  | ○         | ○ | ○ | ○  |                     | AHのオイ(姉の息子)(#24)                             |              | 9  |
| 99    | 1999.10.25 | 夕   | マツタック、ホッキョクイワナ1匹、ホワイトフィッシュ2匹        | 不在  | カゼ | ○   | ○   | ○   | ○  | ○         | ○ | ○ | ○  |                     |                                              |              | 8  |
| 100   | 1999.10.24 | 昼   | ホワイトフィッシュ                           | ○   | ○  | ○   | ○   | ○   | ○  | ○         | ○ | ○ | ○  |                     |                                              |              | 10 |
| 101   | 1999.10.26 | 昼   | ホットドッグ、シロイルカの干し肉、マツタック、ホワイトフィッシュ    | 不在  | ○  | ○   | ○   | ○   | ○  | ○         | ○ | ○ | ○  |                     |                                              |              | 9  |
| 102   | 1999.10.27 | 昼   | ホッキョクイワナ、ホワイトフィッシュ、マツタック            | ○   | ○  | ○   | ○   | ○   | ○  | ○         | ○ | ○ | ○  |                     |                                              |              | 10 |
| 103   | 1999.10.27 | 夕   | シロイルカのマツタックと干し肉                     | ○   | ○  | ○   | ○   | ○   | ○  | ○         |   |   |    |                     |                                              |              | 9  |
| 104   | 1999.10.28 | 昼   | アゴヒゲアザラシの冷凍肉と脳身、小さなホッキョクイワナ1匹、マツタック | ○   | ○  | ○   | ○   | ○   | ○  | ○         | ○ | ○ | ○  |                     |                                              |              | 10 |
| 105   | 1999.10.28 | 夕   | ライス、マカロニ、チキン、ジャガイモを煮込んだおかゆのようなスープ   | ○   | ○  | ○   | ○   | ○   | ○  | ○         | ○ |   |    |                     |                                              |              | 8  |
| 106   | 1999.10.29 | 昼   | マツタック、シロイルカの干し肉、フィッシュアンドチップス        | ○   | ○  | ○   | ○   | ○   | ○  | ○         | ○ | ○ | ○  | ○                   |                                              |              | 11 |

|     |            |   |                                                    |    |    |   |    |   |   |   |   |   |   |   |                                                       |                |    |
|-----|------------|---|----------------------------------------------------|----|----|---|----|---|---|---|---|---|---|---|-------------------------------------------------------|----------------|----|
| 107 | 1999.10.29 | 夕 | フライドチキン、ライスとグリーンピース                                | ○  | ○  | ○ | ○  | ○ | ○ | ○ |   |   |   |   |                                                       |                | 7  |
| 108 | 1999.10.30 | 昼 | 隠封ホッキョクイワナとホワイトフィッシュ                               | 不在 | ○  | ○ | 不在 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |   | AHのイトコ(#40)<br>Bの夫(#81)                               |                | 10 |
| 109 | 1999.10.30 | 夕 | 隠封ホッキョクイワナとホワイトフィッシュ、マッタック                         | ○  | ○  |   | ○  | ○ |   |   |   |   |   |   |                                                       |                | 4  |
| 110 | 1999.11.1  | 昼 | ホッキョクイワナ1匹、ホワイトフィッシュ2匹、ホットドッグ、ピザ                   | ○  | ○  | ○ | ○  | ○ | ○ | ○ | ○ |   |   |   | AHのイトコ(#40)<br>AHのイトコ(#18)                            |                | 10 |
| 111 | 1999.11.2  | 昼 | ホッキョクイワナとホワイトフィッシュ                                 | ○  | ○  | ○ | ○  | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |   | AHのオイ(#24)<br>AHのイトコ(#40)                             |                | 12 |
| 112 | 1999.11.2  | 夕 | フィッシュアンドチップス                                       | ○  | ○  |   | ○  | ○ |   | ○ | ○ |   |   |   |                                                       | AHの友人          | 7  |
| 113 | 1999.10.31 | 昼 | ホワイトフィッシュ、ホッキョクイワナを煮たもの。<br>ホッキョクイワナを焼いたもの。ライチヨウ1羽 | ○  | ○  | ○ | ○  | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |                                                       |                | 11 |
| 114 | 1999.11.1  | 夕 | ホッキョクキツネの肉を煮たもの、マッタック                              | ○  | ○  | ○ | ○  | ○ | ○ | ○ | ○ |   |   |   |                                                       |                | 8  |
| 115 | 1999.11.3  | 昼 | ホッキョクイワナ3匹、ホワイトフィッシュ6匹、スパゲッティ                      | ○  | ○  | ○ | ○  | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | AHのイトコ(#40)<br>AHのイトコ(#83)とその妻<br>AHのオイ(#24)<br>AWの遺囑 | AHの友人(#42)とその妻 | 18 |
| 116 | 1999.11.3  | 夕 | コンボークサンドイッチとホットドッグ                                 | ○  | ○  | ○ |    | ○ |   |   |   |   |   |   |                                                       |                | 4  |
| 117 | 1999.11.4  | 昼 | ホッキョクイワナ、レイトラウト、ホワイトフィッシュ                          | ○  | ○  | ○ | ○  | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |   | Bの夫(#81)、AHのオイ(#24)、AHのイトコ(#40)                       |                | 13 |
| 118 | 1999.11.5  | 昼 | ホットドッグ、ピザ、ポテトとマッタック                                | 不在 | 不在 | ○ | ○  | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |   |                                                       | AHの友人(#42)     | 10 |
| 119 | 1999.11.5  | 夕 | ピザとフレンチフライ                                         | 不在 | 不在 | ○ | ○  | ○ | ○ | ○ |   | ○ |   |   |                                                       |                | 6  |
| 120 | 1999.11.6  | 昼 | フィッシュアンドチップス                                       | 不在 | 不在 | ○ | ○  | ○ | ○ | ○ |   | ○ |   |   |                                                       |                | 6  |
| 121 | 1999.11.6  | 夕 | ホッキョクイワナとホワイトフィッシュ                                 | 不在 | 不在 | ○ | ○  | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |   | Bの夫(#81)<br>AHのイトコ(#40)                               |                | 11 |
| 122 | 1999.11.7  | 昼 | タマゴサンド                                             | 不在 | 不在 | ○ | ○  |   |   |   | ○ | ○ | ○ | ○ | Bの夫(#81)                                              |                | 7  |
| 123 | 1999.11.7  | 夕 | ホッキョクイワナ                                           | ○  | ○  |   |    |   |   |   |   |   |   |   |                                                       |                | 2  |

#### 第4項 1999年10月11日から11月7日までの食事

1999年10月11日から11月7日にかけて参与観察をした昼食と夕食は46事例であった(食事の事例78から123までと表5.6を参照されたい)。これらはすべて私の滞在先における事例である。

この時期に食べられた地元の食材は、シロイルカのマッタックと脳みそ、(干)肉、脂肪、アゴヒゲアザラシの肉と小腸、脂肪、カリブーの肉と脂身、ワモンアザラシの肉と脂肪、ホッキョクイワナ、陸封ホッキョクイワナ、レイクトラウト、ホワイトフィッシュ、ケワダガモ、ライチョウ、ホッキョクギツネの肉、ブラックベリー、クランベリーであった。この時期には魚が海岸部ではなくおもに湖で捕獲される。

一方、カナダの南部から空輸されてきた食材のうち滞在先で食されたものは、チキン、豚肉、コンボーク、ジャガイモ、マッシュポテト、フレンチフライ、スパゲティ、マカロニ、ライス、フィッシュアンドチップス、ピザ、ホットドッグ、グリーンピース、卵などであった。観察したところによると、世帯主夫婦が留守になると、若い世帯員(子供たち)はカナダの南部から空輸されてきた加工食品をより多く食べる傾向が見られた。

この46事例中、世帯員のみでとられた夕食ないしは昼食は6事例(13パーセント)のみであった。

| 参加者からみた事例                | 事例数(割合)                                                                                                 | 参加者の社会的特徴                                                                                                 |
|--------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 世帯員のための昼食・夕食             | 6事例(13%)                                                                                                |                                                                                                           |
| 世帯員+世帯を別にする家族のための昼食・夕食   | 20事例(43.5%)                                                                                             |                                                                                                           |
| 世帯員+世帯を別にする家族+アルファの昼食・夕食 | 20事例(43.5%)<br>(15事例=世帯員+世帯を別にする家族+親族・姻族)<br>(2事例=世帯員+世帯を別にする家族+親族・姻族+非親族)<br>(3事例=世帯員+世帯を別にする家族+非親族のみ) | (家族・親族・姻族)<br>イトコ 9事例<br>オイ、メイ 9事例<br>義理の息子 4事例<br>遠縁のもの 1事例<br><br>(非親族)<br>ほかの村から来た友人 1事例<br>世帯員の友人 2事例 |

表5.7 1999年10月11日から11月7日までの食事への参加者

残りの40事例には世帯員以外の誰かが加わっていた。その内訳は、世帯員と世帯を別にする家族が参加した食事が20事例(43.5パーセント)、世帯員と世帯を別にする家族に親族や非親族が参加した食事は20事例(43.5パーセント)あった。これらの事例から依然として、

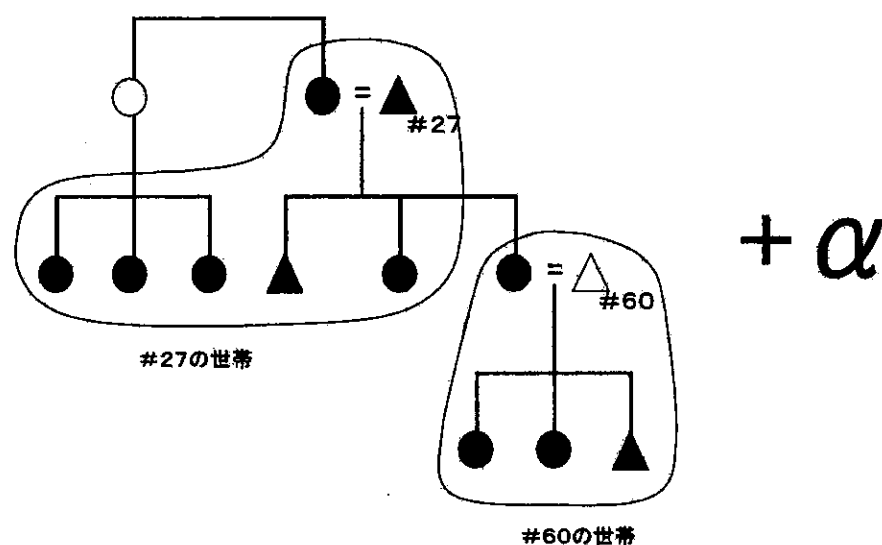


表5. 8 2000年9月8日から10月3日にかけての食事

| CASE# | 日付          | 昼/夜 | 内容                                    | 世帯員 |    |     |     | 世帯外の家族や親族 |   |    |    | その他                            | 人数 |
|-------|-------------|-----|---------------------------------------|-----|----|-----|-----|-----------|---|----|----|--------------------------------|----|
|       |             |     |                                       | AH  | AW | Isa | Dar | B         | R | Li | La |                                |    |
| 124   | 2000.9.8    | 夕   | 冷凍のホッキョクイワナ                           | 不在  | 不在 | 不在  | ○   | ○         | ○ | ○  |    |                                | 4  |
| 125   | 2000.9.9    | 昼   | ホッキョクイワナ2匹                            | 不在  | 不在 | 不在  | ○   | ○         | ○ |    | ○  | Bの夫(#81)                       | 5  |
| 126   | 2000.9.9    | 夕   | ホッキョクイワナ                              | 不在  | 不在 |     | ○   | ○         | ○ |    | ○  |                                | 4  |
| 127   | 2000.9.10   | 昼   | ホッキョクイワナを煮たもの、カリブーの冷凍肉                | ○   | ○  | ○   |     | ○         | ○ | ○  |    | イスアジュクから来た友人                   | 7  |
| 128   | 2000.9.10   | 夕   | 冷凍のホッキョクイワナ、冷凍のカリブー筋肉                 | ○   | ○  | ○   |     | ○         | ○ |    |    | AHの弟(#26)、AHの妹とその夫(#5)         | 8  |
| 129   | 2000.9.11   | 昼   | カリブーの筋肉とホッキョクイワナ1匹                    | ○   | ○  | ○   | ○   | ○         | ○ | ○  | ○  |                                | 8  |
| 130   | 2000.9.11   | 夕   | 小さなホッキョクイワナ2匹を煮たもの                    | ○   |    |     | ○   |           | ○ |    |    | AHのオジ(#46)                     | 5  |
| 131   | 2000.9.12   | 昼   | チキン(レッグ、ウイング、胸肉)を煮たもの、マッシュポテト、グリーンピース | ○   |    | ○   | ○   | ○         | ○ | ○  | ○  | Bの夫(#81)                       | 8  |
| 132   | 2000.9.13   | 昼   | 卵サンドイッチ                               | 不在  | 不在 | ○   | ○   |           |   |    |    |                                | 2  |
| 133   | 2000.9.13   | 夕   | カリブーの肉                                | ○   | 不在 | ○   | ○   | ○         | ○ | ○  | ○  |                                | 7  |
| 134   | 2000.9.14   | 昼   | カリブーのあばら骨肉を煮たもの                       | ○   | 不在 | ○   | ○   | ○         | ○ | ○  | ○  | Bの夫(#81)                       | 8  |
| 135   | 2000.9.15   | 昼   | カリブーのあばら骨肉を煮たもの、一緒に煮たポテト              | ○   | 不在 | ○   | ○   | ○         | ○ | ○  |    |                                | 6  |
| 136   | * 2000.9.15 | 夕   | 全員の世帯外で夕食                             | 不在  | 不在 |     |     |           |   |    |    |                                | 0  |
| 137   | 2000.9.16   | 昼   | カリブーの冷凍肉                              | 不在  | 不在 | ○   |     |           |   |    |    |                                | 1  |
| 138   | 2000.9.17   | 昼   | カリブーの冷凍肉                              | 不在  | 不在 | ○   | ○   |           |   |    |    |                                | 2  |
| 139   | 2000.9.18   | 昼   | フィッシュアンドチップス                          | ○   | 不在 | ○   | ○   |           |   |    |    |                                | 3  |
| 140   | 2000.9.18   | 夕   | カリブーの冷凍肉                              | ○   | 不在 |     | ○   |           | ○ |    |    | AHのオジ(#46)                     | 4  |
| 141   | 2000.9.19   | 昼   | カリブーの肉を焼いたもの、カリブーの冷凍肉、マッシュポテトと茹で野菜    | ○   | 不在 | ○   | ○   | ○         | ○ |    |    | AHの妹とその夫(#5)、AHのイトコ(#83)、その妻、娘 | 7  |
| 142   | 2000.9.20   | 昼   | カリブーの冷凍肉、カリブーの肉を焼いたもの                 | ○   | 不在 | ○   | ○   | ○         | ○ | ○  |    | Bの夫(#81)                       | 7  |
| 143   | 2000.9.21   | 昼   | ホッキョクイワナを煮たもの、そのフレイクとブラックベリーを混ぜ合わせたもの | ○   | 不在 | ○   | ○   | ○         | ○ | ○  | ○  |                                | 7  |
| 144   | 2000.9.21   | 夕   | ハンバーガー、ホットドッグ                         | ○   | 不在 |     | ○   |           |   |    |    |                                | 2  |
| 145   | 2000.9.22   | 昼   | カリブーのサイコロステーキ、マッシュポテト、グリーンピース         | ○   | 不在 | ○   | ○   | ○         | ○ | ○  |    |                                | 6  |
| 146   | 2000.9.23   | 昼   | 冷凍のホッキョクイワナ                           | ○   | 不在 | ○   | ○   |           |   |    |    |                                | 3  |
| 147   | 2000.9.23   | 夕   | 煮たホッキョクイワナのフレイクとブラックベリーを混ぜ合わせたもの      | ○   | 不在 |     |     | ○         |   | ○  |    | Bの夫のオバ(#30)の娘                  | 4  |
| 148   | 2000.9.24   | 昼   | 昨日の残りとレイクトラウト1匹                       | ○   | 不在 |     | ○   | ○         | ○ | ○  | ○  |                                | 6  |
| 149   | 2000.9.24   | 夕   | ホットドッグとハンバーガー                         | ○   | 不在 |     | ○   |           | ○ |    |    |                                | 3  |
| 150   | 2000.9.25   | 昼   | 煮たホッキョクイワナのフレイクとブラックベリーを混ぜ合わせたもの      | ○   | ○  | ○   | ○   | ○         | ○ | ○  | ○  |                                | 8  |
| 151   | 2000.9.25   | 夕   | レイクトラウト2匹                             | ○   | ○  | ○   | ○   | ○         |   |    |    |                                | 5  |
| 152   | 2000.9.26   | 昼   | カリブーの肉を煮たもの、マッシュポテト、ニンジン              | ○   | ○  | ○   | ○   | ○         | ○ | ○  |    |                                | 7  |

|     |   |           |   |                                  |    |    |   |   |   |   |   |   |                                       |            |    |
|-----|---|-----------|---|----------------------------------|----|----|---|---|---|---|---|---|---------------------------------------|------------|----|
| 153 | 狩 | 2000.9.26 | 夕 | クラムチャウダーとパン、冷凍のホッキョクイワナ          | ○  |    | ○ |   |   |   |   |   |                                       | leaの友人     | 3  |
| 154 | 狩 | 2000.9.27 | 昼 | ホッキョクイワナ                         | ○  |    | ○ |   |   |   |   |   |                                       | leaの友人     | 3  |
| 155 | 狩 | 2000.9.27 | 夕 | チキンの足を煮たもの、マッシュポテト               | ○  |    | ○ |   |   |   |   |   |                                       | leaの友人     | 3  |
| 156 |   | 2000.9.28 | 夕 | ケワダガモとスパゲッティを煮たもの                | ○  | ○  |   |   |   | ○ | ○ |   |                                       | Rの友人       | 5  |
| 157 |   | 2000.9.28 | 夕 | 冷凍のホッキョクイワナ                      | ○  | ○  |   | ○ |   | ○ | ○ |   |                                       | Rの友人2人     | 7  |
| 158 |   | 2000.9.30 | 昼 | アゴヒゲアザラシの肉を煮たもの、ホットドッグ           | ○  | ○  | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |   |                                       | Rの友人       | 8  |
| 159 |   | 2000.9.30 | 夕 | ホットドッグ                           | 不在 | 不在 |   | ○ |   | ○ | ○ |   |                                       | Rの友人       | 4  |
| 160 |   | 2000.10.1 | 昼 | ホッキョクイワナの冷凍、缶スープ                 | ○  | ○  | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |                                       | Laの友人      | 9  |
| 161 |   | 2000.10.1 | 夕 | ウニとムール貝を生で。ムール貝を煮たもの             | ○  | ○  | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |   | AHの妹(#41の妻)とその娘、AHの弟(#26)             | Rの友人の4人の少女 | 13 |
| 162 |   | 2000.10.2 | 昼 | 冷凍のホッキョクイワナ                      | ○  | ○  | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |   | AHの妹(#41の妻)とその娘、AHの弟(#26)、AHのイトコ(#40) |            | 8  |
| 163 |   | 2000.10.3 | 昼 | カリブー肉、ニンジン、ジャガイモ、ライス、タマネギを煮込んだもの | ○  | 不在 | ○ | ○ | ○ |   |   |   |                                       |            | 4  |

夕食や昼食は世帯員のみだけからとられることは少なく、世帯員以外の家族や親族、非親族が加わって食事を共にする傾向が見られる。ただし、この時期の滞在先の場合には、滞在先の主人夫婦、同居している次女と長男は従前通りだが、それに主人の妻の3人のメイ(姉の娘)が加わっていた。そして世帯を別にする長女とその子供たちが食事の基本単位であった。それに長女の夫、主人夫婦のイトコ、オイ、メイ、友人や世帯員の友人が食事に加わっている(図表 5.3)。



図表 5.3 #27の世帯で食事を取る人々(1999. 10. 11-11. 7)  
(黒塗りの人々が基本的単位となっている)

この期間には、滞在先の主人のオイ(#24)とメイ(#64の妻および#23)、イトコ(#40)も頻繁に食事にきているが、これは主人が内陸の湖で捕獲した新鮮な魚があったからであった。また、1998年の食事の事例と比べると、食事にくる村内の親族や友人の絶対数や頻度が減っているが、これは滞在先の員数が8人(私を含めると9人)へと増加したために、食料が不足することを心配した親族や村人が食事にこなくなったためであると考えられる。

#### 第5項 2000年9月8日から2000年10月3日にかけての食事

2000年9月8日から10月3日にかけて私が参与観察をした昼食と夕食は40事例であった(食事の事例124から事例163までと表5.8を参照されたい)。このうち滞在先以外でとられた食事が4事例あった。残りの36事例は滞在先での食事である。この期間中に滞在先の主婦が9月13日から9月24日まで仕事の関係で研修旅行に出ていたことや夫婦で週末に狩猟小屋に出かけたことが何日かあったために、食事の員数がほかの調査時期と比べてかなり少なくなった。

この期間中に食べられた地元の食材は、ホッキョクイワナ、レイクトラウト、カリブーの肉、アゴヒゲアザラシの肉と脂身、ベリー類、ケワダガモ、ウニ、ムール貝であった。秋季は夏季や冬季に比べると食料となる動植物の種類が少ない。一方、同じ期間中に食べられたカナダの南部から輸送されてきた食材は、チキン(レッグ、ウイング、胸肉)、マッシュポテト、グリーンピース、ニンジン、タマネギ、卵、ライス、フィッシュアンドチップス、缶詰入り野菜、ハンバーガー、ホットドッグ、缶入りクラムチャウダー、スパゲティ、缶入りスープなどであった。

| 参加者からみた食事                | 事例数(割合) | 参加者の社会的特徴                                                                                                                                          |
|--------------------------|---------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 世帯員だけの昼食や夕食              | 5 事例    |                                                                                                                                                    |
| 世帯員＋世帯を別にする家族だけの昼食や夕食    | 13 事例   |                                                                                                                                                    |
| 世帯員＋世帯を別にする家族＋アルファの昼食と夕食 | 22 事例   | (家族・親族)<br>義理の息子が参加 4 事例<br>兄弟姉妹が参加 3 事例<br>オイ、メイが参加 1 事例<br>オジ、オバが参加 2 事例<br>イトコが参加 2 事例<br>姻族が参加 1 事例<br><br>(非親族)<br>世帯員もしくは家族の友人が加わった事例が 11 事例 |

表 5.9 2000 年 9 月 8 日から 2000 年 10 月 3 日にかけての昼食と夕食への参加者

ここで取り上げた 40 事例中、世帯員のみでとった昼食と夕食は 5 事例であった。この期間の世帯員は、私を除くと、主人(#27)、その妻、彼らの長男、メイ(妻の妹の長女)の 4 人から形成されていた。また、世帯員と世帯員外の家族のみでとった昼食と夕食は 13 事例であった。そのほかの 22 事例は親族の者や友人が加わっていた。世帯員と世帯員外の家族に、世帯員の友人が加わった事例が 9、滞在先夫婦の娘の夫が加わった事例が 4、主人の妹とその娘、兄、友人が加わった事例が 1、主人の弟と妹夫婦が加わった事例が 1、主人のオジが加わった事例が 1、主人のオジと友人が加わった事例が 1、妹夫婦、イトコ夫婦とその娘が加わった事例が 1、主人のイトコが加わった事例が 1、主人の姻戚の子供が加わった事例が 1 あった。また、事例の中には非親族者が食事に参加した事例が 11 あったが、それは主人の息子と孫の友人たちであった。

これらの事例を見ると、少なくとも 3 点が確認できる。第 1 点は、食事には世帯外の人

表5. 10 2003年9月19日から10月5日までの食事

| CASE# |      | 日付        | 昼/夜 | 内容                                           | 世帯員                                                                                            |    |     |    |   | 世帯外の家族や親族 |   |    |    |                                          | その他              | 人数 |
|-------|------|-----------|-----|----------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------|----|-----|----|---|-----------|---|----|----|------------------------------------------|------------------|----|
|       |      |           |     |                                              | AH                                                                                             | AW | Lin | It | A | B         | R | Li | La |                                          |                  |    |
| 164   |      | 2003.9.19 | 夕   | 冷凍のホッキョクイワナ                                  | ○                                                                                              | ○  | ○   | ○  |   |           |   |    |    | POVから来たAWのイトコ                            |                  | 5  |
| 165   |      | 2003.9.20 | 昼   | カリブーの肉、ライス、ジャガイモを煮たもの。ペーグル、食パンにバター、ジャム。      | ○                                                                                              | ○  | ○   | ○  |   | ○         | ○ | ○  | ○  |                                          |                  | 8  |
| 166   |      | 2003.9.20 | 夕   | カリブーの肉を入れた市販のスープとパノク                         | ○                                                                                              | ○  | ○   | ○  | ○ |           |   |    |    |                                          |                  | 5  |
| 167   |      | 2003.9.21 | 昼   | チキンとジャガイモをオープンで焼いたものと缶詰コーン                   | ○                                                                                              | ○  | ○   | ○  | ○ | ○         | ○ | ○  | ○  | AHの妹( #6の妻)                              |                  | 10 |
| 168   |      | 2003.9.21 | 夕   | ホットドッグとフレンチフライ                               | ○                                                                                              | ○  | ○   | ○  |   |           | ○ |    |    |                                          |                  | 5  |
| 169   |      | 2003.9.22 | 昼   | フィッシュアンドチップス                                 | 不在                                                                                             | ○  | ○   |    |   |           |   |    |    |                                          |                  | 2  |
| 170   |      | 2003.9.21 | 夕   | 冷凍のホッキョクイワナ、ブラックベリー                          | ○                                                                                              | ○  | ○   |    |   | ○         |   |    |    |                                          | 生協の代表者(仕事仲間)     | 5  |
| 171   |      | 2003.9.23 | 昼   | 春にとったカナダガンを煮たもの、マッシュポテト                      | ○                                                                                              | ○  |     |    |   | ○         | ○ | ○  | ○  | Bの夫( #81)                                | 生協の代表者(仕事仲間)     | 5  |
| 172   |      | 2003.9.23 | 夕   | 煮たホッキョクイワナをフレーク状にほぐし、それにブラックベリーを混ぜあわせたもの     | ○                                                                                              | ○  | ○   |    |   | ○         |   |    |    | Bの夫( #81)                                | 生協の代表者(仕事仲間)     | 6  |
| 173   |      | 2003.9.24 | 昼   | ホッキョクグマの脂肪付き肉を煮たもの                           | ○                                                                                              | ○  | ○   |    |   | ○         | ○ | ○  | ○  | AHのオイ(姉の息子) ( #24)                       |                  | 8  |
| 174   |      | 2003.9.25 | 昼   | ハクガン(冷凍保存)を似たもの、ピザとチキンレッグス                   | ○                                                                                              | ○  |     |    |   | ○         | ○ | ○  |    | AHのメイ(姉の娘) ( #64の妻)                      |                  | 6  |
| 175   |      | 2003.9.26 | 昼   | 煮たホッキョクイワナをフレーク状にほぐし、それにブラックベリーを混ぜあわせたもの     | ○                                                                                              | ○  |     |    |   | ○         | ○ | ○  | ○  |                                          |                  | 6  |
| 176   | キャンプ | 2003.9.27 | 昼   | ジュニアレンジャースの兵糧食                               | ○                                                                                              | ○  |     |    |   |           | ○ |    |    |                                          | AHの孫の友人          | 4  |
| 177   | キャンプ | 2003.9.27 | 夕   | パノクと紅茶                                       | ○                                                                                              | ○  |     |    |   |           | ○ |    |    |                                          | AHの孫の友人          | 4  |
| 178   | キャンプ | 2003.9.28 | 昼   | ホワイトフィッシュ、ホッキョクイワナ、パノク、紅茶                    | ○                                                                                              | ○  |     |    |   |           | ○ |    |    |                                          | AHの孫の友人          | 4  |
| 179   |      | 2003.9.28 | 夕   | ホワイトフィッシュ、ホッキョクイワナ                           | ○                                                                                              | ○  | ○   | ○  |   | ○         | ○ | ○  | ○  | Bの夫( #81)、Bの夫のオバ( #30)とその娘、POVから来たAWのイトコ |                  | 12 |
| 180   |      | 2003.9.29 | 昼   | ホッキョクイワナ、ホワイトフィッシュ、フィッシュアンドチップス              | ○                                                                                              | ○  |     |    |   |           |   | ○  |    |                                          | AHとAWの友人( #42の妻) | 4  |
| 181   |      | 2003.9.29 | 夕   | ホッキョクイワナをオープンで焼いたもの、ジャガイモとコーン                | ○                                                                                              | ○  | ○   | ○  | ○ | ○         | ○ | ○  | ○  |                                          |                  | 9  |
| 182   |      | 2003.9.30 | 昼   | チキン、ライス、ジャガイモを煮たもの。ホッキョクイワナとホワイトフィッシュを煮たもの   | ○                                                                                              | ○  | ○   | ○  | ○ |           |   |    |    |                                          |                  | 5  |
| 183   |      | 2003.10.1 | 夕   | ケワダガモとスパゲッティを煮たもの                            | ○                                                                                              | ○  | ○   | ○  |   |           |   |    |    | AHのメイ(兄の娘)とその夫( #49)                     | AHとAWの友人( #42の妻) | 7  |
| 184   |      | 2003.10.2 | 昼   | 昨日の残り物(ケワダガモとスパゲッティを煮たもの、チキン、ライス、ジャガイモを煮たもの) | ○                                                                                              | ○  |     |    |   | ○         | ○ | ○  | ○  |                                          |                  | 6  |
| 185   |      | 2003.10.2 | 夕   | ウニとヒトデ                                       | ○                                                                                              | ○  | ○   | ○  | ○ | ○         | ○ | ○  | ○  |                                          |                  | 9  |
| 186   |      | 2003.10.3 | 昼   | カリブーの肉とジャガイモ、ニンジン、マカロニを煮たもの                  | ○                                                                                              | ○  | ○   |    |   | ○         | ○ | ○  | ○  |                                          |                  | 7  |
| 187   |      | 2003.10.4 | 昼   | カリブーの冷凍肉                                     | ○                                                                                              | ○  | ○   | ○  | ○ | ○         | ○ |    | ○  |                                          |                  | 8  |
| 188   |      | 2003.10.5 | 昼   | カリブー、ライス、ジャガイモを煮込んだもの、30cm四方のマトタクー板を煮たもの     | ○                                                                                              | ○  | ○   | ○  | ○ | ○         |   |    | ○  | Bの夫( #81)                                |                  | 8  |
| 189   |      | 2003.10.5 | 夕   | ケワダガモを煮たものとウニ                                | ○                                                                                              | ○  | ○   | ○  | ○ | ○         | ○ | ○  |    |                                          |                  | 8  |
| 190   | 別    | 2003.10.5 | 夕   | #5宅の夕食(ホッキョクイワナとカリブーの肉)                      | #5氏とその妻、#5の妻とその夫( #41)、#5の妻の弟( #26)、#5の妻のイトコ( #83)とその妻、#5の妻の友人( #38)とその娘、#5の妻のイトコ( #17の妻)とその娘。 |    |     |    |   |           |   |    |    |                                          |                  | 11 |

が加わっている傾向が強く、世帯が食事の単位であるとは限らないことである。第2点は、もっとも高い頻度で食事に参加しているのは、世帯員ではあるが、世帯員外の家族の者が大半の食事に参加している。第3点は、世帯員と世帯を別にする子供の家族を除けば、常時食事に参加している特定個人は少ないが、滞在先の主人の兄弟姉妹、姻族の者、イトコ、オジ、友人や世帯員の友人が参加していることがわかる。これらの事例からわかるように、この時期においても食事には世帯員以外の人々を含むより大きな拡大家族のメンバーが参加している。

#### 第6項 2003年9月19日から10月5日までの食事

2003年9月19日から10月5日にかけて私が参与観察をした昼食と夕食は27事例であった。23事例が滞在先の事例であり、3例がジュニア・レンジャーズのキャンプの事例、1例がたまたま訪問した村のハンターの家での夕食の事例であった(食事の事例164から事例190まで、表5.10を参照されたい)。

この期間中の食事の中で地元の食材は、ホッキョクイワナ、ホワイトフィッシュ、カリブーの肉、ケワダガモ、ウニ、ヒトデ、マツタック、ベリー類、春に捕獲し冷凍保存していたカナダガンとハクガン、夏にとって冷凍保存していたホッキョクグマの肉であった。一方、カナダの南部から搬送されてきた食材は、ジャガイモ、コーン、ニンジン、ベーグル、食パン、バター、ジャム、市販のスープ、チキン、チキンレッグス、ホットドッグ、フレンチフライ、フィッシュアンドチップス、ライス、マッシュポテト、スパゲティー、マカロニ、ピザ、ジュニア・レンジャーズの兵糧食などであった。

| 参加者からみた食事              | 事例数(割合)     | 参加者の社会的特徴                                                                                          |
|------------------------|-------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 世帯員みの昼食・夕食             | 3事例(13%)    |                                                                                                    |
| 世帯員と世帯を別にする子供の家族のみ     | 9事例(39.1%)  |                                                                                                    |
| 世帯員と世帯を別にする子供の家族+アルファー | 11事例(47.8%) | (親族)<br>義理の息子 4事例<br>オイ、メイ 3事例<br>イトコ 2事例<br>兄弟姉妹 1事例<br>姻族 1事例<br><br>(非親族)<br>仕事仲間 3事例<br>友人 2事例 |

表 5.11 2003年9月19日から10月5日までの食事への参加者

表5. 12 2004年2月10日から2月16日にかけての食事

[illegible]

この期間における私の滞在先の世帯構成は、主人(#27)、その妻、彼らの次女と次女の長男、彼らの長男、私であった。まず、滞在先の23事例において誰が食事に参加したかを見ると、世帯員のみで食事をしたのは3事例のみであった。世帯員と世帯を別にする家族のみによる食事は9事例であった。さらに、親族や友人が参加した事例は11例あった。すなわち、娘の夫と仕事仲間が加わった食事が2事例、娘の夫が加わった事例が1例、娘の夫とその親族および主人のイトコが加わった事例が1例、主婦のイトコが加わった事例が1例、滞在先の主人の妹が加わった事例が1例、主人のオイが加わった事例が1例、主人のメイが加わった事例が1例、主人のメイ夫婦と友人が加わった事例が1例、夫婦の友人が加わった事例が1例、主人の仕事仲間が加わった事例が1例であった。

この期間に参加観察をした滞在先以外の事例(#5宅)では、その世帯の夫婦、妻の妹夫婦、妻の弟、妻のイトコ夫婦、妻のイトコとその娘、夫妻の友人とその娘が食事に参加していた。

これらの事例をもとにすると、食事に参加するのは世帯員だけではなく、世帯を別にする家族を中心に親族や友人が加わっている場合が多いといえる。

#### 第7項 2004年2月10日から2月16日にかけての食事

2004年2月10日から2月16日にかけて私は滞在先(#27の世帯)において12事例の昼食と夕食を参加観察した(表5.12を参照)。

この期間の地元でとれた食材は、セイウチの肉、二枚貝、ウニとホッキョクイワナであった。セイウチの肉は2003年9月にハンター・サポート・プログラムで村から村人に配布されたものを石積み貯蔵穴に保存していたものであった。通常、発酵して緑色を帯びるが、今年の肉は十分に発酵していなかった。滞在先の主人が捕獲したホッキョクイワナ以外のムール貝とウニは村人から購入したものであった。カリブーがとれない年の2月頃は、地元でとれるカントリー・フードの総量が少なくなる傾向がある。一方、それに反比例するように、カナダの南部から搬送されてきた食材や食品の種類と消費総量は増加する。この期間中に滞在先で消費された加工食品は、チキンレッグス、豚肉、フライドチキン、骨付きチキン、ジャガイモ、ライス、マッシュポテト、フレンチフライ、ホットドッグ、マカロニ、ピーナツバター、ハンバーガー、チキンスープ、ケチャップ、マヨネーズ、ピザ、ハムサンドイッチなどであった。

12事例中、世帯員のみによる食事の事例は1例、世帯員と世帯を別にする子供の家族のみによる食事の事例は5例、世帯員と世帯を別にする子供の家族に、ほかの親族や非親族が加わった食事の事例は6例であった。食事に参加したそのほかの親族や非親族の事例は、滞在先の主婦の弟4例、主人のイトコ夫妻1例、主人のオイ1例であった。表5.1と表5.3、表5.5、表5.6、表5.8、表5.10において示したように、これまでの食事の諸事例と比べると、食事を通しての分配も世帯員と世帯外の子供の家族内で行われることが多く、それ以外の親族や非親族が多人数参加した食事は見られなかった。第1項から第7項において紹



介した事例は、1990 年 12 月にアクリヴィク村において記録した食事による食物分配の事例とほとんど同じでように(岸上 1998: 180-193)、世帯員と同村に住む家族が中心となり、それに拡大家族の者、友人、隣人が加わって昼食や夕食をとっている。

#### 第 8 項 キャンプ地や狩猟中における食事を通しての食物分配

アクリヴィク村の事例に基づくと、世帯員を中心に食事をとっていることは明らかであるが、ほとんどの食事に世帯を別にする家族や親族が加わっている。換言すれば、村の中の食事に関しては、拡大家族のメンバーで食事をする傾向が強く見られた。

一方、対照的なのがキャンプ地や狩猟中の食事である。キャンプや狩猟には、親子、兄弟、オジ、オイ、イトコなどを核とした拡大家族関係にある者が同行する傾向が見られるが、親族関係にない者がキャンプ地を同じくすることや、狩猟中に合流することが多々見られた。その場合には、親族関係があるなしにかかわらず、その場に居合わせた人たちが食事を共にとる。すなわち、キャンプ地や狩猟場では、親族か否かにかかわらずそこに居合わせた人によって食物が分配されていた。

##### 事例 1 1980 年代半ばのケーブ・スミス島のキャンプ

1984 年から 1986 年にかけての毎夏、私はある老人夫婦(図表 4.5 の#76)に付いてケーブ・スミス島のキャンプに同行した。キャンプは、老人夫婦とその子供、その老人男性の姉の家族(図表 4.5 の#33 と#34 の母)、その姉の義理の息子(男性老人のイトコでもある)2 人(図表 4.5 の#36 と#39)のいずれかの家族で構成されていた。このキャンプでは、昼食や狩猟後の夕食は、いずれかのテントで料理され、キャンプの構成員全員が集まってとることが多かった。また、狩猟の途中にキャンプに立ち寄った人たちも自由に食事に参加していた。

##### 事例 2 1998 年 7 月 5 日にケーブ・スミス島にて

滞在先の主人(#27)は家族とともにケーブ・スミス島の南側にある小島にウミバト(*pitsiulaaq*)のタマゴを採集に行った。島に着くと、#7 夫妻や#6 の妻が子供たちとともに海岸でホッキョクイワナを食べていた。滞在先の家族はその食事に加わった。

##### 事例 3 1998 年 7 月 11 日にケーブ・スミス島にて

滞在先の主人(#27)はケーブ・スミス島の南側の海域でアザラシ猟を行っていたが、途中、ケーブ・スミス島の海岸に上陸し、#36 とその家族が昼食をとっているのに合流し、マツタック、シロイルカの干肉、ホッキョクイワナなどを食べた。

アクリヴィク村を離れた小規模なキャンプ地では、食べ物や常時、キャンプにいる人たちが訪ねてきた人たちによって分配される傾向が認められる。もともとキャンプ自体が拡大家族関係にある人によって構成される傾向があるが、親族関係になくとも一緒に狩猟や

漁撈に従事した者や、キャンプ地を訪ねてきた者とは自由に食物の分配を行っている。

#### 第9項 村全体での共食会

アクリヴィク村では正月、イースター、春の始まりの日(注6)、カナダの日(毎年7月1日)、クリスマスの機会に、村全体での共食会が開催される。正月や春の始まりの日、カナダの日の共食会は村役場が組織をし、イースターやクリスマスの共食会は村の教会委員会やレクリエーション委員会が主体となって組織をしている。料理の食材であるカリブーの肉、アザラシの肉、ホッキョクイワナは、村役場がハンター・サポート・プログラムを利用して村人から買い取ったり、村人がこの共食会のために捕獲してきたりしたものである。これらの肉や魚は一度、村の冷凍倉庫に集められ、レクリエーション委員会やボランティアの村人が料理をする。また、村の予算で生協から購入したパン、紅茶、ジュース、果物やお菓子類も食事会には出される。

これらの食事会は村の体育館を利用して行われることが多い。主催者は、料理や食べ物、飲料、デザートを準備し、共食会の始まる時刻を村のFMラジオ放送を利用して村人に告げる。村人はそれぞれナイフ、皿、コップを持って、会場に集合し、食事会に参加する。これらの食事会には、すべてではないが多くの村人が参加する。これらの村全体での共食会は「ニリマツット」(*nirimatut*)と呼ばれている。食事の後に、ゲーム大会やダンスが行われることが多い(岸上 1998: 10 章)。

#### 第6節 村外との食物分配

ヌナヴィク地域の村にはアクリヴィク村のようにホッキョクイワナがたくさんとれるところもあれば、プヴィルニツク村やイヌクジュアク村のようにあまりとれないところがある。このような村の間では、親族や家族の者や友人が食べ物を旅行者に託して送ることがある。地元の村々、さらにはモントリオールと定期便を就航しているイヌイット航空は、乗客1人にあたり20キログラムまでの荷物を無料で運ぶことができる。イヌイットは、荷物の少ない旅行者の名義を借りて食料や獲物の入ったビニール袋や紙箱をモントリオールに住む家族や親族、友人のいる村に送る。前もって送ることを電話しておく、本人かその関係者が村の空港までそれを取りにくるようになっていく。

##### 事例1 ホッキョクイワナをもらって帰る

プヴィルニツク村から滞在先の主婦(#27の妻)の妹夫婦が1998年1月下旬に1週間ばかりアクリヴィク村を訪問した。彼らが1998年1月26日にプヴィルニツク村に帰る時に、滞在先の冷凍機からホッキョクイワナを1匹もらっていった。

##### 事例2 ホッキョクイワナをほかの村に送る

1998年7月24日に滞在先の主人(#27)は、その日にとったホッキョクイワナ2匹を隣村

のプヴィルニツク村へ飛行機で旅をする村人に託して、その村に住む大親友のところに持って行ってもらった。

### 事例3 魚をほかの村に送る

1999年11月4日に滞在先の主人(#27)はイヌクジュアク村に住むメイ(姉の娘)に冷凍のホッキョクイワナを5匹紙箱に詰め、飛行機で旅行する人に託して送った。

### 事例4 ベリー類をほかの村からもらう

1999年10月12日に滞在先の主婦(#27の妻)の所に、イヌクジュアク村に住むオバからブラックベリーや克蘭ベリーが紙箱に詰められ1箱送られてきた。

### 事例5 マッタックと魚をほかの村に送る

1999年11月8日に私がアクリヴィク村を去り、クジュアラールピク経由でモントリールへ飛行機で移動する日に、滞在先の主婦(#27の妻)からイヌクジュアク村に住むオバのところにマッタックを6キログラム持っていくように頼まれた。また、村の老人(滞在先の主人の父方オジ)から隣村にすむ友人に魚の入った紙箱を持っていくように頼まれた。これは私が実際に運ぶのではなく、私の名前で荷物をチェックインし、目的地に運ばせたのであった。それぞれの目的地には電話で知らせを受けた本人か関係者が空港まで荷物を受け取りにくることになっていた。

### 事例6 ブラックベリーをほかの村からもらう

2000年9月19日の午後に滞在先の主人(#27)はアクリヴィク村の空港に行き、紙箱を抱えて戻ってきた。この箱は、クジュアラールピク村に住むイトコが彼に送ったものであった。その中には、市販のマーガリンの容器に詰められたブラックベリーが入っていた。滞在先の主人は1週間前にそのイトコにホッキョクイワナとカリブーの冷凍肉を航空便で送っていた。そのお返しらしい。

### 事例7 ブラックベリーをほかの村からもらう

2000年9月23日に滞在先の隣りに住む老人(#13)がモントリオールの病院からアクリヴィク村に帰ってきた。その老人から電話があった後で、滞在先の息子が隣りの家を訪れ、缶に詰められたブラックベリーを持ち帰った。これは滞在先の主婦にクジュアラールピク村のイヌイットが送ったものであるという。

### 事例8 ブラックベリーをほかの村からもらう

2003年9月22日の午後に滞在先の主婦(#27の妻)は、クジュアラールピク村に住む友人からイヌイット航空の乗客に託されたブラックベリーを5キログラムほど受け取った。

#### 事例9 滑石をほかの村から送ってもらう

2003年9月22日に、滞在先の主人(#27)は滑石を空港に受け取りにいった。イヌクジュアク村に住む友人がイヌイト航空の定期便を利用して送ってくれたものである。

#### 事例10 カリブーの肉をモントリオールに送る

2003年10月6日に村のある女性(#64の妻)は、モントリオールに向かう女性の知人に頼んで、娘にカリブーの冷凍肉を持っていってもらった。村のある男性が、その同じ女性にモントリアルに住むオイにカリブーの冷凍肉を持っていってもらった。

#### 事例11 セイウチの肉をほかの村に送る

2003年9月29日に村人(#25)はハンター・サポート・プログラムを利用したセイウチ猟からセイウチの肉の配布を受けた。ある村人は、もらった肉の一部をクジュアラーク村に住む姉妹4人と、イヌクジュアク村に住む姉1人に送った。

これらの事例は、自分が持っていない食べ物を送ってもらったり、相手が持っていない食べ物を送ったりする傾向がある。この村外との食物のやり取りは、特定の二者間での交換の形をとることもある。

#### 第7節 特定の二者間での食物分配

カナダのヌナヴィク地域では儀礼的助産人と子供たちの間で特別な関係が存在しており、二人の間でプレゼントの交換が見られる。男性ならば最初にとったすべての種類の鳥獣や魚の一部もしくはすべてを、儀礼的助産人にプレゼントするしきたりになっている。一方、儀礼的助産人は、誕生日などの機会に銃弾、少額の現金、食べ物や衣類をプレゼントする。ハンターから村人への分配の事例のひとつとして、初めてシロイルカを捕獲したプヴィルニツク村のハンターが、彼の儀礼的助産人にその頭部を持ち帰ったことを示した(事例23)。また、初めてホッキョクグマを捕獲したハンター(#11)は、毛皮と肉の一部を同じ村に住む儀礼的助産人に贈った。1998年11月3日に観察した事例を紹介する。当日は、滞在先の主人(#27)が儀礼的助産人となっている子供の誕生日であった。その日の午後に母親に連れられたその子供がバースデー・ケーキの一部をおすそ分けするために滞在先の主人を訪ねてきた。主人は、その子供に誕生日のお祝いとして10カナダ・ドルの現金を渡した。

また、カナダのヌナヴィク地域では同名者関係という特別な関係が存在しており、同名者間でナイフなど道具のプレゼントが交換されることがある。同名者間では、即時的な交換は見られないが、遅延的な交換が認められる。あまり頻繁ではないが、訪問時や誕生日、クリスマスの時に食物や物品がプレゼントされる場合がある。

さらに、常時、ハンターから獲物や食べ物をもらっている村の老人やひとり者の女性がハンターに感謝の念を込めてライフルの銃弾をプレゼントするということが見られた。

このように儀礼的助産人とその子供との間や同名者間で、食物やプレゼントの交換が行われている。

#### 第8節 アクリヴィク村におけるハンター・サポート・プログラムによる食物分配

アクリヴィク村ではすでに書いたように 1984 年からハンター・サポート・プログラムを利用してシロイルカ猟やセイウチ猟を実施し、獲物を村人に分配するようになった。さらに、村のハンター・サポート・プログラムの予算に余裕があれば、冬季に村のハンターからプログラムを利用して肉や魚を買い上げ、必要な村人に無償で分配することが行われてきた。本節では、アクリヴィク村におけるハンター・サポート・プログラムを利用した食物分配について述べる。

##### 第1項 シロイルカ猟の場合

北米の極北沿岸地域の海中に生息しているシロイルカは、小型のクジラであり、ベルガクジラ(beluga whale)やシロクジラ(white whale)と一般に呼ばれている(注 7)。イヌイット名はヒ(キ)ラルガク(*qilalugak*)で、学名は *Delphinapterus leucas* である。シロイルカの体長はオスで約 4 から 6 メートル、メスで約 4 メートルである。その体重はオスで最大約 1,000 キログラム、メスで最大約 700 キログラムになる(Graves and Hall 1988: 26)。シロイルカは 15 頭余りからなる群れ(グループ)を形成し、行動を共にする習性を持ち、季節的に回遊する。夏季から秋季にかけて数百頭からなる群れを形成し、出産地と越冬地の間を移動するのである。

大型のシロイルカ 1 頭あたりからは約 200 キログラムの肉、約 50 キログラムのマツタック(脂肪付き皮部)、約 300 リットルの油(脂肪)を取ることができる。カナダの極北沿岸に住むイヌイットは肉やマツタックを食料資源として、脂肪(油)を燃料資源として利用してきたが、カナダのハドソン湾やウングアヴァ湾では 1850 年から 1900 年頃にかけてハドソン湾会社(the Hudson's Bay Company)によって数千頭にも及ぶシロイルカが鯨油を取る商業目的で捕獲され、個体総数が激減したことが知られている。現在では、シロイルカの商業捕獲は行われておらず、その肉とマツタックと呼ばれる脂肪つき皮部はイヌイットによって食料資源として利用されている。

アクリヴィク村は毎年 10 月頃にハンター・サポート・プログラムを利用して 6 人のハンターをイヴィヴィク村付近の狩猟場へと派遣し、村人のためにシロイルカを捕獲させる(注 8)。アクリヴィク村には村有大型ボートが 1 隻ある。その大型ボートの船長と副船長 2 人は固定であるが、残りの 4 人の乗組員については村内で募集をする。定員以上の参加希望者がいる場合には、村会議員と船長が相談して決める。この 4 人の中には 20 歳代の若いハンターが少なくとも 1 人が訓練を目的として選抜されることが多い。

1984 年から 1993 年頃まではハドソン湾の南西部に位置するリッチモンド湾に出猟していたが、1994 年以降はイヴィヴィク村方面へ出猟するようになった。出猟の際には村有の

大型ボートに船外機付き小型ボート1隻を乗せて行く。出猟中は狩猟場の近くか、イヴィク村の沖に停泊し、大型ボートで夜を過ごす。

シロイルカが陸の近くを回遊している場合には丘の上からライフルで仕留めることもあるが、多くの場合は、発見後、小型ボートや大型ボートで追跡する。シロイルカは危険を感じると、浅瀬に逃げ込んだり、陸や断崖の水際に接近する習性を持っている。この習性を利用してハンターは発見したシロイルカを浅瀬か陸地の方へと追い込み、射程距離に近づいた後、ライフルを撃ってから、大きな浮き(現在はプラスチック製石油缶)がひもによって連結されている離頭鉤を打ち込む。逆に、鉤を打ち込んだ後にライフルで殺すこともある。傷付いたシロイルカは逃げるが、浮きが付いているので海底に没することはない。シロイルカが死ぬと、それを近くの浜辺か磯へ小型ボートで曳航し、そこで解体をする。

出猟期間中、参加したハンターには日当が支払われるほか、大型ボートの燃料やハンターの食料、銃弾などが支給される。村有の大型ボートは通常、村全体に分配するのに十分な頭数のシロイルカを捕獲するまで狩猟地に滞在するが、10頭程度捕獲できれば村に帰る。1999年の分配の事例を見てみよう。

1999年の10月10日から10月27日まで村に雇われたハンターは村有大型ボートを利用してシロイルカ猟に出猟し、15頭のシロイルカを捕獲し、村に持ち帰った。7人のハンターには参加した日数に応じて給料が支払われたほか、最後まで狩猟に従事した5人には欲しい部位のマッタークや肉を取ることが許された。

10月28日の午後1時30分すぎに大型ボートから浜辺にシロイルカのマッターク、頭部、肉が運ばれ始めた。さらに私有大型ボート(1号)の船長から7頭分のシロイルカのマッタークと肉が村へ寄付された。ハンター・サポート・プログラムを利用したシロイルカ猟ではマッタークを全世帯へ平等に分配することが原則とされているので、村役場の係から指名された老人2人がマッタークを(ハンターの世帯を除いた)78世帯に平等に分ける作業を行った。

午後4時30分過ぎに村人が浜辺に集まり、村長の号令で好きなマッタークの山を取り、持参したプラスチック袋かプラスチック箱に入れて自宅に持って帰った。分配場所に取りに行くことができない老人や寡婦の世帯には村から委託された人がスノーモービルやトラックでマッタークを配達した。シロイルカの頭部や肉の部分については欲しい人が欲しい分だけ取っていくことが許されていた。世帯の規模によって差があるが、1世帯あたりマッタークだけでも約10から30キログラムを入手した。余った肉や頭部は村有の冷凍倉庫に納められ、将来、欲しい人が取りにいったよいことになっている。私の滞在先の主人は30キログラムあまりのマッタークをもらってきた。村人は、入手したマッタークを自宅の冷凍機で保存し、少しずつ食べていく。

このようにハンター・サポート・プログラムを利用したシロイルカ猟の実施と、その成果の分配によって、アクリヴィク村のイヌイットは、入手するのが難しいマッタークや肉を得ることができる。

## 第2項 セイウチ猟の場合

セイウチは極北地域に群れを成して生息する大型海獣である。イヌイット名はアイヴィック(*aiviq*)で、学術名は *Odobenus rosmarus* である。セイウチのオスは体長約4メートル、体重約1,600キログラムであり、そのメスは体長約2.6メートル、体重約1,250キログラムである。長さ1メートルを超える巨大な牙を持つものもある。イヌイットは、その肉や脂肪を食料として、厚い皮をウミアック(*umiaq*)と呼ばれる皮製の大型ボートや皮ひもの材料として利用してきた。

ヌナヴィク地域では、イヴィヴィク村の西方海上にあるマンセル島やサルイット村の北方にあるサルスベリー島やノッティンガム島に生息している。アクリヴィク村では、1984年に村用の大型ボートを入手してから年に1度、ハンター・サポート・プログラムを利用してセイウチ猟に村のハンターを派遣するようになった(注9)。

2003年には、船長と副船長、6人のハンターがこの狩猟遠征に参加した。村所有の大型ボートは、9月20日から28日まで隣のプヴィルニツク村の大型ボートとともに出猟し、ノッティンガム島で11頭のセイウチを捕獲した。

セイウチは海上に流氷が少なくなる9月頃になると多数、サルスベリー島やノッティンガム島に出現する。島の海岸近くにセイウチの群れを発見すると海上から小型ボートや大型ボートで近づく。セイウチはハンターを発見するといっせいに海中に入るが、ハンターは海岸の近くにいるセイウチをライフルで仕留める。海岸近くで仕留めると、干潮時にセイウチは地面につく。セイウチは重量が重いので、陸に引き上げるのが大変である。満潮時に、セイウチを少しずつ陸上に引き上げていき、海岸で解体する。セイウチの皮は厚く硬いので、解体作業は困難を極める。運搬可能な大きさに解体されたセイウチは、大型ボートに乗せて、村へ帰る。帰途、イヴィヴィク村に立ち寄り、捕獲したセイウチの舌部を切り取り、クージュアック村にある調査センターへ送り、寄生虫の有無を調べてもらう。

検査結果に基づいて、寄生虫を持つセイウチは海に遺棄し、それ以外は村人に分配されることになる。2003年の事例を紹介しよう。9月29日の午後1時から村の北方向にある岩場でセイウチ肉の分配があるとの村役場からの知らせがFMラジオ放送で流れた。当日、午後1時頃になると、アクリヴィク村から船外機付き小型ボートが三々五々に分配のある海岸へと集合し始めた。村の海岸沖に停泊していた大型ボートも分配場所の近くへと移動した。その海岸は岩盤が広がった小丘であるが、海岸近くに停泊した大型ボートから40～50キログラムずつに分けられたセイウチの肉塊を村人がロープで引っ張り上げる。村人は世帯ごとに肉塊を入手し、肉の部分を皮で包み込むようにしてフットボール状のものを作り、セイウチの皮ひもかビニール製のひもで縫い合わせる。この皮で包み込まれた肉塊は1個15キログラム以上ある。これを世帯ごとに分配場の近くに石を積んで貯蔵箱を作り、その中に入れ、冬季まで放置し、発酵させる(注10)。冬になるとこの肉を取り出し、食料とする。

このセイウチ肉の分配を受けた世帯を図表 4.5 の世帯主番号で示せば、#4、#5、#6、#7、#9、#13、#15、#18、#20、#22、#24、#25、#27、#28、#30、#34、#39、#40、#42、#43、#44、#45、#46、#49、#50、#57、#62、#65、#66、#67、#72、#74、#75、#76、#79、#80、#82、#83、#95 であった。アクリヴィク村にある世帯のほぼ半分強にあたる約 40 世帯がセイウチの肉を手に入れたことになる。

最近、においが強烈なセイウチ肉を食べない若者が増加しつつあり、若者の世帯や独身世帯の若者はこのセイウチ肉の分配に参加しない傾向にある。一方、アクリヴィク村の近辺では捕獲することが難しいセイウチの肉は、中高年のイヌイットにとってご馳走のひとつであるために、根強い需要がある。アクリヴィク村は毎年ハンター・サポート・プログラムを利用して村がセイウチを捕獲し、その肉を村人に提供している。毎年、1 世帯あたり 45 から 90 キログラムの肉を得ている。その肉の大半は冬場の食料のために保存され、利用されている。

### 第3項 ホッキョクイワナとカリブーの肉の分配

冬季にアクリヴィク村では、村がハンター・サポート・プログラムを利用してハンターから肉や魚を買い取り、食料を必要とする村人へ無償で分配している。

#### (1)ホッキョクイワナとカリブーの分配

1980 年代の半ばには、村は 9 月にカリブー猟遠征を、11 月にホッキョクイワナ漁遠征を組織し、村人全員ののためにカリブーの肉やホッキョクイワナをとりに行かせていたが、1990 年代には村がそれらの遠征を組織することはやめ(注 11)、カリブー猟やホッキョクイワナ漁に行った村人からハンター・サポート・プログラムの資金を利用して下記の価格で購入し、食料を必要とする老人、寡婦、病人、仕事に就いているために狩猟に行くことができない村人に無償で提供している。また、余剰分が大量にある場合には、村の全世帯に平等に配布したり、村の冷凍倉庫で保存したりする。

|                  |                                     |
|------------------|-------------------------------------|
| ホッキョクイワナ         | 1 ポンド(約 0.453 キログラム)あたり 1.75 カナダ・ドル |
| アゴヒゲアザラシ・ワモンアザラシ | 1 ポンド(約 0.453 キログラム)あたり 1.75 カナダ・ドル |
| カリブー メスもしくは子供    | 1 頭あたり 110 カナダ・ドル                   |
| カリブー オス          | 1 頭あたり 110 カナダ・ドル                   |

表 5.12 アクリヴィク村における HSP によるホッキョクイワナとカリブーの買い取り価格 (1998 年の価格)(注 12)



ハンター・サポート・プログラムに余裕がある場合には、村長が村のFMラジオ放送を利用して獲物を買取することを村人に伝える。獲物の余剰を村人は村のハンター・サポート・プログラムに売り、現金を得る。例えば、1998年のクリスマスの時から1999年3月までの間に、アクリヴィク村はハンター・サポート・プログラムの資金を使用して、ホッキョクイワナを合計7,000カナダ・ドル分、カリブーを合計2,000カナダ・ドル分、村人から購入し、村全体に無償で配布した。ホッキョクイワナは1匹あたり約5ポンド(2.27キログラム)であるから、この期間に約800匹を提供したことになる。一方、カリブーは約18頭が村の全世帯に提供されたことになる。こうしてホッキョクイワナ5匹程度とカリブーの肉塊が村の全世帯に何度か配布された。村は、ライチョウやホワイトフィッシュをハンター・サポート・プログラムの資金で買取り、村人に配布することもあった。

カリブーやアザラシの肉、ホッキョクイワナやホワイトフィッシュは、ハンター・サポート・プログラムの資金に余裕がある場合にのみ、買取られ、村の老人、寡婦、独身女性、病人、村の中で仕事に就いており狩猟や漁撈に行くことができない人に無償で提供されるのである。

次にハンター・サポート・プログラムによって購入された獲物の総量およびその経済効果について、4つの時期について見てみる。その期間とは、私がアクリヴィク村の役場から情報を入手することができた1998年2月から4月まで、1998年8月から12月まで、1999年の1月から12月まで、そして2000年の1月から9月までの時期である。

## (2)1998年2月－4月の場合

ここでは1998年2月17日から4月16日までの期間にアクリヴィク村でのハンター・サポート・プログラムを利用した獲物の購入総量やその経済効果を見るために、いくつかの視軸を設けて情報を整理した(Kishigami 2000)。

表5.13は、プログラムによって獲物が購入された日付、カリブーの購入数、アザラシもしくは魚の購入重量についてまとめたものである。表5.14は、プログラムに肉や魚を販売した村のハンターの年齢階層、各ハンターが肉を売った回数、各ハンターの収入を整理したものである。

この約2ヶ月の間に、村はハンター・サポート・プログラムを利用してカリブー132頭、アザラシ肉ないしは魚約2,750ポンド(約1.2トン)を、延べ87人のハンターから購入し、食料を必要とする村人へ再分配している。一方、ハンターは合計で約20,600カナダ・ドルの収入をプログラムから得たことになる。

当時の村長によると、カリブーを10頭以上獲得したときには、それらを解体し、その肉をすべてのイヌイットの世帯へ配布したという。もし9頭以下であれば、肉はまず老人、寡婦、フルタイムの定職を持ち狩猟や漁撈に行くことのできない村人へと分配され、その後で肉を必要としているイヌイット世帯へと分配された。この約2ヶ月間には、すべてのイヌイット世帯にカリブーの肉が分配されたのが6度、老人や寡婦、フルタイムの定職を

持ち狩猟や漁撈に行くことのできない村人へ限定的に分配されたのが9度あった。

1頭のカリブーが5人に対し2週間分の食料になると仮定すると、この2ヶ月のハンター・サポート・プログラムは9,240人日分(5人×14日×カリブー132頭)の食料になる。これは当時のアクリヴィク村の23日分の食料に相当する。これ以外に、同期間には、総計2,750ポンド(約1.2トン)のアザラシの肉ないしはホッキョクイワナが17回に分けて購入され、村人に提供されていた。

| 月日(1998年) | カリブーの数 | アザラシもしくは魚の重量                |
|-----------|--------|-----------------------------|
| 2月17日     | 12頭    | 459 ポンド (約 208 キログラム)       |
| 2月18日     | 6頭     | 366 ポンド (約 166 キログラム)       |
| 2月23日     | 2頭     | 223.8 ポンド (約 101 キログラム)     |
| 2月26日     | 0頭     | 115.4 ポンド (約 52 キログラム)      |
| 2月27日     | 10頭    | 0 ポンド                       |
| 3月2日      | 14頭    | 0 ポンド                       |
| 3月5日      | 0頭     | 124.6 ポンド (約 56 キログラム)      |
| 3月6日      | 0頭     | 194.6 ポンド (約 88 キログラム)      |
| 3月9日      | 21頭    | 40.8 ポンド (約 18 キログラム)       |
| 3月10日     | 2頭     | 229.8 ポンド (約 104 キログラム)     |
| 3月11日     | 0頭     | 34.8 ポンド (約 15.8 キログラム)     |
| 3月13日     | 2頭     | 0 ポンド                       |
| 3月17日     | 0頭     | 20 ポンド (約 9 キログラム)          |
| 3月18日     | 8頭     | 0 ポンド                       |
| 3月19日     | 21頭    | 0 ポンド                       |
| 3月20日     | 4頭     | 260 ポンド (約 118 キログラム)       |
| 3月23日     | 0頭     | 36 ポンド (約 16 キログラム)         |
| 3月24日     | 12頭    | 118.8 ポンド (約 53.8 キログラム)    |
| 3月25日     | 8頭     | 72 ポンド (約 32.6 キログラム)       |
| 3月26日     | 0頭     | 140 ポンド (約 63.4 キログラム)      |
| 3月27日     | 0頭     | 213 ポンド (約 96.5 キログラム)      |
| 4月3日      | 3頭     | 0 ポンド                       |
| 4月13日     | 3頭     | 0 ポンド                       |
| 4月15日     | 4頭     | 0 ポンド                       |
| 4月16日     | 0頭     | 100 ポンド (約 45.3 キログラム)      |
| 合計        | 132頭   | 2,748.6 ポンド (約 1,245 キログラム) |

表 5.13 買い取り日、買い取られたカリブーの頭数とアザラシもしくは魚の重量

| ハンターのID番号      | 獲物を売った回数                         | 現金収入                                           | 年齢階層  |
|----------------|----------------------------------|------------------------------------------------|-------|
| 01 (#44)       | 1 回                              | 144 カナダ・ドル                                     | 30 歳代 |
| 02 (7)         | 1 回                              | 440 カナダ・ドル                                     | 50 歳代 |
| 03 (一時的な居住者)   | 1 回                              | 274.3 カナダ・ドル                                   | 40 歳代 |
| 04 (#3)        | 1 回                              | 110 カナダ・ドル                                     | 40 歳代 |
| 05 (#83)       | 1 回                              | 420 カナダ・ドル                                     | 50 歳代 |
| 06 (#13 の兄の息子) | 1 回                              | 440 カナダ・ドル                                     | 40 歳代 |
| 07(#20 の息子)    | 1 回                              | 110 カナダ・ドル                                     | 20 歳代 |
| 08 (#15 の息子)   | 1 回                              | 90 カナダ・ドル                                      | 20 歳代 |
| 09 (#11)       | 1 回                              | 90 カナダ・ドル                                      | 20 歳代 |
| 10 (#66)       | 2 回                              | 175.50 カナダ・ドル                                  | 50 歳代 |
| 11 (#45)       | 2 回                              | 199.50 カナダ・ドル                                  | 40 歳代 |
| 12 (#5)        | 2 回                              | 319.50 カナダ・ドル                                  | 40 歳代 |
| 13 (#13)       | 2 回                              | 310 カナダ・ドル                                     | 20 歳代 |
| 14 (2 の系譜上のオジ) | 2 回                              | 232 カナダ・ドル                                     | 20 歳代 |
| 15 (#46)       | 2 回                              | 880 カナダ・ドル                                     | 60 歳代 |
| 16 (#39)       | 3 回                              | 439.50 カナダ・ドル                                  | 60 歳代 |
| 17 (#20)       | 3 回                              | 930 カナダ・ドル                                     | 40 歳代 |
| 18 (#59)       | 3 回                              | 1,240 カナダ・ドル                                   | 30 歳代 |
| 19 (#28)       | 3 回                              | 1,190 カナダ・ドル                                   | 50 歳代 |
| 20 (#80)       | 3 回                              | 292.50 カナダ・ドル                                  | 40 歳代 |
| 21 (#27)       | 3 回                              | 1,300 カナダ・ドル                                   | 50 歳代 |
| 22 (#25)       | 4 回                              | 1,410 カナダ・ドル                                   | 30 歳代 |
| 23 (#23)       | 5 回                              | 1,808 カナダ・ドル                                   | 50 歳代 |
| 24 (#55)       | 6 回                              | 1,781.50 カナダ・ドル                                | 60 歳代 |
| 25 (#13)       | 6 回                              | 1,680 カナダ・ドル                                   | 70 歳代 |
| 26 (#1)        | 8 回                              | 1,227 カナダ・ドル                                   | 60 歳代 |
| 27 (#62)       | 8 回                              | 984 カナダ・ドル                                     | 40 歳代 |
| 28 (#2)        | 11 回                             | 2,071.50 カナダ・ドル                                | 40 歳代 |
| 合計 (1 回/人あたり)  | 87 回<br>(1 回平均 236.7 カ<br>ナダ・ドル) | 20,589.43 カナダ・ドル<br>(1 人あたり 735.34 カナ<br>ダ・ドル) |       |

表 5.14 ハンターのID番号(および図表 4.5 の世帯主番号)、各ハンターが肉を売った回数、収入、年齢階層

| 年 齢 階<br>層・収入 | 99<br>カナダ・ドル<br>未満 | 100—499<br>カナダ・ドル | 500—999<br>カナダ・ドル | 1000—1499<br>カナダ・ドル | 1500 —<br>1999<br>カナダ・ドル | 2000 —<br>2500<br>カナダ・ドル |
|---------------|--------------------|-------------------|-------------------|---------------------|--------------------------|--------------------------|
| 20 歳代         | 2 人                | 2 人               |                   |                     |                          |                          |
| 30 歳代         |                    | 2 人               |                   | 2 人                 |                          |                          |
| 40 歳代         |                    | 6 人               | 2 人               |                     |                          | 1 人                      |
| 50 歳代         |                    | 3 人               |                   | 2 人                 | 1 人                      |                          |
| 60 歳代         |                    | 1 人               | 1 人               | 1 人                 | 1 人                      |                          |
| 70 歳代         |                    |                   |                   |                     | 1 人                      |                          |
| 合計            | 2 人                | 14 人              | 3 人               | 5 人                 | 3 人                      | 1 人                      |

表 5.15 ハンターの年齢階層と収入

|       | 1 度 | 2 度 | 3 度 | 4 度 | 5 度 | 6 度 | 8 度 | 11 度 |
|-------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|
| 20 歳代 | 3 人 | 1 人 |     |     |     |     |     |      |
| 30 歳代 | 1 人 | 1 人 | 1 人 | 1 人 |     |     |     |      |
| 40 歳代 | 3 人 | 2 人 | 2 人 |     |     |     | 1 人 | 1 人  |
| 50 歳代 | 2 人 | 1 人 | 2 人 |     | 1 人 |     |     |      |
| 60 歳代 |     | 1 人 | 1 人 |     |     | 1 人 | 1 人 |      |
| 70 歳代 |     |     |     |     |     | 1 人 |     |      |

表 5.16 ハンターの年齢階層と肉・魚をハンター・サポート・プログラムへ売った頻度

ヌナヴィク地域においてこのハンター・サポート・プログラムが創出された理由のひとつは、英語やフランス語を話すことができず、学歴がないために賃金労働に就くことができない中高年のフルタイムのハンターに現金収入源をひとつ提供することであった。この2ヶ月の間に、28人のハンターが獲物をプログラムに売り、約20,600カナダ・ドルの現金を得ている。この28人のハンターを年齢別にみると、20歳代が4人、30歳代が4人、40歳代が9人、50歳代が6人、60歳代が4人、70歳代が1人であった。

この28人のハンターは延べで87度、肉や魚をハンター・サポート・プログラムに売っている。ハンターは平均で1度につき237カナダ・ドルの収入を得ている。しかしながら総収入で見ると、1人の収入が90カナダ・ドルから約2,070カナダ・ドルまでというかなりの幅が存在している。なお、ハンター1人あたりの平均収入は735カナダ・ドルである。

表5.15と表5.16は、収入の高さと販売の頻度の高さは、年齢階層の高さとほぼ比例する傾向にあることを示している。ハンター・サポート・プログラムから得る収入だけからでは、ハンターの経済的な必要をすべて満たすことはできないが、40歳代以上の、特に熟練したハンターにとって、このプログラムからの収入は数少ない貴重な収入源のひとつである。

(3)1998年8月－12月の場合

ここでは1998年8月3日から12月末までの期間にアクリヴィク村でのハンター・サポート・プログラムを利用した獲物の購入総量やその経済効果について述べる。

表5.17は、1998年8月から同年12月までのプログラムによって獲物が購入された日付、カリブーの購入数、アザラシもしくは魚の購入重量についてまとめたものである。

| 月日(1998年) | シロイルカ・セイウチ・カリブー                 | アザラシもしくは魚の重量                           |
|-----------|---------------------------------|----------------------------------------|
| 8月3日      | カリブー 2頭                         |                                        |
| 8月11日     | カリブー 2頭                         | ホッキョクイワナ 20 ポンド<br>(約9.1キログラム)         |
| 8月12日     |                                 | ホッキョクイワナ 87 ポンド<br>(約39.4キログラム)        |
| 9月21日     | セイウチ 7頭                         |                                        |
| 10月20日    | シロイルカ 18頭                       |                                        |
| 11月17日    |                                 | ホッキョクイワナ 91 ポンド(約<br>41.2キログラム)        |
| 11月18日    |                                 | ホッキョクイワナ 25 ポンド(約<br>11.3キログラム)        |
| 11月23日    |                                 | ホッキョクイワナ 7,301 ポンド<br>(約3,307.4キログラム)  |
| 11月27日    |                                 | ホッキョクイワナ 2,641 ポンド<br>(約1,196.4キログラム)  |
| 合計        | カリブー 4頭<br>セイウチ 7頭<br>シロイルカ 18頭 | ホッキョクイワナ 10,165 ポン<br>ド(約4,604.7キログラム) |

表 5.17 買い取り日、買い取られた獲物の数もしくは重量

この期間にはカリブーの購入、セイウチ狩猟遠征、シロイルカ狩猟遠征、およびクーヴイク地域にホッキョクイワナ漁に行った村人からの魚の購入が実施された。その結果、カリブー4頭、セイウチ7頭、シロイルカ18頭、ホッキョクイワナ約1万ポンド(約4.6トン、約2,000匹)がアクリヴィク村にもたらされたことになる。1頭のカリブーが5人に対し2週間分の食料になると仮定すると、280人日分の食料となる。さらにセイウチ1頭あたりの肉を500キログラム、シロイルカ1頭あたりのマツタックの量を50キログラム、その肉を200キログラムとして換算すると、3.5トンのセイウチの肉と900キログラムのマツタック、3.6トンのシロイルカの肉が村にもたらされたことになる(注13)。カリブーの肉は老人世帯や寡婦世帯へと分配された。セイウチの肉は、肉を欲している約40世帯に分配された。そ

してシロイルカのマツタックは村のほぼ全世帯にあたる約 80 世帯に均等に分配された。シロイルカの肉はイヌを飼っている世帯や中高年の世帯が取っていった。なお、12 月にハンター・サポート・プログラムを利用した購入がないのは、11 月の時点で予算がなくなったからである。

| ハンターの I D 番号         | 獲物を売った回数                      | 現金収入                                        | 年齢階層  |
|----------------------|-------------------------------|---------------------------------------------|-------|
| 02 (#7)              | 1 回                           | 1,159.50 カナダ・ドル                             | 50 歳代 |
| 06 (#13 の兄の息子)       | 1 回                           | 200 カナダ・ドル                                  | 40 歳代 |
| 12 (#5)              | 2 回                           | 2,016 カナダ・ドル                                | 40 歳代 |
| 15 (#46)             | 2 回                           | 2,316 カナダ・ドル                                | 60 歳代 |
| 17 (#20)             | 1 回                           | 500 カナダ・ドル                                  | 40 歳代 |
| 18 (#59)             | 1 回                           | 500 カナダ・ドル                                  | 30 歳代 |
| 19 (#28)             | 2 回                           | 2,469 カナダ・ドル                                | 50 歳代 |
| 22 (#25)             | 1 回                           | 1,200 カナダ・ドル                                | 30 歳代 |
| 23 (#22)             | 2 回                           | 1,946.5 カナダ・ドル                              | 50 歳代 |
| 25 (#13)             | 1 回                           | 558 カナダ・ドル                                  | 70 歳代 |
| 28 (#2)              | 1 回                           | 1,300 カナダ・ドル                                | 40 歳代 |
| 29 (#90 の弟)          | 1 回                           | 30 カナダ・ドル                                   | 30 歳代 |
| 30 (#81)             | 1 回                           | 200 カナダ・ドル                                  | 20 歳代 |
| 31 (#82)             | 2 回                           | 1,875 カナダ・ドル                                | 50 歳代 |
| 32 (#52)             | 2 回                           | 3,233 カナダ・ドル                                | 20 歳代 |
| 33 (#71)             | 4 回                           | 1,997 カナダ・ドル                                | 10 歳代 |
| 34 (#75)             | 1 回                           | 500 カナダ・ドル                                  | 20 歳代 |
| 35 (#36)             | 1 回                           | 1,300 カナダ・ドル                                | 10 歳代 |
| 36 (#65)             | 1 回                           | 1,200 カナダ・ドル                                | 40 歳代 |
| 37 (#15)             | 1 回                           | 1,100 カナダ・ドル                                | 40 歳代 |
| 38 (#58)             | 1 回                           | 1,820.81 カナダ・ドル                             | 20 歳代 |
| 39 (#49)             | 1 回                           | 1,153.50 カナダ・ドル                             | 30 歳代 |
| 合計(1 回/人あたり)<br>22 人 | 29 回(1 回あたり<br>985.32 カナダ・ドル) | 28,574.31 カナダ・ドル(1 人あ<br>たり 1298.83 カナダ・ドル) |       |

表 5.18 ハンターの I D 番号(および図表 4.5 の世帯主番号)、各ハンターが肉を売った回数、各ハンターの収入、各ハンターの年齢階層(注 14)

表 5.18 は、1998 年 8 月から同年 12 月までのプログラムに獲物を売ったハンターの ID 番号、各ハンターが肉を売った回数、収入、年齢階層をまとめたものである。この 5 ヶ月間に延べ 29 人のハンターがハンター・サポート・プログラムに肉や魚を売り、合計で約 28,600 カナダ・ドルを得たことになる。ハンター 1 人あたりに換算すると、この 5 ヶ月間に約 1,300 カナダ・ドルの収入を得たことになる。先に見た同年 2 月から 4 月と比べても金額は決して多くはないが、定収のないハンターにとっては重要な収入源である。

| 年 齢 階<br>層・収入 | 99<br>カナダ・ド<br>ル未満 | 100 -<br>499 カナ<br>ダ・ドル | 500 -<br>999 カナ<br>ダ・ドル | 1000 -<br>1499 カナ<br>ダ・ドル | 1500 -<br>1999 カナ<br>ダ・ドル | 2000 -<br>2499 カナ<br>ダ・ドル | 2500<br>カナダ・ド<br>ル以上 | 人数   |
|---------------|--------------------|-------------------------|-------------------------|---------------------------|---------------------------|---------------------------|----------------------|------|
| 10 歳代         |                    |                         |                         | 1 人                       | 1 人                       |                           |                      | 2 人  |
| 20 歳代         |                    | 1 人                     | 1 人                     |                           | 1 人                       |                           | 1 人                  | 3 人  |
| 30 歳代         | 1 人                |                         | 1 人                     | 2 人                       |                           |                           |                      | 4 人  |
| 40 歳代         |                    | 1 人                     | 1 人                     | 3 人                       |                           | 2 人                       |                      | 7 人  |
| 50 歳代         |                    |                         |                         | 1 人                       | 2 人                       |                           |                      | 3 人  |
| 60 歳代         |                    |                         |                         |                           |                           | 1 人                       |                      | 1 人  |
| 70 歳代         |                    |                         | 1 人                     |                           |                           |                           |                      | 1 人  |
| 合計            | 1 人                | 2 人                     | 4 人                     | 7 人                       | 4 人                       | 3 人                       | 1 人                  | 22 人 |

表 5.19 ハンター・サポート・プログラムに獲物を売ったハンターの年齢階層と収入(1998 年 8 月—12 月、アクリヴィク村)

表 5.19 は、1998 年 8 月から 12 月までの期間にアクリヴィク村のハンター・サポート・プログラムに獲物を売ったハンターの年齢階層と収入を整理したものである。このプログラムには 10 歳代から 70 歳代までのハンターが参加しているが、もっとも多いのは 40 歳代のハンターである。10 歳代と 70 歳代のハンターを除けば、ここでも年齢が高い人がより多くの収入をこのプログラムから得ているという傾向を見て取ることができる。10 歳代や 20 歳代の中で 1,000 カナダ・ドル以上の収入を得ているのは、セイウチ猟やシロイルカ猟に参加したか、クーヴィク地域で大量のホッキョクイワナを捕獲したからである。

表 5.20 は、1998 年 8 月から 12 月までの期間にアクリヴィク村のハンター・サポート・プログラムに獲物を売ったハンターの年齢階層と獲物を売った頻度を整理したものである。この期間には、大半のハンターは 1 度か 2 度、獲物をハンター・サポート・プログラムに売っているだけであった。

| 売った回数・年齢階層 | 1 回  | 2 回 | 3 回 | 4 回 |
|------------|------|-----|-----|-----|
| 10 歳代      | 1 人  |     |     | 1 人 |
| 20 歳代      | 3 人  | 1 人 |     |     |
| 30 歳代      | 4 人  |     |     |     |
| 40 歳代      | 5 人  | 1 人 |     |     |
| 50 歳代      | 1 人  | 3 人 |     |     |
| 60 歳代      |      | 1 人 |     |     |
| 70 歳代      | 1 人  |     |     |     |
| 合 計        | 15 人 | 6 人 | 0 人 | 1 人 |

表 5.20 ハンター・サポート・プログラムに獲物を売ったハンターの年齢階層と獲物を売った頻度(1998 年 8 月-12 月、アクリヴィク村)

#### (4)1999 年 1 月-12 月の場合

ここでは 1999 年にアクリヴィク村においてハンター・サポート・プログラムを利用した獲物の購入総量やその経済効果について述べる。表 5.21 は、プログラムによって獲物が購入された日付、カリブーの購入数、アザラシもしくは魚の購入重量についてまとめたものである。

1999 年において獲物が購入された日は、合計で 15 日であった。村がハンター・サポート・プログラムを利用して買い取った獲物は、カリブー 31 頭、セイウチ 6 頭、シロイルカ 15 頭、アザラシ 863 ポンド(約 390 キログラム)、ホッキョクイワナ約 1 万ポンド(約 4.5 トン)であった。カリブー 31 頭は、2,170 人日分(5 人×14 日×31 頭)に相当する。セイウチ 1 頭あたりの肉を 500 キログラム、シロイルカ 1 頭あたりのマッタークの量を 50 キログラム、その肉を 200 キログラムとして換算すると、セイウチの肉は約 3 トンに、シロイルカのマッタークは約 750 キログラム、その肉は約 3 トンに相当する。また、ホッキョクイワナ約 1 万ポンド(約 4.5 トン)は約 2,000 匹に相当する。

2 月 17 日の分配の場合には、村のプログラム担当者はできるだけ多くの世帯にカリブーの片足がいきわたるように配慮しながら 16 頭分のカリブーの肉を配布した。残った肉は村の近くにイグルーを立て、そこに貯蔵し、肉を欲しい村人が自由に取れるようにした。2 月 19 日にもカリブーの肉が村の全世帯へと配布された。

3 月 19 日のように約 1,400 匹もの多量のホッキョクイワナを村がハンター・サポート・プログラムで購入できた時には、村の全世帯に 4 ないし 5 匹を配布し、残った分は村の冷凍庫に入れ、欲しい村人が自由に取ることができるようにした。ホッキョクイワナの購入量が少ないときには、まず老人世帯に 4、5 匹ずつ配布し、残りをほかの世帯へ 1、2 匹ず



つ配布した。ホッキョクイワナもアザラシも購入量が少ないときには、老人世帯のみに配布された。村を 80 世帯として単純計算をすると、1 世帯あたりマッタックを約 9.4 キログラム、シロイルカの肉を約 37.5 キログラムずつ配布したことになる。

シロイルカのマッタックはほぼ均等に全世帯に分配された一方、その肉は欲しい世帯が取っていった。セイウチの肉はその肉を欲した約 40 世帯が肉をもらっていった。したがって、1 世帯あたり約 75 キログラムのセイウチの肉を入手したことになる。

| 月日 (1999 年)    | カリブーや大型海獣                    | アザラシもしくは魚の重量                                                    |
|----------------|------------------------------|-----------------------------------------------------------------|
| 2 月 17 日       | カリブー 16 頭                    | アザラシ 22 ポンド(約 10 キログラム)                                         |
| 2 月 18 日       | カリブー 3 頭                     |                                                                 |
| 2 月 19 日       | カリブー 9 頭                     |                                                                 |
| 2 月 22 日       |                              | アザラシ 61 ポンド(約 27.6 キログラム)                                       |
| 3 月 1 日        | カリブー 3 頭                     | アザラシ 328 ポンド(約 148.6 キログラム)                                     |
| 3 月 2 日        |                              | ホッキョクイワナ 375 ポンド (約 169.9 キログラム)                                |
| 3 月 3 日        |                              | アザラシ 190 ポンド(約 86.1 キログラム)                                      |
| 3 月 10 日       |                              | アザラシ 262 ポンド(約 118.7 キログラム)                                     |
| 3 月 19 日       |                              | ホッキョクイワナ 950 ポンド (約 430.3 キログラム)                                |
| 3 月 29 日       |                              | ホッキョクイワナ 7,005 ポンド(約 3,173.3 キログラム)                             |
| 3 月 30 日       |                              | ホッキョクイワナ 716 ポンド(324.3 キログラム)                                   |
| 10 月 6 日(分配)   | セイウチ 6 頭                     |                                                                 |
| 10 月 28 日 (分配) | シロイルカ 15 頭                   |                                                                 |
| 12 月 1 日       |                              | ホッキョクイワナ 428 ポンド(271.8 キログラム)                                   |
| 12 月 2 日       |                              | ホッキョクイワナ 600 ポンド(271.8 キログラム)                                   |
| 合計             | カリブー31 頭、セイウチ 6 頭、シロイルカ 15 頭 | アザラシ 863 ポンド(390.9 キログラム)<br>ホッキョクイワナ 10,076 ポンド(4,564.4 キログラム) |

表 5.21 買い取り日、買い取られた獲物の頭数、アザラシもしくは魚の重量

| ハンターの I D 番号           | 獲物を売った回数                      | 現金収入                                              | 年齢階層  |
|------------------------|-------------------------------|---------------------------------------------------|-------|
| 02 (#7)                | 2 回                           | 437.7 カナダ・ドル                                      | 50 歳代 |
| 04 (#3)                | 1 回                           | 285 カナダ・ドル                                        | 40 歳代 |
| 05 (#83)               | 1 回                           | 440 カナダ・ドル                                        | 50 歳代 |
| 07 (#20 の息子)           | 2 回                           | 620 カナダ・ドル                                        | 20 歳代 |
| 15 (#46)               | 3 回                           | 2702.5 カナダ・ドル                                     | 60 歳代 |
| 16 (#39)               | 3 回                           | 669 カナダ・ドル                                        | 60 歳代 |
| 17 (#20)               | 1 回                           | 320 カナダ・ドル                                        | 50 歳代 |
| 19 (#28)               | 3 回                           | 2,731.5 カナダ・ドル                                    | 60 歳代 |
| 21 (#27)               | 1 回                           | 440 カナダ・ドル                                        | 50 歳代 |
| 23 (#22)               | 4 回                           | 1778 カナダ・ドル                                       | 50 歳代 |
| 24 (#55)               | 5 回                           | 3,117.5 カナダ・ドル                                    | 60 歳代 |
| 25 (#13)               | 1 回                           | 330 カナダ・ドル                                        | 70 歳代 |
| 31 (#82)               | 2 回                           | 2,250 カナダ・ドル                                      | 50 歳代 |
| 33 (#71)               | 2 回                           | 845 カナダ・ドル                                        | 10 歳代 |
| 36 (#65)               | 3 回                           | 2,474 カナダ・ドル                                      | 40 歳代 |
| 01 (#1)                | 1 回                           | 33 カナダ・ドル                                         | 60 歳代 |
| 40 (#45)               | 1 回                           | 820 カナダ・ドル                                        | 50 歳代 |
| 41 (#36)               | 1 回                           | 409.7 カナダ・ドル                                      | 60 歳代 |
| 42 (#29 の亡夫)           | 1 回                           | 235.5 カナダ・ドル                                      | 60 歳代 |
| 43 (一時的居住者)            | 2 回                           | 900 カナダ・ドル                                        | 40 歳代 |
| 44 (#14 の息子)           | 2 回                           | 1,800 カナダ・ドル                                      | 10 歳代 |
| 45 (#63 の息子)           | 1 回                           | 525 カナダ・ドル                                        | 20 歳代 |
| 46 (#74 の息子)           | 1 回                           | 1,230 カナダ・ドル                                      | 10 歳代 |
| 合計(1 回/1 人あたり)<br>23 人 | 44 回 (1 人あたり<br>577.1 カナダ・ドル) | 25,393.4 カナダ・ド<br>ル (1 人 あ た り<br>1,104.1 カナダ・ドル) |       |

表 5.22 ハンターの I D 番号(および図表 4.5 の世帯主番号)、各ハンターが肉を売った回数、収入、年齢階層 (1999 年)

表 5.22 は 1999 年のアクリヴィク村におけるハンター・サポート・プログラムに獲物を売ったハンターの I D 番号、各ハンターが肉を売った回数、収入、年齢階層を整理したものである。この年には 23 人のハンターが延べ 44 回、獲物をハンター・サポート・プログ

ラムに売ったことになる。1回あたりの平均金額は約 557 カナダ・ドルで、ハンター1人あたりがこの年にこのプログラムから得た平均収入は約 1,104 カナダ・ドルであった。

| 年齢階層/<br>収入 | 99<br>カナダ・ド<br>ル未満 | 100 -<br>499 カナ<br>ダ・ドル | 500 -<br>999 カナ<br>ダ・ドル | 1000 -<br>1499 カ<br>ダ・ドル | 1500 -<br>1999 カ<br>ダ・ドル | 2000 -<br>2499 カ<br>ダ・ドル | 2500<br>カナダ・ド<br>ル以上 | 合計人<br>数 |
|-------------|--------------------|-------------------------|-------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|----------------------|----------|
| 10 歳代       |                    |                         | 1 人                     | 1 人                      | 1 人                      |                          |                      | 3 人      |
| 20 歳代       |                    |                         | 2 人                     |                          |                          |                          |                      | 2 人      |
| 30 歳代       |                    |                         |                         |                          |                          |                          |                      | 0 人      |
| 40 歳代       |                    | 1 人                     | 1 人                     |                          |                          | 1 人                      |                      | 3 人      |
| 50 歳代       |                    | 4 人                     | 1 人                     |                          | 1 人                      | 1 人                      |                      | 7 人      |
| 60 歳代       | 1 人                | 2 人                     | 1 人                     |                          |                          |                          | 3 人                  | 7 人      |
| 70 歳代       |                    | 1 人                     |                         |                          |                          |                          |                      | 1 人      |
| 合計人数        | 1 人                | 8 人                     | 6 人                     | 1 人                      | 2 人                      | 2 人                      | 3 人                  | 23 人     |

表 5.23 ハンター・サポート・プログラムに獲物を売ったハンターの年齢階層と収入  
(1999 年、アクリヴィク村)

| 年齢/売っ<br>た回数 | 1 回  | 2 回 | 3 回 | 4 回 | 5 回 | 合計人数 |
|--------------|------|-----|-----|-----|-----|------|
| 10 歳代        | 1 人  | 2 人 |     |     |     | 3 人  |
| 20 歳代        | 1 人  | 1 人 |     |     |     | 2 人  |
| 30 歳代        |      |     |     |     |     | 0 人  |
| 40 歳代        | 1 人  | 1 人 | 1 人 |     |     | 3 人  |
| 50 歳代        | 4 人  | 2 人 |     | 1 人 |     | 7 人  |
| 60 歳代        | 3 人  |     | 3 人 |     | 1 人 | 7 人  |
| 70 歳代        | 1 人  |     |     |     |     | 1 人  |
| 合計人数         | 11 人 | 6 人 | 4 人 | 1 人 | 1 人 | 23 人 |

表 5.24 ハンター・サポート・プログラムに獲物を売ったハンターの年齢階層と獲物を売った頻度(1999 年、アクリヴィク村)

表 5.23 は、1999 年にアクリヴィク村においてハンター・サポート・プログラムに獲物を売ったハンターの年齢階層と収入を表に整理したものである。1999 年には 23 人のハンターがハンター・サポート・プログラムに参加している。特に 50 歳代、60 歳代の参加者が多い点、そして 30 歳代の参加者が皆無である点が特徴といえよう。この表を見る限り、ハンターの年齢階層と収入との間には相関関係がないように思われる。しかし 10 歳代で相対的に収入が高いハンターはシロイルカ猟やセイウチ猟に参加した人たちである。また、60 歳

代のハンターのうち3人がホッキョクイワナやカリブーの肉を売って高収入をあげている点を見逃してはならない。また、収入は低いにしても40歳代以上のハンターの参加者が多いことも注目に値する。

表5.24は、1999年にアクリヴィク村でハンター・サポート・プログラムに獲物を売ったハンターの年齢階層と獲物を売った頻度を整理したものである。大半が1回もしくは2回しか獲物をハンター・サポート・プログラムに売っていないことがわかる。また中高年のハンターは、ほかのハンターよりも狩猟や漁撈に行く回数が多いため、販売回数が多くなる傾向が認められる。しかしながら、年齢と販売回数にも明確な相関関係が見られない。

#### 第4項 ハンター・サポート・プログラムの諸効果と問題点

このハンター・サポート・プログラムによる村人への食料の供給は、村人の中での食物分配の頻度を多くし、活性化させたといえる。村人はひと度肉や魚を入手すると、それは食事を通して、また分与を通してほかの村人へと次々に分配されていく。この分配の実践は、おもに親子、兄弟姉妹、オジ、オバ、イトコ、メイ、オイなど拡大家族の者の間で行なわれるのだが、分配を通して肉や魚が流通する社会関係が確認され、維持されていく。換言すれば、分配という実践が社会関係を維持させ、再生産させているといえる。このようにハンター・サポート・プログラムは、食物分配の活性化によって村人の社会関係の維持・再生産に貢献しているといえる。

ハンター・サポート・プログラムによる食物分配は、獲物を捕獲した者とそれをもらう者との間に村が仲介者として入る。したがって分配のプロセスは、捕獲した獲物を村へ、さらに村からもらい手へというふたつの段階からなる。第1の段階では、ハンターが獲物を村に提供し、村はハンターにその代償を現金で支払う。これはハンターと村との獲物の売買(獲物と現金との交換)である。第2段階では、村が買い上げた獲物を、食料を必要とする村人に無償で提供する。すなわち第1段階は交換、第2段階は分与の形態をとっているが、両者をあわせた全体の流れは、ポランニーがいうところの「再分配」である。この再分配は、現金の使用と結び付いているという点で、新しい形態であるが、その目的や第2段階の分配では慣習的な形態をとっており、かつての食物分配と連続性を持つ実践であると考えられる。イヌイットの間では地元産の肉や魚を現金で売買することは現在でもほとんど行なわれておらず、それらを商品化することに対して根強い抵抗が認められる。にもかかわらず、肉や魚をある意味において商品化するハンター・サポート・プログラムが人々に受け入れられたのは、ハンターが生業活動を継続するために必要な現金にアクセスすることができると共に、村人への食物の無償分配を通して食物分配のイデオロギーを維持することができるからである(Gombay 2005: 125)。

ハンター・サポート・プログラムには、大別すればふたつの効果があるといえるだろう。第1の効果は、このプログラムに参加することや、肉や魚などの獲物を売ることによって、賃金労働に従事していないが、積極的に狩猟や漁撈を行なっている中高年のハンターが少

額といえども現金収入を得ることができることである。さらに、このプログラムで購入された肉や魚は、食料を必要とする村人に無償で提供される。プログラムの予算には限度があるため、常に村人に食料を供給することはできないが、シロイルカの肉やマツタック、セイウチの肉や脂身など個人のハンターでは捕獲するのが困難な文化的な価値が高い食料を村人に提供することができる。また、冬季や春季の食料が比較的欠乏する時期に、ハンターがいない世帯に食料を供給することができる。

アクリヴィク村ではハンター・サポート・プログラムは村人に食料を供給するために利用されているが、そのプログラムのおもな対象(受益者)は寡婦や老人、フルタイムの賃金労働に従事し、狩猟や漁撈に行くことのできない村人であった。これらの人々はプログラムから最も頻繁に恩恵を受けているといえる。次に恩恵を受けている人々は、不漁(猟)のために運悪く食料を得ることができないでいる人々や失業中の人々である。これらのふたつのカテゴリーの人々にとっては、このプログラムは効果的に機能しているといえる。

一方、ハンター・サポート・プログラムが実施される以前にはありえなかった傾向も垣間見えてきた。20歳代から30歳代半ばの年齢層の一部に、このハンター・サポート・プログラムから食料となる肉や魚をもらう一方で、食料生産にはほとんど貢献することがない人々が出現している。この一部の人々は狩猟や漁撈に従事することも少ない上に、真剣に賃金労働の職を探すこともしない。これらの人々はハンター・サポート・プログラムや家族、親族に食料を依存している。彼らはイヌイットであるが故に、ほかの人から食料をもらうことは躊躇することもなく当然の権利と考えている一方で、人にあげることで肉や魚を物理的に持っていないので、ほかの人と肉や魚を分配する頻度が少ない。しかし彼ら自身はこのことを問題であるとは考えていない。このように食物分配に関する規範と、若者の行動や認識との間には落差が生じてきているのである。ハンター・サポート・プログラムの実施は、今後この問題を助長するかもしれないという問題点をはらんでいる。

## 第9節 食物分配の特徴と歴史的な変化について

本章では、ハンター間の獲物の分配、ハンターから村人への分配、村人間での食物分配、食事を通しての分配、キャンプ地での分配、村全体での共食、村外との分配、特定の二者間での分配、ハンター・サポート・プログラムによる分配について記述してきた。ここでは、アクリヴィク村で観察された食物分配の特徴を指摘した後、その変化と連続性について言及しておきたい。

ハンター・サポート・プログラムによる分配は、1980年代の半ばに意図的に導入されたものであり、食物分配の新しい形態である。それ以外のさまざまな食物分配は、1980年代においてすでにアクリヴィク村のイヌイットによって慣習として実践されていた分配である。

現代のアクリヴィク村の村人は、イヌイットは誰とでも食物を分かち合うと強調するとともに、生きていく上で食物分配の制度はなくてはならないと考えている。実際に行われている個人間での食物分配を参与観察すると、確かに親族以外の村人にも食物分配を行う

こともあるが、大半の食物分配は基本的に拡大家族内での食物の分与である(注 15)。また、興味深い点は、村の中では拡大家族内で食物分配が行われる傾向があるのに対し、狩猟地やキャンプ地においては拡大家族関係がなくてもその場に居合わせた人が食物を分配したり、食事を共にしたりする傾向がある。

ここで村人たちの食物分配に関する記憶や言説をもとにその変化と連続性について見てみたい(注 16)。食物分配の内容や形式は変化しようとも、食物分配や寛容さの重要性については大きな変化は見られない。

アクリヴィク村のある古老(1906 年生まれ)は、次のように語っている。

「お前がいかに勝っているかをほかの人に思い知らしめるために食べ物を、利用するな。食べ物とは分かち合われるためにあるのだ。それは腕のよいハンターであることを示しているのではなく、すべての人によって分配されるべきであることを意味している。食べ物を分配することによって同胞であることを喜んで示せ、なぜならそれが同胞であることを示す唯一のやり方なのだから。イヌイットはどこであろうとも食べ物を分配した。ある集団がほかの人が食料を持っていないことを聞き知ると、別の村であろうとも食べ物を持っていったものだ。」(Avataq Interview with Salemonie Alayco, Snr., of Akulivik, 1985)

この言説は、イヌイットにとって食物分配が重要な実践であるとともに、食物分配することは仲間(同胞)であることを象徴的に示す方法であることを指摘している。

アクリヴィク村のある若者は、私に次のように語った。

「私は南(カナダ南部のカナダ人社会)に住むことはできない。というのも南では食べ物を買わなければならないからだ。食べ物は無料ではない。長い間、南に住むと私は餓死してしまうかもしれない。イヌイットはお互いに頼りあっている人々だ。白人たちはそうではない。」(岸上のフィールドノート 1986)

上述の言説は 1980 年代半ばに記録されたものであるが、イデオロギーのレベルでは大きな変化は見られない。しかし、実際の分配については、食物を分配しない若者が出現している。1998 年 1 月当時、67 歳のある男性は次のように語った。

「冬にアザラシが 1 頭とれると、キャンプのすべての世帯に少量の肉でも分配した。食物分配は生きるための唯一のやり方だった。食物分配は食料を持ってない人や狩猟に出かけることができない人の面倒を見る。

スノーモービルやカヌー、狩猟小屋のおかげで、むかしと比べると地元で捕獲できる食料の量は多くなった。ハンター・サポート・プログラムによってさらに多くの肉を手に入れることができるようになった。その一方で、何人かの若者は食物分配の慣習を守らない

ようになった。若者は白人の食べ物を欲しがっている。」(Sakiriasie Nuppatuk, Snr. 1998 年 1 月 28 日インタビュー)

このように若者の中に食物分配をしぶる人がいることがわかる。また、あるアクリヴィク村のイヌイットが 1980 年代にクジュアラピク村のイヌイットの家で食事をしたところ、食後に現金を要求され驚いたという。彼はイヌイットの生活が変化しつつあることを実感したと私に語った。次に、食物分配の変化を村の老人たちの言説に基づいて見てみよう。

1) 「生協はほかの村にホッキョクイワナを売っている。また、ハンターはハンター・サポート・プログラムに獲物を持っていけば、現金を得ることができる。アザラシの肉やカリブーの肉を販売することは、現金がない時には大問題となる。」(Sakiriasie Nuppatuk, Snr. 1998 年 1 月 28 日インタビュー)

2) 「昔、食物がなくなったときには、キャンプの誰にでも頼んでもらうことができた。現在では、食べ物がなくなるときには、電話をかけたり、FM ラジオ放送を利用して村人に食物をくれるように頼むようになった。人々が肉や魚を持っていれば、頼んでもらうことができる。しかしアザラシが 1 頭しかないときには、村全体で分配することはできない。現在、村が非常に大きくなったので 1 頭のアザラシですべての人々の口を満たすことはできない。」(Nowja Qinuajuak 1998 年 1 月 26 日インタビュー)

3) 「村人は村の FM ラジオ放送を通して、ほかの村人に肉や魚をくれるように頼むようになった。ほかの人の所を直接訪問し、もらいにいくことがなくなった。」(Lucassie Ammamatuak 1998 年 1 月 30 日インタビュー)

4) 「昔はアゴヒゲアザラシやシロイルカは男女によって食べてよい部分とよくない部分があった。現在ではそのような規制はなくなった」(Annie Aupaluk 1998 年 2 月 3 日インタビュー)

5) 「昔は、獲物をとるとキャンプ全体を見てから、それに合わせて肉を分配した。獲物を仕留めたハンターは少しばかり多くの肉を取るが、ほかの世帯には平等に分配した。誰かが取りにこなければ、持って行ってあげた。」(Annie Appaluk 1998 年 1 月 29 日インタビュー)

6) 「誰とでも分配する。1 頭のアザラシではコミュニティー全体で分配するのには十分でないときもあったが、そのときには小片にして分け合った。すべての人に食料がいきたるように心を使った」(Lally Arnauraq Alayco 1998 年 1 月 27 日インタビュー)

7) (1940 年台以前にピーターヘッドボートを利用してシロイルカやセイウチの狩猟にいった場合) 「ピーターヘッドボートを利用すると大量の肉を運ぶことができた。ボートに乗り込んだハンターはセイウチの肉や牙をほぼ平等に分配した。キャプテン(ボートの所有者)であることも関係なかった。村に帰ると、未亡人や老人など狩猟に行かなかった人も少ないが分け前を得た。残りはイヌのえさになった。」(Nowja Qinuajuak 1998 年 1 月 2 日インタビュー)

村の古老の言説から見ると、食物分配の変化は小規模なキャンプ生活をしていた状況から大きな定住村落での生活への変化と深くかかわっているといえよう。さらに、ハンター・サポート・プログラムによる食物分配は、ランド・クレーム締結後に、当時の経済的状況にイヌイットが適応するために制度化したものであるが、食物を必要とする村人に無償で食物を提供することが基本となっている。この点において、それ以外の慣習的な食物分配の多くと共通性がある。

ある古老は、私に「食物分配は唯一のわれわれが生き残るための方法だ」と語り、食物分配は現代のイヌイット社会においても必要な実践であることを強調した。現代のイヌイット社会では、さまざまな食物分配が実践されているが、もっとも頻度の高い食物分配は、日々の食事を通しての分配である。これは現代の食物分配の特徴のひとつであろう。



## 第6章 検討と結論

この最終章では、カナダ・イヌイト社会のこの 100 年余りの変化と現状について要約した後、食物分配の実践をその中に位置付けながら、形態や機能の変化、実践と社会の再生産との関係について検討を加える。その上で、本研究の成果を要約する。

### 第1節 カナダ・イヌイト社会の変化と現状

カナダのケベック州極北地域のイヌイトは、1850 年頃に直接、毛皮交易にかかわり始めたが、そのかかわり方がよりいっそう深くなったのは同地域にハドソン湾会社やレヴィヨン・フレール社の交易所が設置され始めた 1910 年頃以降である。この地域でのおもな交易品はホッキョクギツネの毛皮であった。1960 年代以降はそれにアザラシの毛皮が加わった。イヌイトは毛皮交易を通して、欧米社会(特にカナダ社会)と経済的につながり、毛皮を提供する見返りとして、鉄製品や狩猟道具、食料品、布地、衣類などを手に入れた。毛皮価格の変動によって、イヌイトが入手できる物資の量や質も変化した。毛皮交易は 1850 年頃から 1980 年代前半までにかけて狩猟・漁撈活動に基盤をおく彼らの生活を効率よく維持させる歴史的な役割を担ったといえるだろう。この過程で形成されたのが第2章で紹介した生業経済システムである。

1950 年代から始まる定住化と定住村落での生活、カナダ政府による国民化や経済的な支援、そして滑石彫刻の導入による新たな収入源の出現によって、イヌイトの生活は世界システム(地球規模で展開する資本主義経済)や国家との結び付きをますます深めていった。1975 年には「ジェームズ湾および北ケベック協定」が締結され、ケベック州内でヌナヴィク地域のイヌイトは先住民として政治的な自律の道を歩み始めた。

1983 年にはヨーロッパ共同体(旧 EC、現在の EU)が動物愛護運動に同調し、アザラシの毛皮の輸入を全面的に禁止した。このため、イヌイトにとって重要なヨーロッパの毛皮市場が崩壊した。この結果、イヌイトはアザラシの毛皮を高値で売ることができなくなり、ハンターは重要な現金収入源をひとつ失った。したがって 1983 年以降は、家族の現金収入、生活補助金、福祉金、滑石彫刻などからの収入を利用して狩猟・漁撈活動を行わざるをえなくなったのである。このような事情で、現金を必要とする生業活動を従来通り活発に実施することが困難になった。一般的な傾向として狩猟・漁撈活動に従事する時間や頻度は低下し、狩猟・漁撈活動の個人化や世帯化が進展している。

現在のイヌイトの生業活動や生活は貨幣経済の上に成り立っている。さらにその貨幣経済の内実を見ると、1980 年から 2001 年にかけての村の総収入のほとんどはカナダ政府やケベック州政府が直接的もしくは間接的に支出している資金である。滑石彫刻が本格的に開始された 1950 年代のプヴィルニツック村時代の収入と比較すると、イヌイト世帯の政府支出金への依存度は増大していることがわかる。これはまさにロバート・ペインが「福祉植民地主義」(welfare colonialism)(注 1)と名付けた状態の進展であろう(Paine 1977)。

しかし、それは一方では、第4章と第5章で示したようにイヌイットの活動や生活の自主的な再生産を可能にしてきた。特にヌナヴィク地域のイヌイットは外部から入ってくる現金に依存しながら、「ジェームズ湾および北ケベック協定」(1975)とカナダの1982年憲法のもとで、それをイヌイット流に使用することにより彼らが文化的に高い価値を置いている狩猟・漁撈活動や食物の分配を実践し続けているのである。特に1980年代半ば以降は、ヌナヴィク地域のイヌイットは、賃金労働からの収入に加え、カナダ政府やケベック州政府からの補助金やそのほかの支出金を利用して、狩猟・漁撈活動や食物分配を積極的に継続してきたので、現在の状況は、1970年代までの「福祉植民地主義」的な状況と同じではない。オーストラリア先住民社会に関してニコラス・ピーターソン(Peterson 1999)が指摘したのと同様に、1970年代後半からイヌイットは資金面では以前と同じように国家に依存しつつも、政治的に自立性を獲得し、狩猟・漁撈活動や食物分配を通して社会関係を再生産させてきたといえよう。

このような肯定的な社会・経済変化の一方で、イヌイット社会において性的暴力事件や青少年の自殺の多発という問題、アルコールや薬物への依存症の問題、職不足、都市への人口移動、経済的社会階層分化の進展など否定的ともいえるような社会・経済変化も出現した(Mitchell 1996; Duffy 1998; Kishigami 1999; Stern and Stevenson 2006; 岸上 2005d)。

## 第2節 食物分配の形態とその変化

私は第2章において食物分配が開始される契機(ルールによる、自主的、要求による)と食物の流れ(分与、交換、再・分配)というふたつの軸に基づけば、食物分配の形態には9種のタイプが存在することを提示した。その9の類型とは、(1)「ルールによる分与」、(2)「自主的な分与」、(3)「要求による分与」、(4)「ルールによる交換」、(5)「自主的な交換」、(6)「要求による交換」、(7)「ルールによる再・分配」、(8)「自主的な再・分配」、(9)「要求による再・分配」である。ここでは、この枠組みを利用して第5章で提示したアクリヴィク村の食物分配の形態とその変化について検討する。

### 第1項 ハンター間の食物分配

ハンター間での獲物の分配は、ふたつの形態に大別できる。第1は、狩猟場におけるアザラシやカリブーなどの分配である。獲物を仕留めたハンターは、獲物の毛皮や肉などを多少多めに取るが、残りは狩猟に参加したハンターや解体場所に居合わせたハンターの間で分配される。形態としては、獲物を仕留めたハンターからそのほかのハンターへの分与である。これはタイプ(2)「自主的な分与」である。

第2は、私有の大型ボートを利用したシロイルカなど大型獣の分配である。大型ボートに乗船したハンターは共同でシロイルカ猟に従事し、狩猟場で捕獲したシロイルカを解体した後で、シロイルカのマッタクや肉は大型ボートの貯蔵庫にプールされる。村に持ち帰られてから、船長の分配の指示に従いながら、船長自身と乗船したハンター、ボートの

共同所有者へとマツタックや肉がそれぞれほぼ平等に分配された。これはタイプ(8)「自主的な再・分配」である。しかも形態上は、ポランニーの「再分配」に該当する。

このようにハンター間での獲物の分配には、「自主的な分与」と「自主的な再・分配」(「自主的な再分配」)が観察された。

## 第2項 ハンターから村人への食物分配

ハンターの両親や祖父母が存命であれば、ハンターは通常、獲物をいずれかの世帯へもっていく。これはタイプ(2)「自主的な分与」である。そしてその世帯でほかの家に住む家族や親戚の人たちとともに昼食や夕食をとることが多い。ハンターの両親や祖父母がいない場合には、ハンターは獲物を自らの家に持って帰り、自宅のほかの家に住む家族や親戚の人たちとともに食事をとることが多い。

ハンターは獲物が多くとれた場合には、食物を必要とする兄弟姉妹、オジ、オバ、および親族ではない老人や寡婦に、獲物を自主的に分与することがある。これはタイプ(2)「自主的な分与」である。

また、食物を必要とする別の世帯の家族(結婚した子供の家族)、親族、友人、近所の者が、獲物を仕留めたハンターの所に獲物の一部をもらいにくることがある。これはタイプ(3)「要求による分与」の形態の一種である。ただし、イヌイットの場合には、オーストラリア先住民のように言葉や態度で強く主張するのではなく、「あれば頂きたい」というお願いに近い。ハンターは断ることもできるが、獲物の肉や魚が残っていれば、通常は分与する。

このようにハンターから村人への食物分配は、「自主的な分与」や「要求による分与」の形態をとることが多い。

## 第3項 村人間の食物分配

自分の世帯に食物がなくなると、イヌイットは世帯を別にする家族や親族のところに食事に行くか、そこを訪ねて食物をもらってくることが多い。それでも食物が手に入らないときは、友人や隣近所に食物をもらいに行く。いった先に食物があれば、その持ち主は、もらいにきた人に、相手の世帯員数や自らが所有している肉や魚の量を考慮に入れつつ肉や魚を分与する。これは一種の「要求による分与」であるが、この要求は打診やお願いといった程度のものである。分与するかどうかや分与する分量を決めるのは分与する側にある(注2)。

ある世帯が大量の肉や魚を手に入れた場合には、主婦が村の FM ラジオ局に電話をかけて肉や魚が欲しい人は取りにくるように村人へ知らせることがある。この放送を聞いた村人の中で肉や魚が欲しい人はその主婦の所にもらいに行く。その主婦はもらいにきた人に分与する。また、主婦が特定の人物に電話をかけて、肉や魚を取りにくるように知らせることもある。この形態は、タイプ(2)「自主的な分与」である。

このように、村の中での村人間の食物の分配でも、「要求による分与」や「自主的な分

与」の形態をとる傾向が認められる。

#### 第4項 食事を通しての食物分配

##### (1) 家庭での食事を通しての食物分配

現在、もっとも頻繁に行われている食物分配は、食事を通してのものである。エゴの両親や祖父母が存命で同じ村に住んでいる場合には、エゴとその配偶者や子供たちはエゴの両親や祖父母のところで昼食や夕食をとることが多い。言い換えれば、年長者(拡大家族の長)のところにその子供の家族がやってきて食事をとることが多い。この場合、食物は、年長者からその家族、親戚、そのほかの者へと流通する形態をとるため、タイプ(2)「自主的な分与」となる。しかし、ここで食べられている肉や魚は、その年長者の子供や孫たちが捕獲したものであることが多い。このため、全体の流れは、子供や孫たちが捕獲した獲物や魚が、一度、親や祖父母のところに集められ、それが再度、年長者の家族や親族、それ以外の者へと分配されることになる。これは、ポランニーの「再分配」の形態であり、類型モデルではタイプ(8)「自主的な再・分配」の形態である。

また、エゴの世帯に多量の食べ物がある場合には、電話や村の FM ラジオ放送を通して世帯外の特定の人や不特定多数の人を招くことがある。これは、タイプ(2)「自主的な分与」に相当すると考えられる。

さらに、エゴの世帯や近親族の世帯に食物がない場合には、食物がありそうな親族や、友人、知人の世帯を食事時に訪ねる。その世帯に十分な食物があれば、エゴは食事に参加することができる。これは、非常に弱い要求であるが、タイプ(3)「要求による分与」と分類することができる。通常、食事をしてよいかという質問はしないが、食事を用意した側が、食事をするように促すこともある。これは、「自主的な分与」であろう。

##### (2) キャンプ地や狩猟中における食事を通じた分配

キャンプ地や狩猟中における食事の場合には、そこに居合わせた人は自由に参加することができる。これは、暗黙のルールのようにもあるが、ホスト側は参加者を拒否することもできるので、一種のタイプ(2)「自主的な分与」といってよいだろう。

##### (3) 村全体での共食

イースターやクリスマス、夏の始まる日、新年の機会に村人が全員集まり、共食が行われる。この食事会を組織するのは村の娯楽委員会や教会の委員会である。この共食会を通しての食物分配は、村人が捕獲した魚や動物の肉、ハンター・サポート・プログラムを利用して村人から購入した食物を村や教会が村人に食物を与えるという形態をとっているため、タイプ(8)「自主的な再・分配」と分類することができる。そしてそれはポランニーの「再分配」に該当する。

#### 第5項 村外との食物分配

村外の人に食物を旅人に託して送ったり、村外の人から食べ物を送ってもらったりする場合には、三つの形態が見られる。モンリオールやほかの村に住む家族や親族に村でとれるホッキョクイワナやカリブーを冷凍して送る場合がある。この場合には、タイプ(2)「自主的な分与」という形態をとる。また、村外の家族や親族、友人に頼まれ、それらを送る場合があるが、これはタイプ(3)「要求による分与」である。もうひとつは、ほかの村に住む友人や親族が、アクリヴィク村にはあまりないベリー類などを送ってくれる場合がある。この場合、受け取った人は、送り手の村では入手が困難なホッキョクイワナなどを返礼として送ることがある。これは即時的ではないが、遅延的な食物の自主的な交換であるといえる。この場合には、タイプ(5)「自主的な交換」という形態をとる。家族・親族間では一方向的な分与という形態をとるが、非親族間の場合には交換という形態をとる傾向がある。

村外との食物分配は、「自主的な分与」と「要求による分与」、「自主的な交換」の形態である。

#### 第6項 特定の二者間での食物分配

同名者の間での食物分配や儀礼的な助産人と子供との間の食物分配は、特定の二者間での食物やモノの即時的もしくは遅延的な交換という形態をとる。同名者の場合には、食物や道具をプレゼントし合うか否かは当事者の自主的な判断に任されているので、タイプ(5)「自主的な交換」である。一方、儀礼的な助産人と子供との間の食物分配には、そうすることが望まれているということがあるため、タイプ(4)「ルールによる交換」といってよからう。

これ以外に、二者間で食物やモノが交換される事例が見られた。村の老人や寡婦に獲物の肉や魚を頻繁に分与するハンターに対して、老人や寡婦がライフルの銃弾や手袋などを感謝の意を表して時折プレゼントすることがある。ハンターから見ると分与であるが、それに対する感謝としてハンターにモノが意図的に与えられているため、タイプ(5)「自主的な交換」といえるかもしれない。ただし、ハンターは見返りを期待して分与を行っているのではない点を強調しておきたい。

アクリヴィク村で観察される特定の二者間の食物分配は、「自主的な交換」や「ルールによる交換」の形態をとっている。

#### 第7項 ハンター・サポート・プログラムを利用した食物分配

ハンター・サポート・プログラムによる食物分配は、ふたつのプロセスから形成されている。第1のプロセスでは、獲物の肉や魚もしくは獲物をとるというハンターのサービスに対して村から現金で代償が支払われる。これは獲物もしくはサービスと現金の交換である。第2のプロセスでは、村に集められた食物が村人の一部もしくは全員に無償で分与される。第1のプロセスの形態は「ルールによる交換」であり、第2のプロセスの形態は「ルール

による分与」であるが、両者からなる一連の流れを、本論文で提示した類型で分類すると「ルールによる再・分配」であるといえる。しかもこの分配は明らかにポランニーの「再分配」であるといえる。

#### 第8項 類型から見た特徴

以上において、私が提起した「食物分配」の類型を用いて、アクリヴィク村の食物分配を分析したが、それを整理したい。

タイプ(1)「ルールによる分与」は、かつてのアクリヴィク村のイヌイットの間では存在していたが、現在では、ほとんど見られない。

アクリヴィク村のハンター間での獲物の分配や、ハンターから村人への肉や魚の分配、村人間での食物の分配、食事を通しての食物の分配は、タイプ(2)「自主的な分与」の形態をとることがほとんどである。ただし、分配は、もらう方のお願いや依頼によって開始される場合もあり、非常に弱い形の要求の後に、食物の所有者が分配する場合が見られる。かかる意味で弱い形のタイプ(3)「要求による分与」も存在しているが、それはピーターソンが指摘している「要求による食物分配」と比べれば、かなり弱いものである。

アクリヴィク村にはかつてのコパー・イヌイットやネツリク・イヌイットのようなアザラシ肉交換パートナー関係(Damas 1972a)は存在しないが、儀礼的助産人と子供たちの間や同名者の間で、ハンターと老人や寡婦との間で、特定の人間間での1対1の交換が行われている。アクリヴィク村ではこれらの交換は、経済的な効果をほとんど伴わないシンボリックなものである。形態としては、タイプ(4)「ルールによる交換」やタイプ(5)「自主的な交換」に相当する。タイプ(6)「要求による交換」はアクリヴィク村では見られない。

アクリヴィク村では、ハンター・サポート・プログラムによる食物の第2次分配がタイプ(7)「ルールによる再・分配」に該当する。これは1980年代半ば以降に実施されるようになった新たな食物分配形態である。また、村の教会委員会が組織するクリスマスやイースターの祝宴は食物の「自主的な再・分配」の形態をとる。これらの村全体への分配や共食は、ポランニーの「再分配」の事例であるといえる。すなわち「再・分配」の一亜種である「再分配」という形態が存在している。

タイプ(8)「自主的な再・分配」は、私有大型ボートによるセイウチやシロイルカの狩猟の場合に見られる食物分配に該当する。大型ボートに同乗したハンターが捕獲した獲物を船長が、船長自らとハンターに分配した後、村人に分配する。船長もハンターであるが、肉の捕獲者であるとは限らない。しかし、船長は自らの裁量で分配の量や部位を決め、ほかのハンターが捕獲した獲物をハンターやそれ以外の肉が欲しい人に分配している。この場合は、ポランニーの再分配と見なしてもよい事例であるといえる。

父母や祖父母が別の世帯を構えている場合は、息子や孫のハンターは獲物の全部もしくは一部を父母や祖父母の家に持っていき、ハンターの家族はそこへ食事に行くことが多い。この場合、別の世帯に住む拡大家族の成員がその長である両親や祖父母の場所(中心)に集ま

り、食事をとるので、食物が成員に再分配されることになる。この場合は、ポランニーの再分配とみなすことができる事例であるといえる。

タイプ(9)「要求による再・分配」の形態の食物分配はアクリヴィク村ではほとんど見られない。

以上を表にしたものが、次の表 6.1 である。

|                                                              | ルールによる                         | 自主的な                                                                  | 要求による                                 |
|--------------------------------------------------------------|--------------------------------|-----------------------------------------------------------------------|---------------------------------------|
| 分与(giving)<br>A -----> B                                     | (タイプ1)<br>かつては存在したが、<br>現在はない。 | (タイプ2)<br>ハンター間の分配、ハンターから村人への分配、村人間での分配、キャンプ地・狩猟中の分配、村外との分配、食事を通しての分配 | (タイプ3)<br>ハンターから村人への分配、村人間での分配、村外との分配 |
| 交換(exchange)<br>-----><br>A                      B<br><----- | (タイプ4)<br>儀礼的助産人と子どもたちの儀礼的交換   | (タイプ5)<br>同名者間の交換、村外との分配                                              | (タイプ6)<br>ほとんど見られない。                  |
| 再・分配<br>(re-distribution)<br>A C -----> B                    | (タイプ7)<br>ハンター・サポート・プログラムによる分配 | (タイプ8)<br>個人所有の大型ボートの船長による分配、村全体での共食、拡大家族グループの家長宅での食事                 | (タイプ9)<br>ほとんど見られない。                  |

表 6.1 20 世紀末のアクリヴィク村における食物分配の類型表  
(A:ハンターもしくは肉の所有者 B:もらい手 C:ハンター以外の分配者、矢印は食物が流れる方向を示す)

以上からアクリヴィク村の現在の食物分配と変化について次のような特徴を指摘できる。

①アクリヴィク村の食物分配には「分与」、「交換」、「再・分配」という3つの基本的な形態が存在しているが、タイプ(2)「自主的な分与」と非常に弱い要求に基づくタイプ(3)「要求による分与」、タイプ(8)「自主的な再・分配」が中心的な形態である。タイプ(1)「ルールによる分与」はかつて存在したが、現在は存在しない。すなわち、分与と再・分配が中心的な形態であり、交換の形態をとるものは少ない。このような点を考慮すると、「交換」や「互酬性」を記述・分析概念として、使用する根拠は見当たらない。さらにこの見解は、バード＝デイヴィッドの「分配は分与である」(Bird-David 1990)やウッドバーン

の「分配は交換ではなく、再・分配である」という主張(Woodburn 1998)を部分的にせよ支持しているといえよう。イヌイットにとって重要なことは、必要に応じて食物をほかの人に与えたり、ほかの人からもらったりすることであって、ほかの人と交換することではない点である。また、「交換」や「互酬性」に符合するようなデータをアクリヴィク村の私自身の調査からは見つけ出すことができなかった。これまで、狩猟採集民の食物分配を「交換」とみなし、「互酬性」の視点から記述し、分析することが中心であったが、本論文で提示したようにイヌイットの食物分配の基本形態は「分与」とポランニーの「再分配」であるので、これまでの見方を変える必要があると考える。

②アクリヴィク村には、頻度は低いながら儀礼的交換(タイプ(4)とタイプ(5))の形態をした食物分配が存在している。また、村外の友人や知人に、ホッキョクイワナを送るとブルーベリーなどが返礼として送られてくることがあるが、これは自主的な交換とみなすことができる。

③大型ボートを利用したセイウチ猟やシロイルカ猟に関して、獲物の再・分配(タイプ(7)とタイプ(8))が見られる。アクリヴィク村ではタイプ(7)は1980年代以降に出現した。タイプ(8)はかつてのウミアック(大型皮張りボート)を利用した狩猟の現代版といえよう。教会委員会が組織するクリスマスやイースターの祝宴は再・分配の形態をとっている。これらの形態は、ポランニーの「再分配」に相当すると考えられる。

④「再分配」の形態は、ハンターが獲物を、彼の両親や祖父母に持っていき、さらに食事や分与を通してほかの人々に分配されるという一連の流れにも認めることができる。このように、また、バリクシ(Balikci 1964: 34)やダマス(Damas 1972a: 237)がすでに指摘しているように「再分配」の形態は、以前からイヌイット社会に存在していた可能性が高い。したがって私が提起した食物分配の類型に「再分配」の概念を追加する必要がある。

⑤アクリヴィク村において「再・分配」として分類された事例のほぼすべてはポランニーの「再分配」の形態である。

⑥アクリヴィク村では、「要求による分与」タイプと分類されうる食物分配も観察されるが、これは要求というよりも弱いお願いに近い。

⑦食物分配の変化について述べれば、タイプ(1)が消滅し、タイプ(7)が出現している。

### 第3節 食物分配の機能および世界観や社会的距離との関係

食物分配の機能については、複数の機能が指摘されてきたが、多くの研究は発生の原因や現在実践されている理由に着目し、食物分配の存在理由をひとつだけの機能に還元させようとする傾向が認められる。文化・社会人類学におけるおもな仮説は、(1)経済的な保険機能、(2)物質的な平準化機能、(3)社会関係の創出・維持・連帯機能、(4)与える側の名声を生み出す機能、(5)世界観との対応、(6)社会的な距離との関係である。ここでは、これらの仮説をアクリヴィク村の事例で検討してみたい。



## 第1項 食物分配の諸機能

ここでは、狩猟採集民社会の食物分配の諸機能に関する仮説を、アクリヴィク村の調査事例で検討する。

### (1) 経済的な保険機能

食物分配の経済的な保険機能とは、食物分配は狩猟の失敗の危険性や狩猟能力や獲物の量における偏差を減少させる一種の保険のようなものであるという仮説である。獲物をとることができなかった人やとることの下手な人は、腕のよいハンターから獲物を分けてもらうことによって生き延びる確率を高くすることができ、ひいては集団全体が生き延びることができるというものである。この仮説は、ほかの極北地域における調査によっても支持されている(Wenzel 1991, 1995, 2000; Smith 1988 など)。村の老人たちは、食物分配が唯一の生き残るための手段であると主張し、地元でとれた魚や動物の肉を金銭で売買することに断固として反対していた。村人の言説では、食物分配には経済的な保険機能があることを支持しているが、アクリヴィク村の事例では、直接この仮説を数量的に検証することはできなかった。

アクリヴィク村では腕のよいハンターが多くの肉や魚を家族やそのほかの村人に提供しており、肉や魚の分配による流れには偏差が見られる。アクリヴィク村のイヌイットの生活は、現在ではケベック州民として保障されており、極端な見方をすれば食物分配の実践がなくても福祉金によって加工食品を購入し、食べることができる。しかし、多くのイヌイットにとって、カリブーの肉やシロイルカのマツタック、ホッキョクイワナ、カナダガン、ハクガン、ライチョウなどは彼らの舌を文化的に満足させる食べ物である。ハンターが自分の世帯や家族にいないければ、それらは食物分配によってしか入手することができない。現在のアクリヴィク村では、食物分配は生協などで現金を利用して購入することができないカントリー・フードを入手する上で重要な手段である。

アクリヴィク村ではコミュニティーの一成員と認知されている限り、食料や現金がなくても食物分配やほかの世帯の食事に参加することによって食べ物を入手することができる。確かに腕のよいハンターも獲物や食料がない時には家族や親族、友人から食べ物を分けてもらっているが、ほとんどの場合において腕のよいハンターは食物を提供する立場にあり、食物を受け取った者からは物質的な返礼(みかえり)を受けることはほとんどない。アクリヴィク村の現在の事例で重要な点は、食物分配は食料を持っていないイヌイットにとって有利に機能する制度であるということである。

### (2) 物質的な平準化機能

物質的な平準化機能とは食物分配は持っている人が持っていない人に食料を与えるので、両者の差は縮小されるため、平準化されるというものである。また、この実践は、政治的な平等主義が重んじられる狩猟採集民社会のエートスを実現するものである(Woodburn 1981)。

キャンプ地や狩猟集団内では獲物や食料を頻繁に分配することによって、すべての世帯に食料が行き渡るとともに、世帯間での食料の量的な平準化が見られる。一方、村の中で行われている食物分配はおもに拡大家族内で実践されることが多いため、各拡大家族内では平準化が見られるものの、拡大家族間では食料の量や貧富の差は存在し続けるといえるよう。このためイヌイット社会では個人単位ではなく、拡大家族集団を単位とした階層化が進みつつある。

しかしまた、アクリヴィク村ではハンターや村人からの老人や寡婦への食物の分配によって、肉や魚などの食物が、拡大家族集団の境界を超えて、村中の世帯に広く行き渡るようになってきている。さらに、第5章第8節で提示したようにアクリヴィク村ではハンター・サポート・プログラムを利用して、イヌイットの世帯にできるかぎりシロイルカのマットックやセイウチの肉、カリブーの肉、ホッキョクイワナを提供している。この村による食物分配は、できるかぎり全世帯に平等に食物が行き渡るように村の係員によって配慮がされており、世帯レベルでの食物の平準化機能が認められる。

以上のようにアクリヴィク村における食物分配には、食物所有の平準化機能が認められる。

### (3) 社会関係の創出・維持・連帯機能

食物分配は、与え手からもらい手に食物が渡されることにより、この両者の間に関係が創出されたり、維持されたり、連帯が生み出されたりする機能があると指摘されている。では、アクリヴィク村の事例では、どのようにいえるのか。

アクリヴィク村におけるほとんどの食物分配は、拡大家族関係、同名者関係、儀礼的助産人と子供との関係など既存の関係に基づいて行われており、食物分配が新たに関係を作り出すことは少ない。同じ理由で、非親族間の家族や個人の同盟を作り出すために、食物分配が意図的に利用されているという仮説(Damas 1972b; Guemple 1972b)も支持するには証拠が少なすぎる。一方、日々の食物分配により食物が特定の社会関係に沿って流通するため、その関係が客体化される。したがって、その実践を通して既存の関係を確認させ、維持させる機能があることは明白である。さらに、その裏返しとして、意図的に特定の人と食物分配をしないというのは、既存の社会関係を壊す機能がある(注3)。

1960年代以前、すなわちイヌイットが定住化する以前の時期には、狩猟・漁撈活動への参加やキャンプ生活の中で、拡大家族関係が機能し、再生産されるという状況があった。しかしながらスノーモービルや船外機付きカヌー、高性能ライフルなどの利用により狩猟・漁撈活動の単位が少人数化、世帯の核家族化、キャンプの期間の短縮や回数の減少などのために、拡大家族関係が機能する場面が減少した。しかしながらこうした状況の中においても、拡大家族の成員による食物分配の実践は、拡大家族関係の再生産に深くかかわってきたと考えることができる。

アクリヴィク村の事例に基づけば、食物分配には既存の社会関係の確認および再生産の

機能や社会関係を壊す機能があるといえよう。一方、新たな社会関係を創出するために意図的に食物分配が利用されている事例はほとんど見られなかった。

#### (4)与える側の名声を生み出す機能

すでに与え手には食物分配は、直接的な利益をもたらさないことを指摘したが、与える側は受け手側から感謝や名声、敬意を受け取る可能性がある。オーストラリア先住民を研究したピーターソンらは、ハンターは獲物を多数捕獲しても、規則によって分配されるためにハンター自身は直接的な恩恵を受けないが、その代わりにハンターとしての名声や権威を獲得している点を指摘している(Altman and Peterson 1988: 80; Peterson 1993)。1960年頃に現在のサルイット村を調査したグレバーンは、イヌイットが寛容さと威信との間には相関関係があると主張していた、と報告している。しかし、その村において村人から寛容な人物や家族として威信を獲得していた人物は、日々の食物分配ではなく、時々、明確に人目に付くような肉の分配をほかの村人に対して行うことによって(寛容であることをシンボリックに操作することによって)、名声や威信を維持していたという(Pryor and Graburn 1980: 234-235)。1990年代の終わりにイカルイットで調査を実施したシールズは、いつも多くの肉や魚を親族やほかの村人に分配しているイヌイットは社会的な名声や尊敬を集めることができるが、所有している食物をほかの人に分与しないイヌイットはけちな人間だといって悪評を得ると報告している(Searles 2002)。最近では、進化生態学者が、狩猟採集民社会のハンターは食物分配によってコミュニティのほかの成員から名声や威信を得ることができ、これがハンターに利他的な行動をとらせる主要因のひとつであると主張し始めている(Zahavi and Zahavi 1997; Bliege Bird 1999; Gurven, Allen-Arave, Hill and Hurtado 2000; Smith and Bliege Bird 2000; Bliege Bird, Smith and Bird 2001; Gurven n.d.)。

アクリヴィク村では、獲物や食べ物をもらっても特に感謝の念を言葉や態度で示すことは期待されていない。ほかの人に分与することやほかの人からもらうことはイヌイットにとって日常的にあたり前の実践である。また、村の老人たちは、とった獲物はみんなで分かち合い、相手より自らを優位にさせる手段としては使うなと繰り返し、話していた。

1998年当時、アクリヴィク村の村長であったアドミー・アレイコは、私の滞在先の主人について多量の肉や魚を村の古老や寡婦のために捕獲し、分与しているので、多くの村人が尊敬していると私に語ったことがある。家族や親族でない老人や寡婦に獲物を頻繁に分与するハンターは、受け取り手のみならず、村人からも尊敬され、名声を得ることは紛れもない事実である。一方、食べ物を分与する側から見ると、例えば私の滞在先の主人は、人に与えていることや自らが腕のよいハンターであることを口に出したり、自慢したりすることは一切なかった。彼は獲物を家族や親族のみならず、友人や親族関係のない老人や寡婦にまで自主的に分与することや人を助けることに喜びを感じていたし、その行為によって自らがハンターであるという満足を得ていた。

イヌイト社会における食物分配は、イヌイトとしてすばらしい人間であることを、実践を通して自己と他者に表明するひとつの手段であるといえる。

## 第2項 世界観との対応

第2章のレビューでみたように、北方研究では食物分配の実践の背後には、それを肯定し、生み出すような世界観があることが強調される。イヌイトの世界観では、動物は人間に捕獲されるために人間の前に姿を現わすのであり、ハンターである人間はその動物に敬意を払いつつ狩猟し、その動物が再生できるように適切に処理することが必要であると考えられている。もし人間が獲物の肉や毛皮を粗末に扱ったり、動物が嫌がるようなことをしたりすると、その動物はその人間のもとに再び現われることがないとされている。このため、人間はその動物が再生できるように適切な態度で獲物に接しなければならないとされている。それは、動物(獲物としてとられる側)と人間(獲物をとる側)の象徴的な相互依存的な関係であり、その関係を良好に維持するためには、とった獲物(ハンターに身を投げ出してくれた動物)の肉はほかの人にも分与することが望ましいとする考え方である。そして獲物をほかの人たちへ多く分配するハンターにはより多くの獲物がやってくるとの考え方が存在する(Fienup-Riordan 1983; Nuttall 1991; スチュアート 1991; Stairs and Wenzel 1992; Bodenhorn 2000 など)。

私自身のフィールド調査からは、ハンターと獲物となる動物との関係に関して政治性を帯びた言説は出てくるが、食物分配をすることがハンターと動物の関係を維持させることにつながっているかについては日常的な言説の中からは明確な確証を得ることができなかった。しかしながらこのことは、多くの極北人類学者が指摘している世界観と食物分配との対応関係を否定するものではない。

現代の社会的な脈絡においては、イヌイトの実践や態度とキリスト教の教義との関係について言及する必要がある(Kishigami 1994)。博愛や隣人愛、助け合い、寛容さを強調するキリスト教の教えは、現代のイヌイトの生活に深く浸透し、行動の指針として実践や態度に影響を及ぼしている。また、イヌイトの世界観はキリスト教の教えと習合している。このような習合が可能となったのは、これまで歴史的に培われてきたイヌイトの価値観とキリスト教の教えに共通する点が多いからである。ウンガヴァ湾のクアクタック村で調査を行ってきたドレは、分配と相互扶助はイヌイトの文化の特徴であり、アイデンティティーの源泉のひとつであると指摘している(Dorais 1997: 56)。私の体験からすると、人を助けることや食物を分かち合うことは、彼らの世界観のみならず、キリスト教の教義によっても裏打ちされていることを指摘しておきたい。博愛や隣人愛、助け合いを強調するキリスト教は、イヌイトの生活の基盤となっている。したがって、イヌイトは食物分配の実践を通して文化的な価値観を実現させ、精神的な満足感を得ることができる。

### 第3項 社会的な距離との関係

サーリンズは社会的距離と交換(互酬性)のあり方の間に相関関係があることを指摘した(Sahlins 1965)。このサーリンズ・モデルは、近親族であれば一方向的に食物が与えられる分与(「一般化された互酬性」)が、社会関係が遠くなれば2者間でのバランスのとれた交換(「均衡のとれた互酬性」)が、そして特別な社会関係がなくなればなるほど盗みや利潤をもとめた交換(「否定的な互酬性」)が行なわれることを示している。

アクリヴィク村におけるハンターから村人への分配、村人間の分配、食事を通しての分配の事例は、拡大家族関係にある人々との間での分配であることが多いので、近親族であれば一方向的に食物が与えられる分与形態をとるとするサーリンズのモデルを支持している。

しなしながらアクリヴィク村では、ハンターはコミュニティの成員であれば獲物の一部を分与することがあるので、サーリンズ・モデルに合致しない事例が存在している。ハンター間の分配では、狩猟へ参加した人や解体の場に居合わせた人には親族関係がなくても獲物の一部が分与される。ハンターはシロイルカのような大型動物を捕獲した時には、その一部を不特定多数の村人に分与することがあるし、多数の小型動物を捕獲した時には、親族関係がなくても村の老人や寡婦、病人に分与することがある。また、キャンプ地や狩猟中の食事を通しての食物分配も、そこに居ることが要件であって、親族関係が要件となるとは限らない。これらの食物分配の場合には、食物(獲物やその一部)のあげ手ともらい手との間には親族関係があるとは限らないにもかかわらず、一方向的な分与(「一般化された互酬性」)が実施されており、社会的な距離の近さ(近親族)と「一般化された互酬性」との間に対応関係があるとするサーリンズのモデルの反例である。さらに、1980年代半ばに制度化されたハンター・サポート・プログラムを利用した食物分配においても、「ジェームズ湾および北ケベック協定」が公認するイヌイットが対象となっており、親族関係などの日常的な社会関係の有無は関係していない。

以上を整理すると、親族関係などの特別な関係にある者の間で食物分配が実施されているが、特定の社会関係がなくとも、狩猟に参加すること、キャンプ地や獲物の解体場所に居あわせること、老人や寡婦など肉や魚の入手が難しいコミュニティの成員であること、協定が認定した人であることなどが要因となって食物分配が行なわれている事例が存在している。そのような食物分配においては、共労(関係)、場、食料を持っていないコミュニティの成員であること、協定などが重要な要因として作用していることがある。この最後に指摘した要因は、1975年に「ジェームズ湾および北ケベック協定」が締結された後に出現した新しい要因である。以上から、アクリヴィク村の事例の多くはサーリンズのモデルに合致する一方で、社会関係の距離以外の要因が「一般的な互酬性」に基づく分配を生み出す条件となる場合があることを示している。

イヌピアート社会では、親族間ではより互酬的な食物の分配(“mutual reciprocity”)が行なわれている一方、親族関係のない老人や寡婦、病人に対しては食物の一方向的な分与(「一

般化された互酬性」)が行なわれている(Bodenhorn 2000: 44)。また、クジラのような大型動物は、村人全員に分配されている(Bodenhorn 2000: 61)。この分配も「一般化された互酬性」の事例である。ボーデンホーンは互酬的な食物分配は親族関係があるから行なわれ、「一般化された互酬的な」食物分配を世界観(ハンターは獲物を他のイヌイトと分配しなければ、動物とハンターとの関係が悪化し、不猟に陥るという考え)で説明しようとしている(Bodenhorn 2000: 44-47)。この点について、私自身の見解を示しておきたい。

私は現代のアクリヴィク村において実践されている食物分配の中心的な形態は「分与」と「再分配」であるということを指摘した。さらに私は、慣習的な再分配は2つの分与のプロセスから構成されているので、イヌイトの食物分配は同じコミュニティに属している人に対して行なう一方向的な分与が基本形であると考えている。コミュニティ内でも親族との食物分配と比べると非親族との食物分配の頻度は低い。一方、自らの家族や親族とは、親密な社会関係があるからこそ、食物の分与を頻繁に行うが、その人物も同様に他の家族や親族から食物を頻繁に受け取る。それぞれの行為は、一回きりの分与で完結しているが、特定の社会関係があるからこそ、あたかも当事者どうして交換が行なわれているように見える。それは、一方向的な分与の集積であり、交換のように見えるものの交換ではなく、結果として遅延的な互酬性を成立させているのである。すなわちコミュニティの成員間では、親族関係がなくても一方向的な分与が行なわれるが、特に親族間では一方向的な分与が相互にかつより頻繁に行われているのである。私は、これがボーデンホーンの指摘した「相互的な互酬性」の正体であると考えている。このように解釈をすると、ボーデンホーンの指摘した世界観は、同じコミュニティに属するイヌピアートの分与という実践全体と深く結びついている世界観であり、なにも非親族者への分与という実践と深くかかわっている世界観ではない。

サーリンズはレヴィ=ストロースと同じく、現象を「交換」(もしくは互酬性)の視点から把握することを出発点として(竹沢 1996: 82)、社会的距離と互酬性のタイプとの対応モデルを構築した。それは交換概念から出発することで社会現象がどのように解釈できるかを示したものであった。一方、モースは「贈与」を「交換」に還元することはしなかった(嶋田 1993: 232)。モースの贈与論の問いは、「未開あるいは太古の社会類型において、贈り物を受けた場合に、その返礼を義務づける法的経済的規則はいかなるものであるか、贈られた物には、いかなる力があって、受贈者にその返礼をなさしめるのか」(モース 1973: 224)であった。すなわち、贈与が贈与という形を取りながらも、「贈与の交換」となってしまうかという問題である(嶋田 1993: 233)。イヌイトの食物分配があたかも交換のように見えるのは、大半の事例においてイヌイトは特定の拡大家族関係にある人々の間で、1回ずつ完結する分与を相互にかつ頻繁に行なっているからである。それは、個別の分与が特定の社会関係に沿って遅延的に相互に行なわれた結果、交換のように見える遅延的な互酬性を構成しているのだと主張しておきたい。すなわち社会的な関係性の存在が、相互的な分与を生み出す重要な条件となっている。

#### 第4項 要約

本節では、アクリヴィク村の食物分配の事例に基づいて、食物分配が持つ機能、食物分配と世界観との関係、食物分配と社会的な距離との関係を検討してきた。ここでは、その成果をまとめておく。

①食物分配を機能という点でみると、現在のアクリヴィク村の食物分配は複数の機能を併せ持った実践である。特に、(1)カントリー・フードを入手する上で有効な手段、(2)拡大家族内や村内での食物の平準化機能、(3)既存の社会関係を確認させ、再生産させる機能や食物分配を意図的にしないことによる社会関係を壊す機能、(4)寛大に分与する人が社会的な名声や敬意を獲得する機能、(5)文化的な価値観を実現させ、精神的な満足感を得る機能などがある。

②アクリヴィク村のイヌイットの食物分配は、世界観のみならずキリスト教の教義によって裏付けられた実践である。

③アクリヴィク村のイヌイットの食物分配の大半は、親族関係や同名者関係など社会関係と深くかかわる実践であるが、共労、場の共有、弱者(持たざる者)であること、コミュニティー意識、政治協定による公認条件など社会関係以外の要因が条件となる食物分配の実践が存在する。したがって、イヌイットの食物分配は、部分的ではあるが、サーリンズ・モデル(Sahlins 1965)に合致しない事例が存在している。

#### 第4節 食物分配の実践と社会の再生産

本節では、アクリヴィク村の事例を用いて食物分配と社会の再生産や変化との関係を吟味したい。特にここでは、貨幣経済と食物分配との関係、食物分配と社会関係の再生産の関係、食物分配の実践における世代差と地域差に焦点を合わせて、検討する。

##### 第1項 貨幣経済と食物分配

###### (1)貨幣経済と生業活動

第2章の第4節第1項で紹介したように、これまでの唯物論や世界システム論、ポリティカル・エコノミー論のような見解では、世界各地における貨幣経済の浸透は、小規模社会の社会関係や食物分配のような経済的な実践の崩壊的变化の原因となるとする見解(例えば、Murphy and Steward 1956; Dalton 1969; Leacock and Lee 1982; Nietschmann 1973; Wilmsen 1983, 1989 など)と、ある条件下では社会関係や経済的な実践は再生産的な変化をするという見解が存在している(例えば、Feit 1991; 岸上 1996a, 1996b, 1998; Kishigami 2000; Langdon 1991; Peterson 1991; Wenzel 1991 など)。

第2章の第4節3項で紹介したようにアラスカのユピートとカナダのイヌイットの事例から、貨幣経済のもとにおいて社会関係の再生産を可能にした社会的生業モデルが提唱されてきた。このモデルに基づき、ウェンゼルは、イヌイットが毛皮交易に参加した後も、

毛皮交易で得た現金は、狩猟道具やキャンプ用品、生活品を入手するために利用され、狩猟・漁撈活動に基づく生活を効率よく維持させてきたと主張する。そして 1960 年代にアザラシの毛皮が交易品となると、生業活動は貨幣経済とさらにうまく調和した。イヌイットのハンターはアザラシを狩猟し、その肉は家族、親族やそのほかの村人と分配し食料とした。一方、アザラシの毛皮を売り、現金を獲得し、その現金で狩猟・漁撈や生活に必要な物資を購入し、狩猟・漁撈活動を続けた。この一連の実践のサイクルは、特定の人間間での食物分配の実践を通しての社会関係の確認と維持、すなわち社会関係の再生産を果たした。このサイクルが途切れなく続くためには、現金の確保が必要条件であった。ところがこの条件は、1983 年のヨーロッパ共同体のアザラシの毛皮の輸入禁止によって大きな打撃を受けた。ウェンゼルは、極北地域から遠く離れたヨーロッパの地での決定が、イヌイットの経済に悪影響を与え、結果としてその経済と相互依存関係にある社会関係も大きく変化するだろうと予想した(Wenzel 1991)。一方、彼は、調査地のクライド・リバーにおいては現金収入が減ったハンターは、就職して現金を所有している家族や親族の若者から道具や現金を「要求による分配」を通して入手し、狩猟・漁撈を続けていることを報告し、この「要求による分配」が現在の経済状況に適応するための手段となっている点を指摘した(Wenzel 1995; 2000)。

次に、ヌナヴィク地域のアクリヴィク村の事例を検討してみよう。毛皮交易に代わる現金収入が存在し、それを利用して狩猟・漁撈を続けることができる条件もしくはハンターが村に持ち込む魚や動物の肉の量が大きく落ち込まないという条件のいずれかが満たされれば、本章の第 3 節第 3 項で見たように既存の社会関係の再生産は可能なはずである。ここでは、このふたつの条件について検討してみよう。

## (2)1983 年以降の現金収入と狩猟・漁撈活動

第 4 章第 2 項で 1980 年代前半から 2001 年頃にかけてのアクリヴィク村における貨幣経済の変化を見てきた。村の中高年のハンターにとってこの時期、経済的に不利であったのは、アザラシの毛皮を売ることができなくなったことと滑石彫刻品の価格が低迷したことであった。一方、第 4 章の表 4.6 で提示したように、この期間には少なくとも世帯あたりの平均年収は 1986 年の約 2 万 7 千カナダ・ドルから 2001 年の約 4 万 5 千カナダ・ドルに上昇している。特に村役場は、土木工事や建設工事などの季節的な賃金労働や新たな定職があれば、定職を持っていない成人男性や世帯主に意図的に仕事を振り分け、少しでも多くの世帯が現金収入を得ることができるよう努力してきた。ヌナヴィク地域における失業率は低下していないが、物価もカナダ全体の経済不況のために大きな変化を見せてはいない。第 3 章の表 3.8 と表 3.9 を見てわかるように、家賃は上昇したが、カナダの南部社会から比較すれば、きわめて低い。また、ケベック州政府から直接支払われる福祉金や各種生活補助金の村全体に示す割合も 1990 年代には一時的に低下していたものの、1986 年と 2001 年とではほぼ同じ約 30 パーセントである。物価はもともと高いが、これも特に上昇



はしていない。

これらの経済状況を総合すれば、アザラシの毛皮や滑石彫刻品の販売は低迷したものの、ハンターの家族や親族の所得は増加しており、必ずしも狩猟・漁撈に投入できる資金が激減していないことがわかる。

一方で、第4章の第1節第5項と第5章の第8節第3項で示したように1984年からはハンター・サポート・プログラムを利用して村がハンターを雇ったり、ハンターから獲物を買上げたりするようになり、少額ではあるが、賃金労働には就いていないが生業活動に積極的に従事しているハンターも現金収入を得ることができるようになった(注4)。

さらに1998年頃からカティヴィク地方政府とマキヴィクは経済開発基金を設け、アザラシの毛皮やホッキョクギツネの毛皮をハンターから買上げ、彼らが現金を得ることができるような制度を開始した。その上でハンター・サポート・プログラムのフリタック・プロジェクトを利用し、アクリヴィク村では年間1万5千カナダ・ドルの予算で村人が製作した防寒服や手袋などの毛皮製品を購入し、それを欲しい村人に半額で売るという新しい制度の中で、中高年の女性が現金を得ることができ、かつ村人が毛皮製品を安価に購入できるようにした。

このように世帯あたりの現金収入の増加、「ジェームズ湾および北ケベック協定」のもとで創設されたハンター・サポート・プログラムの実施、カティヴィク地方政府やマキヴィクの経済開発などによって、狩猟・漁撈活動を続けることを可能にする条件は存在してきた。しかしながら、1984年から2001年の間には、次のような一般的な傾向が顕在化した。村の中で定職に就いている男性は、狩猟・漁撈に行く時間は制限されるが、よい装備を購入することができるため、狩猟や漁撈の生産性は必ずしも低くはない。定職に就いていないために収入は少ないが時間には余裕のある中高年の男性は、ガソリンや銃弾、そのほかの必要品を購入することができず、1983年以前と比較すると狩猟・漁撈に行く頻度が低下した。アクリヴィク村では、狩猟や漁撈は週末に集中する傾向が認められる。さらに村の青少年の大半は冬季には狩猟や漁撈に行かなくなり、生業離れが顕著に認められた(岸上1999c)。これらのことを考慮すると、アクリヴィク村において狩猟・漁撈が衰退していったのは、狩猟・漁撈活動を続けるための現金が極端に不足しているからではなく、村人の仕事、特に賃金労働に就くことに関する考え方や態度が変化してきたためであると考えられる。

### (3) 分配するための肉と魚

ハンター・サポート・プログラムが本格的に運用され始めた1984年以降は、個人的な狩猟・漁撈によってアクリヴィク村に持ち込まれ、分配されていく魚や動物の肉に加え、第4章の第1節第5項で記述したようにハンター・サポート・プログラムを利用したシロイルカ猟やセイウチ猟で得た獲物が、村のイヌイト世帯に分配されるようになった。さらに村役場はハンター・サポート・プログラムの予算がある限りはカリブーやアザラシの肉、ホッキョクイワナを購入し、無料で食料を必要とする村人に分配した。

これらの食物分配は、各世帯に魚や動物の肉をもたすが、ひと度入手された食べ物は食事や分与を通してさらに分配されていく。例えば、私の滞在先には毎年、シロイルカ猟の後に約 30 キログラムのマツタックが村から分配されると、このマツタックはこの家の世帯員だけでなく、世帯外の家族や親族、そのほかの村人によって分配され続ける。ここで強調しておきたい点は、食物分配が実践され続けるためには、分配するための肉や魚が村内に存在しなければならないという前提である。現在のアクリヴィク村では狩猟・漁労活動の頻度が依然と比べれば、減少傾向にあるが、それでもなお分配の対象となる肉や魚は村のハンターによってやハンター・サポート・プログラムを利用することによって村人に供給されている。

#### (4) 貨幣経済と生業活動

ここで貨幣経済と生業活動との関係について検討を加えておきたい。少なくとも、アクリヴィク村の事例では、貨幣経済の浸透が生業活動を根底から覆しているようには考えることはできない。たしかにイヌイットにとって現金収入が狩猟・漁撈やキャンプ活動、村で生活を営むためには不可欠であることは事実である。しかし、現金は生業活動を実施するために必要な手段であって、現金を稼ぐこと自体は彼らの活動の最終的な目的とはなっていない。アクリヴィク村では、1990 年代後半よりクージュアック村のカナダ帝国商業銀行 (CIBC) 支店に個人口座を開設し、給与の振り込みや貯蓄をしているイヌイットが増加した。彼らは、生協で銀行のキャッシュカードを使って支払ったり、現金を引き出したりしている。このように現金をめぐる状況はこの 20 年間に大きく変化してきた。しかし私の知る限り、スノーモービルを購入するためなどの特定の目的以外には貯蓄に成功した人は少なく、月に 2 度ある給料日から 1 週間もたつと現金がなくなるのが常である。

では、彼らの目的とは何か。現在、村の人口の大半が 30 歳以下であり、村人の生活様式も多様化しつつある。生業活動に積極的に従事する人もあれば、村の中でフルタイムの賃金労働に従事し、狩猟・漁撈にあまり行かない人やキャンプにまったく行かない人もいる。2004 年現在、50 歳代以上の人々は定住生活を開始する前に生まれた人々である。彼らの大半は、時間がある限り、狩猟・漁撈に従事したり、ツンドラや海岸部で過ごしたり、家族や親族と食べ物を分かち合い、食事をともにしながら生きていくことを人生の最大の喜び(生きがい)としているように思われる。

ヌナヴィク地域のイヌイット社会では年々、カナダの南部から週に 1 度の空輸や年に 1 度の大型の貨物船で搬入されてくる食料品の消費量が増大してきており、子供や青少年を中心に地元産のカントリー・フード離れが指摘されている。カナダの極北地域全体の傾向では、たんぱく質に関しては摂取量の 40 パーセントから 60 パーセントが地元の食料資源に由来するが、カロリーの点では、地元産の食料資源に由来する摂取量の割合は 16 パーセントから 33 パーセントの間にすぎない(Jette 1994; Kuhnlein et. al. 2000)。しかしこのことは、カリブーやアザラシの肉、ホッキョクイワナなどの地元産の食料資源のイヌイット

による評価が低いというわけでは決してない。現在でもアクリヴィク村では、これらの肉や魚は「真の食べ物」(*nigituinnaq*)と呼ばれており、それらを食べることは文化的にも栄養学的にも重要であり続けている(岸上 2005a)。すなわち、狩猟・漁撈活動によって獲得され、コミュニティの中で分配され、消費される食物は、現金に置き換えることができない文化的に価値のあるものである(Usher 1976: 117-118; Fienup-Riordan 1983: xix-xx; Smith and Wright 1989: 97; Kruse 1991: 234; Nuttall 1992: 170)。

イヌイットの狩猟・漁撈活動やキャンプ生活は、単に食料資源を獲得するためだけの活動ではない。近年、イヌイットの狩猟・漁撈活動がリクリエーション化していることが指摘されている(スチュアート 1995, 1996; Stern 2000)。アクリヴィク村においては、村内で賃金労働に従事している人々の間で週末にキャンプ地の小屋で過ごすことが多くなっている。彼らは狩猟・漁撈にも従事するが、それだけが目的ではなく、村外で狩猟・漁撈活動やキャンプ生活を送ること自体から満足感を得ている。すなわち、狩猟・漁撈活動やキャンプ生活からイヌイットは、その生産から得られる以外のものを得ている。イヌイットは生業活動に従事することやキャンプで生活することによって、家族や親族と生活をともにし、ツンドラの大地や沿岸部で時間を過ごす満足感、村の生活から離れて開放された時間など、「プロセスから得られる恩恵」(*process benefits*)を得ることができるのである(Kruse 1991)。

生業活動に従事することによって、イヌイットは親族やコミュニティに対して義務を果たすことができる(Fienup-Riordan 1983: 357; Langdon 1991: 283; Wenzel 1991: 99)。フィエナップ＝リオーダンによると、ユピートにとってほかの人に食料を与えることがもっとも重要なことであり、生業活動を続けるもっとも重要な要因であると述べている(Fienup-Riordan 1983: 357)。アクリヴィク村の中老年のハンターは、村の中にいる家族や親族、そしてコミュニティのために生業活動に従事しているという側面もあるだろう。私は、現在の生業活動は、食料を獲得するという機能のほかにも複数の機能を併せ持つ、現在のイヌイットにとっても意義のある実践であることを強調しておきたい(岸上 2005b)(注 5)。

ナッシュは、中南米を事例として資本主義経済が浸透しても非資本主義的な生業セクターは存続することを指摘している。特に経済的に危機的な状況下では、生業的な活動は社会を再生産するために重要であり、経済のグローバル化が進む中で、生きていくための生業活動が増加しているという(Nash 1994)。このような状況は、賃金労働からの収入が不安定となり、地元のサケや農作物に依存せざるを得なくなっているポスト社会主義時代のカムチャツカ半島やチュコト半島の先住民社会にもあてはまるであろう(例えば、渡部 1999: 108, 2004: 8)。一方、アクリヴィク村のようなカナダのイヌイット社会においては生業活動の維持が可能であったのは、逆説的であるがまさに貨幣経済のおかげでもあったといえる。しかもこの生業活動を支えている資金は、おもに賃金収入とカナダ政府やケベック州政府からの各種補助金や福祉金である。ここで注目すべきは、村の役場、学校、看護所、空港

などにある職の多くは、間接的にせよケベック州政府が支払っている給料である。すなわち、アクリヴィク村の現金収入のほとんどはケベック州政府とカナダ政府に由来し、アクリヴィク村の経済自体が政府依存型の経済システムであるといえる。狩猟・漁撈活動や食物分配などの現在のイヌイットの生活は、まさにこの政府依存型の経済の上に成り立っているのである。このように考えると、ニコラス・ピーターソンがオーストラリア先住民を事例として提起した「第4世界にすむ先住民の社会秩序が物質的生産に実質的にかかわることなく、国家との複雑な対話を通して再生産し続けるかどうか」という問題に関して、ひとつの回答を出すことができる(注6)。本節の(2)と(3)で検討したように、アクリヴィク村の事例をもとにすれば、イヌイットが狩猟・漁撈を続けることができる条件が存在し、かつ、村に持ち込まれる魚や肉の料も大きく落ち込んでいるとは考えられないので、「ジェームズ湾および北ケベック協定」がこのまま遵守され、イヌイット自身が生業活動の持続を望む限りは、ヌナヴィク地域においては食物分配などイヌイットの生活は再生産されるだろうと予想される。

## 第2項 食物分配の実践と社会関係

アクリヴィク村における事例をもとに食物分配の実践と社会関係について検討を加えてみたい。本章の第1節第6項で指摘したように食物分配はエゴの拡大家族関係内など特定の社会関係に沿って行われる場合とそれ以外の要因が重要である場合のふたつに大別される(cf. Damas 1972a)。

### (1)食物分配と特定の社会関係

アクリヴィク村の事例に関する限り、第5章の第2節から第7節にかけて示したように、大半の食物分配は、エゴの祖父母、両親、兄弟姉妹、オジ、オバ、イトコなど拡大家族関係にある人(親族名称で呼ぶことができる人々)との間で実践されている。また、狩猟や漁撈のパートナーも拡大家族関係にある人から選ばれる傾向があるため、ハンター間の獲物の分配も拡大家族関係内での分配となることが多い。同じくハンターから村人への分配や村の中で行なわれている食物分配の大半も、拡大家族関係にある人の間で行われている。このようにアクリヴィク村では食物分配は、既存の拡大家族関係内で行われることがもっとも頻繁である。言い換えれば、あるイヌイットが別のイヌイットに食物を分与したり、もらったり、要求したりするのは、大半の場合、その当事者の間に拡大家族関係という親密で、特別な社会関係が存在しているからである。しかも食物分配の実践は累積的に見ると、特定の間人間や世帯間での食物の交換のように見えるが、これは1回、1回完結する一方向的な分与の実践の累積的な結果であると考えべきである。1回、1回の食物の分配の実践を通して既存の社会関係が客体化され、確認され、再生産されていくのである。また、儀礼的な助産人と子供たちとの間での食物分配や同名者間での食物分配の場合にも、食物やモノのやり取りを通してそれらの特定の二者間関係が確認され、再生産されているのであ

る。

このように食物分配の実践は、たとえそれが象徴的で経済性を伴わない実践であったとしても、拡大家族関係や特定の二者関係を当事者に確認させ、再生産させるといえる。

## (2)食物分配と非親族関係

本章の第3節第6項で示したように、既存の親族関係や特定の二者関係がなくても食物分配が行われていることを指摘し、その要因として共労、場の共有、弱者(持たざる者)であること、コミュニティ意識、政治協定による公認条件など拡大家族関係以外の要因が条件となることを指摘した。ここではこれらの要因にかかわる社会関係を見てみよう。

スノーモービルや船外機付きカヌーの使用によって、1人でも狩猟・漁撈を行うことが可能になった。しかし、複数のハンターが相談の上で同じ場所に狩猟や漁撈に行くこともあれば、偶然に狩猟地で出会うこともある。このような場合、狩猟や漁撈を協力して行ったり、獲物の解体場所に時たま居合わせたりすれば、親族関係がなくても獲物の分配を受けることができる。また、同様に、親族でなくても食事を共にすることが多い。このように生産活動自体や生産の場を共有するハンターの間では、獲物や食物の分配を行うので、これらの間にある社会関係は狩猟・漁撈活動への参加者関係と呼ぶことができよう。

また、小規模なキャンプ地は通常、拡大家族の成員によって構成されることが多いが、親族関係のない友人世帯を含むことがある。そこでは、キャンプ地にいる者は獲物や食事を自由に分配し合う傾向にある。このような場合には、親族関係以外にもキャンプ地という小空間を共有すること(近接性)が、大きな要因となっているといえよう。アクリヴィク村の事例は、第2章の第2節第1項で紹介したインゴールド(Ingold 1988)や丹野(1991)、今村(1993,1996)、北西(1997)らの提起する、小規模なキャンプにおける生活の全面的な共有がキャンプ成員間の食物分配を生み出すという仮説に合致するものである。なお、アクリヴィク村では多くのキャンプが拡大家族関係にある世帯から構成されるので、親族から構成されるキャンプ地における食物分配に関しては多様な利害関係がかかわる社会関係の維持仮説(Riches 1981)もひとつの説明のしかたであると考えられる。

アクリヴィク村のハンターは、イヌピアート社会の事例(Bodenhorn 2000)やほかのイヌイット社会の事例(Wenzel 1991)と同様に、生産活動に従事できない老人や寡婦世帯に魚や動物の肉を分与することが観察される。しかもハンターと老人や寡婦との間には直接的な親族関係が存在せず、物質的な見返りは期待できない場合が存在する。

私は、アクリヴィク村のハンターが親族ではない老人や寡婦、病人に肉や魚を分け与えるのは、彼らが同じコミュニティに属しているという仲間意識とコミュニティ全体の福利の追求に由来していると考えられる。コミュニティとは、体験の積み重ねの記憶(歴史)を共有しかつ、物理的な場(空間)を共有した人々から形成されている。このため、成員はそのコミュニティに属しているという意識(アイデンティティ)を持ち、成員は相互の福利厚生を配慮しあっている。ウェンゼルの「食物分配は、狩猟や漁撈と同様にコミュニテ

ィーの福利厚生にとって不可欠である」(Wenzel 1991: 100)と指摘している。イヌイットはコミュニティの中に老人や寡婦、病人がいれば、それらの人の状況を配慮して肉や魚を提供するのである。そしてこの一方向的な分配(自主的な分与)は、イヌイットの世界観やキリスト教の教えによっても裏打ちされている。また、コミュニティ内の困難な状況にある人を助けられない人に対しては、助けることを促進させる社会的なプレッシャーがかけられるのである。

最後に、ハンター・サポート・プログラムによる肉や魚の分配について述べる。この分配は、「ジェームズ湾および北ケベック協定」に調印したイヌイットとその子孫を対象として実施され始めた。現在では、ケベック州ヌナヴィク地域に住むイヌイット全員にまで適用範囲が拡大された。このように分配を受ける対象には法的な範囲が存在しているが、アクリヴィク村のイヌイットはそのようなことは一切認識しておらず、村(村役場や村議会)が食料を必要とする村のイヌイットに肉や魚を分配してくれているのだと考えている。村の方は、老人世帯や寡婦世帯には常に配慮している以外は、村に在住のイヌイットであればすべて同等に取り扱っている。この分配では、コミュニティの成員であることが重要であり、その成員全員の福利厚生のための手段となっている。そしてこの村全体での食物分配は、コミュニティ意識の生成と再生産に貢献している。

これまで検討してきたように、アクリヴィク村に存在している大半の食物分配は拡大家族関係や特別な二者関係に基づいて実践されている一方で、それ以外の社会関係や要因によって実践されている事例が存在する。これらの実践は、拡大家族関係など特定の社会関係(の網の目)の再生産やコミュニティ意識の再生産を生み出しているといえるだろう。

さらに、イヌイットの食物分配とエスニック・アイデンティティーとの間には正の相関関係が見られる。イヌイットはカナダ主流社会の「白人」(ヨーロッパ系カナダ人)と自らを区別するエスニック・マーカーとして「食物分配」や「狩猟」を利用することがある(スチュアート 1998a; Stewart 2002; Kishigami 2000, 2004b)。イヌイットがカナダ主流社会などの外部社会に発信する政治的な言説の中では、「食物分配」を実施していること自体が重要である。一方、コミュニティ内ではイヌイット独自のやり方で適切に食物分配を行なうかが、「真のイヌイット」であるかどうかの指標になる(大村 1998; Omura 2002; Kishigami 2004b)。イヌイットの食物分配には、コミュニティ内におけるイヌイット意識の生成・維持とともに、対外的にはエスニック・アイデンティティーの生成・維持の機能がある(Kishigami 2004b)。

### 第3項 極北地域における食物分配の地域差と共通性

第2章の第3節において、アラスカのユピイトとイヌピアート、カナダやグリーンランドのイヌイットの食物分配に関する研究を述べ、食物分配という実践自体はこれらの地域にあまねく存在しているものの、「ルールによる交換」の形態をとる「アザラシ肉の狩猟パートナー間での分配」は、カナダ中部極北地域のコパー・イヌイットとネツリク・イヌイ

ットの間にしか存在していなかった (Damas 1972a; Van de Velde 1956)。また、グリーンランドのイヌイット社会では世帯が経済や食物分配の単位として重要に機能している (Hovelsrud-Broda 2000) 一方で、カナダの中部および東部極北地域のイヌイット社会の食物分配では世帯を横切る拡大家族関係が重要な要因として機能している (Damas 1972a; Kishigami 1995, 2000, 2004a; Wenzel 1991, 1995, 2000)。このように食物分配には地域差も認められる。

さらに食物分配の形態にしても、イグルーリク・イヌイットのような強力なリーダー (イスマタック) が存在する社会では、獲物は一度、リーダーの世帯に集められ、そこから家族や親族、同じキャンプの成員へと再分配がされるが、ヌナヴィク・イヌイットの社会やグリーンランドでは慣習的な分与がもっとも一般的な形態であるといえる (Hovelsrud-Broda 2000; Wenzel 1991, 2000; Kishigami 2000, 2004a)。

極北地域は、ロシア、アメリカ、カナダ、デンマークなど異なる国家の中に組み込まれ、この 100 年余りを見てもそれぞれの国家が異なる先住民政策を実施してきた (Hughes 1965)。さらに同じカナダの極北地域においてもイヌイットは北西準州、ヌナヴァート準州、ケベック州極北部のヌナヴィク地域、ラブラドル地域に分散して住んでおり、それぞれの地域でも政策に違いが見られる。これらの政策の歴史的な展開の違いは、シロイルカ猟やシロイルカの分配の方法に地域差を生み出す要因のひとつであった (Dahl 2000; 岸上 2001b; Kishigami 2005; Marquardt and Caulfield 1996; Sejersen 2002)。また、ヌナヴィク地域のイヌイットの村のように「ジェームズ湾および北ケベック協定」のもとで創設された「ハンター・サポート・プログラム」を利用した新たな食物分配を実践しているところもあれば (岸上 1998; Kishigami 2000, 2004a, 2004c)、クライド・リバー村のように「要求による分配」が頻繁に実践されるようになった地域もある (Wenzel 1995, 2000)。

極北地域における食物分配には地域差が認められる一方で、共通点を指摘することができる。ホッキョククジラやシロイルカ、セイウチなど大型獣が捕獲された場合には、ほぼすべての地域で、それらは村人全員やキャンプの全成員に分配される (Bodenhorn 2000; Graburn 1969; Hovelsrud-Broda 2000; Langdon and Worl 1981; Robbe 1994 など)。また、極北地域の食物分配にはその根底に動物と人間との互惠的な関係をもつ世界観が存在している (Fienup-Riordan 1983; Nuttall 1991; スチュアート 1991; Stairs and Wenzel 1992; Bodenhorn 2000 など)。その世界観は、食物分配の実践と分かちがたく結び付いている (Riches 1981; Burch 1988; Nuttall 1991, 1992; Wenzel 1996, 2000; Dorais 1997; Kishigami 2000, 2004a など)。さらに、極北地域の食物分配の形態には、分与、交換、再分配が存在しているが、その中心的な形態は交換ではなく、分与や再分配である (Fienup-Riordan 1983; Burch 1988; Nuttall 1991; Wenzel 1995, 2000; Bodenhorn 2000; Hovelsrud-Broda 2000; Kishigami 2000, 2004)。

これらから見てわかるようにアクリヴィク村の事例は、政治協定によって制度化された食物分配を実践している点ではユニークであるが、拡大家族関係やコミュニティーが食物

分配の実践において重要な要因となる点や「分与」や「再分配」の形態が主流である点では、ほかの極北地域の事例と共通点が認められるといえよう。

#### 第4項 食物分配の変化と世代差

極北地域における食物分配は、地域差があるのみならず時間的にも変化してきたといえよう。ウェンゼルは、クライド・リバーにおいて1983年のヨーロッパ共同体によるアザラシ皮の輸入の禁止によって、ハンターは現金収入源を失ったが、そのような状況に適応するために「要求による分配」が出現したと報告した(Wenzel 1995, 2000)。最近の調査では、貨幣経済の影響が強くなってきたものの、地元産の魚や肉をイヌイットが売り買いをしている事例はグリーンランドの事例(Marquardt and Caulfield 1996; Petersen 1989)やヌナヴィク地域のハンター・サポート・プログラムの事例(岸上 1998; Kishigami 2000)などを除けば事例が少なく、多くのイヌイットは現金を介在させることなく食物分配を行っている(Chabot 2001; Gombay 2004, 2005a, in press)。

アクリヴィク村の事例では、食物分配の中心がハンター間の分配から、村の中における食事を通しての分配に変化してきた。これは、ハンター間での獲物の分配が行われなくなったのではなく、狩猟・漁撈活動が個人化、少人数化したことが大きな要因である。また、ルールに基づく分与はなくなり、自主的もしくは弱い要求による分与が頻繁に観察される。1980年代半ばからはハンター・サポート・プログラムを利用したシロイルカ猟やセイウチ猟、肉や魚のハンターからの購入が実施され、一度、村が入手した食物を村人に再分配するようになった。

本論文の第1章の第4節第1項においてイヌイットの食物分配の変化に関して、「毛皮交易の不振による現金収入の減少によって、ガソリンや銃弾を十分に入手することができなくなったため、従前通りの狩猟・漁撈活動をイヌイットは行うことができなくなった。このため食物分配にも変化が見られ、イヌイットの社会関係も大きく変化した」という仮説を提起した。これまで本論で記述した1980年代半ばから2004年にかけてのアクリヴィク村の事例によって、この仮説を吟味したい。

毛皮交易の不振は、たしかに狩猟・漁撈活動に積極的に従事してきたハンターにとっては現金収入源をひとつ失ったことになり、大きな痛手であった。しかしながら、1980年代半ばから2001年にかけてのアクリヴィク村の世帯あたりの現金収入の増加を見てわかるように、世帯単位や世帯を横切る大家族集団を単位として考えると、村のハンターが狩猟や漁撈に投入することができる現金の総額が減少したとはいえない。さらに、1984年に開始されたハンター・サポート・プログラムの運用によってアクリヴィク村のハンターは、獲物やサービスと交換に小額ながらも現金を得ることができるようになった。このような事実に基づけば、毛皮交易の不振によるハンターの現金収入の減少が、多くのイヌイットが狩猟・漁撈活動に頻繁に従事しなくなった原因であるとは必ずしもいえない。

さらに中高年の生業活動に積極的なハンターやハンター・サポート・プログラムの運用



によって、肉や魚などの地元産のカントリー・フードが依然として村の中に供給されており、拡大家族関係などの社会関係を通して分配が行なわれ続けている。このような状況から、2004年の時点では、イヌイットの拡大家族関係やそのほかのコミュニティ内の社会関係は変化を被りつつも、基本的には再生産されてきたと私は主張したい。

では、なぜそのような食物分配の実践とそれに深く関係する社会関係の再生産が可能だったのだろうか。私は、カナダ政府やケベック州政府からの給料や各種補助金、福祉金、さらには先住民諸権益問題処理協定である「ジェームズ湾および北ケベック協定」のもとで創出された「ハンター・サポート・プログラム」の利用が、イヌイットに狩猟・漁労活動に必要な資金と狩猟・漁労活動の結果として肉や魚をもたらしたからだと考える。このように考えるとアクリヴィク村の場合はイヌイットが市場経済や、カナダ政府とケベック州政府からの経済的な援助や資金を彼らの目的にあわせて彼らなりに利用しながら、食物分配や社会関係、コミュニティを再生産させながら、生活を営んできたといえよう。

では、次にアクリヴィク村において食物分配や社会関係に関してどのような変化が起こりつつあるかを、世代差に着目しながら検討してみたい。

1980年代から1990年代にかけて北西準州のホルマンで調査を実施したコンドンらは、村の中でもっとも生産性の高いハンターは40歳代および50歳代であり、若者世帯は肉や魚などを中高年の人から食物分配を通して入手していると報告している(Condon, Collings and Wenzel 1995: 41)。アクリヴィク村においても狩猟・漁撈活動から若者や青年が離れるという傾向が1980年代以降には顕著に現れ始めた(岸上 1999c)。同村では、(1)賃金労働による時間の制約、(2)狩猟・漁撈道具を購入するためには多額の現金が必要であること、(3)学校教育の長期化、(4)ハンター・サポート・プログラムによるカントリー・フードの村人への無償分配が、青少年の生業活動離れを引き起こしている(注7)(岸上 1999c: 81)。青少年が春夏以外には狩猟・漁撈にあまり行かないということは、分配しうる食物を物理的に持ち得ないということである。このため、アクリヴィク村では青少年の多くは既存の食物分配の慣習によって食物をもらったり、加工食品を現金で購入したりして入手している。その一方でほかの人に肉や魚を分配する量や頻度が低下しつつある。この傾向が恒常化すれば、ハンター・サポート・プログラムを利用した食物分配以外の、慣習的な食物分配の実践は各拡大家族集団のみで行われるようになり、分配の対象範囲が狭くなるだろうと私は予想する。また、親族以外への食物分配の頻度も減少するのではないかと考える。

このようにアクリヴィク村の食物分配は、新たな制度が加わったにしても、狩猟・漁撈活動が低下すれば、それに連動して衰退していく可能性がある。これまでの議論に基づけば、食物分配は社会関係や世界観と相互依存的に分かちがたく結び付いているため、食物分配の衰退は拡大家族関係の衰退や世界観の変化などを生み出す原因のひとつになると考える。

## 第5項 国家と先住民社会

本論文で示したことは、現在のイヌイットは国家や貨幣経済(世界経済システム)の中に取り込まれ、かつその存在を前提として社会が存在しているが、ヌナヴィク地域のイヌイットはカナダ政府やケベック州政府との政治交渉と協定を通して自らの生活を構築してきたという事実である。

アクリヴィク村のイヌイットは、現金収入やハンター・サポート・プログラムを利用して狩猟・漁撈活動や食物分配を継続し、それらの活動の過程を通して社会関係を再生産させてきた。これは、部分的にはカナダ国家の先住民政策が展開されてきた結果のひとつである。カナダ政府とケベック州政府は、ヌナヴィク地域のイヌイットと先住民の権利と権益に関して政治的な話し合いを持った上で、特定の権利と権益を承認した。この承認された枠組みの中で、ヌナヴィク地域のイヌイットは自らの将来を考え、あたらな先住民社会を構築してきた。すなわちイヌイットの生活は決して外から一方的に押しつけられたり、規定されたりしたものではなく、あるときは外因を受け入れながら、あるときは外因に反発しながら、柔軟にかつ主体的に実践してきた結果であるということである。

先住民社会の現状や将来は、彼らが属している国家の方針や利害によって大きく左右される(スチュアート 1997b, 1998b, 2002)。ピエール・クラストル(1987)は、社会の中で権力の否定に成功し、国家を形成することがなかった南アメリカ・インディアン社会を「国家に抗する社会」と表現した。一方、南アフリカのグイ(ブッシュマン)を研究してきた菅原和孝は、「国家の圧倒的な権力に直面したとき、この楽天的な現実主義者たちは、効果的な抵抗運動を組織することがついにできなかった。」(菅原 2004: 275)と述べ、グイ社会を「国家に抗せなかった社会」と呼んでいる(菅原 2004: 6 章)。一方、カナダのイヌイット社会は、国家に抗せなかった社会ではなく、国家を受け入れ、国家との政治交渉に基づいて関係を打ち立て、国家を利用している社会である(注 8)。このように考えると、先住民族の将来は、彼らが属する国家といかなる政治的な関係を構築できるかにかかっているといえるだろう。

本論文では、カナダ国家の中の先住民であるイヌイットという(かつての)狩猟採集民社会を事例として、いかに世界システムが浸透していようが、国家と先住民社会との政治的な合意(協定)いかんによっては、政治・経済的な変容を急激に遂げつつも、社会関係の再生産が可能であることを提示した。

## 第5節 結論

本論文では、カナダ国ケベック州極北部ヌナヴィク地域アクリヴィク村において1984年から2004年にかけて調査を実施したイヌイットの食物分配を事例として記述し、社会変化や社会関係との関連で分析した。

本研究には、いくつかの問題点が内在している。結論に入る前に、この点を確認しておきたい。第1に、食物分配に関する現地調査を実施するにあたり、外部から来た調査者である私自身の存在や私の滞在先に支払った謝金が、参与観察を行なった食物分配や狩猟・漁

撈活動にどのような影響を与えてきたかについて、十分に自省的な考慮をしながら調査を実施してきたとはいいがたい。第2に、私自身が男性の調査者であるために、女性の食物分配に関して十分な調査ができていない。第3に、アクリヴィク村の事例が、カナダ・イヌイット社会全体にどの程度一般化することが可能かについても、ほかの村における比較可能なデータが存在していないので、明確に述べることができない。第4に、食物分配の実践に深く関連していると考えられる「伝統的な」世界観に関して、私自身の現地調査によっては明確なデータを収集することができなかった。これらの点は、本研究における最大の欠点といえるかもしれない。しかしながら、これらの問題を伴うにせよ、本研究は、アクリヴィク村における約20年にわたる調査をもとにした成果であることを強調しておきたい。以下では、成果を要約した上で、自分なりに研究の意義と成果を総括する。

①ヌナヴィク地域のイヌイットは、カナダ政府とケベック州政府を相手に1975年に「ジュームズ湾および北ケベック協定」を締結した結果、先住民としての諸権利や補償金を獲得し、新たな歴史を歩み始めた。特に彼らは狩猟・生業活動の継続に固執し、ケベック州との政治交渉の結果、「ハンター・サポート・プログラム」の創設に成功した。このプログラムを利用して、イヌイットは生業活動の促進やカントリー・フードの無償分配などを1984年から開始した。政府による経済的な支援とイヌイット自身の継続の意思があれば、狩猟・漁撈活動や食物分配は、貨幣経済が浸透しても存続しうることを示している。

②1980年代半ば以降のアクリヴィク村には、慣習的な分配と「ハンター・サポート・プログラム」による新しいタイプの食物分配が並行して存在している。前者には、ハンター間での獲物の分配、ハンターから村人への食物分配、村人間での食物分配、食事を通しての食物分配、特定の二者間での食物分配、村外の人との食物分配、村全体での共食などがある。後者には村が派遣したハンターが捕獲したセイウチやシロイルカの村全体での分配やハンターから買い上げたカリブーの肉やホッキョクイワナの分配などがある。

③アクリヴィク村の食物分配には、「分与」、「交換」、「再分配」の形態が存在している。本論文で提起した食物分配の類型に「再分配」を追加する必要がある。一方、「再・分配」の類型に該当する事例は、アクリヴィク村では確認できなかった。

④本論文の事例に基づくと、イヌイットの食物分配の中心は、「交換」の形態ではなく、「分与」や「再分配」である。「交換」の形態が事例によってほとんど確認できなかった点を考慮すると、食物分配を「交換」や「互酬性」といった概念で分析することには限界があると主張したい。本研究の結果は、「狩猟採集民の分配は分与である」とするバード＝デイヴィッドの説(Bird-David 1990)や「狩猟採集民の食物分配は再・分配である」とするウッドバーンの説(Woodburn 1998)をある程度支持している。一方、イヌイット社会においては食物分配を食物の「交換」として理解しようとするサーリンズ・モデル(Sahlins 1965)には、妥当しない事例が存在している。

⑤アクリヴィク村の事例に基づくと、イヌイットの現在の食物分配の機能には、(1)カントリー・フードを入手する上で有効な手段、(2)食物の平準化機能、(3)食物分配には既存の

社会関係の確認や再生産の機能、意図的に食物分配をしないことによる既存の社会関係を壊す機能、(4)ハンターが社会的名声や尊敬を獲得する機能、(5)文化的な価値観を実現させ、精神的満足をもたらす機能、(6)コミュニティ意識やエスニック・アイデンティティの生成・維持機能などがある。現在のアクリヴィク村の食物分配は複数の機能を持ち合わせた実践であるといえよう。特に、(1)の機能と関連するが、食物分配は、食料を必要とする人にとって有利に働く実践である点を強調しておきたい。

⑥イヌイットの食物分配は、イヌイットの世界観やキリスト教の教義によって裏付けられた実践である。

⑦アクリヴィク村のイヌイットの食物分配の大半は、親族関係や同名者関係など社会関係に沿った実践であるが、共労、場の共有、弱者(持たざる者)であること、コミュニティ意識、政治協定による公認条件など社会関係以外の要因が条件となる食物分配の実践が存在する。そして食物分配の実践は、拡大家族関係など社会関係やコミュニティ意識などを確認させ、再生産させてきた。

⑧地域的にも、時間的にも極北地域のユピート社会やイヌイット社会における食物分配の形態や機能には差異が見られる。アクリヴィク村の事例は、政治協定によって制度化された食物分配を実践している点ではユニークであるが、拡大家族関係とコミュニティとの相互規定的な関係や「分与」や「再分配」の形態が主流である点では、ほかの地域の事例と共通点が認められる。

⑨食物分配は社会関係や世界観と深く相互に結び付いているため、食物分配の衰退は拡大家族関係の衰退や世界観の変化などを生み出す原因のひとつになると考える。食物分配は、アクリヴィク村の事例のように新たな食物分配の実践が制度化されたとしても、村人の狩猟・漁撈活動が低下すれば、それに連動しながら頻度や範囲の点で衰退していく可能性がある。

⑩現在のイヌイットは国家や貨幣経済(世界経済システム)の中に取り込まれ、かつそれを前提として社会が存在しているが、カナダ政府やケベック州政府との政治交渉と協定を通して自らの生活を構築してきた。イヌイットは、「国家に抗せなかった社会」ではなく、「国家を受け入れ、利用した社会」である。

以上の結論を踏まえて、本論文の意義と主張を再確認しておきたい。本論文ではアクリヴィク村のイヌイットの食物分配に関する事例を民族誌的に提示し、その形態に関して類型を検討した上で、イヌイット社会の食物分配の中心的な形態は「分与」と「再配分」であることを主張した。この形態は、都市在住の場合を例外としてユピート社会やイヌピート社会、ほかのイヌイット社会にも妥当するものとする。さらに、「交換」の形態が事例としてきわめて少ないことから、イヌイットの食物分配を「交換」や「互酬性」の視点から理解することは何ら根拠がないことを指摘した。この見解は、ナヤカ(Bird-David 1990)の事例やハッザ(Woodburn 1998)の事例とも符合する。そのうえで、一歩踏み込んで、

狩猟採集民社会における食物分配の中心的な形態は、「分与」や「再分配」であるという仮説を提起する。この主張は、狩猟採集民社会の食物分配を「交換」や「互酬性」として理解する傾向の強い従来の人類学的な見解に転換を求めるものである。

さらに本論文において食物分配の実践を通してイヌイットの社会関係が再生産されてきた点を指摘し、この食物分配の実践や狩猟・漁撈活動は、現金収入や国家からの経済支援があつてはじめて継続できたことを指摘した。これらの活動が現在でも維持されているのは、イヌイットがカナダに住む先住民として狩猟・漁撈に基づく生活の存続を求めて、カナダ政府やケベック州政府と政治的な交渉に成功し、合意協定を締結した結果であると考えることができる。これはピーターソンが指摘した「第 1 世界の中に取り込まれている第 4 世界の文化の問題」(Peterson 1999)に関する回答の一例である。本論文の事例は、世界システムや国家の中に取り込まれた先住民である狩猟採集民社会が主流国家との政治的な交渉を成功させれば、存続が可能であることを示している。この事例に基づけば、現代の狩猟採集民の先住民社会の将来は、所属する国家といかなる政治的な合意関係を作り出すかにかかっているといえよう。そしてこのことは、カナダやオーストラリア、ニュージーランドなどの先住民の存在を法的に認知している第 1 世界の中の（かつての）狩猟採集民の先住民社会に妥当すると考える。

(謝辞)

私がはじめてケベック州ヌナヴィクのアクリヴィク村を調査のために訪れたのは、1984年8月のことであつた。それから20年にわたり村人の方々からお世話になってきた。私のイヌイト研究はアクリヴィク村の人々の理解と協力、助力があつてはじめて行なうことができた。特にサイモン・アラホさんとマギーさんご夫妻とそのご家族、アドミー・アナウタクさんとアマリーさんご夫妻とそのご家族、ヨネシー・ハックツクさんとそのご家族、アイナリク・アレイコさんとエリサピさんご夫妻は、私を下宿させてくれ、かつキャンプに同行させてくれた。彼らは私の師であり、友人であり、家族のような人々である。この場をかりて、アクリヴィク村の人々にお礼を申し上げたい。

私が曲がりなりにも研究者としての道を歩むことができるようになったのは、大学や大学院において先生や先輩、友人に恵まれたからである。とくに早稲田大学の西村朝日太郎先生、スチュアートヘンリ先生、桜井清彦先生、菊地徹夫先生、正岡寛司先生、坂田正顕先生、高橋龍三郎先生、鈴木洋一先生、そしてマッギル大学の井川＝スミス史子先生、カーメン・ランバート先生、ブルース・トリッガー先生、故リチャード・サルズベリー先生、コリン・スコット先生、ジョージ・ウェンゼル先生、ルッドガー・ミュラー＝ウィレ先生、ジェームズ・サベール先生、トビー・モーランツ先生から時には厳しいご指導を、時には暖かい励ましを頂戴した。記して感謝の微意を表すものである。

また、これまでの職場である北海道教育大学函館校や国立民族学博物館の先輩や同僚の方々からは研究を進めていくうえで便宜を図っていただいたことや学問的な助言や刺激を受けることがあつた。とくに秋道智彌先生と大塚和義先生、谷本一之先生にはお世話になった。そして館長の松園万亀雄先生は、この論文を書き上げるきっかけを作ってくださつた。お礼を申し上げる次第である。

本論文を書き上げるにあたって、スチュアートヘンリ先生から第1章と第2章、第6章についてコメントと批判を頂戴した。また、図表と地図の作成などについては池上弘枝さん、語句の統一などについては石川泰子さんの助力を得た。記して感謝する次第である。博士論文申請のための予備審査を、松山利夫、杉本良男、佐々木史郎の三先生がお忙しいにもかかわらず、引き受けて下さつた。さらに、スチュアートヘンリ（本多俊和）、松山利夫、竹沢尚一郎、佐々木史郎の4先生がご多忙の中、本審査を担当された。これらの諸先生に心からお礼を申し上げる。

最後に現在の私があるのは、祖父母の岸上初治と久美、父母の岸上貢と輝子のおかげである。また、この10数年の研究を陰で支えてくれたのは、妻美和であり、2人の子供真代と佳保里であつた。祖父母はすでにこの世を去つたが、家族のみんなにも心からお礼を申し上げたい。

## 注

### 第1章 序論の注

(注 1)カナダの準州は連邦政府の行政的な管轄下にある。一方、ケベック州のイヌイットはケベック州と間接的ながら連邦政府の行政的な管轄下にある。ヌナヴィク・イヌイットとケベック州政府、カナダ政府との関係については、スチュアート(1997a; 2002)を参照されたい。また、先住民の概念や先住民運動に関しては、スチュアート(1997b, 1998b)を参照されたい。

(注 2)「カラハリ論争」については、Kent(1993)や Stiles(1992)、池谷(1996)による解説がある。また、狩猟採集民研究全体に関する成果を概略した研究として Kelly(1995)がある。最近、バーナード編(Barnard 2004)の狩猟採集民研究の動向に関する論文集が出版されたが、地域的にアフリカに偏っており、北アメリカやオーストラリアに関する諸研究が適切に紹介されていない。

(注 3)「カラハリ論争」は、極北研究者の間ではほとんど問題とはされていなかった。極北地域の場合、ヨーロッパ人やほかの先住民との接触およびその後の関係が歴史的に比較的詳細に記録されており、毛皮交易や国家からの影響は社会変化を研究する際には、変化の要因として取り扱われてきた。むしろ問題は、民族誌的現在の時点を設定し、欧米人と接触する以前の先住民の社会や文化は変化に乏しかったと仮定したことであった。このため人類学者は、欧米人との接触時前後の先住民の伝統社会や伝統的な文化の再構成に努めてきたことである。その例のひとつはバリクシの民族誌(Balikci 1970)である。考古学者は、北アメリカの先住民文化はヨーロッパ人と接触する以前から変化していたことを指摘していた(Trigger 1980)。

(注 4)日本における北アメリカの極北研究の動向については小谷(1986)、岡田(1996)、Kishigami(2004)、岸上(2005)が存在するので、本論文では解説をしない。カナダ・イヌイットに関する文化人類学的研究に限定すると、1990年代よりスチュアート・ヘンリと大村敬一がヌナヴート準州のクガールク(ペリー・ベイ)村において調査を実施し、多数の成果を世に問うている。スチュアートはおもにネツリック・イヌイットの生業活動の現状や現代的な意義やイヌイットのイメージに関する研究を行ってきた(例えば、スチュアート 1993a, 1995, 1996, 1998a; Stewart 2002)。また、最近では先住民と国家の関係や先住民運動に関する研究を行っている(スチュアート 1997, 1998b, 2002)。大村敬一は、イヌイットのアートや環境認識、自己イメージ、伝統的な生態学的知識に関する研究を行ってきた(例えば、大村 1996, 1998, 1999, 2001a, 2001b, 2002 a, 2002b, 2003; Omura 1998, 2002, 2005)。また、岩崎まさみはカナダの西部極北地域においてシロイルカ資源の共同管理を研究してきた(岩崎 1999, 2002, 2003; Iwaski-Goodman 2005)。私自身は、ヌナヴィク地域のアクリヴィク村やモントリオールを中心にイヌイットの社会・経済的な側面に関する文化人類学的な研究を実施してきた。より詳しくは、岸上(1998, 2005)を参照されたい。

## 第2章の注

(注1) モースの贈与論とレヴィ＝ストロースの交換理論は、その後、オセアニア研究において、ワイナー(Weiner 1985, 1992)やゴドリエ(2000)によって、贈与されない聖なるモノに着目した研究へと展開をみる。ワイナーは、譲渡できないモノに着目し、その贈与行為を「与えながら保持する」と指摘した(Weiner 1985, 1992)。ゴドリエ(2000)は、ワイナーの見解に基づきながら譲渡できないモノの存在こそが交換を可能にし、交換は社会構成の原則となると主張した。譲渡できないモノとは、聖なるものを意味し、それを与えるために保持し、かつ保持するために与えるのだ、と述べている。また、日本では須藤(1989)によるサタワル社会の人生儀礼における交換や贈与の象徴性に関する研究が存在している。それらの研究は論文とは直接関係しないのでここでは紹介を割愛する。交換理論に関する諸説の紹介については、Befu(1977)や伊藤(1995)、小馬(2000)などが存在する。

(注2) キャンプ地では構成員全員の間で食物分配が行われるに対し、人口規模が大きく、諸キャンプ集団が混住している村では、異なるやり方で食物分配が行われるのはなぜかを解明することは重要な研究課題であるといえよう。この問題を解明するためには、食物分配が行われる社会関係を詳細に調査し、分析することが必要となろう。

(注3) 最近の人類学的研究では、*tolerated scrounging* という表現を使っている(Gurven, Hill and Kaplan 2002; Ziker 2003; Ziker and Schnegg 2005)。表面的には「容認される盗み」(Blurton Jones 1987)と「要求による食物分配」(Peterson 1993)に共通性が見られる一方、根本的な相違点も存在する。前者は、ベネフィットを最大化しようとする個体間のやり取りであるのに対し、後者は特定の社会関係に沿って行われる食物分配である。

(注4) オーストラリア先住民のグループであるヨルングの女性に着目をした人類学的な研究を実施した窪田は、男性は現在でもクランの中心的な男性に資源が集中し、その後クランの成員に分配される「再分配システム」に組み込まれているが、女性はそうではなく、アート制作などから自らが稼いだ現金は自由に処分できることを指摘している(窪田 2005: 169-170, 179-180)。また、サン社会の女性の食物分配を調査した今村(1993)も食物の分配において男女差があることを報告している。私が知る限り、男女差に着目した食物分配研究はあまり行われていない。今後の研究課題のひとつであると考ええる。

(注5) 捕獲が困難な大型動物の分配において食料を供給することと親族関係との間には関係がないという報告がほかの地域での研究から出ているので(Betzig and Turke 1986; Gurven, Allen-Arave and Hurtado 2001; Alvard 2002; Hawkes and Bleige Bird 2002)、食物分配と親族関係との間には必ずしも相関関係があるとは限らない。

(注6) 貨幣経済の浸透が食物分配に及ぼしている影響は多様である。オーストラリア先住民ジナンが住むガマディ村で調査を実施した松山は、地元でとられたワラビーや魚は分配されるが、小麦粉や缶詰など購入したマーケット・フーズはほとんど分配されることがないと報告している(松山 1994a: 100)。グリーンランドのアンマサリク地区イセトック村で調査を実施したホブルスラド＝ブローダは、カントリー・フードのみが世帯を超えて分配



され、現金や店で購入された物品は世帯を超えて分配されることがほとんどないと報告している(Hovelsrud-Broda 1999: 45-46)。一方、カナダのヌナヴィク地域のアクリヴィク村やアラスカのグイッチン社会などでは、マーケット・フーズも分配の対象となっている(例えば、Inoue 2004: 187)。

(注 7) 地縁家族とは、ひとつの家族の成員が異なる住居もしくはテントに住んでいるが、その成員がひとつの家族組織の一部として行動をとっているような場合の家族集団のことである(Burch 1975: 237)。ひとつのキャンプがひとつの拡大家族集団やキンドレッドから構成され、狩猟など経済活動が世帯を超えた複数の親族によって協同して行われているような事例を指す。

(注 8) ラングドンとは、次の 8 つの条件が満たされれば、アラスカのユピックは貨幣経済の下で生業活動が続けていくことができると指摘している(Langdon 1991: 286-288)。その 8 条件とは、(1)人口密度が野生資源に対して相対的に低いこと、(2)資源が適切に供給されており、悪化していないこと、(3)資源に対する外からの需要が限られていること、(4)商業セクターの需要が、地元の人々の許容内にあること、(5)土地や海域に関して先住民の保有システムが維持されていること、(6)地元の生産に税金がかけられないこと、(7)生産単位が親族に基づいていること、(8)現金が物神化していないことである。

(注 9) マルクスは、『経済学批判』の序言の中で、次のような社会論を展開している。「人間は、彼らの生活の社会的生産において、一定の、必然的な、彼らの意志から独立した諸関係に、すなわち、彼らの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係に入る。これらの生産諸関係の総体は、社会の経済的構造を形成する。これが実在的土台であり、その上にひとつの法律のおよび政治的上部構造が立ち、そしてこの土台に一定の社会的諸意識形態が対応する。物質的生活の生産様式が、社会的、政治的および精神的生活過程一般を制約する。—中略— 経済的基礎の変化とともに、巨大な上部構造全体が、あるいは徐々に、あるいは急激に変革される」(マルクス 1953 訳: 15-16)。

(注 10) オーストラリアやカナダにおいては、僻地に住む先住民や大都市や中都市に住む先住民が存在しており、生活様式や個人の志向における多様化が進んでいる。例えば、オーストラリア先住民については、松山(1994, 1999, 2004)、鈴木(1995)、小山・窪田(2002)、窪田(2005)を参照されたい。カナダ・イヌイトについて岸上(1998, 1999a, 1999b)やKishigami(2004b)、Olofsson(2004)を参照されたい。

(注 11) このモデルは、生業活動と社会関係の相互依存を示しているが、フィエナップ＝リオードン(Fienup-Riordan 1983)やナタル(Nuttall 1991, 1992)が主張するように、生業活動と世界観との間にも相互依存関係が認められる。したがって、本来のモデルは 3 つの要素(生業活動、社会関係、世界観)から形成されているといってもよい(岸上 2005b: 18)。

(注 12) P. ブルデューの著作のいくつかは、翻訳されている(例えば、ブルデュー 1988a, 1988b, 1989, 1990)。

(注 13) 村に滞在しながら調査する際に支払った下宿代と調査謝金について、1984 年から

1988 年までマギル大の博士課程に在学している学生として調査をしていた時には、3 食付の下宿代として 1 泊 20 カナダ・ドルを、インフォーマントには 1 時間 10 カナダ・ドル、通訳には 1 時間 10 カナダ・ドルを支払っていた。1990 年以降の調査では、1 泊 30~50 カナダ・ドルを、インフォーマントと通訳にはそれぞれ 1 時間に付き 20 カナダ・ドルずつを支払ってきた。なお、2005 年 4 月 14 日の時点で 1 カナダ・ドルは、約 88 円であった。この 20 年間のうちに 1 カナダ・ドルは、180 円から 65 円の間で変動してきた。私の支払った現金や私の存在自体が、調査対象者にどのような影響を及ぼしているかに関しては、自省的な考察を十分にはできなかったことを認めざるを得ない。

(注 14) 松園は、内省の人類学のことを「調査している研究者が自分を他者とみなし、自分自身を観察の手段として意識することですが、いいかえれば、それまで問題にされてこなかったフィールドワーカー自身の姿というものを民族誌の中で露に示し、その属性と個性というフィルターをとおしてデータが集められ解釈がなされる過程を明確に意識し、そのことを書き込むという民族誌記述の方法です」と述べている(松園 2002: 13)。

### 第 3 章の注

(注 1) 北アメリカの極北地域全体の歴史に関しては、Damas(1996)がある。ダマスは、世紀ごとに地域について記述するという方法を採用している。

(注 2) コリニョンは、1970 年代後半以降の現代期には、大半のイヌイットにとって大地は住む所ではなく、食料を獲得する場所や楽しむ場所へと変貌したという。大地はあたかも「スーパーマーケット」のような場所へと変わったと形容している(Collignon 1993: 86)。

(注 3) 北アメリカの極北地域の植物については、Mallory and Aiken (2004)や増沢(2002: 60-86)を参照されたい。ヌナヴィク地域の植物については Blondeau and Roy (2004)を参照されたい。

(注 4) カナダ・イヌイットのキリスト教への改宗については、Kishigami(1994)と岸上(2002b)を読みたい。また、世界各地のキリスト教化については杉本(2002)を読みたい。

(注 5) カナダの東部極北地域において 1922 年から 1968 年にかけて使用されたパトロール船は、Arctic 号(1922-25 年)、Beothic 号(1926-31 年)、Nascope 号(1933-47 年)、C.D. Howe (1950-68 年)であった(Mackinnon 1991)。

(注 6) カナダのイヌイット社会において、販売するための滑石彫刻の制作が本格的に始まったのは、ジェームズ・ヒューストンが 1949 年にヌナヴィクのイヌクジュアク村を訪問したことに端を発する。同氏は、イヌイットの滑石彫刻をカナダ政府北方省やカナダ工芸ギルド協会、ハドソン湾会社から資金援助を受け、協力しながら販路を広げていった。イヌイット・アートについては、The Canadian Museum of Civilization (1993)、Hessel (1998)、岸上 (2001a)、大村(2001b)などを参照されたい。また、1949 年以前のカナダ・イヌイットによる彫刻品とその制作の歴史については、Martijn(1968)を参照されたい。

(注7)雑誌 *Taqralik* の 1976/1977Dec./Jan(Vol.6)の 4-6 ページと同誌 1977May/June(Vol.10, No.2)の 27-29 ページを参照されたい。

(注8)2004 年 2 月の時点でアクリヴィク生協には、総支配人(1 人)以下、副支配人(1 人)、店長(1 人)、雑貨マネージャー (1 人)、在庫係 (2 人)、庶務マネージャー(1 人)、レジ係 (2 人)、ホテル・マネージャー (1 人)、会計係 (1 人)、郵便係 (1 人)、ガソリン担当マネージャー (1 人)、ガソリン・灯油配達係 (1 人)、購入マネージャー(1 人)の職があった。

(注9)1990 年代の後半には、安価な韓国製のテレビが日本製に代わって、よくアクリヴィク村の一般家庭に普及していた。

(注10) 風間計博は、従属理論や世界システム論を批判検討し、周辺の世帯は世界システムに巻き込まれて成立しているとしても、世帯の内部では世界システムの論理ではなく、世帯の論理が支配していることを指摘している(風間 1998: 9; 2003: 14)。

#### 第4章の注

(注1)ヌナヴィク地域の物価は、ケベック市と比べると、約 1.5 倍以上である。その事例として、次の表を参照されたい。

ヌナヴィク地域とケベック市における食品の価格(カナダ・ドル)

|            | ヌナヴィク地域 | ケベック市  |
|------------|---------|--------|
| 牛肉(1kg)    | \$7.95  | \$5.52 |
| リンゴ(1kg)   | \$2.84  | \$2.40 |
| ポテト(4.5kg) | \$7.18  | \$3.17 |
| バター(454g)  | \$4.34  | \$3.17 |
| タマゴ(12 個)  | \$3.11  | \$1.78 |
| ミルク (1l)   | \$2.72  | \$1.38 |
| 食パン(675g)  | \$1.99  | \$1.46 |

出典：(Duhaime et al. 2000 Nunavik Comparative Price Index. Quebec: GETIC, Universite Laval). の P.10 より

(注2)「真の食べ物」とは肉や地元産の食物のことである。イヌイット語では、ニリマリク (*nirimarik*)やニキツイナック (*niqituinnaq*)という。Brody (1987:55)や Searles (2002: 64)を参照されたい。

(注3)イヌイットの狩猟・漁撈を金銭的なコスト・ベネフィットで分析した最初の研究は、L. Müller-Wille(1978)である。その後、ウェンゼルらはクライド・リバー村のイヌイットの狩猟活動を分析し、地元の動物の肉を利用した方が、牛肉や鶏肉、豚肉を購入するよりも経済的であると指摘している(Wenzel 1991)。一方、ペリー・ベイ村のイヌイットの狩猟・漁撈活動を研究したスチュアートはその経済性に疑問を投げかけている(スチュアート 1993: 230)

31-32; 1995: 46-48)。ヌナヴィク地域では、地元産の肉や魚は、「ジェームズ湾および北ケベック協定」に調印したイヌイト以外に売するためにはライセンスが必要であるため、一部の例外を除けば商品として売買されていない(Gombay 2005)。

(注 4) イヌイトの狩猟・漁撈権は「ジェームズ湾および北ケベック協定」によって保証されている(Otis 2002)。

(注 5)ヌナヴィク地域のイヌクジュアク村やアクリヴィク村では、スノーモービルを利用したアザラシの呼吸穴での狩猟が実施されている。1 人もしくは 2 人のハンターが呼吸穴でアザラシが来るのを待ち、もうひとりがスノーモービルでその呼吸穴から数百メートル離れて同心円状に走行させる。スノーモービルの音を利用して、アザラシがハンターから遠い所にある呼吸穴を使用せず、ハンターが待つ呼吸穴を利用するようにと仕向ける。

(注 6)ヌナヴィク地域では、ホッキョクグマのスポーツ・ハンティングは禁止されており、生業捕獲のみが行なわれている。一方、ヌナヴート準州では、ホッキョクグマにはクオータ制が導入されている上に、スポーツ・ハンティングも実施されており、資源保全が大きな問題となっている(Wenzel 2005)。

(注 7)この法律の正式名称は、*An Act respecting the support program for Inuit beneficiaries of the James Bay and Northern Québec Agreement for their hunting, fishing and trapping activities* (R.S.Q., c.P-30.2)である。

(注 8)支出額は、百桁を四捨五入した概数である。

(注 9) フリタック・プロジェクトは、地域全体のハンター・サポート・プログラムとして 1998 年に開始された。その目的は、イヌイトの衣類を自家生産することを促進させることであった。年間 15,000 カナダ・ドルが各村に提供される。各村は、この資金を利用して村人から毛皮製のパーカー、ズボン、手袋、冬靴、バッグなどを購入する。

(注 10)この拡大家族は、キージングの「キンドレッド」に相当する。フリーマンは、キンドレッド概念を「ある個人に知られたすべての血縁者」とし、この概念から姻戚者をすべて排除した(Freeman 1961)。一方、キージングは、キンドレッドを「個々人をとりまく親族からなる社会集団またはカテゴリー。あるいは特定の文化的な承認を与えられているその範囲の親族」(キージング 1982: 244)と定義している。なお、親族名称や親族のカテゴリー化については、地域差がある(Befu 1964)。

(注 11)日本人の視点からすると、イヌイトの夫婦の絆は大変に強いように思われる。特にハンターとその妻は長時間を村の内外で共に過ごす傾向がある。また、長年連れ添ってきた妻を亡くした老人が精神的におかしくなった事例をこの 20 年間、私はアクリヴィク村において多数見てきた。

(注 12)イヌイトの養子の研究には、Dunning(1962)、Rousseau(1970)、Guemple(1979)、岸上(1988)などがある。

(注 13)イヌイトの名前の研究には、Wachtmeister (1956)、Henrich(1963a, 1969)、Guemple(1965)、Saladin d'Anglure (1970)、Dufour(1977)、Robbe(1981)、Fienup-Riordan

(1983)、Williamson (1988)、Trott (1989)、Nuttall (1992)、Alia (1994)、Kishigami (1997)、岸上(1998)などがある。

(注 14)イヌイットの儀礼的な助産人に関する研究には、Guemple(1969)や岸上(1998)などがある。

(注 15)ヌナヴート準州のバフィン島東部のキキックタルジュアック村(Qikiqtarjuaq)にもイギリス国教会とペンテコスタル派の2つの教会が存在している。ニコル・スタケンバーガーは、その村におけるクリスマスの活動やキリスト教の活動についてモノグラフを出版している(Stuckenberg 2005)。

## 第5章の注

(注 1) 地元でとれる鳥獣や魚はイヌイットにとって、原則として売買の対象とはならないが、ヌナヴート準州やヌナヴィク地域では極北地域でとれる鳥獣や魚が生協や個人によって売買されている。1999 年 10 月に私が訪れたクージュアック村にある個人商店では、カリブーの干肉が 1 キログラムあたり 66 カナダ・ドルで、ホッキョクイワナの干魚が 1 キログラムあたり 40 カナダ・ドルで、3 枚におろしたホッキョクイワナが 17 カナダ・ドルで販売されていた。このほかカリブーの肉、ブルーベリー、冷凍のホッキョクイワナ、ヌナヴート産のイッカクのマツタックも販売されていた。また、同村にあるノーザン・ストアーではヌナヴート産のカリブーの干肉が販売されていた(2003 年 12 月)。2004 年 2 月には、アクリヴィク村の生協で冷凍のホッキョクイワナやブヴィルニツック村で加工されたホッキョクイワナの燻製が販売されていた。また、村人が海氷に穴を開けて捕獲した二枚貝(現地名 *uviluq*)とウニをほかの村人に販売していた。

(注 2)アクリヴィク村の古老の女性(1916 年生まれ、1998 年当時 82 歳)は、子供のときには、シロイルカには分配の規則が存在していたし、男性と女性で食べてよい部位、いけない部位があった、と語った。彼女はシロイルカの分配の規則の内容についてほとんど記憶していなかったのも、記録に残すことはできなかった。1958 年ころにヌナヴィク地域のハドソン海峡に面したサルイット村で調査を実施したグレバーンは、シロイルカの可食部位に関する報告を行っている(Graburn 1969: 69)。

(注 3)ヌナヴィク方言では、話者によって食物分配に関する表現に差異が認められる。下記のデータは、アクリヴィク村在住者とイヌクジュアック村出身者から 1990 年代後半に収集したものである。なお、書き起こしをした通訳のひとり Sailasie Qumak は、表記上、“q”と“k”、“y”と“j”とを区別せずに使用していることを付け加えておく。

(1) Informant: Nowja Qinuajuak (72 years old)

Date January, 26, 1998

Place: Akulivik, PQ, Canada

Interviewer: Nobuhiro Kishigami

Interpreter and Transcriber: Sailasie Qumak

*ningik*: share from hunting

*parurark*: to give meat

*aitutsiak*: to receive meat or other things from someone else

*minausiark*: bringing meat (or food) to one's home from other houses/tents

*niririaktukutnik*: to invite others to meals and share food

*aitsiyuk*: to give meat to another person, being asked to do so (正しくは、to give something to another person)

*nirimanik*: community feast

(2) Informant: Amaly Anautak (Inuktitut teacher, originally from Puvirunituq, PQ, Canada)

Date January, 26, 1998

Place: Akulivik, PQ, Canada

Interviewer: Nobuhiro Kishigami

Transcriber: Amaly Anautak

*paruttuq*: to give meat

*minartuq*: bringing meat (or food) to one's home from other houses/tents

*ningiqtuq*: share from hunting (正しくは、he/she shares meat from hunting)

*nirigiaqtutuk*: to invite others to meals and share food

(3) Informant: Laly Alayco (84 years old)

Date January, 27, 1998

Place: Akulivik, PQ, Canada

Interviewer: Nobuhiro Kishigami

Interpreter and Transcriber: Sailasie Qumak

*aituiyuk*: to give meat to another person, he giving food (正しくは、to give something to another person)

*aitutauvunga*: I receive meat from somebody

*paruktuk*: to bring meat back to one's house from (an)other house(s)

*kaikurikruk*: to invite somebody to one's meals and share food with that person

*nirikatigirknirk*: to share meat through eating together

(4) informant: Sakiriasie Nappatuk, Snr. (67 years old)

Date January, 28, 1998

Place: Akulivik, PQ, Canada

Interviewer: Nobuhiro Kishigami

Interpreter and Transcriber: Sailasie Qumak

*aituijuk*: to give meat to others (正しくは、 to give something to another person)

*nirkituktuk*: to bring meat to one's house from other houses

*kaikurunik*: invite somebody to one's meal

*parunayuk, parutuk, minaktuk*: delivering meat

*nirikatigituit*: eating together in an igloo

*nirivakyuatut*: community feast

(5) informant: Lucassie Ammamatuak (67 years old)

Date January, 30, 1998

Place: Akulivik, PQ, Canada

Interviewer: Nobuhiro Kishigami

Interpreter and Transcriber: Sailasie Qumak

*paruruk*: give meat to others

*ningktuk*: the hunter who shares game after hunting

*aitsiyuk*: to bring food or other things to home

*kaikurik*: to invite somebody to one's meal

(5) informant: Annie Aupaluk (82 years old)

Date February, 3, 1998

Place: Akulivik, PQ, Canada

Interviewer: Nobuhiro Kishigami

Interpreter and Transcriber: Sailasie Qumak

*ningqtuq*: (1) The hunter cuts a seal on ice and others get shares or (2) somebody brings a whole seal to the village, cuts it and other people get pieces of the meat.

*ningik*: share, one's share which he/she is taking home

*parutuq*: delivering a piece of food or any one item

*parurarktuq*: a person delivering a lot of food (more than one kinds of food or

items) and things from house to house

*aituiyuk*: to give, giving

*minartuq*: If I am given food and take it home, it is *minartuq*.

*minausiark*: to receive something

*nirikituktuk*: (I am getting food if I knock on your door.)

*aitsiyuk*: getting

*nirigiaqtutuk*: He/she is gone to somebody's place to eat.

*kaikurikruk*: telling someone to come over (almost the same meaning as *kaikuririk*)

*kaikurik*: (If you ask me what I am doing, I would tell you to come over.)

*nirimanik*: community feast

*nirikatigirkirk*: more than two of us are eating

*nirkatigirk*: 2 persons are eating

(6) Informant: Lally Nappatuk and Louisa Qaqtuk (both are Inuktitut teachers  
in Akulivik, originally from Inukjuak)

Date February, 13, 2004

Place: Akulivik, PQ, Canada

Interviewer: Nobuhiro Kishigami

Transcriber: Lally Nappatuk

*Ningirtuq*: giving meat while still out

*pajuttuq*: giving from house to house

*aituijuq*: giving something willingly

*minartuq*: one bringing food to his/her home

*minarartuq*: bringing food or something to more than one house

*pajurartuq*: bringing food to more than one house

*aitsirartut*: people getting something from their place

*nirimmaatut*: community-wide feast

*taursiiqattautiniq*: trade/ exchange

*niurrutairtuq*: trading, selling (furs/skins)

*niurrutilik*: trading/selling his/her own things

*niurrusirtuq*: trying to sell

*quviasuvsiijuq*: Christmas gift

*inuulirvisiurtumik aittuijuq*: birthday gift



(7) informant: Jobie Weetalktuk (Avataq Cultural Institute in Montreal, originally from Inukjuak)

Date February, 18, 2004

Place: Akulivik, PQ, Canada

Interviewer: Nobuhiro Kishigami

Transcriber: Jobie Weetalktuk

*niqimik aittuijuq*: to give meat

*qaiquijjuk*: to invite somebody to one's meal

*ningiktuk*: to share game at a hunting site

*nirimatu*: eating together

*pajuttuq*: to bring food to other house, delivering food to other houses

(注 4) アクリヴィク村では、ライチョウは健康を促進向上させる薬のような食べ物とされている。

(注 5) イヌイットの食事については、スチュアート(1993b)や岸上(2005a)を参照されたい。イヌイットやイヌヴィアルイットの食物の好みやカントリー・フードの重要性については、Wein and Freeman (1992)や Freeman (1988b, c)、Kuhnlein et al (2005)などを参照されたい。

(注 6) 毎年、日が長くなり、氷雪が解け地面が出ると、村全体で村の掃除をする。この日は春の始まりを告げる日でもある。掃除が終わってから野外で共食会が村役場によって開催される。

(注 7) ヌナヴィク地域においては、シロイルカは 1980 年代からカナダ政府の漁業海洋省と利用者であるイヌイットとの間で共同管理(Co-Management)が行われている。この管理体制の変遷や問題点については、岸上(2001b, 2003a)と Kishigami(2005)を読みたい。

(注 8) ハンター・サポート・プログラムの資金が不足している場合には、村に 2 隻ある私有大型ボートを借り出してシロイルカ猟を行ってもらうことがあった。例えば、2000 年には資金が不足していたために村有ボートを派遣せず、村会議は村にある私有船をチャーターしてシロイルカ猟を実施し、肉とマツタックを村人に無償で提供した。

(注 9) ハンター・サポート・プログラムの資金が不足している場合には、村に 2 隻ある私有大型ボートの 1 隻に借り出してセイウチ猟を行ってもらうことがあった。例えば、2000 年には資金が不足していたために村有ボートを派遣せず、村会議は村にある私有船をチャーターしてセイウチ猟を実施し、セイウチ肉を欲しがっていた村の全世帯の約 3 分の 2 に無償で提供した。

(注 10) 発酵した緑色味を帯びたセイウチの肉は、イグナークと呼ばれる。

(注 11) 1989 年にはカリブーが村の近辺に出没し、捕獲できるようになった。このため村は

カリブー狩猟遠征をやめた。ホッキョクイワナ漁遠征は経費がかさむため、中止となった。

(注 12) 1997 年の時点では、アクリヴィク村のハンター・サポート・プログラムは、ワモンアザラシ、アゴヒゲアザラシ、ホッキョクイワナ、ホワイトフィッシュをそれぞれ 1 ポンドあたり 2.5 カナダ・ドルで購入していた。同年には、クジュアラールピク村とウミウヤック村からの依頼で、それぞれ 600 ポンド (約 272 キログラム、約 120 匹) ずつのホッキョクイワナを捕獲し、1 ポンド (0.453 キログラム) あたり 2.5 カナダ・ドルで売ったという。

(注 13) シロイルカの肉は、村の中老年の人の食料やイヌのえさになる。多くのイヌイットはマツタックを好んで食べるが、若者の中にはシロイルカの肉を捨てる人もいる。

(注 14) 村のハンター・サポート・プログラムでは 1998 年 8 月にはホッキョクイワナを 1 ポンドあたり 1.75 カナダ・ドルで買い取っていたが、10 月以降は 1 ポンドあたり 1.5 カナダ・ドルで買い取った。

(注 15) ドレはヌナヴィク地域のクアタック村の食物分配について、村人はみんなと分配するといっているが、実際には家族やキンドレッドの中で分配が行われていると指摘している (Dorais 1997: 68)。アラスカのイヌピアックを研究してきたバーチも同様の指摘を行っている (Burch 1988: 108-109)。

(注 16) ヌナヴート準州のイヌイットが食物分配をどのように語っているかについては、Bennett and Rowley (2004: 86-94) を読みたい。

## 第 6 章の注

(注 1) R. ペインは、カナダ政府によるイヌイット政策を「福祉植民地主義」という概念で特徴付けた。カナダ政府が支出した莫大な額に上る福祉金や各種の補助金はイヌイットの生活を安定させた一方で、意図せずしてイヌイットの国家への社会・政治的な依存体制を生み出した点をペインは強調している (Paine 1977)。

(注 2) 最近では食料がないイヌイットは、村内の FM 放送局に電話をかけ、村人に食料をくれるようにと放送で頼むことがある。これはタイプ (3) 「要求による分配」に相当する。

(注 3) オーストラリア先住民社会における食物分配においては、既存の社会関係やアイデンティティーを確認させ、維持させるという機能があることが指摘されている (Myers 1988; Peterson 1993)。アフリカのアカ・ピグミーを調査した北西も食物分配による社会関係の形成と確認の機能を指摘している (北西 2004)。

(注 4) シャボアの比較研究によると、ハンター・サポート・プログラムからの現金収入の総額は、村全体の総収入の 1.2 パーセント程度にすぎないという (Chabot 2001)。

(注 5) 私は、別稿において現在のイヌイットの狩猟・漁撈活動をポリティカル・エコノミー論の視点から検討し、その活動はイヌイットにとって文化的、栄養学的、経済的、社会的、政治的に意義のある活動であると主張した。その上で、現在のイヌイットは、狩猟・漁撈と分配、消費から構成される生業活動そのものが、イヌイットにとって多機能や複合的な

効果を持つ資源として利用されていると指摘した（岸上 2005b: 21）。

（注 6）ソ連時代にはシベリアや極東の北方少数民族に対してソ連政府は経済的な優遇措置を実施したために、多くの先住民は生活がロシア化する一方で、ワナ猟や狩猟、トナカイ遊牧などを継続することができたが、ペレストロイカ以降の国家の援助がなくなるとそれらの経済活動は急激に衰退し、生活を維持することすら困難になってきている。この事例は国家の中で狩猟・漁撈・遊牧文化を維持する上でいかに国家の役割が大きいかを示しているといえよう（佐々木 1997, 1998: 11; Gray 2005; 大島 2005; 渡部 2005）。

（注 7）北西準州のホルマンにおける若者の生業離れについて、コンドンらは①狩猟・漁撈の訓練不足、②狩猟・漁撈道具の購入のための資金不足、③若者が「白人」の食品を好んでいること、④狩猟や漁撈には経済的な魅力がないこと、⑤賃金労働への依存度が高くなることに伴う時間的な制約の増大、⑥バスケットボールやホッケーに熱中することの6要因を指摘している（Condon, Collings and Wenzel 1995: 32）。

（注 8）ヌナヴィク地域のイヌイットは、政治的に利害が対立しているケベック州政府とカナダ政府との関係を巧みに政治的な駆け引きに利用しながら、政治交渉を行ってきた。そして2005年には政治的な自律性をより高める形態へとヌナヴィク地方の政府形態を再編するための政治協定の締結に成功した。

引用・参考文献

(1)引用したハドソン湾会社の交易所日誌、カナダ政府公文書、国勢調査

ハドソン湾会社の交易所日誌

HBC record, Cape Smith Post B398/a/, 1931/1932

HBC Record, Cape Smith B398/a/6 1932/1933

HBC Record, Cape Smith B398/a/8 1934/1935; B398/a/10 1938/1939

HBC Record Wolstenholme Post B368/a/3

カナダ政府公文書

Public Archives Canada, RG85, Vol.64 File164-1, Pt.1. 1915-1941 (Census)

Public Archives Canada, RG85, Vol.75, File201-1[16]

Public Archives Canada, vol.849, File 7819. Minutes of a Meeting of the Canadian Government Party on Board the R.M.S. Nascopie, 31, July 1934 --- F. Gilbert

Public Archives Canada, RG85, Vol.835, File7415

Public Archives Canada, RG85 Acc84-85/554 Box2.

Public Archives Canada, RG85, Vol.849, File 7819 Daily Report of the Eastern Arctic Patrol, 1933, by A. P. Norton

Public Archives Canada, RG85, Vol.98 File252-1-2 Pt.1. 1943-47.

Public Archives Canada, RG86, 907, File 10561(1939)

Public Archives Canada, RG85, Vol. 1002, File 16480.

Public Archives Canada, RG85, Vol.1127, File201-1-8, Vol.2-1

Public Archives Canada, RG85, Vol. 1127, File 201-1-8, Vol.2-1 Report on Eastern Arctic Patrol (1951). Sources of Eskimo Income for Year Ended June 30, 1951, Cape Smith

Public Archives Canada, RG85, Vol.1130, File253-1, Vol.2 File7644.

Public Archives Canada, RG85, Vol.1130, File254-1, Vol.1-A 1947-50.

Public Archives Canada, RG85 Vol.1130 File 253-1, vol.2, Bureau of Northwest Territories and Yukon Affairs 1948

Public Archives Canada RG85, Vol. 1269, File 1000/304 vol.3 Royal Canadian Mounted Police Conditions Amongst Eskimos Generally E9 District, Port Harrison, P.Q. June 11<sup>th</sup>, 1956

Public Archives Canada RG85, Vol. 1269, File 1000/304 vol.3 Royal Canadian Mounted Police Conditions Amongst Eskimos Generally E9 District, Port Harrison, P.Q. June 11<sup>th</sup>, 1958

Public Archives Canada RG85, Vol. 1934, File A-251-7, Pt.2 1963-1964 Extract from

Povungnituk Report for July to September 1963. File A-205-4/305

Public Archives Canada RG85, Vol.1934, File a-251-7, Pt.2.1963-1964 Extract from Povungnituk Report for July to September 1965 File A-205-4/305

Public Archives Canada RG85, Vol. 1962, File A-1006-8, Pt.1. 1964-1966 Quebec Province, Memo for the Regional Administrator re' Report on Povungnituk: July-September 1966 from J.D. Furneaux d.12 October 1966

#### 国勢調査データ

Statistics Canada 1986 Census, Quebec: Part 2 Vol.2 Census Divisions and Subdivisions.(Catalogue 94-110).

Statistics Canada 1991 Census, Profile of Census Divisions and Subdivisions in Quebec – Part B Vol.2. (Catalogue 95-326).

Statistics Canada 1996 Census, Profile of Census Divisions and Subdivisions in Quebec – Vol. IV. (Catalogue 95-186-XPB).

Statistics Canada 2001 Census, Profile of Census Divisions and Subdivisions in Quebec – Vol. IV. (Catalogue 95-219-XPB).

#### (2)専門書・学術論文・その他

(日本語文献) 五十音順

秋道智彌・岸上伸啓編

2002 『紛争の海：水産資源管理の人類学』京都：人文書院。

池谷和信

1996 「伝統主義者と修正主義者とのあいだの論争をめぐって：カラハリ・サン研究の事例」『民博通信』73: 64-77。

1996 「生業狩猟から商業狩猟へ：狩猟採集民ブッシュマンの文化変容」田中二郎・掛合誠・市川光雄・太田至(編)『続自然社会の人類学』pp.21-49, 京都：アカデミア出版会。

2002 『国家のなかでの狩猟採集民：カラハリ・サンにおける生業活動の歴史民族誌』（国立民族学博物館研究叢書[4]）大阪：国立民族学博物館。

池谷和信編

2003 『地球環境問題の人類学』東京：世界思想社。

市川光雄

1982 『森の狩猟民ームブティ・ピグミーの生活』京都：人文書院。

1991 「平等主義の進化史的考察」田中二郎・掛谷誠編『ヒトの自然史』pp.11-34, 平凡社：東京。

伊藤幹治

- 1995 『贈与交換の人類学』 東京：筑摩書房。  
1996 「贈与と交換の今日的課題」伊藤幹治ほか著『贈与と市場の社会学』（岩波講座 現代社会学 第17巻） pp.1-31, 東京：岩波書店。

伊藤幹治・栗田靖之

- 1984 『日本人の贈答』 ミネルヴァ書房。

五百部 裕

- 1999 「人類のはるかなる過去—人類以前の物語—」片山一道ほか著『人類史をたどる：自然人類学入門』 pp.1-32, 東京：朝倉書店。

今村 薫

- 1993 「サンノ共同と分配—女性の生業活動の視点から」『アフリカ研究』42: 1-25。  
1996 「ささやかな饗宴—狩猟採集民ブッシュマンの食物分配」田中二郎ほか編著『続自然社会の人類学』 pp.51-80, 京都：アカデミア出版会。

今村仁司

- 2000 『交易する人間：贈与と交換の人間学』 東京：講談社。

煎本孝

- 1996 『文化の自然誌』 東京：東京大学出版会。

岩崎まさみ

- 1999 「サケ資源の減少とナムギースの人々」秋道智彌編『自然はだれのもの』 pp.65-84, 京都：昭和堂。  
2002 「カナダ北西海岸におけるサケをめぐる対立」秋道智彌・岸上伸啓編『紛争の海』 pp.168-188, 京都：人文書院。  
2003 「次世代のための資源管理：カナダ西部極北地域における海洋資源共同管理」岸上伸啓編『海洋資源の利用と管理に関する人類学的研究』（国立民族学博物館調査報告 46） pp.49-71, 大阪：国立民族学博物館。

エケ, P.

- 1980 『社会的交換理論』小川浩一訳, 東京：新泉社。

大島稔

- 2005 「コリヤークのトナカイ遊牧に関する政治経済的考察—カムチャツカ州カラギンスキー地区を例に」北海道立北方博物館編『第19回北方民族文化シンポジウム報告』 pp.1-4, 網走：(財)北方文化振興協会。

太田好信

- 2001 『民族誌的近代の介入』 京都：人文書院。

大村敬一

- 1996 「「再生産」と「変化」の蝶番としての芸術：社会・文化変化の中で芸術

- が果たす役割」スチュートヘンリ編『採集狩猟民の現在：生業文化の変容と再生』pp.85-124, 東京：言叢社。
- 1998 「カナダ・イヌイトの日常生活における自己イメージ：‘イヌイトのやり方’と‘戦術’」『民族学研究』63(2): 160-170。
- 1999 「カナダ・イヌイトの環境認識からみた「資源」と「開発」」北海道立北方民族博物館編『第13回北方民族文化シンポジウム報告』pp.13-28, 網走：(財)北方文化振興協会。
- 2001a 「イヌイトのナビゲーションにみる日常的実践のダイナミズム：交差点としての民族誌」早稲田大学文学研究科 学位(博士)請求論文。
- 2001b 「交差点としての「イヌイト・アート」」『国立民族学博物館研究報告別冊』22: 79-101。
- 2002a 「「伝統的な生態学的知識」という名の神話を超えて」『国立民族学博物館研究報告』27(1): 25-120。
- 2002b 「カナダ極北地域における知識をめぐる抗争：共同管理におけるイデオロギーの相克」秋道智彌・岸上伸啓編『紛争の海』pp.149-167, 京都：人文書院。
- 2003 「近代科学に抗する科学：イヌイトの伝統的な生態学的知識にみる差異の構築と再生産」『社会人類学年報』29: 11-42。
- 岡田宏明
- 1996 「エスキモー」ヨーゼフ・クライナー編『日本民族学の現在：1980年代から1990年代へ』pp.379-387, 東京：新曜社。
- 小田亮
- 1994 「交換の四角形」小田亮著『構造人類学のフィールド』pp.74-100, 京都：世界思想社。
- 風間計博
- 1998 「「二重の窮乏」下の平等理念：現代世界とキリバス南部環礁の社会生活」総合研究大学院大学文化科学研究科 学位請求論文。
- 2003 『窮乏の民族誌：中部太平洋・キリバス南部環礁の社会生活』岡山：大学教育出版。
- 岸上伸啓
- 1988 「イヌイト社会における養子縁組の変遷」『季刊人類学』19(4): 100-128。
- 1990 「接触＝伝統期におけるカナダ・イヌイトのキャンプ集団の構成原理について」『社会人類学年報』16: 165-177。
- 1992 「カナダ・イヌイトの村落形式」岡田宏明・岡田淳子編『北の人類学』pp.57-78, 京都：アカデミア出版会。
- 1996a 「カナダ・イヌイトの社会経済変化：ケベック州のイヌクジュアク村

- の事例を中心に」『国立民族学博物館研究報告』21(4): 715-775。
- 1996b 「カナダ極北地域における社会変化の特質について」  
スチュアートヘンリ編 『採集狩猟民の現在』 pp.13-52, 東京: 言叢社。
- 1998 『極北の民 カナダ・イヌイット』 東京: 弘文堂。
- 1999a 「カナダにおける都市在住イヌイットの社会・経済状況: モントリオール地区の調査報告を中心に」『国立民族学博物館研究報告』24(2): 205-245。
- 1999b 「カナダ・イヌイットはなぜ都市をめざすのか」青柳清孝・松山利夫編  
『都市と先住民: 人類学の新しい地平』 pp.195-212, 東京: 青木書店。
- 1999c 「イヌイットの青年・中年男性の生業離れについて: カナダ・ヌナヴィクのアクリヴィク村の事例を中心に」『民博通信』86: 67-87。
- 2001a 「エスニック・アートとイヌイット文化の表象」中牧弘允編『国立民族学博物館研究報告 別冊』22: 57-77。
- 2001b 「カナダ・イヌイット社会における海洋資源の利用と管理: ヌナヴィクのシロイルカ資源の場合」『人文論究』70: 29-52。
- 2002a 「カナダ極北地域における海洋資源の汚染問題」『国立民族学博物館研究報告』27(2): 237-281。
- 2002b 「カナダ・イヌイット社会におけるキリスト教の展開とその諸影響について: ヌナヴィク地域の事例を中心に」杉本良男編『宗教と文明化』(20世紀における諸民族文化の伝統と変容7) pp.143-158, 東京: ドメス出版。
- 2003a 「カナダ極北圏ヌナヴィク地域におけるシロイルカ資源の共同管理について」岸上伸啓編『海洋資源の利用と管理に関する人類学的研究』(SER no.46) pp.101-129, 大阪: 国立民族学博物館。
- 2003b 「狩猟採集民社会における食物分配: 諸研究の紹介と批判的検討」  
『国立民族学博物館研究報告』27(4): 725-752。
- 2003c 「狩猟採集民社会における食物分配の類型について」『民族学研究』68(2): 145-164。
- 2004 「カナダ・イヌイット社会におけるメディアの利用について: ヌナヴィク地域の事例を中心に」『人文論究』73: 17-31。
- 2005a 「カナダ極北の先住民族イヌイット」岸上伸啓編『極北』(世界の食文化20) pp.121-159, 東京: 農文協。
- 2005b 「カナダ・イヌイット社会における海獣狩猟と分配をめぐる政治経済: ケベック州アクリヴィク村の事例から」北海道立北方民族博物館編『第19回北方民族文化シンポジウム報告』pp.17-22, 網走: 北方文化振興協会。
- 2005c 「日本人による北アメリカ先住民研究の動向について: 1990年代以降を中心に」『人文論究』74: 13-42。



- 2005d 『イヌイト：「極北の狩猟民」のいま』東京：中央公論新社。
- 岸上伸啓編
- 2003 『海洋資源の利用と管理に関する人類学的研究』大阪：国立民族学博物館。
- 2005 『極北：世界の食文化 20』東京：農文協。
- キージング, R. M. (Keesing, R.M.)
- 1982 『親族集団と社会構造』小川・笠原・河合訳, 東京：未来社。
- 北西功一
- 1997 「狩猟採集民アカにおける食物分配と居住集団」『アフリカ研究』51: 1-28。
- 2002 「分配者としての所有者—狩猟採集民アカにおける食物分配」市川光雄・佐藤弘明編『森と人の共存世界』pp.61-91, 京都：京都大学学術出版会。
- 2004 「狩猟採集社会における食物分配と平等—コンゴ北東部アカ・ピグミーの事例」寺嶋秀明編『平等と不平等をめぐる人類学的研究』pp.53-91, 京都：ナカニシヤ出版。
- 口蔵幸雄
- 2000 「最適採食戦略—食物獲得の行動生態学」『国立民族学博物館研究報告』24(4): 767-871。
- 窪田幸子
- 2005 『アボリジニ社会のジェンダー人類学：先住民・女性・社会変化』京都：世界思想社。
- クラストル, P.
- 1987 『国家に抗する社会』渡辺公三訳, 東京：水声社。
- クリフォード, J. / G. マーカス編
- 1996 『文化を書く』春日直樹ほか訳, 東京：紀伊国屋書店。
- 栗本英世
- 2001 「紛争研究と人類学の可能性」杉島敬志編『人類学的実践の再構築：ポストコロニアル転回以後』pp.102-122, 京都：世界思想社。
- ゴドリエ, M.
- 2000 『贈与の謎』山内ひさし訳, 東京：法政大学出版局。
- 小山修三・窪田幸子編
- 2002 『多文化国家の先住民：オーストラリア・アボリジニの現在』京都：世界思想社。
- 小馬徹
- 2000 『贈り物と交換の文化人類学』（神奈川大学評論ブックレット9）東京：お茶の水書房。

サイード, E. W.

- 1993 『オリエンタリズム(上・下)』板垣雄三・杉田英明監修 今沢紀子  
訳, 東京: 平凡社。

佐々木史郎

- 1997 「広域経済システムとウデへの狩猟」『社会人類学年報』23: 1-28。  
1998 「ポスト・ソ連時代におけるシベリア先住民の狩猟」『民族学研究』63(1):  
3-18。

サービス, E.

- 1972 『狩猟民』蒲生正男訳, 東京: 鹿島出版会。  
1979 『未開の社会組織』松園万亀雄訳, 東京: 弘文堂。

サーリンズ, M.

- 1984 『石器時代の経済学』山内ひさし訳, 東京: 法政大学出版局。

嶋田義仁

- 1993 『異次元交換の政治学—人類学的思考とはなにか』東京: けい草書房。

菅原和孝

- 2004 『ブッシュマンとして生きる: 原野で考えることばと身体』東京: 中央公  
論新社。

杉本良男編

- 2002 『福音と文明化の人類学的研究』(国立民族学博物館調査報告 31) 大阪:  
国立民族学博物館。

杉島敬志編

- 2001 『人類学的実践の再構築: ポストコロニアル転回以降』京都: 世界思想社。

鈴木清史

- 1995 『都市のアボリジニ: 抑圧と伝統のはざままで』東京: 明石書店。

スチュアートヘンリ

- 1991 「食糧分配における男女の役割分担について」『社会人類学年報』17:  
115-127。  
1993a 「ネツリック・イヌイト社会における春の生業—5~6 月のカリブー猟と  
漁労を中心に」『北海道立北方民族博物館』2: 13-36。  
1993b 「極北民族の食生活」『ヴェスタ』15: 14-25。  
1995 「現代のネツリック・イヌイト社会における生業—生存から文化的なサ  
バイバルへ」北海道立北方民族博物館編『第 9 回北方民族文化シンポジ  
ウム報告』pp.37-67, 網走: 北方文化振興財団。  
1996 「現在の採集狩猟民にとっての生業の意義」スチュアートヘンリ編『採集  
狩猟民の現在—生業文化の変容と再生』pp.125-154, 東京: 言叢社。  
1997a 「北部ケベックの先住民」西川長男・渡辺公三・ガバン・マコーマック編

- 『多文化主義・多言語主義の現在』 pp.109-132, 京都：人文書院。
- 1997b 「先住民運動—その歴史、展開、現状と展望—」青木保ほか編『紛争と運動』(岩波講座 文化人類学) pp.291-255, 東京：岩波書店。
- 1998a 「民族呼称とイメージ—<イヌイト>の創成とイメージ操作」『民族学研究』63(2): 151-159.
- 1998b 「先住民族が成立する条件：理念から現実への軌跡」清水昭俊編『周辺民族の現在』 pp.235-263, 京都：世界思想社。
- 2002c 「先住民と国民国家：カナダ・ケベック州を中心に」梶田孝道・小倉充夫編『国際社会 国民国家はどう変わるか』 pp.195-223, 東京：東京大学出版会。
- 須藤健一
- 1989 「サタワル社会の人生儀礼—贈与・交換の象徴性」松原正毅編『人類学とは何か—言語・儀礼・象徴—歴史』 pp.233-269, 東京：日本放送出版協会。
- 竹沢尚一郎
- 1996 「贈与・交換・権力」伊藤幹治ほか著『贈与と市場の社会学』(岩波講座 現代社会学 第17巻) pp.79-93, 東京：岩波書店。
- 田辺繁治
- 1989 「人類学的認識の冒険」田辺繁治編『人類学的認識の冒険：イデオロギーとプラクティス』 pp.3-23, 東京：同文館。
- 2002a 「序章 日常的実践のエスノグラフィー：語り・コミュニティ・アイデンティティ」田辺繁治・松田素二編『日常的実践のエスノグラフィー：語り・コミュニティ・アイデンティティ』 pp.1-38, 京都：世界思想社。
- 2002b 「再帰的人類学における実践の概念—ブルデューのハビトゥスをめぐり、その彼方へ」『国立民族学博物館研究報告』26(4): 533-573。
- 2003 『生き方の人類学：実践とは何か』東京：講談社。
- 田辺繁治編
- 1989 『人類学的認識の冒険：イデオロギーとプラクティス』東京：同文館。
- 田辺浩
- 1995 「行為理論の革新：構造化、行為、反省性」宮島喬編『文化の社会学：実践と再生産のメカニズム』 pp.14-39, 東京：有信堂。
- ダロス, シラ・永田脩一
- 2005 「交易と分配—狩猟採集民の社会人類学」池谷和信編『熱帯アジアの森の民』 pp.97-120, 京都：人文書院。
- 丹野 正
- 1991 「『分かち合い』としての『分配』」田中二郎・掛谷誠編『ヒトの自然誌』 pp.35-5, 東京：平凡社。

西田利貞

- 1992 「霊長類における援助行動の進化」 柴谷篤弘・長野敬・養老孟司編  
『生態学から見た進化』 pp.247-306, 東京：東京大学出版会。

西田利貞・保坂和彦

- 2001 「霊長類における食物分配」 西田利貞編『ホミニゼーション』（生態人類学 8） pp.255-304, 京都：京都大学学術出版会。

ブルデュ（一）, P.

- 1988a 『実践感覚(1)』 今村仁司・港道隆訳, 東京：みすず書房。  
1988b 『構造と実践』 石崎春己訳, 東京：新評論。  
1989 『ディスタンクシオン(1)』 石井洋二郎訳, 東京：新評論。  
1990 『実践感覚(2)』 今村仁司・港道隆ほか訳, 東京：みすず書房。

ホブズボウム, E.・T. レンジャー編

- 1992 『創られた伝統』 前川啓治ほか訳, 東京：紀伊国屋書店。

ポランニー・K. (栗本慎一郎・端信行訳)

- 1975 『経済と文明』 東京：サイマル出版会。

増沢武弘

- 2002 『極限に生きる植物』 東京：中央公論新社。

松園万亀雄

- 2002 「民族誌と個性」 『社会人類学年報』 28: 1-25。

松山利夫

- 1994a 『ユーカリの森に生きる』 東京：日本放送出版協会。  
1994b 「オーストラリア連邦と先住民アボリジニ： アボリジニ政策と人々の生活体験に関するノート」 『国立民族学博物館研究報告』 18(3): 409-451。  
1999 「ヌンガから再びアボリジナルへ： アデレードの先住民」 青柳清孝・松山利夫編 『先住民と都市： 人類学の新しい地平線』 pp. 3-23, 東京：青木書店。  
2004 「ガミラロイ： 地方町モリーにおけるアボリジナルの歴史と現在」 『国立民族学博物館研究報告』 28(4): 477-513。

マリノウスキー, B.

- 1967 『西太平洋の遠洋航海者』（世界の名著 59） 寺田和夫・増田義郎訳  
pp.55-342, 中央公論社。

マルクス, K.

- 1953 『経済学批判』 杉本俊朗訳, 東京：大月書店。

宮島喬

- 1995 「はじめに」、「序論 文化と実践の社会学へ」 宮島喬編 『文化の社会学： 実践と再生産のメカニズム』 pp.3-13, 東京：有信堂。

宮島喬編

- 1995 『文化の社会学：実践と再生産のメカニズム』 東京：有信堂。

室山泰之

- 1999 「利他行動」 西田利貞・上原繁男編『霊長類学を学ぶ人のために』  
pp.140-161, 京都：世界思想社。

モース, M.

- 1973 「贈与論 - 太古の社会における交換の諸形態と契機」『社会学と人類学  
I』有地亨ほか共訳, pp.219-400. 東京：弘文堂。(Mauss, M.  
1923/24(1973) Essai sur le don: Forme et raison de l'échange dans  
les sociétés archaïques. Année Sociologique. Nlle Série. I :  
33-186.

吉田憲司

- 1999 『文化の「発見」』 東京：岩波書店。

リーチ, E.

- 1944 『人類学再考』 青木保・井上兼行訳, 東京：思索社。  
1985 『社会人類学案内』 長島信弘訳, 東京：岩波書店。

ルーマン, N.

- 1993 『社会システム理論(上)』 佐藤勉監訳, 東京：恒星社厚生閣。

レヴィ=ストロース, C.

- 1977 『親族の基本構造(上)』 馬淵東一・田島節夫監訳, 東京：番長書房。  
1978 『親族の基本構造(下)』 馬淵東一・田島節夫監訳, 東京：番長書房。

渡辺 仁

- 1990 「生業分化と社会階層化：北太平洋沿岸採集民における事例」  
『現代思想』18(12): 169-176.

渡部 裕

- 1999 「カムチャツカ先住民の生業活動(I)ー伝統と現代」『北海道立北方民族  
博物館研究紀要』8: 85-110。  
2004 「カムチャツカ先住民社会における経済の現状と狩猟の意味」『北海道立  
北方民族博物館紀要』13: 1-10。  
2005 「ポスト社会主義経済下のトナカイ飼育産業」『北海道立北方民族博物館  
紀要』14: 9-28。  
2005 「カムチャツカ半島のサケ資源と政治・経済」北海道立北方民族博物館編  
『第19回北方民族文化シンポジウム報告』 pp.23-26, 網走：(財)北方文  
化振興協会。

(外国語文献) A B C 順

- Alia, V.  
 1994 *Names, Numbers, and Northern Policy*. Halifax: Fernwood Publishing.
- Altman, J. and N. Peterson  
 1988 Rights to Game and Rights to Cash among Contemporary Australian Hunter-Gatherers. In T. Ingold, D. Riches, and J. Woodburn (eds.) *Hunters and Gatherers*, vol.2: *Property, Power and Ideology*. pp.75-94. Oxford: Berg.
- Alvard, M.S.  
 2002 Carcass Ownership and Meat Distribution by Big-game Cooperative Hunters. *Social Dimensions in the Economic Process* 21: 99-131.
- Anonymous  
 1952 *Moccasin Telegraph*. Winnipeg, Manitoba: The HBC.
- Asch, M.  
 1977 The Dene Economy. In M. Watkins (ed.) *Dene Nation: The Colony Within*, pp.47-61. Toronto: University of Toronto Press.
- Audet, R. T.  
 1975 Le Réseau Spatial des Qikirtajuarmit et L'ouverture d'un Nouveau Village à Akulivik. MA thesis, Dept. of Anthropology, Laval University, Quebec City.
- Badgely, I.  
 1981 Eskimo Prehistory in Arctic Canada: A Review Manuscript (Tuvaaluk Program). 未発表原稿
- Bahuchet, S.  
 1985 *Les Pygmées Aka et la Forêt Centrafricaine*. Paris: SELAF  
 1990 Food Sharing among the Pygmies of Central Africa. *African Studies Monographs* 11(1): 27-53.
- Balikci, A.  
 1958 Fieldnotes of POV Research. Personal Possession of Dr. Balikci.  
 1960 Some Acculturative Trends among the Eastern Canadian Eskimos. *Anthropologica* (n.s.) 2(3): 139-153.  
 1964 *Development of Basic Socio-Economic Units in Two Eskimo Communities* (National Museum of Canada Bulletin No. 202.) Ottawa: National Museum of Canada.  
 1968 Two Attempts at Community Organization among the Eastern Hudson Bay Eskimos. In V. E. Valentine and F. G. Vallee (eds.) *Eskimo of the Canadian Arctic*, pp.160-172. Toronto: McClelland and

- Stewart Limited.
- 1970 *The Netsilik Eskimos*. Garden City, N.Y.: Natural History Press.
- Barnard, A.
- 2002 The Foraging Mode of Thought. In H. Stewart, A. Barnard and K. Omura (eds.). *Self and Other Images of Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies No.60), pp.5-24. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Barnard, A. (ed.)
- 2004 *Hunter-Gatherers in History, Archaeology and Anthropology*. Oxford and New York: Berg.
- Barth, F.
- 1966 *Models of Social Organisation*. London: Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland.
- Beaulie, D.
- 1984 *Les Inuit du Nouveau-Québec: Leur Milieu Socio-Economique*. Québec: Government of Québec.
- Befu, H.
- 1964 Eskimo Systems of Kinship Terms – Their Diversity and Uniformity. *Arctic Anthropology* 2(1): 84-98.
- 1980 Social Exchange. *Annual Review of Anthropology* 6:255-281.
- Bennett, J. and S. Rowley (eds.)
- 2004 *Uqalurait: An Oral History of Nunavut*. Montreal & Kingston: McGill-Queen's University Press.
- Bercovitch, F.B.
- 1988 Coalitions, Cooperation and Reproductive Tactics among Adult and Male Baboons. *Animal Behaviour* 36: 1198-1209.
- Berger, T. R.
- 1977 *Northern Frontier, Northern Homeland: The Report of the Mackenzie Valley Pipeline Inquiry*. Ottawa: Supply and Services Canada.
- Betzig, L. and P. Turke
- 1986 Food Sharing on Ifaluk. *Current Anthropology* 27(4):397-400.
- Bieseke, M. and N. Howell
- 1981 The Old People Given You Life: Aging among !Kung Hunter-Gatherers. In P.T.Awass and S. Harrell (eds.) *Other Ways of Growing Old*, pp.77-98. Stanford: Stanford University Press.
- Bird-David, Nurit

- 1990 The Giving Environment: Another Perspective on the Economic System of Gatherer-Hunters. *Current Anthropology* 31(2): 189-196.
- 1992 Beyond 'the Hunting and Gathering Mode of Subsistence': Culture-Sensitive Observations on the Nayaka and Other Modern Hunter-Gatherers. *Man* (N.S.) 27: 19-44.
- Blondeau, M. and C. Roy
- 2004 *Atlas of Plants of the Nunavik Villages*. Sainte-Foy, PQ: Éditions Multimodes.
- Bliege Bird, R.
- 1999 Cooperation and Conflict: The Behavioral Ecology of the Sexual Division of Labor. *Evolutionary Anthropology* 8: 65-75.
- Bliege Bird, R. and E.A. Smith
- 2005 Signaling Theory, Strategic Interaction, and Symbolic Capital. *Current Anthropology* 46(2): 221-248.
- Bliege Bird, R., E.A. Smith and D. Bird
- 2001 The Hunting Handicap: Costly Signaling in Male Foraging Strategies. *Behavioral Ecology and Sociobiology* (in press)
- Blurton Jones, N.G.
- 1987 Tolerated Theft, Suggestions about the Ecology and Evolution of Sharing, Hoarding and Scrounging. *Social Science Information* 26(1):31-54.
- Bodenhorn, B.
- 1990 I'm Not the Great Hunter, My Wife Is: Inupiat and Anthropological Models of Gender. *Études/Inuit/Studies* 14(1/2): 55-74.
- 2000 It's Good to Know Who Your Relatives Are But We Were Taught to Share with Everybody: Shares and Sharing among Inupiaq Households. In G. H. Wenzel, G. Hovelsrud and N. Kishigami (eds.) *The Social Economy of Sharing: Resource Allocation and Modern Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies No.53), pp.27-56. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Bodley, J. H.
- 2001 *Anthropology and Contemporary Problems*. 4<sup>th</sup> edition, Mountain View, CA: Mayfield Publishing Company.
- Bourdieu, P. (translated by Richard Nice)
- 1977 *Outline of a Theory of Practice*. Cambridge: Cambridge University Press.



Brody, H.

- 1975 *The People's Land*. New York: Penguin Books.
- 1987 *Living Arctic*. London and Boston: Faber and Faber.

Buijs, C.

- 1993 The Disappearance of Traditional Meat-Sharing Systems among the Tinitekilaamiut of East Greenland and the Arviligjuarmiut and Iglulingmiut of Canada. In C. Buijs(ed.) *Continuity and Discontinuity in Arctic Cultures*, pp.108-135. Leiden : Centre of Non-Western Studies.

Burch, E. Jr.

- 1970 The Eskimo Trading Partnership in North Alaska: A Study in Balanced Reciprocity. *Anthropological Papers of the University of Alaska* 15:49-80.
- 1975 *Eskimo Kinsmen: Changing Family Relationship in Northwest Alaska*. St. Paul: West Publishing Co.
- 1980 Traditional Eskimo Societies in Northwest Alaska. In Y. Kotani and W. B. Workman (eds.) *Alaska Native Culture and History* (Senri Ethnological Studies No. 4), pp.253-304. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 1988 Mode of Exchange in North-West Alaska. In T. Ingold, D. Riches, and J. Woodburn (eds.), *Hunters and Gatherers*, vol.2: *Property, Power and Ideology*. pp.95-109. Oxford: Berg.
- 1998 *The Inupiaq Eskimo Nations of Northwest Alaska*. Fairbanks, Alaska: University of Alaska Press.

Canada, Dept. of Indian Affairs and Northern Development

- 1965-6 *Education Review: Northwest Territories and Arctic Quebec*.

Canadian Museum of Civilization (ed.)

- 1993 *In the Shadow of the Sun: Perspectives on Contemporary Native Art* (Canadaian Ethnology Service Mercury Series Paper No. 124). Ottawa: Canadian Museum of Civilization.

Cashdan, E.

- 1985 Coping with Risk: Reciprocity among the Basarwa of Northern Botswana. *Man* 20: 454-474.

Cesa, Y.

- 2002 Échange Commercial et Usages Monétaires Non-marchands dans le Cadre du Programme d'Aide aux Chasseurs du Nunavik. *Études/Inuit/*

- Studies* 26(2): 175-186.
- Chabot, M.
- 2001 De la Production Domestique au Marché: L'économie Contemporaine des Familles Inuit du Nunavik. Unpublished Ph.D. Thesis, Department of Sociology, Université Laval.
- 2003 Economic Changes, Household Strategies, and Social Relations of Contemporary Nunavik Inuit. *Polar Record* 39(208): 19-34.
- Clemens, L.
- 1984 Canadian Colonialism: Inuit Schooling in Northern Quebec Prior to 1975. M.A. Thesis, Dept. of Education, McGill University, Montreal.
- Clifford, J. and G. E. Marcus (eds.)
- 1986 *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*. Berkeley: University of California Press.
- Collignon, B.
- 1993 The Variations of a Land Use Pattern: Seasonal Movement and Cultural Change among the Copper Inuit. *Études/Inuit/Studies* 17(1): 71-89.
- Condon, R.
- 1987 *Inuit Youth: Growth and Change in the Canadian Arctic*. New Brunswick: Rutgers University Press.
- 1991 The Rise of Adolescence: Social Change and Life Stage Dilemmas in the Central Canadian Arctic. *Human Organization* 49(3): 266-279.
- Condon, R., P. Collings and G. Wenzel
- 1995 Best Part of Life: Subsistence Hunting, Ethnicity, and Economic Adaptation among Young Adult Inuit Males. *Arctic* 48(1): 31-46.
- Craig, G. W.
- 1973 *The First Peoples in Quebec*. Vol.2. Montreal: Thunderbird Press.
- Cram, J.
- 1979 Some Bright Spots in the James Bay Agreement, 1975. *Polar Record* 19(118): 63-64.
- Dahl, J.
- 1989 The Integrative and Cultural Role of Hunting and Subsistence in Greenland. *Études/Inuit/Studies* 13(1): 23-42.
- 2000 *Saqqaq: An Inuit Hunting Community in the Modern World*. Toronto: University of Toronto Press.
- Dalton, G.

- 1969 Theoretical Issues in Economic Anthropology. *Current Anthropology* 10: 63-102.
- Damas, D.
- 1963 *Iglulingmiut Kinship and Local Groupings: A Structural Approach* (Bulletin of the National Museum of Canada, 196, Anthropological Series No.64). Ottawa: Department of Northern Affairs and National Resources.
- 1969 Characteristics of Central Eskimo Band Structure. In D. Damas (ed.) *Contributions to Anthropology: Band Societies* (National Museum of Canada, Bulletin No. 228, Anthropological Series 84). Ottawa: Department of Northern Affairs and National Resources.
- 1972a Central Eskimo Systems of Food Sharing. *Ethnology* 11: 220-240.
- 1972b The Structure of Central Eskimo Associations. In L. Guemple (ed.) *Alliance in Eskimo Society* (Proceedings of the American Ethnological Society, 1971, Supplement). Seattle: University of Washington Press.
- 1996 The Arctic from Norse Contact to Modern Times. In B. G. Trigger and W. E. Washburn (eds.) *The Cambridge History of the Native Peoples of the Americas* (Vol. 1. North America Part 2), pp.329-399. Cambridge: Cambridge University Press.
- 2002 *Arctic Migrants/Arctic Villagers: The Transformation of Inuit Settlement in the Central Arctic*. Montreal: McGill-Queen's University Press.
- Damas, D. (ed.)
- 1984 *Arctic* (Handbook of North American Indians Vol. 5). Washington, D.C.: Smithsonian Institution.
- de Waal, F. B. M.
- 1989 *Peacemaking among Primates*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Dorais, Louis-Jacques
- 1979 The Dynamics of Contact between French Nationalism and Inuktitut in Northern Quebec. In B. Basse and K. Jensens (eds.) *Eskimo Languages: Their Present Day Conditions*, pp.69-76. Arkona: University of Aarhus Press.
- 1997 *Quaqtaq: Modernity and Identity in an Inuit Community*. Toronto: University of Toronto Press.
- Dowling, J.

- 1968 Individual Ownership and the Sharing of Game in Hunting Societies. *American Anthropologist* 70(3): 502-507.
- Duffy, R. Q.
- 1988 *The Road to Nunavut: The Progress of the Eastern Arctic Inuit since the Second World War*. Montreal: McGill-Queen's University Press.
- Dufour, R.
- 1977 Les Noms de Personnes chez les Inuit d'Iglulik. M.A. Thesis, Dept. of Anthropology, Laval University, Quebec City.
- Duhaime, G., P. Fréchette, and V. Robichaud
- 1999 *The Economic Structure of the Nunavik Region (Canada): Changes and Stability*. Quebec: GETIC, Université Laval.
- Duhaime et al.
- 2000 *Nunavik Comparative Price Index*. Quebec: GETIC, Université Laval.
- Dunning, R. W.
- 1962 A Note on Adoption among the Southampton Island Eskimo. *Man* 259: 163-167.
- Ellanna, L.J. and G. K. Sherrod
- 1984 The Role of Kinship Linkages in Subsistence Production  
Alaska Department of Fish and Game, Division of Subsistence.  
*Technical Paper Series* #100.
- Feit, H.
- 1982 The Future of Hunters within Nation-States: Anthropology and the James Bay Cree. In E. Leacock and R. Lee (eds.) *Politics and History in Band Societies*, pp.373-411. Cambridge: Cambridge University Press.
- 1991 Gifts of the Land: Hunting Territories, Guaranteed Incomes and Construction of Social Relations in James Bay Cree Society. In N. Peterson and T. Matsuyama (eds.) *Cash, Commoditisation and Changing Foragers* (Senri Ethnological Studies No.30), pp.223-268. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Fienup-Riordan, A.
- 1983 *The Nelson Island Eskimo*. Anchorage: Alaska Pacific University Press.
- Fortier, J.
- 2000 Monkey's Thigh is the Shaman's Meat: Ideologies of Sharing among the Raute of Nepal. In G.W. Wenzel, G. Hovelsrud-Broda and N.

- Kishigami (eds.) *The Social Economy of Sharing: Resource Allocation and Modern Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies No.53), pp.113-147. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Frances, D. and T. Morantz  
 1983 *Partners in Furs: A History of the Fur Trade in Eastern James Bay, 1600-1870*. Montreal: McGill-Queen's University Press.
- Fraser, J. K.  
 1968 Place Names. In C. S. Beals (ed.) *Science, History and Hudson Bay* (Vol.1), pp.236-262. Ottawa: Department of Energy, Mines and Resources.
- Freeman, J. D.  
 1961 On the Concept of the Kindred. *Journal of Royal Anthropological Institute* 91: 192-220.
- Freeman, M. M. R.  
 1988a Tradition and Change: Problems and Persistence in the Inuit Diet. In I. de Garine and G. A. Harrison (eds.) *Coping with Uncertainty in Food Supply*, pp. 150-169. Oxford: Clarendon Press.  
 1988b Environment, Society and Health. *Arctic medical Research* 47(supple. 1): 53-59.  
 1989 The Significance of Animals in the Life of Northern-Foraging Peoples and its Relevance Today. In The Committee for the Symposium on the Peoples and Cultures in the North (ed.) *International Symposium on Human – Animal Relationship in the North*, pp.5-12. Abashiri, Japan: The City Government of Abashiri.  
 1992 Environment, Society and Health Quality of Life Issues in the Contemporary North. In R. Riewe and J. Oakes (eds.) *Human Ecology: Issues in the North* (Occasional Publication Series No.30), pp.1-10. Edmonton: Canadian Circumpolar Institute and Faculty of Home Economics.  
 2005 "Just One More Time before I Die": Securing the Relationship between Inuit and Whales in the Arctic Regions." In N. Kishigami and J. M. Savelle (eds.) *Indigenous Use and Management of Marine Resources* (Senri Ethnological Studies No. 67.), pp.59-76. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Gluckman, M.  
 1955 *The Judicial Process among the Barotse*. Manchester: Manchester

University Press.

Goldsmith, Edward

- 1998 *The Way: An Ecological World-View*. Athens: University of Georgia Press.

Gombay, Nicole

- 2004 Making a Living: Place and the Commoditisation of Food in a Nunavik Community. Unpublished Ph.D. Thesis, Dept. of Geography, Queen's University.
- 2005a The Commoditization of Country Foods in Nunavik: A Comparative Assessment of its Development, Applications, and Significance. *Arctic* 58(2): 115-128.
- 2005b Shifting Identities in a Shifting World: Food, Place, Community, and the Politics of Scale in an Inuit Settlement. *Environment and Planning D: Society and Space* 23:415-433.
- In Press *Making a Living: Place, Food, and Economy in an Inuit Community*. Toronto: University of Toronto Press.

Gould, R.

- 1982 To Have and Have Not: The Ecology of Sharing among Hunter-Gatherers. In N. Williams and E. Hunn (eds.) *Resource Managers: North American and Australian Hunter-Gatherers*, pp.69-92. Boulder: Westview Press.

Gouldner, A. W.

- 1960 The Norm of Reciprocity: A preliminary Statement. *American Sociological Review* 25 (2): 161-178.

Graburn, N. H. H.

- 1960 The Social organization of an Eskimo Community: Sugluk, P.Q. Unpublished M.A. Thesis, Dept. of Sociology and Anthropology, McGill University, Montreal, Canada.
- 1964 *Taqamiut Eskimo Kinship Terminology* (NCRC-64-1). Ottawa: Northern Coordination and Research Centre, Dept. of Northern Affairs and Natural Resources..
- 1969 *Eskimos without Igloos: Social and Economic Development in Sugluk*. Boston: Little, Brown and Company.
- 1971 Traditional Economic Institutions and the Acculturation of Canadian Eskimos. In G. Dalton (ed.) *Studies in Economic Anthropology*, pp.107-121. Washington, D. C.: American Anthropological Association.

- 1981 1,2,3,4...Anthropology and the Fourth World. *Culture* I (1): 66-70.
- Graves, J. and E. Hall
- 1988 *Arctic Animals*. Yellowknife: Northwest Territories Renewable Resources.
- Gray, P.
- 2005 "Effects of Russian Economic Reform on a Reindeer Herding Village in Chukotka." 北海道立北方博物館編『第19回北方民族文化シンポジウム報告』pp.1-4, 網走: (財)北方文化振興協会。
- Gregory, C.A. and J. C. Altman
- 1989 *Observing the Economy*. London: Routledge.
- Guemple, L.
- 1965 Saunik: Name Sharing as a Factor Governing Eskimo Kinship Terms. *Ethnology* 4: 323-335.
- 1966 Kinship Reckoning of the Belcher Island Eskimo. Unpublished Ph.D. Thesis, Dept. of Anthropology, University of Chicago.
- 1969 The Eskimo Ritual Sponsor: A Problem in the Fusion of Semantic Domains. *Ethnology* 8: 468-483.
- 1972a Eskimo Band Organization and the "D.P. Camp" Hypothesis. *Arctic Anthropology* 9: 90-112.
- 1972b Kinship and Alliance in Belcher Island Eskimo Society. In L. Guemple (ed.) *Alliance in Eskimo Society*, pp.56-78. Seattle: American Ethnological Society.
- 1976 The Institutional Flexibility of Inuit Social Life. In M. M. R. Freeman (ed.) *Inuit Land and Occupancy Project*, Vol.2: 181-186. Ottawa: Indian and Northern Affairs.
- 1979 *Inuit Adoption* (Canadian Ethnological Service Paper No.47). Ottawa: National Museums of Canada.
- Guemple, L. (ed.)
- 1972 *Alliance in Eskimo Society*. Seattle: American Ethnological Society.
- Gurven, Michael
- n.d To Give and to Give Not: The Behavioral Ecology of Human Food Transfers. *Behavioral and Brain Sciences* on line.  
<http://www.bbsonline.org/documents/a/00/00/12/57/bbs000...>
- Gurven, M., W. Allen-Arave, K. Hill and A. M. Hurtado
- 2000 'It's a Wonderful Life': Signaling Generosity among the Ache of Paraguay. *Evolution and Human Behavior* 21: 263-282.

- 2001 Reservation Food Sharing among the Ache of Paraguay. *Human Nature* 12(4):273-297.
- Gurven, M., K. Hill, and H. Kaplan
- 2002 From Forest to Reservation: Transitions in Food Sharing Behavior among the Ache of Paraguay. *Journal of Anthropological Research* 58(1): 93-120.
- Hamelin, L-E.
- 1979 *Canadian Nordicity: It's Your North, Too*. W. Barr(translated), Montreal: Harvest House.
- Hamilton, W.D.
- 1964 The Genetical Evolution of Social Behavior (I). *Journal of Theoretical Biology*. 7: 1-16.
- Hawkes, k.
- 1992 Sharing and Collective Action.  
In E. A. Smith and B. Winterhalder (eds.). *Evolutionary Ecology and Human Behavior*, pp.269-300. New York: Aldine De Gruyter.
- 1993 Reply to KAPLAN and HILL. *Current Anthropology* 34:706-709.
- Hawkes, K., and R. Bleige Bird
- 2002 Showing off, Handicap Signaling, and the Evolution of Men's Work. *Evolutionary Anthropology* 11: 58-67.
- Headland, T. N.
- 1999 Revisionism in Ecological Anthropology. *Current Anthropology* 38(4): 605-609.
- Headland, T. N. and L. A. Reid
- 1989 Hunter-Gatherer and Their Neighbor from Prehistory to the Present. *Current Anthropology* 30: 43-66.
- Henrich, A.
- 1963a Eskimo-Type Kinship and Eskimo Kinship: An Evaluation and a Provisional Model for Presenting Data Pertaining to Inupiaq Kinship Systems. Unpublished Ph.D. thesis in Anthropology, University of Washington.
- 1963b Personal Names, Social Structure and Functioning Integration. *Anthropology and Sociology Papers* 27. (Dept. of Sociology, Anthropology and Social Welfare, Montana State University).
- 1969 Social Integration and Personal Names in an Eskimo Group. *The Journal of Karnatak University* (Social Science) 5: 1-14.



- Hessel, I.  
 1998 *Inuit Art*. Vancouver: Douglas & McIntyre.
- Hill, K. and A. M. Hurtado  
 1996 *Ache Life History: The Ecology and Demography of a Foraging People*. New York: Aldine de Gruyter.
- Hill, K. and H. Kaplan  
 1988a Tradeoffs in Male and Female Reproductive Strategies among the Ache: Part. 1. In L. Betzig., M. Mulder and P. Turke (eds.) *Human Reproductive Behavior: A Darwinian Perspective*, pp.277-289. New York: Cambridge University Press.  
 1988b Tradeoffs in Male and Female Reproductive Strategies among the Ache: Part. 2. In L. Betzig., M. Mulder and P. Turke (eds.) *Human Reproductive Behavior: A Darwinian Perspective*, pp.277-289., New York: Cambridge University Press.
- Hobsbawm, E. and T. Ranger (eds.)  
 1983 *The Invention of Tradition*. Cambridge: University of Cambridge Press.
- Homans, G. C.  
 1958 Social Behavior as Exchange. *American Journal of Sociology* 63:597-606.
- Hovelsrud-Broda, G.  
 1997 Arctic Seal-Hunting Households and the Anti-Sealing Controversy. *Research in Economic Anthropology* 18:17-34.  
 1999 The Integrative Role of Seals in East Greenlandic Hunting Village. *Arctic Anthropology* 36(1/2):37-50.  
 2000 "Sharing", Transfers, Transactions and the Concept of Generalized Reciprocity. In G.W.Wenzel, G. Hovelsrud-Broda and N. Kishigami (eds.) *The Social Economy of Sharing: Resource Allocation and Modern Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies No.53), pp.193-214. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Hughes, C. C.  
 1965 Under Four Flags: Recent Culture Change among the Eskimos. *Current Anthropology* 6(1): 3-69.
- Hunt, R.  
 2000 Forager Food Sharing Economy: Transfers and Exchanges. In G.W. Wenzel, G. Hovelsrud-Broda and N. Kishigami (eds.) *The*

- Social Economy of Sharing: Resource Allocation and Modern Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies No.53). pp.7-26. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Iglauer, E.  
 1979 *Inuit Journey*. Vancouver: Douglas and McIntyre.
- Ikeya, K.  
 1993 Goat Raising among the San in the Central Kalahari. *African Study Monographs* 14(1):39-52.  
 1996a Road Construction and Handicraft Production in the Xade Area, Botswana. *African Study Monographs* 22 (Supplementary Issue): 67-84.  
 1996b Dry Farming among the San in the Central Kalahari, Botswana *African Study Monographs* 22 (Supplementary Issue):85-100.
- Ingold, T.  
 1988 Notes of the Foraging Mode of Production. In T. Ingold, D. Riches, and J. Woodburn (eds.) *Hunters and Gatherers*. vol. 1: *History, Evolution and Social Change*, pp.269-285. Oxford: Berg.
- Inoue, Toshiaki  
 2004 "The Gwich'in Gathering: The Subsistence in their Modern Life and the Gathering against Oil Development by the Gwich'in Athabaskan." In T. Irimoto and T. Yamada (eds.) *Circumpolar Ethnicity and Identity* (Senri Ethnological Studies No.66), pp.183-204. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Iwaski-Goodman, M.  
 2005 Resources Management for the Next Generation: Co-Management of Fishery Resources in the Western Canadian Arctic Region. In N. Kishigami and J. M. Savelle (eds.) *Indigenous Use and Management of Marine Resources* (Senri Ethnological Studies No. 67), pp.101-120. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Jenness, D.  
 1964 *Eskimo Administration II: Canada* (Arctic Institute of North America Technical Paper 14). Montreal: Arctic Institute of North America.
- Jette, M. (ed.)  
 1994 *A Health Profile of the Inuit*. Montreal: Santé Québec.
- Kameda, T., M. Takezawa, R.S. Tidale and C.M. Smith  
 2002 Social Sharing and Risk Reduction: Exploring a Computational

Algorithm for the Psychology of Windfall Gains. *Evolution and Human Behavior* 23: 11-33.

Kaplan, H. and K. Hill

- 1985a Food Sharing among Ache Foragers: Tests for Explanatory Hypotheses. *Current Anthropology* 26(2): 223-246.
- 1985b Hunting Ability and Reproductive Success among Male Ache Foragers: Preliminary Results. *Current Anthropology* 26(1): 131-133.

Kativik School Board

- 2004 <http://www.kativik.qc.ca> 2004 年 3 月 3 日採録。

Kelly, R. L.

- 1995 *The Foraging Spectrum: Diversity in Hunter-Gatherer Lifeways*. Washington and London: Smithsonian Institution Press.

Kent, S.

- 1993 Sharing in an Egalitarian Kalahari Community. *Man* (N.S.) 28: 479-514.
- 1996 The Current Forager Controversy: Real Versus Ideal Views of Hunter-Gatherers. *Man* (N.S.) 27: 45-70.

Kishigami, N.

- 1994 Why Become Christians?: Hypotheses on the Christianization of the Canadian Inuit. In T. Irimoto and T. Yamada (eds.) *Circumpolar Religion and Ecology: Anthropology of the North*, pp.221-235. Tokyo: University of Tokyo Press.
- 1995 Extended Family and Food Sharing Practices among the Contemporary Nestilik Inuit: A Case Study of Pelly Bay. 『北海道教育大学紀要 (社会科学編 1 部B) 』 45(2): 1-9.
- 1997 Personal Names, Name Souls, and Social Change among Canadian Inuit. In T. Irimoto and T. Yamada (eds.) *Circumpolar Animism and Shamanism*, pp.151-166. Sapporo: Hokkaido University Press.
- 1999 Why Do Inuit Move to Montreal? : A research Note on Urban Inuit. *Études/Inuit/Studies* 23(1-2): 221-227.
- 2000 Contemporary Inuit Food Sharing and Hunter Support Program of Nunavik, Canada. In G.W. Wenzel, G. Hovelsrud-Broda and N. Kishigami (eds.) *The Social Economy of Sharing: Resource Allocation and Modern Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies No.53) pp.171-192, Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2002 A Typology of Food Sharing Practices among Hunter-Gatherers, with

- a Special Focus on Inuit Examples. Paper read at CHAGS 9, Edinburgh, Scotland. September, 2002.
- 2004a A New Typology of Food-Sharing Practices among Hunter-Gatherers, with a Special Focus on Inuit Examples. *Journal of Anthropological Research* 60: 341-358.
- 2004b Cultural and Ethnic Identities of Inuit in Canada. In T. Irimoto and T. Yamada (eds.) *Circumpolar Ethnicity and Identity* (Senri Ethnological Studies No.66), pp.81-93. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2004c Contemporary Inuit Food Sharing. Paper read at the 5<sup>th</sup> International Congress of Arctic Social Sciences (ICASS V). University of Alaska, Fairbanks. May 22, 2004.
- 2004d Trends in Native North American Studies in Japan since the 1990s. *Japanese Review of Cultural Anthropology* 5: 91-121.
- 2005 Co-Management of Beluga Whales in Nunavik (Arctic Quebec), Canada. In N. Kishigami and J. Savelle (eds.) *Indigenous Use and Management of Marine Resources* (Senri Ethnological Studies No.67), pp.121- 144. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Kishigami, N. and J. M. Savelle (eds.)
- 2005 *Indigenous Use and Management of Marine Resources*. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Kitanishi, K.
- 1996 Variability in the Subsistence Activities and Distribution of Food among Different Aged Males of the Aka Hunter-Gatherers in Northeastern Congo. *African Studies Monographs* 17(1): 35-57.
- 1998 Food Sharing among the Aka Hunter-Gatherers in Northeastern Congo. *African Studies Monographs* No.25 (Supplementary Issue) : 3-32.
- 2000 The Aka and Baka: Food Sharing among Two Central Africa Hunter-Gatherer Groups. In G.W. Wenzel, G. Hovelsrud and N. Kishigami (eds.) *The Social Economy of Sharing: Resource Allocation and Modern Hunter-Gatherers*. (Senri Ethnological Studies No.53), pp.149-169. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Kleinfeld, Kruse and Travis
- 1983 Inupiat Participation in the Wage Economy: Effects of Culturally Adapted Jobs. *Arctic Anthropology* 20(1): 1-21.
- Kruse, J. A.

- 1991 Alaska Inupiat Subsistence and Wage Employment Patterns: Understanding Individual Choice. *Arctic Anthropology* 50(4): 317-326.
- Kuhnlein, H. et. al
- 2000 *Assessment of Dietary Benefit /Risk in Inuit Communities*. Ste-Anne-de-Bellevue, PQ: Centre for Indigenous Peoples' Nutrition and Environment (CINE).
- 2005 Canadian Arctic Indigenous Peoples, Traditional Food Systems, and POPs. In N. Kishigami and J. M. Savelle (eds.) *Indigenous Use and Management of Marine Resources* (Senri Ethnological Studies No. 67.), pp.391-408. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Langdon, S. J.
- 1991 The Integration of Cash and Subsistence in Southwest Alaskan Yup'ik Eskimo Communities. In N. Peterson and T. Matsuyama(eds.) *Cash, Commoditisation and Changing Foragers* (Senri Ethnological Studies, No.30), pp.269-291. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Langdon, S. and R. Worl
- 1981 Distribution and Exchange of Subsistence Resources in Alaska. Division of Subsistence, Technical Paper Series #55, Alaska Department of Fish and Game.
- Larochelle, G. et. al.
- 1975 *Les Qikirtajuarmit et Leur Relocalisation: Etude Socio-Economique*. Quebec: Association Inukitiit, Ink., Universite Laval.
- Leacock, L. and R. Lee (eds.)
- 1982 Introduction. In Leacock, E. and R. Lee (eds.) *Politics and History in Band Societies*, pp.1-20. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lee, R. B.
- 1979 *The !Kung San: Men, Women and Work in a Foraging Society*. London: Cambridge University Press.
- 1992 Art, Science or Politics: The Crisis in Hunter-Gatherer Studies. *American Anthropologist* 94: 31-54.
- 1993 *The Dobe Ju/'hoansi*. Fort Worth, TX:Harcourt Brace College Publishers.
- 1999 Hunter-Gatherer Studies and the Millennium :A Look Forward (and Back) 『国立民族学博物館研究報告』 23(4): 821-845.
- Lee, R. and I. Devore (eds.)
- 1968 *Man the Hunter*. Chicago: Aldine Publishing Company.

- Lévesque, C., D. de Juriew, C. Lussier and N. Trudeau  
 2000 *Between Abundance and Scarcity: Food and the Institution of Sharing among the Inuit of the Circumpolar Region during the Recent Historical Period*. Montréal: Université du Québec, INRS-Urbanisation, Culture et Société.
- Lévi-Strauss, C.  
 1949(1977, 1978) *Les Structures Élémentaires de la Parenté*. P.U.F.
- Lonner, T. D.  
 1980 *Subsistence as an Economic System in Alaska. Division of Subsistence Technical Paper No.67*, Anchorage: Alaska Department of Fish and Game.
- Low, A. P.  
 1902 *Report on an Exploration of the East Coast of Hudson Bay from Cape Wolstenholme to the South End of James Bay*. Canada, Geological Society, Annual Report, 1900, 13.
- MacDonald, G.  
 2000 *Economies and Personhood: Demand Sharing among the Wiradjuri of New South Wales*. In G.W. Wenzel, G. Hovelsrud and N. Kishigami (eds.) *The Social Economy of Sharing: Resource Allocation and Modern Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies No.53), pp.61-85. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Mackinnon, C. S.  
 1991 *Canada's Eastern Arctic Patrol 1922-68. Polar Record* 27(161): 93-101.
- McGhee, R.  
 1994 *Disease and the Development of Inuit Culture. Current Anthropology* 35(5): 565-594.
- Malinowski, B.  
 1922 *Argonauts of the Western Pacific*. London: Routledge.
- Mallory, C. and S. Aiken  
 2004 *Common Plants of Nunavut*. Iqaluit, Nunavut: Nunavut Department of Education.
- Manning, T. H.  
 1951 *A Mixed Cape Dorset-Thule Site on Smith Island, East Hudson Bay Annual Report of National Museum for the Fiscal Year 1949-1950. Bulletin* 123 : 64-71.
- Mansfield, A. W.

- 1968     Seals and Walrus. In C. S. Beals (ed.) *Science, History and Hudson Bay* (Vol. 1), pp.378-387. Ottawa: Department of Energy, Mines and Resources.
- Maranda, P.
- 1982     Anthropological Analysis. In I. Rossi (ed.), *The Logic of Culture: Advances in Structural Theory and Methods*, pp.23-41. London: Tavistock Publications.
- Marquardt, O. and R. A. Caulfield
- 1996     Development of West Greenlandic Markets for Country Foods since the 18<sup>th</sup> Century. *Arctic* 49(2): 107-119.
- Marsh, D. B.
- 1964     History of the Anglican Church in Northern Quebec and Ungava. In J. Malaurie and J. Rousseau (eds.) *Le Nouveau-Quebec*, pp.427-437. Paris: Mouton and Co.
- Marshall, L.
- 1961     Sharing, Talking and Giving: Relief of Social Tensions among the !Kung Bushmen. *Africa* 31: 321-349.
- 1976     *The !Kung of Nyae Nyae*. Cambridge: Harvard University Press.
- Martijn, C. A.
- 1968     Canadian Eskimo Carving in Historical Perspective. In V. F. Valentine and F. G. Vallee (eds.) *Eskimo of the Canadian Arctic*, pp.67-75. Toronto: McClelland and Stewart Limited.
- Maxwell, J.
- 1976     The Conceptualization of Kinship in an Eskimo Community: Repulse Bay, N.W.T. A Report Submitted to National Museum of Man, Ottawa.
- Mitchell, M.
- 1996     *From Talking Chiefs to a Native Corporate Elite: The Birth of Class and Nationalism among Canadian Inuit*. Montreal: McGill-Queen's University Press.
- Morantz, T.
- 1982     An Historical Chronology of Southeastern Hudson Bay, 1610-1870: Outlining the First Encounters between the Inuit and the Hudson's Bay Company. 未発表原稿
- n.d.     A History of the Fort George Region. Manuscript prepared for the Cree Regional Authority, Val d'Or, Quebec.

- Müller-Wille, L.
- 1978 Cost Analysis of Modern Hunting among Inuit of the Canadian Central Arctic. *Polar Geography* 2(2): 100-114.
  - 1987 *Gazette of Inuit Place Names in Nunavik (Quebec, Canada)*. Inukjuak, PQ: Avataq Cultural Institute.
- Murray, David
- 2000 *Indian Giving: Economies of Power in Indian-White Exchanges*. Amherst: University of Massachusetts.
- Murphy, R. and J. Steward
- 1956 Tappers and Trappers: Parallel Process in Acculturation. *Economic Development and Culture Change* 4: 335-355.
- Myers, F.
- 1988 Burning the Truck and Holding the Country: Property, Time and the Negotiation of Identity among Pintupi. In T. Ingold, D. Riches, and J. Woodburn (eds.) *Hunter-gatherers*, Vol. 2: *Property, Power and Ideology*, pp.52-74. Oxford: Berg.
- Myers, Heather
- 2000 Options for Appropriate Development in Nunavut Communities. *Études/Inuit/Studies* 24(1): 25-40.
- Nash, J.
- 1994 Global Integration and Subsistence Insecurity. *American Anthropologist* 96(1): 7-30.
- Nelson, D. M.
- 1996 Maya Hackers and the Cyberspatialized Nation-State: Modernity, Ethnostalgia, and a Lizard Queen in Guatemala. *Cultural Anthropology* 11(3): 287-308.
- Nelson, R. K.
- 1969 *Hunters of the Northern Ice*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Nielsen, S. S.
- 1999 The Social-Cultural Importance of Seal Hunting. In H. Petersen and B. Poppel (eds.) *Dependency, Autonomy, Sustainability in the Arctic*, pp. 247-252. Brookfield, VT: Ashgate Publishing Co.
- Nietschmann, B.
- 1973 *Between Land and Water*. New York: Seminar Press.
- Nuttall, M.



- 1991 Sharing and the Ideology of Subsistence in a Greenlandic Sealing Community. *Polar Record* 27(162): 217-222.
- 1992 *Arctic Homeland: Kinship, Community, and Development in Northwest Greenland*. Toronto: University of Toronto Press.
- Olofsson, E.
- 2004 *In Search of a Fulfilling Identity in a Modern World: Narratives of Indigenous Identities in Sweden and Canada*. Uppsala, Sweden: Department of Cultural Anthropology and Ethnology, Uppsala University.
- Omura, K.
- 1998 A Research Note on the Color Terminology System in the Natsilingmiutut Dialect of Inuktitut. *Études/Inuit/Studies* 22(1): 123-138.
- 2002 Construction of Inuinnaqtun (Real Inuit-way): Self-Image and Everyday Practices in Inuit Society. In H. Stewart, A. Barnard and K. Omura (eds.) *Self and Other-Images of Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies No. 60), pp.101- 111. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2005 Repetition of Different Things: The Mechanism of Memory in Traditional Ecological Knowledge of the Canadian Inuit. In K. Sugawara (ed.) *Construction and Distribution of Body Resources: Correlations between Ecological, Symbolic and Medical Systems*, pp.79-107. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
- Ortner, S. B.
- 1984 Theory in Anthropology since the Sixties. *Comparative Studies in Society and History* 26: 126-166.
- Otis, C.
- 2002 Inuit Subsistence Rights under the James Bay and Northern Quebec Agreement: A Legal Perspective on Food Security in Nunavik. In G. Duhaime (ed.) *Sustainable Food Security in the Arctic*, pp.189- 203. Quebec: GÉTIC, Université Laval.
- Paine, R. (ed.)
- 1977 *The White Arctic* (Newfoundland Social and Economic Papers No.7) St. Johns, Newfoundland: Institute of Social and Economic Research, Memorial University of Newfoundland.

- Pelletier, C.  
 1985 Sketches of Communities in Northern Quebec, Akulivik. In *James Bay and Northern Quebec Agreement: Ten Years After*. Montreal: Recherches Amerindiennes au Quebec.
- Petersen, R.  
 1989 Traditional and Contemporary Distribution Channels in Subsistence Hunting in Greenland. In J. Dahl (ed.) *Keynote Speeches from the Sixth Inuit Studies Conference, Copenhagen, October 1988*. Copenhagen: Institute of Eskimology, Copenhagen University.
- Peterson, J.  
 1978 Hunter-Gatherer/ Farmer Exchange. *American Anthropologist* 80: 335-351.
- Peterson, N.  
 1991 Introduction: Cash, Commoditisation and Changing Foragers. In N. Peterson and T. Matsuyama(eds.) *Cash, Commoditisation and Changing Foragers* (Senri Ethnological Studies, No.30), pp.1-16. Osaka: National Museum of Ethnology.  
 1993 Demand Sharing: Reciprocity and the Pressure for Generosity among Foragers. *American Anthropologist* 95: 860-876.  
 1999 Hunter-Gatherers in First World Nation States: Bringing Anthropology Home. 『国立民族学博物館研究報告』 23(4): 847-861.
- Peterson, N. and T. Matsuyama (eds.)  
 1991 *Cash, Commoditisation and Changing Foragers* (Senri Ethnological Studies No.30). Osaka: National Museum of Ethnology.
- Polanyi, K.  
 1957 Economy as Instituted Process. In K. Polanyi (ed.) *Trade and Market in the Early Empires*, pp.243-270. New York: The Free Press.  
 1977 *The Livelihood of Man*. In H.W. Pearson (ed.) New York: Academic Press.
- Price, J.  
 1975 Sharing: The Integration of Intimate Economies. *Anthropologica* (n.s.) 17(1): 3-27.
- Pryor, F. L. and N. H.H.Graburn  
 1980 The Myth of Reciprocity. In K. J. Gergen, M. S. Greenberg and R. H. Wills (eds.) *Social Exchange: Advances in Theory and Research*, pp.215-237. New York and London: Plenum Press.

- Qaktuq, M.  
 1985 Avataq Interview (manuscript).
- Riches, D.  
 1981 The Obligation to Give: An Interactional Sketch.  
 In L. Holy and M. Stuchlik (eds.) *The Structure of Folk Models*  
 (Monograph 20). pp.209-203. London: Academic Press.
- Rasmussen, K.  
 1929 *Intellectual Culture of the Iglulik Eskimos*. Report of the Fifth Tule  
 Expedition Vol. 7(1), Copenhagen.  
 1931 *The Netsilik Eskimos*. Report of the Fifth Tule Expedition Vol. 8,  
 Copenhagen.
- Robbe, P.  
 1981 Les Nom de Personnes chez les Ammassalimiut. *Études/ Inuit/Studies*  
 5(1): 45-82.  
 1994 *Les Inuit d'Ammassalik, Chasseurs de l'Arctique* (Mémoires du  
 Muséum National d'Histoire Naturelle Tome 159, Ethnographie). Paris:  
 Muséum National d'Histoire Naturelle.
- Rousseau, Jereme  
 1970 *L'Adoption: Chez les Esquimaux Tununermiut*. Université Laval,  
 Centre D'étude Nordiques, Travaux Divers 28.
- Sahlins, M.  
 1965 On the Sociology of Primitive Exchange In M. Banton, (ed.) *The*  
*Relevance of Models for Social Anthropology* (Monographs of the  
 Association of Social Anthropologists, No.1), pp.139-236. London:  
 Tavistock.  
 1972 *Stone Age of Economics*. Chicago: Aldine Publishing Company.
- Said, E. W.  
 1978 *The Orientalism*. New York: George Brochardt Inc.
- Saladin d'Anglure, B.  
 1962 Manuscript of Inuit Names and Others. In Possession of Dr. Saladin  
 d'Anglure.  
 1970 Nom et Parente chez les Tarromiut du Nouveau-Québec (Canada). In J.  
 Pouillon and P. Maranda (eds.) *Echanges et Communications:*  
*Melange Offerts a C. Lévi-Strauss a l'Occasion de son 60e*  
*Anniversaire*. Paris: Mouton.  
 1984a Inuit of Quebec. In D. Damas (ed.) *Arctic* (Handbook of North

- American Indian Vol. 5), pp.476-507. Washington, D. C.: Smithsonian Institution.
- 1984b Contemporary Inuit of Quebec. In D. Damas (ed.) *Arctic* (Handbook of North American Indian Vol. 5), pp. 683-688. Washington, D. C.: Smithsonian Institution.
- Schrire, C. (ed.)
- 1984 *Past and Present in Hunter-Gatherer Studies*. San Francisco: New York: Academic Press.
- Scott, C.
- 1983 Production and Exchange among Wemindji Cree: Egalitarian Ideology and Economic Base. *Culture* 2(3): 51-64.
- Searles, E.
- 2002 Food and the Making of Modern Inuit Identities. *Food and Foodways* 10: 55-78.
- Sejersen, F.
- 2002 *Local Knowledge, Sustainability and Visionscapes in Greenland*. Copenhagen: Dept. of Eskimology, University of Copenhagen.
- Service, E.
- 1962 *Primitive Social Organization: An Evolutionary Perspective*. New York: Random House.
- 1966 *The Hunters*. Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall.
- Silk, J.B.
- 1987 Social Behavior in Evolutionary Perspective. In B.B.Smuts et al. (eds.). *Primate Societies*, pp.319-329. Chicago: The University of Chicago Press.
- Smith, B.C. and J.C. Brigham
- 1992 Native Radio Broadcasting in North America: An Overview of Systems in the United States and Canada. *Journal of Broadcasting and Electric Media* 36(2): 183-194.
- Smith, E. A.
- 1988 Risk and Uncertainty in the 'Original Affluent Society': Evolutionary Ecology of Resource-Sharing and Land Tenure. In T. Ingold, D. Riches, and J. Woodburn (eds.) *Hunters and Gatherers*, Vol.1. *History, Evolution and Social Change*, pp.222-251. Oxford: Berg.
- 1991 *Inujjamiut Foraging Strategies: Evolutionary Ecology of an Arctic Hunting Economy*. New York: Aldine de Gruyter.

- Smith, E. A. and R. Bliege Bird  
 2000 Costly Signaling and Turtle Hunting. *Evolution and Human Behavior* 21: 245-261.
- Smith, E.A., R. Bliege Bird and D.W. Bird  
 2003 The Benefits of Costly Signaling: Meriam Turtle Hunters. *Behavioral Ecology* 14(1): 116-126.
- Smith, E. A. and R. Boyd  
 1990 Risk and Reciprocity: Hunter-Gatherer Socioecology and the Problem of Collective Action. In E. Cashdan (ed.). *Risk and Uncertainty in Tribal and Peasant Economics*, pp.167-192. Boulder: Westview Press.
- Smith, E.A. and B. Winterhalder (eds)  
 1992 *Evolutionary Ecology and Human Behavior*. New York: Aldine De Gruyter.
- Smith, T. G. and H. Wright  
 1989 Economic Status and Role of Hunters in a Modern Inuit Village. *Polar Record* 25(153): 93-98.
- Solway, J. and R. B. Lee  
 1990 Foragers Genuine or Spurious? : Situating the Kalhari San in History. *Current Anthropology* 31: 109-146.
- Spencer, R.  
 1959 *The North Alaskan Eskimo: A Study in Ecology and Society*. Washington, DC: Bureau of American Ethnology.
- Stairs, A. and G. Wenzel  
 1992 I am I and the Environment: Inuit Hunting, Community, and Identity. *The Journal of Indigenous Studies* 3(1): 1-12.
- Statistics Canada  
 2005 *2001 Census Dictionary* (Internet Version). Catalogue No.92-378-XIE.
- Stern, Pamela  
 2000 Subsistence: Work and Leisure. *Études/Inuit/Studies* 24(1): 9-24.
- Stern, P.R. and M.E. Stevenson (eds.)  
 In press *Critical Inuit Studies*. Lincoln, Nebraska: The University of Nebraska Press.
- Stewart, H.  
 2002 "Ethnonyms and Images: Gnesis of the 'Inuit' and Image Manipulation." In H. Stewart, A. Barnard and K. Omura (eds.) *Self and Other-Images of Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies

- No.60), pp.85-100. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Stiels, D.
- 1991 Tubers and Tenrecs: The Mikea of Southwestern Madagascar. *Ethnology* 30: 251-61.
  - 1992 The Hunter-Gatherer 'Revisionist' Debate. *Anthropology Today* 8(2): 13-17.
- Stuckenberg, A. Nicole
- 2005 *Community at Play: Social and Religious Dynamics in the Modern Inuit Community of Qikiqtarjuaq*. Amsterdam: Rozenberg Publishers.
- Tanaka, J.
- 1980 *The San, Hunter-Gatherer of the Kalahari: A Study in Ecological Anthropology*. Tokyo: University of Tokyo Press.
- Testart, A.
- 1987 Game Sharing Systems and Kinship Systems among Hunter-Gatherers. *Man* (N.S.) 22: 287-304.
- Trigger, B.
- 1980 Archaeology and the Image of the American Indian. *American Antiquity* 45: 662-676.
- Trivers, R. L.
- 1971 The Evolution of Reciprocal Altruism. *Quarterly Review of Biology* 46: 35-57.
- Trott, C. G.
- 1989 Structure and Pragmatics: Social relations among the Tununirrusirmiut. Ph.D. Thesis, Dept. of Anthropology, University of Toronto.
  - 2005 Ilagiit and TuqIIuraqtuq Inuit Understandings of Kinship and Social Relatedness. A Paper Prepared for First Nations, First Thoughts, Centre of Canadian Studies, University of Edinburgh.
- Usher, P.
- 1976 Evaluating Country Food in the Northern Native Economy. *Arctic* 29(2): 105-120.
- Vallee, F.
- 1967 *Povungnituk and Its Cooperative: A Case Study in Community Change* (NCRC-67-2). Ottawa: Northern Co-ordination and Research Center.
- Van de Velde, F.

- 1956 Rules for Sharing the Seal amongst the Arviligjuarmiut Eskimo. *Eskimo* 41:3-6.
- Vick-Westgate, Ann
- 2002 *Nunavik: Inuit-Controlled Education in Arctic Quebec*. Calgary: University of Calgary Press.
- Wachtmeister, A.
- 1956 Naming and Reincarnation among the Eskimos. *Ethnos* 21: 130-142.
- Wein, E. E. and M. M. R. Freeman
- 1992 Inuvialuit Food Use and Food Preferences in Aklavik, Northwest Territories, Canada. *Arctic Medical Research* 51: 159-172.
- Weiner, A.
- 1985 Inalienable Wealth. *American Ethnologist* 12(2): 210-227.
- 1992 *Inalienable Possessions: The Paradox of Keeping-while-Giving*. Berkeley: University of California Press.
- Wenzel, G. W.
- 1981 *Inuit Ecology and Adaptation: The Organization of Subsistence*. Canadian Ethnology Service Mercury Series Paper No.77. Ottawa: National Museum of Man.
- 1991 *Animal Rights, Human Rights: Ecology, Economy and Ideology in the Canadian Arctic*. Toronto: University of Toronto Press.
- 1995 Ningiqtuq: Resource Sharing and Generalized Reciprocity in Clyde River, Nunavut. *Arctic Anthropology* 32(2): 43-60.
- 1996 Inuit Sealing and Subsistence Managing after the E.U. Sealskin Ban. *Geographische Zeitschrift* 84(3/4): 130-142.
- 2000 Sharing, Money, and Modern Inuit Subsistence: Obligation and Reciprocity at Clyde River, Nunavut. In G.W. Wenzel, G. Hovelsrud-Broda and N. Kishigami (eds.) *The Social Economy of Sharing: Resource Allocation and Modern Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies No.53), pp.61-85. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2005 Nunavut Inuit and Polar Bear: The Cultural Politics of the Sport Hunt. In N. Kishigami and J. M. Savelle (eds.) *Indigenous Use and Management of Marine Resources* (Senri Ethnological Studies No.67), pp.363-388. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Wenzel, G.W., G. Hovelsrud-Broda and N. Kishigami (eds.)
- 2000 *The Social Economy of Sharing: Resource Allocation and Modern*

- Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies No.53) Osaka:  
National Museum of Ethnology.
- Wiessner, P.  
1982 Risk, Reciprocity, and Social Influence on !Kung San Economies. In E. Leacock and R. Lee (eds) *Politics and History in Band Societies*, pp.61-84. Cambridge: Cambridge University Press.
- Williamson, R.  
1988 Some Aspects of the History of the Eskimo Naming System. *Folk* 30: 245-265.
- Willmott, W.E.  
1961 *The Eskimo Community at Port Harrison, P.Q.* (NCRC-61-1). Ottawa: Department of Northern Affairs and National Resources, Northern Coordination and Research Centre.
- Wilmsen, E. N.  
1983 The Ecology of Illusion: Anthropological Forging in the Kalahari. *Reviews in Anthropology* 10: 9-20.  
1989 *Land Filled with Flies: A Political Economy of the Kalahari*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Wilmsen, E. N. (ed.)  
1988 *We Are Here: Politics of Aboriginal Land Tenure*. Berkeley: University of California Press.
- Wilmsen, E. N. and J. R. Denbow  
1990 Paradigmatic History of San-Speaking Peoples and Current Attempts at Revision. *Current Anthropology* 31: 489-524.
- Winterhalder, B.  
1986a Diet Choice, Risk, and Food Sharing in a Stochastic Environment. *Journal of Anthropological Archaeology* 5:369-392.  
1986b Optimal Foraging : Simulation Studies of Diet Choice in a Stochastic Environment. *Journal of Ethnobiology* 6:205-223.
- Winterhalder, B and E.A. Smith  
1981 *Hunter-Gatherer Foraging Strategies: Ethnographic and Archaeological Analyses*. Chicago and London: The University of Chicago Press.
- Wolfe, R. J. and R. J. Walker  
1987 Subsistence Economy in Alaska: Productivity, Geography, and Development Impacts. *Arctic Anthropology* 24(2): 56-81.

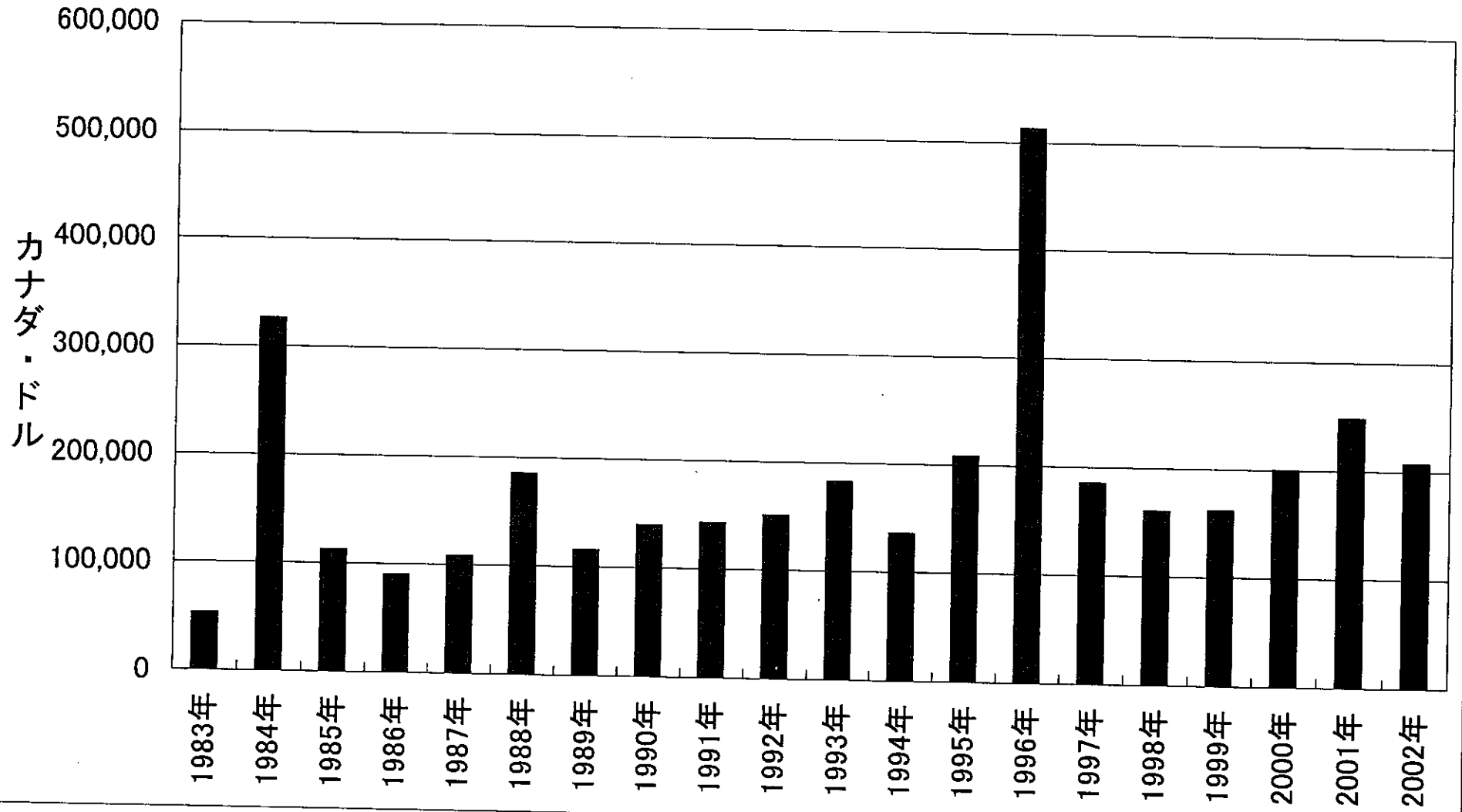


- Woodburn, J.
- 1982 Egalitarian Societies. *Man* (N.S.) 17: 431-451.
  - 1998 Sharing Is Not a Form of Exchange: An Analysis of Property-Sharing in Immediate-Return Hunter-Gatherer Societies. In C.M. Hann, (ed.) *Property Relations: Renewing the Anthropological Tradition*, pp.48-63. Cambridge: Cambridge University Press.
- Zahavi, A. and A. Zahavi
- 1997 *The Handicap Principle: A Missing Piece of Darwin's Puzzle*. New York: Oxford University Press.
- Ziker, J.
- 2002 *Peoples of the Tundra: Northern Siberians in the Post-Communist Transition*. Prospect Heights, IL: Waveland Press.
  - 2003 Kinship and Friendship in the Taimyr Autonomous Region, Northern Russia. *Sozialersinn* 1:59-80.
- Ziker, J. and M. Schnegg
- 2005 Food Sharing at Meals: Kinship, Reciprocity, and Clustering in the Taimyr Autonomous Okrug, Northern Russia. *Human Nature* 16(2): 178-211.

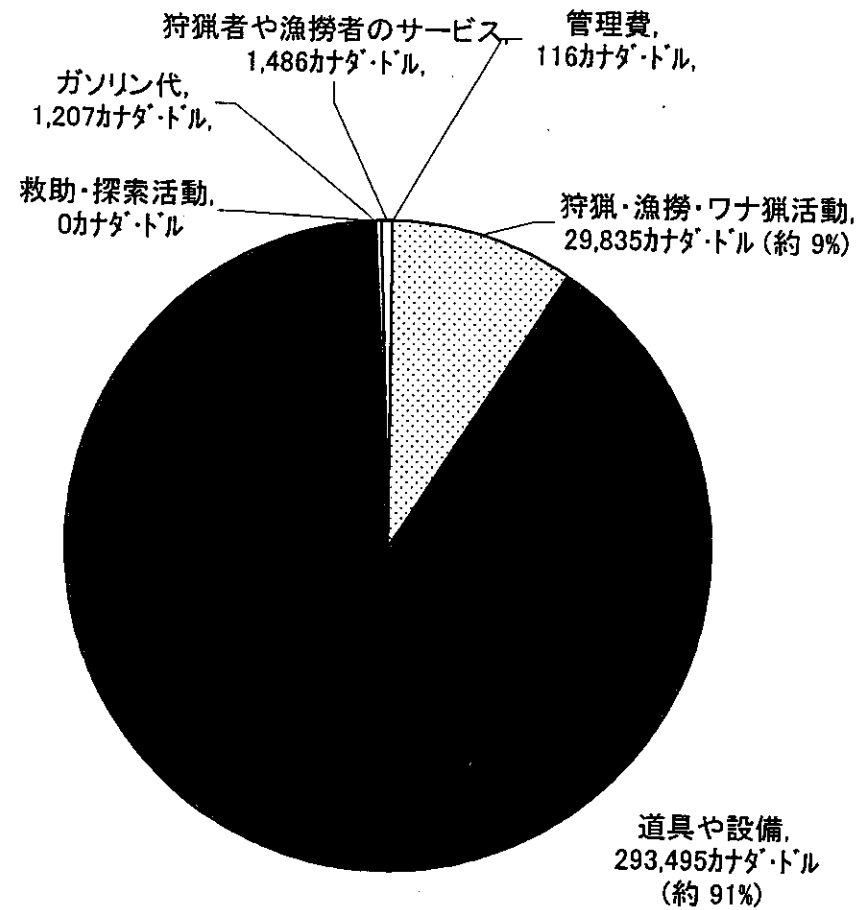
## 付 録 1

### グラフ

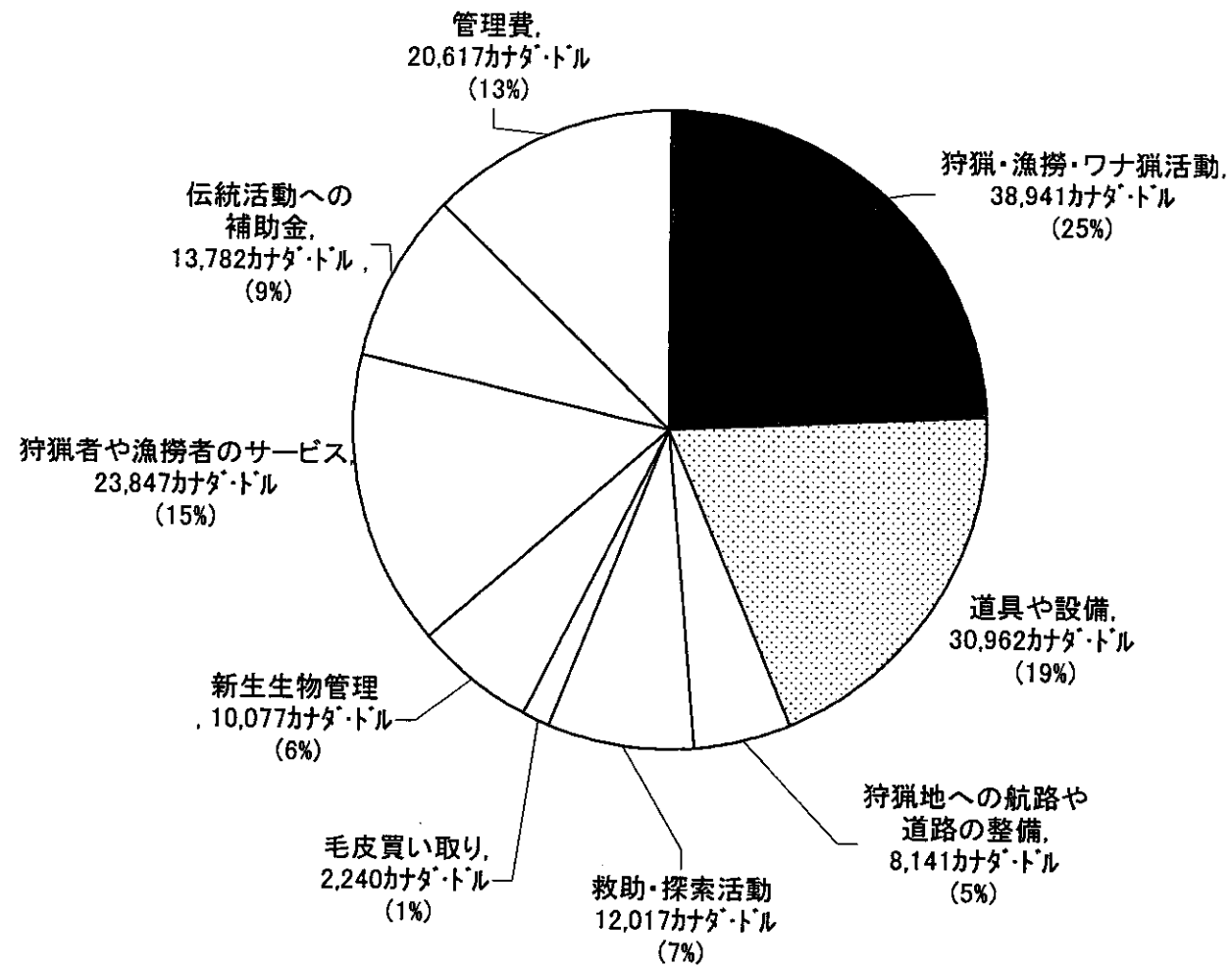
グラフ1 アクリヴィク村のハンター・サポート・プログラムの年間支出



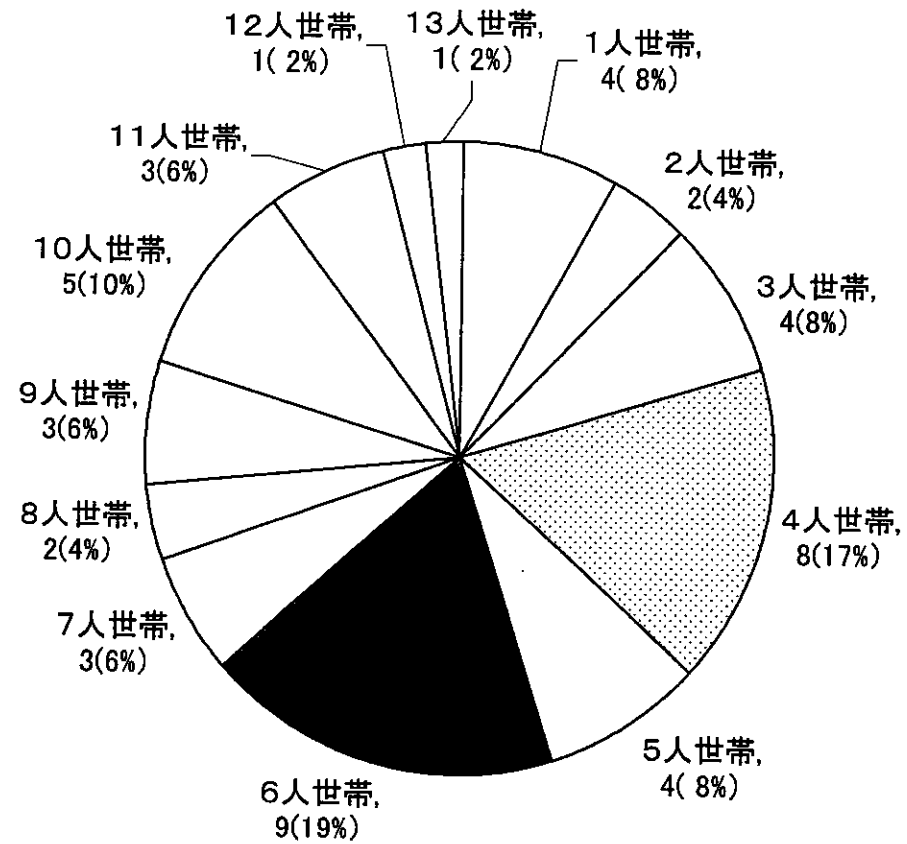
グラフ2 1984年のアクリヴィック村のハンター・サポートプログラムの支出内訳



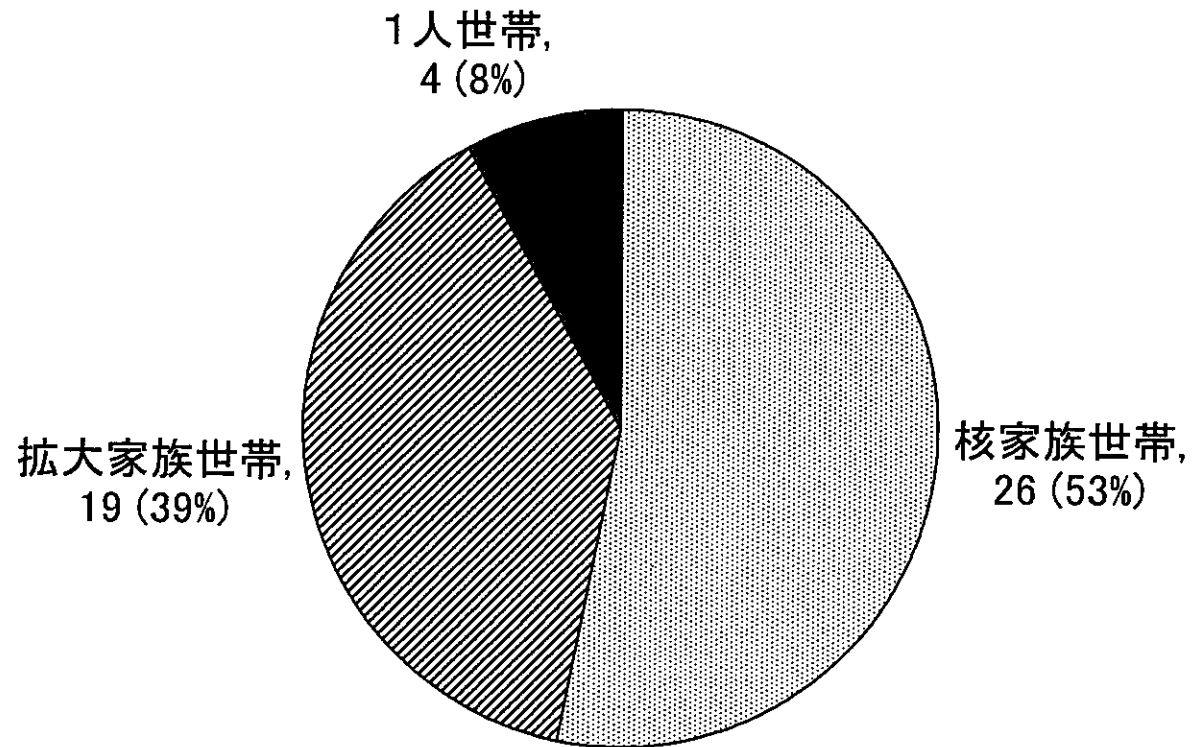
グラフ3 1999年のアクリヴィク村の  
ハンターサポートプログラムの支出の内訳



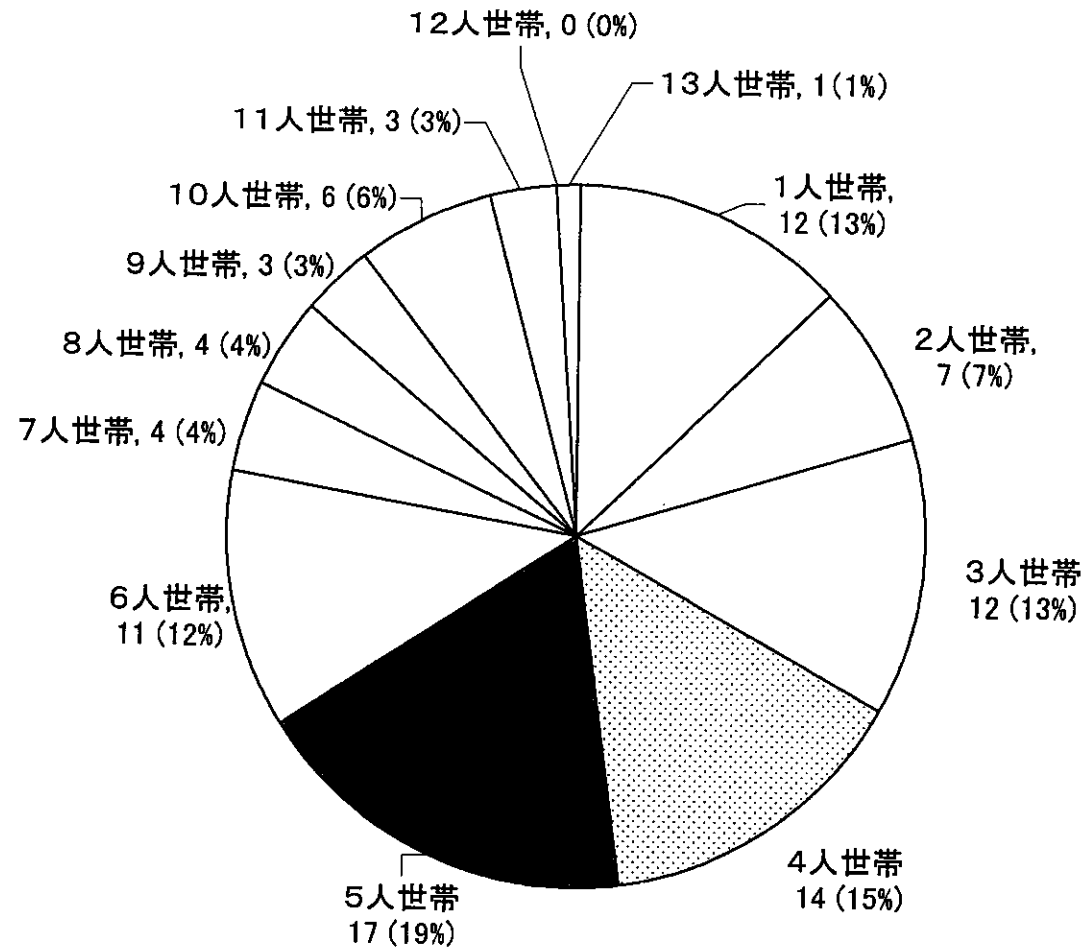
グラフ4 1986年の世帯員数規模



グラフ5 1986年の世帯の家族構成

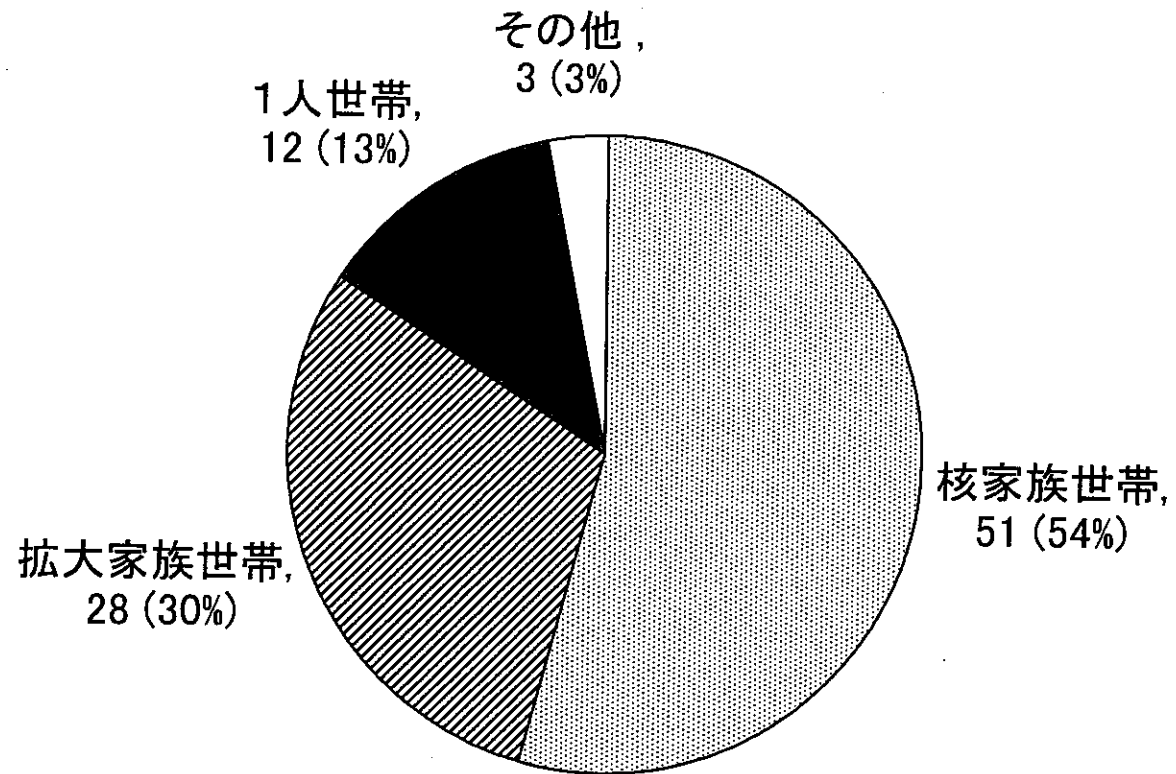


グラフ6 2003年の世帯員数規模





グラフ7 2003年の世帯の家族構成



## 付 録 2

ハンター・サポートプログラム関連の法律と  
2001年次報告書の抜粋

James Bay  
and Northern Québec  
Agreement and  
Complementary  
Agreements

**1991 Edition**

---

|            |                                                                                      |
|------------|--------------------------------------------------------------------------------------|
| Section 20 | Administration of Justice (Inuit), 302                                               |
| Section 21 | Police (Inuit), 306                                                                  |
| Section 22 | Environment and Future Development below the 55th Parallel, 310<br>Schedules, 327    |
| Section 23 | Environment and Future Development North of the 55th Parallel, 335<br>Schedules, 353 |
| Section 24 | Hunting, Fishing and Trapping, 359<br>Schedules, 392                                 |
| Section 25 | Compensation and Taxation, 395<br>Schedule, 398                                      |
| Section 26 | Cree Legal Entities, 403<br>Schedule, 407                                            |
| Section 27 | Inuit Legal Entities, 410<br>Schedule, 413                                           |
| Section 28 | Economic and Social Development - Crees, 416                                         |
| Section 29 | Inuit Economic and Social Development, 427                                           |
| Section 30 | Income Security Program for Cree Hunters and Trappers, 437<br>Appendix, 451          |
| Section 31 | Signatories, 453                                                                     |

---

## Section 29 Inuit Economic and Social Development

---

29.0.1 There is established a series of Native Economic Development Programs in favour of the Inuit of Québec which shall operate in accordance with the rights, obligations, terms and conditions established by and in accordance with this Section.

29.0.2 Programs, funding and technical assistance presently provided by Canada and Québec, and the obligations of the said governments with respect to such programs and funding shall continue to apply to the Inuit of Québec on the same basis as to other Indians and Inuit of Canada in the case of federal programs, and to other Indians in Québec in the case of provincial programs, subject to the criteria established from time to time for the application of such programs, and to general parliamentary approval of such programs and funding.

The foregoing terms, conditions, obligations and criteria will apply to all federal programs referred to in this Section.

29.0.3 Subject to paragraph 29.0.2, Canada and Québec shall continue to assist and promote the efforts of the Inuit of Québec and more specifically undertake, within the terms of such programs and services as are established and in operation from time to time, to assist the Inuit of Québec in pursuing the objectives set forth herein in paragraphs 29.0.4 to 29.0.43.

29.0.4 The administration of the federal and provincial programs referred to in paragraphs 29.0.2 and 29.0.3 shall, to the fullest extent possible, be assumed by the Regional Government or the municipalities whenever appropriate, and when accepted by the parties directly concerned.

29.0.5 A program of support is established for Inuit hunting, fishing and trapping (hereinafter referred to as "the program"), to guarantee a supply of hunting, fishing and trapping produce to Inuit who are disadvantaged and who cannot hunt, fish and trap for themselves or otherwise obtain such produce.

29.0.6 The program shall also facilitate:

- a) exchanges of hunting, fishing and trapping produce among Inuit communities, in accordance with existing laws;
- b) access to remote hunting, fishing and trapping areas; and
- c) conduct of search and rescue operations for the benefit of Inuit hunters, fishermen and trappers in the Territory.

29.0.7 The funding of the program shall be the exclusive responsibility of Québec which shall ensure at all times that the necessary funds are provided to give full effect to the program.

29.0.8 The program shall commence as soon as possible after the execution of the Agreement, if existing laws and regulations permit; otherwise it shall be established as soon as possible after the coming into force of the Agreement.

29.0.9

- a) Each Inuit community shall be entitled to one (1) hunter, fisherman and/or trapper (based on the present number of communities, this would mean thirteen (13) hunters, fishermen or trappers);
- b) in addition, the Inuit of Québec shall be entitled to an additional number of hunters, fishermen and/or trappers equal to one (1) one hundredth (1%) of the total Inuit population domiciled or ordinarily resident in the Territory. (Based on the present estimated population of 4,000 persons, until the first official census, this would mean forty (40) additional hunters, fishermen and/or trappers).

29.0.10 The Regional Government must make ordinances for the purposes of the program:

- a) to determine qualifications and employment criteria for hunters, fishermen and trappers;
- b) to determine the working conditions, working hours and periods of work of hunters, fishermen and trappers, provided there shall be at all times not less than forty (40) and not more than sixty-five (65) hunters, fishermen and/or trappers employed under the program;
- c) to regulate leave of absence, suspensions and dismissal of hunters, fishermen and trappers;
- d) subject to the provisions of paragraph 29.0.9 and of sub-paragraph b) of this paragraph, to determine the number of hunters, fishermen and trappers posted in each Inuit community;
- e) to establish hunting, fishing and trapping produce quotas subject to the provisions governing the Hunting, Fishing and Trapping Regime; and
- f) to establish and maintain hunter, fishermen and trapper training and development programs.

Pending the establishment of the Regional Government, such powers shall temporarily be exercised by the interim joint committee established under paragraph 29.0.33.

29.0.11 Subject to the provisions of paragraph 29.0.10 the council of the municipal corporations shall, by resolution, select and employ competent hunters, fishermen and trappers to carry out the program properly and see to the

application of the leave of absence, suspension and dismissal ordinances.

Pending the establishment of the municipalities, such powers shall temporarily be exercised by the community council in each Inuit community.

29.0.12 For the purposes of the program, the annual period shall commence of January 1 of each year.

29.0.13 The Regional Government shall prepare and adopt each year the necessary budget for the operation of the program.

Such budget shall be submitted to the council not later than the 15th of July at a special meeting called for such purpose. Such meeting shall be adjourned as often as necessary and shall not be closed until the budget is adopted.

Such budget, together with certified copies of all supporting documents shall be transmitted to Québec in the month of August of the year in which it is prepared.

29.0.14 For each annual period and in accordance with the budget, Québec shall remit to the Regional Government, in two (2) equal instalments, one (1) at the beginning of January and the other at the beginning of July, the following amounts:

a) to ensure yearly salaries to the hunters, fishermen and trappers mentioned in paragraph 29.0.9, an amount based on an initial average yearly salary of \$ 9,000.00 for each hunter, fishermen and/or trapper; such amount shall only be used to cover the salaries and statutory deductions of hunters, fishermen and trappers. (Based on the present statistics given in paragraph 29.0.9 this would mean a total expenditure of \$ 477,000);

b) to meet the expenses relating to the objectives of paragraph 29.0.6 a per capita subsidy of \$ 10.00 for each Inuk domiciled or ordinarily resident in the Territory. (Based on the present statistics this would mean an amount of \$ 40,000);

c) for the administration of the program, an amount equal to 10% of the total amounts received under sub-paragraphs a) and b) of this paragraph. (Based on the present statistics this would mean an amount of \$ 51,700).

29.0.15 In order to provide for the initial setting up of the program, Québec shall remit, to the Regional Government, at the beginning of each month, 1/12 of the amount payable under sub-paragraph c), of paragraph 29.0.14. (Based on the present statistics, this would mean a monthly instalment of \$ 4,308.33).

29.0.16 The amounts mentioned in sub-paragraphs a), b) and c) of paragraph 29.0.14 shall be indexed annually according to the increase in the cost of living in Québec as supplied by Statistics Canada.

- 29.0.17 A detailed report of the operations and of the utilization of all amounts received during any annual period of the program shall be transmitted to Québec at the end of any such period.
- 29.0.18 Québec shall have the right to verify or audit all procedures, books and documents tending to inform it of the fulfillment of the requirements of paragraphs 29.0.5 to 29.0.23 and shall have the right to withhold or reclaim funds or adjust allocations of funds in the event of overpayment or abuse.
- 29.0.19 The Regional Government must make ordinances for the purposes of the program:
- a) to establish eligibility criteria for the distribution of hunting, fishing and trapping produce to Inuit who are disadvantaged and who cannot hunt, fish and trap for themselves or otherwise obtain such produce; subject to the provisions of sub-paragraph b) of this paragraph, the distribution of hunting, fishing and trapping produce shall be made locally under the supervision of the council of the municipal corporation; and
  - b) to facilitate exchanges of hunting, fishing and trapping produce among Inuit communities according to needs and in accordance with existing laws.
- Pending the establishment of the Regional Government and of the municipalities, the powers of the Regional Government shall temporarily be exercised by the interim joint committee established under paragraph 29.0.33 and the powers of the municipality by the community council in each Inuit community.
- 29.0.20 This program shall not prejudice or impair the eligibility of Inuit for other existing or future government programs, federal or provincial, including programs of guaranteed minimum income. Such eligibility shall depend upon the criteria established for such programs.
- 29.0.21 Québec and the Regional Government shall from time to time review the operation of the program, procedures and benefits established by and in accordance with paragraphs 29.0.5 to 29.0.23. Subject to consultation with the Regional Government, Québec may make any adjustments necessary for the proper functioning of or to give effect to the program, procedures and benefits provided for in this Section, including more particularly the provisions of paragraph 29.0.14.
- 29.0.22 Pending the establishment of the Regional Government, the program shall be administered by, and the amounts mentioned in sub-paragraphs a), b) and c) of paragraph 29.0.14 shall be paid to the interim joint committee established under paragraph 29.0.33.



## 2001 ANNUAL REPORT

### SUPPORT PROGRAM FOR INUIT BENEFICIARIES FOR THEIR HUNTING, FISHING, AND TRAPPING ACTIVITIES

---

## INTRODUCTION

Paragraphs 29.0.5 and 29.0.22 of the *James Bay and Northern Québec Agreement* signed on November 11, 1975, contain provisions for a program to support Inuit hunting, fishing and trapping activities. By virtue of this Program, a specific number of hunters, fishermen and trappers were to be hired. However, as a result of consultations with the Inuit communities, the original program was never put into effect due to the new needs of the Inuit population.

Meetings were held early in 1979 between representatives of the Secrétariat des activités gouvernementales en milieu amérindien et inuit (SAGMAI), the ministère du Loisir, de la Chasse et de la Pêche (MLCP), Makivik Corporation and the Kativik Regional Government. An agreement in principle was signed in September 1979, and in December of the same year, the Cabinet approved the creation of a temporary program to support the Inuit in their hunting, fishing and trapping activities.

The Kativik Regional Government received the first payment, retroactive to approval by the Cabinet of the temporary program, in April 1980. This program was replaced in 1983 by the Program as set out in *An Act respecting the support program for Inuit beneficiaries of the James Bay and Northern Québec Agreement for their hunting, fishing and trapping activities* (R.S.Q., c. P-30.2) designated hereafter as the "Act", sanctioned by the National Assembly on December 16, 1982. Copies of a document containing the Inuttitut, French and English versions of the Act are available from the Kativik Regional Government.

The 1980-1981 and 1981-1982 annual reports for the temporary program were submitted to the Ministère du Loisir, de la Chasse et de la Pêche. The annual reports for 1983 to 2000 inclusively, as well as the present report, detail the activities of the permanent Program and have been prepared in accordance with the requirements of Division V of the Act.

## ADMINISTRATION OF THE PROGRAM

The KRG administers the grant received from the Société de la Faune et des parcs du Québec in accordance with the Act. The amount of the basic grant is calculated using a formula that takes into account the number of Inuit communities, the total number of beneficiaries, and the cost of living index. An amount equal to 15% of the basic grant is added for the Program's administration. The basic grant is divided in such a way that 85% is reserved for community programs and 15% for regional programs. A base amount is set aside for each community and the balance is distributed among the corporations according to their respective beneficiary population.

In 2001, the community budgets were divided among the 15 communities, namely the 14 northern villages and the Inuit community of Chisasibi. The community programs were administered by the northern village corporations except in Chisasibi, a community located south of the 55th parallel that does not have a northern village corporation and for which the Inuit landholding corporation administers the Program.

The KRG provides administrative support and technical assistance to the community programs upon request. The fifteen community budgets are subject to yearly agreements with the KRG.

The regional program is directed by the KRG's Council, which is also responsible for administering the Program as a whole. Files and accounting documents related to the Program are kept at the KRG's office in Kuujuaq.

Auditing is done once a year within the general audit of the KRG and the northern village corporations. In 2001, the audit was awarded by resolution of the Regional Council of the Kativik Regional Government to the chartered accounting firm of Pratte, Bélanger. Financial data for the Program contained in this annual report constitutes an integral part of the financial statements of the KRG and each northern village corporation.

---

## 2001 Program

### The Kativik Regional Government's Council and Executive Committee to December 31, 2001

|                                             |                                                                                                                                                                                                  |                                                                                                                           |
|---------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Chairman                                    | Johnny N. Adams                                                                                                                                                                                  | Kuujjuaq                                                                                                                  |
| Vice-Chairman                               | Maggie Emudluk                                                                                                                                                                                   | Kangiqsualujjuaq                                                                                                          |
| Other members of the<br>Executive Committee | Michael Gordon<br>Joseph Annahatak<br>Josie Tullaugak                                                                                                                                            | Kuujjuaq<br>Kangirsuk<br>Puvirnituk                                                                                       |
| Councillors                                 | Willie Cain<br>David Angutinguak<br>Charlie Tukkiapik<br>Charlie Alaku<br>George Kakayuk<br>Arnaituk Tarkirk<br>Markusie Qinuajuak<br>Sarollie Weetaluktuk<br>David Niviakie<br>Lucassie Inukpuk | Tasiujaq<br>Aupaluk<br>Quaqtaq<br>Kangirsujuaq<br>Salluit<br>Ivujivik<br>Akulivik<br>Inukjuak<br>Umiujaq<br>Kuujjuaraapik |

---

## Officers

|           |               |
|-----------|---------------|
| Manager   | Ida Saunders  |
| Secretary | Levina Gordon |
| Treasurer | Nancy Maloley |

---

## Inuit Support Program for Hunting, Fishing and Trapping Activities

Department Head - Renewable Resources  
Special Projects Coordinator  
Secretary

Sandy Gordon  
Michael Barrett  
Sarah Tukkiapik

## Northern Village Corporations

|                 |                                       |                              |
|-----------------|---------------------------------------|------------------------------|
| Kangiqsualujuaq | Bobby Baron<br>Tommy Annanack         | Mayor<br>Secretary-Treasurer |
| Kuujuuaq        | Michael Gordon<br>Ian Robertson       | Mayor<br>Secretary-Treasurer |
| Tasiujaq        | Willie Cain<br>Jeannie Cain           | Mayor<br>Secretary-Treasurer |
| Aupaluk         | David Angutinguak<br>Jeannie Simeonie | Mayor<br>Secretary-Treasurer |
| Kangirsuk       | Joseph Annahatak<br>Noah Ningiuruvik  | Mayor<br>Secretary-Treasurer |
| Quaqtaq         | Johnny Oovaut Sr.<br>Sammy Tukkiapik  | Mayor<br>Secretary-Treasurer |
| Kangiqsujuaq    | Charlie Alaku<br>Pasha Kiatainak      | Mayor<br>Secretary-Treasurer |
| Salluit         | Qalingo Angotigirk<br>Don Cameron     | Mayor<br>Secretary-Treasurer |
| Ivujivik        | Arnaituk Tarkirk<br>Adamie Kalingo    | Mayor<br>Secretary-Treasurer |
| Puvimittuq      | Paulusie Novalinga<br>Sarah Beaule    | Mayor<br>Secretary-Treasurer |
| Akulivik        | Eli Aullaluk<br>Lydia Nappatuk        | Mayor<br>Secretary-Treasurer |
| Inukjuak        | Shaomik Inukpuk<br>Caroline Naktialuk | Mayor<br>Secretary-Treasurer |
| Umiujaq         | Abelie Napartuk<br>Sammy Nukkt        | Mayor<br>Secretary-Treasurer |
| Kuujuarapik     | Lucassie Inukpuk<br>Pierre Roussel    | Mayor<br>Secretary-Treasurer |

## INUIT LANDHOLDING CORPORATION OF CHISASIBI

|           |                                        |                        |
|-----------|----------------------------------------|------------------------|
| Chisasibi | Raymonde Menarick<br>Patricia Menarick | President<br>Secretary |
|-----------|----------------------------------------|------------------------|

## CHARACTERISTICS OF THE PROGRAM

The Program's objective is to favour, encourage and perpetuate the hunting, fishing and trapping activities of the Inuit as a way of life, and to guarantee the Inuit communities a supply of produce from such activities.

The following activities are allowable under the Program:

- hunting, fishing and trapping activities, with the exception of the development and financing of activities contemplated in Chapter VII of *An Act respecting hunting and fishing rights in the James Bay and New Québec Territories* (R.S.Q., c. D-13.1);
- the purchase, manufacture, construction, maintenance and repair of any community equipment or materials necessary for hunting, fishing and trapping activities;
- access to the regions where the beneficiaries may exercise hunting, fishing and trapping activities;
- the organization of search and rescue operations for beneficiaries exercising hunting, fishing and trapping activities;
- the marketing of products and by-products from hunting, fishing and trapping activities, with the exception of the development and financing of activities contemplated in Chapter VII of *An Act respecting hunting and fishing rights in the James Bay and New Québec Territories*;
- the domestic production of crafts from the by-products of hunting, fishing and trapping activities;
- the participation of the beneficiaries in courses concerning the collection, processing and marketing of furs with a view to increasing the profitability of their fur trade;
- the cooperation of the beneficiaries in the preservation, improvement and restoration of wildlife habitats;
- the participation of the beneficiaries in wildlife studies and management programs established to assist hunting, fishing and trapping activities;
- information and publicity relating to the proper operation of the Program;
- the use of the services of Inuit hunters and fishermen who carry on their trade for community use;
- the participation of the beneficiaries in traditional activities carried on outdoors for the benefit of the Inuit community.



## 2001 ACTIVITIES

### Amount Received and Breakdown

Amount paid by the Government of Quebec to the  
Kativik Regional Government for the 2001 fiscal year<sup>1</sup>

\$4 666,662

### Division of grant pursuant to section 8 of the Act:

|                  |           |
|------------------|-----------|
| Kangiqsualujjuaq | 251 479   |
| Kuujjuaq         | 470 699   |
| Tasiujaq         | 126 210   |
| Aupaluk          | 108 464   |
| Kangirsuk        | 191 193   |
| Quaqtaq          | 151 525   |
| Kangiqsujaq      | 202 676   |
| Salluit          | 342 559   |
| Ivujivik         | 137 171   |
| Akulivik         | 190 410   |
| Puvirnituq       | 415 633   |
| Inukjuak         | 385 620   |
| Umiujaq          | 161 703   |
| Kuujjuarapik     | 218 857   |
| Chisasibi        | 95 154    |
| Subtotal         | 3 449 353 |
| Regional program | 608 709   |
| Administration   | 608 600   |
| Total            | 4 666 662 |

*Note: Funding from the Government of Quebec is provided under agreements reached between the Kativik Regional Government and the Inuit communities pursuant to the provisions of Section 12 of the Act.*

<sup>1</sup> This includes an indexed portion of 2.5% (Régie des rentes du Québec)

## 2001 Activities

### Differences between budgeted amounts and expenditures

|                                            | Budget      | Expenses    |
|--------------------------------------------|-------------|-------------|
| 1) Hunting fishing and trapping activities | 1,706,085   | 2,437,291   |
| 2) Materials and equipment                 | 1,000,000   | 1,302,255   |
| 3) Access to outlying regions              | 250,000     | 215,055     |
| 4) Search and rescue operations            | 250,000     | 220,762     |
| 5) Marketing of products                   | 10,000      | 0           |
| 6) Arts and crafts                         | 200,000     | 1,110,758   |
| 7) Furs                                    | 10,000      | 110,955     |
| 8) Preservation of wildlife habitat        | 60,000      | 50,734      |
| 9) Wildlife management                     | 50,000      | 27,066      |
| 10) Information                            | 3,000       | 10,643      |
| 11) Services of hunters and fishermen      | 300,000     | 792,490     |
| 12) Traditional activities                 | 120,000     | 477,493     |
| Administration                             | 593,862     | 814,799     |
| Total:                                     | \$4,552,984 | \$7,570,301 |

In general, the expenditures made respected the budget allocated to each activity by the Regional Council of the Kativik Regional Government and by the municipal councils of the communities. The considerable differences between the amounts budgeted and actual expenditures are explained as follows:

- 1) the expenditures by Kativik Regional Government and the Corporations of the Northern Villages were higher than budgeted as they include funds not spent in 2000 and were not foreseen in the 2001 budget when it was submitted to the FAPAQ in accordance with section 7 of the Act;
- 2) funding for specific items by the Communities may include sums transferred from the regional or administration budgets, where they are also identified as expenditures;
- 3) the budget amounts do not include projections for the expenditures totalling \$633,164 which were reimbursed by Makivik Corporation as part of the Fur, Inuit Clothing and Access to Regions Initiative project;
- 4) amounts in the budget do not include the sums received for indexation;
- 5) during the year changes in harvesting patterns, weather conditions and requirements in the individual Communities necessitated modifications in priorities so the expenditures were adjusted in consequence.



---

**Regional Program Expenditures**  
**For the year ending December 31, 2001**

|                                          | 2001               |
|------------------------------------------|--------------------|
| Hunting, fishing and trapping activities | 184,858            |
| Materials and equipment                  | 294,548            |
| Access to the regions                    | 35,258             |
| Search and rescue                        | 27,625             |
| Marketing                                | 0                  |
| Arts and crafts                          | 508,555            |
| Furs                                     | 110,955            |
| Information                              | 9,593              |
| Wildlife habitat                         | 50,000             |
| Wildlife management                      | 24,800             |
| Services of hunters and fishermen        | 0                  |
| Traditional activities                   | 233,632            |
| Administration                           | 584,747            |
| <b>Total expenditures</b>                | <b>\$2,064,571</b> |